三雲遺跡

Ⅱ

糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査

福岡県文化財調査報告書

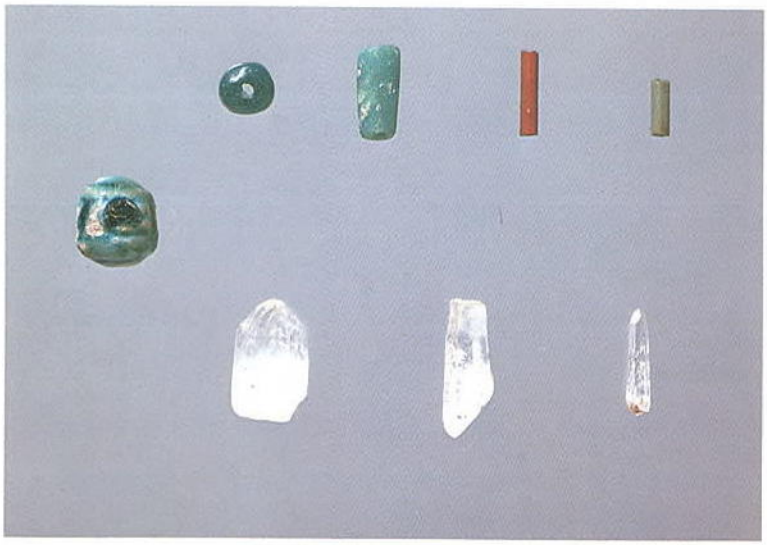
第６０集

１９８１

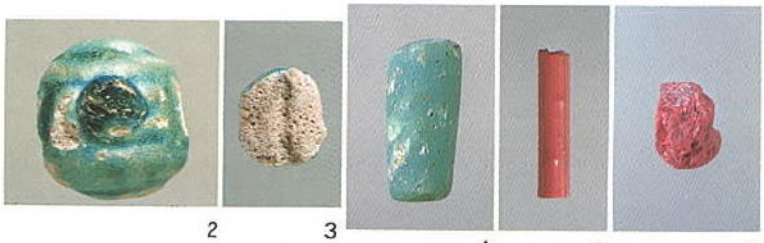
福岡県教育委員会

三　雲　遺　跡

糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査



1



2　3　4　5　6

7

1　仲田Ⅰ－16出土玉類(実大)
2　ファイアンス玉(約２倍)
3　ファイアンス玉胎土(実大)
4　17号住居跡出土ガラス管玉(約２倍)
5　W78－S84出土ガラス管玉(約２倍)
6　辰　　砂(実大)
7　石橋Ⅱ－11・12　５号石棺墓玉類出土状態

序

この報告書は、福岡県教育委員会が糸島郡前原町三雲地区圃場整備事業に際し、前原町土地改良区と協議の結果やむなく破壊される埋蔵文化財を昭和49年度から発掘調査した記録の一部であります。

今回の報告は、前原町大字三雲地区の昭和49年度から昭和53年度までに実施した予備調査と圃場整備で削平あるいは道路敷となる部分の一部を内容とするもので、『三雲遺跡』IIとして公刊することになりました。

発掘調査の記録としては、満足のいくものではありませんが、本報告書を通して埋蔵文化財に対し、一層の御協力をいただければ幸いです。

なお、遺跡の保存と調査に対して御協力いただいた前原町土地改良区と地元の方々をはじめ、関係各位の御援助と御配慮により本書を発刊することができましたことを心から感謝申し上げます。

昭和56年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　友　野　　隆

例　言

1. 本書は、昭和49年11月25日から昭和54年３月31日までに、福岡県教育委員会が国庫補助を受けて、前原町三雲地区圃場整備事業のために破壊される埋蔵文化財を発掘調査した２冊目の報告書である。

2. 本書の執筆分担は次の通りである。

第１章……柳　田　康　雄

第２章……小　池　史　哲

第３章　第１節……柳田康雄・馬田弘稔・小池史哲
池辺元明・立石雅文・丸山康晴
荒武麗子

第２節……柳田康雄・森田　勉・丸山康晴

第３節……柳田康雄・木下　修・森田　勉
小池史哲

第４節……小　池　史　哲

第５節……柳田康雄・木下　修・児玉真一
新原正典・馬田弘稔・中間研志
小池史哲・池辺元明

第６節……柳田康雄・小池史哲

3. 遺物の整理・図面作成においては、担当者の外に岩瀬正信・荒武麗子・平田春美・豊福弥生・須山富子が従事し、掲載の写真のうち遺物撮影は九州歴史資料館の石丸洋主任技師の協力があった。なお、写真の撮影、実測図の作成および製図は、図版目次・挿図目次に示すとおりである。

4. 本書の編集は、柳田と小池が担当した。

本　文　目　次

序

第１章　調査組織と調査の経過

1　調査組織……1

2　調査の経過……3

第２章　糸島の縄文文化

第１節　糸島の縄文文化研究史 ……8

第２節　糸島の縄文遺跡と遺物 ……9

第３節　福岡県の縄文時代埋甕 ……27

第３章　三雲遺跡の遺構と遺物

第１節　仲田地区の調査

1　はじめに……32

2　Ｉ－６のトレンチ……32

3　Ｉ－14の調査……34

(1)　甕棺墓・土壙墓・石棺墓……35

(2)　その他の遺構と遺物……49

4　Ｉ－16の調査……51

(1)　住居跡……51

(2)　土壙状遺構……91

(3)　掘立柱遺構……99

(4)　その他の遺構……101

5　小　結……106

第２節　鬼木・深町地区の調査

1　はじめに……109

2　鬼木II－13の調査……110

3　深町－15の調査……114

第３節　柿木地区の調査

1　はじめに……122

2　土壙墓・甕棺墓…… 123
3　その他の遺構と遺物…… 135
4　小　結…… 139

第4節　石橋・サキゾノ地区の縄文時代遺構と遺物

1　はじめに…… 141
2　遺　構
(1)　埋　甕…… 142
(2)　住居跡…… 145
3　遺　物
(1)　縄文土器…… 146
(2)　石器・土製品…… 168
4　小　結…… 182

第5節　石橋地区の調査

1　はじめに…… 184
2　弥生時代の遺構と遺物…… 184
(1)　Ⅰ－2甕棺墓群…… 184
(2)　Ⅰ－2のその他の遺物…… 191
(3)　Ⅱ－12の大溝…… 198
3　古墳時代の遺構と遺物
(1)　Ⅱ－11・12の石棺墓群…… 200
(2)　Ⅱ－11・12玉類・鉄器・石器…… 219
4　小　結…… 224

第6節　サキゾノ地区の調査

1　はじめに…… 225
2　遺構と遺物…… 225
(1)　住居跡…… 225
(2)　土器溜…… 238
(3)　土　壙…… 240
(4)　包含層出土の土器…… 240
(5)　石器・鉄器…… 244
(6)　石敷遺構…… 246
3　小　結…… 247

図　版　目　次

本文対照頁

巻頭図版		1	仲田Ⅰ－16出土玉類（石丸洋撮影）……79
		2	ファイアンス玉（石丸撮影）……79
		3	ファイアンス玉胎土（石丸撮影）……79
		4	17号住居跡出土ガラス管玉（石丸撮影）……80
		5	W78－S84出土ガラス管玉（石丸撮影）……80
		6	辰砂（石丸撮影）……83
		7	石橋II－11・12　5号石棺墓玉類出土状態（柳田康雄撮影）……209
図　版	1	1	郡の後・鬼木・深町・仲田・加賀石・石橋地区（パシフィック航業株式会社撮影）
		2	仲田Ⅰ－6トレンチ（柳田撮影）……32
		3	仲田Ⅰ－6トレンチ（柳田撮影）……32
図　版	2	1	仲田Ⅰ－14発掘区全景（柳田撮影）……34
		2	6～10号甕棺墓（柳田撮影）……37
図　版	3	1	仲田Ⅰ－14発掘区南部（柳田撮影）……35
		2	2～5号甕棺墓と2・3号土壙墓（柳田撮影）……35
図　版	4	1	1号甕棺墓……35
		2	2号甕棺墓……35
		3	3号甕棺墓……35
図　版	5	1	4号甕棺墓……37
		2	5号甕棺墓……37
		3	6号甕棺墓……37
図　版	6	1	7号甕棺墓……39
		2	8号甕棺墓……39
		3	9号甕棺墓……39
図　版	7		10号甕棺墓（柳田撮影）……40
図　版	8	1	仲田Ⅰ－14　発掘区全景（柳田撮影）……48
		2	石棺墓（柳田撮影）……48
図　版	9	1	仲田Ⅰ－14　6・7・10号甕棺と1号土壙（柳田撮影）……49
		2	1号土壙（柳田撮影）……49
図　版	10	1	2号土壙墓（柳田撮影）……47
		2	3号土壙墓（柳田撮影）……48

図　版　11　1　1号甕棺（平島美代子撮影）……35
2　2号甕棺（平島撮影）……35
3　4号甕棺（平島撮影）……37
4　3号土壙出土壺破片（平島撮影）……48
5　ガラス小玉（柳田撮影）……51
図　版　12　1　6号甕棺（平島撮影）……37
2　7号甕棺（平島撮影）……39
3　8号甕棺（平島撮影）……39
4　9号甕棺（平島撮影）……39
図　版　13　1　5号甕棺（平島撮影）……37
2　10号甕棺（平島撮影）……40
図　版　14　1　仲田Ⅰ－16 調査区全景（柳田撮影）……52
2　仲田Ⅰ－16 調査区西半（柳田撮影）……52
図　版　15　1　仲田Ⅰ－16　1・3号住居跡（柳田撮影）……52
2　1～6号住居跡と石棺墓（柳田撮影）……52
図　版　16　1　仲田Ⅰ－16　1・3号住居跡（柳田撮影）……52
2　1号住居跡中央高杯（柳田撮影）……52
3　5・6号住居跡（柳田撮影）……56
図　版　17　1　仲田Ⅰ－16　7～9号住居跡（柳田撮影）……57
2　10・11・16号住居跡付近（柳田撮影）……59
図　版　18　1　仲田Ⅰ－16　10号住居跡（柳田撮影）……59
2　11号住居跡（柳田撮影）……61
3　12号住居跡（柳田撮影）……63
図　版　19　1　仲田Ⅰ－16　13・14号住居付近（柳田撮影）……64
2　14号住居跡（柳田撮影）……65
3　13号住居跡付近の第4層（柳田撮影）……65
図　版　20　1　仲田Ⅰ－16　17・18号住居跡（柳田撮影）……65
2　17号住居跡（柳田撮影）……65
図　版　21　1　仲田Ⅰ－16　17号住居跡内壺と管玉（柳田撮影）……66
2　17号住居跡内高杯と砥石（柳田撮影）……66
図　版　22　1　仲田Ⅰ－16　18号住居跡（柳田撮影）……68
2　18号住居跡内土器（柳田撮影）……69
図　版　23　1　仲田Ⅰ－16　17～21号住居跡（柳田撮影）……75

		2	20号住居跡（柳田撮影）	75
		3	21号住居跡（柳田撮影）	76
図	版 24	1	仲田Ⅰ－16　3号不整形土壙（柳田撮影）	94
		2	器台（柳田撮影）	94
		3	3号不整形土壙付近（柳田撮影）	94
図	版 25	1	仲田Ⅰ－16　1号不整形土壙（柳田撮影）	91
		2	2号不整形土壙（柳田撮影）	93
		3	石棺墓（柳田撮影）	101
図	版 26	1	仲田Ⅰ－16　掘立柱遺構（柳田撮影）	99
		2	掘立柱遺構（柳田撮影）	99
		3	P23の鉄鎌と器台（柳田撮影）	102
図	版 27		仲田Ⅰ－16　1・3・5・6・9・10号住居跡出土土器（平島撮影）	52
図	版 28		仲田Ⅰ－16　10～13号住居跡出土土器（平島撮影）	59・61
図	版 29		仲田Ⅰ－16　17号住居跡出土土器（平島撮影）	66
図	版 30		仲田Ⅰ－16　18号住居跡出土土器（平島撮影）	70
図	版 31		仲田Ⅰ－16　18号住居跡出土土器（平島撮影）	70
図	版 32		仲田Ⅰ－16　18・21号住居跡出土土器（平島撮影）	76
図	版 33		仲田Ⅰ－16　1～3号不整形土壙出土土器（平島撮影）	93
図	版 34		仲田Ⅰ－16　ピット出土土器と玉類・辰砂（平島・柳田撮影）	79・83・102
図	版 35		仲田Ⅰ－16　鉄器（柳田撮影）	83
図	版 36	1	仲田Ⅰ－16　紡錘車（柳田撮影）	85
		2	石器（柳田撮影）	86
図	版 37		仲田Ⅰ－16　石器・砥石（柳田撮影）	86
図	版 38		仲田Ⅰ－16　石器（柳田撮影）	86
図	版 39		仲田Ⅰ－16　土製品（柳田撮影）	96
図	版 40	1	鬼木II－13調査区全景（柳田撮影）	110
		2	調査区近景（丸山撮影）	110
		3	流木（丸山撮影）	110
図	版 41		深町－15　土器（平島撮影）	115
図	版 42		深町－15　土器（平島撮影）	115
図	版 43		深町－15　土器・鏡片・石器（柳田撮影）	120
図	版 44	1	柿木－11　調査区北半（柳田撮影）	122
		2	1号土壙墓（柳田撮影）	124

図　版　45　1　2号土壙墓（柳田撮影）……124
2　3号土壙墓（柳田撮影）……125
3　3号土壙墓（柳田撮影）……125
図　版　46　1　1号甕棺墓（柳田撮影）……127
2　1号甕棺墓（柳田撮影）……127
図　版　47　1　2号甕棺墓（柳田撮影）……128
2　2号甕棺墓（柳田撮影）……128
3　3号甕棺墓（柳田撮影）……130
図　版　48　1　3号甕棺墓（柳田撮影）……130
2　3号甕棺墓（柳田撮影）……130
3　4号甕棺墓（柳田撮影）……132
図　版　49　1　1号甕棺（平島撮影）……128
2　2号甕棺（平島撮影）……129
図　版　50　1　3号甕棺（平島撮影）……130
2　4号甕棺（平島撮影）……132
図　版　51　土器・石器・陶磁器（柳田・平島撮影）……133
図　版　52　1　石橋II－12　縄文時代遺物出土状況（小池史哲撮影）……142
2　1号埋甕（小池撮影）……142
3　1号埋甕使用土器（平島撮影）……143
図　版　53　1　2号埋甕（柳田撮影）……143
2　2号埋甕（内部除去後）（柳田撮影）……143
3　2号埋甕使用土器（平島撮影）……143
図　版　54　石橋出土縄文土器（小池撮影）……146～150
図　版　55　石橋・サキゾノ出土縄文土器（小池撮影）……150～166
図　版　56　1　サキゾノ出土縄文土器（小池撮影）……166
2　石橋出土石器（小池撮影）……168～173
図　版　57　サキゾノ出土石器①（小池撮影）……176
図　版　58　サキゾノ出土石器②（小池撮影）……176～182
図　版　59　1　石橋Ⅰ－2調査区全景（柳田撮影）……184
2　1～5・7号甕棺墓（柳田撮影）……184
図　版　60　1　1号甕棺墓（柳田撮影）……185
2　2号甕棺墓（柳田撮影）……186
図　版　61　1　3号甕棺墓（柳田撮影）……186

		2	4号甕棺墓（柳田撮影）	188
図	版	62	1	5号甕棺墓（柳田撮影）	188
			2	6号甕棺墓（柳田撮影）	188
図	版	63	1	7号甕棺墓（柳田撮影）	188
			2	7号甕棺出土石剣（柳田撮影）	191
			3	7号甕棺（平島撮影）	191
図	版	64	1	1号甕棺下甕（平島撮影）	186
			2	2号甕棺下甕（平島撮影）	186
			3	3号甕棺下甕（平島撮影）	186
			4	6号甕棺下甕（平島撮影）	188
図	版	65	1	4号甕棺（平島撮影）	188
			2	5号甕棺（平島撮影）	188
図	版	66	1	石橋II－11・12　大溝断面（柳田撮影）	198
			2	1号石棺墓（柳田撮影）	204
			3	2号石棺墓（柳田撮影）	207
図	版	67	1	3号石棺墓（柳田撮影）	207
			2	4号石棺墓（柳田撮影）	208
			3	1号木棺墓（柳田撮影）	215
図	版	68	1	石橋II－11・12　石棺群と東側礫群（柳田撮影）	201
			2	5～8号石棺墓と祭祀土壙（柳田撮影）	201
			3	西側礫群（柳田撮影）	201
図	版	69	1	5号石棺墓（柳田撮影）	208
			2	5号石棺墓と祭祀土壙（柳田撮影）	208
			3	祭祀土壙内土器（柳田撮影）	211
			4	5号祭祀土壙（柳田撮影）	210
図	版	70	1	5号石棺墓（柳田撮影）	208
			2	5号石棺墓頭部（柳田撮影）	208
			3	5号石棺内玉類出土状態（柳田撮影）	209
図	版	71	1	6号石棺墓（柳田撮影）	212
			2	6号石棺墓（柳田撮影）	212
			3	6号石棺墓鉄鎌出土状態（柳田撮影）	212
図	版	72	1	7号石棺墓と木棺墓（柳田撮影）	213・215
			2	7号石棺墓（柳田撮影）	213

		3	7号石棺墓（柳田撮影）……213
図　版	73	1	8号石棺墓（柳田撮影）……213
		2	8号祭祀土器出土状態（柳田撮影）……213
		3	8号石棺墓（柳田撮影）……213
図　版	74	1	8号石棺墓と祭祀土壙（柳田撮影）……213
		2	5・6・8号石棺墓と祭祀土壙（柳田撮影）……201
図　版	75	1	E71－S330 祭祀土壙（柳田撮影）……216
		2	1号甕棺墓（柳田撮影）……218
		3	石橋II－8甕棺墓（柳田撮影）……219
図　版	76	1	石橋II－11・12 大溝出土土器（平島撮影）……200
		2	包含層出土土器（平島撮影）……204
図　版	77		5号祭祀・溝状・8号祭祀土壙出土土器（平島撮影）……211・215
図　版	78		8号祭祀・E71－330 祭祀土壙出土土器（平島撮影）……215・216
図　版	79	1	1号甕棺（平島撮影）……218
		2	石橋II－8甕棺（平島撮影）……219
		3	石橋II－11・12出土玉類（柳田撮影）……219
図　版	80	1	石橋II－11・12出土鉄器（柳田撮影）……221
		2	紡錘車（柳田撮影）……222
		3	砥石（柳田撮影）……223
図　版	81	1	サキゾノI－4・5全景①（小池撮影）……224～225
		2	サキゾノI－4・5全景②（小池撮影）……224～225
図　版	82	1	1号住居跡（小池撮影）……225
		2	2号住居跡（小池撮影）……227
図　版	83	1	4号住居跡（小池撮影）……230
		2	3・5号住居跡（小池撮影）……230
図　版	84	1	5号住居跡（小池撮影）……232
		2	6・9号住居跡（小池撮影）……234・237
図　版	85	1	7号住居跡（小池撮影）……234
		2	8号住居跡（小池撮影）……236
図　版	86		1～7号住居跡出土土器（平島撮影）……226～237
図　版	87	1	9号住居跡出土土器（平島撮影）……237
		2	土器溜（小池撮影）……238
図　版	88		土器溜出土土器・包含層出土土器（平島撮影）……238・240

図　版　89　　Ⅰ－4・5出土須恵器・石器（小池撮影）……242・243
図　版　90　1　Ⅰ－5出土鉄器（柳田撮影）……245
　　2　石敷遺構上部（小池撮影）……246
　　3　石敷遺構下部（小池撮影）……246

挿　図　目　次

第　1　図　三雲遺跡の位置と周辺主要遺跡……2
第　2　図　三雲遺跡地形図……折込み
第　3　図　三雲遺跡地籍及び地区割図……折込み
第　4　図　サキゾノⅠ－4・5発掘調査風景……4
第　5　図　番上Ⅱ－5発掘調査風景……6
第　6　図　現地説明会風景……7
第　7　図　糸島の縄文遺跡分布図（小池史哲・豊福弥生作成）……10
第　8　図　天神山・瀬戸・野呂高原・怡土校区出土遺物実測図・拓影（小池実測，手拓）…13
第　9　図　野呂高原・怡土校区・夷巍寺出土遺物実測図（小池実測，製図）……15
第　10　図　西ノ浦・宮ノ浦畑中出土土器拓影（小池実測，手拓）……17
第　11　図　桑原飛櫛貝塚出土土器①拓影（小池実測，手拓）……19
第　12　図　桑原飛櫛貝塚出土土器②拓影（小池実測，手拓）……20
第　13　図　桑原飛櫛貝塚出土土器③拓影（小池実測，手拓）……22
第　14　図　西ノ浦・桑原飛櫛貝塚出土石器実測図（小池実測，製図）……23
第　15　図　桑原飛櫛貝塚・宮ノ浦畑中出土遺物実測図（小池実測，製図）……23
第　16　図　瓜生貝塚出土土器①拓影（小池実測，手拓）……25
第　17　図　瓜生貝塚出土土器②拓影（小池実測，手拓）……26
第　18　図　瓜生貝塚出土土器③実測図（小池実測，製図）……27
第　19　図　仲田Ⅰ－6トレンチ土層図（平島勇夫・小林義彦実測・豊福製図）……33
第　20　図　仲田Ⅰ－6トレンチ出土土器実測図（柳田康雄・荒武麗子実測，柳田製図）……34
第　21　図　仲田Ⅰ－14遺構配置図（馬田弘稔・池辺元明・小林実測，豊福製図）……折込み
第　22　図　1～4号甕棺墓実測図（馬田・池辺・内田恵三・赤川正秀実測，馬田製図）……36
第　23　図　5～8号甕棺墓実測図（馬田・池辺・内田・赤川実測，馬田製図）……38
第　24　図　9・10号甕棺墓実測図（馬田・池辺・内田実測，馬田製図）……40
第　25　図　1～3号甕棺実測図（馬田実測，製図）……41

第 26 図　4・5号甕棺実測図（馬田実測，製図）……42
第 27 図　6号甕棺実測図（馬田実測，製図）……43
第 28 図　7～9号甕棺実測図（馬田実測，製図）……45
第 29 図　10号甕棺実測図（馬田実測，製図）……46
第 30 図　2号土壙墓実測図（馬田・内田実測，豊福製図）……47
第 31 図　3号土壙墓実測図（高田一弘・赤川実測，豊福製図）……48
第 32 図　3号土壙墓出土土器実測図（柳田・荒武実測，池辺製図）……48
第 33 図　石棺墓実測図（高田実測，豊福製図）……48
第 34 図　Ⅰ－14 出土縄文土器拓影（小池実測，手拓）……50
第 35 図　Ⅰ－14 出土玉類実測図（池辺実測，製図）……51
第 36 図　仲田Ⅰ－16 遺構配置図（柳田・小田雅文・丸山康晴実測，豊福製図）……折込み
第 37 図　1号住居跡実測図（小田・丸山実測，平田春美製図）……52
第 38 図　1号住居跡出土土器実測図（柳田・荒武実測，池辺製図）……53
第 39 図　2号住居跡実測図（小田・丸山実測，平田製図）……54
第 40 図　3・4号住居跡実測図（小田・丸山実測，平田製図）……55
第 41 図　3号住居跡出土土器実測図（柳田・荒武実測，池辺製図）……55
第 42 図　5・6号住居跡実測図（小田・丸山実測，平田製図）……56
第 43 図　8号住居跡実測図（小田・丸山実測，平田製図）……57
第 44 図　5～7・9号住居跡出土土器実測図（柳田・荒武実測，池辺製図）……58
第 45 図　7・9号住居跡実測図（丸山・小田実測，豊福製図）……折込み
第 46 図　10号住居跡実測図（丸山・小田実測，豊福製図）……59
第 47 図　10号住居跡出土土器実測図（荒武実測，池辺製図）……60
第 48 図　11・16号住居跡実測図（丸山・川村博実測，平田製図）……61
第 49 図　11号住居跡出土土器実測図（荒武実測，柳田製図）……62
第 50 図　12号住居跡実測図（丸山・川村実測，平田製図）……63
第 51 図　12～14・16号住居跡出土土器実測図（荒武実測，柳田製図）……64
第 52 図　17号住居跡実測図（柳田・丸山実測，豊福製図）……66
第 53 図　17号住居跡内遺物配置図（柳田・丸山実測，柳田製図）……折込み
第 54 図　17号住居跡出土土器実測図①（柳田・川村実測，池辺製図）……67
第 55 図　17号住居跡出土土器実測図②（川村・荒武実測，池辺製図）……68
第 56 図　18号住居跡実測図（柳田・川村実測，豊福製図）……69
第 57 図　18号住居跡出土土器実測図①（柳田・荒武実測，池辺製図）……71
第 58 図　18号住居跡出土土器実測図②（柳田・荒武実測，池辺製図）……72

第 59 図　18号住居跡出土土器実測図③（柳田・荒武実測，池辺製図）……73
第 60 図　18号住居跡出土土器実測図④（柳田・荒武実測，池辺製図）……74
第 61 図　18号住居跡出土土器実測図⑤（柳田・荒武実測，池辺製図）……75
第 62 図　20号住居跡実測図（柳田・川村実測，平田製図）……76
第 63 図　21号住居跡実測図（柳田・川村実測，平田製図）……77
第 64 図　19～21号住居跡出土土器実測図（柳田・荒武実測，池辺製図）……78
第 65 図　ファイアンス実測図（柳田実測，製図）……79
第 66 図　Ⅰ－16 出土玉類（柳田実測，製図）……80
第 67 図　Ⅰ－16 出土鉄器実測図（柳田実測，製図）……84
第 68 図　Ⅰ－16 出土紡錘車実測図（柳田実測，製図）……85
第 69 図　Ⅰ－16 出土石庖丁実測図（柳田実測，製図）……86
第 70 図　Ⅰ－16 出土石器実測図（小池実測，製図）……87
第 71 図　Ⅰ－16 出土砥石実測図①（小池実測，製図）……88
第 72 図　Ⅰ－16 出土砥石実測図②（小池実測，製図）……89
第 73 図　Ⅰ－16 出土砥石・石器実測図（柳田実測，製図）……90
第 74 図　1号不整形土壙実測図（丸山・川村実測，平田製図）……91
第 75 図　1・2号不整形土壙出土土器実測図（柳田・荒武実測，馬田製図）……92
第 76 図　2号不整形土壙実測図（柳田実測，豊福製図）……93
第 77 図　3号不整形土壙出土土器実測図（柳田・荒武実測，池辺製図）……95
第 78 図　Ⅰ－16 出土土製品実測図①（柳田実測，製図）……97
第 79 図　Ⅰ－16 出土土製品実測図②（柳田実測，製図）……98
第 80 図　掘立柱遺構柱穴実測図（柳田・川村実測，豊福製図）……折込み
第 81 図　掘立柱遺構柱穴出土土器実測図（荒武実測，柳田製図）…… 100
第 82 図　石棺墓実測図（小田・川村実測，豊福製図）…… 101
第 83 図　P23 実測図（小田・川村実測，柳田製図）…… 102
第 84 図　ピット出土土器実測図（荒武実測，柳田製図）…… 103
第 85 図　Ⅰ－16 出土縄文土器拓影・石器実測図（小池実測，手拓）…… 104
第 86 図　Ⅰ－16 出土石器実測図（小池実測，製図）…… 106
第 87 図　鬼木Ⅱ－13 遺構配置図（柳田・丸山実測，豊福製図）…… 111
第 88 図　Ⅱ－13 出土土器実測図①（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 112
第 89 図　Ⅱ－13 出土土器実測図②（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 113
第 90 図　Ⅱ－13 出土石器実測図（丸山実測，製図）…… 114
第 91 図　Ⅱ－13 出土須恵器実測図（森田勉実測，製図）…… 114

第 92 図　深町15 出土土器実測図①（柳田・平田実測，柳田製図）…… 116
第 93 図　深町15 出土土器実測図②（柳田・平田実測，柳田製図）…… 117
第 94 図　深町15 出土土器実測図③（柳田・平田実測，柳田製図）…… 118
第 95 図　深町15 出土土器実測図④（柳田・平田実測，柳田製図）…… 119
第 96 図　深町15 出土鏡片実測図（柳田実測，製図）…… 120
第 97 図　深町出土石器・石製品実測図（柳田実測，製図）…… 121
第 98 図　深町出土砥石実測図（柳田実測，製図）…… 121
第 99 図　柿木11 遺構配置図（柳田・木下修・小林実測，平田製図）…… 123
第 100 図　1 号土壙墓実測図（柳田実測，豊福製図）…… 124
第 101 図　2 号土壙墓実測図（木下・小林実測，豊福製図）…… 125
第 102 図　3 号土壙墓実測図（柳田・木下実測，豊福製図）…… 126
第 103 図　4 号土壙墓実測図（柳田実測・豊福製図）…… 127
第 104 図　1 号甕棺墓実測図（柳田実測，製図）…… 128
第 105 図　2 号甕棺墓実測図（柳田・木下実測，柳田製図）…… 129
第 106 図　3 ・ 4 号甕棺墓実測図（柳田・木下実測，柳田製図）…… 131
第 107 図　1 ・ 2 号甕棺実測図（柳田実測，製図）……折込み
第 108 図　3 ・ 4 号甕棺実測図（柳田実測，製図）……折込み
第 109 図　柿木11 出土土器実測図①（柳田・平田・荒武実測，柳田製図）…… 133
第 110 図　柿木11 出土土器実測図②（柳田・平田実測，柳田製図）…… 134
第 111 図　柿木11 出土縄文土器拓影（小池実測，手拓）…… 136
第 112 図　柿木出土石器・玉類実測図（柳田・小池実測，製図）…… 137
第 113 図　一括出土陶磁器実測図（森田実測，製図）…… 138
第 114 図　柿木出土土師器実測図（森田実測，製図）…… 139
第 115 図　1 号縄文埋甕実測図（小池・川村実測，小池・豊福製図）…… 142
第 116 図　2 号縄文埋甕実測図（高田実測，小池・豊福製図）…… 143
第 117 図　1 号埋甕使用土器実測図（小池実測・手拓）…… 144
第 118 図　2 号埋甕使用土器実測図（小池実測，手拓）…… 144
第 119 図　縄文期住居跡実測図（小池実測，豊福製図）…… 145
第 120 図　石橋Ⅱ－3 ・11・12 出土縄文土器①拓影（小池実測，手拓）…… 148
第 121 図　石橋Ⅱ－11・12 出土縄文土器②拓影（小池実測，手拓）…… 149
第 122 図　石橋Ⅱ－11・12 出土縄文土器③拓影（小池実測，手拓）…… 151
第 123 図　石橋Ⅱ－11・12 出土縄文土器④拓影（小池実測・手拓）…… 152
第 124 図　石橋Ⅱ－11・12 出土縄文土器⑤拓影（小池実測，手拓）…… 154

第 125図　石橋II－11・12 出土縄文土器⑥拓影（小池実測，手拓）…… 156
第 126図　石橋II－11・12 出土縄文土器⑦拓影（小池実測，手拓）…… 157
第 127図　サキゾノⅠ－1出土縄文土器①拓影（小池実測，手拓）…… 159
第 128図　サキゾノⅠ－1出土縄文土器②拓影（小池実測，手拓）…… 160
第 129図　サキゾノⅠ－1出土縄文土器③拓影（小池実測，手拓）…… 161
第 130図　サキゾノⅠ－1出土縄文土器④拓影（小池実測，手拓）…… 162
第 131図　サキゾノⅠ－4・5出土縄文土器①拓影（小池実測，手拓）…… 163
第 132図　サキゾノⅠ－4・5出土縄文土器②拓影（小池実測，手拓）…… 164
第 133図　サキゾノⅠ－4・5出土縄文土器③拓影（小池実測，手拓）…… 165
第 134図　サキゾノⅠ－4・5出土縄文土器④拓影（小池実測，手拓）…… 166
第 135図　サキゾノⅠ－6～8・15出土縄文土器拓影（小池実測，手拓）…… 167
第 136図　石橋出土石器実測図①（小池実測，製図）…… 169
第 137図　石橋出土石器実測図②（小池実測，製図）…… 170
第 138図　石橋出土石器実測図③（小池実測，製図）…… 171
第 139図　石橋出土石器実測図④（小池実測，製図）…… 172
第 140図　石橋出土石器実測図⑤（小池実測，製図）…… 174
第 141図　石橋出土石器・土製品実測図⑥（小池実測，製図）…… 175
第 142図　サキゾノ出土石器実測図①（小池実測，製図）…… 177
第 143図　サキゾノ出土石器実測図②（小池実測，製図）…… 178
第 144図　サキゾノ出土石器実測図③（小池実測，製図）…… 179
第 145図　サキゾノ出土石器実測図④（小池実測，製図）…… 180
第 146図　サキゾノ出土石器・土製品実測図⑤（小池実測，製図）…… 181
第 147図　石橋Ⅰ－2遺構配置図（児玉真一・小林・赤川実測，豊福製図）…… 185
第 148図　1～4号甕棺墓実測図（児玉・小林・赤川実測，馬田製図）…… 187
第 149図　5～7号甕棺墓実測図（小林・赤川実測，馬田製図）…… 189
第 150図　2～4・6・7号甕棺実測図（馬田実測，製図）……折込み
第 151図　1・5号甕棺実測図（馬田実測，製図）……折込み
第 152図　磨製石剣・紡錘車実測図（児玉実測，製図）…… 191
第 153図　Ⅰ－2出土土器実測図①（児玉・荒武実測，児玉製図）…… 192
第 154図　Ⅰ－2出土土器実測図②（児玉・荒武実測，児玉製図）…… 194
第 155図　Ⅰ－2出土土器実測図③（児玉・荒武実測，児玉製図）…… 195
第 156図　Ⅰ－2出土土器実測図④（児玉実測，製図）…… 196
第 157図　Ⅰ－2・4・12出土石器実測図（小池実測，製図）…… 197

第 158 図　Ⅰ－２出土縄文土器拓影（小池実測，手拓）…… 198
第 159 図　Ⅱ－12 大溝断面土層図（小林実測，豊福製図）…… 198
第 160 図　大溝下層土器実測図（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 199
第 161 図　大溝上層土器実測図（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 200
第 162 図　Ⅱ－11・12 遺構配置図（馬田・渡辺健二実測，豊福製図）……折込み
第 163 図　大溝最上層土器実測図（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 202
第 164 図　包含層土器実測図①（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 203
第 165 図　包含層土器実測図②（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 204
第 166 図　１号石棺墓実測図（新原正典実測，豊福製図）…… 205
第 167 図　２号石棺墓実測図（新原実測，豊福製図）…… 206
第 168 図　３号石棺墓実測図（中間研志実測，須山富子製図）…… 207
第 169 図　４号石棺墓実測図（柳田実測，豊福製図）…… 208
第 170 図　５号石棺墓実測図（小池・池辺実測，豊福製図）……折込み
第 171 図　５号石棺墓玉類出土状態実測図（柳田・小池実測，池辺製図）…… 209
第 172 図　５号石棺墓と祭祀土壙実測図（柳田実測，豊福製図）…… 209
第 173 図　５号祭祀土壙土器実測図①（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 210
第 174 図　５号祭祀土壙土器実測図②（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 211
第 175 図　溝状土壙土器実測図（荒武実測，柳田製図）…… 212
第 176 図　６号石棺墓実測図（柳田・草場啓一実測，豊福製図）……折込み
第 177 図　７号石棺墓実測図（木下・児玉実測，須山製図）……折込み
第 178 図　８号石棺墓実測図（児玉実測，豊福製図）……折込み
第 179 図　８号石棺墓と祭祀土壙（柳田・馬田実測，豊福製図）…… 213
第 180 図　８号祭祀土壙土器実測図①（柳田・荒武実測，柳田製図）…… 214
第 181 図　８号祭祀土壙土器実測図②（荒武実測，柳田製図）…… 215
第 182 図　１号木棺墓実測図（木下実測，豊福製図）…… 215
第 183 図　E 71－S330 祭祀土壙（柳田実測，豊福製図）…… 216
第 184 図　祭祀土壙土器実測図（荒武実測，柳田製図）…… 216
第 185 図　１号甕棺墓実測図（中間・平島実測，中間製図）…… 217
第 186 図　１号甕棺実測図（中間実測，製図）…… 217
第 187 図　Ⅱ－８甕棺墓実測図（小林実測，馬田製図）…… 217
第 188 図　Ⅱ－８甕棺実測図（馬田実測，製図）…… 218
第 189 図　玉類実測図（池辺実測，製図）…… 220
第 190 図　鉄器実測図（柳田・児玉実測，児玉製図）…… 222

第 191図　紡錘車実測図（小池実測，柳田製図）…… 223
第 192図　砥石実測図（小池実測，製図）…… 223
第 193図　須恵器実測図（平田実測，柳田製図）…… 193
第 194図　サキゾノⅠ－4・5遺構配置図（小池・川村実測，豊福製図）……折込み
第 195図　Ⅰ－4・5土層図（小林・草場実測，豊福製図）……折込み
第 196図　1号住居跡実測図（小池・小林実測，平田製図）…… 226
第 197図　2・3号住居跡実測図（小池・川村実測，平田製図）…… 227
第 198図　1・2号住居跡出土土器実測図（小池実測，製図）…… 229
第 199図　4号住居跡実測図（小池・川村実測，平田製図）…… 230
第 200図　5号住居跡実測図（小池実測，平田製図）…… 230
第 201図　3・5・6号住居跡出土土器実測図（小池実測，製図）…… 231
第 202図　6・9号住居跡実測図（小池実測，平田製図）…… 233
第 203図　7号住居跡実測図（小池実測，平田製図）…… 235
第 204図　6・7・9号住居跡出土土器実測図（小池実測，製図）…… 236
第 205図　8号住居跡実測図（小池実測，平田製図）…… 237
第 206図　土器溜出土土器実測図（小池実測，製図）…… 239
第 207図　Ⅰ－4・5包含層出土土器実測図（小池実測，製図）…… 241
第 208図　Ⅰ－4・5包含層出土須恵器実測図（小池実測，手拓）…… 242
第 209図　Ⅰ－4・5出土石器類実測図①（小池実測，製図）…… 224
第 210図　Ⅰ－4・5出土石器類実測図②（小池実測，製図）…… 245
第 211図　Ⅰ－5出土鉄器実測図（柳田実測，製図）…… 245
第 212図　石敷遺構実測図（小池・小林実測，豊福製図）……折込み

表　目　次

表　1　福岡県下の縄文時代埋甕・甕棺一覧表（小池史哲作成）……29
表　2　仲田Ⅰ－14 甕棺墓一覧表（馬田弘稔作成）……44
表　3　仲田Ⅰ－14 出土ガラス小玉計測表（池辺元明作成）……51
表　4　仲田Ⅰ－16 出土ガラス小玉計測表（柳田康雄作成）……82
表　5　仲田Ⅰ－16 出土紡錘車一覧表（柳田作成）……86
表　6　柿木11 一括出土陶磁器法量表（森田勉作成）…… 138
表　7　石橋・サキゾノ出土石器計測表（小池・須山富子作成）……折込み

表　8　石橋・サキゾノ出土石鏃一覧表（小池作成）……折込み
表　9　石橋Ⅰ－2 甕棺墓一覧表（馬田作成）…… 190
表　10　石橋Ⅱ－11・12　5号石棺墓出土管玉計測表（池辺作成）…… 220
表　11　石橋Ⅱ－11・12　5号石棺墓出土ガラス小玉計測表（池辺作成）…… 221

第１章　調査組織と調査の経過

1　調査組織

(1)　昭和52年度の発掘調査構成

井原・三雲遺跡発掘調査指導委員

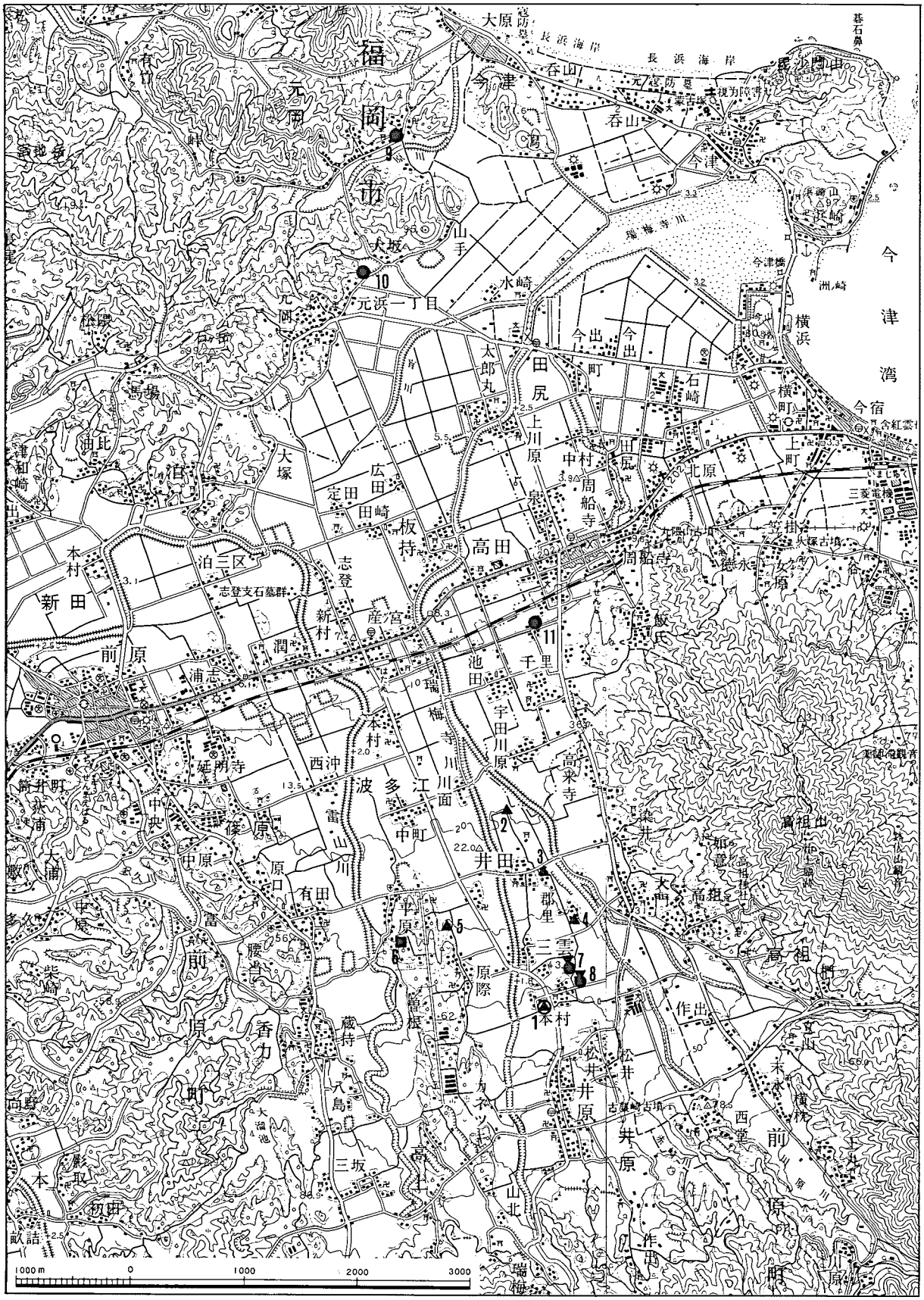
永井昌文	解剖	九州大学教授
白木原和美	考古	熊本大学教授
藤田　等	同	静岡大学教授
西谷　正	同	九州大学助教授

福岡県教育委員会

総括	教育長	浦山太郎
	管理部長	西村太郎
	文化課課長	藤井　功
	同課長補佐	武久耕作
	同参事補佐	松岡　史
	同技術主査	宮小路賀宏
庶務	主任主事	大神　新
発掘調査	主任技師	柳田康雄
	技師	中間研志
	同	木下　修
	同	児玉真一
	同	新原正典
	同	馬田弘稔
	同	小池史哲
	同	池辺元明

調査補助員として、川村博・小林義彦・小林美孝・丸山康晴・小田雅文・平田定幸・近沢康治・平島勇夫・渡辺健二・岡部正巳・高田一弘・草場啓一・岩瀬正信・赤川正秀・内田恵三が参加した。

なお、下記に示す方々の協力があった。



第 1 図　三雲遺跡の位置と周辺主要遺跡（1/50,000）

1　三雲南小路遺跡	2　井田用会支石墓	3　井田御子守支石墓	4　三雲加賀石支石墓
5　曽根石ヶ崎支石墓	6　平原遺跡	7　端山古墳	8　築山古墳
9　桑原飛櫛貝塚	10　元岡瓜生貝塚	11　千里シビナ遺跡	

第２図　三　雲　遺　跡　地　形　図（1/6,000）

第３図　三雲遺跡地籍及び地区割図（1/4,000）

清水利美・豊島禮蔵・浜地哲輔・山崎信行（前原町教育委員会）・中村信・井上克己・吉住誠（同土地改良区）・三島正己・浅田健一（三雲地区調査協力者）

2　調査経過

第4次（昭和52年度）の調査

第4次調査は，昭和52年10月22日から昭和53年3月31日まで実施した。

10月22日　現地に発掘器材の運搬をし，午後から発掘調査事務所の大掃除を行う。

10月24日　発掘調査初日。現場に発掘用具の運搬を行う。同時に加賀石と郡の後の境界の道路拡張分のトレンチ設定を行い，テストピットにより深さの確認をする。深さ確認後，ユンボにより遺構面までの排土を行う。仲田地区・サキゾノ地区も同様にして、表土剥ぎを行う。

10月25日　サキゾノ地区の道路部分の表土剥ぎ続行。仲田Ⅰ－6のトレンチ掘仕上げ。

10月27日　サキゾノ地区の表土剥ぎと，トレンチ壁整備続行。郡の後地区の方眼杭と発掘区の設定。加賀石の遺構調査続行。

10月28日　サキゾノ地区のトレンチ壁整備終了部分から2ｍ方眼杭を打ち，遺構検出を行う。郡の後のトレンチの結果，調査地点はⅢ－8の北半，Ⅲ－16の北側3分の1として，この部分の表土剥ぎをユンボによって行う。

10月31日　加賀石Ⅰ－1の遺構検出と発掘を終了し，遺構全体と各部の写真撮影を行う。

11月2日　昨日の雨で溜った水汲作業後，遺構検出続行。仲田Ⅰ－13で石棺墓発見。

11月5日　仲田の石棺と甕棺墓調査続行。サキゾノⅠ－6のピット掘りと遺構検出続行。P10から弥生土器片に伴なって，陶質土器片が多数出土する。

11月7日　仲田Ⅰ－13,サキゾノⅠ－6遺構検出続行。14時から三雲公民館で前原町土地改良，地元役員，業者と当方の四者会議を行い，圃場整備実施に際し，各間の注意事項を打合せた。

11月10日　仲田Ⅰ－14・19の表土剥ぎ続行。Ⅰ－11も野菜を除去してもらい表土剥ぎを始める。サキゾノⅠ－6・7は，ピット掘りと3号住の拡張を行う。3号住上層で土師器高杯に伴なって鉄剣と滑石製有孔円盤が出土した。

11月14日　サキゾノⅠ－6・7は新しい遺構の平面実測続行。Ⅰ－4の第3層を掘下げ遺構検出続行。

11月18日　昨日までの雨でトレンチ全面に水が溜っているため，Ⅰ－4・8の表土剥ぎをベルトコンベアーを使用して行う。Ⅰ－7の3号住上層遺物出土状態実測。

11月20日　サキゾノⅠ－4・5・8の遺構検出続行と遺物出土状態写真撮影を行う。

11月22日　サキゾノⅠ－4の第2層除去と第3層の遺構検出続行。Ⅰ－6 3号住上層は滑石臼玉

が引続き出土し，まだ時間がかかる見込。Ⅰ－7は遺構検出続行。白木原和美・西谷正両指導委員を招聘し，現場で遺跡の説明を行った後，調査指導を受ける。

11月25日　サキゾノⅠ－4・5・8の遺構内の掘下げ続行。白木原和美指導委員再度来訪。

11月26日　加賀石新設道路の表土剝ぎの立ち合いを午前中で終る。加賀石Ⅰ－23・24は遺構が深いところから道路工事を許可し，かわりに石橋Ⅱ－12で露出した石棺群を調査することにした。サキゾノⅠ－5の東端に柱穴の根石状の小石の集積があり，ほぼ2列に並ぶ。

11月28日　サキゾノⅠ－5は遺構検出続行。縄文土器片が多く発見される。石橋Ⅱ－11・12は第2層剝ぎ続行。4号石棺発見。第2層を完全に剝ぎ終り，第3層の遺構検出にかかる。第3層上部には，弥生・布留式・縄文土器片が多く発見される。

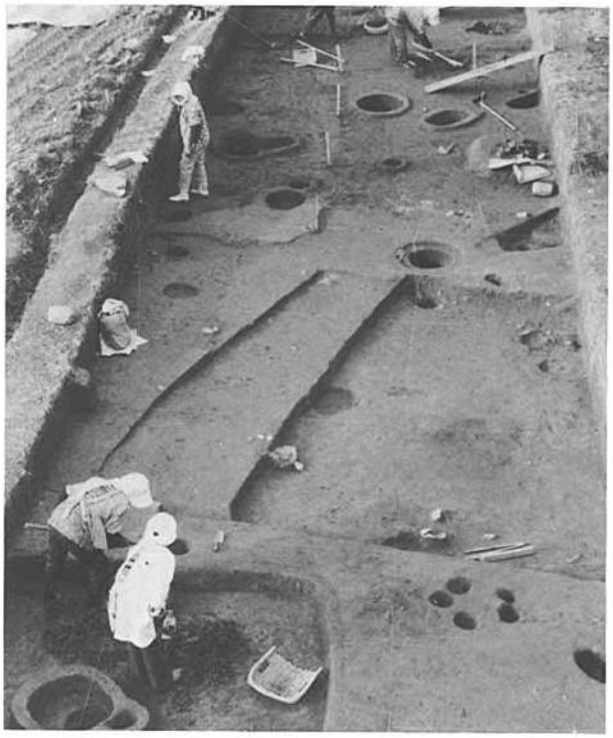
11月30日　サキゾノⅠ－7は3号住上部遺構の発掘続行。混入した石剣片と陶質土器片を発見する。石橋Ⅱ－11・12は石棺群の調査続行。西側では4号棺よりも古い溝状遺構内を5cmほど掘り下げたところ西平式の割合大きな破片が発見された。弥生土器もあるが，縄文土器片が多い。

12月2日　昨夜の雨で，水汲みに10時までかかった。サキゾノ地区は遺構検出続行。石橋Ⅱ－11・12は拡張部分の第3層を少し下げて遺構検出にかかったが，この面では検出はむずかしく，5cmほど下げると布留式を伴う遺構を部分的に検出できた。

12月5日　昨日石橋Ⅰ－2で業者の表土剝ぎで出土した甕棺らしきものは，他にも次々と発見され5号まで番号を付した。この中で石剣片が発見されたが，現状ではどの甕棺に伴うか不明。

12月7日　サキゾノⅠ－4・5と石橋Ⅱ－11は遺構検出と掘下げ続行。石橋Ⅰ－2は7号甕棺まで検出。7号棺の北側で発見された石剣片はその切先が，7号棺内の合せ目の間から発見されたので，石剣は7号棺に伴うらしい。

12月10日　石橋Ⅰ－2の甕棺群の墓壙が掘上り，写真撮影の準備をしたが，快晴のため加賀石Ⅰ－5の



第4図　サキゾノⅠ－4・5発掘調査風景

石棺の調査に移る。石橋II－11・12は実測のため割付を始める。郡の後Ⅳ－２～４の新設道路部分の表土剥ぎを業者にやってもらったが仕事が荒くて，遺構・遺物を破壊することが多かった。

12月13日　仲田Ⅰ－14・石橋Ⅰ－２の周囲にブルドーザよけの縄張りを行い，測量杭も運ぶ。仲田Ⅰ－14は，石棺・甕棺群が予想されるので，第２層剥ぎを行ったところ，前期小児甕棺７基と古式土師器に属す甕棺１基を確認する。

12月15日　昨夜の雨の水汲みと住居跡の清掃を行う。サキゾノⅠ－４・５・７・８は遺構掘り続行。石橋II－11は弧状溝内の掘下げを急いでいたところ，底面で高杯・短頸壺の一括が出土し，周囲には赤色顔料も検出された。この溝の東側の拡張区で石棺を発見し５号とした。

12月19日　サキゾノⅠ－４～７は遺構掘下げ続行。石橋II－11の５号石棺西側溝の遺物実測と各遺構掘下げ続行。藤田等指導委員を現場に案内し，指導を受ける。

12月23日　サキゾノⅠ－６～８は遺構掘下げ続行。ガラス製玉出土状態とその住居跡の写真撮影。石橋II－11は小礫群と布留式土器群の写真撮影。サキゾノⅠ－４は平面実測と，終ってからトレンチ南側壁の土層図実測の準備を行う。

12月27日　石橋II－12の２号石棺西側の南北大溝は全掘する時間的余裕がないので，南側の土層図のみ実測することにした。５号石棺は蓋石の実測を終り，写真撮影後蓋石を除去する。棺内と墓壙の掘下げを行ったところ，棺内床面で管玉16個と勾玉１個を発見する。

12月29日　石橋II－11の５号石棺内の清掃と写真撮影，遺物出土状態の実測，取上げを行う。本日で年内の作業を終了するため，周辺の片付け，テントの撤収を行う。

昭和53年１月６日　本年の作業開始。石橋II－11・12の５～８号石棺の清掃と写真撮影並びに実測を始める。

１月９日　郡の後地区に器材を運搬し，ベルトコンベアーなどをセットする一方，トレンチ壁面の整備を行う。その後遺構検出を行い，溝・住居跡・土器溜を検出する。

１月12日　サキゾノⅠ－１の新設道路敷になる部分に土器群が発見されていたが，この遺構プランを検出し，掘下げたところ弥生終末といわれていた土器群の中から庄内式甕の無傷の完形品が発見された。古式土師器の二重口縁壺や鉄器も出土した。

１月14日　２日間の雨でサキゾノ地区，郡の後地区共に冠水し，水汲みは午後までかかった。石橋Ⅰ－２も水汲みし，実測に備える。

１月19日　雨が続き遺構内の水汲みから始める。しかし，ミゾレが続き水溜ができたので写真撮影は４時すぎとなった。

１月23日　２日間の休みで水溜りに氷がはっていた。郡の後地区は，清掃に午前中かかり２時頃から西半部の写真撮影を行ったが，曇天の悪条件となった。甕棺北側土壙には多量の完形に近い土器が詰り甕棺と関係あるものであろう。サキゾノⅠ－１は，祭祀遺構(庄内式出土)

の東側を幅５ｍ，長さ12ｍの範囲で拡張する。

１月27日　郡の後地区の実測を続行し，本日をもってこの地区の調査完了。番上Ⅰ－12の南北水路の遺物取上げを続行し，北側の水路工事を許可する。本日は九州歴史資料館からパンコンテナ 240個を運搬し，帰りに本日まで出土した遺物を九州歴史資料館に運ぶ。サキゾノⅠ－１は庄内式の祭祀遺構の部分のみ割付をし，実測を完了した。

１月31日　加賀石Ⅰ－５の石棺実測続行。仲田Ⅰ－14は甕棺の墓壙を掘り始め，掘り上った順に写真撮影を行う。

２月４日　加賀石Ⅰ－５の石棺は実測を完了し，部分写真撮影を行う。仲田Ⅰ－14は全景写真撮影のために清掃したところ，ピットや土壙が検出され，この発掘にかかる。２号土壙は縄文土器片のみ，３号は弥生前期小壺片が出土する。

２月11日　サキゾノⅠ－１の平面実測。土器は実測終ったものから取上げる。

２月14日　仲田Ⅰ－14の土壙・甕棺の各２基を実測と全景写真撮影。サキゾノⅠ－１は住居跡の部分写真。

２月22日　サキゾノⅠ－１の縄文の埋甕の掘方掘上げ。石橋Ⅱ－８の土師壺棺の実測続行。番上Ⅱ地区の南北水路はユンボで表土と床土を排除し，Ⅱ－２を発掘始める。先ず，中世のピットや溝が現われる。

２月24日　仲田Ⅰ－14は最後の10号を写真・実測を終り，全体の平面図まで完了する。石橋Ⅰ－２の甕棺群は割付を行い，土器の分布から実測始める。番上Ⅱ－２・３は，遺構検出と掘下げを行う。第３層で鏡片発見。

２月26日　番上Ⅱ－５の東西水路を幅４ｍで，第３層を掘り始める。弥生後期とくに終末の土器が多い。

２月27日　石橋Ⅰ－２は甕棺実測続行。６・７号は完了し取上げる。番上Ⅱ－２・３は中世遺構の実測続行。井原字正恵の土取り現場で箱式石棺出土。高い崩面であるため，略測と人骨の採集のみを行った。

３月２日　石橋Ⅰ－２は最後の５号甕棺の実測完了し，石橋地区の作業終了。番上Ⅱ－２・３は弥生遺構検出続行。番上Ⅱ－５の東西水路部分は土器群掘りを続行。柿木地区の南北水路の表土剝ぎを立合ったところ，11地区では陶磁器５個や弥生中期甕棺が発見されたので調査することになった。

３月７日　番上Ⅱ－３は住居跡の掘上げ後，トレンチ全体の写真撮影。

第５図　番上Ⅱ－５発掘調査風景

II－5は土器群掘り続行。柿木は甕棺・土壙墓の人骨掘り続行。

3月19日　本日は三雲公民館で説明会を開く。発掘調査の概要とスライド説明を行ったところ多くの質問が熱心に出された。次に遺物展示室で出土品の説明を行う。やはり多くの質問がでる。最後に現場の柿木と番上地区で遺構説明を行う。

第6図　発掘調査説明会風景

3月23日　番上II－5の一部土器取上げを始める。午後は全員柿木地区に移り，全体の写真撮影し，その後南東側に拡張したところ甕棺・土壙・住居の各1基を発見する。

3月27日　柿木の甕棺の写真と実測続行。3号土壙は木棺墓であった。番上II－5は第4層の土器片も多く，本日までに掘上げることができなかった。遺物のパンコンテナ193個を九州歴史資料館に運搬した。

3月31日　柿木地区実測の準備をし実測にかかる。一方，遺物と不用な器材を九州歴史資料館に運搬し，一応本年度の作業を終了する。　（柳田）

第２章　糸島の縄文文化

三雲遺跡の位置する糸島郡は，いま福岡県の西端部を占めている。『魏志倭人伝』にいう伊都国に相当するのは殊更いうまでもないが，この地域の縄文時代人の足跡をみてゆきたい。

ここで扱う『糸島』とは，旧糸島郡地域を指し，現在の行政区糸島郡志摩町・糸島郡二丈町・糸島郡前原町・福岡市西区のうち長垂山以西の区域を包括し，律令期の怡土郡と志摩（嶋）郡を併せた範囲に相当する。

第１節　糸島の縄文文化研究史

1　縄文時代遺跡として文献に初出するのは，和島誠一氏による今津長浜貝塚発掘調査の紹介（註１）であろうか。学術的な発掘調査としては昭和24年の石ヶ崎遺跡が初例で報告は27年にされている（註２）。この報告では五久遺跡の例も紹介している。佐賀県葉山尻支石墓群の調査がある等で支石墓への関心が高まるが，糸島では28年に志登支石墓群の調査が実施されている（註３）。なお昭和10年に発見された東小田支石墓群（註４）の，２号支石墓副葬壺は後に夜臼式並行期とされている（註５・20）。

2　昭和40年，多量の鏡・玉類等を出土させ話題となった平原遺跡の発掘調査（註６）で，円形周溝中から黒曜石製石匙が出土（註７）する等，副次的に縄文時代遺物が発見されるのは開発の波に従って増加することになる。43年には野の花学園内の甕棺墓が発見されている（註８）。瓜生溜池汀線に露出した瓜生貝塚は稀少な縄文貝塚として43年に県指定史跡になっているが，44年に御床松原遺跡の縄文土器（註９），天神山貝塚の存在（註10）が紹介された。45年には川付遺跡の縄文土器（註11），桜井遺跡の縄文土器（註12），三雲遺跡・糸高校遺跡・松井遺跡の石匙（註13）が紹介されている。これら大神邦博氏による集成が中途になっていることは惜しまれる。

昭和45年には今宿バイパス建設計画に伴って飯氏鏡原遺跡（註14）・若八幡宮古墳（註15）が発掘調査され僅かながら縄文時代遺構・遺物を検出されている。

3　昭和47年には桑原飛櫛貝塚が発見され，瓜生貝塚同様良好な貝層の存在がみられた。一方後藤直氏らによる天神山貝塚踏査の記録（註16）では瀬戸内系土器の存在を指摘，貝塚を構成する貝類種を示す等貝塚研究への指向がみられる。

48年下條信行氏は，志摩半島地域の諸遺跡を紹介すると共に，環境保存の必要性等幾つかの

問題を示唆したが,桑原飛櫛貝塚の時期が後期始め頃で瓜生貝塚は後期中葉以降であり飛櫛居住者の瓜生貝塚への移動の可能性，貝類構成や骨角器・玄武岩フレイクの存在から当時の生活環境を考えている(註８)。

貝塚研究の視点で問題意識が高まるなかで，49年には天神山貝塚が発掘調査された。この報告で前川威洋氏は，早期・前期・後期の各貝層での貝類構成を比較し，後期貝層に汽水性の貝類・淡水産のカワニナ等の出現することから，現在貝塚東南側に広がる水田面がかつては内湾であり，後期に内湾の周辺部が干潟状ないしは陸化しつつあることを示すとして，自然環境の変化を示唆した(註17)。

50年，山崎純男氏は西北九州を中心とした貝塚の貝類構成比,貝類の捕獲と処理を問題にし，貝塚の発展段階を４段階に分けているが，桑原飛櫛貝塚・瓜生貝塚・長浜貝塚の貝類構成を明らかにすると共に，今津湾周辺貝塚での時間的検討を加えて下條氏の視点を発展させている(註18)。山崎氏は更に天神山貝塚のデーター・大神氏の成果を加えて，志摩半島でのテリトリーと生産活動を問題にして前の視点を発展させているが，前期に海退現象のあること・後期前半に引津湾周辺から今津湾周辺への移動の可能性のあること等を指摘している(註19)。

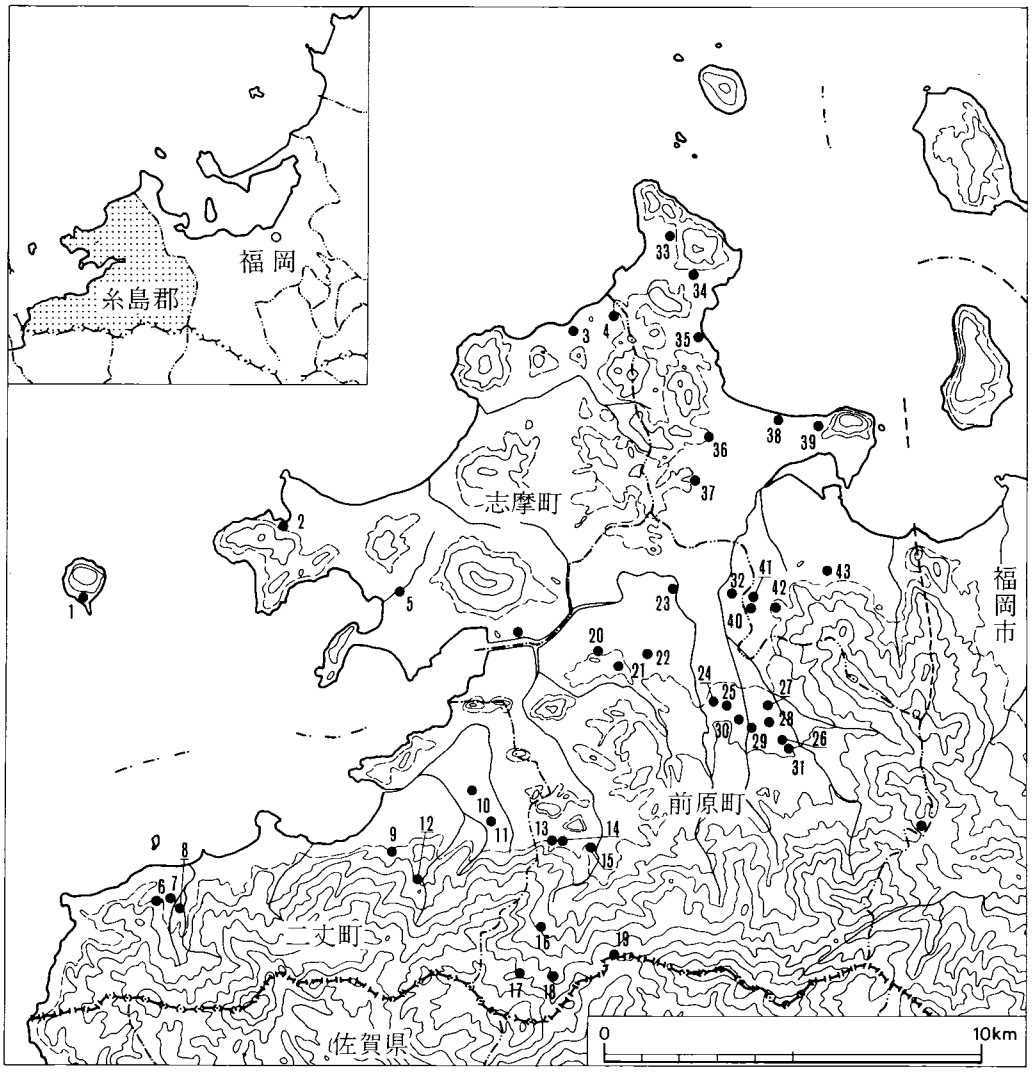
4　昭和49年以降三雲遺跡群の調査では，郡の後・加賀石・ミソノ地区等の縄文後・晩期遺物の発見(註20)のみならず，仲田・柿木・石橋・サキゾノ・屋敷・南小路・八龍地区等で，前・後・晩期遺物をはじめ遺構も発見されている。

53年には竹戸遺跡(註21)・吉井広田遺跡が調査され，吉井広田遺跡では，多量に出土した後晩期遺物の中に極度に磨耗した打製石斧・打製石鎌・土製紡錘車等があり縄文後晩期農耕存否の問題を含めた生産活動への視点を提示できた(註22)が，埋甕の存在等今後の研究課題を残している。54～56年には，住居跡・埋甕・溝等の発見された千里シビナ遺跡(註23)と飯氏ゾウサ遺跡(註24)・曲り田遺跡(註25)等が発掘調査されている。

5　遺跡・遺物の目録化では，昭和34年の糸島高校郷土博物館所蔵遺物目録(註26)に，96点の郡内出土縄文期遺物をあげているのが特記できよう。44年に福岡市の文化財地名表で旧糸島郡地域を収録し瓜生貝塚を示している(註27)が,糸島郡３町の分布調査は48～50年に原田大六氏・大神氏らを中心に実施され,志摩町に５遺跡(註28)・二丈町２遺跡(註29)・前原町９遺跡(註30)の合計16の縄文期遺跡がリストアップされている。また56年には現糸島郡全体の遺跡分布地図が作成されている(註31)。なお前原町立伊都国資料館の図録(註32)も発行されている。

第２節　糸島の縄文遺跡と遺物

この項では，旧糸島郡内の遺跡を概観するが，遺跡名のあとの番号は第７図の分布図に示す



第 7 図 糸 島 の 縄 文 遺 跡 分 布 図 (1/200,000)

番号と対応する。なお数ヶ所の遺跡出土遺物で未発表資料を掲載するが，関係諸氏の御好意によって実測図を作成し得たことに感謝したい。

(1) 志摩町

東浜(ひがしはま)遺跡(1) 志摩町大字姫島字東浜。志摩半島西端より約 4 km距てた姫島の山塊南斜面裾部で，姫島神社付近。志摩町地名表には石斧出土とされるが時期不明。

天神山貝塚(2)　志摩町大字芥屋字天神山。志摩半島西端部の立石山裾から北東方向に伸びる砂丘上に立地する。発掘調査の結果，東西120ｍ・南北100ｍの範囲内に小貝塚の分布すること，縄文早・前・後期の貝層・包含層のあること等が確認された。縄文土器・石器･骨器・貝製品，自然遺物等が出土（註10・16・17）。遺物は志摩町教育委員会・糸島高校・伊都国資料館等に保管されている。

石鋸（第８図１）　福岡市立歴史資料館蔵（註33）。２歯単位３列の形をとるもので，１単位と２歯先端を欠失しているが，現存長2.6cm・幅1.5cmに整えられ背は僅かに外湾する。背側は厚めとなり 0.4cmを有すが，主要剝離面を残す部分は擦痕を顕著に留める。風化のためか全体に磨耗が進んでいる。黒曜石製。

魚津遺跡(3)　志摩町大字桜井字魚津。志摩町地名表には，縄文中・後期土器散布とある。

桜井遺跡(4)　志摩町大字桜井字浦。景勝地二見ヶ浦から浦集落に通じる道路に沿った地点で，阿高系土器・磨消縄文土器片が採集されたという（註12）。特徴からして後期初頭頃の阿高系土器・中津式土器であろう。

御床松原遺跡(5)　志摩町大字御床字松原。引津小学校の北西側にあたる沖田川で，河床の砂中から曽畑式・轟式・阿高式等の土器片が採集されている（註９）。

その他，志摩町地名表には大字辺田字嘉永開の干拓地・二次堆積の石斧を記している。

(2)　二丈町

竹戸遺跡(6)　二丈町大字吉井字竹戸。二丈町地名表に，丘陵・石斧とある。地図に示された位置の現況は標高12～13ｍの密柑畑となっている。

竹戸遺跡(7)　二丈町大字吉井字竹戸。吉井浜の南方約 600ｍ・標高12ｍ位で，前述の竹戸遺跡の東 200ｍに小さな谷を挟んで立地する。県道藤川二丈線付替工事の事前発掘調査で，縄文後期土器片の出土があり（註21），石器類も出土している。

吉井広田遺跡(8)　二丈町大字吉井字広田。吉井浜の南方約１㎞・標高11ｍ位にあり，竹戸遺跡とは福吉川を挟んで対峙する。二丈浜玉道路建設の事前発掘調査の広田遺跡０区。縄文後期末～晩期前半の大溝・小竪穴・埋甕，多量の縄文土器・石器・石製品・土製品・自然遺物等が発見された。パンコンテナ 200箱以上の遺物は九州歴史資料館に保管されている（註22）。

道元堤遺跡(9)　二丈町大字深江字道元堤。二丈山塊北麓裾標高20ｍ前後で，淀川集落の南方に位置する。二丈町地名表では土器片・石匕・山麓・包含地とされるが，糸高目録には打製石槍３・土器片３・二丈村深江及道元とある。

曲り田遺跡(10)　二丈町大字石崎字曲り田。一貴山川と羅漢川に挟まれた石崎丘陵西斜面の標高10～13ｍに位置する。今宿バイパス建設の事前発掘調査で縄文前期・晩期夜臼式土器等を発見

している（註25）。

五久遺跡(11)　二丈町大字満吉字五久。上下共に夜臼式土器を用いた合せ甕があったと紹介されている（註２）。二丈町地名表には五久遺跡の名は出てこないが，満吉１号遺跡・満吉五反・墳墓（甕棺）・弥生前期とあり，五久の誤りであろうか。石崎集落の東南方向にあたる。

夷巍寺境内遺跡(12)　二丈町大字一貴山。夷巍寺は廃寺となり仁王門のみ残るが，境内から磨製石斧１点が採集されている。

磨製石斧（第９図30）　福岡市立歴史資料館蔵（註33）。幾分白っぽい色調の蛇紋岩製で，頭部と刃部の一部を欠失するが，現存長11.1cm・最大幅5.7cm・厚さ1.7cmを有す。短冊形扁平な磨製石斧で刃部は両刃だが僅かに偏っている。

(3)　前原町

瀬戸遺跡(13)　前原町瀬戸字野崎。深江水田地帯の最奥部，天降神社西方の水田面で溝掘削土から縄文土器片が発見されている（註34）。

縄文土器（第８図２）　胎土に金雲母・砂粒を含みナデ仕上げされているが，口縁部上面に瘤状突起を付け，直径７㎜の孔を通して釣手状にしている。後期中葉以降の所産であろう。

瀬戸遺跡(14)　前原町瀬戸字鍛治屋園。前途の瀬戸遺跡の東方約 350ｍに位置し，小さな谷に面す。前原町地名表に石斧・糸高蔵とある。

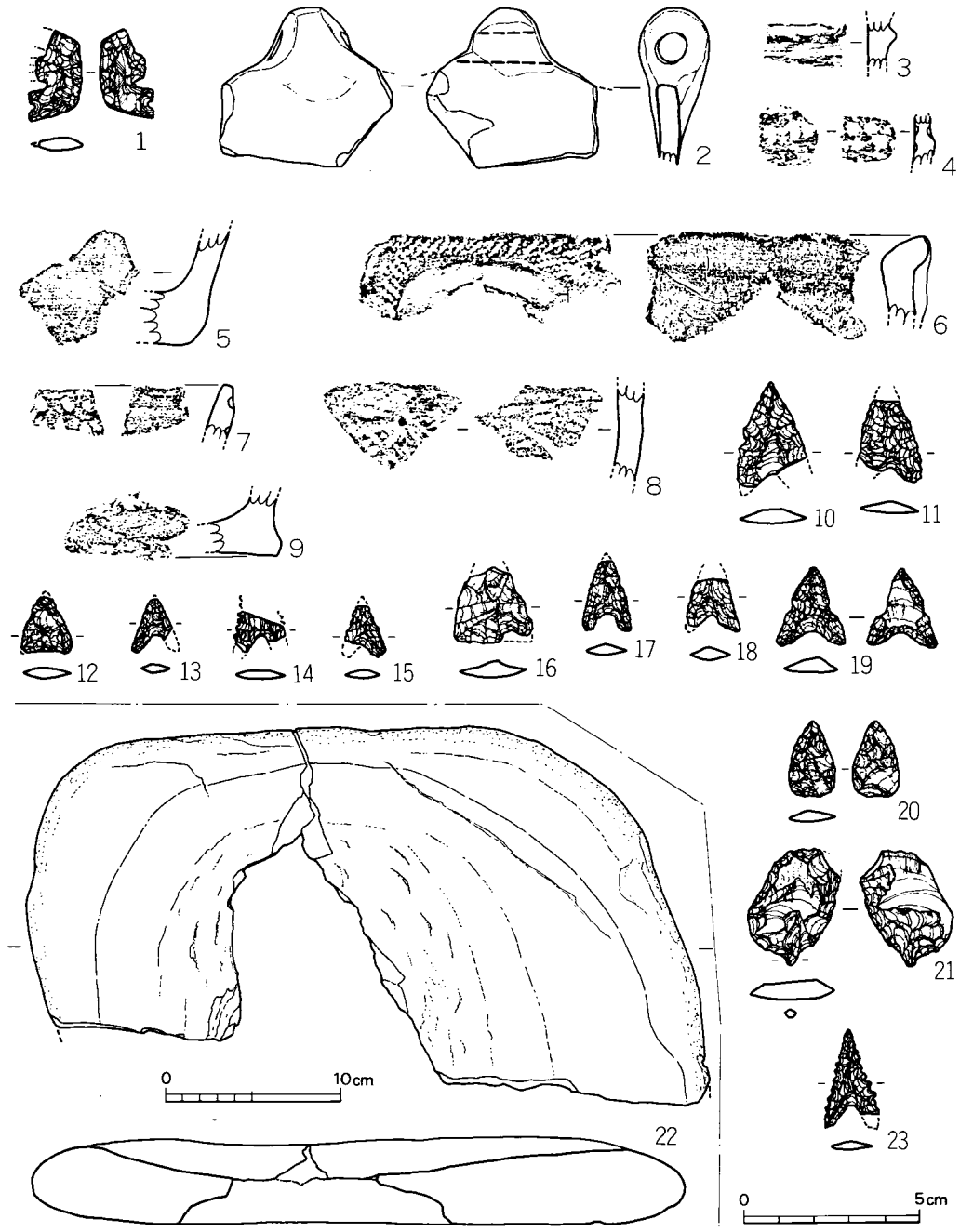
川付遺跡(15)　前原町大字長野字川付。長野川が支流白糸川と合流する地点左岸の丘陵。宇美神社境内から楕円押型文土器が出土している（註11）。また糸高目録では石槍１点がある。

白糸前田遺跡(16)　前原町大字白糸字前田。熊野神社境内で，標高 320ｍ前後，前原町地名表には，押型文土器，早期，志登収蔵庫蔵とある。

白糸獅子舞遺跡(17)　前原町大字白糸字獅子舞。獅子舞岳北斜面で，白糸滝より 600ｍ程上流。前原町地名表には石斧・志登収蔵庫蔵とある。

野呂高原遺跡(18)　前原町大字白糸字野呂高原。獅子舞岳北東斜面で緩傾斜になっている標高480ｍ付近。前原町営養育農場として乳牛の放牧に供せられているが，昭和54年に縄文土器・石器類が発見された（註35）。

縄文土器（第８図３～９）　３は隆帯を有した破片で轟式系の土器であろうか。４・５は胎土に滑石粉末を混入する土器で，４の連続押圧した文様は並木式土器にみられるもので５の底部も同様の時期と思われる。６は口縁部下に長楕円形の凹みを作り出し突出する部分に縄文L$\begin{matrix}R\\R\end{matrix}$を施文させているが，後期中葉の東日本的な土器である。７は口唇部を面取りし丁寧にナデられた外面を巻貝頂部で連続刺突したもので後期中葉～後半頃の土器だろうか。８・９は粗製土器の破片で二枚貝条痕及びナデで仕上げられており，後期に属すであろう。



第 8 図　天神山・瀬戸・野呂高原・怡土校区出土遺物実測図拓影（1/2・1/4）

石鏃(第 8 図10～20)　18点あり内11点を図示した。10～15が黒曜石製,10～20は安山岩製で,全面に調整の及ぶ例が多い。14は鋸歯鏃。欠損品がほとんどだが重量は順に,1.7ｇ・1.35ｇ・

0.6ｇ・0.25ｇ・0.3ｇ・0.35ｇ・2.2ｇ・0.7ｇ・0.8ｇ・1.2ｇ・0.85ｇ。

石錐(第８図21)　黒曜石の不定形剝片を素材とし、打瘤部を調整剝離して打瘤の厚みを用いた刃部にしている。重量は4.6ｇ。

石皿(第８図22)　厚さ５cmの平らな結晶片岩を用いているが，使用によって中央部は２cm程度凹んでいる。裏面はほとんど使用されていないがやや凹み気味になっている。

磨製石斧(第９図24～26)　24・25は蛇紋岩製だが，24の蛤刃状刃部で厚味のある体部に比して，25は扁平な体部でやや偏刃になる。26は花崗岩質の石材を用いているが，幾分扁平な体部で偏刃となっており，体部が反り気味になる。

打製石斧(第９図27)　緑簾片岩製で頭部を欠失する。重量は92ｇ。

石匙(第９図28・29)　２点とも安山岩製で横型。前者は全面に調整剝離が及び，体部が細味になる。後者は横剝ぎの主要剝離面を広く残し体部は幅広。

長野峠遺跡(19)　前原町大字長野。前原町地名表添付地図には県道前原下無津呂線の長野峠から旧道を下った位置に印を付けている。出土遺物は不明(註36)。

笹山遺跡(20)　前原町大字前原字笹山町。丸田池の南方の小谷に面した丘陵裾，標高10ｍ付近。前原町地名表には，石斧・糸高蔵とされている。

寺浦遺跡(21)　前原町大字前原字寺浦。笹山の丘陵東裾部。前原町地名表では石鏃等をあげているが未確認。

糸高校庭遺跡(22)　前原町大字篠原。糸高目録には，石鏃・石匙をあげている。石匙は縦型で先端を欠失している(註13)。

志登遺跡(23)　前原町大字志登字坂本。昭和28年に調査された志登支石墓群中にある甕棺墓のうち，８号甕棺墓は合せ甕で，上甕が晩期に属す(註３)。

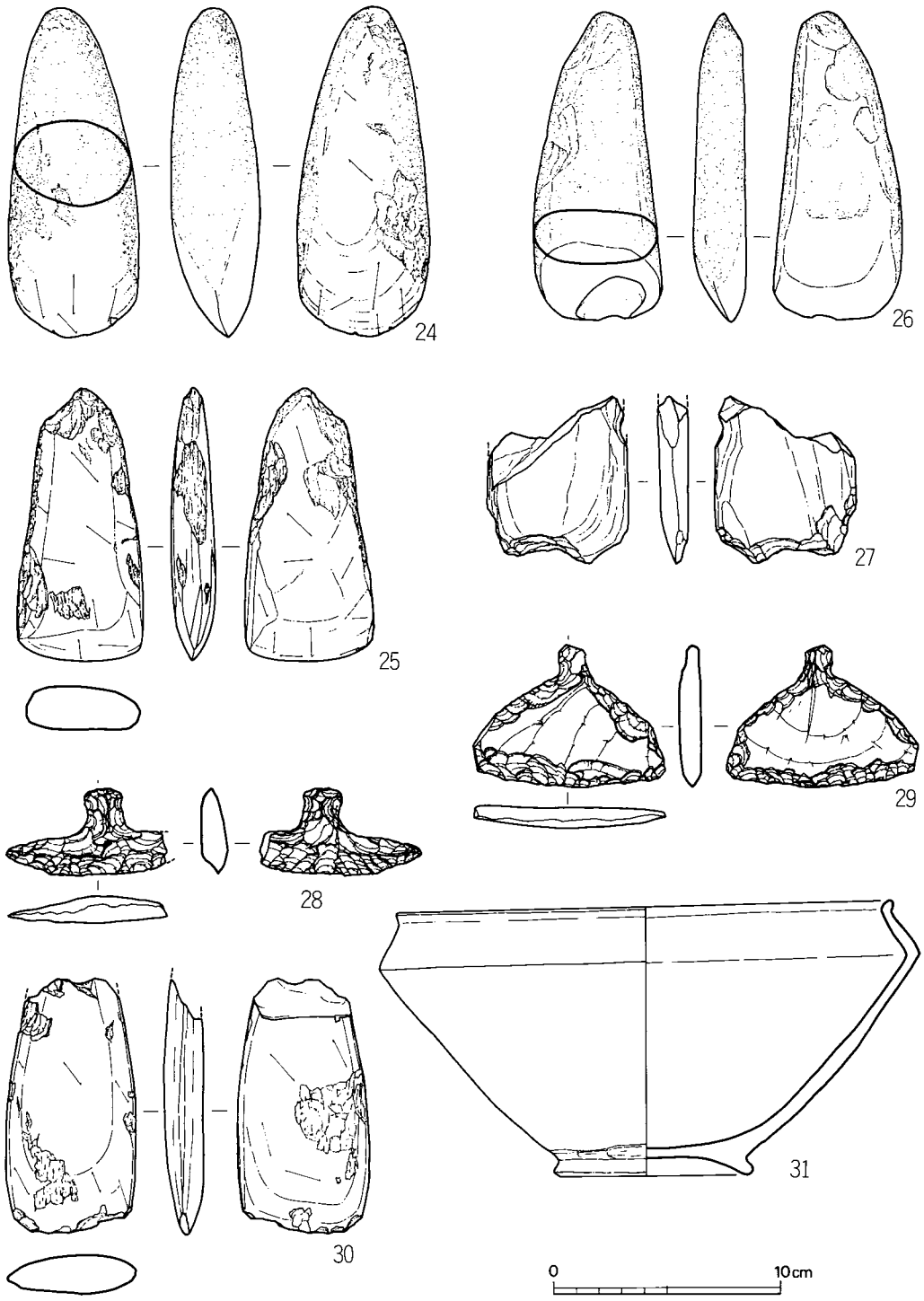
平原遺跡(24)　前原町大字有田字平原。前原町地名表には牙玉・志登収蔵庫蔵とされているが，伊都国資料館に展示されている牙玉は曽根高田原出土としている。このクジラ牙が縄文期の所産であるか否かの区別はつけ難い。一方昭和40年に発掘調査された平原遺跡の円形周溝中から黒曜石製石匙の出土があったという(註７)。

石ヶ崎遺跡(25)　前原町大字曽根字石ヶ崎。昭和24年の発掘調査で発見された第６号甕棺墓が縄文晩期終末期とされている(註２)。

三雲遺跡(26～30)　前原町大字三雲。既に横型石匙の出土が紹介されており(註13)，前原町地名表にも示されている。三雲遺跡群では**八龍・堺地区**(26)あたりの出土であろう。三雲遺跡群ではこの地区以外にも縄文時代遺物の出土をみている。

(27)**郡の後・加賀石地区**，後期後半～晩期・及び夜臼系土器・剝片鏃等が出土(註20)。**仲田地区**，後期後半～晩期中葉，本書第３章第１節で報告する。

(28)**石橋・サキゾノ地区**　後期中葉～晩期中葉。本書第３章第４節で報告する。



第 9 図　野呂高原・夷巍寺・怡土校区出土遺物実測図（1/3）

(29)**屋敷地区**(夜臼式土器出土)・**南小路地区**(曽畑式土器出土)及び**柿木地区**(本書第3章第3節)等を目下確認している。順次報告の予定だが今後の調査での増加もあろう。

(30)**ミソノ地区**，剝片鏃の出土がある。三雲遺跡群では瑞梅寺川以西に立地する(註20)。

松井遺跡(31)　前原町井原字松井。横型石匙の出土が紹介されている(註13)。

一丁田遺跡(32)　前原町大字高田字一丁田。前原町地名表には石斧，糸高蔵とある。

この他，前原町地名表添付地図には大字川原から福岡市西区曲淵方面に抜ける道路の町境付近に縄文時代遺跡の印を付けているが遺物は不詳。また伊都国資料館には怡土校区出土で怡土中学旧蔵とされる縄文土器があり，土器内に石鏃1点が入れたまま展示されている。

縄文土器(第9図31)　口径21.6cm・器高12.1cm・胴部最大径23.7cmを有す精製の鉢形土器。稜を有して内側に折れた口縁部は端部で短く外反する。内外面共磨研で仕上げられるが，円板貼付でレンズ状のあげ底になる底外面はナデ仕上げされている。山の寺式ないしは夜臼式に含めうる。

石鏃(第8図23)　黒曜石製の鋸歯鏃・長さ27.8mm・現存幅15.2mm・厚さ2.6mmを測る。

(4) 福岡市

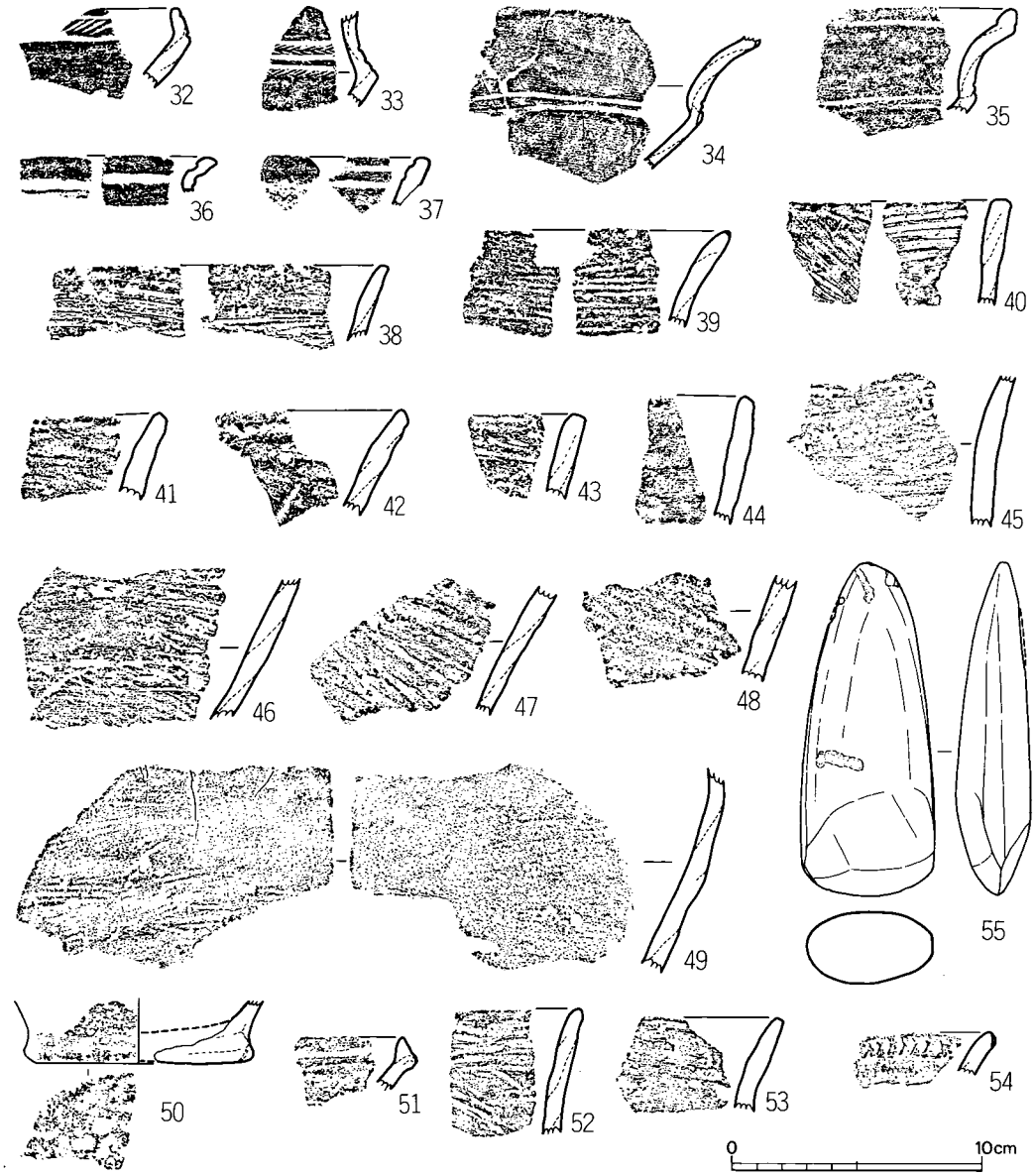
旧糸島郡内に含まれる地域内には，小呂島，玄海島等の離島がある。小呂島は海上26kmを距てる。また玄海島では目下のところ遺構・遺物は発見されていない(註37)ようである。

西の浦遺跡(33)　福岡市西区大字西ノ浦。志摩半島北端部の灘山西斜面で緩斜面に立地する。数年前畑地造成されたが，縄文後晩期の土器石器等が採集されている(註38)。

縄文土器(第10図32～50)　32・33は平行沈線と連続斜行押圧文を施した精製土器で後期三万田式期のもの。34・35は口縁部外面と肩部に沈線が施される精製磨研の浅体形土器で，肩部に2条沈線がめぐり，34の屈折部には横長楕円形の押点が付される。御領式～大石式期。36は短い口縁部で内面に1条の沈線を施すもの。37は内面に2条の沈線を施している口縁部破片で，黒川式期であろう。

38・39は内外面にアナダラ条痕を施す粗製土器口縁部破片で，39の口唇部には指先で押えたような刻み目が付される。40は巻貝系の条痕の施されたものだが，他の粗製土器にみられる気泡は少ない。41～44・47・48は外面を指先でカキナデ，内面をナデた粗製土器。45・46は外面にアナダラ条痕を施し内面をナデる例。49は内外面共に細かな条痕が施されるが，胎土に金雲母を多めに含む。50の底外面には凹凸が顕著にみられる。

打製石斧(第14図112～114)　112は橄欖石玄武岩製で，長さ17.1cm・現存幅10.8cm・厚さ2.5cm・重量449gを測る。体部中程から刃部が大きく広がり頭部と刃部の幅が1：2になる。本来頭部は幅広であった可能性があるが，刃部とのバランスの都合が意識的に現況の形にしたもの



第 10 図　西ノ浦・宮ノ浦畑中出土土器拓影（1/3）

と思われる。刃部の目減りに起因するのかも知れない。刃部は磨耗し長軸方向の使用痕が残り，両側縁の抉入部も磨耗する。

113は，橄欖石玄武岩製の扁平打製石斧頭部破片で，現存値110ｇを有す。頭部幅6.6cmだが体部側に幅狭となり，欠損部では4.8cm程度。

114は，緑色片岩の扁平打製石斧で短冊形。現存長11.5cm・幅5.9cm・厚さ1.4cm・重量118ｇ

を測る。刃部と頭部の一部に磨耗痕がみられる。

この他弥生前期頃の頁岩製敲石や安山岩製打製石鏃等も出土している。

宮ノ浦畑中遺跡(34)　福岡市西区大字西ノ浦字畑中。灘山南麓裾部に立地し，縄文後晩期土器，磨製石斧等が採集されている(註33)。

縄文土器(第10図51～54)　51は外方に誇張気味に屈折して端部が内傾する口縁部破片で一条の浅い凹線がつく。後期後半頃に属そう。52は外面アナダラ条痕・内面ナデ仕上げ，53は外面をカキナデた粗製土器。54は内外面共にナデ仕上げされ，幾分丸味を帯びた口唇部外面に刻み目が施される夜臼式土器。

磨製石斧(第10図55)　蛇紋岩製で丁寧に仕上げられている。長さ13.2cm・最大幅5.3cm・厚さ3cmを有し，刃部は両刃だが僅に扁る。

石錐(第15図1123)　やや厚みのある黒曜石縦長剝片の先端側を調整剝離しているが刃部を欠失する。欠失部は幅7.5mm・厚さ4.8mm。

東小田遺跡(35)　福岡市西区大字小田字小田浜。柑子岳北麓から伸びる砂丘上に立地する。昭和10年に発見された2基の支石墓の内2号支石墓副葬の小形壺は，赤色磨研の丸底壺で夜臼式並行期のものとされる(註5・20)。

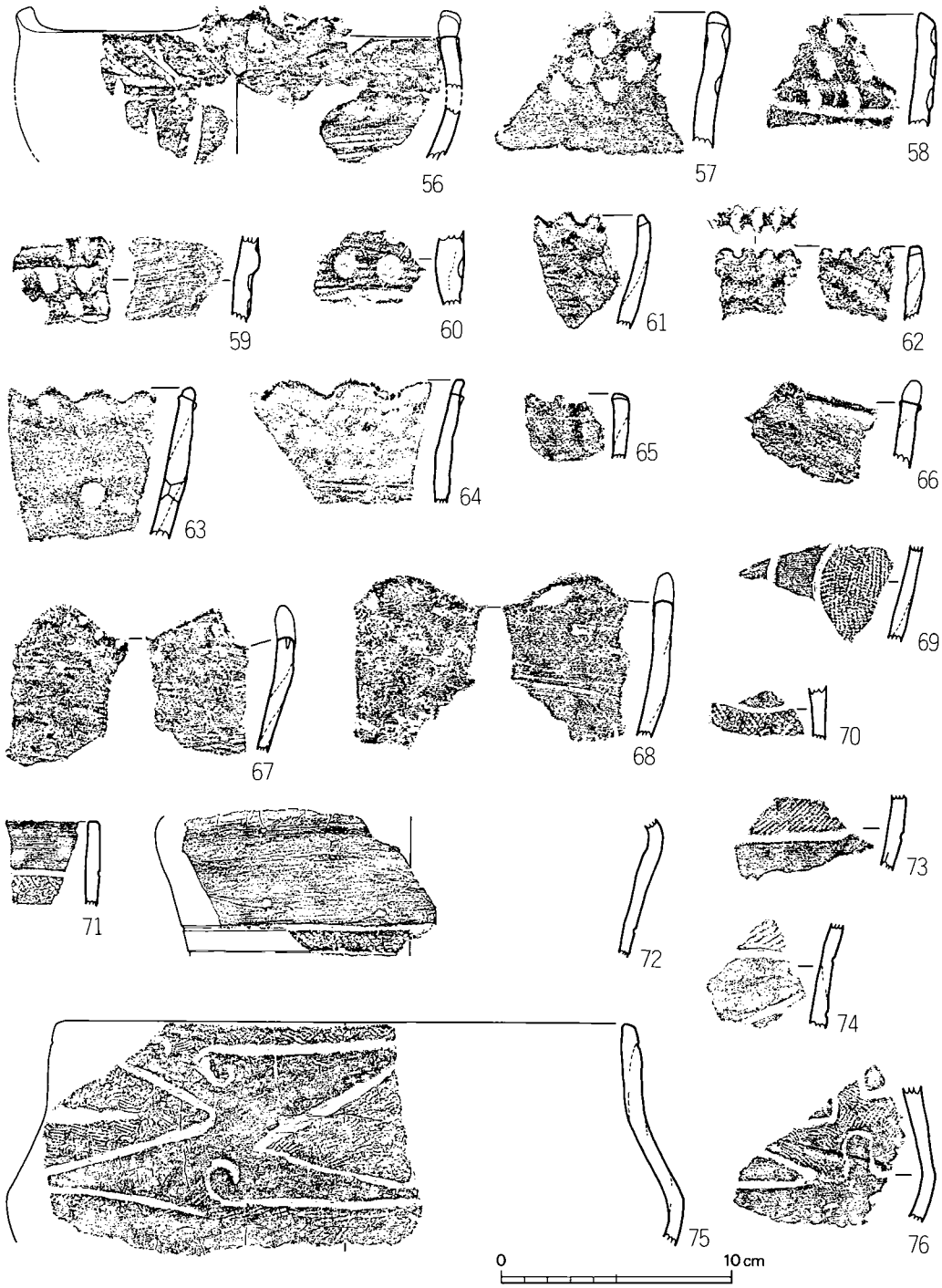
桑原飛櫛貝塚(36)　福岡市西区大字桑原字飛櫛。大原川の左岸で瑞梅寺川河口部水田面最奥部の丘陵裾に占地した貝塚。昭和47年に防火水槽建設の掘削で発見された。地下1～1.8m位に貝層が堆積しており内湾砂泥性貝類が主体を占める(註18)。縄文後期前半頃の土器・石器・貝輪(註33)及び釣針(註39)等が出土している。

縄文土器(第11～14図)　**a**　56～59は胎土に滑石粉末を混入している土器。56は口縁部外面に斜行沈線，胴部に太沈線が描かれ，口縁部上面の突起は4ヶ所になるものと思われる。57は口縁部文様帯に指頭押点が並び，口唇部を指で押えて刻んだ波状にするもの。58～60は凹線で区画された部分に指先押点を連続刺突している。56は坂の下Ⅰ式・57～59は坂の下Ⅱ式(註40)に相当する。なお60は滑石でなく金雲母を多めに混入するが，坂の下Ⅱ式に含めうる。

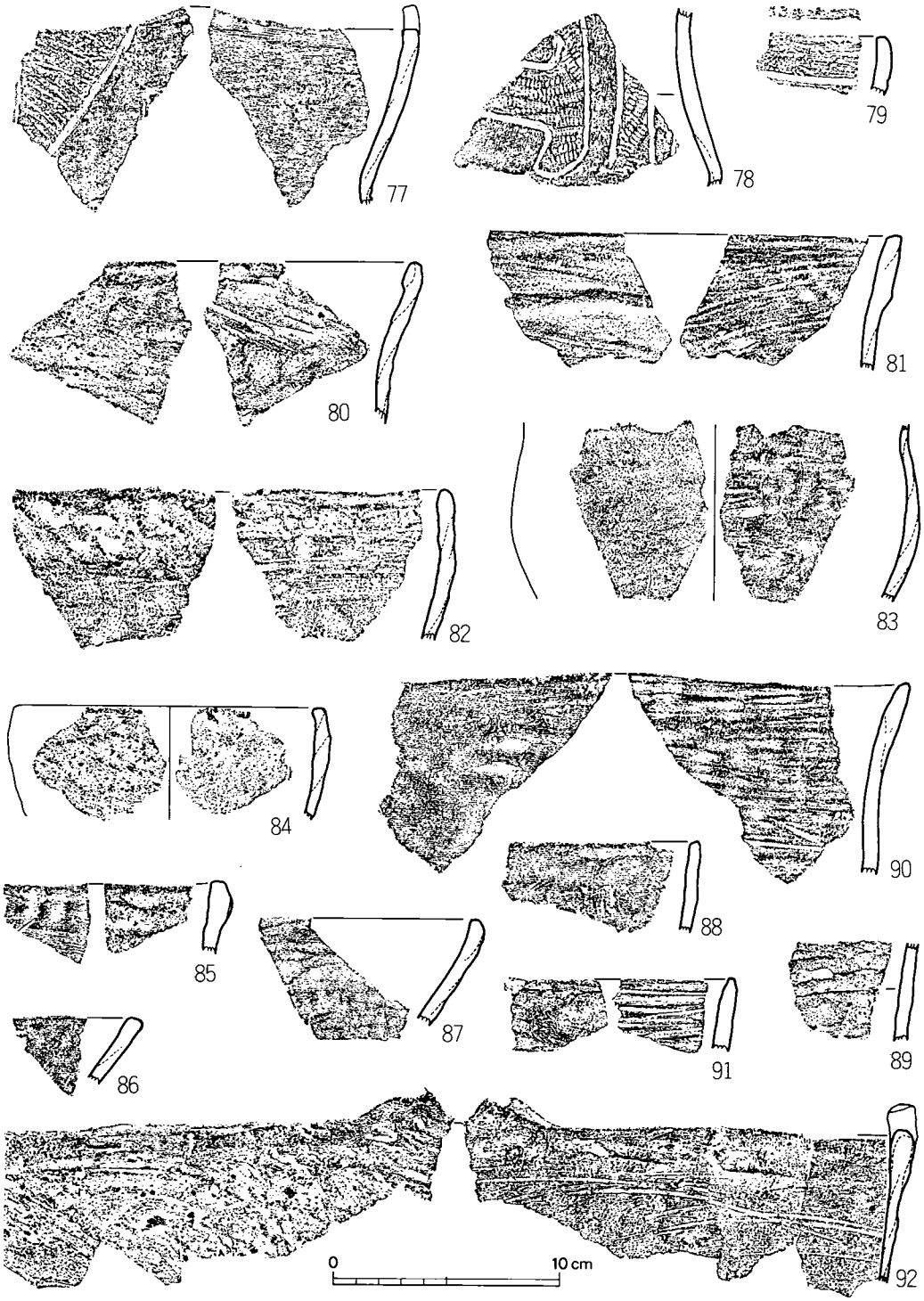
b　61～65は指先で刻んだ波状口縁を有す無文土器の類だが，62は指でなく細い(薄い)材で刻まれている。胎土には金雲母を若干含むが滑石は全く含まない。64の破片下位には巻貝系の条痕がみられる。後期初頭期に属す。

c　66～68は波状口縁の無文土器。66は丁寧に仕上げられており精製土器に含めうるが，おおむねナデあるいは条痕のあとナデ消したような器面になっており，67の口唇部は連続刺突文で飾られる。

d　69～74・107・108は，縄文を施文したもので，平行沈線文で区画して磨消縄文手法をとる。小破片のため断定し難いが，このうち69・70では平行沈線文が曲線を描き磨消部分の狭いのに比して，71・72・107は直線的な平行沈線で縄文の部分の狭い点が注目できる。前者は所謂中津



第 11 図　桑原飛櫛貝塚出土土器(1)拓影 (1/3)



第 12 図　桑原飛櫛貝塚出土土器(2)拓影 (1/3)

式に相当するが，後者はやや後出する要素を有しておりd′として区別しておきたい。

e　75～79は疑似縄文を施文するもので，磨消縄文手法をとっている。このうち75・76は胎土に滑石・白雲母を含み，阿高系土器の器面に似るが，文様構成はむしろ中津式に近い。2点ともアナダラ疑似縄文を用いている。一方77～79は胎土に金雲母を若干含むが光沢を有さないもので，77・79にアナダラ疑似縄文・78にヘナタリ疑似縄文が施文される。77・78は中津式に含めうる。e類では滑石混入の例をe′として区別しておきたい。

f　小破片のものでc類と区別しえないが，波状口縁になっていないナデ仕上げの無文土器を80～89に示した。このうち82は胎土に金雲母を多量に含み外面の口縁部に沿って指先の圧痕が連続してみられる。この土器をf′として区別したい。

g　90・91は外面をナデないしは磨き，内面にヘナタリ条痕を施すもの。89は波状口縁。

h　92～98・110・111は内外面共に条痕が施される粗製土器で，波状口縁になる例（92～95・110），口唇部に刺突文や刻み目を施す例（97・98・111），等がある。アナダラ条痕（94・97・98）・ヘナタリ条痕（95・96・111）・原体不明やカキナデに近い例（92・93・110)に分れる。

i　99～102・109は外面のみ条痕を施したもの。

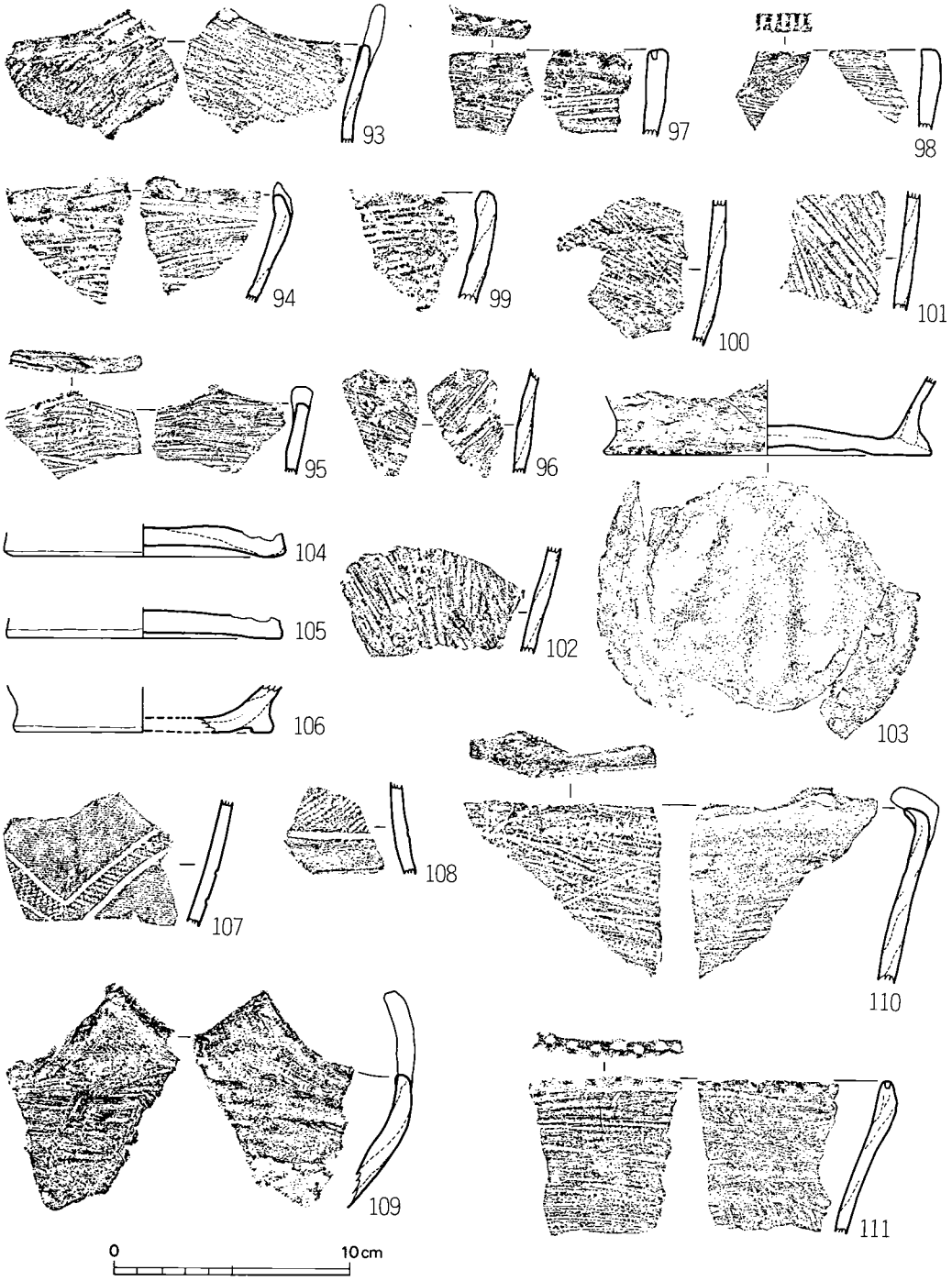
j　103～106に底部を示すが，103～105は円板の周囲を指先でナデて凹ませ胴部との接合面を広くさせており，また底外面はレンズ状に凹む。なお103の底外面には凹凸があり，外面にヘナタリ条痕がみとめられる。106は底部の接合方法が異り外側を補強した形状になる。

これらの土器は，1点坂の下Ⅰ式を含むが阿高式系の坂の下Ⅱ式・瀬戸内系土器の中津式等を主体としていることから後期初頭～前半期に包括されよう。但しd′類・e′類・f′類の存在に注意する必要がある。e′類では，阿高式系に特徴的な滑石を含んだ胎土を用いて中津式的な文様を描いていることから両者の隔合過程にあるものとできる。またf′類は坂の下式Ⅱ式に近い60でも金雲母を代用させているが，阿高式系土器の終末的な要素を有しているようにも思える。d′類は中津式に後出する福田KⅡ式に近いと考えておきたい。粗製土器の胎土には金雲母・角閃石を若干含むが細砂を含むものが多く，気泡の顕著な例はほとんどみられない。

石斧（第14図115・116）　115は頭部を欠失するが，現存長9.1cm・幅3.9cm・厚さ1.4cmの小形磨製石斧で，玄武岩質の石材の打面側と先端部を調整して整形しているが，調整剝離面にはほとんど研磨が及んでいない。116は玄武岩質で胴部のみの破片で幅3.6cm・厚さ1.5cmを有すが刃部側の一部のみ研磨痕がみられる。

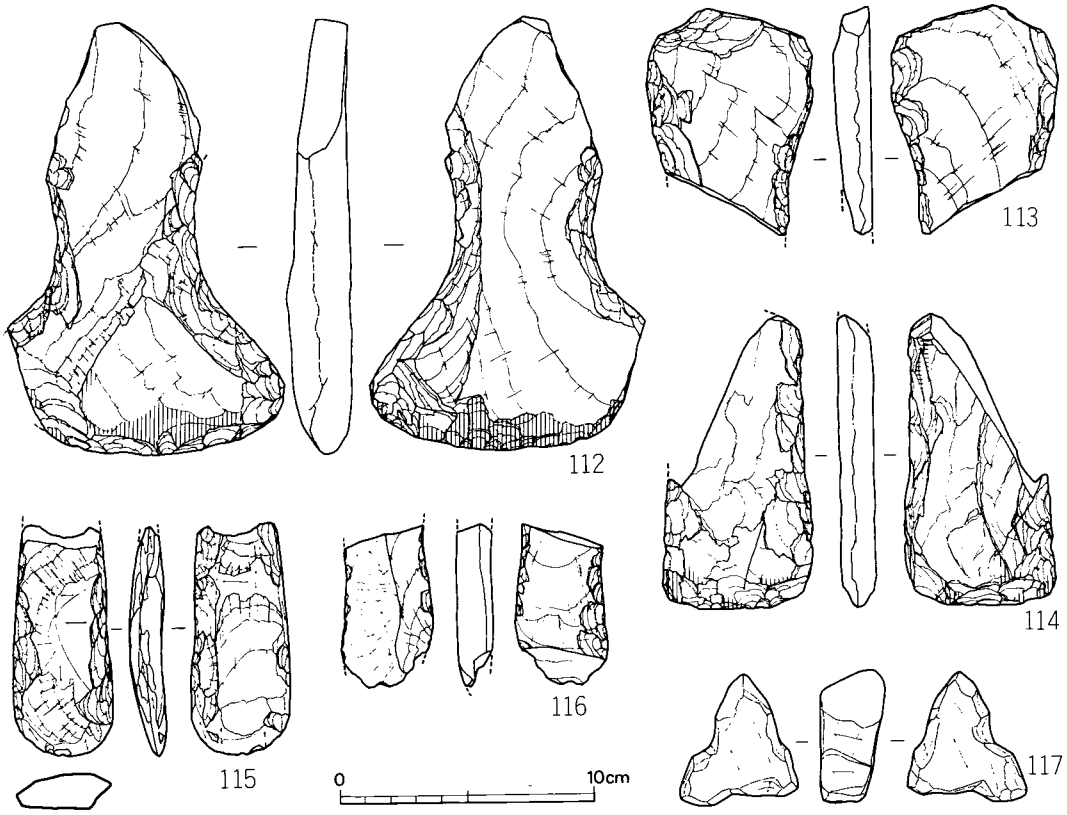
砥石（第14図 117）　やや軟質で細粒の砂岩製で各面を砥面としているが，3ヶ所の突起を造り出した形状になっている。

猪牙製釣針（第15図 118）　結合式釣針の針部で長さ38.5mmの反った体部外側に鈎が付く。外彎する左側面の基部側にエナメル質が残り，他は研磨される。鈎部幅4.1mm・厚さ2.3mm・基部幅5.0mm・厚さ2.1mmで中程の厚さは2.7mmを測る。

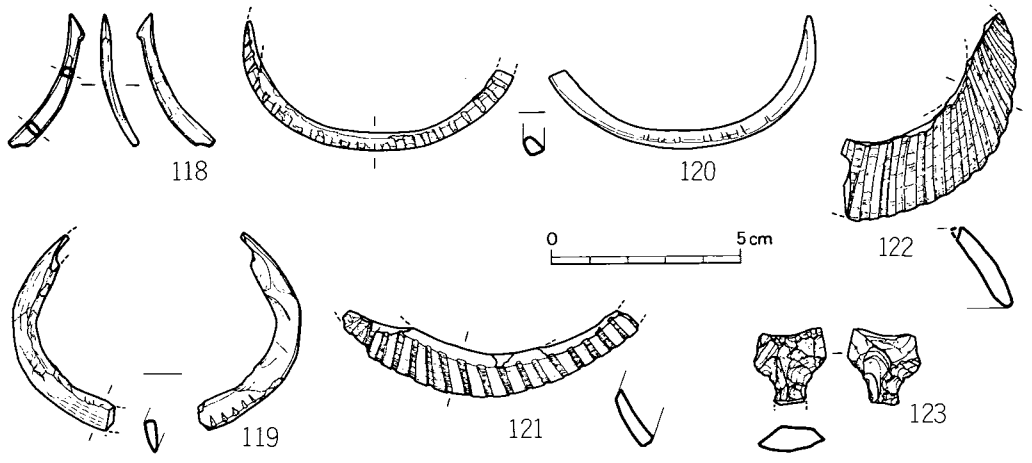


第 13 図　桑原飛櫛貝塚出土土器(3)拓影 (1/3)

貝輪(第15図119～122)　完成品2点と未製品2点だがいずれも欠損している。119はベンケイガイもしくはタマキガイ製，120～122はアカガイもしくはサルボウ製。121は腹縁側が未研磨，



第 14 図　西ノ浦・桑原飛櫛貝塚出土石器実測図（1/3）



第 15 図　桑原飛櫛貝塚・宮ノ浦畑中出土遺物実測図（1/2）

122は殻頂部側に研磨痕がみとめられる。

元岡瓜生貝塚(37)　福岡市西区大字元岡字池の端。瑞梅寺川河口部の低地に面した，石ヶ岳山塊裾部に位置する。大正３年に増築された瓜生溜池の水面位崖面に露呈する厚さ0.5～0.6ｍ程度の貝層は，主に内湾砂泥性貝類によって構成されている(註18)。後期中葉以降土器(註33)・黒曜石縦長剝片等が出土している。

縄文土器(第16～18図)　**a**　124は口縁部が肥厚する縁帯文土器で，外面に縄文・口唇に連続刺突文が施される。彦崎ＫⅠ式に近い。

b　平行沈線を有す土器。125～128は磨消縄文を有す土器で，内126・127は丸味をもった胴部に施文しており，128は頸部の屈折が角をもつ。125は鐘ヶ崎式系，126・127は西平式で，128はやや後出する。

129・130は縄文を有さないが129の口縁は巻貝頂部による刺突・刻み目が付けられる。

131・132は斜行沈線文が伴い，三万田式の特徴を有す。133は西平式的な器形で後出するもの。

c　134～139・153は内外面共ナデ仕上げの無文土器で 134の口縁は波状になる。153の器壁には堅果類種子の混入がみられる。

d　140は，丁寧なナデ調整で仕上げられ，内面に１条の沈線がめぐる。晩期に属そう。

e　147～152は内外面に条痕を有す粗製土器で条痕の原体はヘナタリが大半を占める。147は口径40.5cm・残存器高32cmの深鉢形土器で波状口縁の頂部に逆Ｗ字状の貼付けを有す。北久根山式に含めうる土器。

f　底部，141～146は条痕文の付される例で，141，142は内外面共に二枚貝条痕がみられ，内面をナデられる例のうち145のみ外面にヘナタリ条痕が残る。

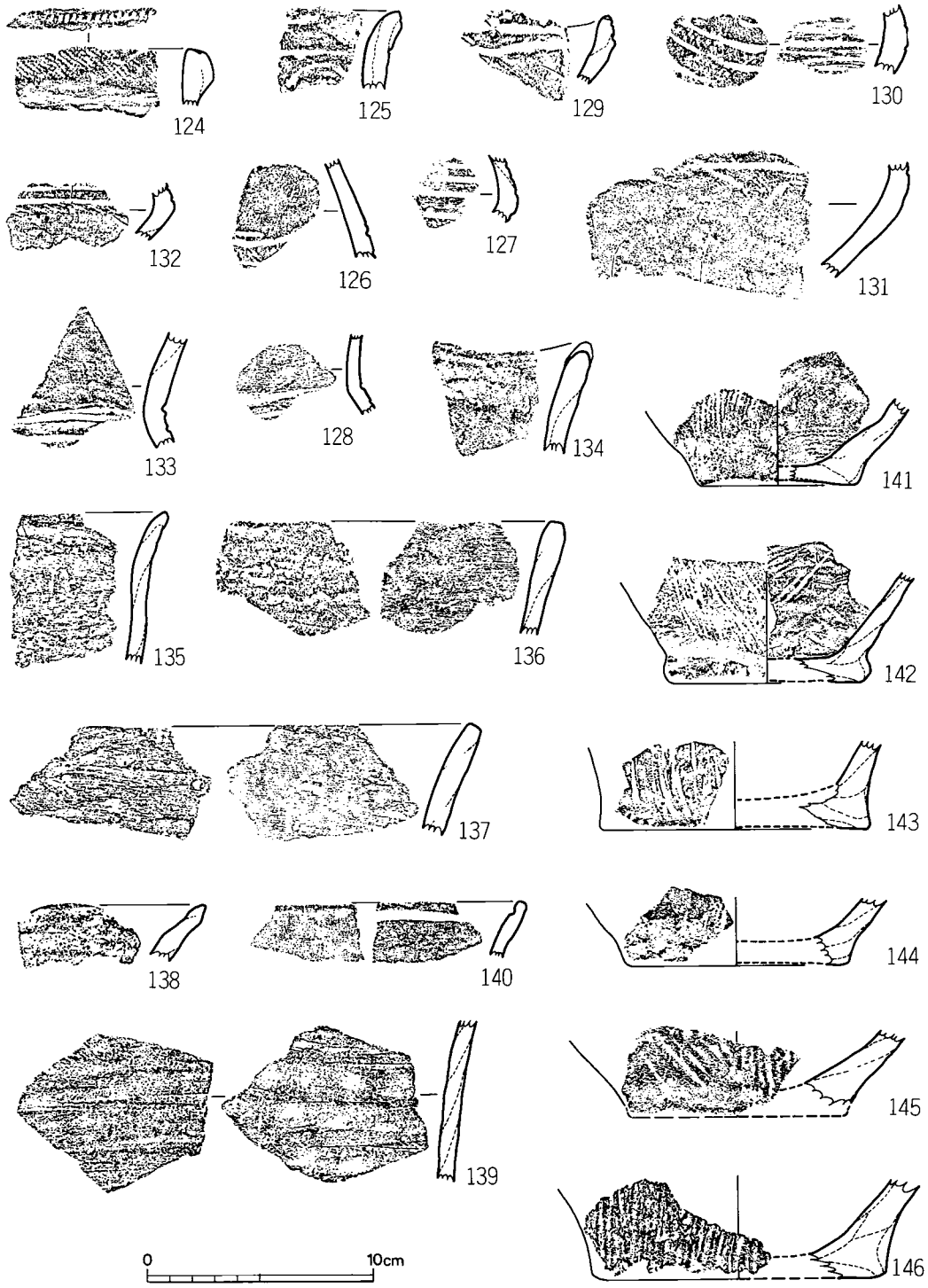
154～159はナデ調整されるもので，158・159は丁寧なナデ仕上げである。また 157は堅果類種子圧痕が底外面につく。

これらの土器は後期前半の土器を若干含むが後期中葉～後半の時期が与えられる。粗製土器の胎土には砂粒を含むものが多く，金雲母・角閃石粒を若干含んでいる。なお稀に貝殻片・植物質の混和材を加えているために気泡を生じている例がある。

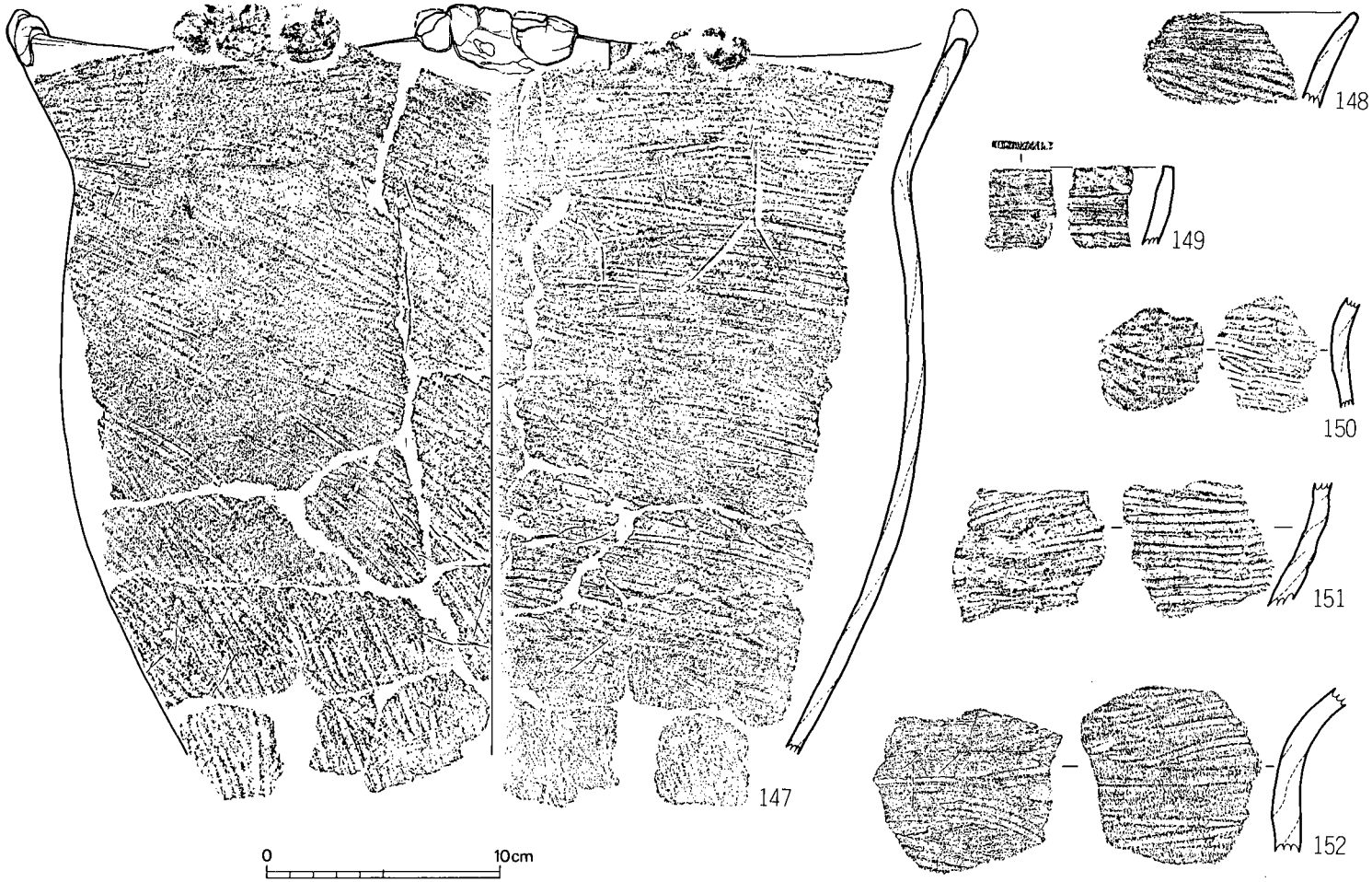
今津長浜貝塚(38)　福岡市西区大字今津字長浜。長浜海岸に沿った砂丘上の標高５ｍ位に立地する。内湾砂泥性貝類を主体とし若干岩礁性貝類を含む小貝塚群よりなる(註18)。夜臼式土器・板付Ⅰ式土器・太形蛤刃石斧・石庖丁・石錘・貝輪未製品等が出土している(註41)。

野の花学園内遺跡(39)　福岡市西区大字今津字緑町。毘沙門山西裾に続く砂丘上に立地し，今津長浜貝塚の東方約１kmに位置する。敷地内の東部で合せ口の甕棺墓が検出され，上甕は夜臼式の黒色磨研鉢形土器だという(註８)。

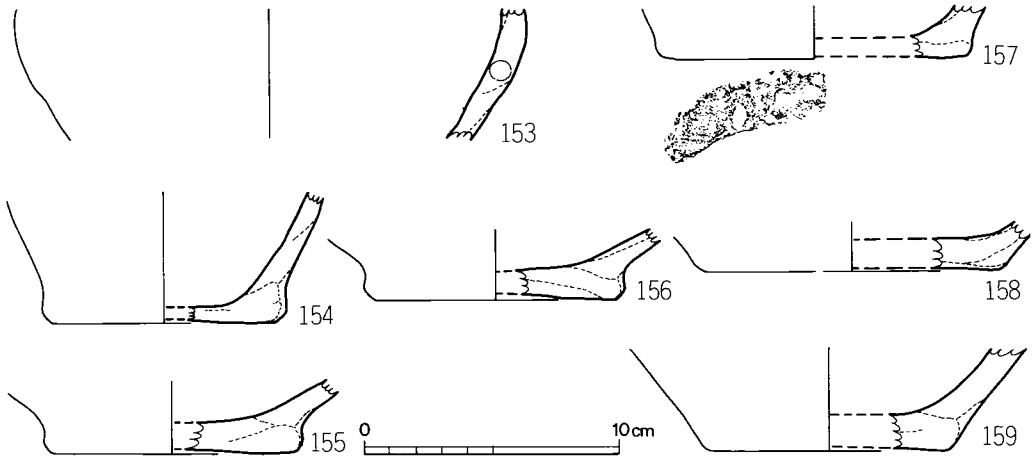
千里シビナ遺跡(40)　福岡市西区大字千里字シビナ。瑞梅寺川東側の水田面標高11ｍ位に立地する。後期後半～晩期・夜臼式期の遺構遺物が検出され，埋甕もみられた(註23)。



第 16 図　瓜生貝塚出土土器(1)拓影 (1/3)



第 17 図 瓜 生 貝 塚 出 土 土 器 (2) 拓 影 (1/3)



第 18 図　瓜生貝塚出土土器(3)実測図 (1/3)

飯氏(いいし)ゾウサ遺跡(41)　福岡市西区大字飯氏字ゾウサ。千里シビナ遺跡の北東方 300m・標高11mに位置する。自然流路状の落ち込みから夜臼式土器が出土したという(註24)。

飯氏鏡原(いいしかがみはら)遺跡(42)　福岡市西区大字飯氏字鏡原。高祖山塊東北麓に派生する丘陵西斜面標高17m位に，縄文後晩期土器を含む土壙状遺構・楕円押型文土器等が発見されている(註14)。

若八幡宮(わかはちまんぐう)遺跡(43)　福岡市西区大字徳永字下引地。高祖山塊北麓に派生する丘陵上に占地する若八幡宮古墳の前方部西側墳丘覆土から楕円押型文土器が出土している(註15)。

この他，福岡市地名表には追加として福岡市西区大字今宿字大原に縄文後期土器，石鏃をあげているが地点等詳細は確認しえなかった。

第3節　福岡県の縄文時代埋甕

福岡県下における縄文時代埋甕・甕棺墓については，既に前川威洋氏によってまとめられ，6遺跡8例が知られていた(註42)が，その後類例の増加したものとしては，

1　北九州市小倉南区吉田，下吉田遺跡。1基。内外面共に二枚貝条痕の施される粗製深鉢を直立に据えた埋甕。口縁部から底部まであり，打欠きはみられない。後期中葉古段階の住居跡南7mに位置しており，同時期とみられている(註43)。

2　鞍手郡若宮町沼口，都地遺跡。1基。長方形プランの土壙に，底部を上にして約70°の傾斜で粗製深鉢があり，別に胴下半を欠失する粗製深鉢・精製浅鉢が土壙埋土の下位にあることから墓の可能性を指摘されている。後期末頃(註44)。

3　福岡市西区四箇，四箇遺跡。1基。内外面共条痕が施される後期中葉の粗製深鉢を直立に

据えている。底部は打欠れている(註45)。

4　福岡市西区千里,千里シビナ遺跡。1基。胴下半を打欠いた粗製深鉢を直立に据えている。上部を削平されているが後期末頃であろう(註23)。

5　糸島郡前原町三雲，三雲遺跡群石橋・サキゾノ地区。2基。1基は胴下半，他方は底部を打欠いた粗製深鉢を直立に据えている。後期中葉～後半。本書第3章第4節に報告。

6　糸島郡二丈町吉井，吉井広田遺跡。1基。底面を打欠いた粗製深鉢をほとんど直立とも言える5°の傾きで埋置。上部を削平されているが後期末～晩期前半(註22)。

の6遺跡7例があり，合計15例になる(表1)。これらの例では幾つかのグループに区分することができよう。

第1類　粗製土器を使用しており，主に深鉢形土器を正位に直立させている。打欠きの部位によって更に細分できる。単独使用。

a　意識的な打欠きをしないもの。下吉田例のみ。後期中葉古段階。

b　底部を打ち欠くもの。四箇・三雲2号。後期中葉。

c　胴下部を打ち欠くもの。三雲1号・千里シビナ例。後期後半～末。

d　底面を打ち欠くもの。吉井広田例。後期末～晩期前半。

第2類　精製土器を使用しており，主に深鉢形土器を正位に直立させるが，傾斜する例もある。1類同様に区分し，傾斜例に′を付す。

a′　浄土院1号・浄土院2号。1号では人骨を伴うため埋葬遺構と考えうる。後期中葉。

d　底面を穿孔した例は，底面打欠きより後出要素とすることもできるが一応含めた。坂田1号例があり，後期末。

e　口縁部打欠きの例。口縁部の打欠きを意識的と判断し難い面もある。口縁を打欠く要因としては蓋との法量に関り，合せ甕の系列で考えなければならないだろう。後期末の坂田2号例を一応この類に入れておこう。

第3類　粗製土器を用いた合せ甕。都地の例は近いが，完形粗製深鉢＋胴下半欠失粗製深鉢＋底面穿孔？精製浅鉢という合せ甕になる。また合せ甕が法量の増加を示すものであれば，むしろ完形深鉢が下位で浅鉢は蓋となるのが考え易く逆位になる点と，長方形土壙内の土器出土状況が土壙の一方に片寄ることを考慮に入れば，疑問のある遺構である。

第4類　精製土器を用いた合せ甕。馬田上原・志登・石ヶ崎例共に鉢＋壺のセットとなっており，60°前後の傾斜を有す。即ち分類項としては4a′類ということになる。晩期末。

このグループ単位での変遷に目を移せば，後期中葉には精製深鉢，粗製深鉢共意識的に打欠かれないものと底部のみを打欠くものがあり,底部の打欠きは次の段階に胴下半打欠きとなる。ところが後期末の御領期あたりでは打欠きの程度が減少し，底面の穿孔へと変化していくようである。但しこのような状況は深鉢を単独で直立ないしはそれほど傾かない埋置状態の例に限

表1　福岡県下の縄文時代埋甕・甕棺一覧表

	時　期	埋　置　状　態			使用土器	備　考
下　吉　田	後期中(古)	直立	単	打欠なし	粗製深鉢	
浄土院1号	後　期　中	30°	単	打欠なし	精製深鉢	人骨
浄土院2号	後　期　中	30°?	単	打欠なし	精製深鉢	
四　　箇	後　期　中	直立	単	底部打欠	粗製深鉢	
三雲2号	後　期　中	直立	単	底部打欠	粗製深鉢	
三雲1号	後　期　後	直立	単	胴下部打欠	粗製深鉢	
千里シビナ	後　期　末	直立	単	胴下部打欠	粗製深鉢	
吉井広田	後　期　末	5°	単	底面打欠	粗製深鉢	
都　　地	後　期　末	70°	合せ?	なし・胴下部・底面打欠	粗深鉢2・精浅鉢	長方形土壙
坂田1号	後　期　末	直立	単	底面穿孔	精製深鉢	
坂田2号	後　期　末	直立	単	口縁部一部打欠	精製深鉢	
馬田上原	晩　期　末	55°	覆　口	打欠なし・打欠なし	精鉢・丹塗壺	
志　登(8号)	晩　期　末	64°	接　口	口縁打欠・口縁打欠	精鉢・丹塗壺	
石ヶ崎(6号)	晩　期　末	60°	接　口	打欠なし・打欠なし	鉢・壺	
五　　久	晩　期　末	?	接口?	?	?・?	

られるのであって，合せ甕の形態をとる例では趣が異る。

合せ甕形態は，長崎県島原半島地域を中心として，既に後期中葉頃に直立に据えられる例等がある(註46)。一方福岡県下では傾斜して据えられる例が晩期末に集中し，使用土器は深鉢形土器から壺形土器と鉢のセットに変化する。また底部の打欠きもみられない。

糸島地方の埋甕では，粗製深鉢直立埋置の系譜を辿ることができ，東日本的な文化要素の受容と理解しうるが，晩期末の合せ甕は弥生期墓地群の最古段階としてありむしろ弥生時代といった要素に変貌している。晩期前半頃と思われる直立埋置合せ甕で下甕胴下半を打ち欠く例は，背振山塊の反対側になる佐賀市大門西遺跡にあるが，糸島地方には目下のところみられない。第1類c段階が島原半島系の合せ甕と融合したものと考えておきたい。

晩期中葉頃の例を確認しえない現況では，この時期を生活環境の変貌期と断定し難いが，埋甕の形態の急変が晩期末に存在することからみて，晩期末以前の段階で生活環境に変化を生じている可能性がある。

なお福岡市板付遺跡の夜臼式土器の細分によって弥生文化成立期が整理された(註47)が，該期遺跡共伴遺物等からみて既に夜臼I式の段階を弥生期とすることもできる。しかし大陸文化の波及期である該期の状況は各遺跡間でも跛行的であったと考えるべきであり，この章では一応従来の夜臼式土器をまとめて縄文時代として扱った。　　(小池)

註1　和島誠一「山陰から北九州へ――考古学者の旅―2」(『歴史評論』30，1951，東京)
　なお既に大正5年中山平次郎氏が長浜貝塚採集土器を「所謂貝塚土器最之に近きを覚ゆ」と発表されたことも注目すべきであり，学史的にみてこれを初出とすることもできよう。
中山平次郎「筑前国糸島郡今津の貝塚」(『考古学雑誌』第6巻6号，1916，東京)

註2　原田大六「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」(『考古学雑誌』第38巻4号，1952，東京)

註3　鏡山猛他「志登支石墓群」(『埋蔵文化財発掘調査報告』第4，文化財保護委員会，1956)

註4　鏡山猛「原始箱式棺の姿相（二・完)」(『史淵』第27輯，1935，福岡)

註5　松岡史「佐賀・福岡県の支石墓」(『考古学ジャーナル』161，1979，東京)

註6　原田大六「福岡県糸島郡平原弥生古墳調査概報」(『福岡県文化財調査報告書』第33集，1965)

註7　調査に参加された柳田康雄氏の御教示による。横型で丁寧に調整された小形完形品。調査中に盗難に遇い行方不明という。

註8　下條信行「貴重な志摩半島の自然と古代遺跡」(『ふるさとの自然と歴史』31，1973，福岡)

註9　大神邦博「糸島郡地方の縄文遺跡1，御床松原遺跡」(『伊都』創刊号，1969，前原)

註10　大神邦博「糸島郡地方の縄文遺跡2，天神山貝塚」(『伊都』第2号，1969，前原)

註11　大神邦博「糸島郡地方の縄文遺跡3，長野宇美神社境内遺跡」(『伊都』第3号，1970，前原)

註12　大神邦博「糸島郡地方の縄文遺跡4，桜井遺跡」(『伊都』第3号，1970，前原)

註13　大神邦博「糸島郡地方の縄文遺跡5，郡内出土の石匙」(『伊都』第3号，1970，前原)

註14　浜田信也「飯氏鏡原遺跡の調査」(『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集，1971，福岡県教育委員会)

註15　柳田康雄・副島邦弘「若八幡宮古墳の調査」(『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集，1971，福岡県教育委員会)

註16　島津義昭・木村幾多郎編「芥屋所在の貝塚踏査録」(『九州始原文化研究会報別冊』1，1972，福岡)

註17　前川威洋・木村幾多郎「天神山貝塚」(『志摩町文化財調査報告書』第1集，1974)

註18　山崎純男「九州地方における貝塚研究の諸問題」(『九州考古学の諸問題』1975)

註19　山崎純男「福岡県志摩半島の貝塚について」(『福岡考古懇話会会報』1，1975，福岡)
山崎純男「縄文時代遺跡の地域的検討」(『熊本史学』46，1975，熊本)

註20　柳田康雄編「三雲遺跡」I(『福岡県文化財調査報告書』第58集，1980)

註21　馬田弘稔「竹戸遺跡」(『二丈浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』1980，福岡県教育委員会)

註22　小池史哲「広田遺跡0区の調査」(『二丈浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』1980，福岡県教育委員会)

註23　塩屋勝利・渡辺和子「千里シビナ遺跡発掘調査概報」(『福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書』第60集，1980)

註24　調査内容については福岡市教育委員会塩屋勝利氏に御教示をえた。

註25　調査内容については福岡県教育委員会橋口達也・中間研志氏に御教示をえた。

註26　「糸島高等学校郷土博物館案内」（1959，福岡県立糸島高等学校）以下「糸高目録」と略す。

註27　「福岡市文化財遺跡地名表」第1集，（1969，福岡市埋蔵文化財調査委員会）以下「福岡市地名表」と略す。

註28　原田大六監修「志摩町文化財地名表」(1975, 志摩町教育委員会）以下「志摩町地名表」と略す。

註29　原田大六監修「二丈町文化財地名表」(1974, 二丈町教育委員会）以下「二丈町地名表」と略す。

註30　原田大六監修「前原町文化財地名表」(1974, 前原町教育委員会）以下「前原町地名表」と略す。なお添付地図には11ヶ所に縄文期遺跡の印が記されている。

註31　「福岡県遺跡等分布地図（糸島郡篇）」（1981，福岡県教育委員会）

註32　「前原町立伊都国資料館展示品図録」（1980，前原町教育委員会）

註33　福岡市立歴史資料館所蔵資料等は，福岡市教育委員会及び資料館学芸員後藤直氏の御好意により実測図を作成した。

註34　新開誉之氏表採資料。氏の御好意により実測図を作成した。

註35　昭和55年3月に福岡県文化財保護指導委員松吉俊実氏が，遺物発見者小島雄典氏の東道で遺跡を確認され，遺物は伊都国資料館に寄託された。筆者は同年12月に遺跡分布範囲を確認するため現地を踏査し，縄文土器片・黒曜石片等の他須恵器片を採集した。

なお松吉俊実氏，前原町教育委員会川村博氏の御好意により，遺物の実測図を作成した。

註36　中原志外顕氏の談によれば，半磨製石斧かポイント状石器が発見されたと故大神邦博氏から聞知したというが未確認。

註37　「玄海島史資料調査概報」（『福岡市立歴史資料館図録』第5集，1979）

註38　中原志外顕氏採集資料。氏の御好意により実測図を作成した。

註39　九州大学蔵。九州大学文学部考古学研究室の御好意により実測図を作成した。

註40　田中良之「中期・阿高式系土器の研究」（『古文化談叢』第6集，1979，北九州）

註41　柳田純孝編「今津の歴史」（『今津・今津小学校創立百周年記念誌』1975）

註42　前川威洋「九州地方における縄文のカメ棺－福岡県の縄文時代カメ棺」（『考古学論叢』2，1974，別府）

註43　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室柴尾俊介氏・梅崎恵司氏の御教示による。

註44　児玉真一編「若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告」第2集(1980　福岡県教育委員会）

註45　福岡市教育委員会二宮忠司氏の御教示による。

註46　古田正隆「筏遺跡」（『百人委員会埋蔵文化財報告』第4集，1975）

註47　山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究」（『鏡山猛先生古稀記念古文化論改』1980，福岡）

第３章　三雲遺跡の遺構と遺物

第１節　仲田地区の調査

１　はじめに

仲田地区は、第１次（昭和49年度）調査でⅢ－４地区に試掘トレンチ，第３次(昭和51年度）調査でⅠ－16地区，第４次（昭和52年度）調査で，Ⅰ－６，Ⅰ－13・14地区を調査した。第１次調査のⅢ－４地区の試掘トレンチ調査の結果は、『三雲遺跡』Ⅰにて報告した。第３次調査のⅠ－16は、圃場整備計画で北側半分を地下げる予定になっていたために、工事着工の前年度に発掘調査したものである。調査では、大量の遺物と住居跡群が発見され、遺物の中にもファイアンスを始め、多くの玉類や鉄器が含まれていたために、土地改良区と協議の結果、この地区の設計変更がなされ、遺構は保存されることとなった。

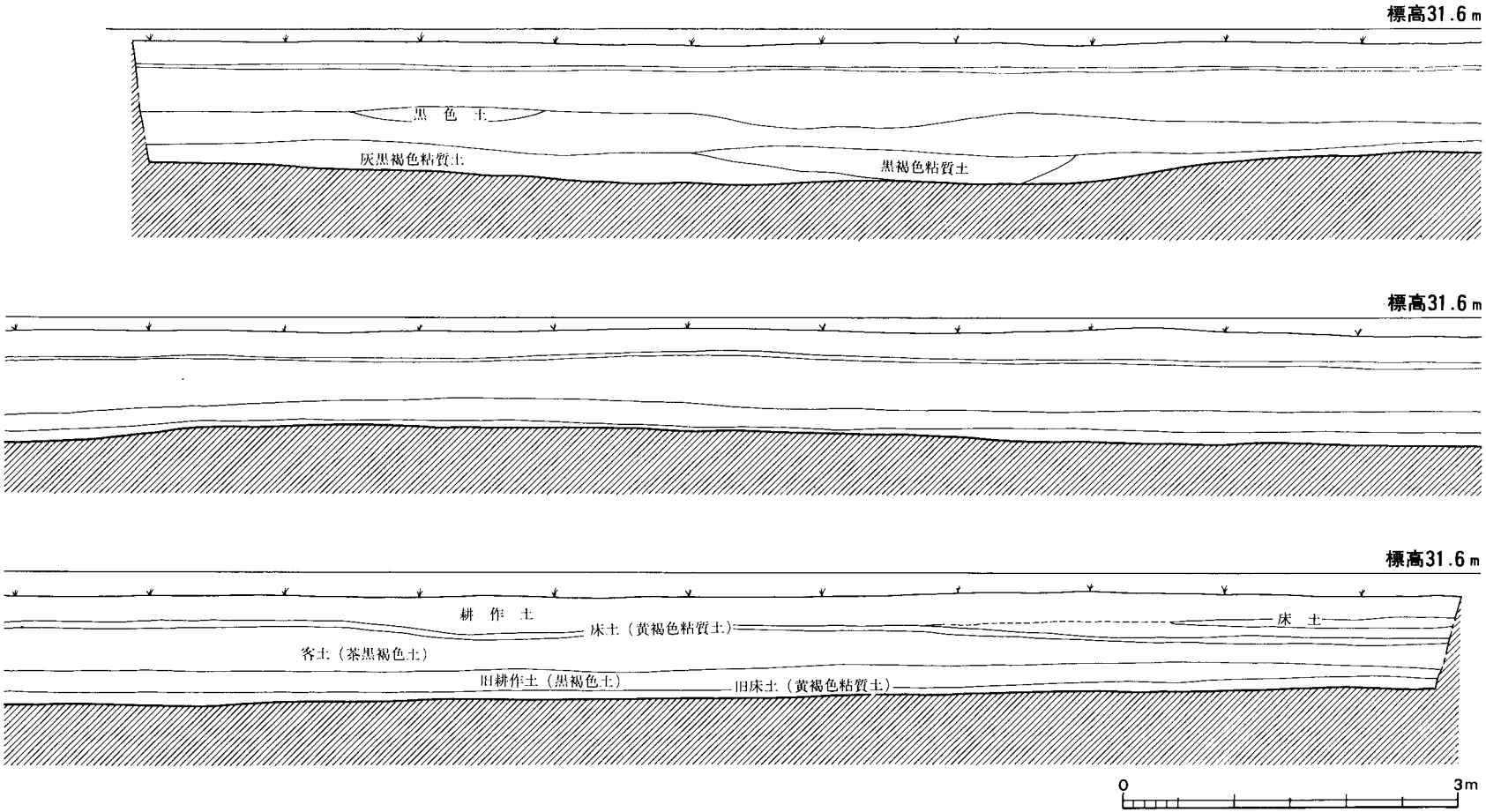
Ⅰ－13と14の境界には、土地所有者によると石棺が存在することが判明していたが、昭和52年度の工事業者の不用意な表土剝ぎによって、石棺のみならず甕棺群も一部削平され露出する結果となった。この地区は削平する計画ではなかったが、一部破壊され露出した甕棺と石棺を調査することとなった。

Ⅰ－６は、郡の後地区と仲田地区の境界に東西に通じる６ｍ道路を新設するために、トレンチ調査を行ったものである。

Ⅰ－６・16地区の調査は、柳田康雄が担当し、小田雅文・丸山康晴・川村博が参加した。Ⅰ－14は、柳田の外に馬田弘稔・池辺元明が担当し、高田一弘・小林義彦・赤川正秀が参加した。

２　Ⅰ－６のトレンチ

この調査は、郡の後と加賀石の境界に現存する３ｍ道路を６ｍに拡幅し、さらに仲田・深町・流田に延長して，瑞梅寺川に架橋しようとする計画があるために予備調査したものである。この地区には、坪掘りによって遺構面（地山面）までの試掘がしてあったが，これによると遺構面までは深い結果が出ていたので，最初から幅 1.5m，長さ38ｍのトレンチをユンボによって掘ることになった。トレンチ調査の結果第19図土層図のように，トレンチ全体にわたって現耕作土と床土の下に整地層があり，近世に客土され，その下に旧耕作土と旧床土が確認された。しかし，トレンチの東側半分には，客土の下に耕作土と床土がなく，わずかな谷間となってい



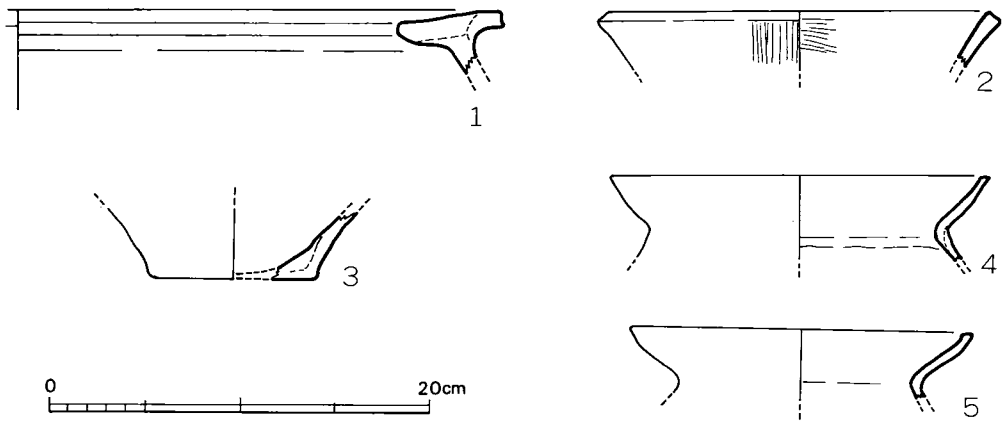
第 19 図　仲田Ⅰ－6　ト　レ　ン　チ　土　層　図（1/60）

る。この谷間には、下層に灰黒褐色と黒褐色の粘質土があり，湿潤である。この層には弥生中期・後期の少量の土器が含まれ，近世のものを含まないので，弥生期には湿地あるいは水田の可能性がある。この層の最上部では，小片ながら布留式土器の一括片があり，層位関係からも加賀石Ⅰ－1西端の布留式土器出土住居跡らしきものに続く可能性あり。加賀石Ⅰ－1では床面が平坦で鉄鏃の完形品など出土したために，住居跡らしきものとして報告したが，仲田Ⅰ－6の谷間に続くものであるかもしれない。仲田Ⅰ－6の北側は，現在でも深田といわれ，水が乾かぬところである。現在はⅠ－6に客土をして，郡の後地区と比高差があるが，当初は湿田であったものを，甕棺墓や住居跡群のあるⅠ－13・14あたりを削平して土を運んだものであろう。第3図の水田区画の乱れによっても，その旧状が推定できるであろう。トレンチの西半分には，地山に少数のピットが確認されたが，時期や性格は不明。東側のわずかな谷間も，郡の後Ⅲ地区では幅が広くなるので，トレンチにかかった部分は，谷頭部分に当るものであろう。

土　器(第20図)　1は，口径51.2cmの大型甕に属するもので，内径に大きく突出し，外側の突出より肉厚く目立っている。口縁と胴部の傾斜から，口縁下には凸帯を付けず胴張りのある中期中頃の甕棺専用の甕である。2は口縁内外面に粗いハケ目を残した後期の甕の口縁部である，3は中期の壺の底部であるが，表面の荒れが著しい。

4・5は土師器甕の口縁部で，4は口径20cm，5は18cmの大きさである。典型的な布留式土器といえるであろう。　(柳田)

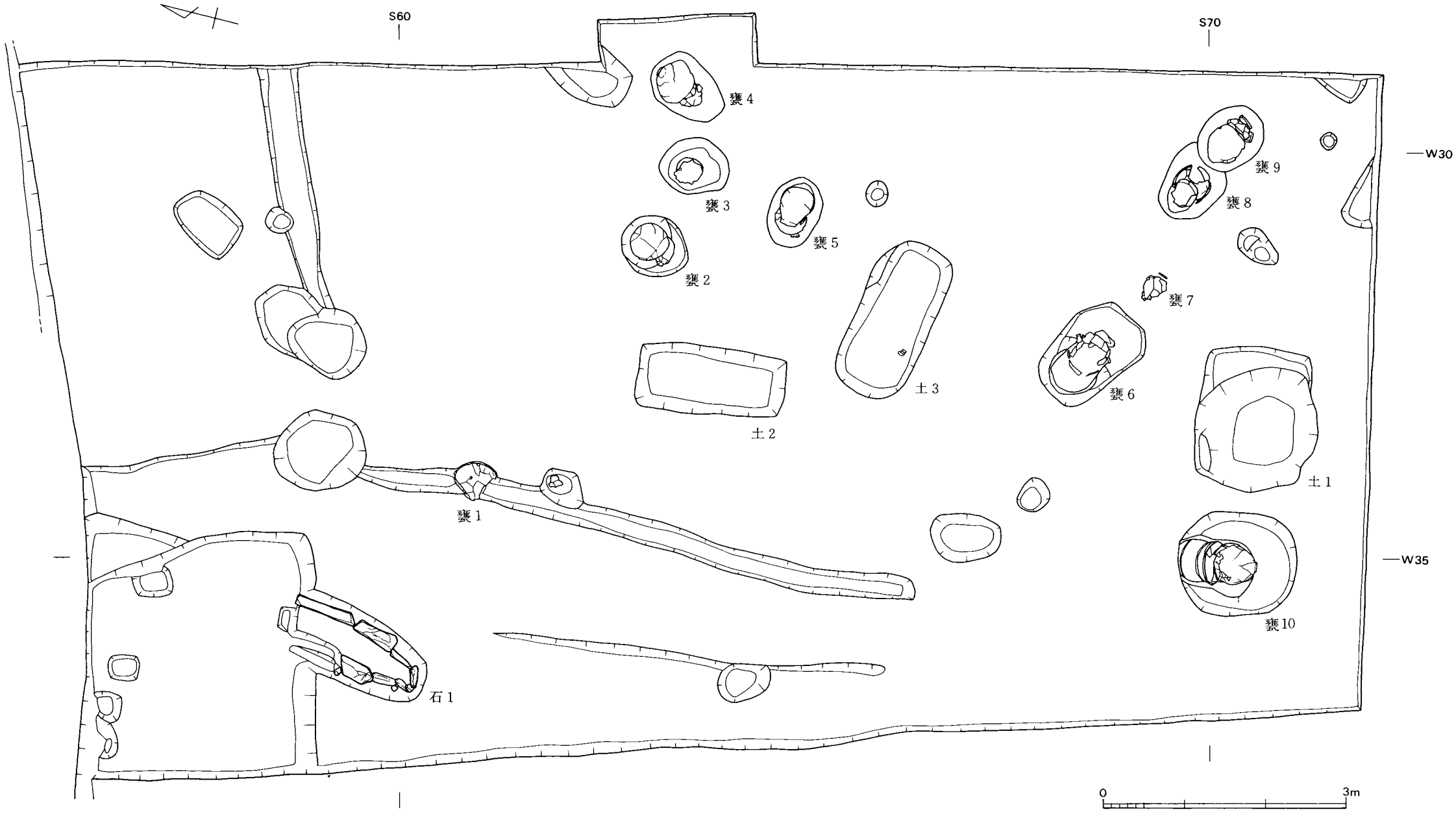
3　Ⅰ-14の調査



第 20 図　仲田Ⅰ－6トレンチ出土土器実測図(1/4)

3　Ⅰ－14の調査(図版8，第21図)

仲田Ⅰ－14からは，甕棺墓10基・土壙基2基・石棺墓1基の他に，井戸として使用された事も考えられる土壙を含めて，他に若干の小ピットが検出された。出土遺物としては，これらの



第 21 図　仲田Ⅰ－14　遺　構　配　置　図（1/60）

墓壙内から縄文時代後期～晩期の土器片と共にガラス小玉があるが，明確に遺構に伴うものとは考えられない。

(1) 甕棺墓・土壙墓・石棺墓

甕棺墓は古墳時代の１基を除いて，いずれも前期であるが，３号土壙墓からも羽状文の前期の小壺片を出土している。石棺墓は攪乱をうけ，共伴遺物はなかった。

甕棺墓

水田耕作土の床土の除去すると，すぐに甕棺墓が検出された。１号甕棺墓から以西は，以前は一段下位の水田であったために，削平が著しく，石棺墓の蓋石も除去されているほどである。しかし，これより以東での上甕の遺存度も悪く，３号甕棺墓に至っては下甕の一部が残っているだけであるので，同様に削平をうけている。

甕棺墓の出土状態と，各甕棺の製作技法を前に説明し，その時期的特徴はまとめて後述する。

１号甕棺墓(図版４－１，第22図)

主軸にほぼ一致する南北方向の水田境界溝による大きな攪乱をうけ，上甕は遺存しなかった。

下甕　器内面は，胴最大径部よりもやや上位までは指による横方向のナデ，以下下半部まではヘラ様の横方向のナデ。底部との屈折部は指先による縦方向のナデ，底部は同様に押えてナデ。器外面は，胴最大径部よりもやや上位までは横方向に丁寧に，中部まではやや斜方向に，下位では斜方向に雑にヘラ研きを施し，一部に多くのハケ目を残す。最下位から底部では砂粒の移動が著しいが，丁寧に横方向にヘラでナデ擦っている。復原状態は，図示の⅓ほどしかなく，反転図である。(図版11－１，第25図)

２号甕棺墓(図版４－２，第22図)

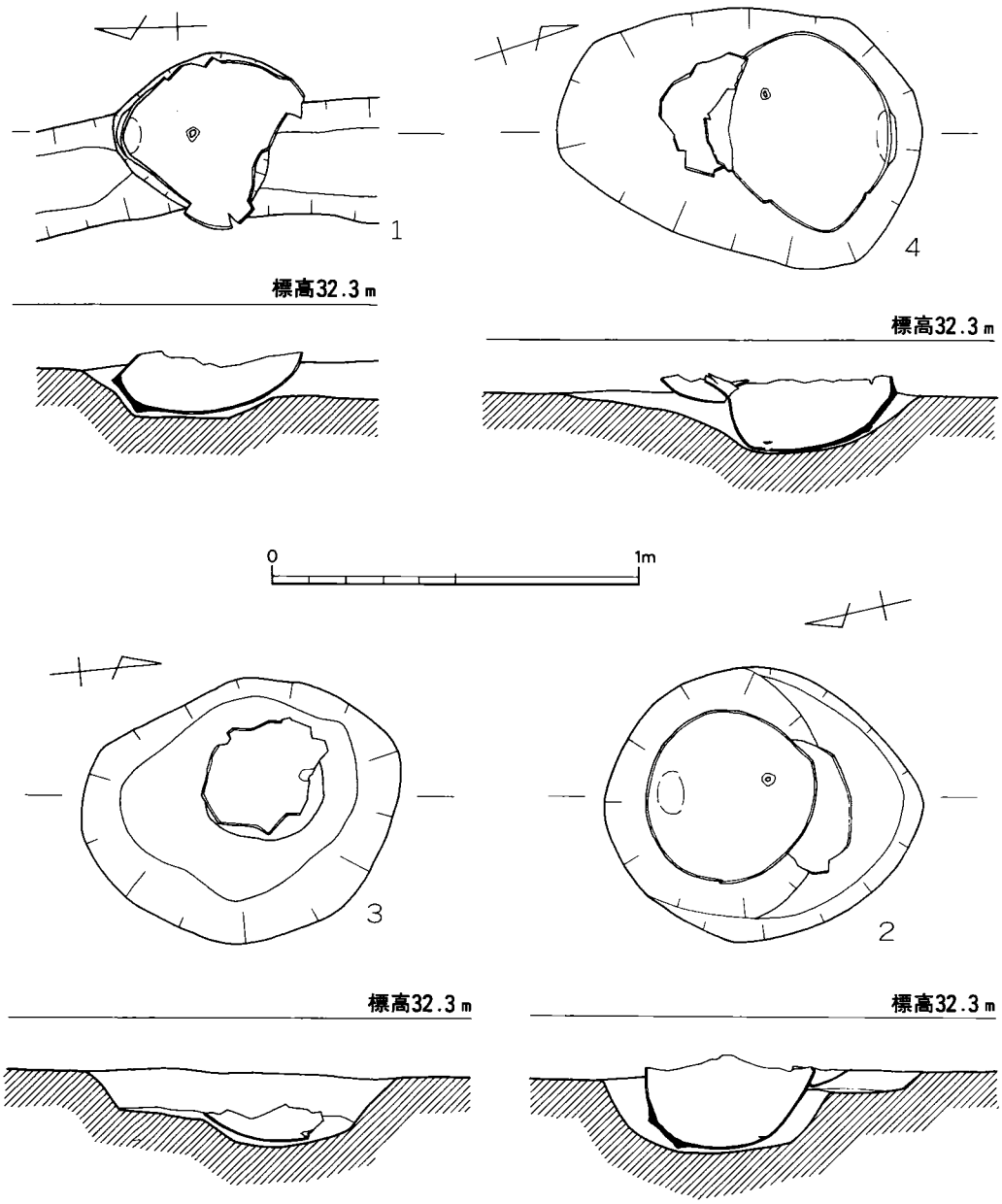
上甕の掘り方の床面は，ほぼ平坦である。

上甕　器内面は，磨滅が著しくて不明。器外面は，丁寧な横方向のヘラ研き。復原状態は，図示の¼ほどしかなく，反転図である。

下甕　器内面は，打ち欠き部から胴部にかけてヘラ様の丁寧な横方向ナデ。中部から下位にかけては丁寧なナデ。底部は指による強いナデ。器外面は，打ち欠き部から沈線の上位まで丁寧にヘラ様の横方向ナデ，沈線下から下位にかけては幅広(0.9cm～1.2cm) の横方向ヘラ研き，底部近くは器重で若干ひずむ。底部は一定方向にヘラ研き同様にナデる。復原状態は，図示の⅔ほどまでで，反転図である。(図版11－２，第25図)

３号甕棺墓(図版４－３，第22図)

攪乱が著しく，下甕の胴部片のみが原位置で検出されたが，他の下甕破片と共に，別個体の破片が出土した。胴部の打ち欠き部片で，胎土・焼成・色調が下甕に共通しているので，一応



第 22 図　1～4号甕棺墓実測図（1/20）

上甕が攪乱されたものと考えた。

上甕　器内面は，打ち欠き部では指で押え成形後に雑な横方向ナデ。胴部は丁寧なナデ。器外面は，横方向に丁寧なヘラ研きを施す。なお，沈線部の破片（6×15cm）があり，打ち欠き部位が大略この沈線直下であることが判るが，この沈線はヘラ研き前のもので，一部に研きに

よって消えかかっているのが認められる。復原状態は，反転してやっと図示できるほどである。

下甕　器内面は，口頸部を横方向ハケ後に横方向ヘラ研きを雑に施す。頸部は指押え後に同様に横方向に雑なヘラ研きをし，胴部は丁寧なナデ。器外面は，頸部を横方向にヘラ様のナデ後に，口頸部はこのままで，頸部はその上から横方向のヘラ研きを施す。胴部は横方向ヘラ研きを丁寧に施し，下位はその上から斜方向ハケ目を，底部近くは縦方向ハケ目を残す。底部との屈折部には器重によるひずみが生じている。復原状態は，原位置で出土した胴部破片大までで，口頸部・底部は一部片のみで図示できなかった。

4号甕棺墓(図版５－１，第22図)

削平が著しいが，墓壙の床面は緩傾斜のまま壙底に至っている。

上甕　器内面は丁寧なナデ。器外面は，丁寧に横方向のヘラ様ナデ後に，雑な横方向ヘラ研き。復原状態は，図示の¼弱ほどしかなく，反転図である。

下甕　器内面は，頸部を指押え後に横方向にナデ，肩部はヘラ様ナデを施す為に，頸肩部は若干の稜を有す。胴部は丁寧なナデ，底部は指押えナデであるが，胴下位のみ斜方向ヘラ様のナデを施す。器外面は，沈線後に打ち欠き部から胴下部まで横方向ヘラ様ナデを，胴下位のみ縦方向ヘラ様ナデを施し，その接する部分を中心に雑な横方向ヘラ研きを更に施している。底部は中心部よりも胴部との屈折部が½周ほど約２㎜上がり，器重によるひずみが生じている。復原状態は，図示⅓強で反転図である。接合によるひずみを一部に認めるとしても，当初から胴部最大径の大きいやや扁平な器形と考えられる。

5号甕棺墓(図版５－２，第23図)

掘り方の断面は，上甕部で傾斜をなすが，下甕部はその器形に一致したカーブで掘っている。

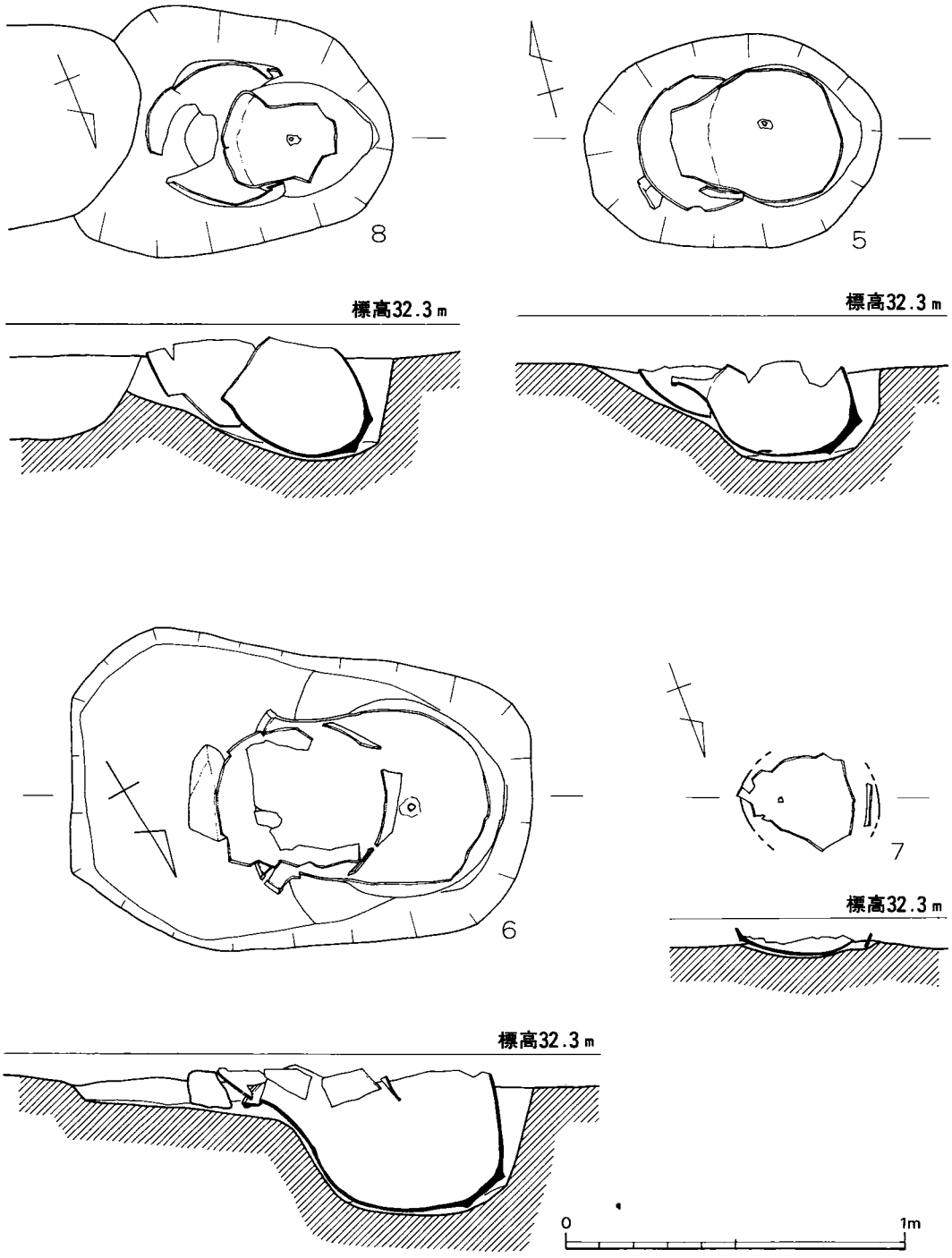
上甕　器内面は，ヘラ様の横方向ナデ。器外面は，胴上部・中部で幅1.0cm前後の斜方向に，下半部で幅0.5cm弱のやや横に近い斜方向にそれぞれヘラ研きを施す。復原状態は，図示の¼強までである。

下甕　器内面は，頸部の斜方向ハケ目の後で口縁部に横方向ハケ目を共に丁寧に施す。なお，頸部のハケ目は胴部を丁寧にナデた後で施したために，より明瞭に頸肩部で稜を認める。底部は，指で強く押えたままである。器外面は，口縁部は丁寧に横方向ヘラ研き。頸部も同様に施すが雑なために斜方向のハケ目を残す。胴上半は横方向，中～下部は斜方向ヘラ研き。底部との屈折部は特に丁寧な横方向ヘラ磨きを施す。底部は丁寧なナデ。復原状態は，良好である。(図版13－１，第26図)

6号甕棺墓(図版５－３，第23・27図)

ほぼ平坦な上甕部の掘り方の床面に，10×10×30cm大の石を置いて上甕を安定させているが，断面図に示すとおり，当初から呑口形式に組み合わせたものと考えられる。

上甕　器内面は，丁寧なナデの後に頸部上位を横方向にハケ目を施す。器外面は，丁寧なナ



第 23 図　5～8号甕棺墓実測図 (1/20)

デのままで，以下の頸部は斜方向ヘラ研きを施す。復原状態は，頸部は5/6ほどで反転図である。

下甕　器内面は，口頸部は丁寧なナデ。頸肩部も丁寧なナデであるが，その屈折部のみ1/4周ほど雑な横方向ヘラ研きを施す部分がある。また，胴最大径の一部ではヘラ様ナデを施す。器外面は，口縁端部のみ丁寧なヨコナデ。端部下面は指押えのままで，口頸部の段部は更に雑に指先でナデたのみで，胎土の接合面を各所に残す。肩部の中位までは丁寧なナデのままである。沈線は，胴上半部の横方向ヘラ研きによって大略消えて，わずかに痕跡を残すのみである。下半部は斜方向のヘラ研きを施すが，底部近くは器重によってシワができている。復原状態は，良好である。(図版12－1，第27図)

7号甕棺墓(図版 6 － 1，第23図)

削平が著しく，墓壙の全容は確認されていない。

下甕　器内面は，肩部と胴最大径部で指押え痕を残し，他はナデを施す。器外面は，胴上半部は横方向，下半部は斜～縦方向のヘラ研きを施す。底部近くは雑な横方向ヘラ研きを施し，底部は丁寧なナデ。復原状態は，図示の1/4弱ほどで反転図である。(図版12－2，第28図)

8号甕棺墓(図版 6 － 2，第23図)

墓壙の一部を 9 号甕棺墓に切られており，新旧関係が把握できた。なお，出土状態の実測図で上甕の胴部に空白部があるのは，焼成の悪いこの部分が細片化していたために，発掘時にとりあげた後の実測によるものである。

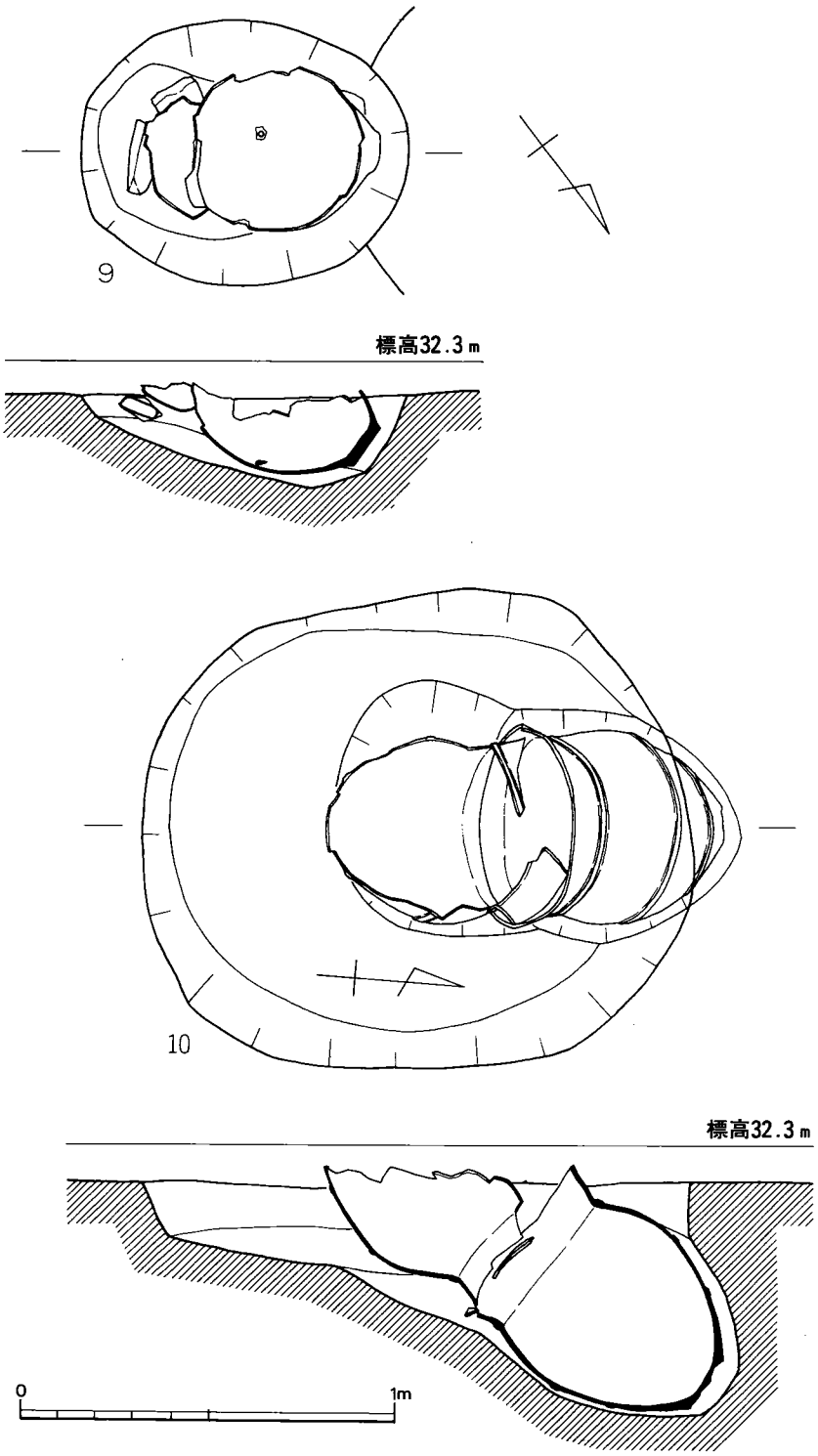
上甕　器内面は，胴中部まで幅 3 ～ 5 cmのヘラ様のナデ痕を残したままであるが，器面調整は丁寧である。下半部は丁寧なナデ。器外面は，全体をヘラ研きしている。復原状態は，図示の1/3弱までである。

下甕　器内面は，肩部に明瞭な胎土接合時の段を残したままで，その上位から口頸部にかけては横方向ハケ目を残すが，その中間部のみ一部横方向のヘラ研ぎを加えている。段下位は丁寧な指押えのままで，胴中部から下部にかけては丁寧なナデ。底部近くも同様であるが，一部にヘラ様のナデを施す。器外面は，胴最大径部までを横方向にヘラ研きを施したため，事前の浅い沈線は破線状にその痕跡を残して一周する。中部は横方向後に一部縦方向に，下部は縦方向のハケ目のままである。下位はヘラ研きを加え，底部は指でナデを施す。復原状態は，図示の7/8ほどである。(図版12－3，第28図)

9号甕棺墓(図版 6 － 3，第24図)

墓壙は上甕部から傾斜をもたせて掘られており，上甕の安定のために 2 個の石を置いている。

下甕　器内は，打ち欠き部近くは雑な横方向ヘラ研き。肩部で指押え痕を一部に残すが，胴下半部にかけてはナデ。下位から底部にかけては指先による強いナデを施す。器外面は，沈線をシャープに幅 0.1cm以下の線で 3 条施す。胴下半部まで丁寧な横方向ヘラ研き。下位では横方向に強くヘラ様のナデが施され，砂粒の移動が著しく，その後を更に雑なヘラ研きを加えて



第 24 図　9・10 号甕棺墓実測図 (1/20)

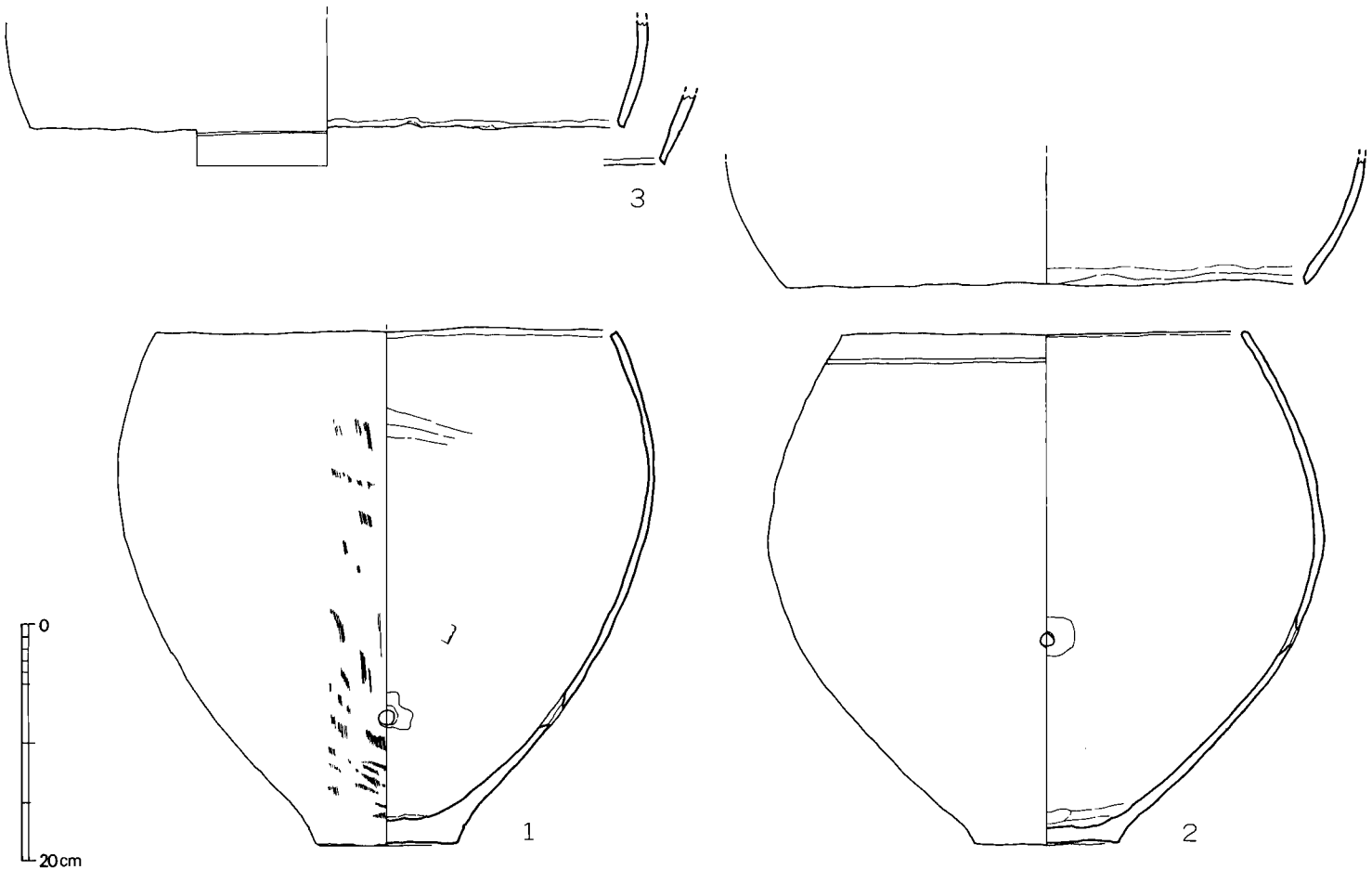
いる。底部もヘラ様のもので強くナデを施す。復原状態は，図示の½弱である。(図版12－4，第28図)

10号甕棺墓

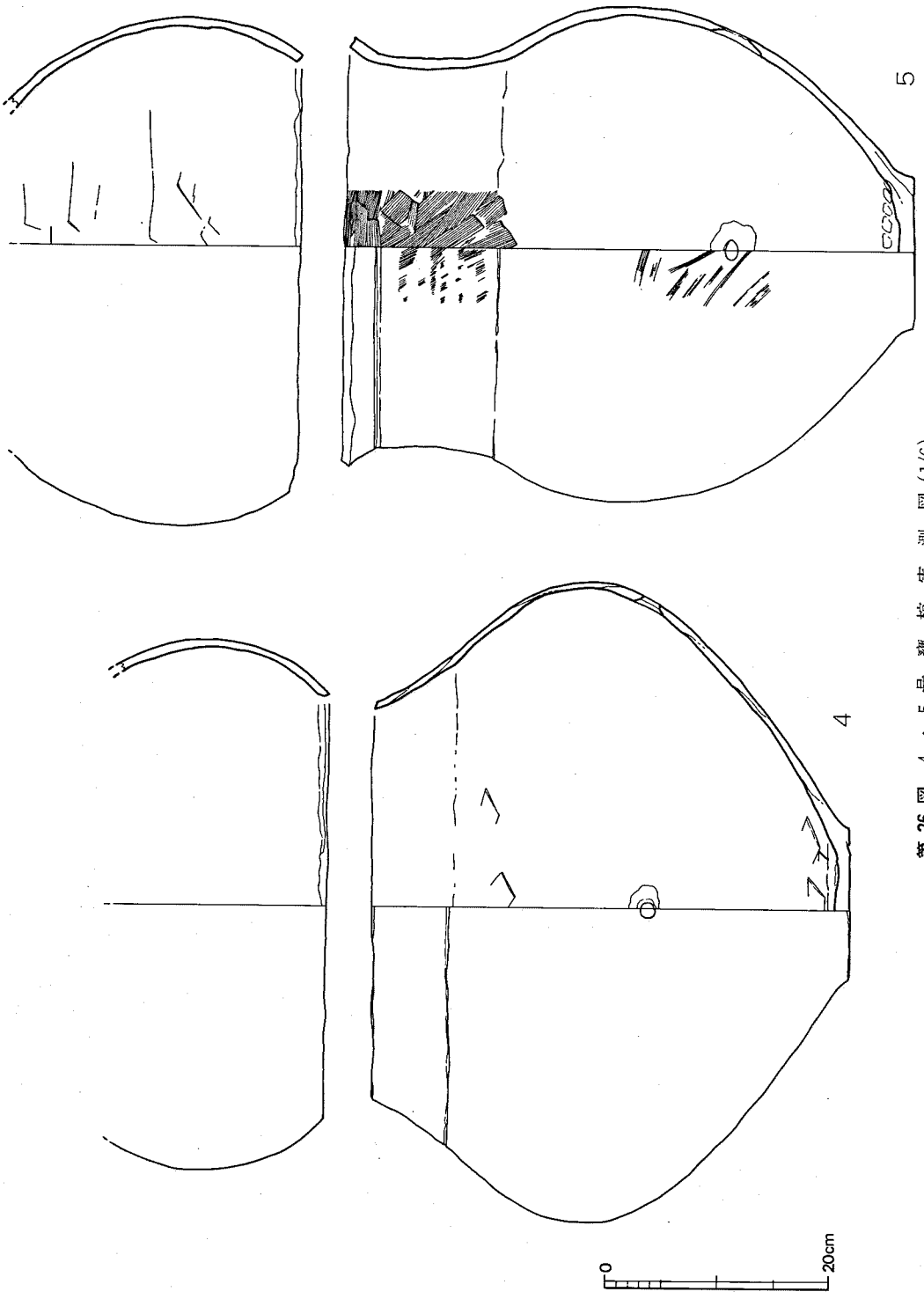
(図版 7，第24図)

下甕のカーブに一致した横穴内に，その大半を挿入する。上甕の口径の方が若干小さいために呑口状を呈しているが，接口形式で組み合わせたものと考えられる。

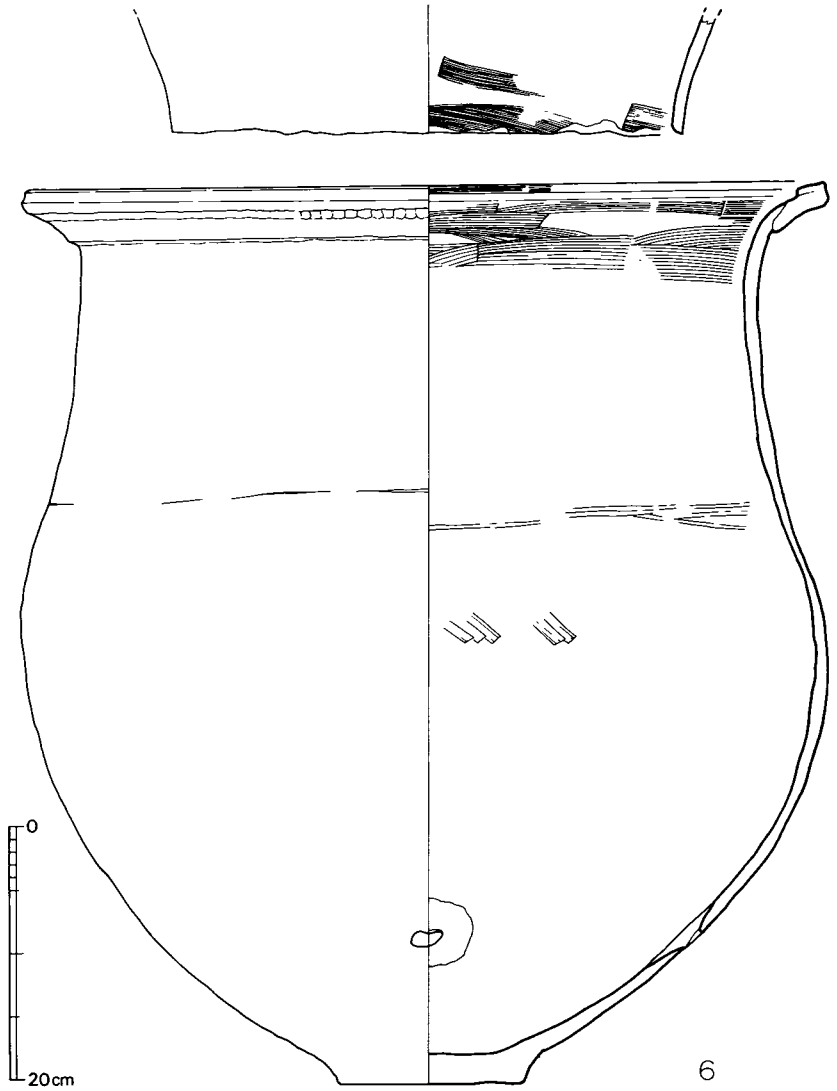
上甕　器内面は，口縁部のハケ目後に口唇部のみヨコナデを施す。頸部直下はナデたままで胴部のハケ目は至らない。胴部は中央部以下は斜方向の密なハケ目であるが，上部のそれは若干横方向気味で粗い。ハケ目の方向は共に底部から胴部にかけてである。器外面は，口頸部を縦方向の



第 25 図　1 ～ 3 号 甕 棺 実 測 図 (1/6)



第26図　4・5号甕棺実測図(1/6)



第 27 図　6 号 甕 棺 実 測 図 (1/6)

密なハケ目で仕上げ，口縁部のみヨコナデを施す。なお，口唇端部のヨコナデは強く，若干下方に垂れ気味である。また，密なハケ目は，第１凸帯との屈折部の強いヨコナデ後のものである。第１凸帯では，下方の胴部側との屈折部でもヨコナデをするが，更に横方向のハケ目で調整し，平坦面を最後に粗な横方向の深いハケ目で仕上げる。第２凸帯では，胴部との屈折部の弱いヨコナデ面を含めて胴部に縦方向の密なハケ目を施し，その後で平坦面を密な横方向のハケ目で仕上げる。このハケ目は強く，屈折部の稜が上下に押し広げられており，再度部分的に縦方向の密なハケ目を稜から胴部にかけて調整している。なお，平坦面には一部に深い粗な布

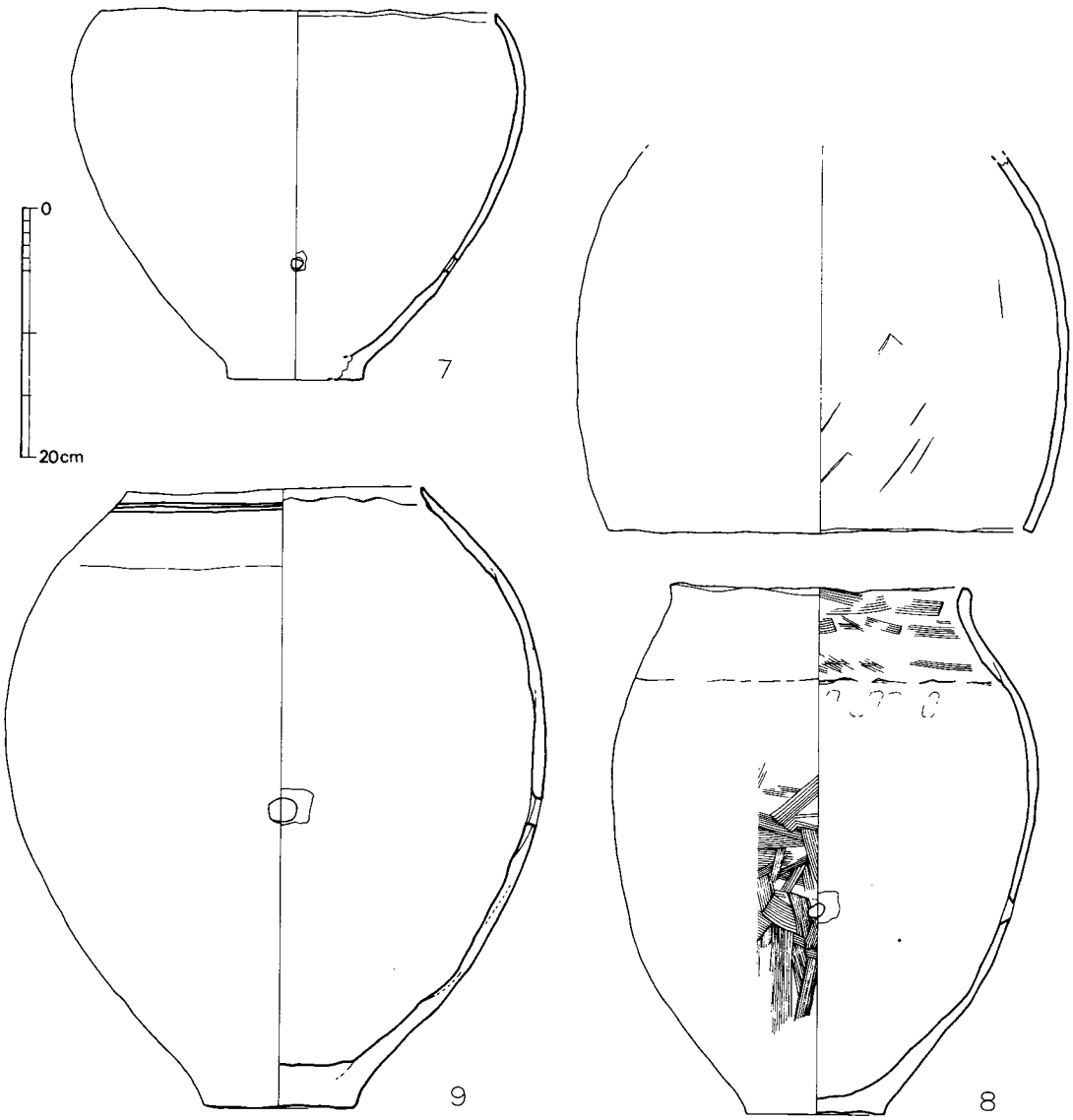
表2　仲田Ⅰ－14 甕棺墓一覧表

甕棺番号	方向〔傾斜〕	組合せ方	上甕〔打欠部〕 下甕〔打欠部〕	口径	最小内径〔打欠径〕	胴部最大径	底径	器高〔現存高〕	穿孔部の高さ	胎土	焼成	色調〔黒斑部位〕
K1	S 2°W 〔約37°〕	?										
			壺 〔頸部〕		〔37.8〕	47.4	11.9	〔43.3〕	0 胴下部	小さめの砂粒を多く含む	良	内面褐色・外面茶褐色 〔胴最大径～下位〕
K2	S 13°W 〔約50°〕	覆口	壺 〔肩部〕		〔43.2〕	約54.0		〔10.6〕		大きめの砂粒を多く含む	やや不良	内面淡褐色・外面褐色 〔胴中部〕
			壺 〔頸部〕	〔34.6〕	33.3	45.6	12.9	〔43.2〕	2 胴中部	小さめの砂粒を多く含む	良	内面茶褐色・外面暗褐色 〔胴中部現存1ヶ所〕
K3	約N 6°E 〔約15°〕	?	壺 〔頸肩部〕		〔45.5〕	約54.0		〔9.5〕		小さめの砂粒を多く含む	良	内面茶褐色・外面褐色 〔胴最大径部〕
			壺 〔口縁部〕						2 胴下半部	大きめの砂粒を多く含む	良	内外面共に茶褐色
K4	S 18°W 〔約35°〕	覆口	壺 〔胴上半部〕		〔38.0〕	47.5		〔19.1〕		大きめの砂粒を多く含む	普通	内面淡褐色・外面赤茶褐色 〔胴最大径部〕
			壺 〔口頸部〕	〔35.6〕	34.0	57.2	13.7	〔47.2〕	2 胴中部	大きめの砂粒を多く含む	良	内面茶褐色・外面赤茶褐色 〔打欠部～胴下位〕
K5	N76°W 〔38°〕	覆口	壺 〔頸肩部〕		〔37.7〕	45.4		〔26.4〕		小さめの砂粒を多く含む	良	内面褐色・外面茶褐色 〔胴中部〕
			壺 〔口縁部〕	〔38.4〕	32.5	44.4	13.8	〔50.7〕	1 胴中部	大きめの砂粒を多く含む	良	内外面共に茶褐色 〔胴中部〕
K6	S 60°E 〔47.5°〕	呑口	壺 〔口頸部〕		〔38.2〕					小さめの砂粒を多く含む	やや不良	内外面共に淡褐色
			壺	63.0	51.0	63.0	14.1	71.0	7.5 胴下半部	大きめの砂粒を多く含む	普通	内外面共に褐色 〔沈線部～胴中部〕
K7	N110°E 約20°	?										
			壺 〔肩部〕		〔31.0〕	36.0	約11.0	29.5	0	金雲母・細さめの砂粒を多く含む	良	内面淡褐色・外面褐色
K8	S 68.5°E 32°	覆口	壺 〔肩部〕	〔34.0〕	32.6	約39.5		〔36.3〕		金雲母を少し・砂粒を多く含む	良	内面褐色・外面暗褐色
			壺 〔口縁部〕	〔27.2〕	25.0	34.3	11.2	41.9	0 胴下半部	砂粒を多く含む	良	内面褐色・外面褐色 〔胴中部に対峙して2ヶ所
K9	S 53°E	覆口										
			壺 〔頸肩部〕		〔23.0〕	43.1		〔49.4〕	1 胴中部	小さめの砂粒を多く含む	良	内外面共に褐色 〔胴中部～下部〕
K10	S 45°E 〔36.0°〕	呑口接口状	甕	49.2	31.5	47.3		〔55.6〕		小さめの砂粒を少し含む	普通	内外面共に褐色 〔頸部下に2ヶ所〕
			甕	51.1	40.0	52.2		〔64.5〕	無	大きめの砂粒を少し含む	良	内外面共に褐色 〔胴中部～下半部2ヶ所〕

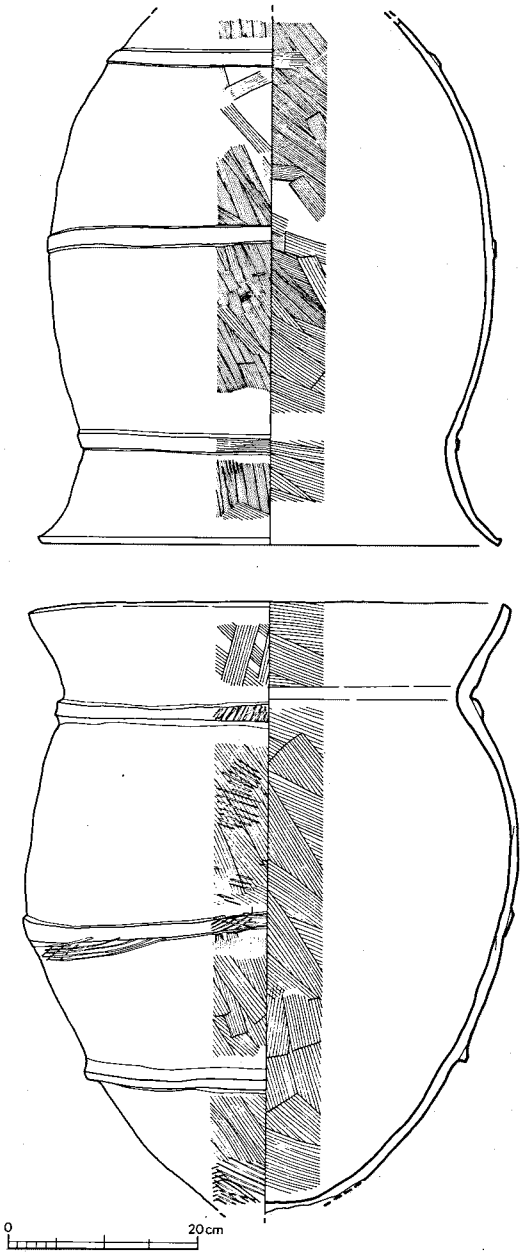
註　穿孔の高さとは，埋置棺体の最下位からの測定値（単位：cm）

目痕を認める。第3凸帯は，第2凸帯と同様の仕上げであるが，平坦面の調整は雑である。胴部は全体を縦方向の密なハケ目で調整するが，前段の粗な斜方向仕上げが，各凸帯の中間の胴部に多く残っている。なお，ハケ目は1.0cm間に粗なものは6条，密なものは17条を数える。復原状態は，胴部下位以下を欠失している。

下甕　器内面は，口縁部はその最上位まで横方向に近い粗なハケ目仕上げのままで，頸部のみ更にヨコナデで調整したために，胴部との屈折部は若干の稜を認める。胴部は全面に粗いハ



第28図　7～9号甕棺実測図(1/6)



第 29 図　10号甕棺実測図（1/8）

ケ目を残す。器外面は，頸部のハケ目後に口縁部をヨコナデし，口唇部のみ横方向のハケ目で平坦に調整している。口頸部のハケ目は凸帯との屈折部を雑にヨコナデ前と共に一部その後にも加えている。この第1凸帯の平坦部は斜方向のタタキ痕のままである。第2凸帯は，胴部との屈折部から上下共に胴部にかけての縦方向のハケ目のままで，その後のヨコナデを施さない。平坦面は斜方向のタタキで仕上げるが，凸帯下の胴部にまで及んでいる所も認められる。第3凸帯は，その上下の胴部にハケ目を施した後で，屈折部も含めて平坦面までヨコナデ調整する。胴部の粗なハケ目は全面に及んでいるが，各所にタタキ痕を残している。底部近くはタタキのみであるが，底部外面は器表が剥離している。復原状態は，底部外形が不明の他は良好である。(図版13－2，第29図)

以上のとおり，遺存状態が良くないことに加えて，上・下甕共に口縁部または頸部を打ち欠いて使用している。このことは，甕棺専用土器出現前の日常土器転用期で，小壺よりも大きいこれらの壺形土器の器形的特徴をより詳細に検討することに，資料的限界がある。そこで，各甕棺の技法をやや詳細に説明してきたわけであるが，新旧関係の明らかな8号・9号甕棺と，器形の大略が明らかな4号甕棺，それに古墳時代に下がる10号甕棺を中心に補足する。

4号下甕は，胴部最大径が上位にあるやや扁平に近い胴部で，頸部径に比して大きく，頸肩部に段を有するなど古い要素を残し，板付Ⅰ式の小壺に共通する特徴を示している。また，大きめの砂粒を含むが，精製された胎土で，焼成が良く，赤褐色を呈する。これらは，前回報告の

加賀石Ⅰ－９出土の甕棺にも共通するものである。上・下甕共に丁寧なヘラ様のナデが施されているが，これは色調・器形が同様の３号上甕にも認められるもので，共に板付Ⅰ式の範疇で考えられよう。

６号甕棺は，口縁部上面に未発達な段を有する粘土帯を付している。しかし，口頸部外面の明瞭な段と頸部から胴部にかけての器形は，焼成が良く茶褐色の５号甕棺と共に，板付II式でも古い要素が強い。

８号甕棺墓は，９号甕棺墓よりも古く，胴部最大径が上位にあり，頸部の径が小さいやや長胴形の器形で，器内面の肩部に段を有し，前述のヘラ様のナデを施すなどの末だ古い特徴を残している。しかし，器外面の肩部から胴上位にかけてのカーブはゆるく，沈線はヘラ研きによって破線状にその痕跡だけであり，板付II式でも新しい要素が強い。

９号甕棺墓は，切り合い関係では８号甕棺墓よりも古いが，器形の特徴は前者に近いものである。

このように，４号・３号甕棺は板付Ⅰ式に属し，６号・５号甕棺は板付II式の古い時期に属し，７号甕棺も後者と考えられる。８号・９号甕棺は共に板付II式の新しい時期に属し，１号２号甕棺も同様に考えられる。

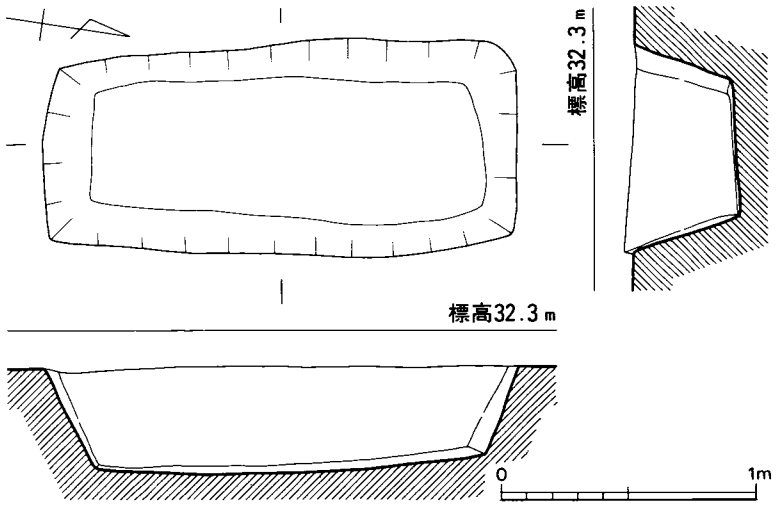
10号甕棺は，番上II－６地区２号土器溜出土の一括土器中の大形甕(『三雲遺跡』Ⅰ 174頁，第152図)に，上甕と下甕の口縁部がそれぞれ共通するものが認められる。口縁部は，上甕で胴部との屈折がゆるく外面し，下甕でやや内湾気味に外反するなどであるが，細部においては凸帯上のタタキやヘラケズリの有無で差位が認められる。この２号土器溜からは布留式土器が共伴しており，この時期に近いものと考えられる。

土壙墓

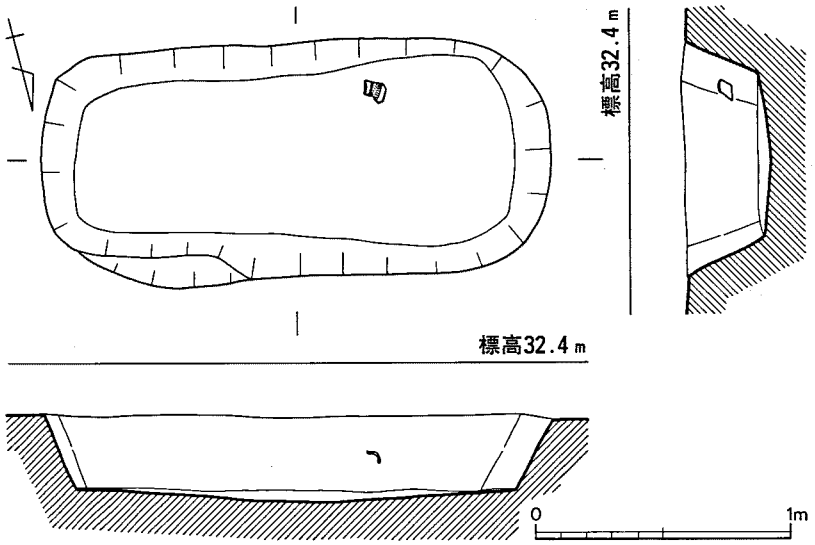
２号土壙墓

(図版10－１，第30図)

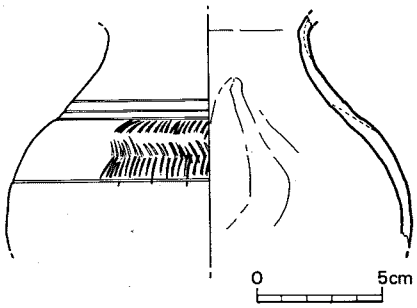
調査区のほぼ中央部から検出された長方形の土壙墓である。主軸方位はN85°Wを示す。内法は，長さ153cm，幅は頭位と考えられる北側で54cm，南側で45cm，深さ約40cmを測る。壁はやや斜めに立ち上がり，床面はほぼ水平で



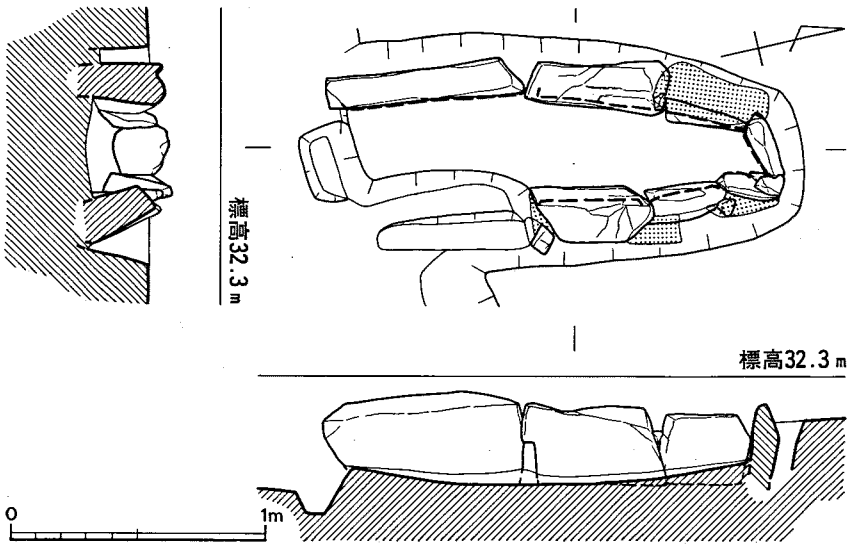
第 30 図　２ 号 土 壙 墓 実 測 図 (1/30)



第 31 図　3 号 土 壙 墓 実 測 図 (1/30)



第 32 図　3号土壙墓出土土器実測図 (1/3)



第 33 図　石 棺 墓 実 測 図 (1/30)

ある。埋土から縄文土器片が約600g出土した。

3号土壙墓(図版10－2，第31図)

2号土壙墓の北側 1.5mから検出された隅丸長方形を呈する土壙墓である。主軸方位はN76°Wを示す。内法は長さ172cm，幅は頭位と考える北側で75cm，南側で約56cm，深さ約35cmを測る。壁は斜めに立上る。木材・粘土等の痕跡は認められなかった。出土遺物は埋土中から弥生時代前期の壺形土器片が出土した。

壺形土器(図版11－4，第32図)　頸部から胴部にかけての約⅙ほどの片である。外面は頸部ヨコナデ，他はヨコ位の磨研によって整形されている。肩部に3本，胴部に1本の沈線があり，この間に羽状文がヨコ位の磨研後に施文されている。復原器高約16cm前後，最大胴部15.9cmを測る。胎土には細砂を多く含み，焼成は良，色調は褐色を呈する。

石棺墓(図版8－2，第33図)　調査区の北西

隅から検出された石棺墓である。上部削平のため蓋石はまったく残っていない。さらに北側小口部と西側側壁１枚の石材が抜取られている。墓壙は隅丸長方形を呈すが北側は削平のため明らかではない。幅は南側で75cm，中央部で90cmを測る。東側側壁３枚，西側側壁４枚，両小口１枚で長方形に組み合された石棺の内法は石の抜き跡から推測して長さ約165cm，幅は南側で20cm，中央部で40cmを測る。北側は石の抜き跡から推測して，長さ約165cm 幅は，南側で床面から側壁上部までの高さは，北側で36cm，南側で20cm，中央部で30cmを測る。石材の選び方，棺の幅等から考えて頭位は北側と思われる。床石・赤色顔料等の痕跡は認められなかった。主軸方位はＮ５°Ｅを示す。

(2)　その他の遺構と遺物

１号土壙

調査区の南側隅から検出した不整形土壙で，南北1.5m，東西1.3m，深さ約85cmを測る。壁は斜めに立上り，床面は中央部がややくぼむ。掘り上げた後すぐに水がわき井戸として使用された可能性が考えられる。時期を決定する遺物はないが，埋土からガラス小玉が１個出土した。

（池辺）

縄文土器（第34図）

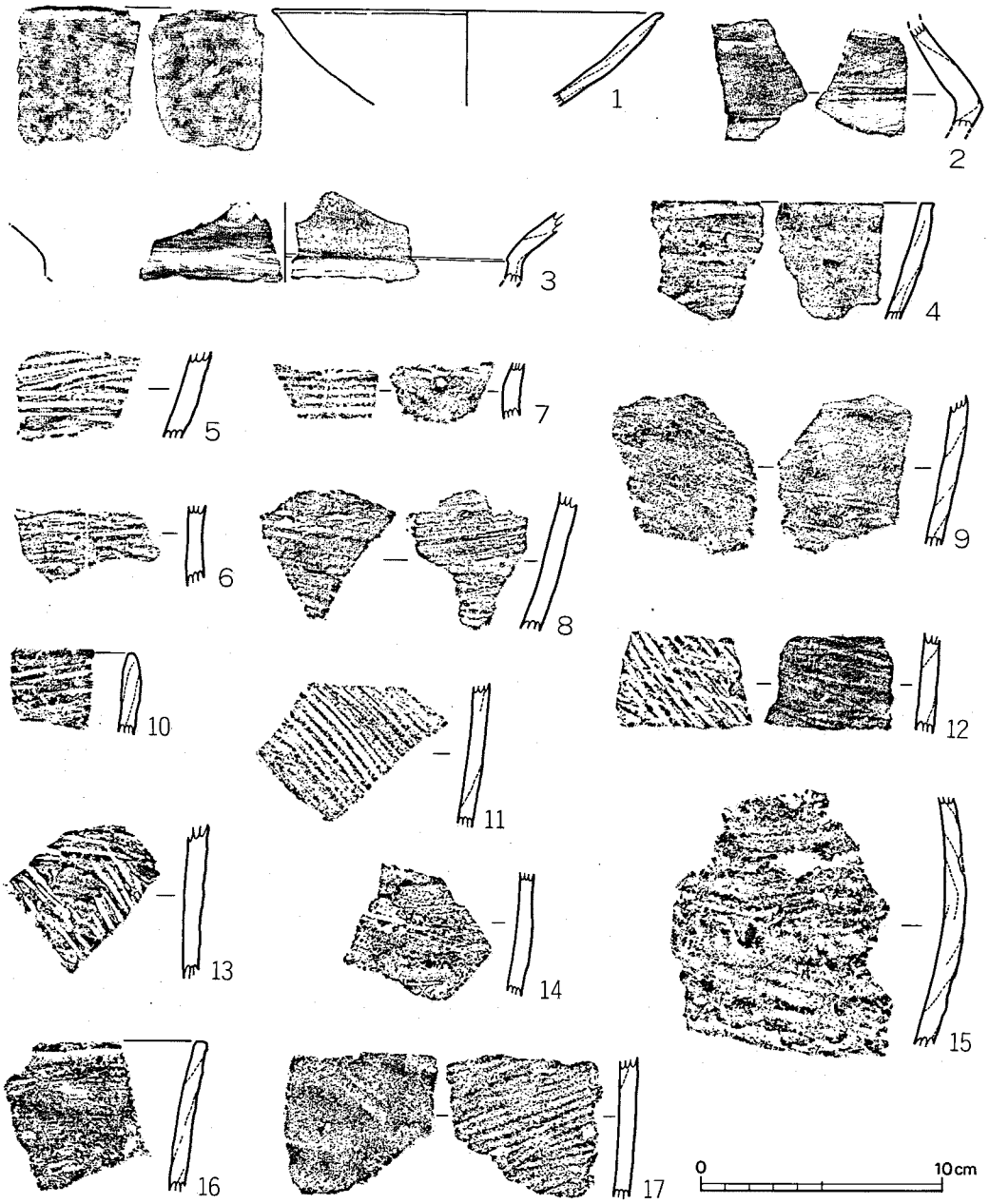
仲田Ｉ－14地区からは総重量約800ｇの縄文土器片が出土した。このうち¾は２号土壙出土分で，残りの¼は甕棺墓墓壙内やピット内から断片的に出土した分である。前者では約90%が粗製土器，後者では70%が粗製土器である。弥生時代遺構面を更に掘り下げれば量的に増加し比率も変化するかも知れない。これらの資料のうち，比較的大きな破片，特徴の明確な破片の計17点を図示するが，１はピット３，10～17は２号土壙出土資料である。

精製土器（１～３）　１は復原口径約16cmの椀形土器。金雲母粒を若干含む精良な胎土を用い，外内面共研磨調整で淡めの黒褐色に焼成される。２は，精製研磨の深鉢形土器胴部破片で，淡い茶褐色に焼成されている。３は浅鉢形土器の屈折部の破片であろう。長石・金雲母を含むが精良な胎土で暗褐色に焼成されており内外面共に研磨調整痕がみられる。

粗製土器（４～17）　４は無文の鉢形土器口縁部破片で胎土に砂粒・金雲母を含み，淡めの黒褐色に焼成される。外面やや凹凸のあるナデ調整，内面丁寧なナデ調整。

５～７は外面にアナダラ条痕の施される胴部破片。いずれも横方向の条痕であることから口縁部に近いと思われる。内面はナデられているが，５は研磨に近い丁寧なナデ調整であり，口径に比して器高の浅い器形に考え易い。３点共胎土に長石・金雲母等を含み良好に焼成される。５・６は黒褐色，７は淡褐色の色調を呈す。

８は内外面共アナダラ条痕で調整されているが浅めでナデに近い。胎土に花崗岩質砂礫・金



第 34 図　I－14 出土縄文土器拓影 (1/3)

雲母を含み器面に礫が目立つ。堅緻な焼成で茶褐色を呈す。

9はナデ仕上げの無文土器，器面に砂礫が現れており，黄褐色に焼成されている。

10～13は外面にアナダラ条痕を施し内面無文の破片。11では内面が研磨され良好な焼成で茶褐色になるが外面は煤も付着し黒色を呈す。11に比して他の破片は胎土に砂粒を含む割合が多

めで焼成も粗になり黄褐色～暗黄褐色を呈す。12の内面を観察するとアナダラ条痕を施した後ナデ仕上げした痕跡がみられる。

14～16は内外面ともナデ仕上げされる土器。14の内面が丁寧なナデになる他はおおむね雑なナデで，15の外面は凹凸が多い。いずれも胎土に砂粒・金雲母を含み焼成が並で，暗黄褐色系の色調を帯びる。

17は外面ナデ調整，内面アナダラ条痕の胴部破片。胎土に砂粒・角閃石を含み，焼成並で暗黄褐色を呈す。

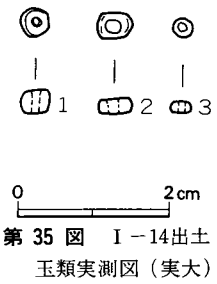
これらの縄文土器のうち最も古式のものとしては2の後期後半期以降の器形に近いものがあり，新しいものとして1の椀形土器あるいは3の浅鉢形土器が晩期中頃的なイメージを与える。粗製土器自体では時期の決定はし難いが，精製土器の時期幅に包括されるものとするのが妥当であろう。

なお，当該地区では，黒曜石片が数点出土した以外縄文時代に属す石器類は出土していない。

（小池）

ガラス小玉（図版11－5，第35図）

1は第2層（床土）から検出した。色調はスカイブルーを呈し径3.9mm，厚さ3.35mm，孔径1.45mmを測る。2は10号甕棺墓と1号土壙の間第3層から検出した。色調はグリーンブルーを呈し，径4.4mm，厚さ2.1mm，孔径1.7mmを測る。3は1号土壙から検出した。色調はコバルトブルーを呈し，径2.6mm，厚さ1.6mm，孔径1.05mmを測る。4は1号石棺墓付近から検出した。約半分を欠く。色調はスカイブルーを呈し，径6.25mm，厚さ4.6mm，孔径1.6mmを測る。（池辺）



第35図　Ⅰ－14出土玉類実測図（実大）

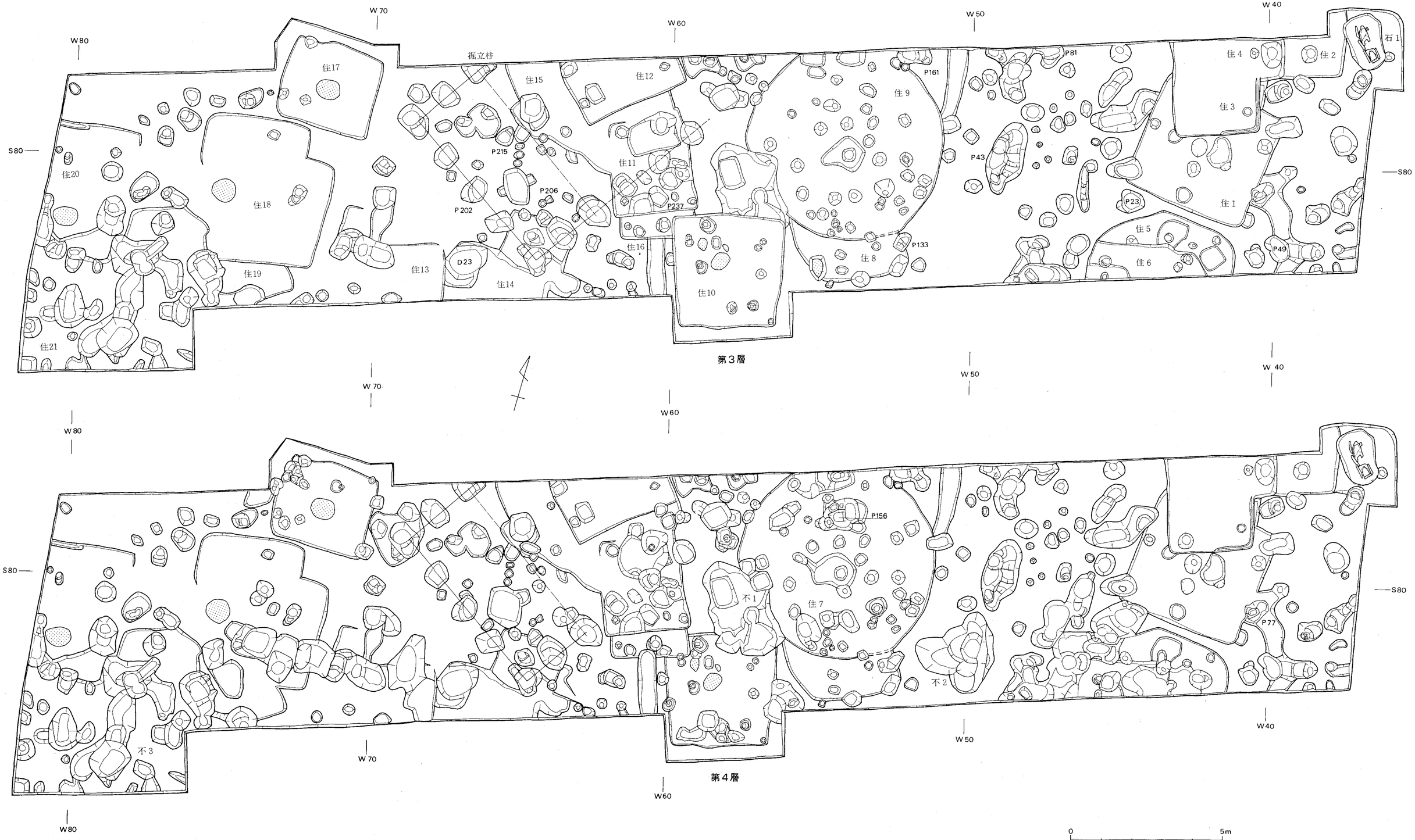
表3　仲田Ⅰ－14出土ガラス小玉計測表

（単位mm）

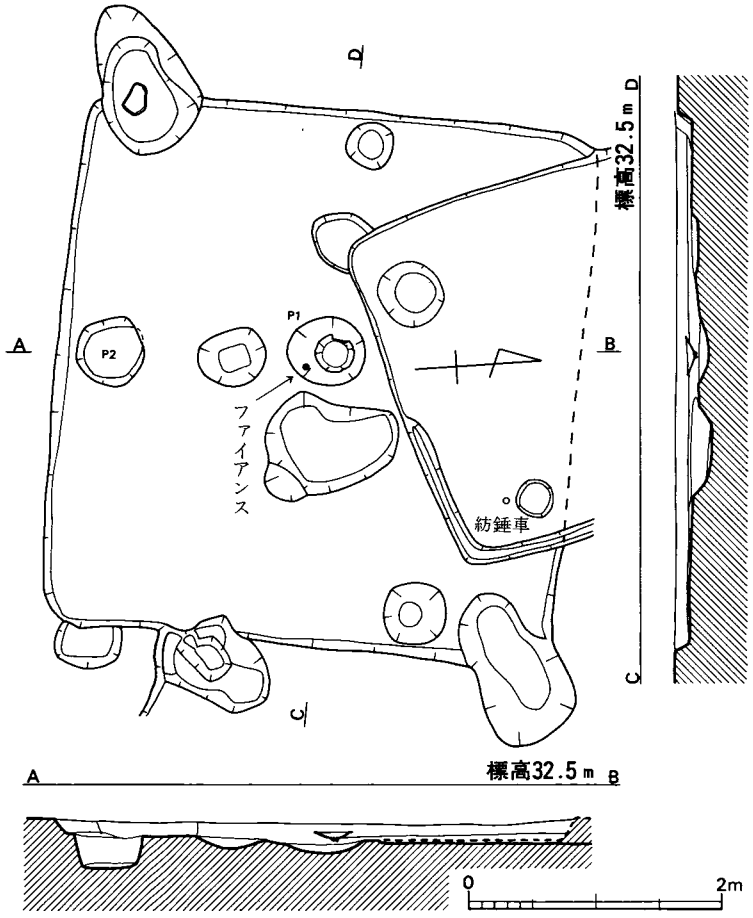
No.	出土遺構	径	厚	孔径	分類	色	
1	第　2　層	3.9	3.35	1.45	C	スカイブルー	2層（床土）
2	第3層下部	4.4	2.1	1.7	C	グリーンブルー	10号カメ棺と1号土壙の間
3	1号土壙	2.6	1.6	1.05	D	コバルトブルー	$x=-72$　$y=-32$
4	1号石棺付近	6.25	4.6	1.6	C	スカイブルー	表採

4　Ⅰ－16の調査

(1)　住　居　跡



第 36 図　仲田Ⅰ－16 遺構配置図（1/100）



第 37 図　1 号 住 居 跡 実 測 図 (1/60)

仲田地区で住居跡を確認し，調査したのはⅠ－16地区のみであった。仲田Ⅰ－16地区の住居跡は，３軒の円形住居跡が弥生中期，他の18軒は弥生後期に属するものである。

（柳田）

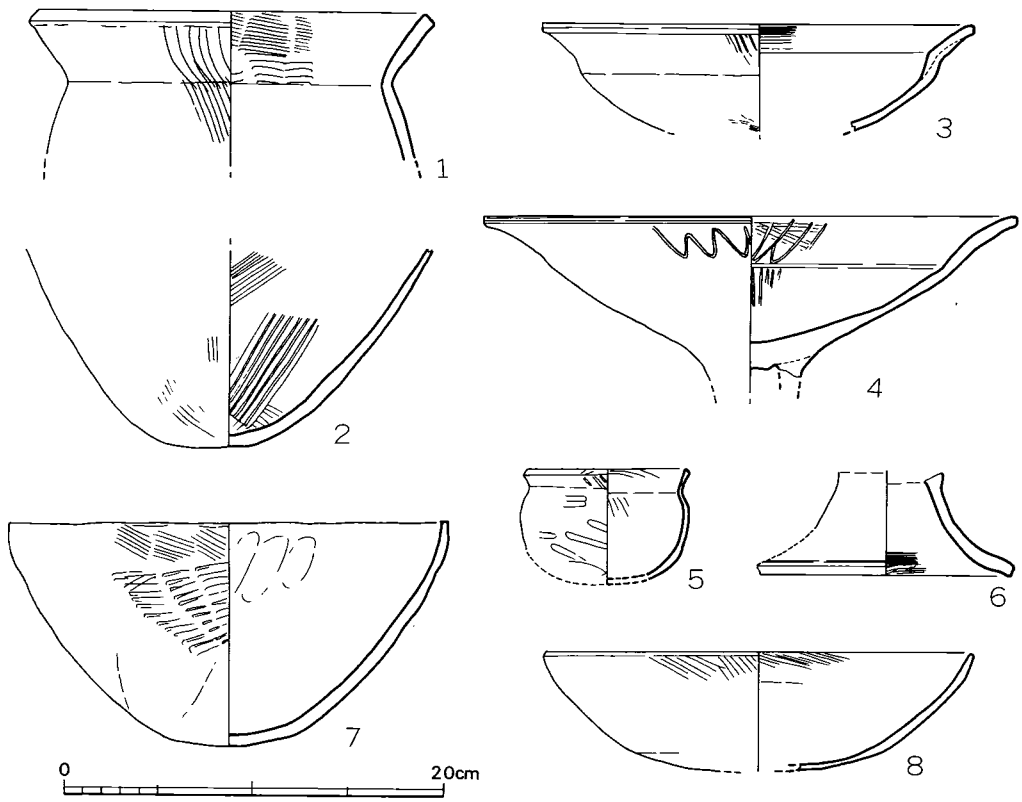
１号住居跡

(図版15－１，第37図)

北側の半分以上を３号住居跡と複合しており，３号住居跡よりも古い。残存部から推測すると，東西約4.3m，南北約４mの隅丸方形プランを呈する竪穴住居跡である。壁高は，上面がかなり削平されているので約15cmと浅い。住居内にはピットが数個みられるが，Ｐ１は浅いくぼみ状をなしており炉跡とも考えられる。Ｐ２は柱穴の可能性もあろう。床面は中央部に礫が多く，これを避けるために張床を施したとも考えられよう。遺物は，Ｐ１から高杯の杯部がピットの底面よりわずかに浮いた状態で出土した。また，この高杯の直下底面からファイアンス玉１個も出土した。その他に，甕などの土器破片，ガラス小玉１個，鉄鏃１本が出土している。

（立石）

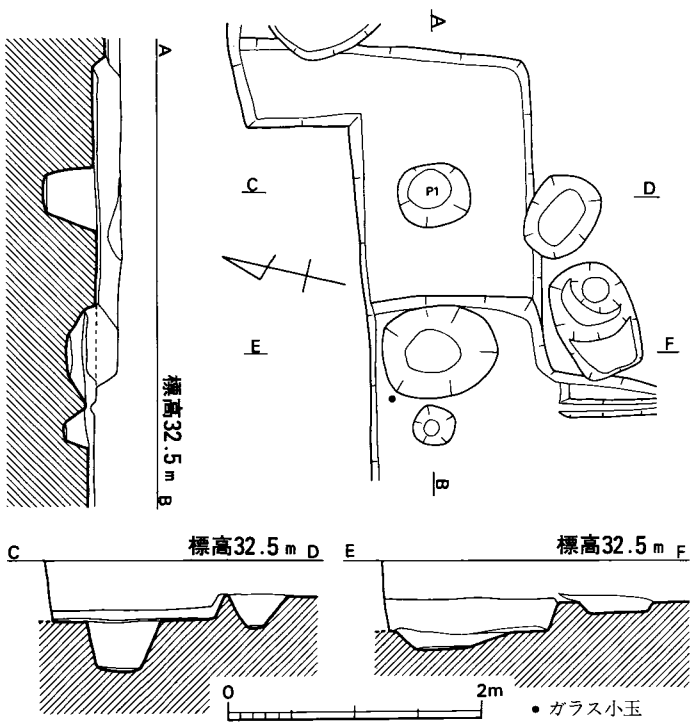
土　器(図版27，第38図)　１・２は甕の口縁と底部であるが，同一個体ではない。口縁部から胴部に粗いハケ目調整が目立つが，胴部内面はナデで消してある。底部は，わずかに底部を残すが，丸底といってよく，外面は粗いハケ目をタテにナデ消している。底部内面には粗いハケ目が残っている。３・４は高杯の杯部で，住居中央の浅いピットから出土したもので，４は脚部を除去したものを据置き，３は破片として混入していた。ファイアンスが出土したピットである。３は口径約23cmの大きさで，口縁部の反りが特徴的で，粘土を幅広く重ねて内外面



第 38 号　1 号 住 居 跡 出 土 土 器 実 測 図 (1/4)

に対称的な段をつけている。器面の調整は，内外面共にハケ目の後で丁寧なヨコナデ調整を行っているが，ハケ目が残っているところもある。４は口径28.3cmの大きさで，口縁の反りは内側に明瞭な段をつけるが，外面にはほとんど段を残さない。器面調整は,全面にハケ目の後で,口縁近くはヨコナデ，体部は研磨状のタテナデとなっている。口縁部には，内面に粗いタテの暗文，外面には波状の暗文を施す。体部は，外面はタテに研磨状の調整があり，内面はタテに放射状の暗文を施す。５は住居跡確認前に３層として取上げた破片資料。器肉は薄いが，表面調整は荒く,外面にタタキ目状の調整痕を残す。底部外面は，右廻りのヘラケズリのままである。６は５と同様に上層の出土品で脚台である。上端は接合面からきれいに剝離している。7・８は床面から多少浮いて出土したもので,７がタタキの後にハケ目調整し,タタキ目を残して底部ヘラケズリで丸底としている。８はタタキ目がないが,底部は同様にヘラケズリのままである。

１号住居跡の土器は，３・４の高杯が住居跡に直接関係あるもので,その他は住居跡が埋没する段階で混入したものである。混入した土器は，器面調整において同一の，粗いハケ目，底部ヘラケズリの丸底という特徴をもち弥生終末のものである。しかし，住居跡に直接関係ある高



第 39 図　2 号 住 居 跡 実 測 図 (1/60)

杯は，口縁部反りの幅が狭いところから後期後半のものである。　（柳田）

2号住居跡(第39図)

トレンチ調査のために全域を確認することはできなかったが，残存部から東西1.9m，南北2.2mを測る竪穴住居跡である。東壁の一部を1号石棺墓の墓壙と，西側を4号住居跡と複合しており，いずれも2号住居跡より新しい。壁高は南壁で約15cm，東壁で約10cmを測る。住居内のピットはP1のみであるが，4本柱と考えれば柱穴の可能性がある。

3号住居跡(図版16－1，第40図)

1号住居跡・4号住居跡と複合しており，1号住居跡より新しいが，4号住居跡との新旧関係は不明である。残存部から推測すれば，東西約2.8m，南北約2mの竪穴住居跡である。10号・17号住居跡同様小形の住居跡である。周溝は壁直下にあり，南壁の東半分から東壁にかけてあり全周しない。壁高は約15cmと浅く，周溝の深さも僅かである。柱穴・炉跡は不明である。

遺物は，甕・高杯などが床面よりかなり浮いた状態で出土している。他にガラス小玉3個・石庖丁1個・鉄鎌2本が出土している。　（立石）

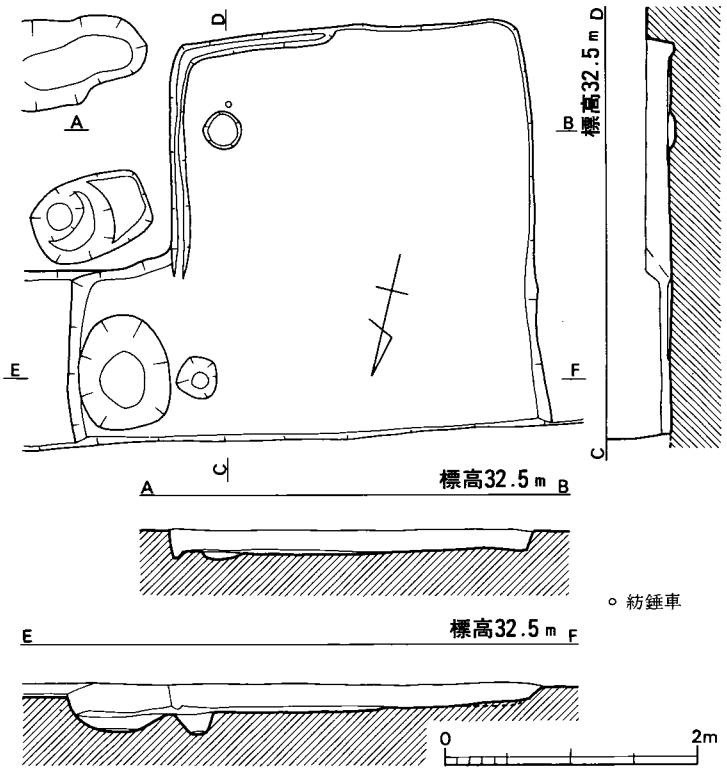
土　器(図版27，第41図)　9・10は甕で，器面調整は双方共に粗いハケ目であるが，10は胴部に粗いタタキ目を残す。胴部は9に丸みがあるが，10は長胴となろう。11は台付壺といえるもので，台と胴部は同一個体であろう。復原器高約18cm，口径21.3cmの大きさで，薄手の作りとなっている。口縁部は大きく外反し，ヨコ磨きの後内面にタテのヘラ描暗文，胴部は外面がヨコ磨き，内面がタテ磨きで暗文状を呈する。脚部は大きく開き，外面は粗いハケの後ナデて，内面はヨコのハケ目状のナデ仕上げとなっている。12は高杯の脚部裾である。脚裾部は大きく開いて，端部がわずかに内彎するのを特徴とする。器面は細いハケ目で，外面はタテ方向にナデて消している。3個の円孔を持つ。13・14は手捏土器といえるもので，13は内面が粗いハケ

目，外面は底部から放射状に手ナデしている。14は全面に指圧痕が残る。15は皿といえるもので底部はヘラケズリである。

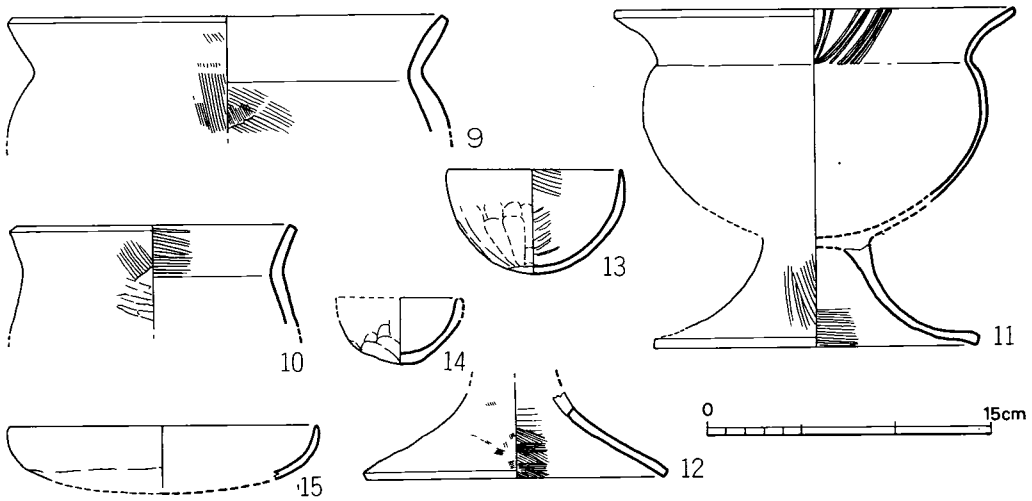
土器は全てに弥生終末の特徴がある。（柳田）

4号住居跡

トレンチ調査のため全域を確認することはできなかった。2号住居跡・3号住居跡と複合しており，2号住居跡より新しいが，3号住居跡との新旧関係は不明である。西壁は3号住居跡西壁と同線上にあり，東西約3.7m



第 40 図　3・4号住居跡実測図（1/60）



第 41 図　3号住居跡出土土器実測図（1/4）

を測る竪穴住居跡である。柱穴・炉跡は不明である。

遺物は少量の破片のみで，時期は不明である。

5号住居跡(図版16－3，第42図)

1号住居跡の南側で，若干楕円状に近い遺構を確認した。トレンチ調査のため全域を確認できなかったが，直径約5mの円形竪穴住居跡と考えられる。6号住居跡と複合しており，6号住居跡よりも古い。壁高は10～15cmと浅い。柱穴はP1～P3が考えられ，恐らく8本柱となろう。

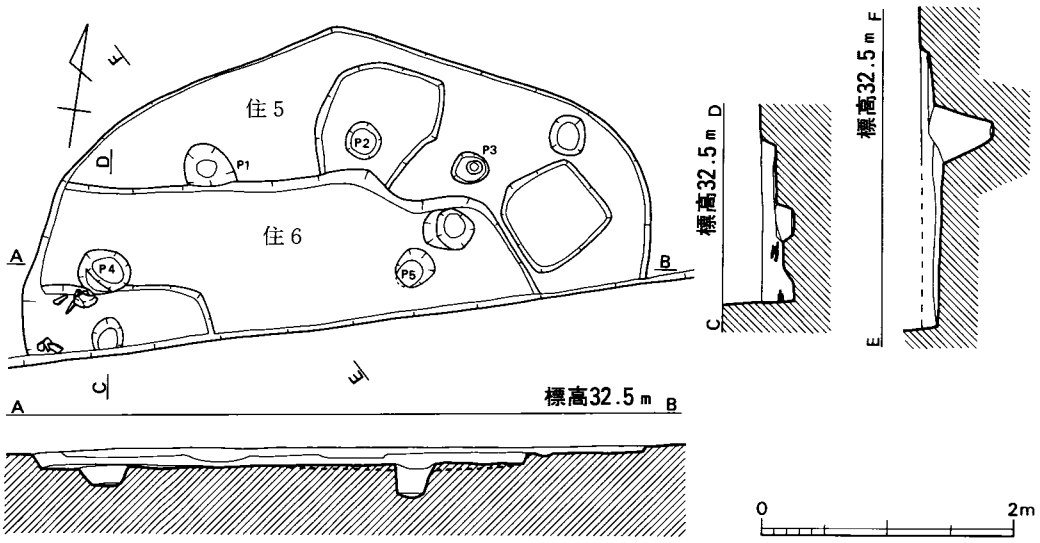
遺物は少量の破片のみで，時期は不明である。　（立石）

土　器(図版27，第44図16・17)　16は住居跡に直接伴わないもので，3層上部からの出土である。丹塗磨研小壺で，口縁に2孔を持つので対称の位置にも2孔があり，蓋付きとなるもの。17も3層上部出土で住居跡に伴わない。外面は細いハケ目の後で，上部をヨコナデ，内面もヨコナデされるが，ハケ目が残っている。　（柳田）

6号住居跡(図版16－3，第42図)

5号住居跡と複合しており，5号住居跡よりも新しい。これも全域を確認できなかったが，東西約3.8mを測る竪穴住居跡である。P4・P5が柱穴と考えられる。またP4の南側の竪穴は，屋内貯蔵穴の可能性もあろう。この竪穴から，床面より10cmほど浮いた状態で甕が出土した。P4の西側では，この竪穴にずれ落ちた様な状態で砥石が出土している。　（立石）

土　器(図版27，第44図18～23)　18は粗製厚手の甕で，床面から10cm浮いて出土した。内面はハケ目が残り，外面胴部はタタキの後，中位より上からヘラケズリしている。19と20は床面とそのピットから出土した皿である。19は外面にタタキが残り粗製であるが，20は下半がヘラケズリ後ナデられて割合丁重な仕上げとなっている。21は口径27.2cmの高杯で，ハケ目の後ナデて仕上げ，最後に口縁の内外面にタテの放射状のヘラ描き暗文を施す。22は椀もしくは広口壺の台である。上端は接合面で剝離し，剝離面に渦巻き状に粘土が廻っている。23は方形透窓



第42図　5・6号住居跡実測図(1/60)

のある器台片である。方形透窓は，４ヶ所にあるらしく，縦の長さ５cm以上で，横幅は約２cm前後となろう。内外面に粗いハケ目とタタキが残り，あまり丁寧な作りではない。

６号住居跡出土の土器は，全てに弥生終末の特徴を備えている。（柳田）

７号住居跡（図版17－１，第45図）

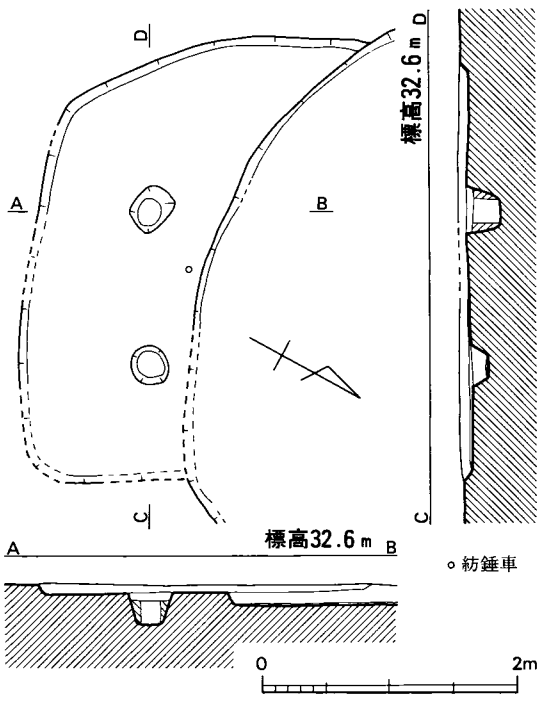
９号住居跡と全く重複する状態で検出されたため不明な点が多い。炉を中央にもつ径5.5ｍの円形住居跡と考えられ，床面は後出する９号住居跡より高い可能性が残る。壁は南側部分のみが重複していると思われる。柱穴はＰ107・114・122・127・139・173が並ぶ６本柱と想定される。

遺物は柱穴より中期の土器片が出土した。（丸山）

土　器（第44図24～26）　24は，丹塗磨研壺の口縁部の破片。口縁は，口径21.8cmの大きさで鋤先口縁をしている。

25は，丹塗磨研壺の胴部下半の破片である。内側に丹塗されていないので，鉢形土器とはならない。胴部外面は，ヘラによるヨコ磨きが行われている。26も同様である。

これらの土器は，中期後半に属するが，７号住居跡は，同時期の１号不整形土壙に切られているので，この破片だけでは住居跡の時期は決定できないであろう。（柳田）



第 43 図　８号住居跡実測図（1/60）

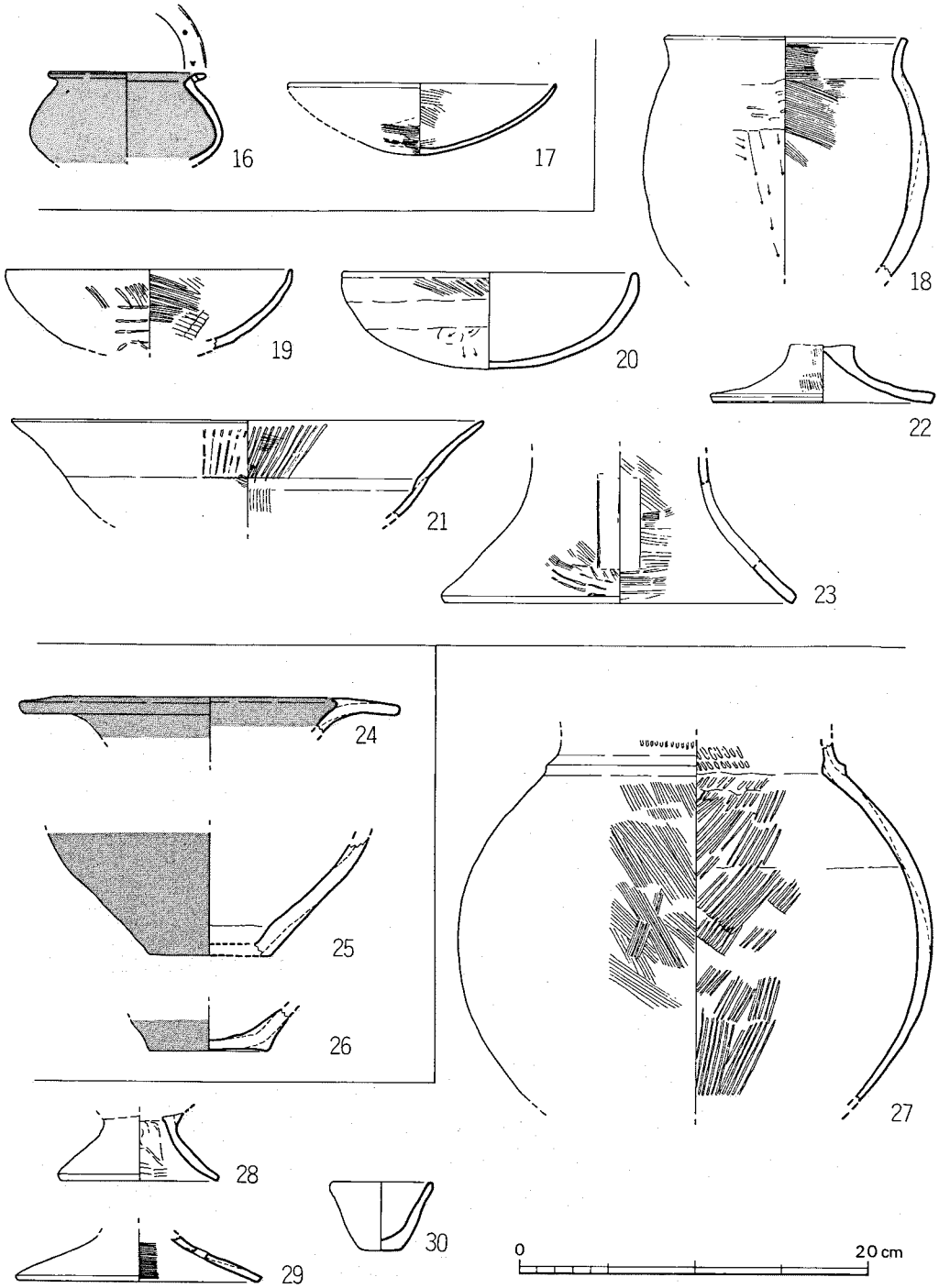
８号住居跡（図版17－１，第43図）

北側大半を９号住居跡に切られた状態で検出されたものである。一辺約３ｍの隅丸方形の住居跡と想定され，壁は上部がかなり削平を受けているため10cmの壁高を残すのみである。柱穴は２個確認できたが，本来４本柱を有するものと思われる。西側の柱穴は深くしっかりしているが，東側の柱穴は浅めである。床面は比較的良好であるが，さほど叩締められた形跡はない。

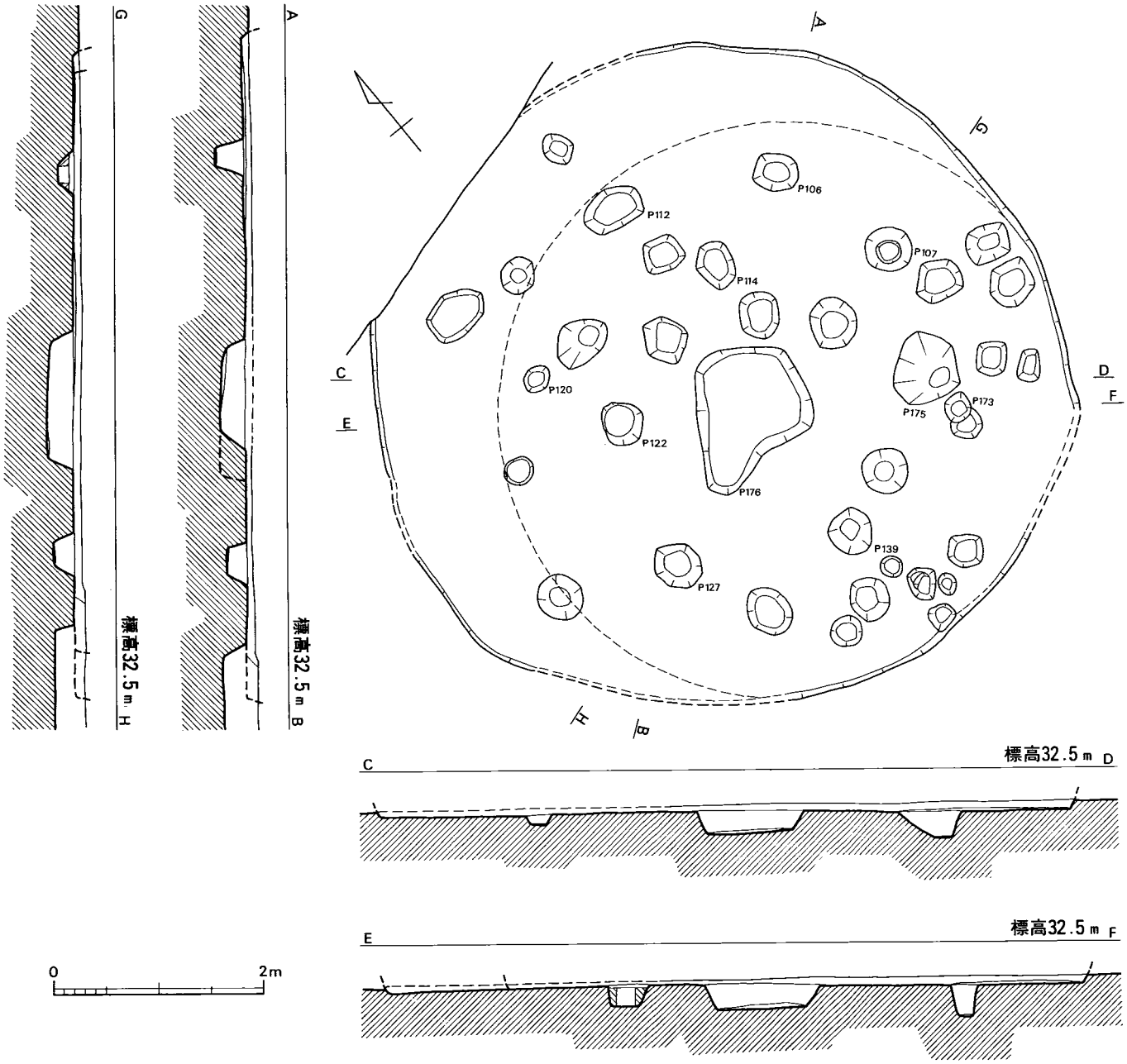
遺物は中期に属する土器片と土製紡錘車が出土している。

９号住居跡（図版17－１，第45図）

７号住居跡が北西側へ拡張されたものと考えられ，西側を１号不整形土壙に切られた状態で検出されたものである。径 6.6ｍの円形住居跡で，壁高は上部がかなり削平されているため４～10cmと浅い。柱穴はＰ



第 44 図　5・6・7・9号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 45 図　7 ・ 9 号 住 居 跡 実 測 図 (1/60)

106・112・120・127・139・175の6個であるが，P127・139は7号住と共通するものであり，再度使用したものと推察される。床面は礫混じりで，あまり良い状態ではない。炉は住居跡の拡張にともない北西側へ拡大されたと考えられるが前者との切り合いは認められなかった。

遺物は中期に属する土器片及び石製紡錘車・ガラス小玉1個が出土している。　（丸山）

土　器（図版27，第44図27～30）　27は，袋状口縁系の壺であろう。球形の胴部とその内外面の粗いハケ目調整が特徴である。

28は，小型甕か壺の台部，29は円孔をもつ高杯の脚裾部である。

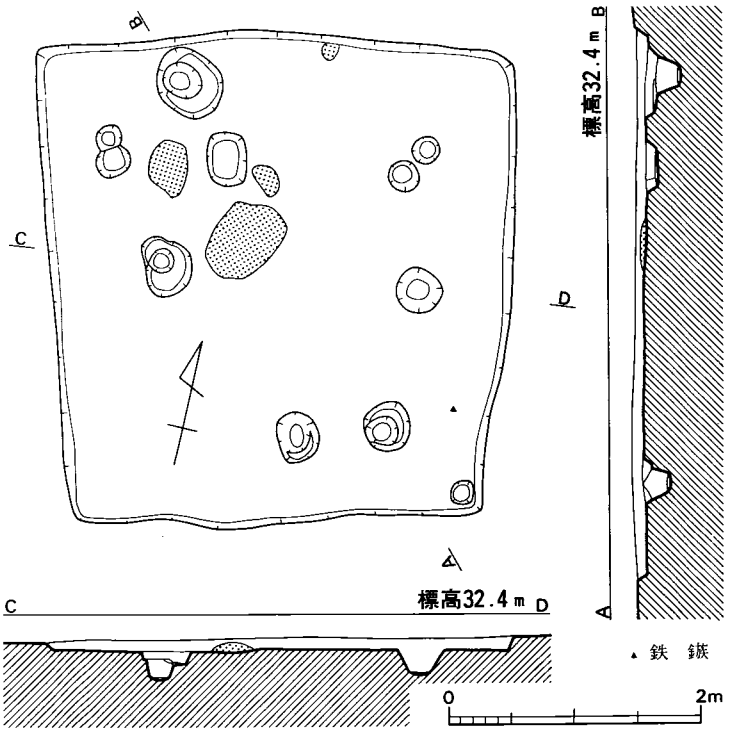
30は，ミニチュア品であるが，割合ととのった形態をしており，いわゆる手捏土器と違っている。器高4cm，口径6cmの大きさ。これらの土器は，終末期のものである。　（柳田）

10号住居跡（図版18－1，第46図）

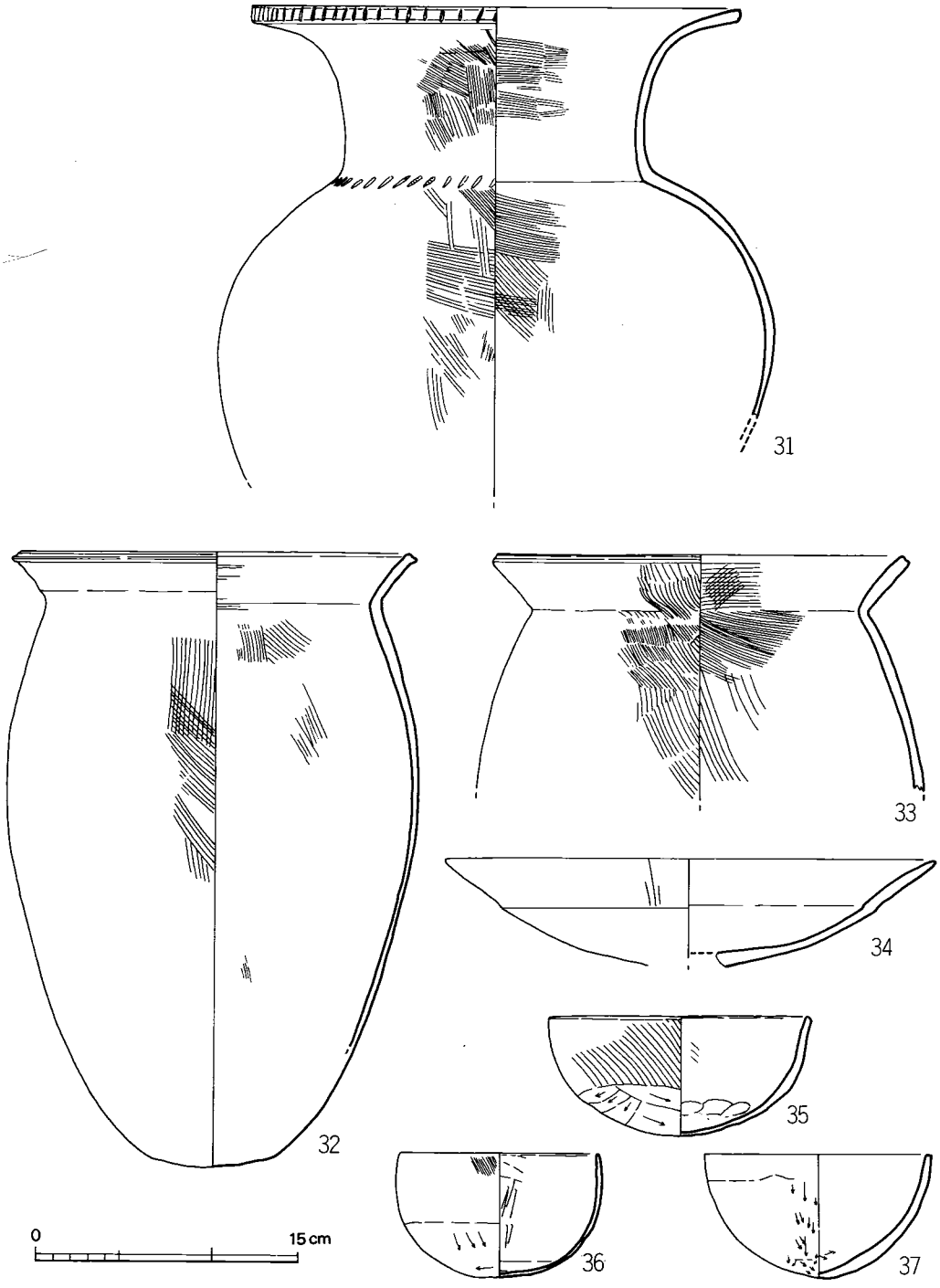
16号住居跡を切り，さらに1号不整形土壙の上につくられた住居跡である。一辺約3.5mで南側が若干狭くなる方形住居跡で，壁の残りは浅く壁高は5～10cmを測る。上部の削平が著しい。柱穴と思われるピットは7個検出したが，4本柱の場合南西の箇所に柱穴が無く，中央の東西2個の柱穴を使用した2本柱であったと考えられる。床面は礫混りで，僅かに叩締められた状態が認められた。

遺物は若干の土器と東南隅に近い東壁ぎわ床面で鉄鏃が2点及び鉄製品1個が出土した。（丸山）

土　器（図版27，第47図）　31は，口縁部が外に開く壺形土器で，口唇部と肩部に板目のつくキザミ目を施す。内外面共にハケ目を施すが，口縁内外は細かいハケ状の痕のつくヨコナデがなされている。口径は28.0cm。32・33は長胴の甕形土器。32は口縁部～底部までの約½の破片である。胴部外面にタタキの痕跡がある。ハケ目は内外共全体



第 46 図　10 号 住 居 跡 実 測 図（1/60）



第 47 図　10 号住居跡出土土器実測図 (1/4)

に施されているが,外面下半部はナデ消されている。復原口径23.2cm,器高は約35.5cmを計る。33は,口縁部が胴部より「く」字形に屈曲してまっすぐのびるもので,32よりやや古い様相を呈している。復原口径24.0cm。34は高杯杯部破片である。口縁部は短く,体部からわずかに内側に折れてまっすぐのびる。屈曲部はあまり明瞭でない。

35～37は椀形土器で,体部下半部にケズリを施している。内面は35が底近くを指ナデし上方にハケ目を施しているのに比して,36・37は板またはヘラ状のものによる横ナデを施している。

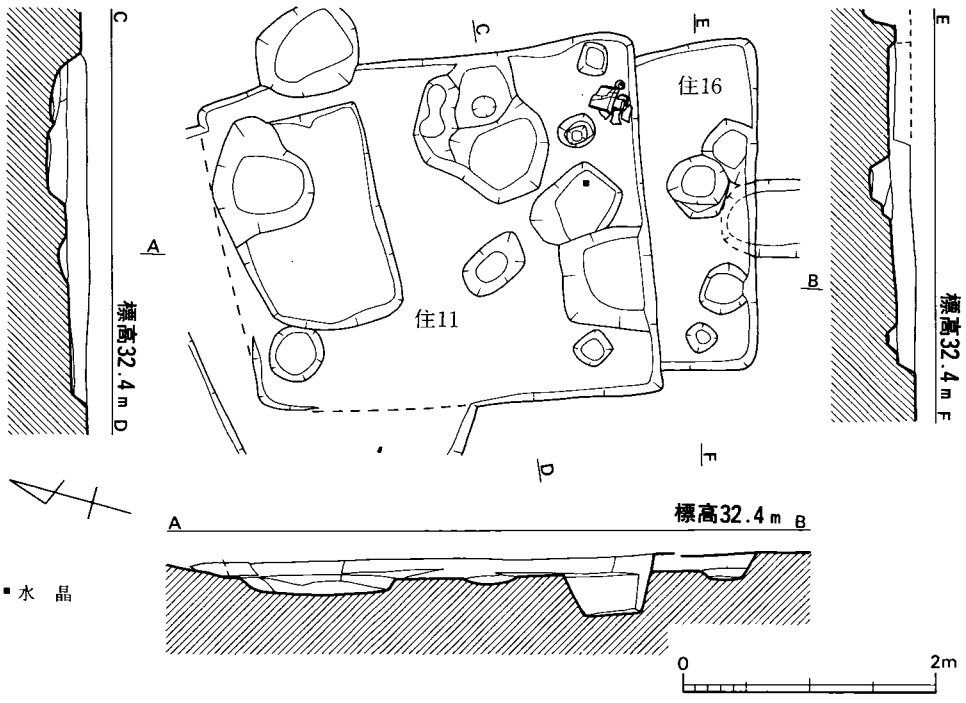
これらの土器は弥生終末をやや遡る時期のものと思われる。（荒武）

11号住居跡（図版18－２，第48図）

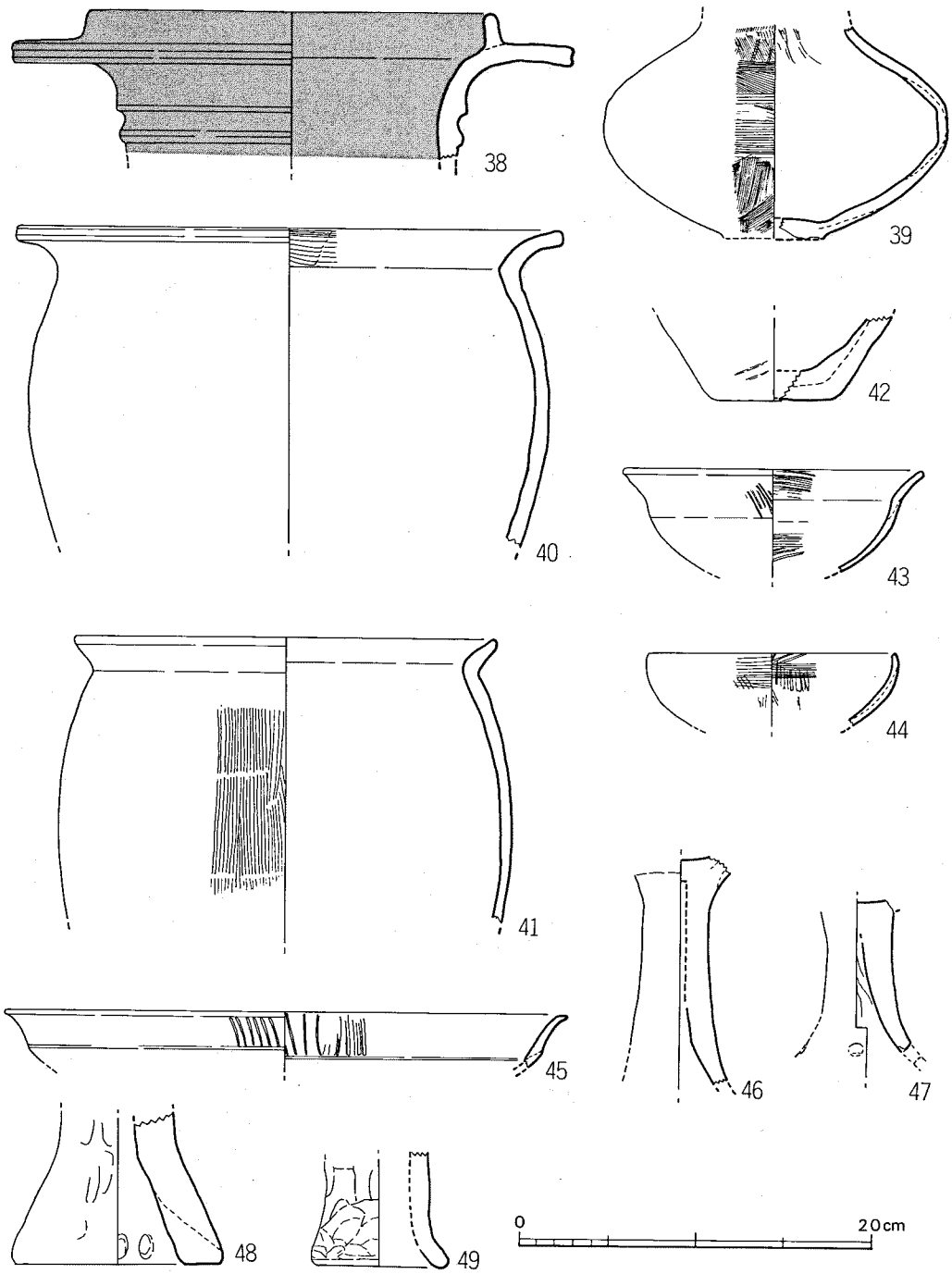
16号住居跡を切って10号住居跡の北西側に位置し，2.9×3.5mの長方形を呈する住居跡である。北壁と西壁の一部が削平を受けており辛うじて北西隅を検出した。床面には長方形及び不整形の土壙を検出したが住居跡に明らかに伴うものは無い。柱穴は四隅に近く４個を検出し４本柱と考えられる。

遺物は後期の土器が南東隅より出土している。（丸山）

土　器（図版28，第49図38～49）　この住居跡出土の土器には，中期後半から後期後半までに及ぶ土器があるので，最も新しいものを選んで11号住居跡の時期としなければならない。38は中期後半，39～42・46は後期前半，43～45・47～49は後期後半の３時期に分けられる。



第 48 図　11・16 号 住 居 跡 実 測 図（1/60）



第 49 図　11 号 住 居 跡 出 土 土 器 実 測 図 (1/4)

38は，丹塗磨研土器で特異な口縁部をした壺である。凸帯などに後期的特徴があらわれているが，一応中期後半として，１号不整形土壙のものの流入品であろう。

39は，細頸壺であるが，底部に退化が見られないところから後期前半のものである。器面調整は，外面に粗いハケと細かいハケを使い分けている。40は，口縁がくの字形に外反する甕で，胴部は肩が張るものであろう。器面調整は，口縁部内側のみハケ目が残り，他はナデられている。41は，口縁が立上って先端を細く丸めている甕で，中期末に出現する立上って内湾する口縁部のなごりであろう。42は，甕の底部であるが，底部近くの外面にタタキ目が残っている。底部は平底であるが，角がとれて丸味がついている。46は高杯の脚部で，杯部底はヘラヨコ磨き，柱状部はタテヘラ磨きが行われている。

43は，口径17cmの鉢で，台が付くかもしれない。器面調整は，一応ハケ目調整されるが，その後からナデて消したところが多い。44は，椀であるが，43と同様にナデあるいは磨き状の調整を行っている。

45は，高杯の杯部の細片であるが，口縁立上がりに後期後半の特徴がうかがえる。内外面には，ナデ後に暗文を施している。47は，45のような杯部をもつ高杯の脚部である。

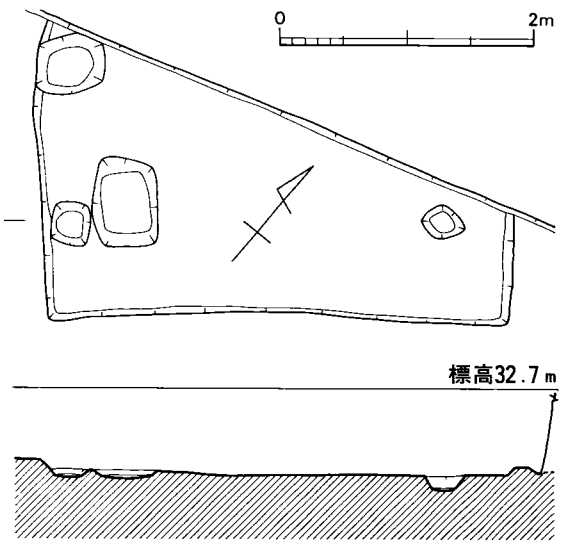
48・49は，手捏的な支脚である。49は天地関係は不明。これらのものは，後期前半に伴うこともある。

11号住居跡は，43～45・47の土器が最も新しいものであるから，これらの時期で後期後半といえる。43・44は終末的な器形となっているが，底部近くの外面にヘラケズリが残らないところから終末の前段階におかれる。　（柳田）

12号住居跡（図版18－３，第50図）

11号住居跡の北側に位置し一辺のみを検出した方形住居跡である。壁高は５～10cmと浅く，床面は礫混じりで壁溝等は無い。柱穴は明確なものは不明であるが隅に浅いピットがあり，柱穴の可能性もある。

遺物は後期の土器片と埋土中よりガラス小玉１個が出土している。　（丸山）



第 50 図　12号住居跡実測図（1/60）

土　器（図版28，第51図50～52）

50は，器高10.1cm，口径9.8cmの大きさの丸底の壺である。口縁は小さく外反して，胴部は肩が張るのが特徴といえる。器面調整は，内面がハケ状用具によってケズ

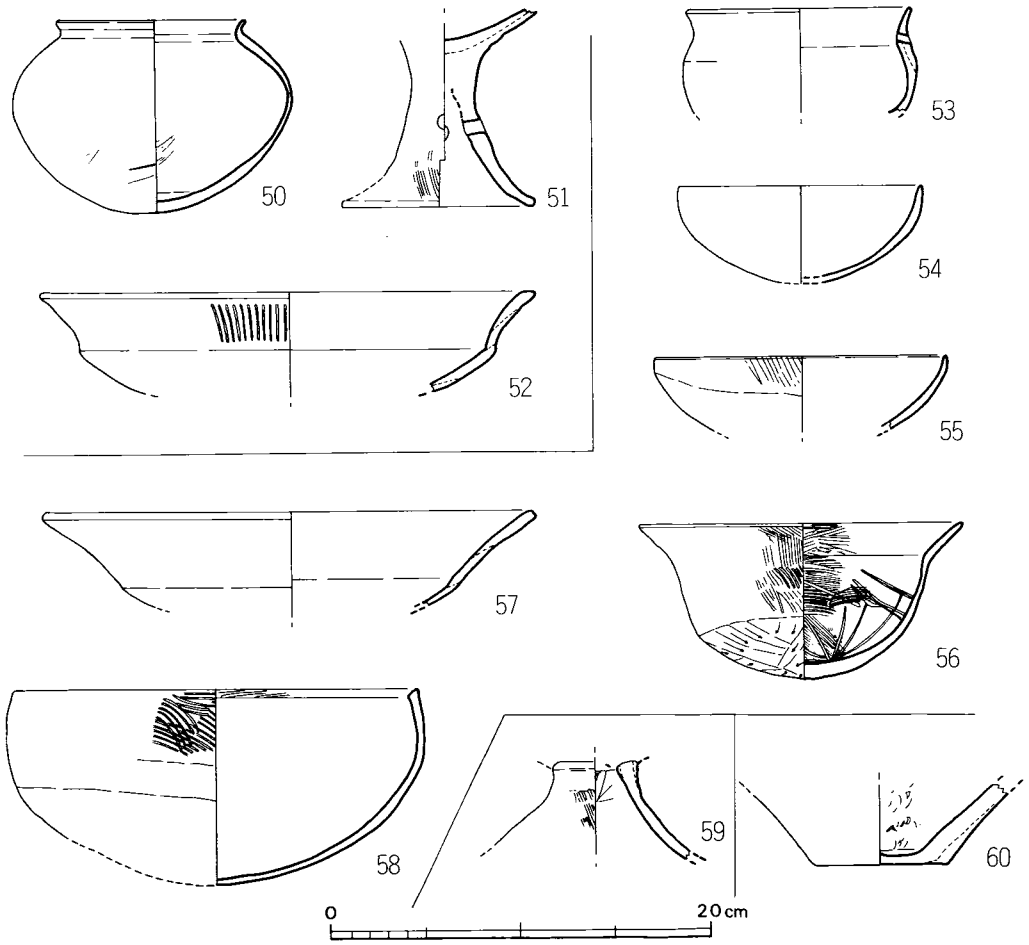
リ風にナデた後に全体をさらにヨコナデしている。外面は，口縁から胴上半がヨコナデ，下半はナデ調整されている。

51は，高杯脚部であるが，脚が短かい。柱状部に４個の円孔があり，表面はハケの後に磨き状にナデている。52は，51のような短かい脚部が付くものではなく，細長い柱状部をもつ高杯である。内面はヘラ磨き，外面は立上部がヨコナデ後暗文，下側はケズリ状ナデが行われている。これらの土器は，50が丸底で終末的であるが，52は後期後半の特徴をもっている。

（柳田）

13号住居跡（図版19－１，第36図）

18号住居跡の東側に位置する方形住居跡である。僅かに北東隅を検出したに止まった。壁高は３～７cmを測り，柱穴等詳細は不明。遺物は埋土中より若干の土器片が出土した。（丸山）



第 51 図　12～14・16 号 住 居 跡 出 土 土 器 実 測 図（1/4）

土　器(図版28，第51図)　53は，復原口径12.0cmを測る。口縁部と胴部の境目に内側より孔を穿つ。２孔残るが４つ対称にあったものか?。外面の調整はナデと思われるが荒れの為，不明瞭。内面は磨きに近いナデを施している。54・55は椀形土器。54は復原口径13.0cm。内外面共ナデで仕上げる。55は口縁部にハケ目を施し，体部に横方向の磨き的なナデがみられる。復原口径15.2cm。56・58は鉢形土器で，56は口縁部が外反して広がり，とがり気味の丸底を呈す。口縁外面にタタキが残る。体部外面はハケ目が施され，底近くをケズっている。内面はハケ目の後，底から放射状に，又は一部でそれに重複した暗文がみられる。復原口径17.1cm。58は口径21.2cm，器高10.2cm。口縁部が内傾しており，外面に粗いハケ目を施している。口唇部にも同様のハケ目があり，一見２～３条の沈線のごとくみえる。体部外面中部以下は横方向のヘラケズリ。内面は，ヘラ状のもので縦方向にナデている。

57は高杯の¼弱の破片で復原口径26.0cmである。調整は器表面が荒れているため不明瞭だが，ナデと思われる。屈曲部はあまり明瞭でなく，口縁部は杯体部からわずかに内側に折れて緩やかに外反する。

鉢のケズリの手法等から，これらは弥生終末期のものと思われるが，54・55はやや古い様相を示す。後期後半～終末期に属すると考えたい。　(荒武)

14号住居跡(図版19－２，第36図)

14号住居跡は，W64－S86で一部が検出されたもので，13号住居跡より新しい。住居跡の規模は不明で，一辺が3.5m以上ある方形住居跡としかいえない。D23・D24よりも新しい。

土　器(第51図59)　59は，壺あるいは小甕の台部である。上端は，接合部から剝離しているので，台部と上部器とは粘土が続かず，貼付けるのみである。

15号住居跡(第36図)

15号住居跡は，W64－S82で検出されたもので，後期後半の12号住居跡より古い遺構が存在するとしか確認できなかった。住居跡とすれば，方形になると思われるが，柱穴等も不明で，時期の判明する遺物も出土していない。　(柳田)

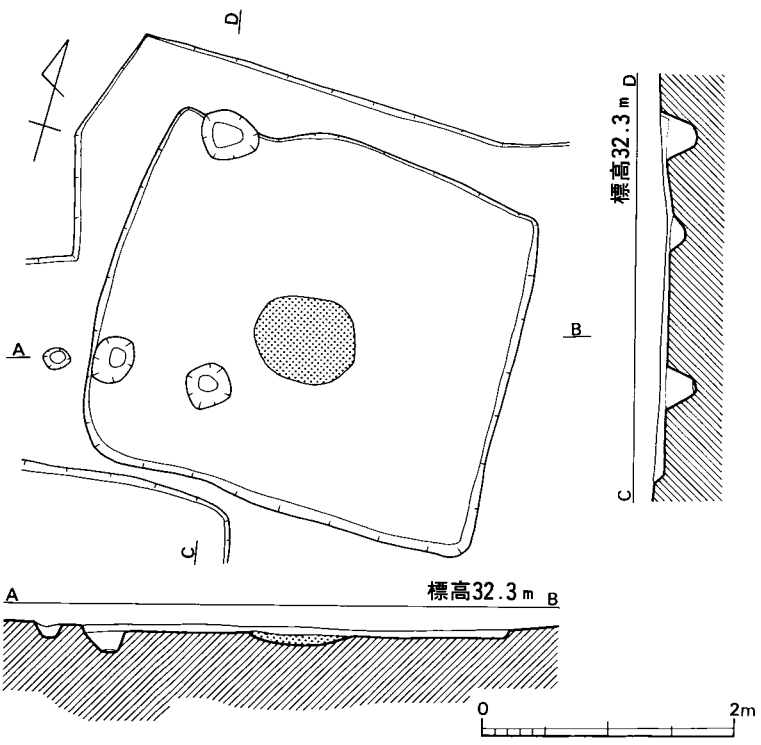
16号住居跡(第48図)

北側を11号住居跡に大きく切られ，東南隅上部を10号住居跡に切られる住居跡で，南壁のみを検出した。壁高は10cmを測り，南西隅の小ピットが柱穴になる可能性はあるが断定できず，詳細は不明である。遺物は土器片のほか石庖丁の破片が出土した。　(丸山)

土　器(第51図60)　60は，後期後半の11号住居跡より古い16号住居跡から出土した丹塗磨研壺形土器の底部。内面はナデの後に爪痕が多く残り，外面はタテの丹塗磨研が行われている。この破片の外に丹塗高杯の杯部小片があり，この16号住居跡は中期後半のものであることがわかる。

17号住居跡(図版20・21，第52図)

W70から西側に検出され，住居跡と土器の保存がよかったところから，北側に拡張して全プ

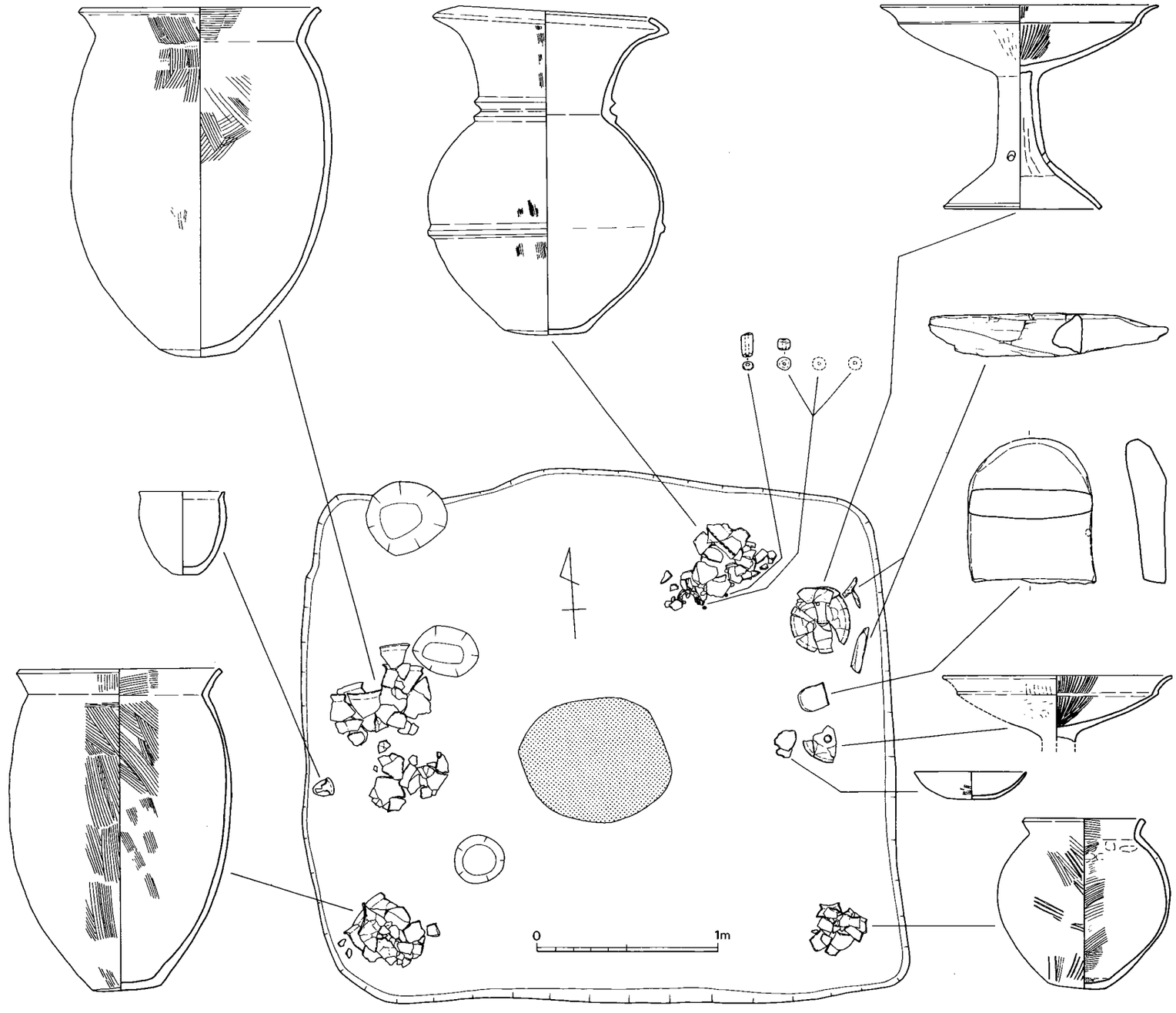


第 52 図　17 号 住 居 跡 実 測 図 (1/60)

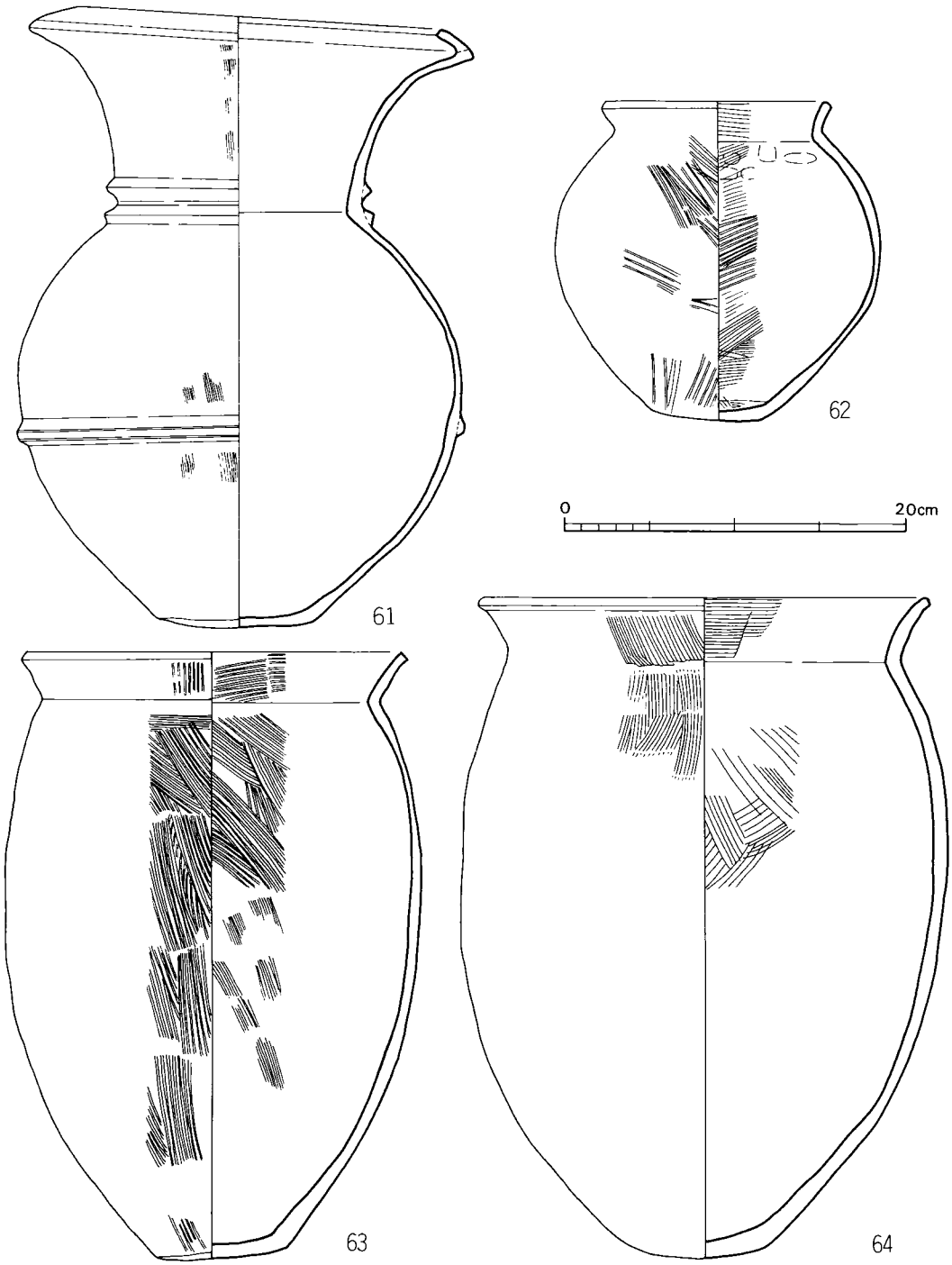
ランを調査した。北側の一辺は他のピットなどの重複のために不確実なところが多かったが，図のように復原できた。住居跡は，中央部で東西3.25m，南北3mの小型隅丸方形竪穴住居である。住居内には，ほぼ中央に80×66cm，深さ8cmの大きさの浅いくぼみがあり焼土と炭化物が詰っている。これは炉と思われるが焼土は少くなく，底面も焼けていない。住居跡内には，確実に柱穴といえるものはないが，炉に近い1つは柱穴の可能性がある。

住居内床面には，第53図のように当時の生活状態そのままの配置で土器・砥石・玉類が出土した。住居内西側には，甕2個と1つの小さな甕形土器が倒れ，東側には北から精製土器である袋状口縁壺・高杯・砥石2個体分・皿・小形甕の順に配置されている。倒れた袋状口縁壺の下には，ガラスの管玉1個，丸玉3個が連なり，高杯は杯部を下に伏せて置かれ，高杯1個の破片以外は全て住居跡上部が削平されていなければ完形品の土器が置かれたままの状態である。この住居内に鉄器が欠けているのが残念であるが，何かの事情で住居と生活用具を放棄せざるをえなかったのであろうが，当時の独身か2人世帯の生活用具が推定できるものである。

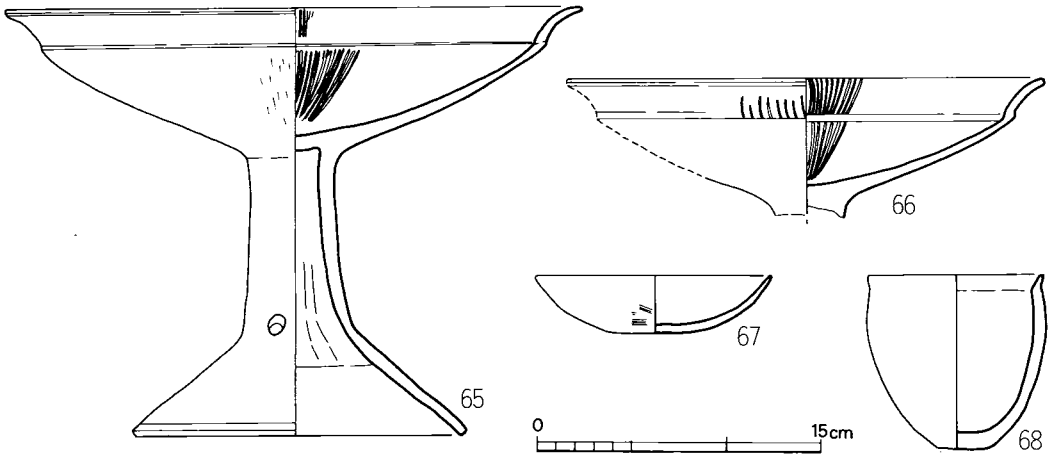
土　器(図版29，第54・55図61～68)　61は口縁部が割合広がる袋状口縁の壺である。壺は高さ35.7cm，口径21cm，頸部最小径14.2cm，胴部最大径25.8cmの大きさで，かなり口縁径が大きくなっている。頸部下端にやや太目の三角凸帯2本と，胴部中位よりやや下に台形凸帯1本をめぐらす。胴部は，丸みがあって凸レンズ状のふくらみのある底部をもつ。器面調整は，口縁部がヨコナデ，頸部が内外面共にハケ目の後に研磨的な丁寧なナデ仕上げとなっている。胴部も凸帯の周囲はヨコナデされているが，他は内面は研磨的なナデ，外面はハケの後に研磨している。胎土には砂粒を含むが，内面は黄褐色，外面は一見丹塗と思われるような赤褐色を呈し，



第 53 図　I－16　17 号住居跡内遺物配置図（½・¼・⅙・1/30）



第 54 図　17 号住居跡出土土器実測図①（1/4）



第 55 図　17 号 住 居 跡 出 土 土 器 実 測 図 ②（1/4）

焼成も良好である。62は壺的な丸みのある甕で，高さ18.8cm，口径13.5cm，胴最大径19cmの大きさである。口縁は短かく立ち，胴部中位がふくらんで，凸レンズ状の底部をもつ。器面調整は，内外面共に粗いハケ目が残り，丁重な仕上げとはいえない。

63・64は長胴の甕である。63は，高さ35.4cm，口径22.5cm，胴最大径24.3cm，64は高さ38.5cm，口外径26.5cm，胴最大径28.4cmの大きさ。口縁部は，わずかに湾曲して外反するが，器肉は先端がわずかに薄くなっている。胴部は長胴で，中位よりやや上に最大径があり，凸レンズ状底部をもつ。器面調整は，内外面共に割合粗いハケ目で，下半はナデ消している。64は胴部外面の中位に二次的な加熱により赤褐色に変色している。

65・66は高杯で，口縁部の外反部は幅が狭くて湾曲する。65は，高さ22.5cm，口径30.4cm，脚最小径4.4cm，脚裾径17.5cm，66は口径25.5cmの大きさである。器面調整は両方共に同様で，杯部口縁はヨコナデ後内面にタテに暗文，体部外面は中央方向にヘラケズリの後に同方向のヘラ磨き，内面は放射状の密なヘラ描き暗文を施す。脚部は，裾部が器面が荒れて調整不明であるが，柱状部外面はタテ方向の細いヘラ磨き，内面はヨコのヘラケズリとなっている。脚の柱状部下端に径１cmの円孔３個を穿孔している。

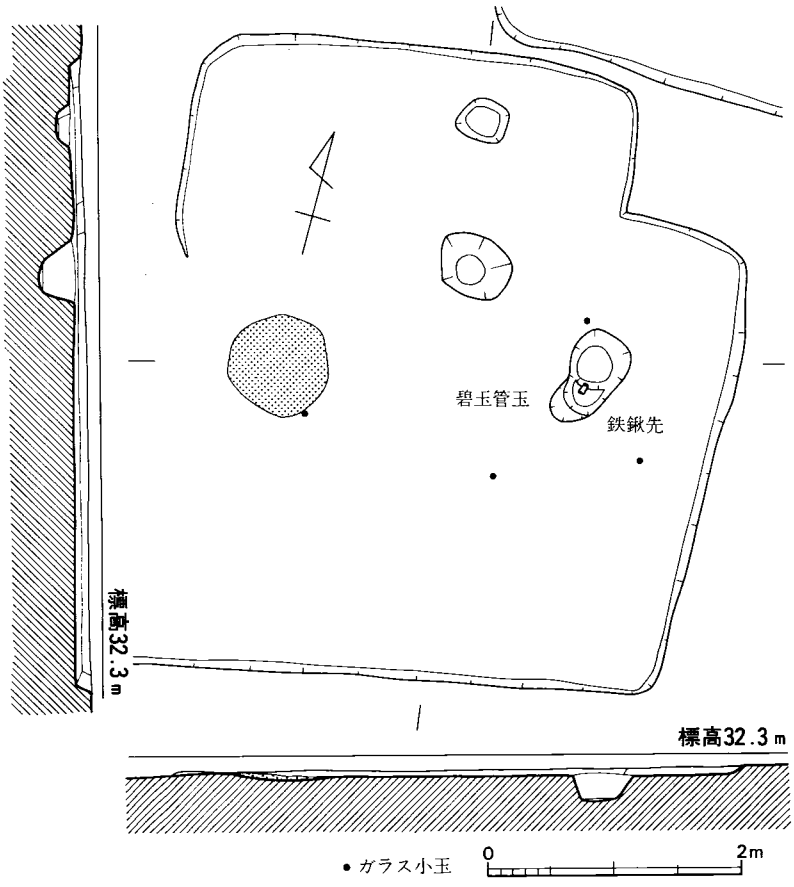
67は皿といえる浅いもので，高さ３cm，口径12.4cmの大きさ。器面が荒れて調整不明なところが多いが，外面の一部に粗いハケ目が左から右方向につけられている。わずかな平底にもハケ目が残る。

68は，高さ9.3cm，口径9.4cmの大きさの小形甕といえるものである。口縁は短かく尖がり，胴部から底部は器肉が厚い。器面調整で外面にタテの細かいハケ目が残り，内面は幅1.1cmほどのヘラ状用具でヨコにナデられている。

18号住居跡（図版22，第56図）

この住居跡は,17号住居跡以上に他の遺構と重複して,完全な状態でプランを確認することができなかった。住居跡の壁面は，北側と東側は他の遺構より新しく輪郭線を確認したが，南側は部分的に確認して復原し，西側は一部のみで床面と同一レベルになってしまった。住居跡は，第56図の現状では北側に張出しがある形態となり，この部分のみ一括土器が出土しなかったので，一時期古い住居跡が重複している可能性もあり，このことを意識してプランを確認したのであるが，新旧関係はつかめず同一住居跡とした。住居跡の大きさは,南北約５ｍ,東西4.55ｍの規模で，西側寄りに炉跡がある。炉跡は，径80cmの大きさで，わずかなくぼみに薄く黄褐色粘土を敷き，その上に炭化物がのっているが，粘土はほとんど焼けていない。住居内の床面は，この地区全体の地山が礫層であるため，写真で白く礫が見えるところが地山で，他は重複遺構となり，確実な柱穴が確認できるものが少ない。第56図のように確認できたピットでは，主柱となるように思えないが，住居内南側の重複遺構内に柱穴があったとすれば，中央部のピットと対になって２本柱となる可能性もある。

住居跡床面には，多量の土器群と鉄器・玉類が発見された。土器は，住居跡中央部から北東側の床面に多く，床面に倒れてつぶれたといえる甕が多く，他の器種は破片として床面から出土した。住居内東側ピットの南縁で鉄鍬先の完形品が出土し，床面全体に玉類が散乱していたが，玉類の数はこれ以上あったものと思われる。住居跡西側の炉跡付近から西側一帯には，弥生中期末の土器片が多く，この時期の遺構があった



第 56 図　18 号 住 居 跡 実 測 図（1/60）

ものと思われる。

土　器(図版30－32，第57～61図69～98)　69は広口壺に口縁部をつけなかったようなもので，現状では甕といわざるをえない。口縁は，頸部のようにわずかに外反するが，直立に近い。肩部に台形凸帯をめぐらし，この部分のみヨコナデするが，他は粗いハケ目調整である。70は長頸壺の頸部のみの破片で，粘土紐の継目がよく観察できる。頸部はほとんど直立し，外面はタテ方向のヘラ磨き，内面は下から上にナデられている。胎土にはほとんど砂粒を含まず，内外面は一部赤褐色部と淡褐色部があり，焼成良好な精整土器である。71は，台付球形の甕である。内面に細かいハケ目を残すが，外面は丁寧にナデられてハケ目を消している。台部は，接合部からきれいに剝離している。72は，長胴で壺と甕の中間形といえるもので，口縁は頸部といえるように直立し，端部を内側に摘み上げている。大きさは，高さ27.3cm，口径12.2cm，胴最大径21.2cmで，胴最大径が上位にあって肩部をなす。胴部上半にはハケ目が残るが，下半はケズリ状の痕跡が残ってハケ目が消えている。底部を欠いているが，凸レンズ状の底部となる。

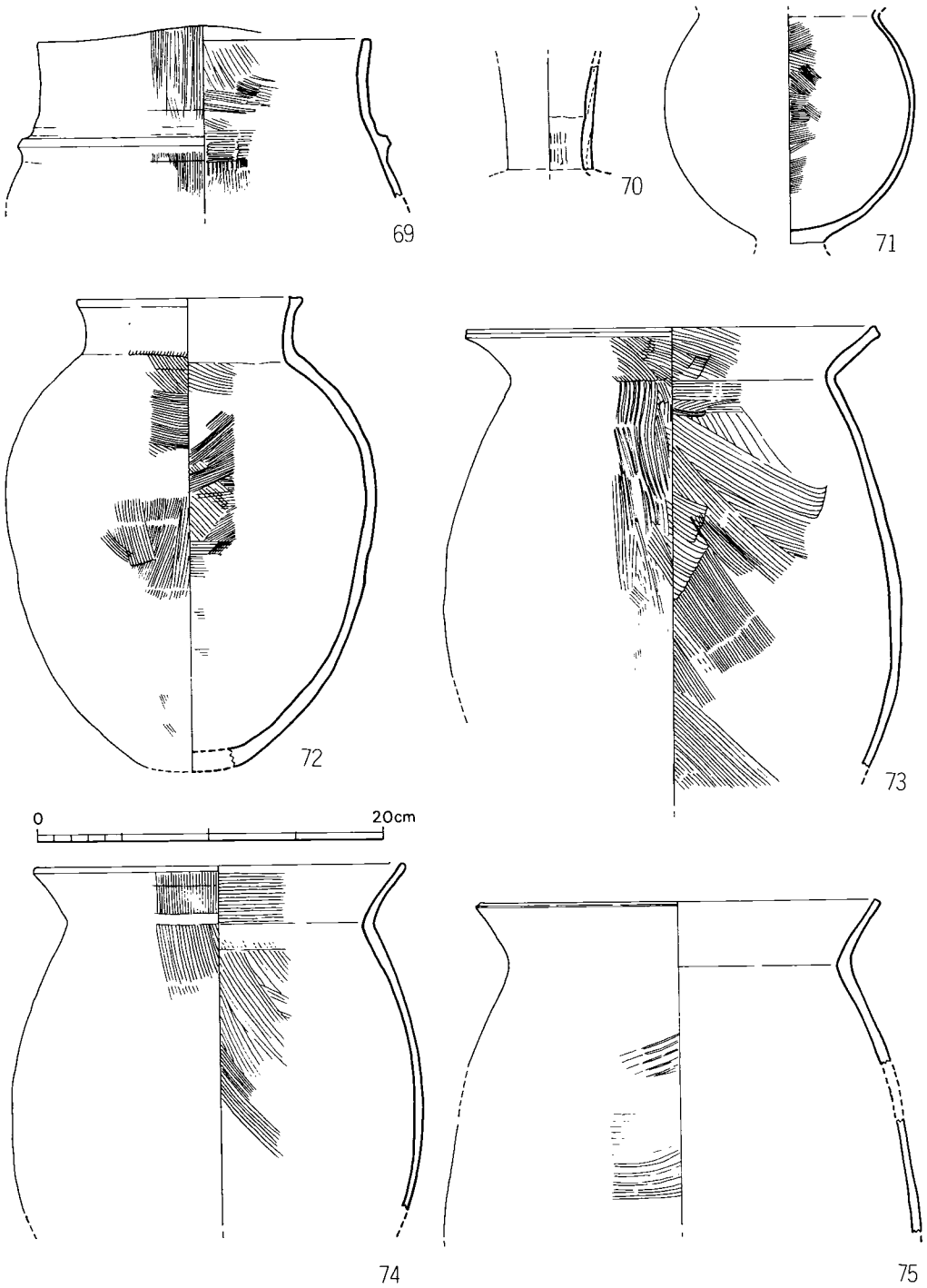
73から86までは，ほぼ同一形態の甕で，最大のものは76で，高さ39.3cm，口径22.3cm，胴最大径28cmの大きさである。大きいものに対し，小さな81は，高さ29.2cm，口径17.4cm，胴最大径19.8cmの大きさで，形態が多少異る。すなわち，口縁径と胴最大径からこれらの甕を2分することができる。甕の大きさはかならずしも関係ないが，80・81・83・84の4個は他に比較して口縁が広く，口縁先端が肥厚する傾向がある。この特徴は，80・81に顕著であるが，80は胴最大径が上位に移る傾向が現われている。これらの諸特徴は，次の時期に見られるものである。器面調整は，73～86に通じて同一で，胴部のタタキの後に割合粗いハケ目調整をし，外面下半はタテのケズリ状調整で丸底とし，タテのナデを行っている。87・88は小形甕で，87は前記の甕の小型といえるが，88は胴部が球形となっている。調整法も前記甕に同じ。

89は，短頸壺といえるもので，口縁部が直立に近づく。胴部は球形に近いが，内外面に粗いハケ目の後，外面下方3分の1は底部中心方向のヘラケズリで丸底にしている。底部近くのケズリは，甕のようにナデて消していない。

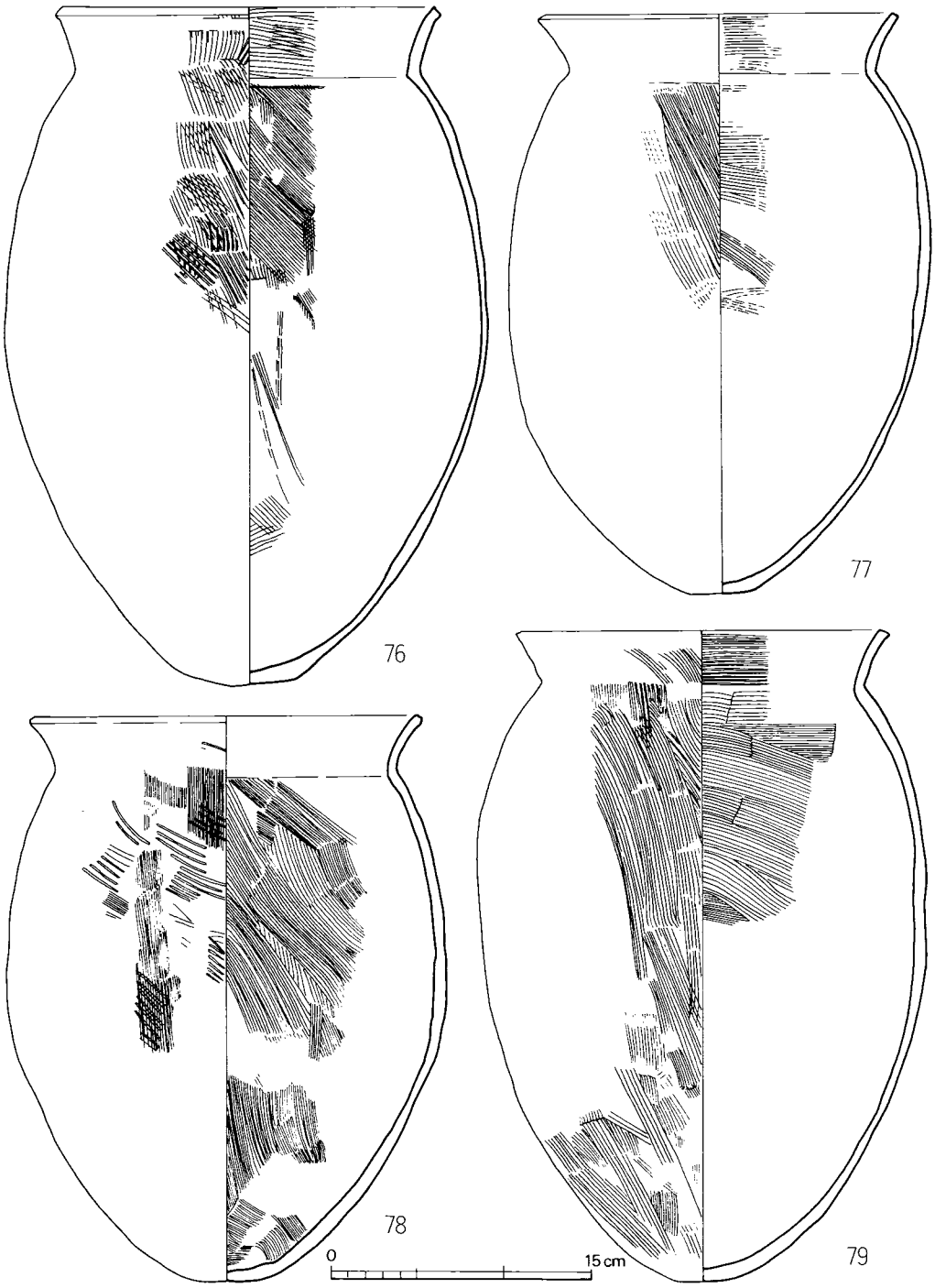
90は大形の鉢で，甕と同一手法で下半をケズリ，丸底とした後にタテ方向にハケでナデている。高さ12.3cm，口径27cmの大きさである。

91・92は台付甕の台部で，88のような球形の甕に付くものであろう。

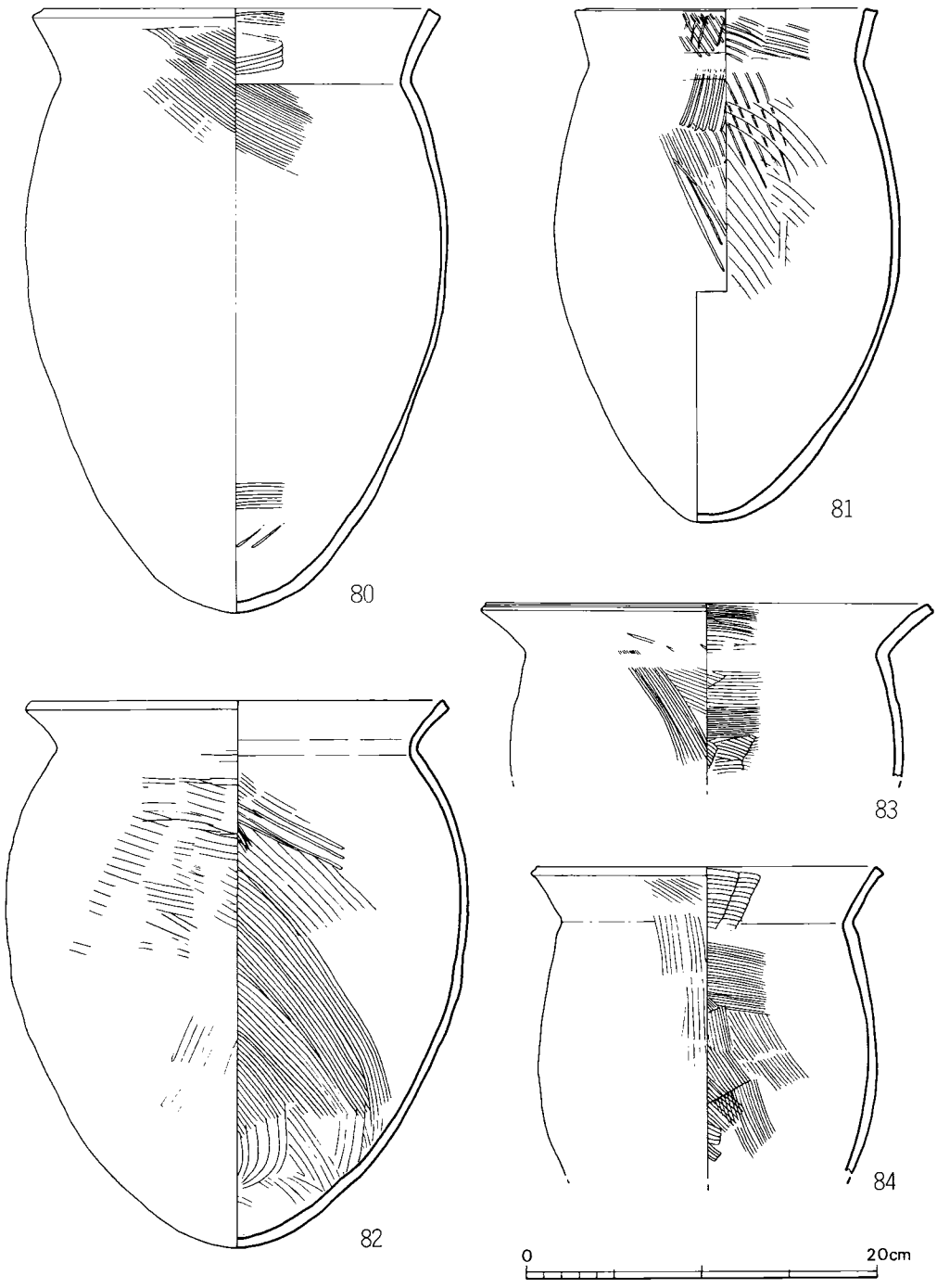
93～97は，高杯である。93・94の杯部は，口縁の外反部幅がかなり広くなり，傾斜もゆるくなっている。93は口径32cm，94は口径31cmの大きさで，94がハケ目の後にナデて，ハケ目を完全に消していないが，93はハケ目が残らず，最後に放射状の暗文を施す。95～97の脚部は，粘土継目の明瞭なもので，ソケット状に継いで補強したもの（96）や，柱状部をしぼって上端を塞いで杯部底とするもの（96・97）があり，外面はタテに磨くもの（97）や磨いたようにナデるものがある。脚部の穿孔は，95が4個，97が3個である。



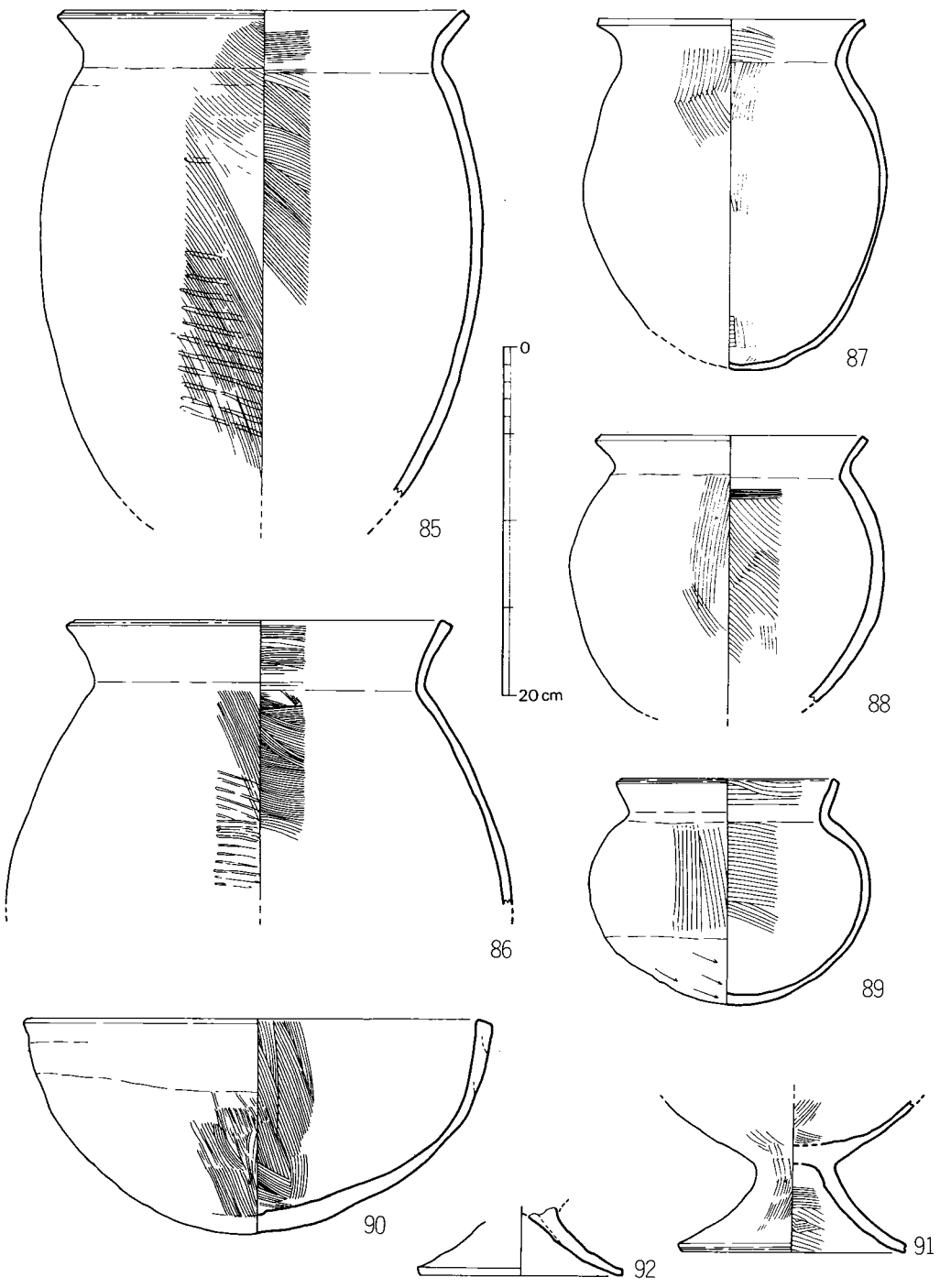
第 57 図　18 号 住 居 跡 出 土 土 器 実 測 図 ① (1/4)



第 58 図　18 号 住 居 跡 出 土 土 器 実 測 図 ② (1/4)



第 59 図　18 号住居跡出土土器実測図③（1/4）



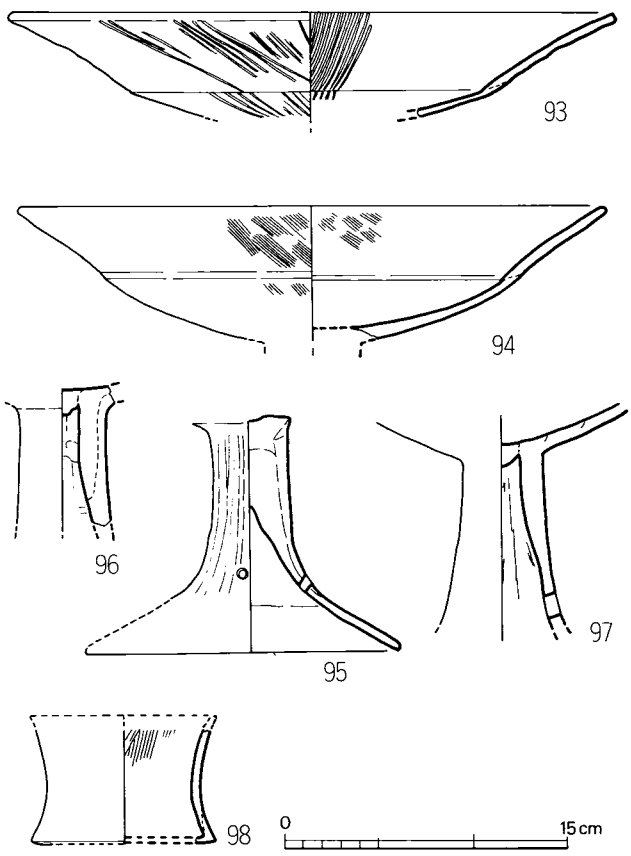
第 60 図　18 号 住 居 跡 出 土 土 器 実 測 図 ④ (1/4)

98は，ジョッキ形の土器で，底径9.7cm，高さは7cm以上にはならないであろう。器面調整は，内面上部にハケ目が残るが，内面がナデ，外面は斜めに磨かれている。胎土には砂を含まず，外面は淡褐色，内面黒色の良好な焼成となっている。

18号住居跡出土の土器は，甕以外は破片資料が多いが，弥生終末の一括資料といえるものである。

19号住居跡（第36図）

この住居跡は，北側を18号で，西側を不整形ピット群で破壊され，東南側のコーナのみが残っている。したがって住居跡の規模は不明であるが，18号住居跡よりも古い。



第 61 図　18号住居跡出土土器実測図⑤（1/4）

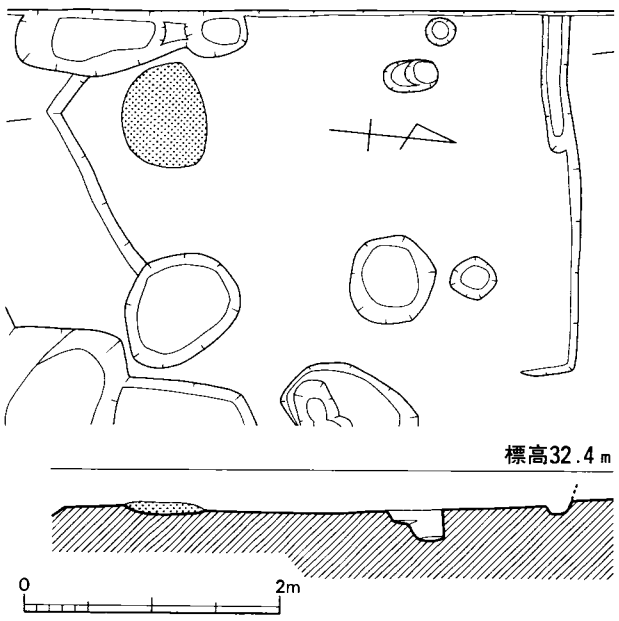
土　器（第64図99・100）　99は高杯の杯部破片で，口縁の外反部の幅は狭く，基部は立って先端が大きく外反する。内面は全面ヘラヨコ磨きで，外面はヨコナデの後に外反部のみタテのヘラ描暗文を施す。

100は壺の口縁部破片である。大きく外反した口縁先端に，板目キザミをめぐらし，頸部外面はタタキの後に下半のみ斜め上にケズリを残している。

20号住居跡（図版23－２，第62図）

この住居跡は，調査区西端に半分ほどが検出されたものであるが，南半はさらに終末期の遺構によって破壊されている。住居内には，径65×83cmの炉跡が検出されているので，炉が住居のほぼ中心とすれば，南北の大きさは約6.4ｍの規模となる。住居の壁は，北側のみ確認されたが，壁下の一部に幅20cmの溝がある。柱穴は，四本柱とすれば，北東側のピットが柱穴となるかもしれない。

遺物は，18号住居跡からこの住居跡にかけて，弥生中期末の土器片が，多く発見されたが，住居跡に伴うと思われるものは少量の破片のみであった。



第 62 図　20号住居跡実測図（1/60）

土　器（第64図101～103）　101は甕で，胴下半を欠くのでこの部分の調整が不明であるが，外面にタタキ目を残している。

102は高杯の杯部で，外反部の幅は広くないが，かなり傾斜している。器面調整は，粗いヨコナデが多く，暗文を施さない。

103は大形の壺の底部であろう。わずかな底部を持っている。これらの土器は，後期後半に属するものである。

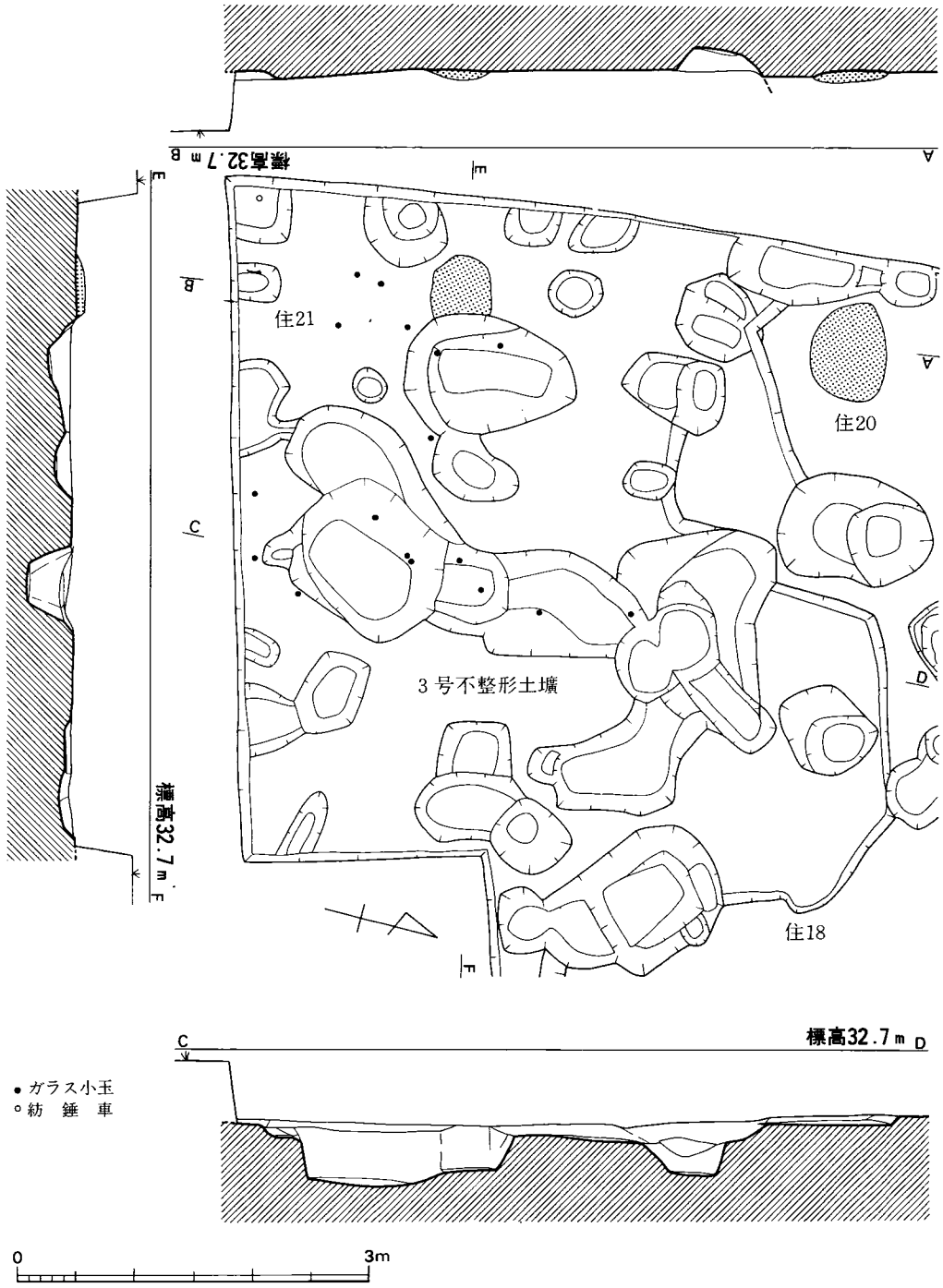
21号住居跡（図版23－３，第63図）

この住居跡は，調査区の西南端で検出されたもので，住居跡のプランを確認したものではなく，周辺遺構の調査の結果，床面と炉跡を検出し，遺物からも住居跡として認識できたものである。20号住居跡との関係で，その切合いから20号より新しいことが判明しているが，21号住居としたものの東側には，３号不整形土壙としたピット群があり，これとの前後関係が不明確である。21号住居跡は，東側でまったくプランをつかめなかったことから，３号不整形土壙の上層は21号住居内に含まれる可能性が強く，出土遺物についても，３号不整形土壙内には21号住居内と同一時期の土器やそれより古い土器が含まれている。21号住居跡床面には，径50cm以上の炉跡があり，この炉跡が中心とすれば，20号住居を切った壁から南北５m以上の方形住居跡になろう。南西隅の土壙は住居跡より古い。

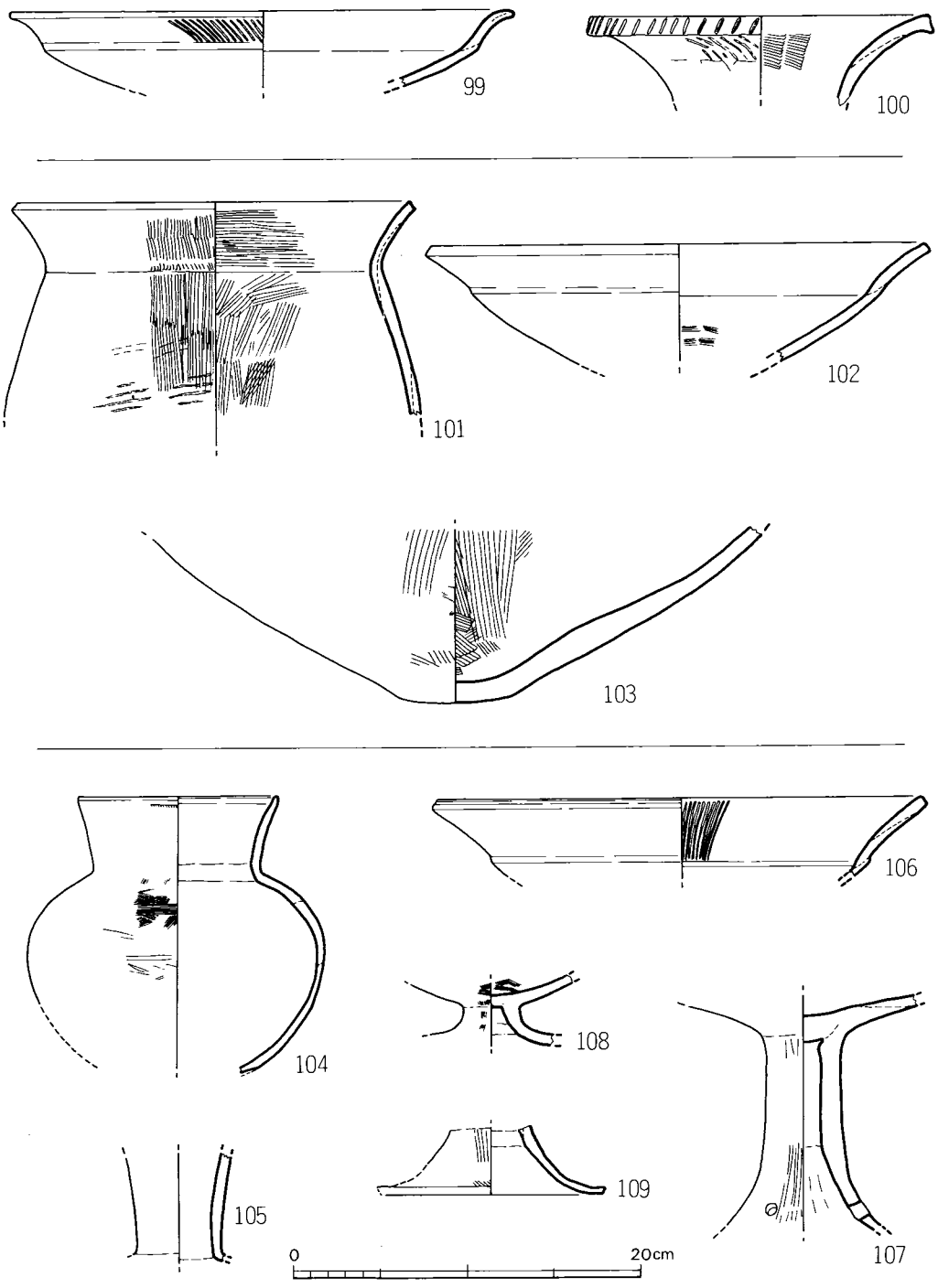
住居内では，第63図のようにガラス小玉が発見されている。

土　器（図版32，第64図104～109）　104は西南隅の床面から出土した広口壺で，21号住居に直接関係ある土器である。壺は底部を欠くが，高さ約16.5cm，口径11.5cm，胴最大径17cmの大きさで，開いた口縁の先端がわずかに内側に折曲するのが特徴となっている。器面調整は，口縁から頸部の内外面はヨコナデ，胴部内面はナデ，胴部外面はわずかにタタキ目が残っているところから，タタキの後に細かいハケ調整をして，下半はさらにナデられている。胎土は，細かい砂粒を含む黄褐色を呈し，良好な焼成となっている。105は，細頸壺の頸部破片である。頸部最小径4.8cmで，内面はタテナデ，外面はタテにヘラ磨きされている。胎土には，細かい砂を少し含み，赤褐色の良好な焼成となっている。

106～108は高杯各部の破片である。106は，杯部片で内面にヨコナデ後に暗文が施されている。



第 63 図　21 号 住 居 跡 実 測 図 (1/60)



第 64 図　19～21 号住居跡出土土器実測図 (1/4)

107の脚部は，３個の円孔を持ち，柱状部内面の下方にヘラケズリを行い，外面はタテにハケでナデられている。108は，脚部が短かく低いもので，杯部には106のようなものと，椀状の広口壺がつくものがある。器面調整に細かいハケを使用している。

109は，脚台で，広口壺か球形の甕に付くものである。

21号住居跡の時期は，104の壺と108の高杯に土師器的特徴が見られるところから，弥生終末から古墳初頭といえるだろう。

玉　類(巻頭図版，図版34－２，第65・66図，表４)

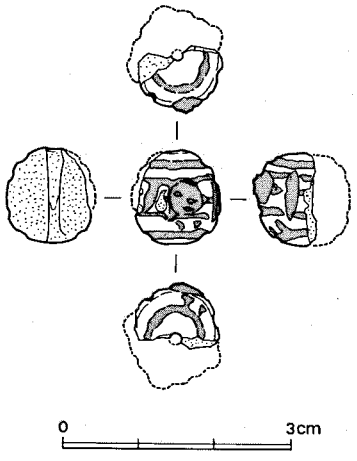
ファイアンス玉(巻頭図版－２，第65図)

ファイアンス玉は，後期後半の１号住居跡中央ピットから発見された。発見されたファイアンス玉は，直径（孔と平行方向）12㎜の丸玉状のもので約半分が欠損している。

ファイアンス（英Faience，独Fayence）とは，胎土に石英の細粒を使用し，可塑剤として天然ソーダか釉原料を用いて練り固め，その表面にソーダ釉をかけて焼いたもので，有名なツタンカーメンの黄金のマスクの胸飾の一つとしても使用されている。ファイアンスの起源は，ガラスに先行するのは当然であるが，その定説はないようである。ファイアンスの出現の時期は，エジプトのナカダ期やアムラー期，メソポタミアのウバイド期などがあげられるように，この地方に起源をもち，後にはインドやヨーロッパなどに広がり，中国には戦国時代にトンボ玉として登場する。

中国出土のファイアンス製トンボ玉は，東京国立博物館や天理参考館などの博物館で見るかぎりで，三雲出土品と比較すると大きく文様も豪華であるが，表面に光沢がないものが多いように思われる。ファイアンスに関しては，日本で最初の発見であるし，手に取って観察できる機会もなかったので，「一夜漬」の感を免れないが，三雲遺跡仲田Ⅰ－16の１号住居跡出土のファイアンス玉の表面的な観察を記しておきたい。

ファイアンス玉は，半分が欠損しているために，ファイアンスの条件の１つである胎土をよく観察できる。欠損した面を見ると，第１に径1.8㎜の孔が縦に走り，紐に通す飾玉であることが明らかである。次に胎土は，淡桃色もしくは白桃色の細粒の結合体であるが，気泡状の微細な孔もあり，一見粗密であり，胎土が粘土やガラスでないことは明らかである。第２の条件として，ファイアンスは珪酸を主原料としていなければならないが，これは別に分析中で，次回の報告となろうが，肉眼の観察で胎土が粘土でないことが明らかな以上，これで十分かと思われる。

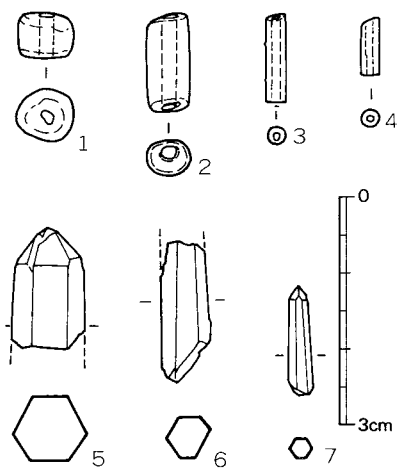


第 65 図　ファイアンス玉実測図(実大)

第３の条件は，施釉されていることであるが，これも一見すれば明らかなように，青色ガラス質の薄い釉で表面が覆われている。ファイアンス玉本体には，釉をかける前に第65図のように，孔と直交する方向のリング状の凹線が５本めぐり，さらにその中央の３本には，これに直交する凹線と隆起円文が加わり文様を構成している。これらの文様となる凹線内には，釉が溜って濃青色となっている。これらの文様のうち問題となるのは隆起円文で，凹線内に釉が溜って他より色濃くなるのは当然であるが，隆起した部分に釉が溜ることはなかろう。この隆起円文は，現在する部分では１個であるが，これが意図して作られた隆起文であるとすれば，一種の象嵌となる。ファイアンス玉に，象嵌的手法が用いられたとすれば，中国的色彩が強く戦国時代のファイアンス製トンボ玉に通じるところがある。ファイアンスは，後世にも日本で製作されたり，流行することがないので，当然大陸伝来品と考えなければならず，中国の漢時代にあればよいが，なければパァルティア王朝あたりに求めなければならなくなる。いずれにしろ，分析結果と合せて今後も各地域のファイアンス玉との比較検討を続けていきたい(註１)。

ガラス丸玉(第66図１)　後期後半の17号住居跡床面で，ガラス管玉１個と丸玉３個が連なって出土した内の１個。丸玉は，長さ6.0㎜，径6.9～7.45㎜，孔径2.05㎜の大きさの青色ガラス製である。ガラス玉内には，小さな気泡があり，孔と平行に連なっていることから，孔と平行方向に引伸して作ったものと思われる。

17号住居跡からは，他に２個の丸玉が連なって発見されたが，この２個は風化が著しくて原形をとどめないが，白色に風化して分解した現存品を観察すると，孔を中心に同心円状に剝離している。この玉の分析を行っていないので，材質は不明であるが，『三雲遺跡』Ⅰで報告した番上II－６の12号住居跡出土の鉛ガラス丸玉と同様であろう。番上II－６よりも風化と剝離は著しい。



第 66 図　Ⅰ－16 出土玉類実測図（実大）

ガラス管玉(第66図２・３)　２は１と同様に17号住居跡で発見された空色ガラス製。管玉には，一方に古い破損面があり，現存部は長さ12.55㎜，径4.55～5.75㎜，孔径1.85㎜の大きさである。孔は通して同一の大きさであるが，管玉本体が楕円形を呈することもあってか，一方に片寄っている。気泡は多いが，走る方向は不明。

３は，W78－S84地区の東南コーナー３層下部で発見された赤褐色ガラス管玉。管玉は，発掘時に一方を欠損したらしく，現存長11.55㎜，径2.4～2.55㎜，孔径 1.1～1.2㎜の極細品である。管玉表面には，孔と平行する方向に無数の極細条線が走り，引伸し法によって作られたことが明らかである。さらにこの赤褐色の管玉は，不透

明であるため透しによる観察はできないが，表面観察によると，表面には小さな突起状のふくらみがあり，ガラスが冷却するときに生じる収縮によって，表面から浅いところにある気泡が突出した状態を現わしている。

赤褐色のガラス管玉は，現在では弥生に伴うものが知られていないが，『三雲遺跡』Ⅰで報告した加賀石Ⅰ－22の黄色ガラス管玉と同様で，弥生終末期に伴うものとしてよいだろう。佐賀県二塚山26号土壙墓出土ガラス管玉(註２)は，色が紺青色であるが，条線とふくらみは同様で，同一手法で作られたことが明らかである。二塚山遺跡では，「長宜子孫」系連弧文鏡が伴っていることから弥生終末期といってよいだろう。

碧玉製管玉(第66図４)　４は，終末期の18号住居跡床面から出土した極細管玉。管玉は，長さ7.8㎜，径2.5㎜，孔径1.15㎜の大きさで，孔は両側穿孔となっている，管玉は，淡緑色碧玉製である。

水晶原石(第66図５～７)　５は，W76－S86の３層で発見されたもので，最大径9.7㎜の大きさ。６は，W78－S84の東南床面で発見されたもので，先端を欠損し最大径 6.3㎜の大きさ。７は，W60－S82の11号住居跡内P237から発見された，最大径3.2㎜の細いものである。水晶原石は，３個共に透明度がよく，品質のよい水晶玉となるだろう。

ガラス小玉(図版34－２，表４)　ガラス小玉は，１・３・９・12・18・20・21号の各住居跡内と３号不整形土壙から発見されたが，とくにW70から西側の遺構内で多く出土した。ガラス小玉が出土した遺構は，１号・12号・20号住居跡が後期後半で合計４個であるのに対し，終末期の３号・18号・21号住居跡と３号不整形土壙で発見された合計は34個に達する。さらに，21号住居跡と３号不整形土壙付近の排土中から15個が発見されているので，終末期遺構に伴うものは合計49個にのぼる。18号・21号・３号不整形土壙内の埋土の全てをふるいにかけていれば，さらに総数は増加したであろう。３号不整形土壙の場合に，出土した土器のところで述べたように，埋土上層に遺物が集中しているので，21号住居跡の遺物である可能性が強い。

ガラス小玉の製作法については，春日市門田遺跡出土の土壙墓と玉類の報告を兼て述べたことがあるが(註３)，仲田Ⅰ－16出土においても製作法においてかわることがない。すなわち，ガラス小玉に観察できる気泡が，孔と平行方向に連なることから吹きガラス技法あるいは引延法によって製作し，管状製品の切離方法とその後の処理法によって形態が異なるのである。この吹きガラス的引延法を裏付けるものとして，前回は気泡の連なる方向のみによったが，今回は表４の計測表No.１と６のように青色ガラス玉に孔と平行する方向の紫色のスジがあり，色違いの文様となっている。この文様が意図された文様とはかぎらないが，２色が混合する場合に不規則な文様となれば別であるが，一定の幅をもったスジとなれば，それと平行方向に引延したものとしか考えようがない。ガラス丸玉製作技法には，細い芯棒にガラス溶材を巻付ける手法があるが，この手法を小玉に採用した場合には小玉の大きさに限度があり，小さなものは作

表4　仲田Ⅰ－16　ガラス小玉計測表

（単位mm）

No.	出土遺構	径	厚	孔径	分類	色	No.	出土遺構	径	厚	孔径	分類	色
1	1　住	6.8 7.75	3.9	2.2	C	グリーンブルー　紫のスジ	28	21住付近	3.4	2.55	1.3	C	グリーンブルー
2	3　住	4.75	3.9	1.7	C	グリーンブルー　ひび	29	〃	3.0	2.0	1.1	C	〃
3	〃	3.6	2.8	1.8	C	スカイブルー	30	〃	3.2	1.8	1.25	D	〃
4	〃	3.9	2.3	1.3	C	〃	31	〃	3.4	2.0	1.0	C	〃
5	9　住	3.45	2.0	1.1	C	コバルトブルー	32	〃	3.15	1.9	1.1	D	〃
6	12　住	4.45	3.3	1.4	C	スカイブルー　紫のスジ	33	〃	3.05	1.95	0.9	D	〃
7	18　住	5.6	6.15	1.8	A	スカイブルー	34	S84～88 W76～78 不明遺構	7.15	4.45	2.8	C	コバルトブルー
8	〃	5.5	3.35	2.15	C	〃	35	〃	5.25	4.2	2.2	C	スカイブルー
9	〃	3.3	2.9	1.4	C	〃	36	〃	4.2	3.55	1.55	C	〃
10	〃	3.2	1.65	1.25	D	〃	37	〃	3.45	1.6	1.6	D	〃
11	〃	2.4	1.5	1.0	D	コバルトブルー	38	〃	5.0	3.05	1.45	E	グリーンブルー
12	〃	2.5	1.8	0.8	D	イエローグリーン	39	〃	3.7	1.55	1.55	D	〃
13	20　住	3.55	1.95	1.5	D	スカイブルー	40	W70以西 排土中	7.4	5.45	2.7	C	コバルトブルー　タテにすじ
14	〃	3.1	1.8	1.1	D	〃	41	〃	6.6	5.3	1.9	C	〃
15	21　住	5.9	3.0	2.0	C	コバルトブルー	42	〃	4.6	3.8	1.4	C	〃
16	〃	4.0	3.35	1.3	E 研磨	スカイブルー	43	〃	4.9	4.0	1.4	C	〃
17	〃	3.55	2.6	1.5	C	〃	44	〃	3.0	3.85	0.7	B	〃
18	〃	3.05	2.3	1.1	C	〃	45	〃	3.8	1.6	1.25	D	〃
19	〃	2.6	1.8	0.9	D	〃　一方に突出	46	〃	5.4	2.5	2.15	C	スカイブルー
20	〃	2.9	1.5	1.2	D	イエローグリーン	47	〃	3.1	2.2	1.5	C	〃
21	21住付近	6.95	3.95	2.5	C	コバルトブルー	48	〃	3.2	2.65	1.3	E	〃
22	〃	5.6	3.6	1.4	C	スカイブルー	49	〃	2.8	2.05	1.2	C	〃
23	〃	5.2	2.85	1.8	C	〃	50	〃	2.8	2.1	1.3	C	〃
24	〃	4.7	3.2	1.8	C	〃	51	〃	2.85	1.6	1.3	D	〃
25	〃	4.0	2.45	1.65	C	グリーンブルー	52	〃	3.05	1.3	1.25	D	〃
26	〃	3.8	2.2	1.6	C	〃	53	〃	2.9	1.05	0.9	D	〃
27	〃	3.45	2.8	1.35	C	〃	54	〃	2.3	1.2	1.0	D	イエローグリーン

れないであろう。しかも，小玉は小さいだけに大量生産されなければならないところから，小玉生産には巻付け技法は採用されないであろう。

ガラス小玉の分類については，門田遺跡で分類した５類をそのまま使用した。すなわち，Ａは径４㎜前後で厚さも径と同じ程度であるが，厚さが径よりわずかに大きいものがあるため，歪んで長く見える小玉。ＢはＡより小さく３㎜前後で，径より厚さが大きく長い小玉。Ｃは４～５㎜のものが主体であるが，３㎜前後のものも多く，径より厚さが小さく，外形は丸味のある玉らしい小玉。Ｄは径３㎜以上のものと微小小玉の２㎜以下のものがあるが，Ｄの特徴は厚さが著しく薄い。Ｅは輪切りにしたそのままの状態に近いもので角がある。

辰　砂(巻頭図版６，図版34－２)　W78－S86の第３層出土で，位置では弥生終末から古墳初頭の21号住居跡に属するもの。大きさは，11.5×7.4×8.2㎜の不整立方体結晶で，光沢のある水銀朱色を呈する。重量は3.35ｇ。番上II－６のものと違って熔解した痕跡のない原石。

鉄　器(図版35，第67図)

鉄　鏃　１は，後期後半の１号住居床面出土。復原長さ約５cm，最大幅1.7cmの大きさの有茎式で，凸レンズ状の断面形をしている。茎と身の区別がはっきりしないもので，茎の大きさが幅 5.5㎜，厚３㎜と割合大きなものとなっている。２は，終末期の10号住居内から出土した完形品。身と茎の区別が明瞭な有茎式で，長さ5.1cm，最大幅1.3cmの大きさである。茎は細く，長さ２cm，径0.25cmで先端が尖る。身の断面形は凸レンズ状をしている。３は，２と同じ10号住居の埋土中から発見された有茎式である。大きさは，長さ5.5cm，最大幅1.4cm，茎長さ2.5cm，茎幅約0.4cmである。身の断面形は，やはり凸レンズ状をしている。４は，１号住居跡埋土上層から出土したもので，時期は後期後半以後のものである。大きさは，現存長5.7cm，最大幅2.15cmで，２の大形品といえる。

刀　子　５は，荒らされた１号石棺の墓壙内から発見された破片で，両刃状を呈するが全体形は不明である。

６は，10号住居跡から発見された破片で，刀子と思われる。刀子にしては切先がないが，一側が刃状を呈することから，刀子状の工具であろう。

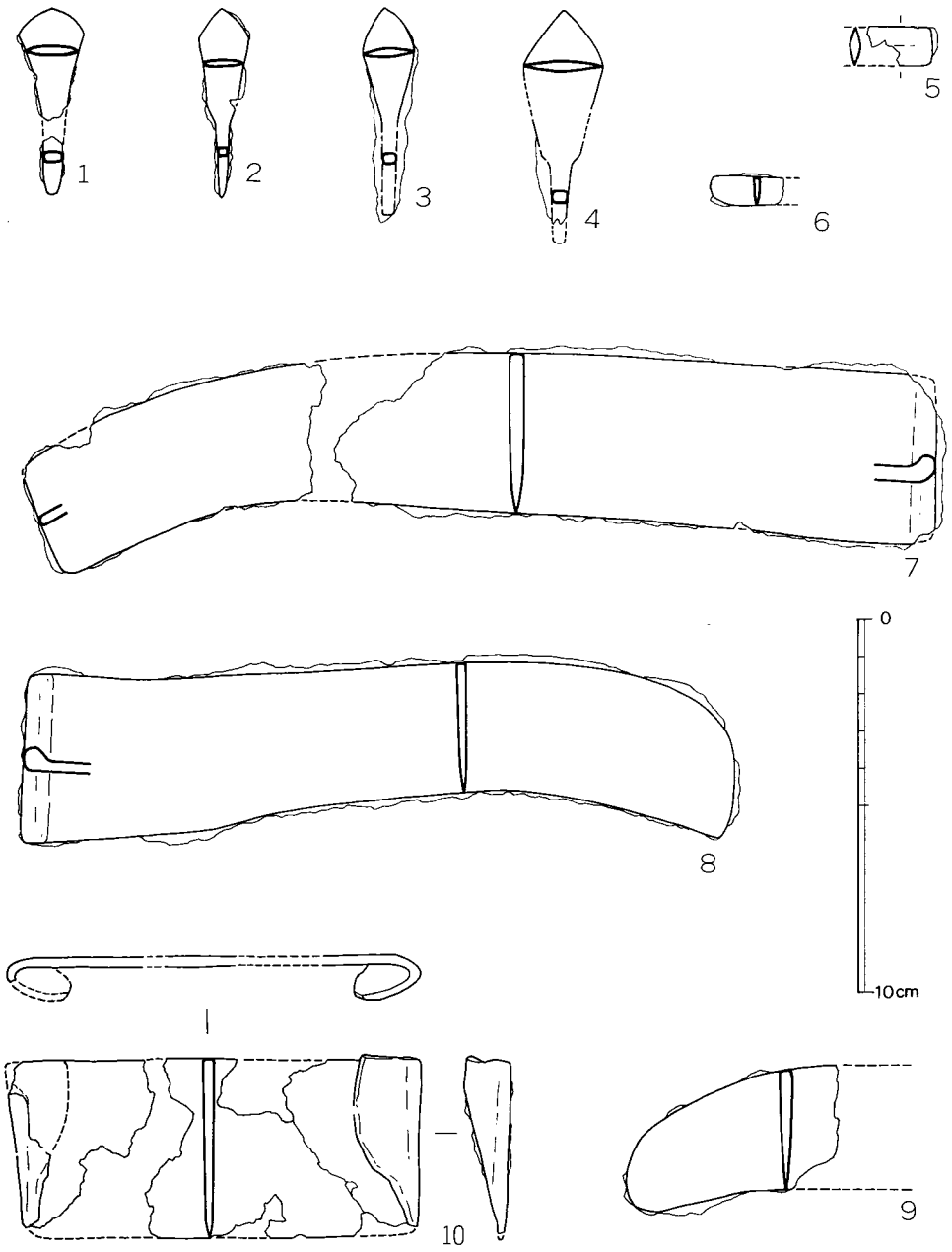
鉄　鎌　７は，W44－S82のP23から第83図のように器台が伴出している。器台から時期は終末である。鉄鎌としては大形品で，長さ約24.5cm，最大幅（基部)4.6cm，最小幅（先端)3.3cm，最大厚（基部）４㎜，最小厚（先端）３㎜となっている。木柄を着装する基部は，端部に添って折り曲げ状に肥厚させている。

８は，終末期の３号住居跡上層で石庖丁と共伴している。大きさは，長さ19cm，基部幅4.3cm，基部厚さ３㎜で，背が先端近くで丸みを持つ。刃部は，研ぎ減りのためにいっそう彎曲している。基部は，端部に添って肥厚させている。

９は，４号住居跡上層で出土した破片で，伴出品がないので時期は不明。現存最大幅3.3cm，

厚さ３㎜の大きさである。

鉄鏃先　10は，終末期の18号住居跡床面から出土したもので，直刃であるところから鏃先とした。鏃先は，発掘時の不注意で破損したが，幅は出土直後に計測していたもので11cmあり，

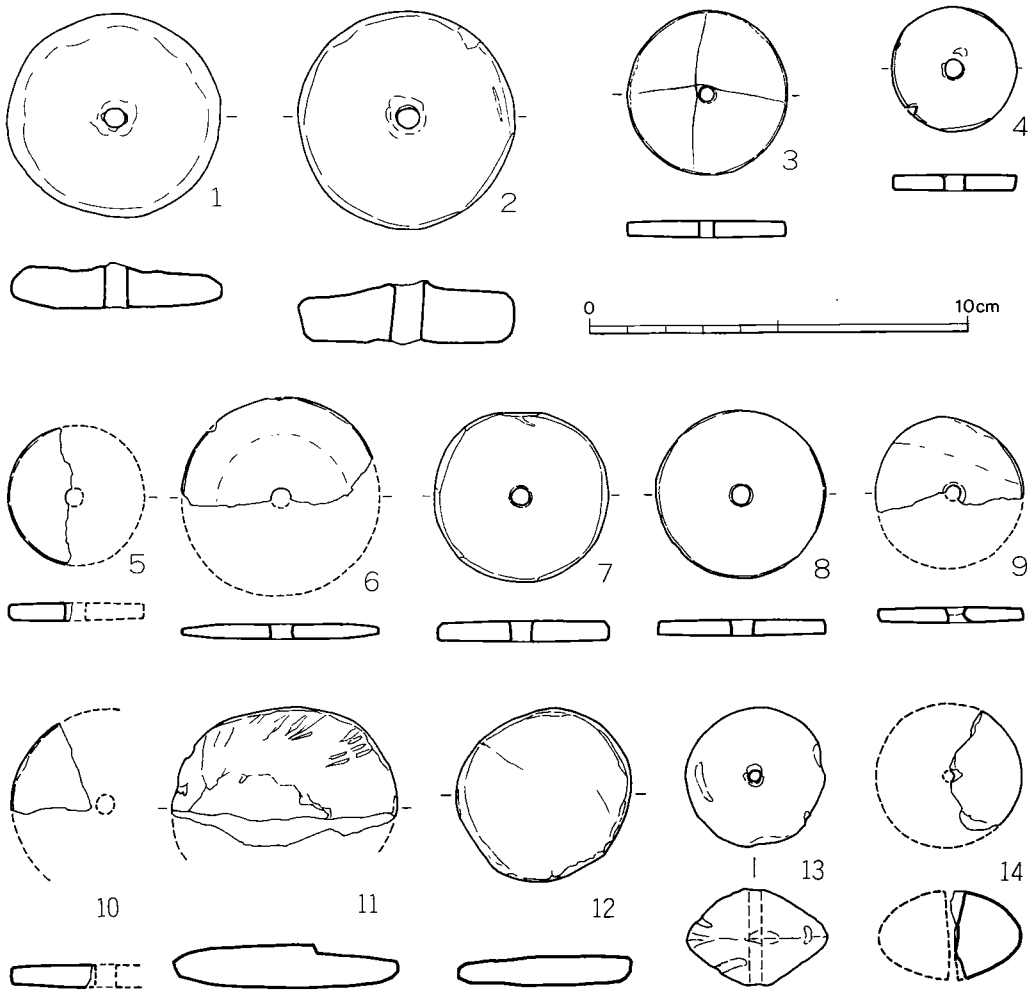


第 67 図　Ⅰ－16 出 土 鉄 器 実 測 図（1/2）

長さ4.8cmの大きさである。袋部は，両側を折り曲げて，上端を厚さ0.7cmとし，木製鍬身の挿入できる深さは3.1cmのところでさらに強く袋部をつぶしている。

紡錘車（図版36－１，第68図，表５）

仲田Ⅰ－16で出土した紡錘車は，土製品と石製品の両方と石製未製品が含まれている。出土遺構はさまざまで，しかも確実に遺構の時期といえるものは５と12のみである。１・２の土製品は中期以前といえるもので，出土遺構と直接関係ないものであろう。３～12の扁平な白雲母片岩製品は，後期後半から終末期のもので，５と12がこれを裏付けている。白雲母片岩は，付近の川原で採集できるもので，11が川原石を荒加工途中のもの，12が研磨途中のものである。13・14の紡錘形をした土製品は，出土した層位から後期のものであるが，中国東北部や朝鮮半



第 68 図　Ⅰ－16 出 土 紡 錘 車 実 測 図（1/2）

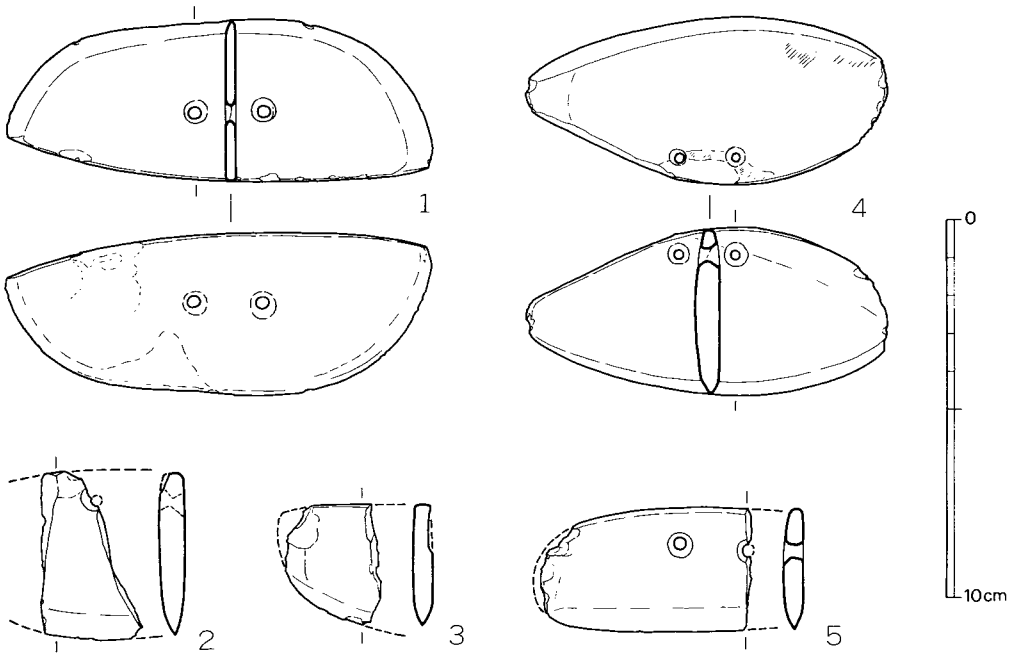
表5　仲田Ⅰ－16紡錘車一覧表　　（単位㎜・g）

No.	遺　構	時　期	材　質	直径	厚	孔径	重	備　考
1	W80－S88 土 壙	終末以前	土　製	56.5	11	5.5	35.8	完　形
2	8　住	後　期	〃	57	14	7	58.8	〃
3	2　住	〃	白雲母片岩	42.6	3.9～4.9	3.5	17.8	完形沈線
4	9 上 住 層	〃	〃	32.8	4.2～4.6	5	9.4	〃
5	18　住	終　末	〃	37＋	4.3～4.9	4＋	4.8＋	半　欠
6	21 住上層	〃	〃	50＋	2.4～4.0	5.2	9.9＋	〃
7	〃	〃	〃	46	5.0～5.8	5	23.8	完　形
8	〃	〃	〃	45	3.9～4.8	5.2	18.3	〃
9	W60－S82 土 壙	後　期	〃	39	3.7～4.4	3.8	6.7＋	半　欠
10	W76－S86 ピ ッ ト	〃	〃	(50)	5.2～6.3	－	－	小　片
11	9 住上層	〃	〃	59	11	－	－	未製品
12	1　住	〃	〃	46	8	－	－	〃
13	W76－S88 3 層	不　明	土　製	37	25.5	3	26.3	完　形
14	W78－S86 3 層	〃	〃	(38)	23	2＋	－	半　欠

島にも見られることから，古い可能性もある。

石　器（図版36～38，第69～73図）

石庖丁（図版36－2，第69図）　1は終末期の3号住居跡の埋土上層で鉄鎌と共伴して出土した完形品。石材は，表面が灰褐色に風化しているが，内部は黒色をした頁岩質のものである。



第69図　Ⅰ－16出土石庖丁実測図（1/2）

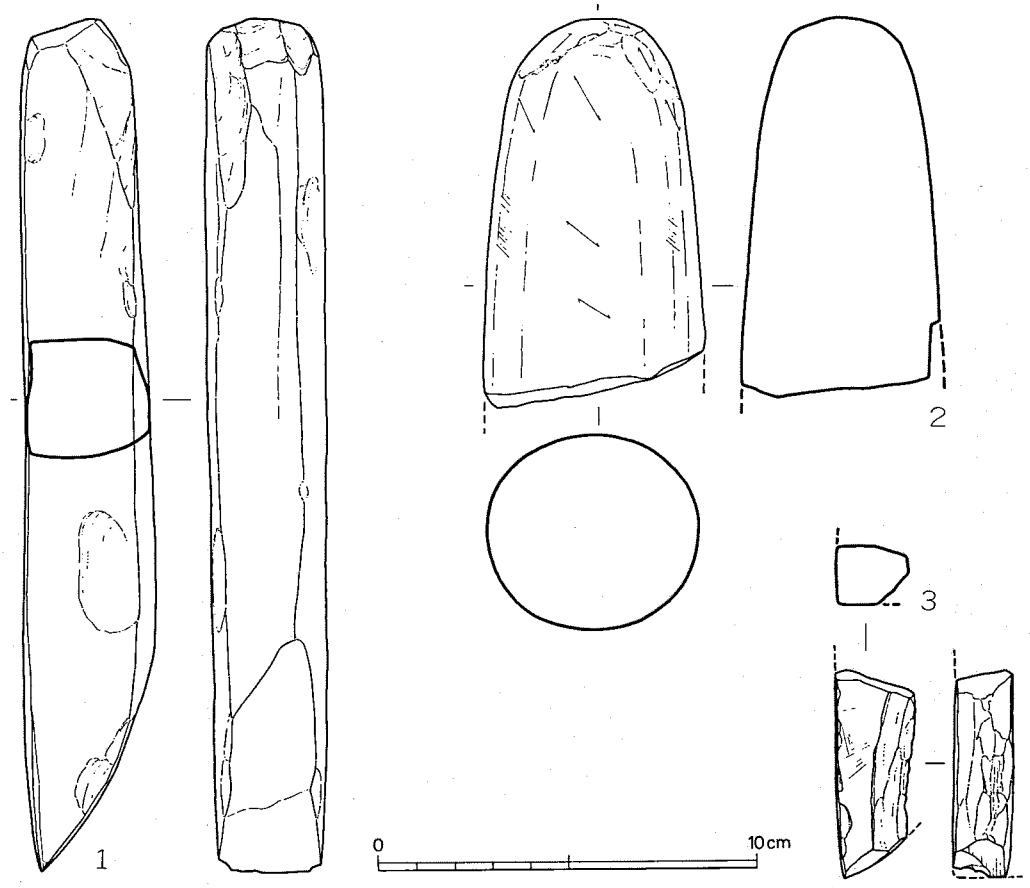
大きさは，長さ11.1cm，幅4.3cm，厚さ0.3cm，重さ31.3ｇである。図面の左側に使用痕が著しく，そのため幅も狭くなっている。

２は後期前半と思われる16号住居跡から出土した破片。石材は，輝緑凝灰岩で現存幅4.4cm，厚さ0.73cmである。３は終末から古墳初頭の21号居跡から出土した，灰白色粘板岩質の破片。

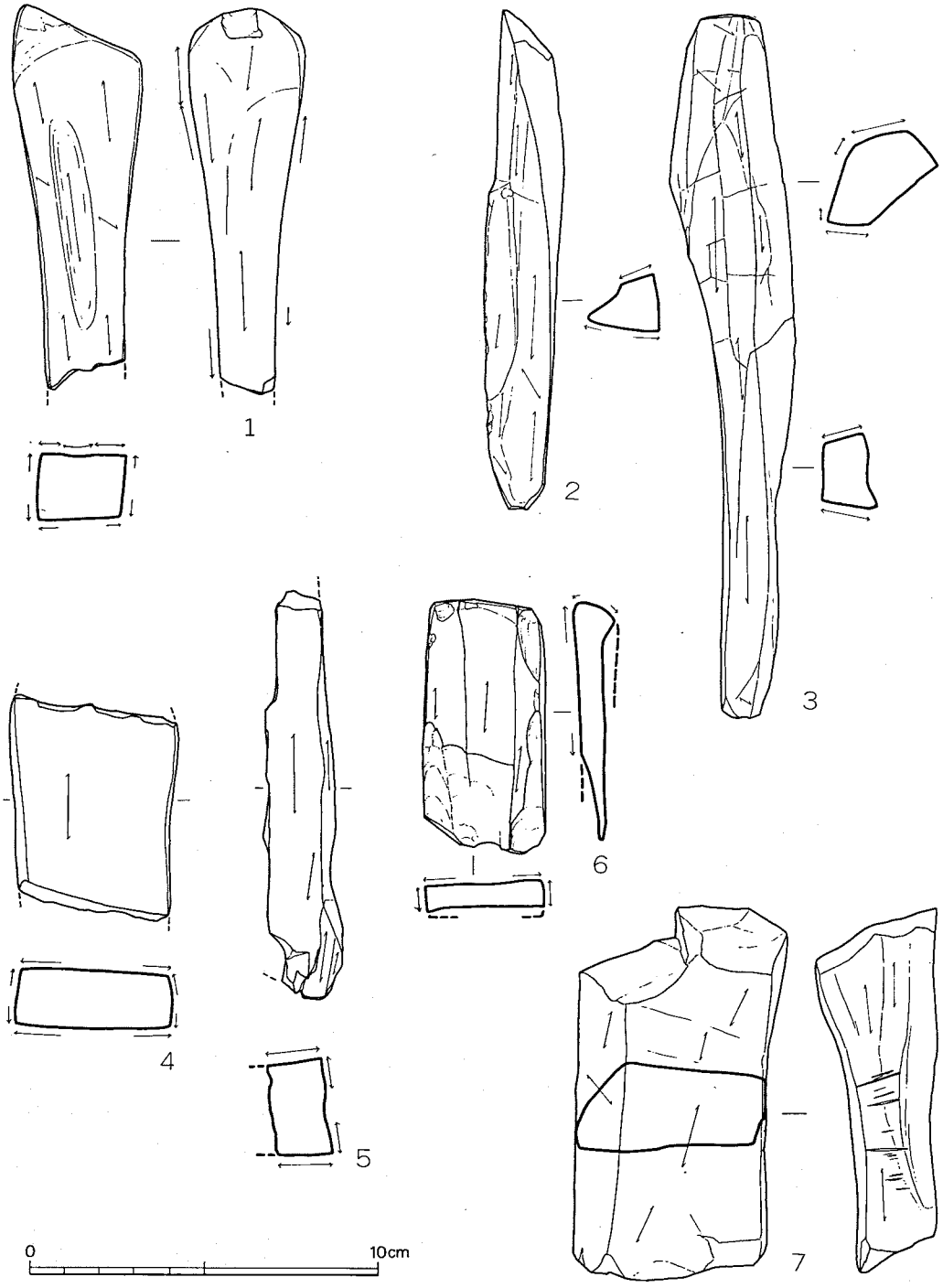
４は３と同じ21号住居跡から出土した輝緑凝灰岩製の完形品。円孔が背に片寄っているが，これは背の部分を破損後再研磨しているためである。大きさは，現状で長さ9.5cm，幅4.4cm，厚さ0.68cm，重さ42.2ｇである。

５は，W62－S82地区の３層で発見された破片で時期は不明。材質は輝緑凝灰岩で，幅3.25cm，厚さ0.55cmの大きさ。

柱状片刃石斧（図版37，第70図１・３）　１はW70－S84の３層で発見された完形品であるが，３層は中期から後期の土器が混入して，時期は不明である。石斧は長さ22.5cmの細身の作りで，刃は鋭利に研がれているが抉りを持たない。石材は頁岩質のもので，表面は風化している。中



第 70 図　Ⅰ－16 出 土 石 器 実 測 図（1/2）



第 71 図　I－16 出土砥石実測図①（1/2）

期以前のものであろう。

3は，W78－S84地区の20号住居跡と21号住居跡の重複部分から出土したが，両住居跡の時期には関係なく，中期以前のものである。石材は頁岩質で，刃先部の破片であるが，もともと小形品である。

すり石（図版37－1，第70図2）　W76－S82の3層上部の中期から終末の層で発見されたもので時期も不明。石材は玄武岩で，石斧状のものであるが，太形蛤刃石斧とは違い丸みがあるところからすり石とした。

砥　石（図版37～38，第71～73図）　第71図1～3は，終末期の6号住居跡の出土である。1は砂岩で，2・3は同一個体であったと思われる青灰色粘板岩質のものである。

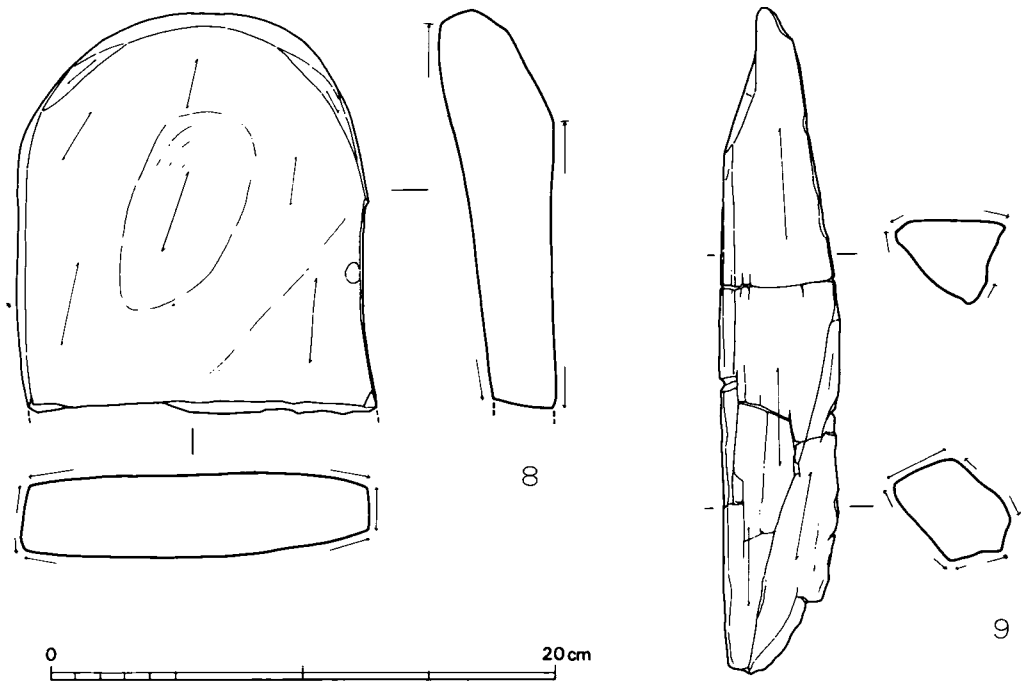
4は，9号住居跡上層で発見された細粒の砂岩製で，時期は不明。破損した両側以外の4面を使用している。

5は，終末期の12号住居跡から出土した，粘板岩質の破片。3面を使用している。

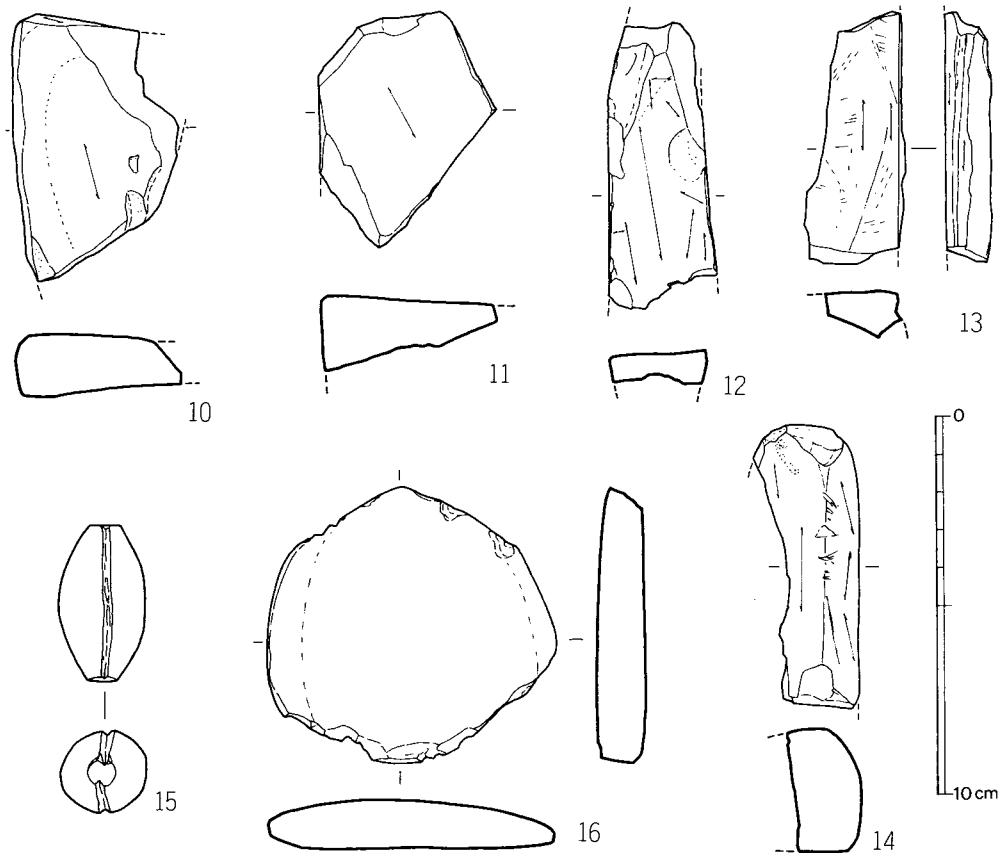
6は，後期前半と思われる16号住居跡の上層で発見された淡褐色粘板岩質の破片。

7は，終末期の10号住居跡から発見された砂岩製品。4面を使用している。

第72図8・9は，後期後半の17号住居跡床面出土一括品。1は砂岩で，2は青灰色粘板岩である。8が荒砥で9は仕上げ砥石として使用したものであろう。



第 72 図　I－16 出 土 砥 石 実 測 図 ②（1/3）



第 73 図　I－16 出 土 砥 石 ・ 石 器 実 測 図 ③ (1/2)

10は，後期後半の19号住居跡から出土した砂岩の薄手の砥石。表裏の両面と小口面を使用しているが，側面は使用せず。

11は，終末期の21号住居跡から出土した砂岩の中荒砥である。

12は，中期中頃の８号住居跡より新しいＰ133から出土した粘板岩の砥石。３面を使用しているが，裏面は破損している。

13は，中期中頃のＰ156から出土した粘板岩製であるが，中期には粘板岩の砥石は知られていないので問題となろう。Ｐ156には，長方形透窓のある丹塗磨研器台が出土し，７・９号住居跡より古いことから中期中頃としているが，終末の９号住居跡より古いだけかもしれない。

14は，Ｗ65－Ｓ80にあるＰ215から出土した粘板岩製砥石。時期は不明であるが，全体に丸味のある砥石で２面が破損しているが他面は使用している。

16は，Ｗ48－Ｓ80にあるＰ43から出土したもので，両面と周辺小口が研磨されているが，白雲母片岩であることから砥石ではなく，紡錘車の未製品であるかもしれない。しかし，このま

ま研磨するのであれば大きすぎる。

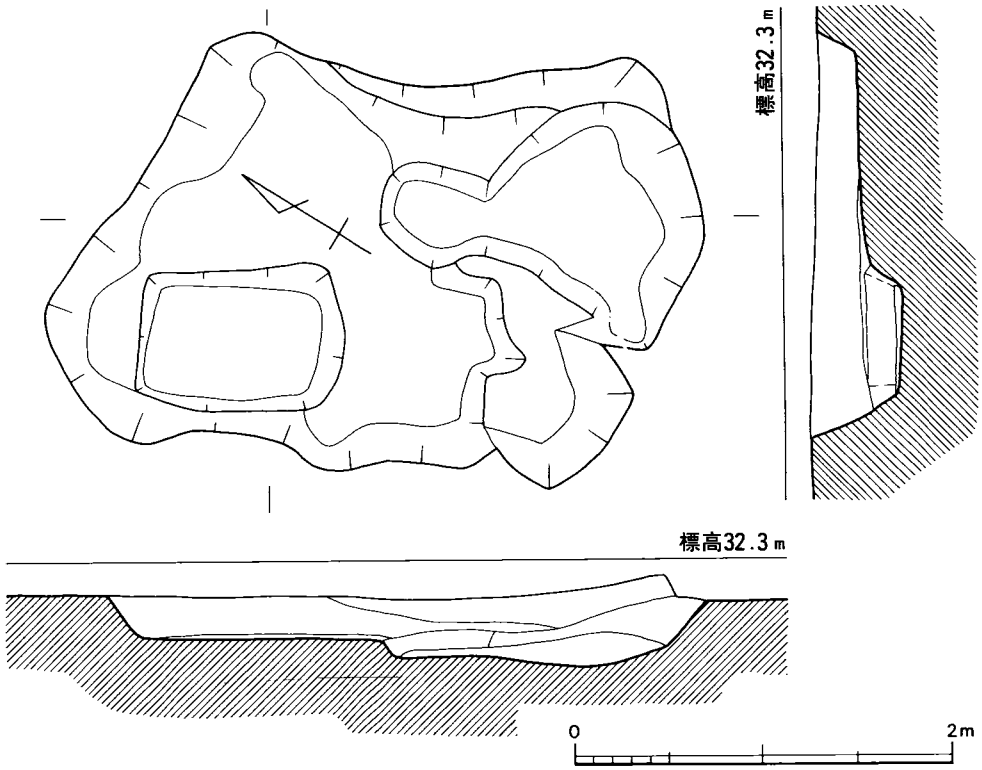
石　錘(図版38－２，第73図15)　15は，終末期のＰ202から出土した白雲母片岩質の石錘。石錘は，棗形をして両小口を平坦にし，両側にＶ字形の溝をつけている。29.9ｇの重さある。

(2)　土壙状遺構

仲田Ｉ－16では，竪穴住居跡以外に無数の「穴」があり，掘立柱建物として確認できるもの以外は，その性格や時期がわからないものがほとんどである。このうち，わずかではあるが，割合に大きな「穴」があり，遺物が発見されるものがあるので，ここに不整形の土壙として取上げる。

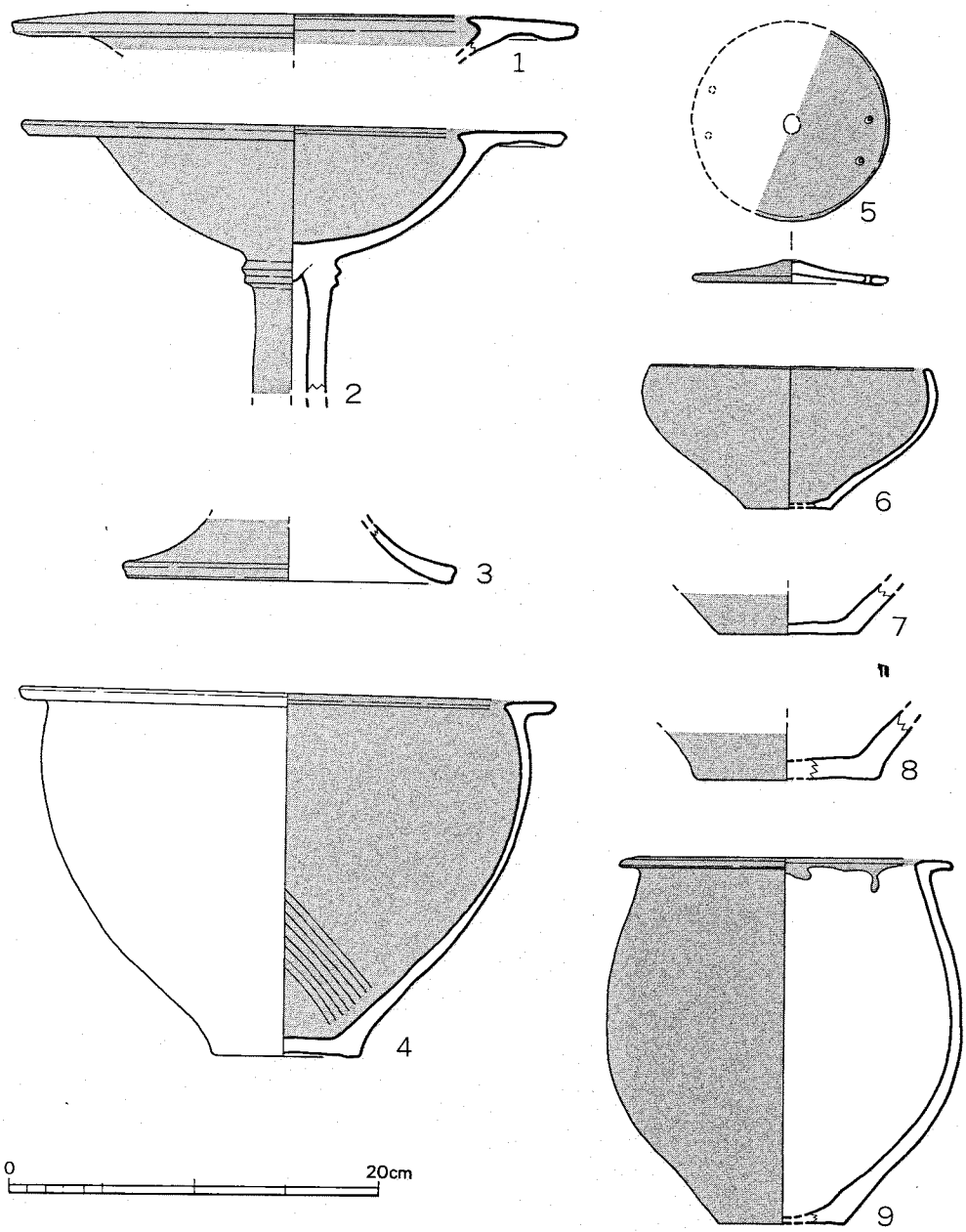
１号不整形土壙(図版25－１，第74図)

Ｗ56－Ｓ82で検出された，長径3.5ｍ，短径2.1ｍ，深さ45cmのものである。土壙の埋土中には，図版25－１のように径10～20cm大の礫と焼土が多く，この中に丹塗土器片・投弾形土製品・手捏土器が含まれていた。この土壙は，弥生中期の甕棺墓地で発見される，祭祀遺構といわれている不整形の溝や土壙と同じ性格のもので，出土品の丹塗土器や手捏土器がそれを裏付けて



第 74 図　１号不整形土壙実測図(1/40)

いる。土壙内からは，土器の外に投弾形土製品が細片を含めると７個出土しており，これが祭祀をいっそう印象づけると共に，投弾形土製品の持つ性格も現わしているものと思われる。土壙内から発見された土器は，細片が多いことからこの土壙内で祭祀が行われたというよりも，



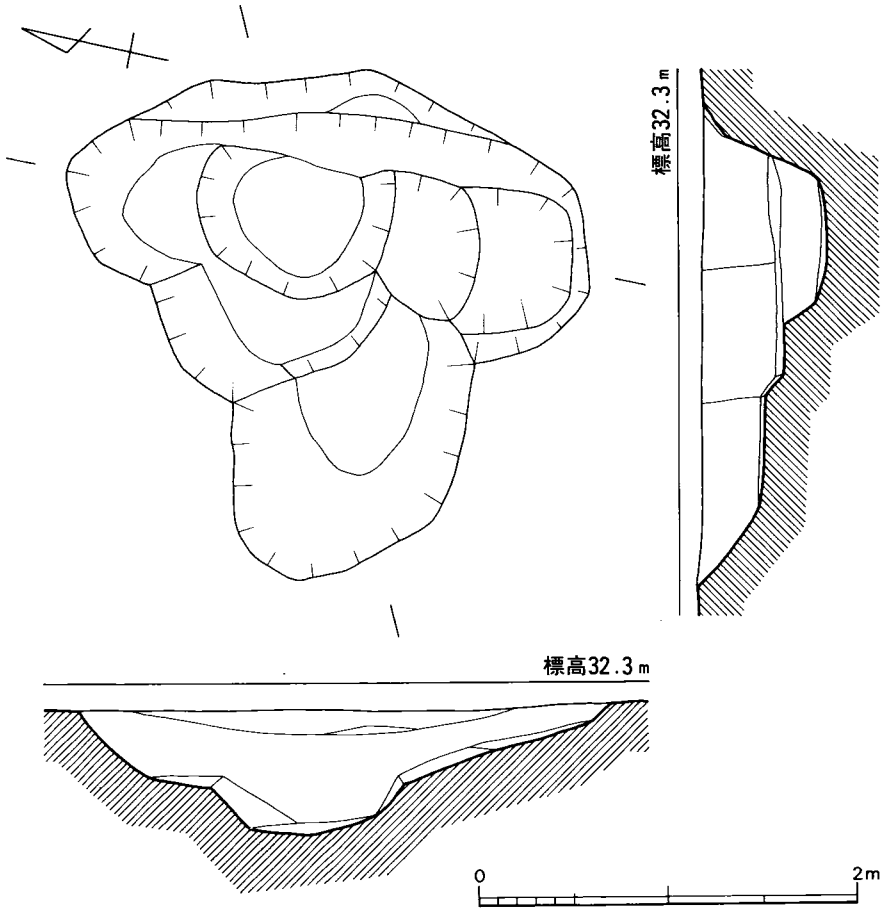
第 75 図　1・2号不整形土壙出土土器実測図 (1/4)

埋没過程で祭祀用品が混入した可能性が強いが，あるいは祭祀用品の処理自体が祭祀行為の一環であるかもしれない。（柳田）

土　器（図版33，第75図）　2は高杯の上半部である。杯部は内外面共にヘラ研磨し，口縁部はヨコナデのままで，その平坦面には幅 0.4cmで間隔 0.6cmの暗文を放射状に全周させる。脚部外面はヘラ研磨をするが，最上位の2条の凸帯にも同様に施す。3は別個体の高杯脚部で，外面はヘラ研磨し，内面はヨコナデを施す。4は鉢で内面は底部近くはヘラ様のナデ，他はナデを施し，口縁部はヨコナデであるが，外面は磨滅しており不明である。

以上の土器はいずれも精製した胎土に砂粒を少し混ぜ，焼成は良く，褐色を呈する丹塗磨研の土器である。丹の色調は赤茶褐色で，中期後半頃と考えられるが，4の大きさの器種にも丹が施されているのは資料的に少ないと言えよう。（馬田）

2号不整形土壙（図版25－2，第76図）



第 76 図　2 号 不 整 形 土 壙 実 測 図（1/40）

W50－S84で検出された，南北径2.8m，東西径2.7m，深さ65cmのもの。この土壙は，プランや底面形から見ても，ピットが切り合ったような形態であるが，土器の出土状態から見るかぎりでは同一遺構といえる。土壙内からは，丹塗土器と投弾形土製品が発見されているので，1号と同様に祭祀に関係ある遺構であろう。（柳田）

土　器(図版33，第75図)　5は無頸壺の蓋で，外側は丹塗りであるが，頂部は若干凹み丹を認めない。使用による磨滅と考えられる。内面は磨滅している。9はやや器高のある無頸壺で，内面はナデ，口縁部近くはヨコナデであるが，口縁部平坦面から胴部外面は横方向にヘラ研磨を施す。7も無頸壺の底部片である。

8は広口壺の底部片で，胴部外面は最下位まで丁寧に横方向のヘラ研磨を施す。

2は高杯片で，口縁部平坦面は幅が広く，ヘラ研磨を施す。

6は鉢で，内面の底部から口縁部にかけて，外面の最大径部以下をヘラ研磨し，他はヨコナデのままである。

以上の土器は，いずれも精製した胎土に砂粒を少し混ぜ，焼成は良く，褐色を呈する丹塗磨研の土器である。丹の色調は，赤茶褐色を呈す。中期後半頃と考えられるが，6の器形は，体部のカーブが袋状口縁壺の胴下半部に類似し，やや後出するものであろう。（馬田）

3号不整形土壙(図版24－1，第63図)

3号不整形土壙とは，W75より西側で，18号住居と21号住居跡の間に群在するピット群を総称するもので，1個の遺構として存在するものではない。群在する土壙やピットは，その新旧関係や性格は不明で，遺物も上層に集中するため，上層には21号住居跡の床面が存在した可能性が強い。この地区の地山は，礫層であるために，複雑な切合いの識別は困難である。

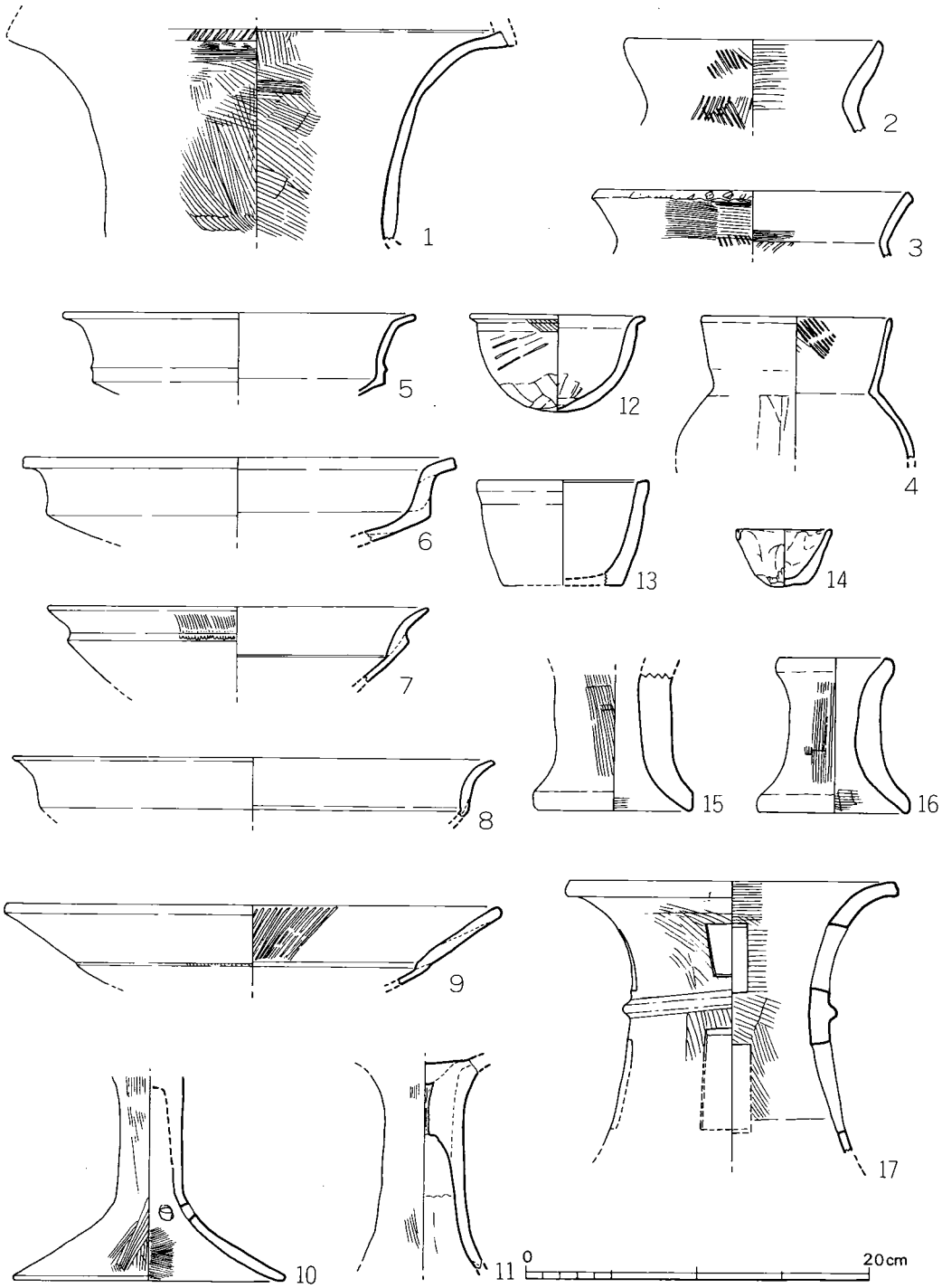
遺物は，上層の土器片とガラス小玉があり，下層の土壙やピット内からは時期の判明する土器はなく，少数のガラス小玉が出土しているだけである。

土　器(図版33，第77図)　1は袋状口縁をもつ壺の頸部である。土器は現状でも口縁端部を形成するかのように，大きく開いた頸部先端に浅いキザミ目を持つが，その周辺には粘土の剥離した痕跡があり，袋状口縁が接合されることが明らかである。これに接合する袋状口縁は，頸部端の角度からかなり直立に近く立上る口縁となる。頸部は，内外面とも粗いハケ目調整である。

2・3は甕の口縁部で，2は先端が細く，3は先端が肥厚するのが特徴である。両方共粗いハケ目調整であるが，3の口縁先端には浅いが太目のキザミ目がある。

4は，口径11.2cmの広口壺の破片である。外面には，頸部から胴部にタテのケズリがあり，その後に口縁と頸部はヨコナデ調整される。内面は，口縁内側に粗いハケ目，胴部はヨコナデされている。胎土は，細かい砂を含む黄褐色の良好な焼成となっている。

5～11は高杯の破片。5～9の杯部口縁はそれぞれ違った特徴をもち，同時に時期差を示す



第 77 図　3 号不整形土壙出土土器実測図 (1/4)

ものであろう。6～8は後期後半，9は終末の特徴をもつが，5は薄手で，胎土も砂を少量しか含まず良質であり，形態を異にしている。口径は，5が20.6cm，6が25.2cm，7が22cm，8が28cm，9が29cmの大きさである。5は内側にタテ磨きで他はヨコナデ，7が内外面ヘラ磨き，9がヨコナデ後内側にヘラ描暗文を施す。10・11は脚部で，10は柱状部が割合短かいので，杯部には9と同式のもの，11は8と同式のものが付くものと思われる。11の内側下半にはケズリが行われている。

12は小さいながらも口縁端が屈曲し，体部はタタキ後にナデられ，底部はヘラケズリで丸底となっている。14は手捏土器で，内外面に指先痕を残している。

13は全体に灰色軟質の陶質土器片である。口径約10cm，高さ6.2cmの大きさで，全体に厚手であるが，口縁はさらに肥厚させている。内外共に表面が荒れて調整不明。

15・16は器台で，15のみ不整形土壙の床面に伴うものである。15の内側柱状部はヘラケズリされている。

17は長方形透窓付器台で，裾部を欠損している。長方形透窓は上下2段に各々4個あり，その間に1本の凸帯をめぐらす。口径19.6cm，胴最小径11.6cm，現存高さ15.9cmの大きさで，内外面共粗いハケ目調整となっている。この例以外にこの不整形土壙上層からは，同様に上下2段の長方形透窓を持つ破片2個体部があったが，現在紛失してしまった。紛失した2例には，上下2段の長方形透窓間には17のような凸帯ではなく，沈線が3～4本めぐっており，いっそう九州のものではなく，吉備地方の影響によるものである。17のように凸帯がめぐれば，九州人の製作といえるが，沈線となれば，九州人の手になるものとはかぎらない。

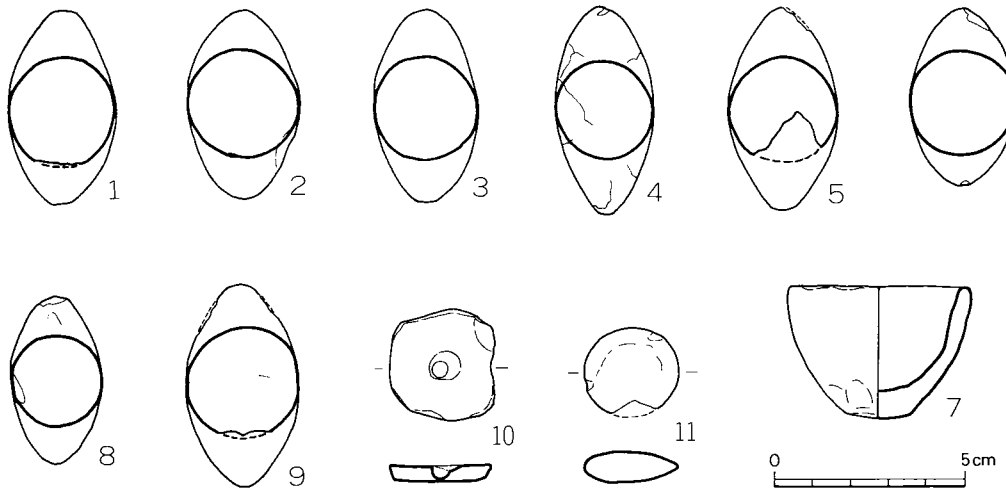
3号不整形土壙出土土器は，前記のごとく上層にかたより，21号住居跡に含まれる可能性が強いが，土器自体にも後期後半のもの（5～8・11・15・16）と終末のものが含まれている。3号不整形土壙の土器は，後期後半のものとした方がよいであろう。

土製品（図版39，第78図，表6）

投弾形土製品（第78図1～6・8・9，表6）　1～6は，W56－S82の1号不整形土壙から出土したもので，共伴の丹塗磨研土器片から中期後半のものである。大きさは，最も長いのが4の5.5cm，径の大きいのが2の2.95cm，重さは2の36.1gが最大であるが，ほぼ6個がそろっているといえる。胎土は，細砂を少量含む黒褐色の良好な焼成で仕上げられ，作者が同一人であることも推定できる。

8は，2号不整形土壙の出土で，1～6と同様に共伴の丹塗土器から中期後半のものである。大きさは，1～6に比較すると小さく，胎土も砂粒を含まずに褐色と赤褐色をしている。

9は，W76－S86の3号不整形土壙の発見であるが，上層の終末期より古いものとしか判断できない。8個のうちで最大のもので，一部黒斑があるが他は赤褐色をして，石英粒を含んでいる。



第 78 図　Ⅰ－16 出 土 土 製 品 実 測 図 ①（1/2）

1～6・8の投弾形土製品は，丹塗土器を共伴する点から祭祀色の強い性格を持つものと思われる。

表6　仲田Ⅰ－16　投弾形土製品一覧表　（単位cm・g）

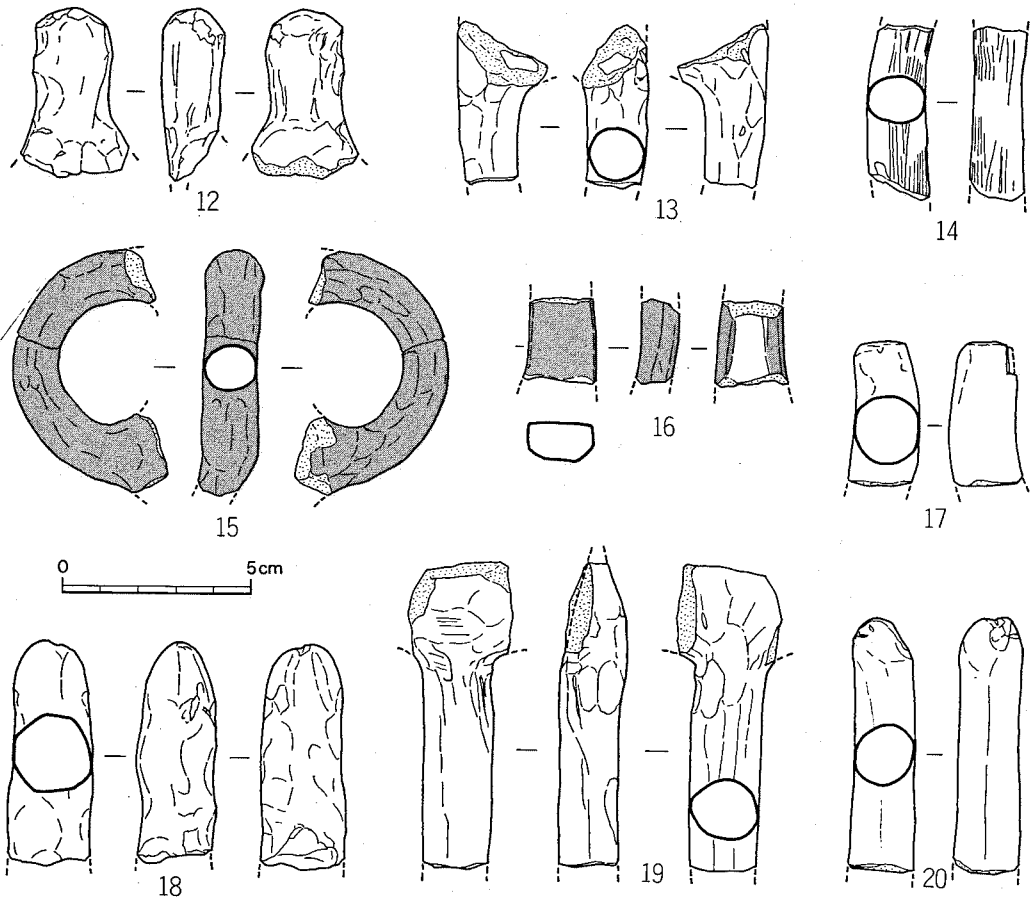
No.	出 土 遺 構	時　期	長 さ	径	重 さ	備　考
1	1号不整形土壙	中期後半	5.15	2.9	34＋	一部欠損
2	〃	〃	5	2.95	36.1	完　形
3	〃	〃	5.1	2.75	33.1	〃
4	〃	〃	5.5	2.65	31	ひびあり
5	〃	〃	5.4	2.9	27＋	一部欠損
6	〃	〃	4.7	2.8		〃
8	2号不整形土壙	〃	4.45	2.45	22.5	〃
9	3号不整形土壙	後期以前	5.4	2.95	37.2	〃

手捏土器（第78図7）　1～6の投弾形土製品と丹塗土器が共伴する1号不整形土壙から出土したもので，手捏らしからぬ製品である。土器は，底部近くにわずかな指痕を残しているが，凸レンズ状の底部を持ち，口縁もととのっている。大きさは，高さ3.5cm，口径4.9cmある。

不明土製品（第78・79図10～20）　10は，W76－S86の3層で出土した，土器片の内面から穿孔途中と思われるものである。穿孔途中にしては孔の底が広く丸みがある。

11は，W66－S86のD24から出土したもので，小さな土饅頭をつぶしたような形をしている。大きさは，径2.5cm，厚さ0.85cmで，一部欠損している。

12～20の土製品は，明らかに把手とわかるものがあるが，付属本体の器種が不明であるために土器とは別に扱った。



第 79 図　I－16 出 土 土 製 品 実 測 図 ② (1/2)

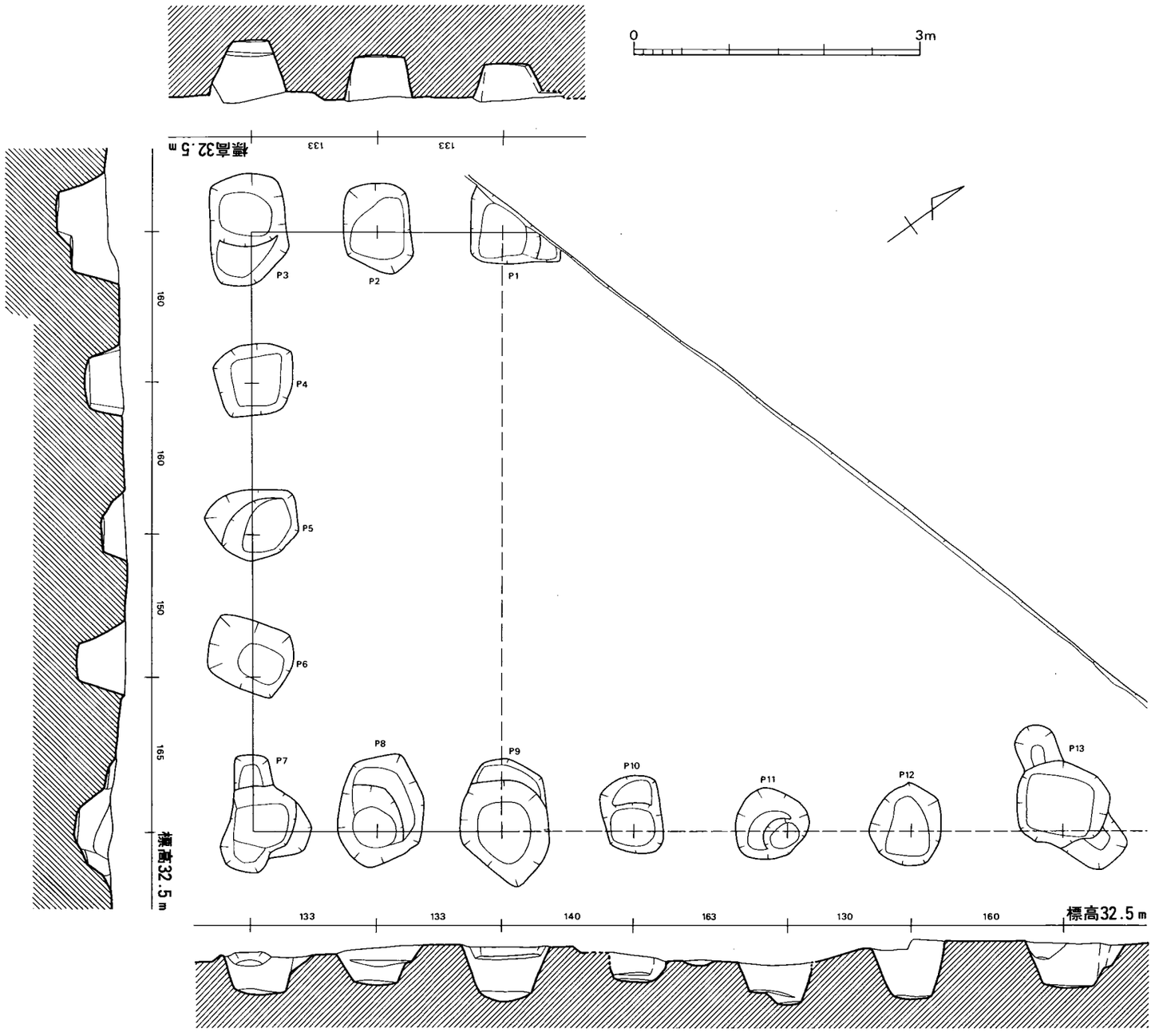
12は，終末期の10号住居跡出土で，爪痕や指痕が残る小さな把手である。

13は，終末期の18号住居跡出土で，先端も欠損しているが，本体からもげた部分に一部だけ器内面と思われるところがあり，把手というよりは，支脚といえるものである。

14は，後期後半の20号住居跡から出土した棒状土製品である。表面にはタテにハケ目調整され，両側を欠損しているので何の付属品であるかも不明。

15は，上の破片がW48－S78のピットから，下の破片がW78－S82の20号住居跡から発見されたものが接合できた。両方の発見地は約30m離れているので時期は決定できない。これは明らかに把手であり，しかも丹塗磨研土器であるが，北部九州ではジョッキ形以外に把手が付くものはないであろう。

16は，21号住居跡上層から出土したが，丹塗磨研であるため住居跡の時期とは違うであろう。細片であるため即断はできないが，面取りされた内側と思われる部分に丹塗りがないところから，把手ではなく，両側に方形透窓がくる可能性がある。側面と面取りはヘラ切りで鋭利に行



第 80 図 掘立柱遺構柱穴実測図 (1/60)

われている。

17は，やはり21号住居跡上層で発見されたが，先端にきれいな面を作っている。表面もきれいなナデ仕上げである。

18は，W64－S84の3層で発見された男根状のもので，一握りで作ったように全面に指痕が見られる。

19は，W64－S82のP206から出土した，スプーン状把手である。

20は，W66－S84のD23から出土した男根状把手である。弥生前期後葉の土器片が伴出している。

(3)　掘立柱遺構(図版26－2，第80図)

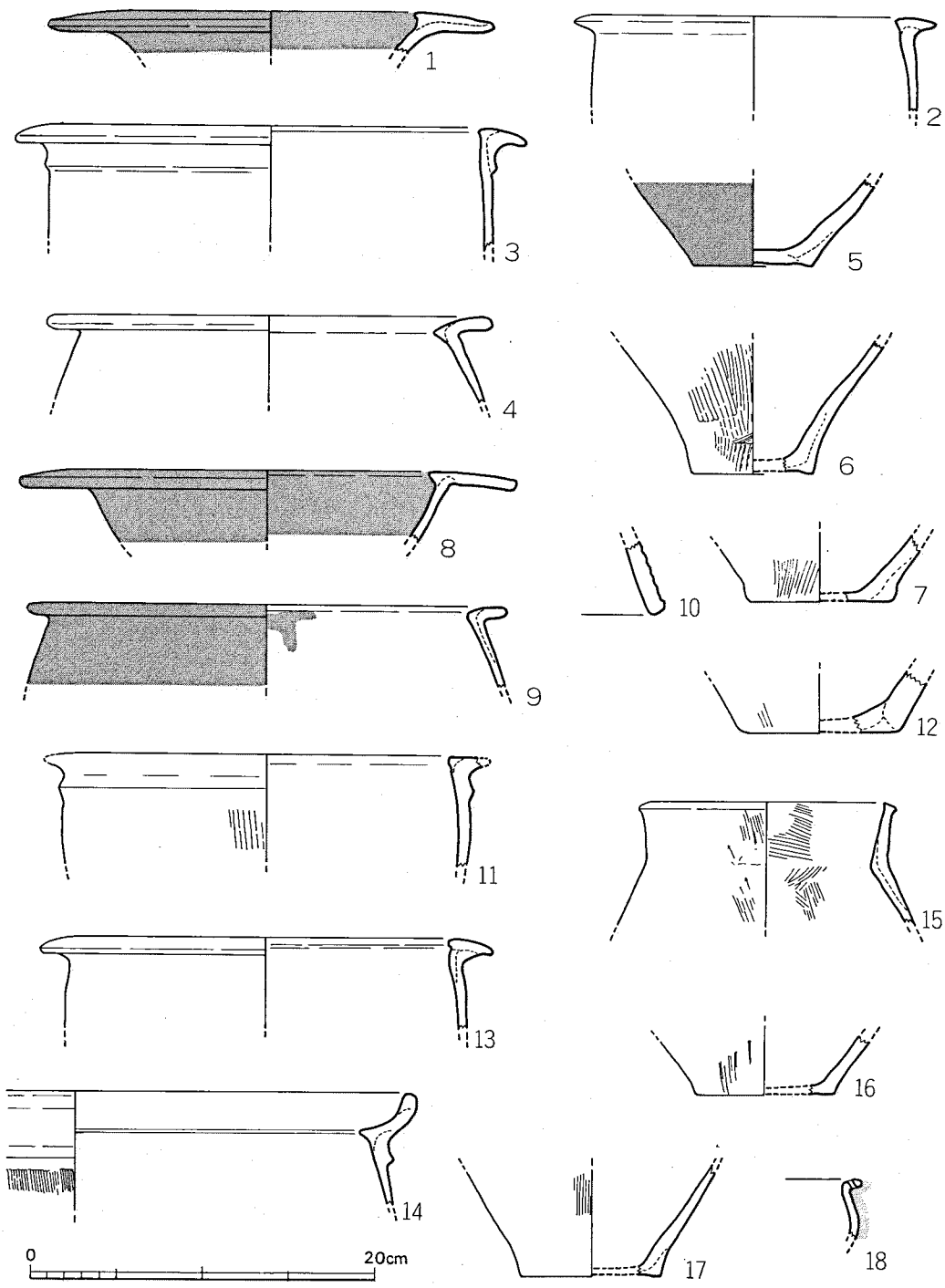
仲田Ⅰ－16地区の調査は，南北幅が約8mであることから，竪穴住居跡でさえ一軒分を完掘したものは少なく，遺構・遺物の保存のよいものを選定して拡張したにすぎない。W60～W70の間で検出された掘立柱遺構は，性格が不明である点からも拡張して調査すべきであったが，諸事情から拡張困難であった。

第80図は，P1～P13まで可能なかぎりの柱穴を拾ってみたが，P10以後は柱穴の規模や柱間が揃わないようであるから除外したいが，P9からP1の間にP3からP7に対応する柱穴がないために，一応図示してみた。この掘立柱遺構の柱間は，一応柱穴の中心を基準にして計測すると，図のようにP1－P2－P3，P7－P8－P9の間が133cm，P3－P4－P5の間が160cm，P5－P6が150cm，P6－P7が165cmとなり，かなり一定していることがわかる。この柱間の寸法は，後漢尺(1尺＝23.04cm)の6尺(138.24cm)と7尺(161.28cm)に最も近いが，梁行柱間と桁行柱間が1尺違った建物が存在するかどうかは知らない。しかも，P1とP9の間に柱穴が存在しないことからも，完全な屋根を持った建物である可能性が少ないといえる。

掘立柱の時期は，第81図の出土土器片からすると，P5に弥生終末期の器台細片と石錘，P8に同じく終末の甕の口縁部片が含まれていることから，終末以後と考えられる。柱穴の切合い関係は，P5に新しい小穴が切込んでいたので，小片であればP5に混入する可能性があるが，その他では弥生終末以後の遺構が発見されていないことから，掘立柱を新しくする資料がない。ちなみに，P11が後期後半の11号住居跡より古い柱穴であることから，少なくともP11はP1～P9の掘立柱と共存しないことが明らかである。この掘立柱遺構の時期は，柱間が後漢尺に近いことから弥生終末にすることも可能であるし，仲田Ⅰ－16で最も新しい遺物として，W52－S78のP161出土の古式土師器高杯の時期としてもよいであろう。

P3～P7の柱列の方向は，N53°20′Wである。

土　器(第81図)　土器片は，1・2がP2，3～8がP3，9がP4，10がP5，11・12が



第 81 図　掘立柱遺構柱穴出土土器実測図 (1/4)

Ｐ６，13～15がＰ８，16～18がＰ11から出土している。土器片はほとんどが中期のものであるが，10（Ｐ５）と15（Ｐ８）が弥生終末のものである。終末期以前の土器片は，12が後期前半，４・14が中期末，その他が中期前半から中期後半となっている。Ｐ11の16～18は，中期後半の土器であるから，遺構の切合いとも符合する。

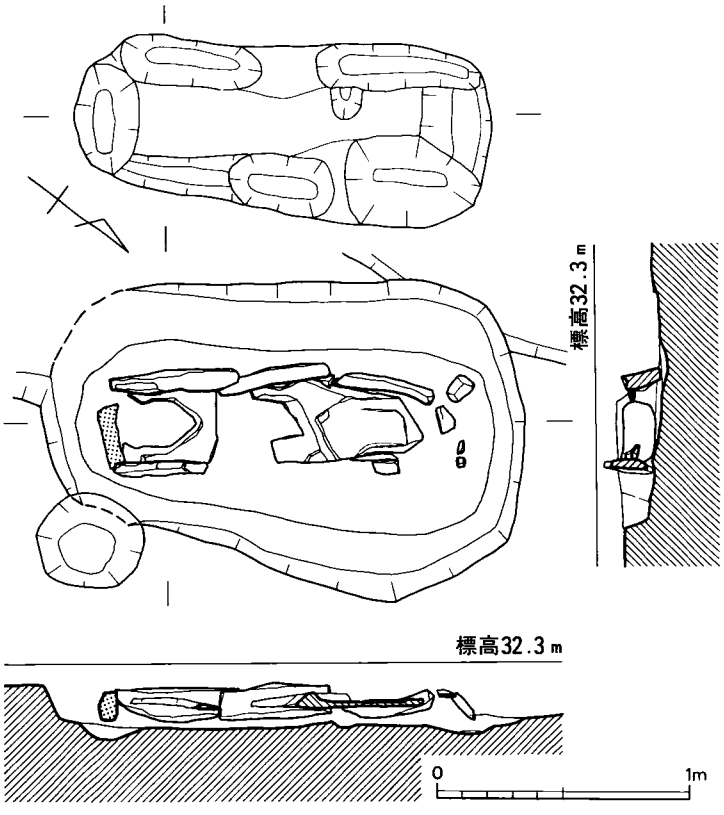
10（Ｐ５）は，器台裾部の細片であるが，外面に大きなタタキ目を残し，後期後半から古墳初頭に属することがわかる。

15（Ｐ８）は，口径15cmの小形甕で，口縁部がかなり立ち，粗いハケ目調整は終末期の特徴を示している。

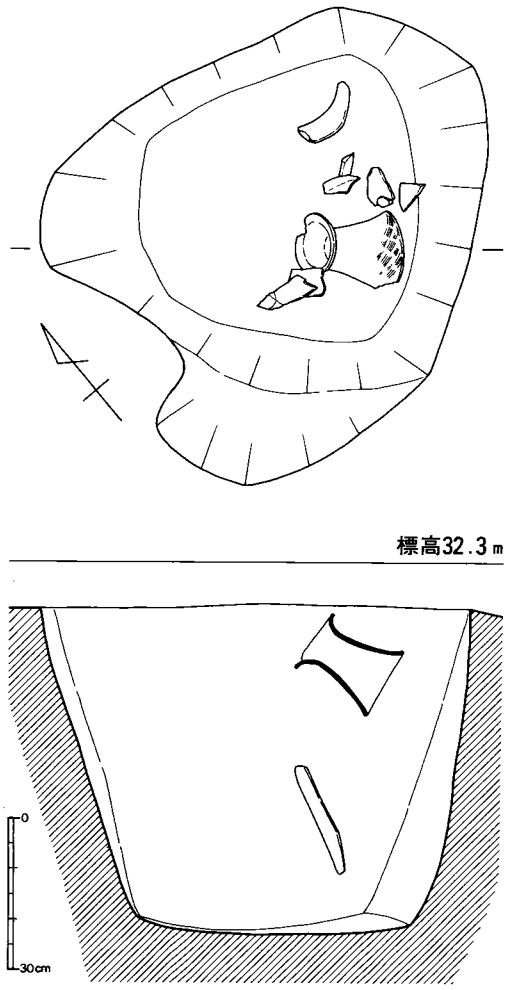
(4)　その他の遺構と遺物

石棺墓（図版25－３，第82図）

仲田Ｉ－16調査区の北東隅で検出された箱式石棺墓で，一部拡張して調査した。石棺は，２号住居跡と重複し，住居跡より新しいが，住居跡に時期が判明するものがなく決定できない。石棺墓は，大半を耕作等によって破壊され，原形をとどめていないが，質の悪い片岩を石材にして，床面を持ったものである。石棺の墓壙は，長軸長さ1.9ｍ，最大幅1.25ｍの大きさで，深さはわずかに15cmほどしか残っていない。石棺本体は，西側壁基部と東側壁一部，床石半分が残っているだけで，これから石棺内法を推定すると，長さ1.25ｍ，幅27～32cmの大きさである。石材の残っているものと下の掘方から，石棺を復原すると，側壁に各々３枚，小口に１枚，床面に



第 82 図　石棺墓実測図（1/30）



第 83 図　P23 実 測 図 (1/15)

3枚の板石を使用し，内面に赤色顔料を塗布して，蓋石には青褐色粘土で目貼りをしていたらしい。

石棺内外は，完全に荒らされていたために，副葬品の有無は判定できないが，荒された墓壙東側縁で小鉄片が出土している。

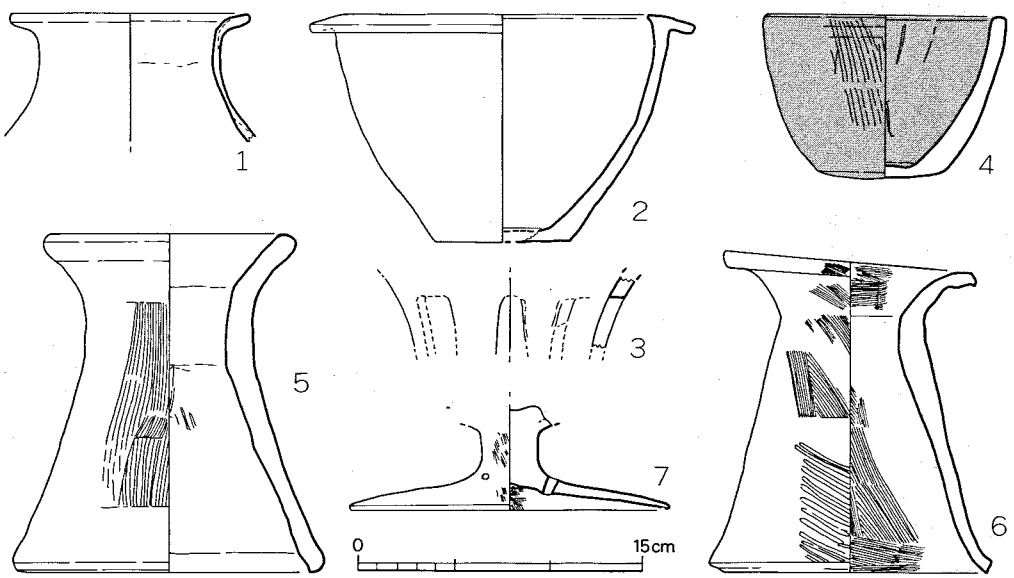
P23(図版26－３，第83図)

W44－S82で検出されたピットで，器台と大型の鉄鎌完形品が出土した。ピットは，径約85cm，深さ65cmの小形竪穴で，埋土下半に鉄鎌，上層に完形に近い器台が出土した。器台は，一部欠損して上層から出土しているので，不用品を破棄したものと考えられるが，鉄鎌は完形品であるから，普通の生活状態においては破棄するとは考えられない。この竪穴がどの住居跡に付属するか問題となるが，終末期のものは３号と６号が近くにある。後期後半の１号住居跡では，近すぎて屋根材の下となるだろう。

土　器(図版34－１，第84図)　１は，W66－S84のD23から出土したもので，図面上からは弥生前期の壺の頸部といえる。壺の大きさは口径12.4cmであるから，小形壺となるが，胎土は淡褐色で石英粒を含む。口縁部は，割合屈曲して上側にわずかな平坦部をつくるかのようである。頸部は，外面がハケ目状のヨコナデ，内面がタテのケズリ状ナデで仕上げが荒く，粘土の接合部も残っている。土器は，頸部内面の荒調整が気になるが，口縁部にわずかな平坦部をつくるところから，弥生前期後葉の特徴を持つといえる。D23からは，男根状の不明土製品が伴出している。

２は，１号住居跡より古いP77から出土した鉢である。鉢は，高さ12cm，口径20cm，底径７cmの小形品で，口縁部が逆Ｌ字形を呈する。器面調整は，口縁部付近がヨコナデ，他はナデ仕上げとなっている。弥生中期中頃のものである。

３は，W54－S78地区で７・９号住居跡より古いP156から出土した丹塗磨研器台の破片である。土器片の天地は不明であるが，隅丸長方形透窓が４ヶ所以上あることは確実で，透窓の側面まで丹塗りされている。胎土には，長石細粒を少し含むが密で，褐色の良好な焼成となって



第 84 図　ピット出土土器実測図 (1/4)

いる。長方形透窓をもつ丹塗磨研器台は，中期中頃以前に伴うものであるから，７号住居跡が中期後半頃であることと付合する。

４は，W40－S82のP49から出土した小鉢である。小鉢は，高さ8.6cm，口径12.7cmの大きさで，粗いハケ目の上から赤色顔料が塗布されている。後期後半のものである。

５は，W46－S76のP81の上に半分かかって発見された器台半欠品。器台は，高さ17.8cm，口径14.2cm，裾径16.3cmの大きさで，中央より上にくびれがある。後期後半のものである。

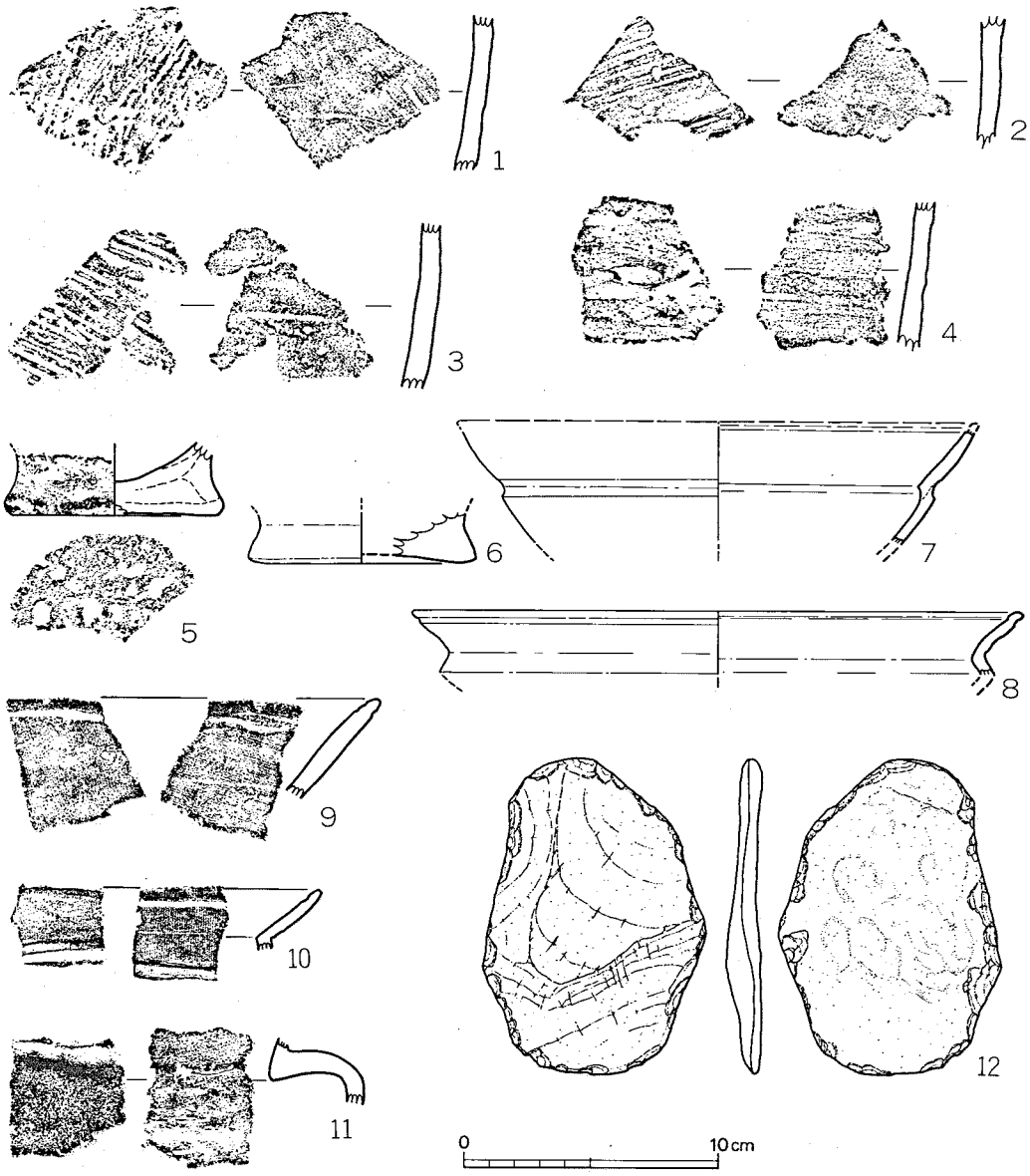
６は，W44－S82のP23から出土した器台で，大型完形鉄鎌が共伴している。器台は，高さ平均16.2cm，口径13.4cm，裾径15cmの大きさで，胴部のくびれは最上部に上がっている。器面調整には，粗いタタキが使用され，後にハケ目仕上げを行うが，外面下半にタタキが残る。弥生終末から古墳初期のものである。

７は，W52－S77のP161から出土した高杯脚部。高杯は，杯部を欠損するが，仲田Ⅰ－16で最も新しい遺物といえる。脚部は，短い柱状部が中実で，裾部が大きく広がるのを特徴とし，布留式に属する。　（柳田）

縄文土器(第85図)

仲田Ⅰ－16地区からは総重量約400ｇの縄文土器片が出土し，約¼が精製土器片である。これらの土器片は，まとまった出土ではなく，各遺構内や包含層中の弥生土器に混って発見されたもので，断片的な出土といえよう。しかし遺構面の下層あるいは周辺地区に包含層・遺構の存在を予想させる資料でもある。このうち比較的大きな破片，特徴の明確な破片11点を図示する。

粗製土器（１～６）　１～３は外面にアナダラ条痕を施し内面をナデて無文にした胴部破片で，



第 85 図　I－16 出土縄文土器拓影・石器実測図 (1/3)

金雲母を含み，砂粒は１の胎土に多めに含まれる他は少く，焼成良好で褐色系の色調を呈す。器面に気泡が多く観察できる。有機質の混和材を使用した為と考えられる。

４は，外面に凹凸の多い指先のナデ痕があり，内面は軽いアナダラ系条痕が施される破片で胎土に砂礫を多く含む。焼成良好で淡灰褐色を呈す。

５・６は底部破片で，底面と胴部の間がくびれる形状になる。外面はナデ仕上げされるが，

5の内面はナデで外底面に長径9㎜・短径6㎜程度の粒状圧痕がみられる。2点共胎土に砂礫・金雲母と若干角閃石を含み気泡も少しある。焼成普通で灰黄褐色。

精製土器（7～11）　いずれも浅鉢形土器の破片で，7～10は肩部で屈折して口縁部が広く外反する器形になる。7・10は丸味をもった胴部から，凹線を引いて段状になったような頸部を経て内彎気味の口縁部が外反する。頸部内面は明瞭な稜をなしている。口唇部直下内面に1条の凹線を巡らすが口唇端部は屈折しない形状となる。内外面共に研磨され内面黒色を呈すが，外面では前者淡灰褐色，後者淡黒褐色を呈す。胎土には石英・長石・金雲母類を含む。

8は胴部を欠失するが，頸部は胴部から肩部を介して内傾し，口縁部に向って外へ屈折している。口縁部は内彎気味に立ち上り，外面の口唇部直下に凹線を巡らせて内側が段状に屈折する形状となる。精良な胎土を用い内外面共に研磨されているが，焼成は並で暗灰色を呈し器面が風化する。

9は長めの口縁部になる破片で，口唇部直下の内外面共に凹線を巡らせているが，内面は乱れる。胎土にやや砂粒が多くみられるが内外面共研磨され，暗黄褐色に焼成される。

11は球状の胴部からかすかな稜を残して内彎する肩部へ移行して頸部が下り気味になり，屈折し上方に外反する口縁部へと続くが，頸部内面は鋭角の稜となる。内外面共に研磨調整されたとみられるが器面は風化し灰褐色ないし黝黒色を呈す。胎土に砂粒・金雲母を含む。

これらの土器は，おおむね縄文晩期の中頃に属すと考えている。

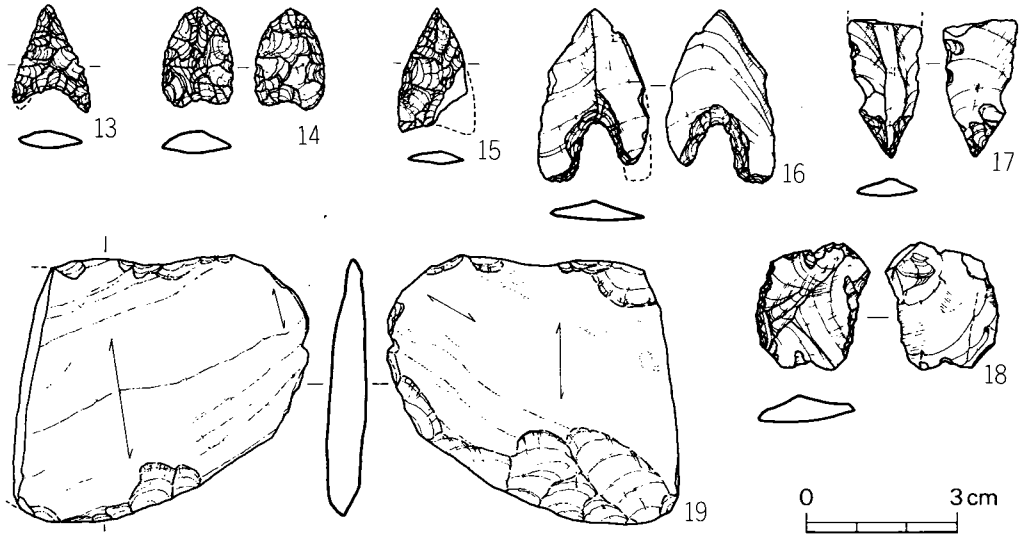
石　器（第85・86図）

打製石斧（12）　扁平な玄武岩質の石材を素材とし，周縁に調整剝離を加えた打製石斧で，長さ12.6cm・最大幅8.8cm・厚さ1.4cm・重量155gを測る。刃部には使用による長軸方向の磨耗痕がみられる。

打製石鏃（13～16）　全て黒曜石製で凹基式だが13～15のわたぐりは浅く，16は深い。13・15は全面に調整剝離が及び，13の両側縁は直線的に仕上げるのに比し15の両側縁は弧を描く。13はほぼ完形で長さ21.1㎜・抉入部長16.0㎜・幅15.5㎜・厚さ3.4㎜・重量0.6ｇを測る。15は片脚部を欠失するが長さ24.3㎜・抉入部23.2㎜・厚さ2.7㎜・重量0.7ｇを測り，幅は16㎜前後であろう。14は両側縁共大きな弧を描き丸味を帯びる。主要剝離面をわずかに残す他は調整剝離されるが比較的粗い剝離である。完形品で長さ20.0㎜・抉入部18.1㎜・幅13.8㎜・厚さ4.3㎜・重量1.05ｇを測る。

16は石刃状剝片の先端部をそのまま石鏃の先端部に利用し基部のみに調整剝離を加える狭義の剝片鏃で，片側の脚部先端を欠失するが，長さ34.0㎜・抉入部長22.3㎜・厚さ4.0㎜，現存値で幅21.7㎜・重量2.07ｇを測る。

石　錐（17）　黒曜石石刃状剝片の基部を調整剝離して尖らせ刃部にするが，長さ27.5㎜の位置で欠損する。刃部では剝片の打瘤部の厚みを保つために最厚部4.1㎜を有す。



第 86 図　Ⅰ－16 出 土 石 器 実 測 図 (2/3)

削　器(18・19)　18は黒曜石剥片の縁辺部を刃部としたもので，主要剥離面側に擦痕が付き刃部に対して直交する方向が顕著にみられる。19は玄武岩質の石材を素材とし厚みのある縁辺を加工して彎曲する刃部としている。一方の側縁を欠失するが，現存長5.8cm・幅5.3cm・厚さ0.8cm・重量36.2g を測る。

石器類のうち14がＰ９内，16が１号不整形土壙，19が１号石棺墓墓壙内出土である他は弥生時代遺物包含層中からの出土である。遺構内出土資料では14の石鏃が弥生時代的な形状を与えることが注意される他は，遺構と関連のないものと思われる。　（小池）

5　小　結

仲田地区で行った調査は，Ⅰ－16の削平のために工事前年度に調査，Ⅰ－６の道路敷となる調査，Ⅰ－14の工事途中で一部破壊されたために調査した墓地群であった。

Ⅰ－６では，郡の後Ⅲ地区に続く谷頭にあたるため，上層に後世の整地層があって深く，遺構・遺物がまばらであった。現在でも深田といわれる郡の後Ⅲ地区は，その西側地区の一部が圃場整備による削平計画があったために，昭和51年度に事前に予備調査を行ったことがある。予備調査の結果，耕作土の下はわずかな床土があったが，その下は礫層となっていた。また，初年度の予備調査でも，郡の後Ⅰ－２・12，Ⅱ－１地区にトレンチを設定したが，やはり礫層にあたっている。しかし，その礫層も南側程深い位置にあり，耕作土と礫層間に水田跡を推定できるような灰褐色粘質土層が深いところで20cm程確認できている。ただ，これが水田耕作が

考えられる層位であるにしても，礫層直上で古式須恵器片が若干発見されているので，５世紀後半の水田跡となる。こうなると，郡の後Ⅲ地区東側には，ますます深い水田跡が存在する可能性が強くなってきた。

仲田Ⅰ－14地区は，箱式石棺墓と甕棺墓の一部が発見されたために調査を行ったが，保存されることになったために，最小限度の調査にとどめた。発見された墓地群は，弥生前期の小型甕棺群と古墳初期にあたる石棺墓と甕棺墓各１基であった。前期甕棺墓は，『三雲遺跡』Ⅰで報告した加賀石Ⅰ－９の前期前半の甕棺群と同時期のものから，前期後半にかかる時期のものが含まれていた。甕棺墓は，前期前半には大型甕棺墓は存在しないが，前期中頃になると中型といってよい甕棺墓が出現する頃で，Ⅰ－14地区の甕棺墓はまさにこの過渡期にあたるものといってよいだろう。北部九州においても，加賀石Ⅰ－９，仲田Ⅰ－14のように前期前半の甕棺群が発見されることも少なく，わずかに前期前半の土壙墓群が発見されているだけである。このような小児用の甕棺群があるからには，２・３号土壙墓のような前期前半の成人用土壙墓群の存在が考えられ，この地区が保存されたことは幸いであった。仲田Ⅰ－14の墓地群に続く時期の甕棺墓は，今回報告している石橋Ⅰ－２地区に，前期後半の中型甕棺墓群がある。これらの前期甕棺群は，総合するとほぼ前期の全期間を通していとなまれており，加賀石Ⅰ地区の中央部を中心に直径約120ｍの半円をえがいている。

しかも，その半円上を，前期初頭には加賀石Ⅰ－１に支石墓，前期前半はⅠ－９に甕棺墓，前期中頃から後半にかけては仲田Ⅰ－14地区に，前期後半は石橋Ⅰ－２地区へと，北側から西側へ，西側から南側へと順に時期を追って移動している。この直径約120ｍの半円に囲まれた地域は，石橋Ⅰ－２の北側に隣接する加賀石Ⅰ－22・23地区を『三雲遺跡』Ⅰに報告している。加賀石Ⅰ－22・23地区には，前期前半から中期中頃を主体とする住居跡群で，とくに前期の円形住居跡が多い。この地区では，前期前半の確実な住居跡は確認していないが，中頃にのぼりうる住居跡があり，前期前半の多量の遺物と貯蔵穴が存在することから，この時期の住居跡の発見は可能であろう。加賀石Ⅰ－22・23地区では，隣接する石橋Ⅰ－２の前期後半の甕棺群の時期の住居跡が多いことから，前期墓地は集落に隣接して営まれていることがわかる。このような前期墓地と集落の位置関係は，前期前半に属するもので春日市伯玄社遺跡の同一丘陵上に約40ｍの間隔をおいていたことを確認している（註４）。これらのことからも，加賀石Ⅰ地区の中心部には前期前半から後半に及ぶ住居跡群があり，その周辺に隣接して墓地を営むという，弥生前期の集落形態の一端が明らかになったといえる。すなわち，支石墓を１基営むほどの勢力をもつ集落形態は，直径約 120ｍの円周内におさまる集落を構成しているということである。支石墓については，『三雲遺跡』Ⅰで少しふれたように，加賀石の北側には井田用会支石墓・井田御子守支石墓が約500ｍ間隔で確認されており，加賀石支石墓を含めた前期初頭の集落が，瑞梅寺川と川原川に挟まれた低段丘の先端近くに，いわば両河川に沿って南北に連なっている。

このような集落形態は，弥生文化起源ごろの集落形態であり，弥生文化起源当初から大集落を形成するものではないことを如実に現わしているといえる。しかも，三雲地区は石ヶ崎支石墓を含めて，このような初期弥生集落が集中するところであり，弥生中期の大集落と南小路の甕棺墓に象徴されるような「伊都国王」の居住するところとなる。

仲田Ⅰ－14の箱式石棺墓と10号甕棺墓は，これ自体で時期を決定するのは困難であるが，前回報告した番上II－６の２号土器溜に含まれる弥生終末期の特徴を残した中型甕との類似性から，古墳時代の布留期でも古式に属することが明らかである。この型式の大甕には，弥生終末的な製作技法がかなり後まで残るので，次回報告するサキゾノⅠ－１の１号住居跡（庄内式）や八龍地区の布留古式の土器セットから明らかにしていきたい。Ⅰ－16地区北東端にある箱式石棺墓も，この時期のものとしてⅠ－14地区の古墳時代前期の墓地群としてとらえられる。

仲田Ⅰ－16は，弥生後期後半から終末期を主体とする集落である。調査区は，長さ45m，幅８mの広さのトレンチで，この広さの中で中期の住居跡３軒，後期後半の住居跡９軒，終末期の住居跡10軒が検出された。この中で，中期の住居跡が少ないが，中期後半の土器は調査区全体から発見され，後期の遺構内にもかなり混入しているところから，７・８・16号住居跡のようにかろうじてプランを確認できたものもあるが，大半は後期の遺構によって破壊されたものと思われる。ただ，１・２号不整形土壙のように割合に深く小さな遺構は，重複しても検出されやすかった。

後期後半の住居跡は，１・４・５・11・15・17・19・20号の８軒があり，１号からファイアンス玉が出土し，17号からは１世帯当りの土器セットと用具が出土して，この時期の生活状態の復原と土器編年上重要なものとなった。とくにファイアンス玉は，日本初の発見であり，日本と大陸の関係を一層緊密なものにしてくれた。ファイアンス玉自体の研究も今後の研究課題となった。17号住居跡出土の土器は，後期後半に属する土器セットとして，三雲遺跡土器編年基準の中に折込むものである。

弥生終末期の住居跡は，２・３・６・９・10・12・13・14・18・21号の10軒で，掘立柱遺構もこの時期に含まれる。仲田Ⅰ－16地区の場合に，後期後半と終末期との時間的差は大きなものではなく，10・12号住居跡のように過渡期の土器を含むものがあり，漸次土器型式も変化し，住居も建替えられていった継続した集落である。しかも，ここでいう17号住居跡出土土器を標識とする後期後半は，終末期に近いものをさす。なお，終末期とする土器型式は，18号住居跡出土土器を準一括土器セットとして，この時期の標識とする。サキゾノⅠ－１の１号住居跡出土土器（庄内式含）と対比される。

終末期の遺構の出土品は，土器の外には玉類が目立っている。18・21号住居跡からは，ガラス小玉が集中して出土している。遺物が遺物であるから，かならずしもこの２軒の住居跡に伴うものとはかぎらないが，時期的には終末期頃のものとしてよいだろう。どのような理由でガ

ラス小玉が多数発見されるのかわからないが，水晶原石があるところから，ガラス玉工房が近くにある可能性もあるし，ファイアンス玉が出土するくらいであるから，指導的地位にある住民の集まる集落であるかもしれない。

掘立柱遺構は，完全な建物としてとらえることができなかったが，この種の掘立柱はこれ以外にも存在する可能性がある。この地区の地山が礫層であったこともあって，重複関係で個別のプランとしてつかめず，時期的な確認ができたものが少ない。弥生期の掘立柱建物は，存在するとはいわれながら，三雲遺跡においてつかめず，このことも今後の課題となろう。（柳田）

註1　ファイアンスについては，平凡社「世界考古学事典」（1979）と丸山次雄「ガラス古代史ノート」（1973）を参考にした。

2　佐賀県教育委員会「二塚山」（『佐賀県文化財調査報告書』46，1979）

3　柳田康雄「B群墓地のまとめ――ガラス玉類の観察」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』9，1978，福岡県教育委員会）

4　福岡県教育委員会「福岡県伯玄社遺跡調査概報」（『福岡県文化財調査報告』36，1968）

第2節　鬼木・深町地区の調査

1　はじめに

鬼木・深町地区は，三雲遺跡群の北西側に位置し，瑞梅寺川の氾濫原である「流田」地区に隣接する。第1次調査では，流田地区の2ヶ所のトレンチで遺物を伴わない砂利層が確認されており，字名の流田の名称どおりの結果であった。これに比較して，鬼木・深町地区は現状で2m程高くなっており，瑞梅寺川の氾濫には関係ないものと思われていた。しかし，昭和50年4月の坪掘り試掘の結果，段丘上である鬼木地区にも，遺構や包含層がない地区があることが判明した。鬼木II地区では，II－4・10・12・16地区で表土下は直接礫層の地山となり，II－11では地表下40cmで包含層に当り，II－13では27cmで包含層となった。すなわち，流田地区に直接面している鬼木地区の西側には，遺構や包含層がなく，中央部から東側には包含層が存在するということである。

昭和50年4月の試掘では，同時に流田地区の東側段丘上と深町地区も実施した。その結果，流田II－2・4地区では地表下34～38cmで多量の土器を含む包含層の存在が明らかになり，段丘縁で氾濫原と境界ができている。同様に深町I－1・5・6・7・12地区でも包含層が検出され，I－6地区では完形の石庖丁が多量の土器片と伴出している。

鬼木II－13は，試掘後作成された圃場整備切盛計画で，都合上削平地区に当り，昭和51年度（第３次）の調査地区となった。発掘調査計画では，削平されるII－13地区全域を調査することにして発掘を開始した。調査は，昭和51年11月20日に開始して，地区中央部の南北トレンチを拡張していく手順としたが，拡張を始めた段階で，出土する土器片の大半が磨滅して細片が多く，包含層中に各時期の遺物が混在することがわかった。包含層を除去すると無遺物層となり，大きな溝状遺構が確認されたが，自然の流木以外に遺物がなく，その流木もさらに下層に及んでいた。このことから，鬼木II－13地区の包含層は，瑞梅寺川の氾濫による２次堆積として，昭和51年12月４日までで調査を終った。鬼木II－13の調査は，柳田と丸山康晴が担当した。

深町－15は，当方の発掘計画には含まれていなかったが，圃場整備の設計変更に伴い，耕作土以外に20cm削平することになり，ユンボによる耕作土剝ぎに立合ったものである。耕作土剝ぎの結果，その下の床土と包含層から大量の土器片が出土したが，遺物は弥生中期前半から古墳初期まで混同して発見され，２次堆積包含層といえるものであった。したがって調査は，昭和53年２月23日から３日間の遺物採集で終った。（柳田）

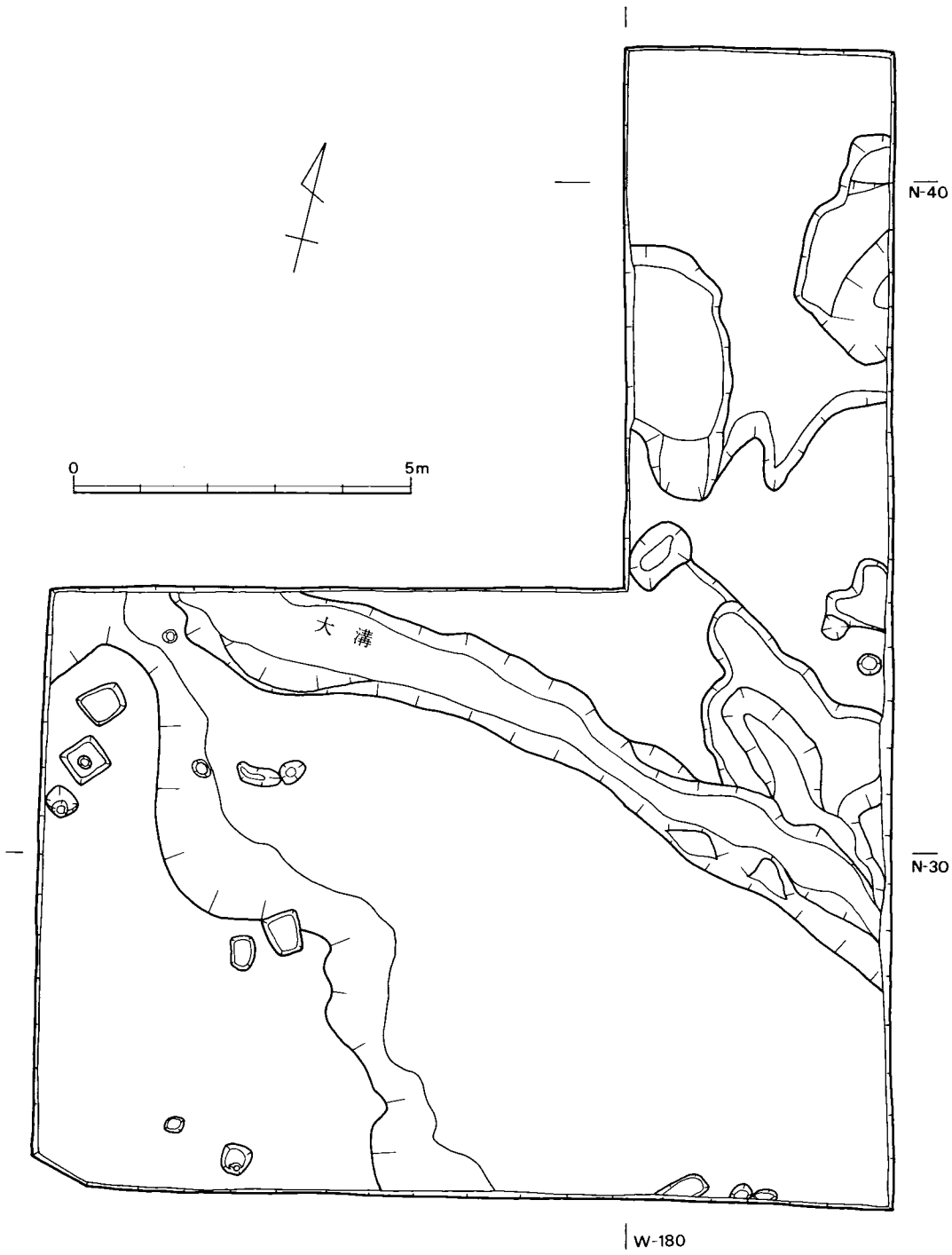
２　鬼木II—13の調査（図版40，第87図）

調査対象地区はN24.5からN42，W164からW188に囲まれる420㎡であり，調査は試掘の結果にもとづいてまず中央より西側に南北方向の幅４ｍ長さ17ｍの調査区を設定し北側より調査を開始した。南側に行くほど包含層の土器の量が多く調査区の西側でN34以南を全面調査することにし拡張した。最終的に調査面積は145㎡となった。

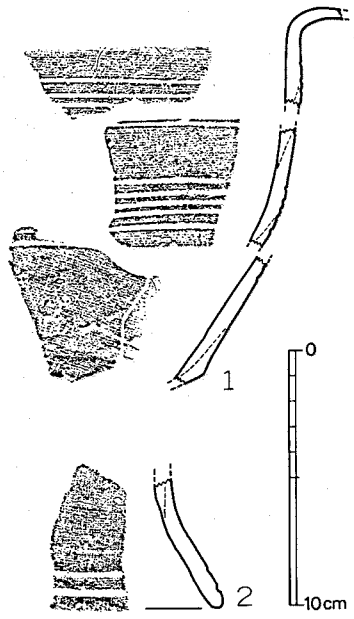
北側では耕作土及び床土30cmを下げると包含層にいたり，南側では16cm前後の耕作土を剝ぐと床土層が非常に薄く包含層が表われる。土器の包含層は15cm前後で，土器は弥生時代中期から終末までと若干の須恵器が含まれていたが量的には後期の土器片が多量に出土した。包含層は時間的層をなさず，各時期のものが同時に堆積しており，かなり磨滅していることから一時期に流されて来たものと思われる。包含層の中には吉備地方弥生中期の土器が含まれていることが注目される。また石庖丁や石鏃などの石器も出土した。

包含層を除去すると自然河道（大溝）１本と方形柱穴１個が検出された。方形柱穴は調査区の西端にあり，60×60cmの掘り方の中には拳大の川原石が詰めてあり，柱は20cm大である。この柱穴を含む建物は西側へ拡がり，検出した柱穴は北東隅を占めるものと推察される。大溝は流木のある東側が75cmで深く西側は60cmと浅くなっており，底は西から東へ傾斜する。流木の外には「カシ」の葉及び「カヤ」の実等も検出した。N37からN41までの北側で２箇所で不整形の落ち込みがみられた。（丸山）

土　器（第88・89図）



第 87 図 鬼 木 II－13 遺 構 配 置 図 (1/100)



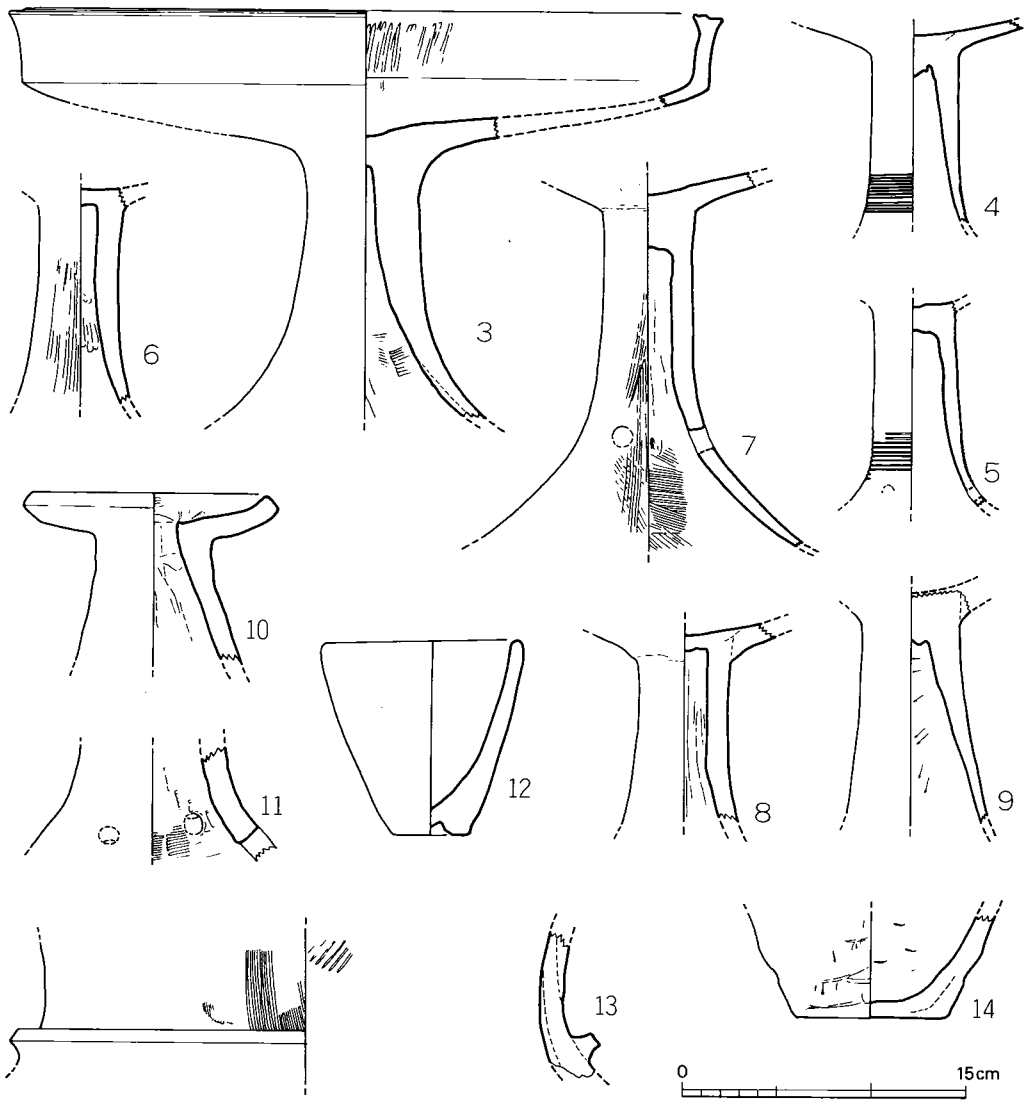
第 88 図　II－13出土土器実測図①（1/3）

1は，細片資料であり，図面における位置関係も不明なところがある。上端の破片は，弥生前期のいわゆる如意形口縁に似ているが，先端を欠いている。この破片には，口縁下と思われる位置に現状で4条の沈線がめぐっている。中央の破片は，上端に1条，2.1cmの間をおいて5条の沈線をめぐらしている。下端の破片は，土器半径の推定復原から中央の破片の下2条の沈線と下端の破片の上2条の沈線が同一レベルのもので，中央破片と下端破片が重復するものと思われる。しかし，下端の破片には，下部に屈曲部があって，土器体部に変化が表われている。この破片の内面には，外面での最下沈線にあたる位置以下はヨコ方向のヘラケズリが行われている。これらの土器片は，共通して胎土に石英・長石・雲母・赤褐色粒を少量含み，淡褐色の良好な焼成に仕上がり，外面には赤褐色の化粧土らしきものがうかがえる。したがって，これらの土器片は同一個体であることがわかる。この土器片については，今後も器形や産地等について検討を要する。

2は，器台と思われる小片である。破片の内側には，指圧痕があるところから，図面のように器台の裾部となるものであろう。外面には端部近くに2本の凹線がめぐっている。これも北部九州に見られないものである。

3は，口径37.5cmの大型の高杯である。直立に近い口縁上端部は幅広くなって凹線をめぐらす。杯部内側には，ヘラ磨き状の暗文を施す。脚部は接合できないが，胎土や焼成具合からいっても同一個体といえる。太目の丈夫な脚である。杯部外面は，直立部がタテ磨き，杯部は分割ヘラ磨きを行い，脚部は外面がナデ，内面はヘラとハケによるヨコナデ調整が行われている。胎土には，大粒を含む石英・雲母が混入し，褐色の良好な焼成となっている。

4・5は，柱状部下端に11～14条の沈線をめぐらす高杯の脚部である。5には穿孔された痕跡があり，円孔の可能性が強い。器面調整は，4・5共に沈線より先に外面はナデ，内面はヘラケズリ後ナデが行われている。杯部中心になるところは，4が放射状にヘラ磨き，5がナデで中央がくぼんでいる。胎土は，4・5共に細砂粒を含む，赤味がかった褐色の焼成となっている。この脚と3の杯部は，吉備地方に見られる中期末から後期初めの影響を強く受けたものと思われる。胎土と焼成上りは，糸島地方に見られないもので，吉備からの搬入品とも考えられるが，3は脚部に，5は円孔に難点がある。いずれにしろ，後期になると吉備地方の土器の影響を受けるものがあるのは確実であろう。



第 89 図　II－13 出 土 土 器 実 測 図 ②（1/4）

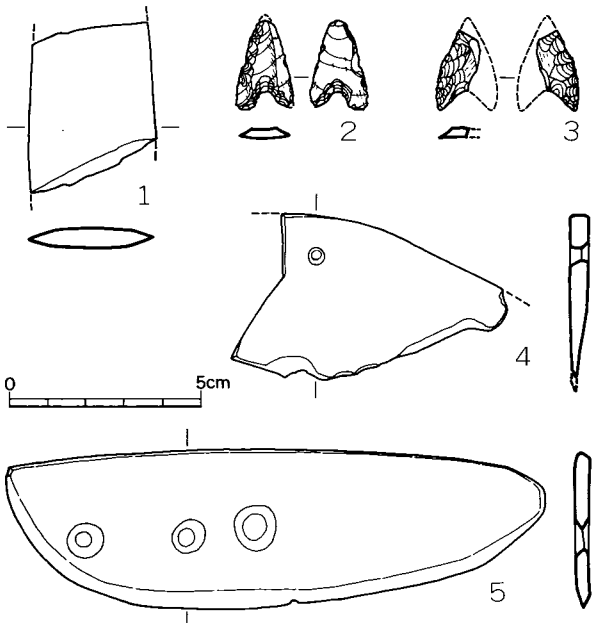
6～9も高杯の脚部であるが，6は外面にタテのヘラ磨き，9が内面ヘラケズリが行われており，北部九州では内面をヘラケズリするのは後期後半からである。

10は，器台であるが，このような受皿状を呈するものは少ない。受部内面はハケ目，外面全体はナデ調整されている。11は，同様な器台か大型の高杯脚部であろう。

12は，厚手の小型鉢で，器高10.4cm，口径10.6cmある。内外共にナデ調整されている。

13は，大型壺形土器の頸部破片。弥生終末期のものである。

14は，器面調整の粗い底部で，内面には爪痕，外面にはヘラケズリのようなナデを施す。



第 90 図　II－13 出 土 石 器 実 測 図（1/2）

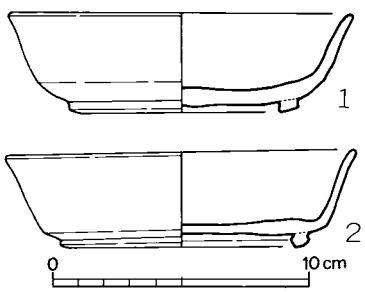
以上で述べた土器は，出土した土器の一部であるが，特徴のあるものを選定した。遺跡が２次堆積であったために共伴資料といえるものがないのは残念である。　（柳田）

石　器（第90図）

石　剣（１）　刃部近くの両側に稜がみられる。基部に近い部分と思われる。灰色を呈する粘板岩の磨製石剣，現存長3.9cm，最大幅3.3cm，厚さ５㎜。

石　鏃（２・３）　ともに基部の逆刺が深いタイプで２は狭義の剝片鏃で1.1ｇを測る。３は主要剝離面を残している。

石庖丁（４・５）　４は玄武岩製で紐孔が小さい。５は粘板岩質で風化が進んでいる。紐孔は刃部に近い位置に３孔ある。　（丸山）



第 91 図　II－13出土須恵器実測図（1/3）

須恵器（第91図）

１は口径13.5cm，器高3.9cm，高台径9.0cmを測る。体部下半に不明瞭ながら稜を有する。２は口径13.7cm，器高3.8cm，高台径9.7cmを測る。高台貼付位置は底部端より内側であり，かつまた体部の傾斜は直近くに立つことから，１と共に８世紀前半頃のものと考えられる。両者ともに焼成は堅緻で暗灰色を呈し，胎土中の砂粒は比較的多く，器面に浮き出ている。　（森田）

3　深町―15の調査

深町―15地区の調査は，当初の発掘調査予定にはなかったもので，圃場整備設計変更のために緊急的なものである。設計変更に伴って，耕作土以外に20cmを削平するということになり，急遽ユンボによる耕作土と床土剝ぎに立合うこととなった。耕作土剝ぎの結果，床土以下に大量の土器片が含まれる包含層が存在することが判明した。圃場整備による削平は，わずか20cmであることから，協議の結果この包含層の調査をすることになった。調査は，床土下を整地し

て遺構検出にかかろうとしたが，包含層には大量の土器と同じように大量の礫が含まれて作業が困難であった。調査の結果，とくに大量の土器が集中するところにも，遺構らしきプランは確認できず，含まれる遺物にも時期差があって，２次堆積と考えざるをえなくなった。発見された大量の土器は，鬼木II—13のように磨滅しておらず，しかも破片が大きいことから，長距離移動して２次堆積したものではない。遺物は，土器片ばかりではなく，鏡片・滑石勾玉・石庖丁・紡錘車が含まれていた。ここに報告する土器は，選択して水洗した一部で，弥生中期前半から古墳初頭のものである。

土　器(図版41～43，第92～95図)

１～８は，中期後半の壺である。１～３・８は，頸部に口唇状凸帯をめぐらして，その間にタテのヘラ描暗文を施すのを特徴とする。３は表面が荒れていて暗文が不明であるが，本来は暗文が施されるものであろう。１～３・５～８は丹塗磨研土器である。６と７は，共伴したわけではないが，本来セットになるもので，双方に２対４個の紐通し孔を持つ。

９～11は，甕である。このうち９は，鉢形で内面に丹塗磨研が残っていることから，本来外面にも丹塗磨研があったものであろう。10は，底径に比較して，底部に厚みがあることから中期前半に属するであろう。

12～19は，高杯である。このうち12～16は，丹塗磨研土器で中期後半に属するが，12のみ中期中頃になるだろう。17～19は，後期に属する高杯で，17は瀬戸内系の影響を受けた土器で，後期中頃に属するであろう。18は，17の口縁の平坦面がなくなりかけたもので，17より後出のものとなる。19の脚部には，３個の円孔があり，18以後の脚部となり，後期後半から終末のものである。

20～22は，後期に属する手捏的な支脚である。

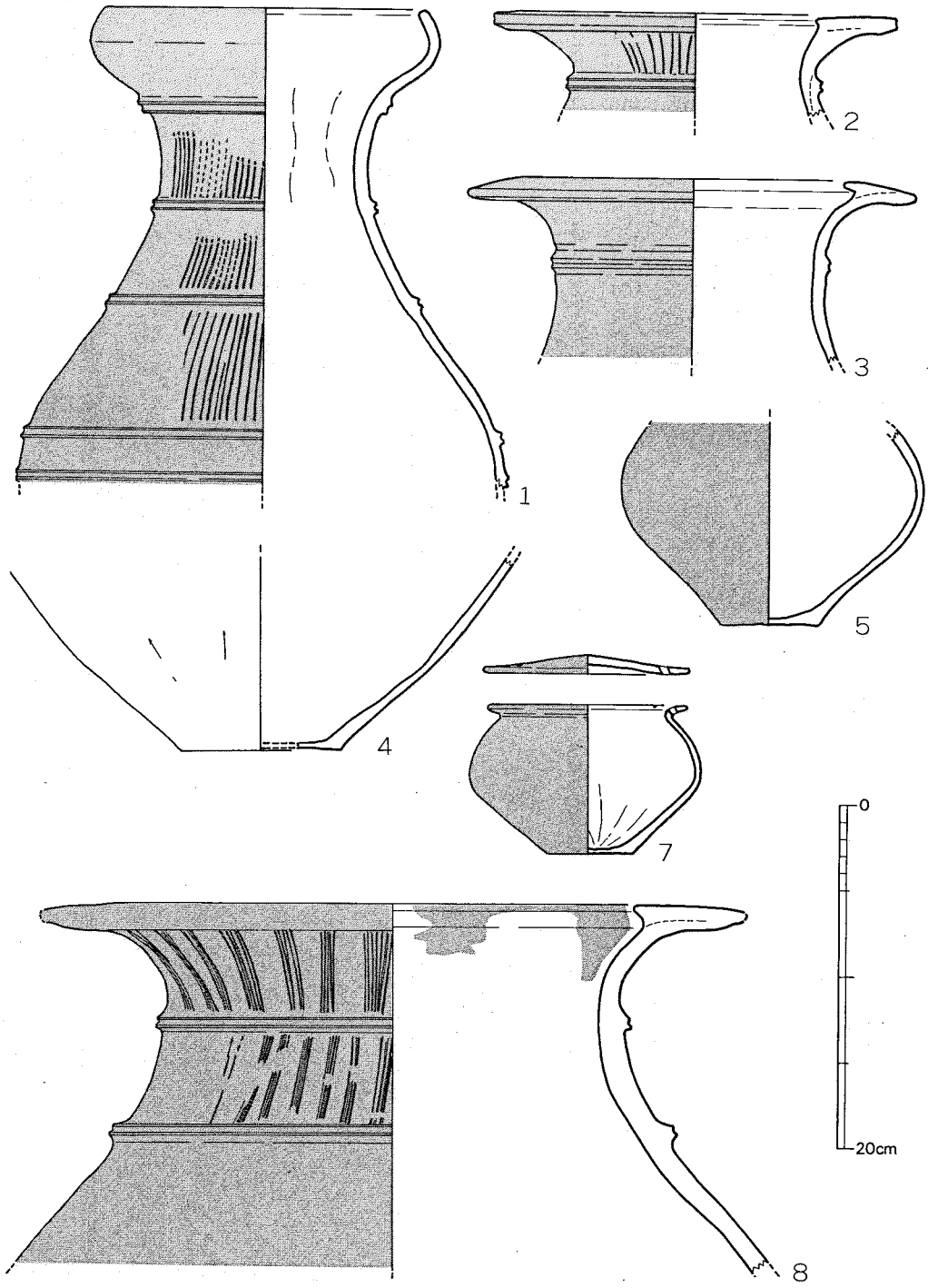
23は，特異な口縁部を持つが，中期末の甕に口縁が内湾して立上がる同様なものがあり，肩部の凸帯も口唇状を呈することから，中期末の壺としてよい。

24～28・31は，後期前半に属する壺である。壺は24のような摘み上げ口縁の広口壺と28・31のような鍬先口縁のものがあるが，肩部に凸帯をめぐらすのは同様である。24～28の中でも，26の凸帯は口唇状を呈して頸部が細いのに対し，25は頸部が広がるところから，26は後期初頭で25は後期後半になるものであろう。24・25・27は丹塗土器で，27も26と同様な器形になるものであろう。

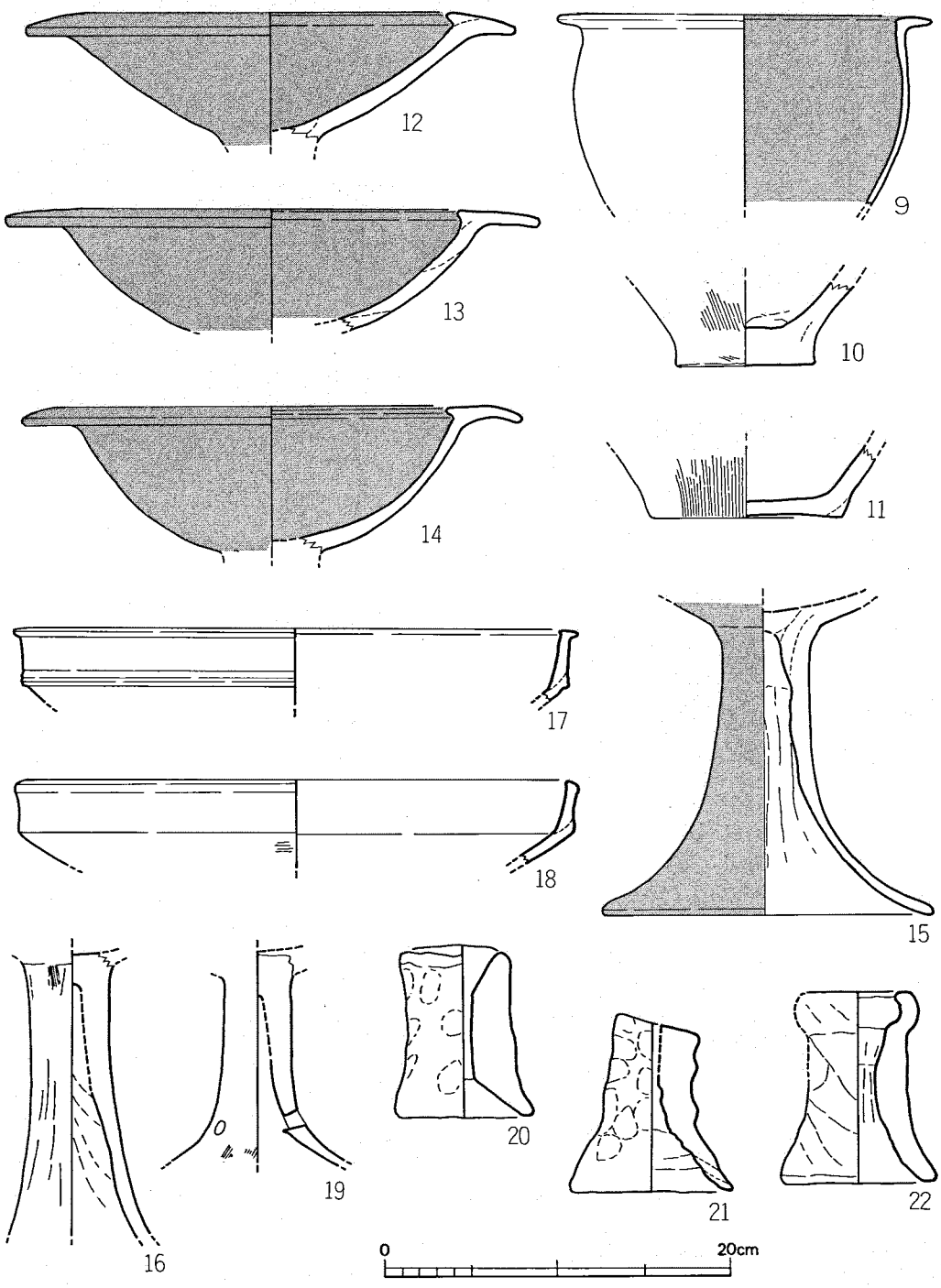
29は，無頸丹塗小壺で，手捏的な作りとなっている。中期後半から後期前半に属するもの。

30は，中期から後期前半頃に属する支脚である。

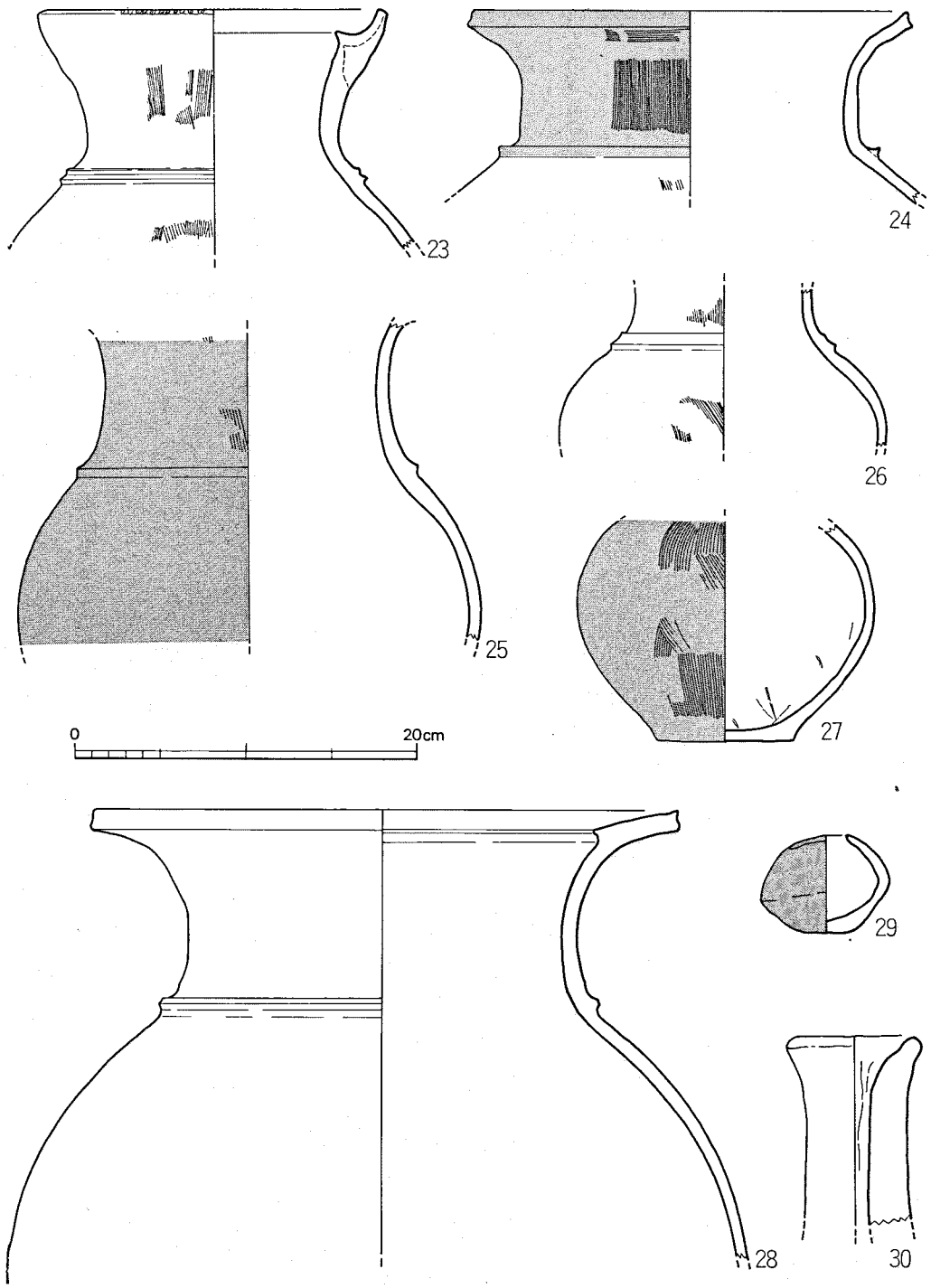
32・33は，胴部に方形透窓を有す甕である。32は，口径19.6cmの大きさで，口縁下の胴部に横幅8.7cm，高さ3.5cm以上の大きさの方形透窓を持っている。口縁は短かく屈曲し，胴部外面のハケ目も細かいことから後期初頭のものである。33は，口径14.7cmの大きさで，胴部に横幅



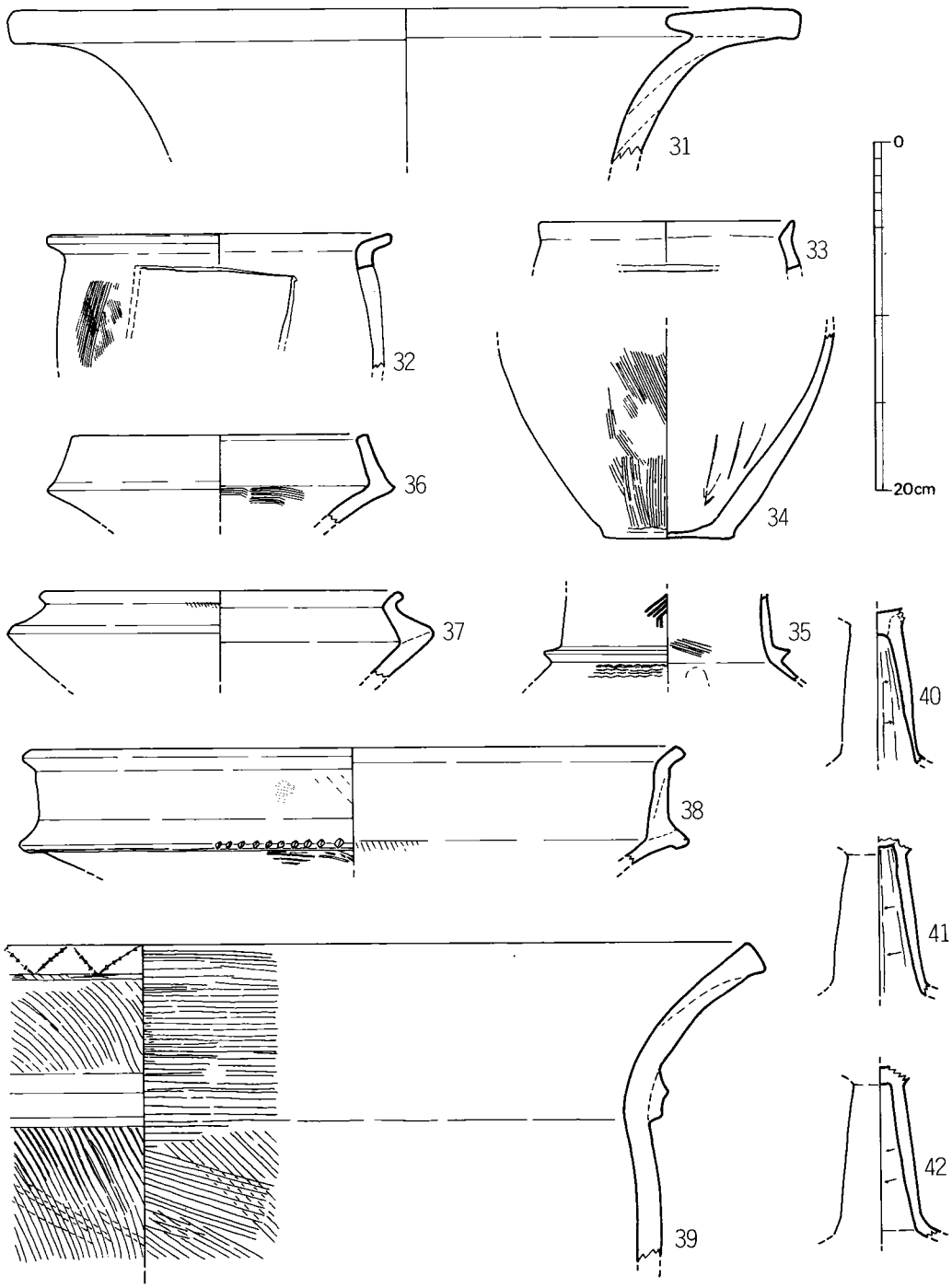
第 92 図 深町−15 出土土器実測図① (1/4)



第 93 図 深町−15 出土土器実測図② (1/4)



第 94 図　深町−15 出土土器実測図③ (1/4)



第 95 図 深町－15 出土土器実測図④ (1/4)

5cm以上の方形透窓を有する。やはり，後期初頭頃のものであろう。34も底部の形態から，後期前半の甕である。

35は，壺の頸部から肩部の破片で，頸部と胴部の接合部に高さのある三角凸帯1本をめぐらし，その下の肩部に櫛描波状文を施す。頸部内外面にはタタキ目状の粗いハケ目を残し，肩部内面にも指圧痕を残す。胎土には砂粒を含み，外面が黄褐色，内面が淡褐色を呈する。

36～38は，番号順に後期後半・終末・終末から古墳初頭の壺の口縁部である。中期後半から後期後半まで続いて，あまり変化をしなかった袋状口縁も，終末期になって著しい変化をとげる過程を現わしている。38は，口縁外面の直立部に径1.5cmの赤色顔料による円形付文がある。

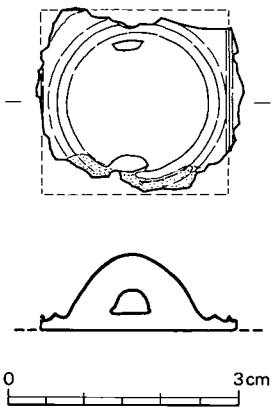
39は，終末期の大型甕である。大甕は，口径71cmの大きさで，口径が胴径を上回るように大きく外反するのを特徴とする。口縁先端には，板目によって山形のキザミ目を施し，器内外面は粗いハケ目調整されている。

40～42は，土師器高杯の脚部である。脚部は，細長くわずかにふくらむ柱状部で，内面はヘラケズリされている。5世紀初頭のものであろう。

以上で述べた土器は，大量に採集したごく一部の土器であるが，時期的には一応網羅できているものと思われる。時期は，10の底部が中期前半に属するが，他は中期後半から終末期のものが多く，一部土師器を含んでいる。

鏡　片(図版43，第96図)

この鏡片は，鈕と鈕座に接する方格の一部を残す破片で，方格の一部からかろうじて方格規矩鏡系のものであることが確認できる。鏡片は，鈕径19.6mm，鈕厚10.3mm，円圏座径24.5mm，方格幅25.5mm，円圏厚2.3mm，方格厚2.0mmに作られ，灰黒色の銅質のよいものである。鏡は，銅質のよいところから，舶載鏡と思われるが，鈕座の四葉文を省略し，鈕座の円圏に直接方格を配置するなど，方格規矩鏡でも退化型式となり，後漢末頃のものであろう。

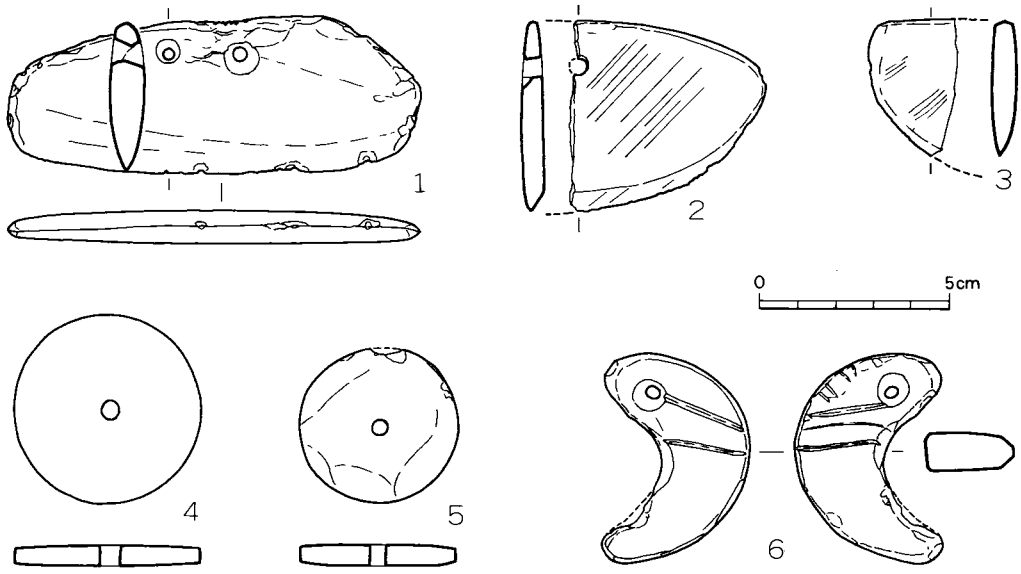


第96図　深町－15出土鏡片実測図（実大）

石製品・石器(図版43，第97・98図)

石庖丁(第97図1～3)　1は深町―6地区の坪掘りの際に終末土器群に共伴して出土したもので，遺構の性格は不明であるが，深町―15と同様な性格である可能性が強い。石庖丁は，輝緑凝灰岩製で，著しく使用にたえたものであるが，図の刃こぼれは新しい欠損である。刃部以外の側辺や背は使用時の欠損が多いが，再研磨し，一方の孔の上付近の背にはキザミ状の磨滅痕があり，紐ずれのあとかとも思われる。大きさは，長さ10.9cm，最大幅4.1cm，厚さ0.9cm，重さ62.8gある。

2以下は深町―15の出土品で，時期は決定できない。2は，角閃

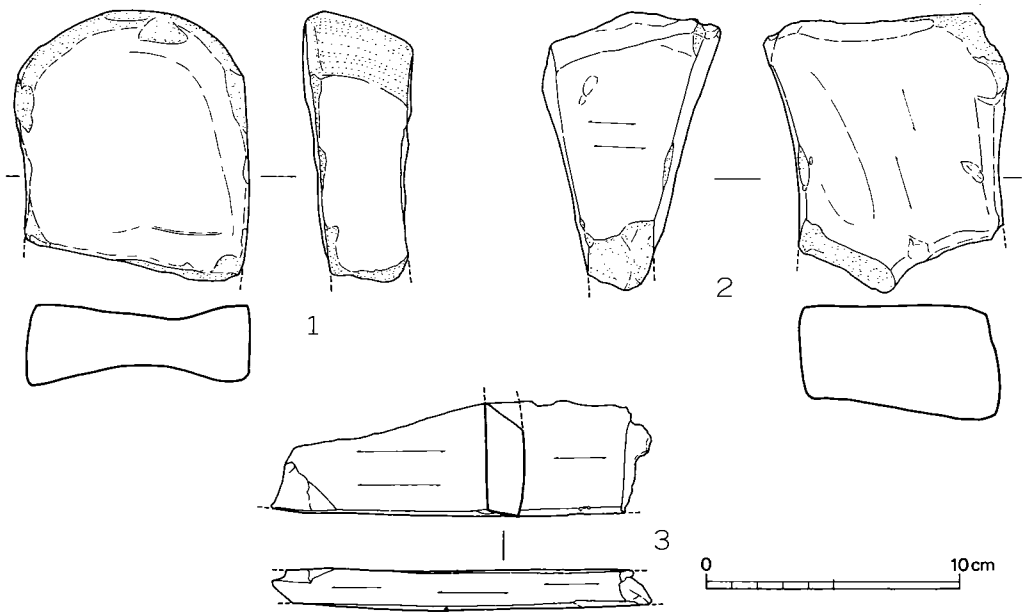


第 97 図　深町出土石器・石製品実測図（1/2）

安山岩製で，扁平な作りの片刃状を呈する。現存最大幅５cmある。

３は，輝緑凝灰岩製品の小破片である。

紡錘車（第97図４・５）　４は，灰黒色の白雲母片岩で，径4.93cm，厚さ4.35～5.5mm，孔径4.95mm，重さ25.9ｇの大きさである。本例は研磨にむらのない精美な製品である。



第 98 図　深町出土砥石実測図（1/3）

柿　木

5は，白雲母片岩の径4.19cm，厚さ5.75mm，孔径4.2mm，重さ18.65ｇの大きさで，周縁の研磨にむらがある。

滑石製勾玉（第97図６）　大きさは，長さ5.5cm，最大幅2.4cm，厚さ1.05cm，重さ31.7ｇある。作りは扁平で，両面に同様な線刻を有し，背は平坦である。孔は両側穿孔である。

砥　石（第98図）　1は，砂岩製砥石で，半分が欠損しているが，欠損後も使用して中央部がくぼんでいる。砥石は，上下両面と両側面の４面を使用している。

2は，1と同様な砂岩であり，極度に使用して中央部が薄くなって半折しているが，半折後も使用したらしく，折れた面の一部の角が丸くなっている。

3は，灰色粘板岩製の仕上げ砥石で，３面に欠損部がある。図面の表部分と側面は全面が使用されているが，裏面はわずかに磨滅痕があるだけである。とくに表面は平坦に使用されていることから，鉄刀など長いものか，刃幅の広い利器を研磨したものであろう。　（柳田）

第３節　柿木地区の調査

１　はじめに

柿木地区は，第１次調査でトレンチ２本を設定し，その結果は『三雲遺跡』Ⅰで報告したように，中期初頭と中期後半から後期前半の土器を伴って，住居跡・ピット・溝が検出されている。これより先に，この地区から青銅製鋤先の完形品が採集されて，伊都国資料館に所蔵されている。

今回ここに報告するのは，圃場整備に際して現存の水路を幅広くするために発掘調査したものである。水路は，柿木―６から11の西端をかすめるもので，３ｍの工事幅をもつものである。

昭和53年３月２日，水路部分の表土剝ぎをユンボで行なうむね業者から連絡があったので，立合ったところ，６地区は以前に水路があったらしく攪乱されていたが，９・10地区になると遺物包含層があり，土器溜りも確認された。しかし，９・10地区にくい込む水路幅は約１ｍほどで，こちらの調査都合もつかないところから，調査を断念し，遺物採集のみを行った。ところが，11地区に表土剝ぎが及んだ直後に，11地区の北端近くの表土直下で，青磁と白磁の５枚重ねがユンボにかけられてしまった。年度末であることから，表土剝ぎを急いだための思わぬ失敗であった。これ以後は業者も慎重になり，丁寧な作業となったために，11地区の南半で検出された弥生墓地群は破壊されることがなかった。11地区になると，水路工事幅３ｍがそのままくい込んで，幅３ｍ，長さ12ｍのトレンチと同じになり，方形土壙のプランが検出されることとなった。検出された方形土壙には，一部甕棺墓らしきものが見えたために，工事許可をす

ることができなくなった。圃場整備工事も当方も年度末を控え，設計変更もならず，さりとて未調査のまま破壊することができないため，協議の結果他所に優先して早急に発掘調査することになった。調査を始めた結果，甕棺墓4基・土壙墓4基とこれより古い住居跡まで検出された。しかも，甕棺墓内はもちろん土壙墓内にも人骨が残り，作業は思うように進行せず，年度を越して継続調査となった。

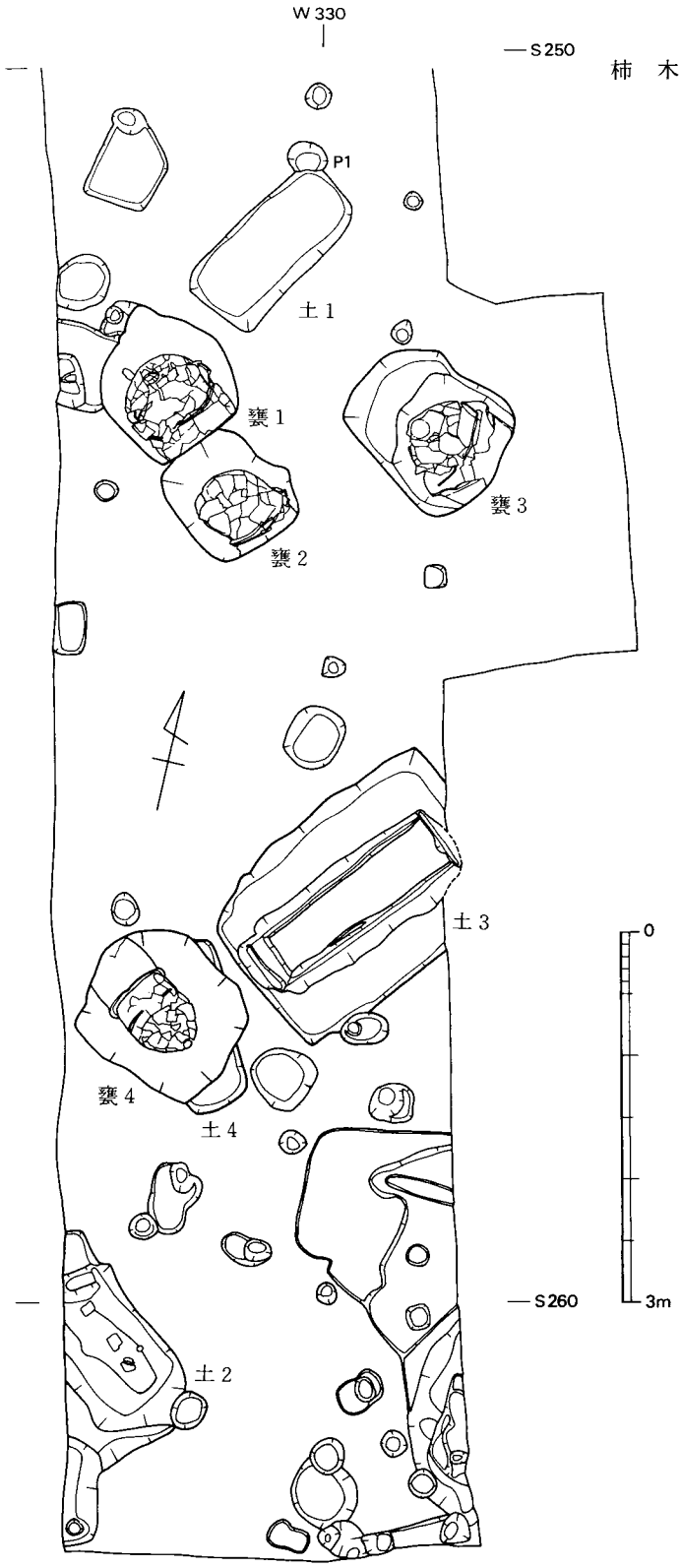
水路は，この南北のものに直行して，柿木—10の南端から番上II—5の北端を通る東西の水路もあったが，遺構・遺物がまばらであったために，11地区の調査とも勘案して，柿木地区のみ東西水路は遺物採集だけで終らざるをえなかった。

2　土壙墓・甕棺墓

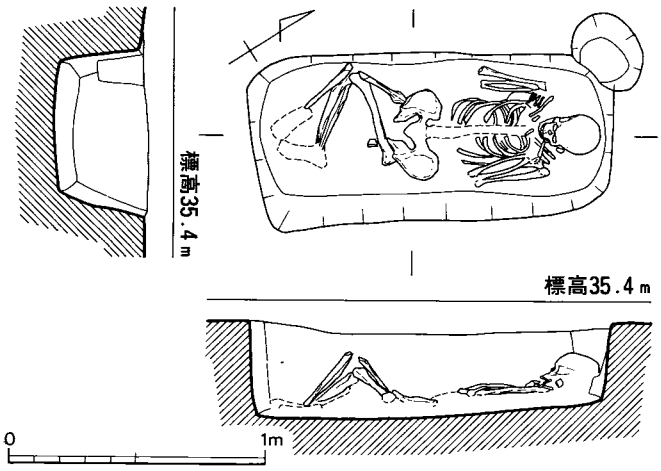
(1)　土壙墓

(図版44・45, 第100～103図)

柿木—11地区では，土壙墓が4基検出された。検出された土壙墓は，3号が組合木棺をもつが，他の3基は素掘りの土壙墓であった。



第99図　柿木—11遺構配置図 (1/60)



第100図　1号土壙墓実測図（1/30）

1号土壙墓（図版44－2，第100図）

1号土壙墓は，3m幅のトレンチ内で最も北側に位置するものである。土壙墓は，主軸をN33°Eに向けた，長さ1.44m，幅66cm，深さ38cmの大きさの長方形をしている。土壙内は，床面がほぼ平坦であるが，頭部側が4cm程高くなり，壁面は垂直に近くなっている。土壙内には，北東側を枕にした人骨がかろうじて検出され，仰臥屈葬が確認された。

土壙内の埋土は，土壙プランを確認した時点で黄褐色土の地山に褐色土が詰まり，識別できたが，深さ10cm程でこの褐色土もなくなり，地山とほとんど同質の黄褐色土となった。この褐色土層中で打製石鏃1個が発見されたが，この時は土壙墓と思われなかった。しかし，その後の清掃時に右足骨を検出して，この土壙墓が深いことを確認したのである。確認された人骨は，薄い皮膜として残っているだけで，掘出しに時間を要した。人骨の太い部分は，白い皮膜として残っているが，背髄や足先は黄褐色砂質土の中に黒褐色土として輪郭をつかめるだけであった。土壙墓内に人骨を発見した時は，青磁や白磁椀の一括品が発見されていただけに，中世の土壙墓ではないかという疑いがもたれたが，甕棺墓や木棺墓にも人骨が残り，とくに甕棺墓内には腐植土が混入しても同じように人骨が遺存していたことから，この土壙墓を甕棺と同じ弥生期のものとして扱うことにした。さらに，1号土壙墓内には，新しい遺物は混入せず，混入しているのは弥生前期土器片と打製石鏃のみであった。1号土壙墓の人骨が3号土壙墓の木棺内人骨より保存がよかったのは，木棺内の一定期間の空間と木棺自体の腐植から，人骨の腐植も促進させたのに対し，1号土壙墓内には腐植土の混入しない地山の黄褐色砂質土のみで，一種の密封状態にされたために，人骨の腐植を遅らせる結果になったのであろう。

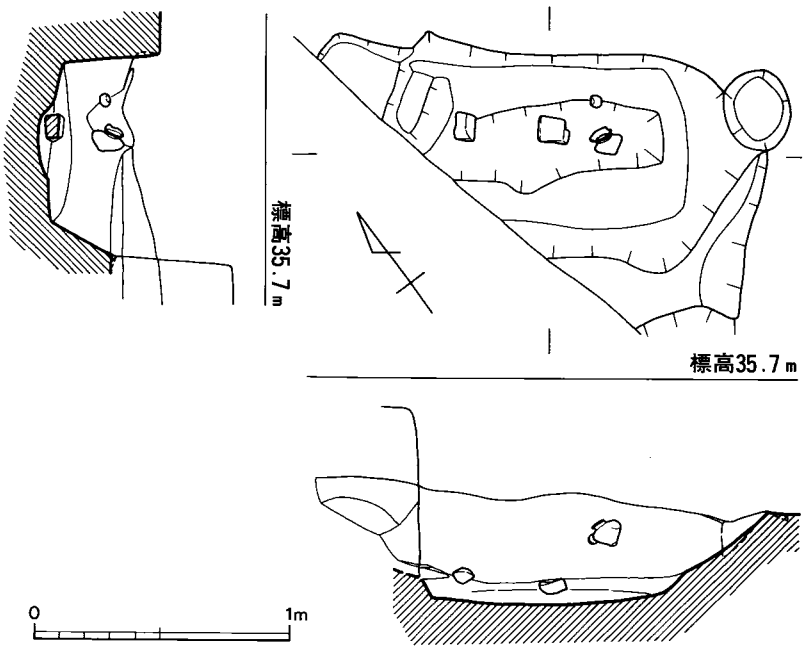
人骨は，腕を折返し膝を立てた仰臥屈葬で，水平な甕棺内人骨に見られる葬法と同じである。

土壙墓には，北側隅に重複した新しいピットがあるが，このピットから第110図7のように前期末の大型甕形土器口縁部の破片が出土しているので，このことからも弥生前期末以前の時期となろう。（柳田）

2号土壙墓（図版45－1，第101図）

調査区の南端に位置するもので，西側は水路によって切られている。主軸をN127°Eにとる

土壙墓で，２段掘りでほぼ隅丸長方形のプランを呈す。東辺の残存状態から，上段は復原全長1.78m，幅80cm，深さ40cm。下段は長さ1.2m前後，幅25～30cmで深さは10～7.5cmと極めて浅い。床面は明瞭な段を持たず皿状を呈す。又，上・下の，段もいわゆる２段掘，箱形の木棺墓とされるものと異なり，緩傾斜である。壙内東側には床面より20cmほど浮き，横だおしの状態で壺形土器が出土した。出土状態からすれば，土壙墓の上部（木蓋上）に被葬者とともに副葬されたと考えるのが妥当であろう。副葬される小壺は通常，被葬者の頭部付近に埋置されている様であり，それからすれば壺の位置から東側を枕とした可能性が強い。（木下）



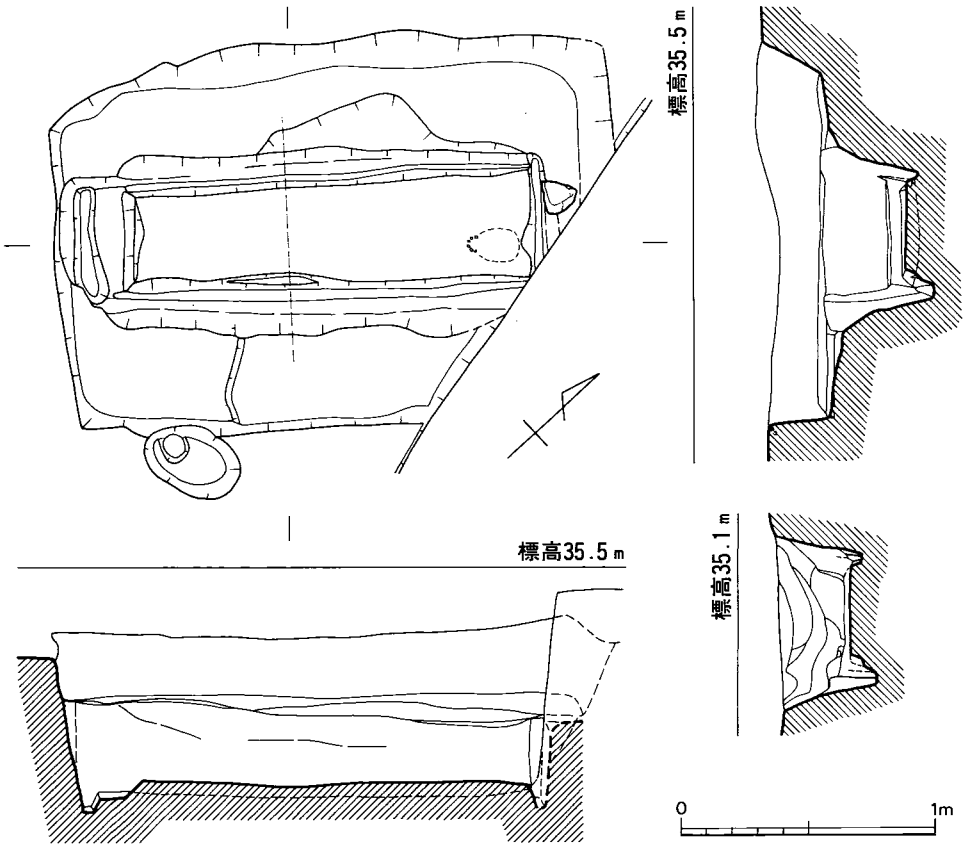
第101図　２号土壙墓実測図（1/30）

副葬土器（図版51，第109図３）　３は，２号土壙墓に副葬されていた完形の小壺で，木蓋の上か，埋土途中に埋められていたものであろう。小壺は，器高9.9cm，口径9.2cm，胴最大径12.1cmの大きさで，胴部は上半で肩が張り，細い底部はわずかに上げ底となる。頸部は直立し，急に開く短かい口縁部を有する。器面調整は，口縁部外面がヨコナデ後８mmほどの間隔をおいてタテのヘラ描暗文を施す。口縁内側は，ヨコヘラ磨き，胴部外面は肩部上半がタテヘラ磨き，肩部下半から胴部上半がヘラヨコ磨き，胴部下半から底部までヘラタテ磨き，底面はナデ調整が行われている。胎土には，石英・長石・雲母・角閃石を含み，淡褐色と褐色を呈し，焼成良好である。この小壺は，中期初頭のものである。

３号土壙墓（図版45－２・３，第102図）

３号土壙墓は，トレンチのほぼ中央部で発見された，木棺を内蔵する成人墓である。土壙墓は，長さ2.2m，中心部幅1.52m，深さ30cmの大きさの墓壙底に，さらに２段掘りとして，主軸をN38°Eに向けた木棺木組壙を掘込んでいる。

木棺内法は，木棺掘方の内法より小さいことは当然であるが，木棺組立のために掘られた溝



第102図　3号土壙墓実測図(1/30)

から復原すると，長さ1.73m，北東側幅44cm，南西側幅41cm，深さ32cmの大きさになり，成人を伸展葬できる十分な広さがある。木棺には，底板・側板・小口板・蓋板の6枚以上の板材を使用したことは推測できるが，その板材も厚さ2cm以上あったことは木棺組合溝と土層断面図から明らかである。木棺墓によっては，木棺組合溝の深さが部分的に違うものがあり，箱式石棺のように数枚の側板を使用することもありうるが，この3号土壙墓の木棺は溝の深さが一定していることから，1枚の側板を横に使用したものと思われる。木棺の組合法は，津古内畑遺跡で分類したB式(註1)に当る小口板を側板の外側に出して組合せる型式である。この型式の木棺には，底板を使用するものかどうかが問題となるが，伯玄社3号木棺(註2)と違って柿木3号木棺は床面が平坦であることから落し蓋状の底板が存在した可能性が強い。このことは，木棺内土層断面図に側板部と同じ暗灰褐色粘土質土が床面全体に残っていることからも推定できる。

木棺内床面には，北東側を枕とする人骨の痕跡を検出することができた。人骨は，痕跡のみで，1号土壙墓のように薄い皮膜というより，つぶれた灰白色の繊維状のものが部分的観察で

きたにすぎない。床面には，底板の腐植土と思われる暗灰褐色粘質土が全面に薄く分布していたが，この中に伸展葬と思われる状態で両側の大腿骨の部分が木棺主軸に沿って伸び，頭蓋骨と思われる楕円形の痕跡の中に歯のエナメル質部が連なっているのを検出できた。

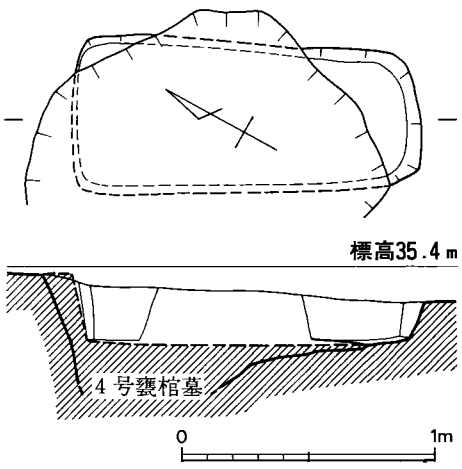
木棺は，歯が検出された北東側が３cm程広くなっており，1号土壙墓人骨の方向も同じである。

木棺には，木蓋の存在は当然であるが，北東側小口部に１個の石が置かれているだけで，粘土等の目貼りの痕跡は認められなかった。

なお，３号土壙墓埋土中から第110図９－11のような中期初頭の甕の口縁部が発見されているので，この時期の木棺墓であろう。

４号土壙墓（図版48－３，第103図）

４号土壙墓は，木棺墓の３号土壙墓の南西側に隣接するが，４号甕棺墓に大半を破壊されて原形をとどめていない。土壙墓は，主軸をN29°Wに向けた，長さ1.37m，最小幅53cm，深さ34cmの大きさの長方形をしている。土壙墓の幅は，南側にわずかに残っている小口部の幅であるが，これと東側壁との角度から推測すると，北側の小口幅がかなり広くなるようだ。すなわち，北側幅が約65cmとなって，北側に頭位がくるものであろう。出土品がないので，４号甕棺の時期である中期前半以前の土壙墓としかいえない。



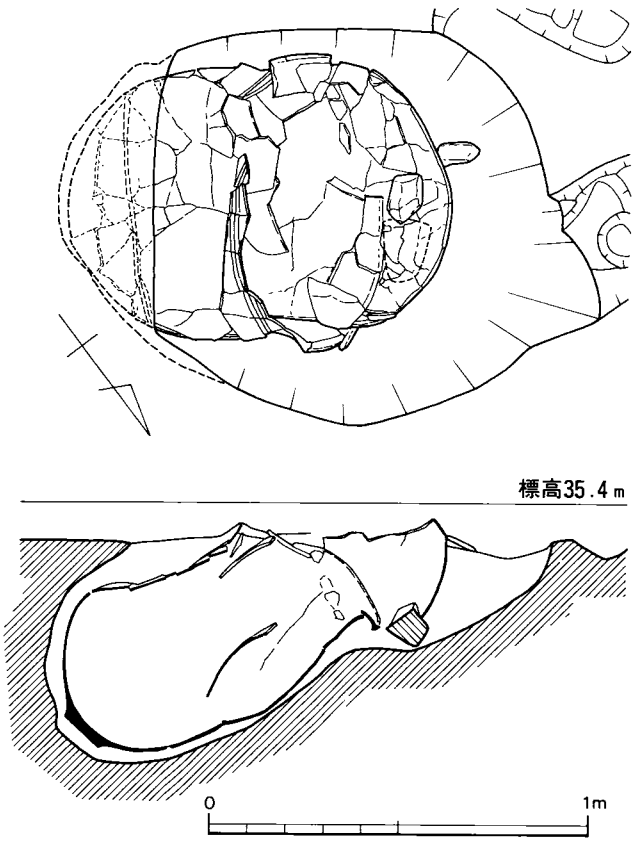
第103図　４号土壙墓実測図（1/30）

(2)　甕棺墓（図版46～48，第104～108図）

１号甕棺墓（図版46，第104図）

１号甕棺墓は，１号土壙墓の南側にあり，４基の甕棺墓中で最も北側に位置する。甕棺の墓壙は，南東側にある２号甕棺の墓壙の一部を切って掘込まれている。墓壙は，主軸方向の長さ1.08m，幅1.04mの大きさの隅丸胴張方形をして，現状では深さ30cmであるが，この墓壙にさらに南東側に斜壙を掘って甕棺を挿入している。挿入された甕棺は，主軸をN53°Wに向け，傾斜角46°で埋葬されている。下甕には，口縁が大きく開くものが使用されているため，上甕は頸部以上を打欠いて接口方式に合わせて蓋としている。甕棺は，上甕を蓋として合わせる時に，１段目の墓壙底と上甕との間隙を埋めるのと上甕を固定させるために，径10～18cm大の石を３個使用している。

甕棺内には，腐植土が充満していたが，下甕底部近くに大腿骨・下肢骨・下顎骨・歯の各部



第104図　1号甕棺墓実測図（1/20）

が判定できる人骨が折重なっていたが，大腿骨と下肢骨が平行してそろっていたことから膝を立てそろえた屈葬が行われていた可能性が強い。

甕　棺（図版49－1，第107図）

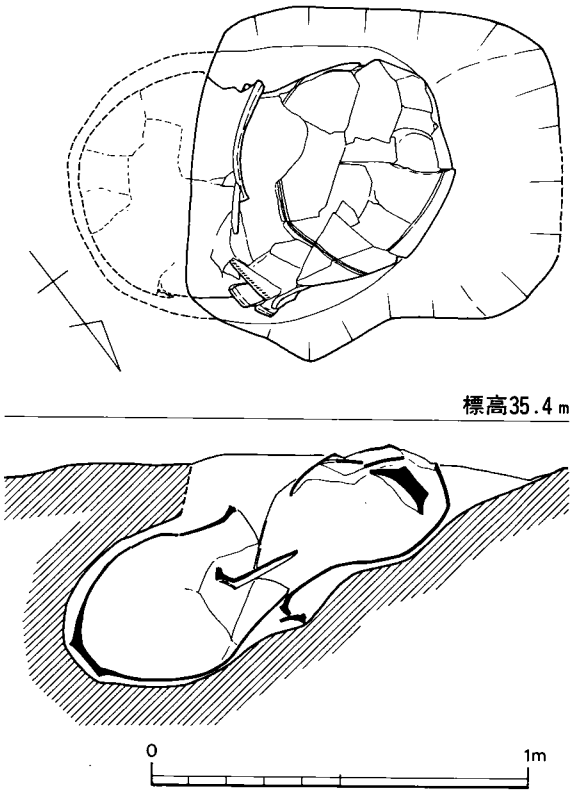
上甕は，耕作によって削平され，胴部以下3分の1程を欠損し，さらに合口とするために頸部以上を打欠いているために，胴中心部のみが現存しているにすぎない。現存する上甕は，胴最大径が65cmあり，下甕より大きい。甕の内外面は，板状用具でナデ調整されているが，その起点と思われる用具痕が残るだけで，ハケ目は残っていない。外面の肩部には，ナデ調整の後にヘラ描沈線2条がめぐらされている。

下甕は，器高78.8cm，口径70.4cm，胴最大径62.5cmの大型の甕形土器である。砲弾形の直立した胴部に，ゆるく外反する口縁部をもち，いわゆる壺形土器から変化したくびれのないものとなっている。口縁部は，内外面を補強して厚くし，口唇部にゆるい段と突起をもたせている。器面調整は，口縁の肥厚部周辺がヨコナデ，胴部外面は上から斜下向にナデが行われるが，内面は器面が荒れて不明，甕の外面には，口縁下の屈曲部と胴最大部に各々3本のヘラ描沈線をめぐらすが，胴部では完全に3本めぐらない部分もある。胎土には，石英・長石・雲母・赤褐色粒が多く含まれ，表面は赤褐色と淡褐色で，胴部最大位置に黒斑があり，内部は黒色の焼成上がりとなっている。（柳田）

2号甕棺墓（図版47－1・2，第105図）

調査区の北側で，1号甕棺墓に墓壙を切られて埋置された甕棺で，主軸をN52°Wにとる。大型の壺と壺の合口甕棺で，検出した状態では覆口式と思われたが，甕棺実測の結果，接口式である事が判明した。土圧等の要因によるものであろう。傾斜角は31°で，下甕は横穴状に穿かれた壙内に⅔が入る。下甕内より頭骨，下顎骨，上・下肢骨が残存していた。上・下肢骨の状態より仰臥屈葬と考えられる。（木下）

甕　棺(図版49－２，第107図)　上甕は，器高58.6cm，口径47cm，胴最大径50.3cmの甕形土器であるが，３本の沈線がめぐるところが肩部になり，それから上が内傾する頸部，さらにその上部が外反した口縁部といえるように全体に壺形土器の色彩の強いものである。口縁部には，上部を平坦にするために，粘土貼付を行っており，その外面の下端にはキザミ目を施すところが，壺形土器の口縁内側粘土貼付と違っている。底部は，割合大き目で厚手となるが，わずかに上げ底としている。器面調整は，口縁部周辺がヨコナデ，さらに内面のみ口縁から８cmのところまで，ヘラ状用具によってヨコナデされている。その他の内面全体と沈線から上は，ナデが行なわれるが，沈線から底部近くまではヘラ研磨が行われている。ヘラ研磨は，沈線付近がヨコ方向に近いが，底部に近づくにしたがって研磨方向に傾斜がついてきている。この研磨方法は，口縁を下に伏せて行ったもので，研磨時の工人の肩の位置によって研磨方向角が変化する。胎土には，石英・長石・雲母・赤褐色粒を割合多く含むが，表面には露出していない。焼成胎土は淡褐色で，表面は黒褐色部分と赤褐色部分があり，黒班もある。底部内面には，赤色顔料様の付着物がある。



第105図　２号甕棺墓実測図(1/20)

下甕は，器高60cm，口径48.4cm，胴最大径51.5cmの甕形土器で，胴部全体にふくらみをもつのを特徴とする。胴部に沈線もなく，壺形土器の特徴である頸部をもたないところは，これまでの前期土器に見られないものである。口縁部は，胴部にふくらみがあるためか，あまり外反せずに立上がる。口縁部には，内側に三角形凸帯状の貼付け，外側は外反部全体に及ぶ粘土貼付けを行って補強がなされてる。胴部内面には，表面調整が完全でないために，粘土接続部が明瞭に残り，器面全体にも凹凸が観察できる。器面の凹凸は，同時に粘土帯継目と重なりを現わし，従来から器面に横に連なる凹部は粘土継目として真横に外面に達する線を引かれることが多かった。しかし，この甕にかぎらず，凹部が粘土帯継目の一端ではありうるが，もう一方の一端は次の上下どちらかの凹部に連がるのであり，同時に凸部は上下粘土帯の重なりを現わして

いることが明瞭に観察できる。器面調整は，口縁部は内面が上から３cm，外面が６cmのところまでヨコナデ，その他の胴部内外面はナデが行われ，沈線やキザミ目を施さない。胴部内面にはナデ用具端部圧痕が残っている。胎土には，石英・長石・雲母・赤褐色粒を割合多く含み，表面は黄褐色と淡褐色をするが，器壁の厚い口縁部などの内部は黒色である。

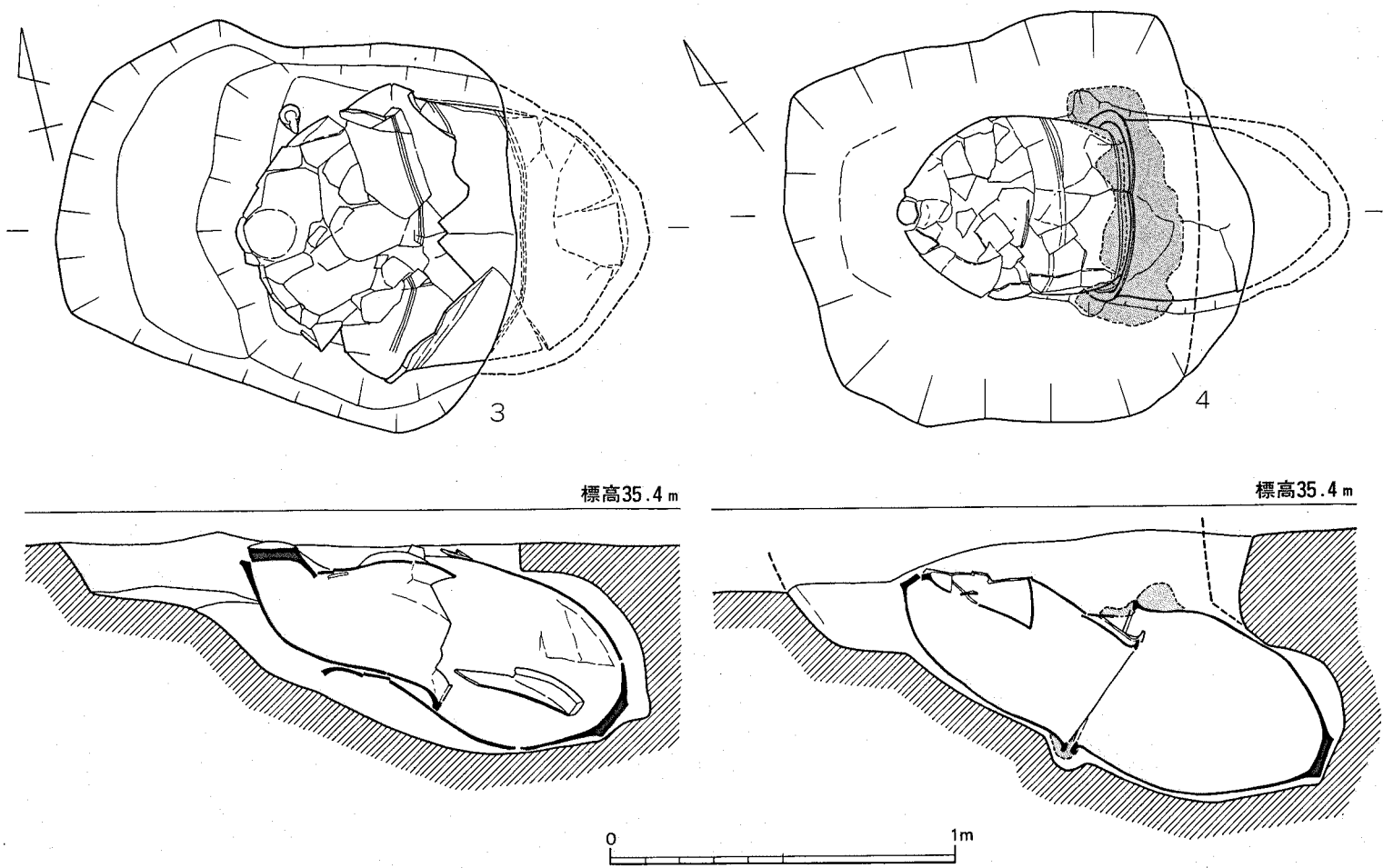
３号甕棺墓(図版47－３・48－１・２，第106図)

３号甕棺墓は，２号甕棺墓の東側にあり，幅３mのトレンチに墓壙が半分検出されたので，この部分を拡張して調査した。墓壙は，主軸方向の長さ1.33m，最大幅1.12mの大きさの隅丸胴張方形をして，現在は削平されて深さ17cmしか残っていない。この浅い墓壙内には，さらに東側に斜壙を掘り，甕棺を挿入している。甕棺は，主軸をＮ76°Ｗの方向に向け，傾斜角28°で墓壙に挿入されているが，合口法は下甕の口径が大きいために，現状では上甕が下甕に36cmも挿入されたようになっている。下甕の胴部で最下位になる部分には，甕を墓壙に設置した後で，内側から穿孔した孔があり，破片は原位置に残っている。

甕棺内には，下甕だけに折重なった人骨があり，大腿骨・下肢骨・頭蓋骨などが識別できる程度の遺存状態であった。上甕の下側に位置する胴部内面に赤色顔料らしいわずかに変色部分があったので，埋葬時の頭部の位置は上甕の胴部中央付近にあったことがわかる。もちろん，この赤色顔料は，下甕の人骨付近にもまばらに混入しているので，頭部付近にあったものが下に落ちたものだろう。

なお，この甕棺墓で重要なことは，１段目の墓壙底で上甕に接して中期初頭といわれる城ノ越式甕形土器底部破片が出土したということである。３号甕棺墓は，前期前半の住居跡を切って掘込まれているので，この時期の土器は出土するが，城ノ越式土器片は甕棺埋葬時に混入したとしか考えられない。すると，３号甕棺墓は城ノ越式土器の時期か，それ以後ということになる。土器片の外に，碧玉管玉片も墓壙内から出土している。

甕　棺(図版50－１，第108図)　上甕は，器高70cm，口径59.6cm，胴最大径58.5cmの甕形土器で，胴部の張り具合に壺形土器のなごりをもっている。甕は，割合大きめで厚手の底部をもち，胴部のふくらみと胴部から口縁部にいたる曲線に壺の頸部のなごりをうかがえる。口縁部は，強く外反させてその上部に厚い粘土帯で補強し，平坦部を作る。この時口縁部には段がつき，外側の上下にキザミ目を施す。器外面には，口縁下と肩部にあたるところに，太目のヘラ描沈線各３本をめぐらしている。これより先に器面調整は，口縁部付近はヨコナデ，内面は下方から斜上にナデ，外面は胴部沈線から上が上から下方にナデ，胴部下半がヘラ磨きとなっている。胴部沈線から下のヘラ磨きは，底部を中心に上方に放射状に行われるが，胴部中心付近になるとヨコ方向に湾曲し始め，沈線付近はほとんどヨコ方向になってしまっている。この研磨方法は，底部を下にして行なうことはできないので，口縁を下に倒立させて左手で行ない，研磨方向の曲線は肩の位置とその作動半径によるものであろう。研磨とは別に，ナデ調整され



第106図 3・4号甕棺墓実測図(1/20)

た内外面には，ナデ工具の端部圧痕が多く残っている。胎土には，石英・長石・雲母を割合多く含み，器内外面は赤褐色部分が多く，外面胴部には対称的位置に大きな黒斑があり良好な焼成となっている。

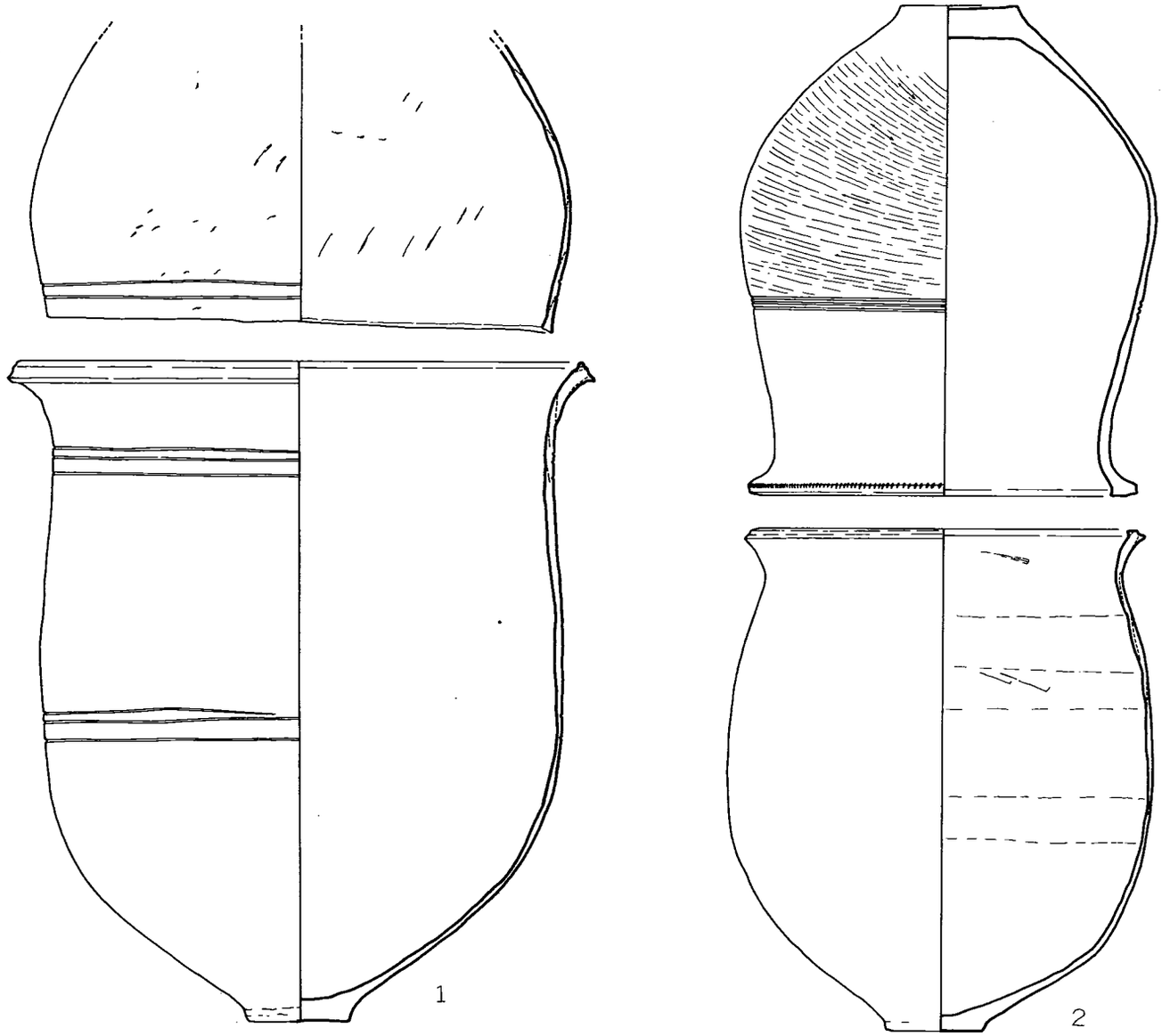
下甕は，器高79.8cm，口径72.8cm，胴最大径62.8cmの大型の甕形土器で，砲弾形の胴部に大きく開いた口縁部をもっている。口縁部のやや下と胴部に各3本のヘラ描沈線をめぐらすが，胴部沈線は1号下甕以上に雑で蛇行する沈線となっている。甕の胴部は，胴部沈線部分でわずかにくびれて肩部を形づくるが，それから上の頸部にあたる部分は直立するために，胴部全体がずん胴となって口縁部の開きがいっそう助長されている。開いた口縁部は，内外面に粘土を貼付けて補強するために肥厚して，口縁端に面をつくる。この口縁端部には，上下にまたがる長いキザミ目を施す。キザミ目や沈線の先に行なわれる器面調整は，口縁部付近がヨコナデ，胴部内外面斜方向のナデが行われるが，胴部中央付近の内外面にナデ用具端部圧痕が多く残っている。底部は，わずかに上げ底で厚みがある。また，最後には，口縁端部から外面全体が黒色に塗布されている。胎土には，花崗岩細片や雲母がとくに多く含まれ，表面は全体に黄褐色と淡褐色であるが，外面は黒褐色の部分もある。また，胴部最大径部外面に対称的位置に径20cm程の黒斑がある。

4号甕棺墓(図版48－3，第106図)

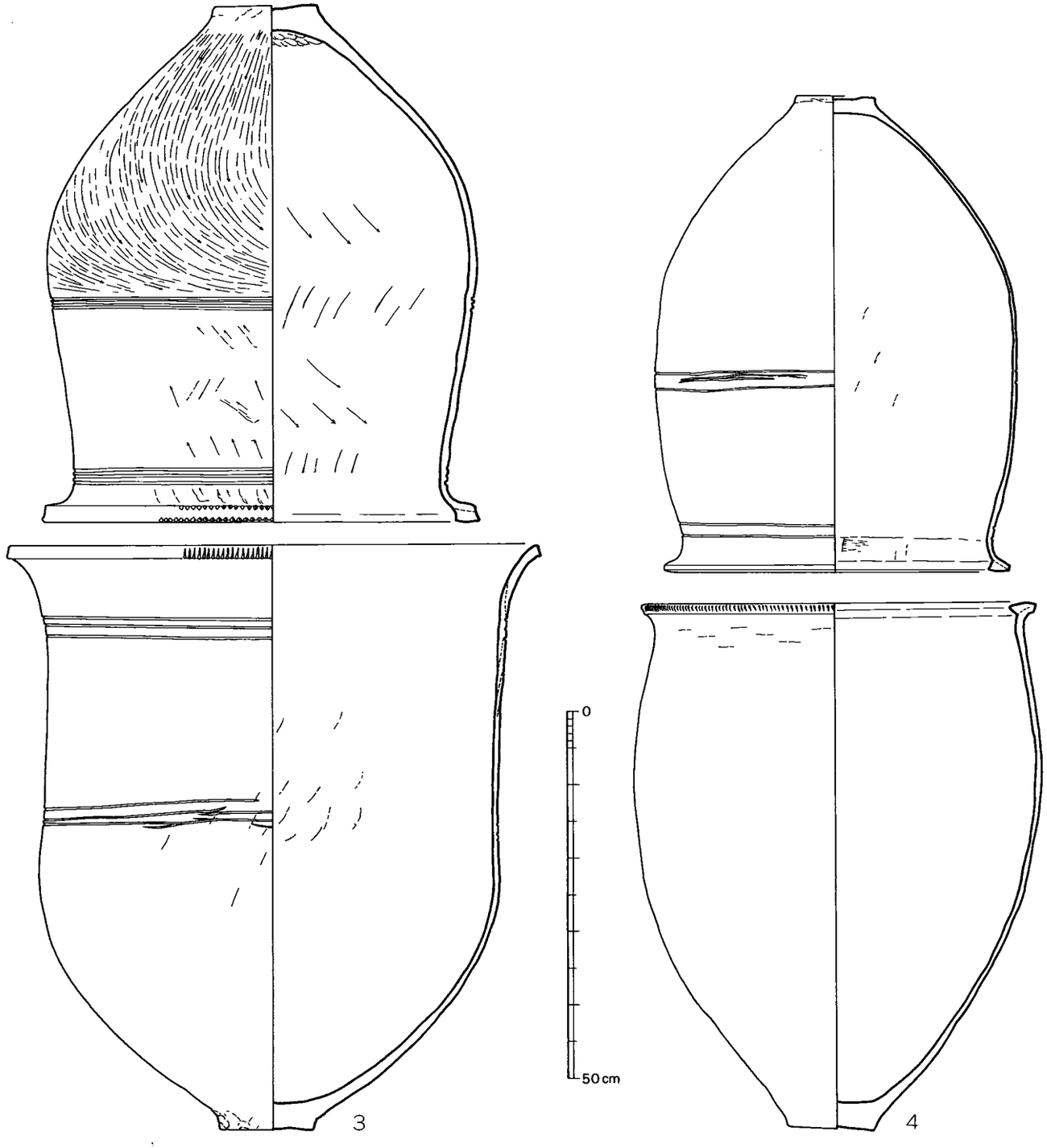
4号甕棺墓は，調査区で発見された4基の甕棺墓のうちで最も南側に位置し，北東側には木棺墓の3号土壙墓が隣接している。墓壙は，主軸方向の長さ1.36m，最大幅1.19mの大きさの略隅丸方形をしている。現存の墓壙は，深さ約32cmしかないが，上部を50cm以上は削平されているものと思う。この竪穴墓壙の北西側に斜壙を掘り，甕棺を主軸S55°Eの方向に向け，傾斜角25°で挿入している。甕棺の合口法は，上甕の上部がつぶれて一部挿入された形をとるが，下側できれいに接口式をとり，粘土で幅広く密封されている。

甕棺内には，最下低部に大腿骨もしくは下肢骨と考えられる骨片が見られたが，風化が著しく取りあげられなかった。現在の水路に近く，常に汚水が浸透してくるためであろう。

甕　棺(図版50－2，第108図)　上甕は，器高64.7cm，口径47.2cm，胴最大径49.5cmの甕形土器である。口縁下と胴部にヘラ描沈線各2本をめぐらすが，胴部の沈線は蛇行し，沈線間には部分的に意味のない沈線もあり，その下4.5cmのところには沈線の消し残りもある。胴部のふくらみも，中位あたりが最大径となり，胴部の沈線もこの位置にあって，肩部にあった沈線と違い，沈線以下にふくらみがなく，すっきりと底部に向って細まるのを特徴とする。口縁部は，外反した内側に，大きな三角凸帯状粘土貼付を行って，上部が平坦になるよう考慮している。底部は，わずかに上げ底となっているが，まだかなりの厚みがある。器面調整は，口縁部内側と底部付近の外面にハケ目が残るが，口縁部以外の内外面は全体にナデが行われている。胴部内面のナデは，ナデに使用された用具は幅2cm程の板材らしく，起点になる部分に圧痕が残っ



第107図 柿木－11　1号・2号甕棺実測図(1/8)



第108図 柿木－11 3・4号甕棺実測図(1/8)

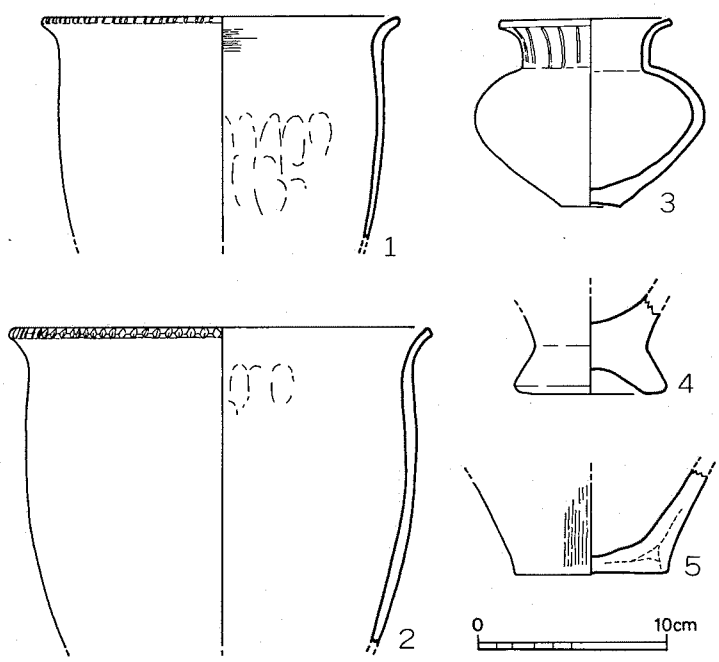
ている。口縁部の上部平坦面から胴部外面全体は，黒色に塗布されている。胎土には，石英・長石・雲母・角閃石・赤褐色粒を多く含み，色は淡褐色・黒斑が多く表面のみ黒褐色を呈するところがある。

下甕は，器高71.2cm，口径54.2cm，胴最大径55.7cmの甕形土器である。胴部最大径は，中位より上にあり，上甕以上に胴下半が細くなっている。しかし，底部が厚くわずかに上げ底となる特徴は残っている。口縁の屈曲幅は少なくなり，口縁の補強も内側の突出が大きくなっている。口縁部外側にはキザミ目がある。器面調整は，口縁部付近がヨコナデ，その他の内外面はナデが行われ，外面の口縁部下にナデ用具の板状圧痕が残っている。胎土には，石英・長石・雲母・角閃石・赤褐色粒が含まれ，全体に黄褐色と赤褐色を呈し，胴部対称の位置に黒斑もある。

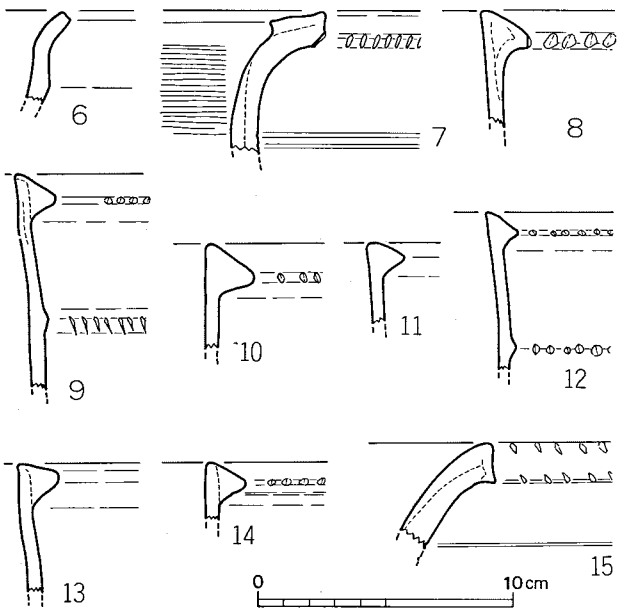
(3)　土壙墓・甕棺墓出土遺物

土　器(図版51，第109・110図)　1・2は，3号甕棺墓より古く，未発掘の1号住居跡としたものから出土している。これは3号甕棺を発掘した際に，墓壙の壁面に露出したものである。この時住居跡から炭化米1粒も採集された。土器は，弥生前期前半に属するもので，板付Ⅰ式としてよかろう。

4・5は，3号甕棺墓の墓壙内から出土した甕形土器の底部である。4は5と違って，特徴的な上げ底であることから時期が限定される。上げ底で台状を呈す底部は，城ノ越式土器の甕形土器に見られるものである。器面調整は，内面底部と外面はナデ，上げ底面はハケ具でコンパス状にヨコナデされている。胎土に砂粒を含み，内面底部が黒褐色，外面は褐色の焼成となっている。5は平



第109図　柿木－11出土土器実測図①　(1/4)



第110図　柿木−11出土土器実測図②（1/3）

底の底部で，外面にハケ目があり，内面はナデられている。この底部では4ほど確定的なことはいえないが，中期的な要素がある。

6は，3号土壙墓で発見されたが，1号住居跡を切っているので，この混入であろう。内面はヨコハケ目のあとナデられているが，外面はヨコ磨きされた鉢形土器。前期前半のもので第109図1・2と共伴するものであろう。

7は，1号土壙墓より新しいP1から出土した中型甕の口縁部。外反した口縁部に粘土帯を貼付けて，外側下部にキザミ目を施す。貼付部上面がまだ内傾しているところから前期後半から前期末に属する。口縁部下に2条の沈線が現存している。内面と上面はヨコにハケ目調整されている。

8は，2号土壙墓から出土した中型甕の口縁部片で，副葬小壺と同時期の中期初頭のもの。

9～11は，3号土壙墓の埋土中から発見された同一型式の甕の口縁部破片。9は口縁部の三角凸帯が強調されて口縁として形成され始めているのに対し，下側の凸帯はキザミこそあれ，退化し始めている。10・11も同様であろうが，11にはキザミ目がない。

12・13は，当初住居跡として調査したが，土壙墓が重複しているらしく，一部のみの調査で性格がつかめなかった遺構からの出土品。

14は，これも問題となる破片で，2号甕棺墓の墓壙内から出土した甕口縁細片。中期初頭のものであることは明らかである。2号甕棺墓は発見された4基のうち最も古い要素をもつもので，全形に壺のなごりをもっている。しかし，上甕口縁部に平坦部ができているところに新しさがある。

15は，3号甕棺墓の墓壙内から出土した。口縁下に1条の沈線が残っており，下甕と同型式，の甕の口縁部で共伴の4の底部から中期初頭のものである。

以上のように，柿木−11の墓地群では，数こそ少ないが，それぞれに混入していた土器細片が重要な役割をはたしてくれた。甕棺用土器と日常用土器が共伴することが少ないために，これまで甕棺の型式分類が先行しがちであったのも，標識となる遺跡の報告書の刊行が遅れているためであろうか。

碧玉管玉(第112図12)　3号甕棺墓墓壙内で上甕の底部近くから発見された破片。破片であることと，棺外であるため3号甕棺の副葬品とは考えにくい。1号住居跡のものが混入したのであろうか。管玉は，淡緑色の碧玉製で径4.15mm，孔径1.8～2.4mmの大きさ。孔は両側穿孔である。

3　その他の遺構と遺物

柿木—11地区の調査区は，幅3m，長さ約12mのトレンチであったが，弥生前期末から中期前半の土壙墓と甕棺墓が発見されて，これを主体に調査した。しかし，墳墓以外に住居跡や不明遺構があり，これらから出土した遺物もあるので報告する。

1号住居跡は，未発掘であり3号土壙墓と3号甕棺墓に一部破壊されて，これより東側に広がっている。土壙墓と甕棺墓の墓壙内に遺物が混入しており，弥生前期前半の円形住居跡と思われる。

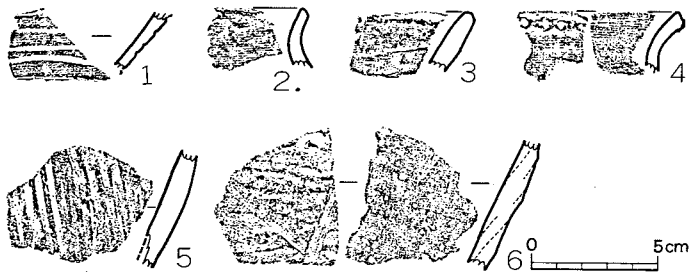
3号土壙墓（木棺墓）の南側には，調査区内に一部分が検出された遺構があるが，これは3個以上の重複があると思われ，2号・3号住居跡として調査を始めたが,住居跡だけでなく土壙墓も重複しているようである。遺物は，弥生前期の打製石鏃・中期初頭の土器片・弥生後期以後の砥石片が含まれている。

表土剝ぎの時点で出土した陶磁器は，遺構として検出することはできなかったが，表土直下にわずかな楕円形のくぼみがあったようである。陶磁器が掘上げられた後を調査したが，径30cm程の楕円形のピットで深さは3cmの丸底となっていた。陶磁器は，5枚が重ねてあったようだから土壙墓であったとすれば，完全に床面まで削平されたことになる。弥生期の甕棺墓が削平されているので，当時は現地表より50cm以上は高かったと思われるので，土壙墓の存在も可能である。陶磁器の出土地点は，調査区外北側でS249—W328の地区になる。

調査区内の表土剝ぎは，細心の注意をはらい，人力で床土剝ぎを行った。床土下の地山直上で歴史時代土師器皿や弥生後期以後の砥石も出土している。

また，各種壙内から副葬品と考えられない，縄文土器片・弥生前期石鏃・石器が発見されているのでこれらも紹介する。　（柳田）

縄文土器(第111図)　7片出土しているが,精製土器胴部破片1点を除いた6点を図示した。1は精製磨研土器で，5条の横方向沈線がめぐらされている。晩期初頭～前半に属そう。2は短かく内湾する頸部からそのまま口唇部が丸味をもっておさまる口縁部破片で，晩期末頃の鉢ないしは浅鉢形土器。3は外面に板状原体によるナデが施された口縁部破片。胎土に砂粒を含み気泡のみられない無文土器。4は外反する口縁端部に刻み目が施される所謂夜臼式土器。外面する口唇部上面は凹み気味にナデられており，また内外面共にヨコ方向のナデ調整だが内面



第111図　柿木－11出土縄文土器拓影（1/3）

はハケ目に近い形状を呈している。

5は外面にアナダラ条痕の施される無文土器。内面は凹凸のあるナデ仕上げで，器壁に気泡がみられる。6も器壁に気泡がみられる無文土器で胎土に含まれる金雲母が他の土器に比して多めである。外面カキナデ・内面板ナデ仕上げされている。

当該地区の縄文土器は，晩期初頭～末に包括されるが，4の夜臼式土器は弥生土器に近い要素を有していることになる。

石　器（図版51，第112図）

打製石鏃（1～4）　1・2は黒曜石不定形剝片を素材とし，全面に調整剝離を加えた石鏃。二等辺三角形を呈し基部の抉りは浅め。1は完形品で長さ23.2㎜・抉入部長さ19.3㎜・最大幅17.9㎜・厚さ3.5㎜・重量1.0ｇを測り，3号甕棺墓墓壙内出土。2は長さ28.0㎜・抉入部長さ24.0㎜・最大幅22.1㎜・厚さ3.6㎜・重量1.3ｇを測る完形品。図示する片面の一部は研磨されている。1号土壙墓埋土の上部から出土した。

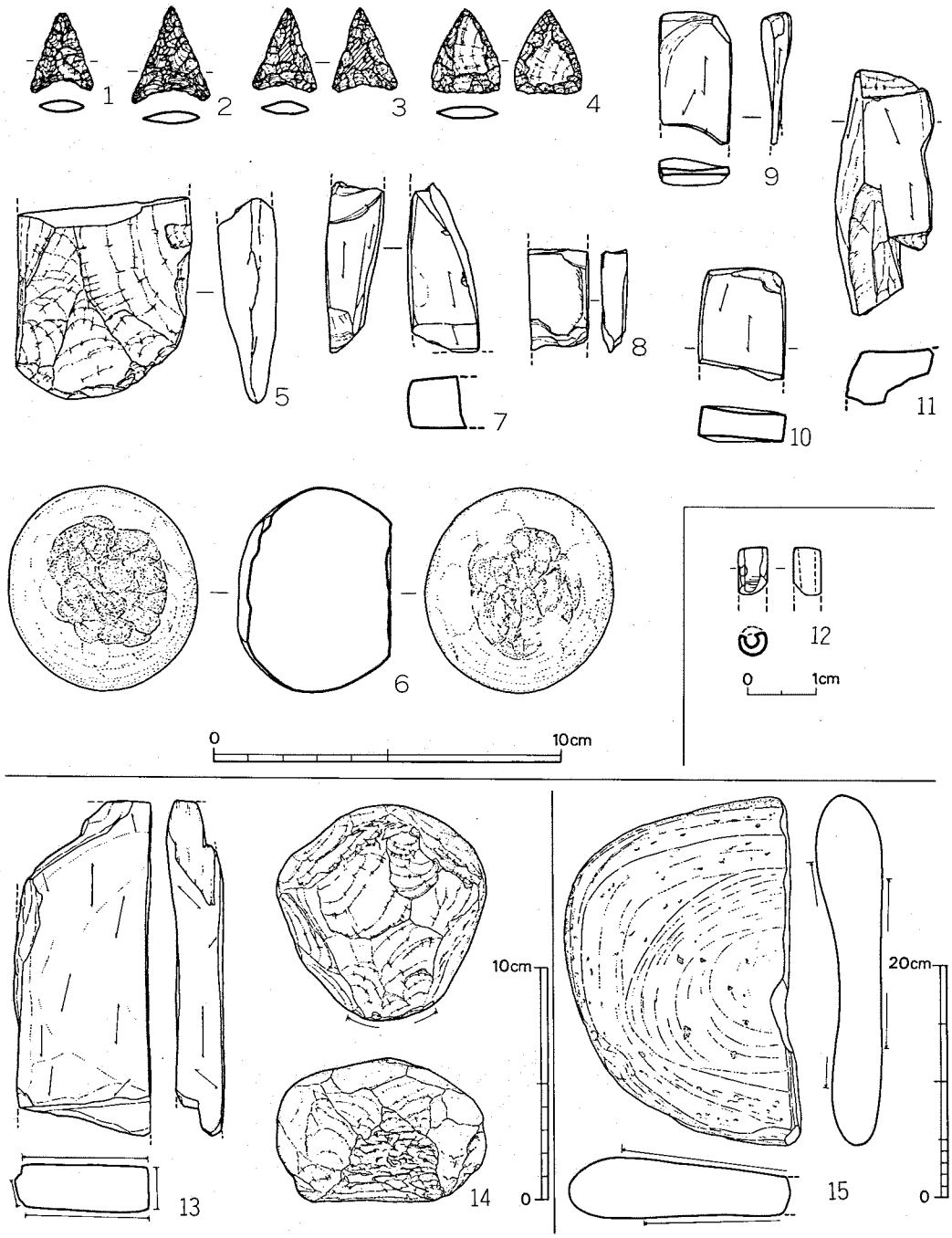
3・4は安山岩製。3は全面に調整剝離が及び，表裏両面共厚みのある中央部が研磨されている。基部の抉入は浅く，長さ24.4㎜・抉入部長さ22.1㎜・最大幅18.5㎜・厚さ3.8㎜・重量1.25ｇを測る完形品。2号住居跡埋土出土。4は扁平な剝片の周縁のみ調整剝離して整形する完形品で平基。長さ24.4㎜・最大幅19.3㎜・厚さ3.6㎜・重量1.9ｇを測る。3号甕棺墓壙内出土。

打製石斧（5）　玄武岩の横剝ぎ剝片を素材とした打製石斧刃部破片で刃部は磨耗している。現存長5.8cm・幅5.1cm・厚さ1.7cm・重量72ｇを測る。柿木5地区表採。

敲　石（6・14）　6は径6cm程度の球形に近い玄武岩製。敲石で，相対する2面を敲打面としている。敲打面には直径3cm強の範囲の凹凸があり，一部に磨耗痕もみられる。敲打面以外の面は敲打調整を細かく加えて掌中に納まり易い形状になり，かなり磨耗している。重量226ｇとこの種の石器にしてはやや軽量だが磨る機能をも兼ね備えていた可能性がある。柿木11地区5号土壙墓内出土。14は柿木5地区のS224・W232区第3層上部出土の玄武岩製敲石。長さ9.3cm・最大幅8.9cm・厚さ6.2cm・重量760gを測るが，尖り気味の面が敲打面として使用され，敲打面は，3.5×2cm程度。他の面は粗めの剝離調整で整形され，稜は磨滅している。

石　皿（15）　柿木2地区出土の半欠資料で，現存値で長さ19.5cm・幅30.1cm・厚さ5.8cm・重量4.82kgを測る。硬質の細粒砂岩製。上下両面共に中央部を使用しているが図示する面の凹みが大きいのに比し裏面は浅い。

磨製石斧（7・8）　7は頁岩製扁平片刃石斧の刃部破片，長軸方向にも欠損するために長さ・刃部共に不明。厚さは現存値で1.5cmを有すが体部はやや反り返る。柿木8地区表採資料で20.7



第112図　柿木出土石器・玉類実測図（実大，1/2・1/3・1/6）

gを測る。8は頁岩の扁平な剝片で，両側面が研磨面であることから磨製石斧類の体部であったことがわかる。重量6.4g。柿木11地区2号住居跡埋土から出土した。

砥　石（9～11・13）　9は，柿木11地区S260・W330区第3層下部出土で粘板岩製仕上砥。幅2.0cm・厚さ2～8mm・重量6.5gを有し表裏・両側面共砥面にされている。10は柿木11地区3号住居跡埋土出土の幅2.5cm・厚さ8～10cm・重量13.3gを測る破片で粘板岩製仕上砥。表裏両面共砥面になっている。11は，柿木3地区表採資料の重量23.2gを測る断片で粘板岩製。13は，柿木10地区の第3層出土資料で現存長14.4cm・幅5.8cm・厚さ2.3cm・重量300gを測る。表裏各面共砥面にしており，砥面の欠損側端部が丸味を帯びていることからみて，現長になった時点以降も使用されたことが判る。硬質の極細粒砂岩製。　（小池）

一括出土陶磁器（図版51，第113図，表6）

水路掘削時に発見された陶磁器で，小土壙の中に5を最下とし，4→1の順に重ね上げられて埋められていた。

白　磁

皿（1～3）　全て覆焼きのため口縁部の釉をカキ取り露胎とした，いわゆる口禿げの皿である。1―2は焼成が良く，釉は若干青味をおびた灰白色を呈するが，3は焼成不良で，淡茶灰白色を呈する。また，2・3の釉には細い貫入が多数入っている。

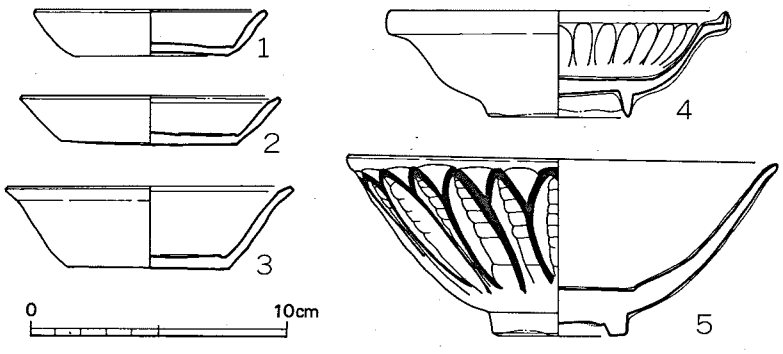
青　磁

皿（4）　高台先端部を露胎とし，他は全面に厚く施釉するタイプのものである。内面には陰につくられた蓮弁文があり，弁数は31を数える。胎土は灰色，釉は暗青緑色を呈する。

椀（5）　片切彫により間弁を含めて24の蓮弁文を描き出したものである。高台畳付およびそれ以内は露胎であり，高台見込み部分にドーナツ状の焼台跡が残っている。胎は白色味をおびた灰色，釉は黄緑色を呈する。

表6　柿木―11―括出土陶磁器法量表（単位cm）

	口径	器高	底径（高台径）
1	9.0	1.8	5.8
2	10.1	1.9	6.8
3	11.2	3.2	6.2
4	13.2	4.2	5.5
5	16.9	7.0	5.3



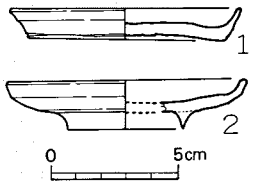
第113図　一括出土陶磁器実測図（1/3）

これらの一括資料は，1～4は13世紀中頃以降，14世紀前半代に輸入されたもので，特に13世紀後半代にそれのピークを求めることができる。また，5は，1～4よりも早く我国

へ輸入さており，13世紀前半から後半にかけての遺構から多数発見されている。これらのことから，この一括資料が埋められた年代は14世紀前後と考えることができる。

土師器（第114図）

1は糸切り離し手法による小皿で，口径9.1cm，器高1.2cm，底径7.9cmを測る。内底はナデ，外底には板状圧痕が観察できる。2は高台を貼付した小皿で，口径9.6cm，器高1.9cm，高台径4.6cmを測る。高台貼付時に底部をヨコナデしているため切り離しはヘラか糸か明らかでない。両者ともに胎土は精良で砂粒は少く，また焼成は良好で，淡赤茶色を呈する。（森田）



第114図　土師器実測図（1/3）

4　小　結

柿木—11の墓地群は，甕棺墓4基・土壙墓4基以上が検出されたが，このわずかなトレンチで発見された8基の墓はそれぞれ重要な位置づけが可能である。まず，木棺墓を含む土壙墓は，その時期的な位置づけが困難であったが，群集して甕棺群と営れることが多いために，その切合い関係から前期末から中期初頭ごろに位置づけられてきた。多くの場合に，中期初頭といわれる城ノ越式甕棺に切られているために，これより古く扱われることがある。柿木—11の土壙墓は，1号が土壙より新しいピットから出土した土器から前期末以前であり，2号では副葬小壺と混入甕口縁が同時期の中期初頭，3号が墓壙内から出土した甕口縁が中期初頭，4号は土器の出土品がないが，中期初頭からやや下る時期の4号甕棺に破壊されているので，これより古い前期末から中期初頭というふうに全て時期決定の資料がそろっている。もちろん，土器片が混入していればそれ以後ということができるだけであるが，これを補ってくれるのが甕棺墓といえる。

この場合に甕棺墓の時期がとくに問題となる。いわゆる金海式といわれる甕棺墓は，時期的には前期末とされ，この型式の甕棺に初めて青銅製武器が副葬されることもあって，前期末とすることに異論もあった。柿木地区の調査で明らかになったのは，金海式といわれる3号甕棺墓の墓壙内に混入していた土器片で，時期の明らかな底部が2片あり，その一方は中期初頭の城ノ越式土器で，その普及期間は限定されている。これは，『三雲遺跡』Ⅰで報告した加賀石Ⅰ—22・23地区の貯蔵穴から出土しており，この種の底部をもつ甕の口縁部は，柿木2・3号土壙墓出土土器片と同じもので，中期初頭は不動のものであろう。柿木3号の上甕は，胴部の沈線が胴最大径より上にあるため，壺形土器でいう肩部に沈線をめぐらすかっこうになっている。すなわち，まだ壺としての特徴をもっていることになる。この3号と同一の条件を備えているのが，1号である。1号甕棺は，上甕の口縁部が打欠かれているが，同様な見方をすれば，

3号上甕より沈線下の胴が張っている。しかし，下甕は胴部沈線の下にふくらみがないので新しいといえる。これらは，わずかな差であるから両者はほぼ同一時期である。

1号と2号は，墓壙の切合いから1号が新しい。同様な見方で甕棺を観察すると，2号甕棺は1号・3号より壺形土器に近い。2号の上甕は，3号上甕より口縁下がくびれて胴が張り，口縁部が平坦に近いが2段にならず，キザミも1段である。下甕も2号は口縁下にくびれがあり，胴が張って下ぶくれである。

4号甕棺は，胴最大径の位置に沈線がめぐり，壺の肩部が完全に失なわれてしまって，胴部下半がスマートになり，明らかに中期の甕になっている。

以上のことから，2号が最も古く，4号が最も新しくなる。これを図式すると，2号→1号→3号→4号の順に埋葬されていったことになる。ここで，前に述べたように3号甕棺の墓壙内に城ノ越式土器の特徴的な底部が混入していたことから，3号以後は中期にされなければならない。では最も古い2号はどうなるかを検討しなければならない。弥生前期後半といわれる板付II式土器には，その新しいものに口縁内側に粘土帯を貼付けて肥厚させることは知られている。金海式甕棺のように上部を平坦にした2段式の口縁になるものは，板付II式土器には見られないので，2号上甕のような口縁は金海式と同様に城ノ越式土器に属するものであろう。すなわち，口縁上部を平坦にした段階で中期初頭となる。

金海式甕棺が中期初頭である裏付として，糸島平野に近いところで比較してみたい。福岡市西区飯氏馬場遺跡は，糸島平野の中にあり比較に都合がよい。飯氏馬場遺跡の1号甕棺は，下甕に金海式，上甕に城ノ越式大型壺を使用しており，説明せずとも中期初頭の城ノ越式である(註3)。これは下甕を見ても胴最大径の位置に沈線がある。次に青銅器を副葬した金海式甕棺は，糸島の東隣りの早良平野で，有田遺跡と飯倉遺跡がある。有田遺跡2号甕棺は，扁平な細形銅戈を副葬しているが，甕棺の全形がわからない。報告(註4)されている口縁部を見ると2段式口縁で，口縁の下に3条の沈線をめぐらし，その下にタテの沈線4条が加えられている。同じ場所で出土した8号甕棺は，下甕が2号と同一であるが，上甕に明らかに中期前半の甕棺が組合わされている。下甕も胴最大径の位置に沈線3条がめぐる。この2号と8号は明らかに中期である。さらに，飯倉遺跡では同型式の甕棺から古式の細形銅剣が出土している(註5)。報告に図示されている甕棺は，2段式の口縁をもち，口縁下と胴部に各3条の沈線をめぐらす。有田例のようにタテに沈線はないが，胴部の沈線はやはり胴最大径の位置にあり，沈線から下の胴部は細くなって，壺形土器の下ぶくれは残っていない。

以上3例は，いずれも三雲柿木3号より新しい型式であり，金海式として報告されたものは全て中期初頭に属することが明らかである。このことがただちに青銅武器の副葬が中期初頭に下るとはいえないところもある。なぜなら，有田・飯倉の青銅器は扁平で両方とも質が悪く，実用品と思われず，仿製の可能性も指摘されている。佐賀県宇木汲田遺跡でも金海式といわれ

ている甕棺から青銅器が出土しているので，これらが報告されれば一層明らかなものとなろう。

ここで，金海式甕棺を中期初頭に下げるについては，この金海式の前段階といわれている，中・寺尾遺跡２号・13号・17号甕棺（註６）のような型式をどう位置づけるかを述べておかねばならない。中・寺尾遺跡では，２号・13号・17号甕棺に副葬小壺が伴出しており，この形態と時期が問題になる。これら３基の副葬小壺に共通していえることは，肩部に羽状文があり，その上の頸部に沈線か三角凸帯がめぐっている。さらにその頸部は，肩部からゆるやかに湾曲しながら直接口縁部端に達する。これらの小壺のもつ頸部の特徴は，城ノ越式に見られるものであるが，肩部に羽状文を有するところに板付II式のなごりがあるといえる。これらを副葬した甕棺本体は，柿木３号上甕の諸特徴と一致するところが多い。わずかに異るのは，口縁上端が平坦にならず，多少内側に傾斜していることである。小壺の頸部の形態から中期初頭に下げてもよいが，総合して前期末に置かれるべきものであろう。近年の甕棺型式分類の中で，橋口達也氏の分類（註７）で比較すると，前期末とされているＫＩｃ式が柿木３号上甕とこれより新しい型式を含んでいるので，前期後半のＫＩｂ式を前期末にして，ＫＩｃ式が中期初頭ということになる。さらに，柿木４号はＫIIａ式の古いものの一部としてとらえたい。

最後に，未掘に終った弥生前期前半の住居群も重要であり，この時期の墓地も加賀石地区と対比する意味で問題となる。前期から中期初頭に及ぶ住居と墓地は，中期後半の中心的な墓地である南小路に距離的に近づいたことからも今後この地区の保存が重要となる。　（柳田）

註１　柳田康雄「木棺墓（土壙墓）と甕棺墓」（『津古内畑遺跡』小郡町教育委員会，1970）

２　福岡県教育委員会「福岡県伯玄社遺跡調査概報」（『福岡県文化財調査報告書』36，1968）

３　副島邦弘・柳田康雄「飯氏馬場遺跡」（『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』２，1971，福岡県教育委員会）

４　森貞次郎「有田甕棺遺跡の甕棺と銅戈」（『有田遺跡』1968，有田遺跡調査団）

５　森貞次郎「飯倉の甕棺と細形銅剣」（『有田遺跡』1968，有田遺跡調査団）

６　前川威洋・橋口達也「中・寺尾遺跡」（『大野城市文化財調査報告書』１，1977）

７　橋口達也「甕棺の編年的研究」（福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI，1979）

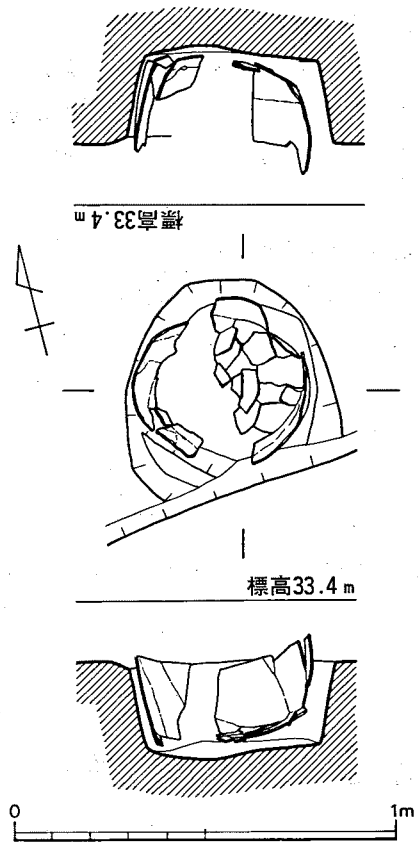
第４節　石橋・サキゾノ地区の縄文時代遺構と遺物

Ⅰ　はじめに

石橋・サキゾノ地区は，三雲遺跡群東部で，築山・端山古墳の並ぶ位置より東北側，標高32～36m位を占めている。水田面の比高をみてみると，石橋Ⅰ－7・14，Ⅱ－5・9・10・15，柳井町2・8地区の列が，その西側に比して顕著に低くなり，東側は川原川に沿った低水田面になっている。この地区では，第3図に示す部分を調査したが，端山古墳北側から石橋地区南端に伸びる新設道路予定地のサキゾノⅠ－4・5，石橋Ⅱ－11・12地区と，サキゾノ地区を南北に縦断する新設道路のⅠ－1地区では，特に石橋Ⅱ－11・12，サキゾノⅠ－1地区での弥生時代～古墳時代遺構が集中する為発掘区を拡張したことも相俟って，縄文土器・石器類の出土が集中している。これらの遺物の大半は，弥生時代～古墳時代遺構内からの出土で副次的な出土であるとはいえ，これらの遺構が掘り込んでいる黄褐色系粘土層中に縄文土器が含まれることを判明させ，また埋甕2，住居跡1の遺構を検出させる契期となった。なお石橋Ⅱ－12地区S333・E72区第3層下面で縄文土器片・石器類がややまとまった状態に発見されたものの（図版52－1）遺構と断定させるには至らなかった。

この他，石橋Ⅰ－2地区から縄文土器片2片が出土しており（第5節に記述する）サキゾノⅠ－6～8地区でも幾らか縄文土器片・石器の出土があり，サキゾノⅠ－15地区トレンチからも少量の遺物が出土している。

弥生時代以降の遺構・遺物が圧倒的な三雲遺跡群にあって，黄褐色系粘土層中から検出されるような縄文時代遺構・遺物は，いささか副次的な傾向になることを否めないが，当該遺跡のみならず黄褐色系粘土層下への注意は今後必要性を生じてくるであろう。



第115図　1号埋甕実測図（1/20）

2　遺　構

(1)　埋　甕

石橋Ⅱ－11地区南西端のS335・E70区（1号埋甕）と，サキゾノⅠ－1地区東部のS272・E12区（2号埋甕）に各1基検出された。

1号埋甕（図版52－2，第115図）

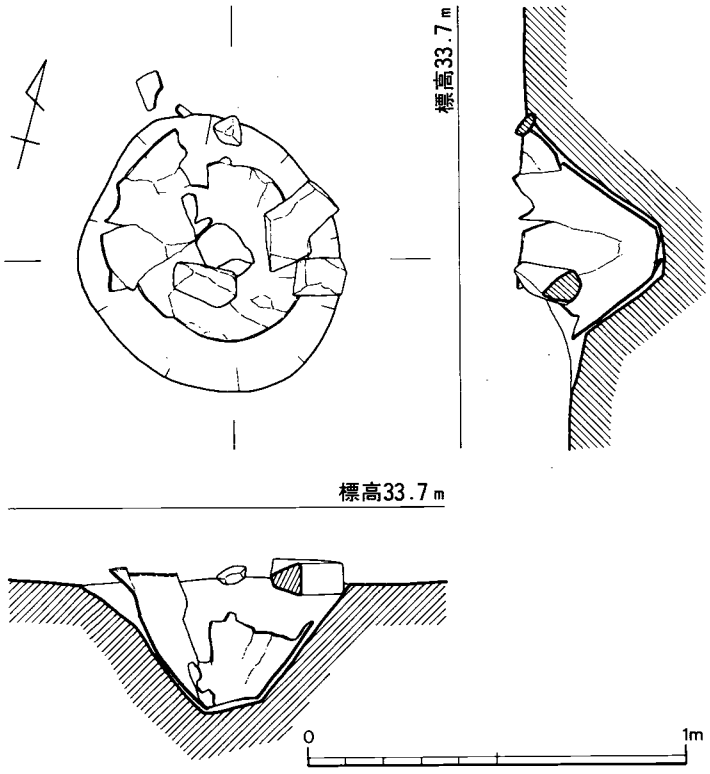
東西径0.5m程度の不整円形プランの土壙に，口縁部を上にした深鉢形土器が据えられた状態で検出できた。

土器は土壙の西壁に接するようにやや偏した位置に据えられるが，胴下半を打欠かれており，殊に西側は大きく欠失して，東側の胴部破片は，土壙の底面側に折れ込む状態になっていた。土圧によって当初の状況とは多少変っていると思われるものの東側口縁部の高さは，西側のそれより幾分高い。埋甕内堆積土には特に変化は認められず，土壙は現存する深さで25cm前後を測る。なお埋甕口縁部では標高33.3mを測る。

埋甕使用土器（図版52－3，第117図）脆弱な部分が多く歪みを生じているが，口径39.3cm程度器高は約30cm現存することから40cm前後を有していたと推定される深鉢形土器。胴部は膨らみ気味だが直線的に口縁部に広がる器形をなし，口唇端部はやや平坦にまとまる。胎土に砂粒・金雲母等を含み外面はヨコ方向のカキナデ調整・内面は幾分丁寧なナデ仕上げされ，暗褐色系の色調に焼成されている。

2号埋甕（図版53－1・2，第116図）

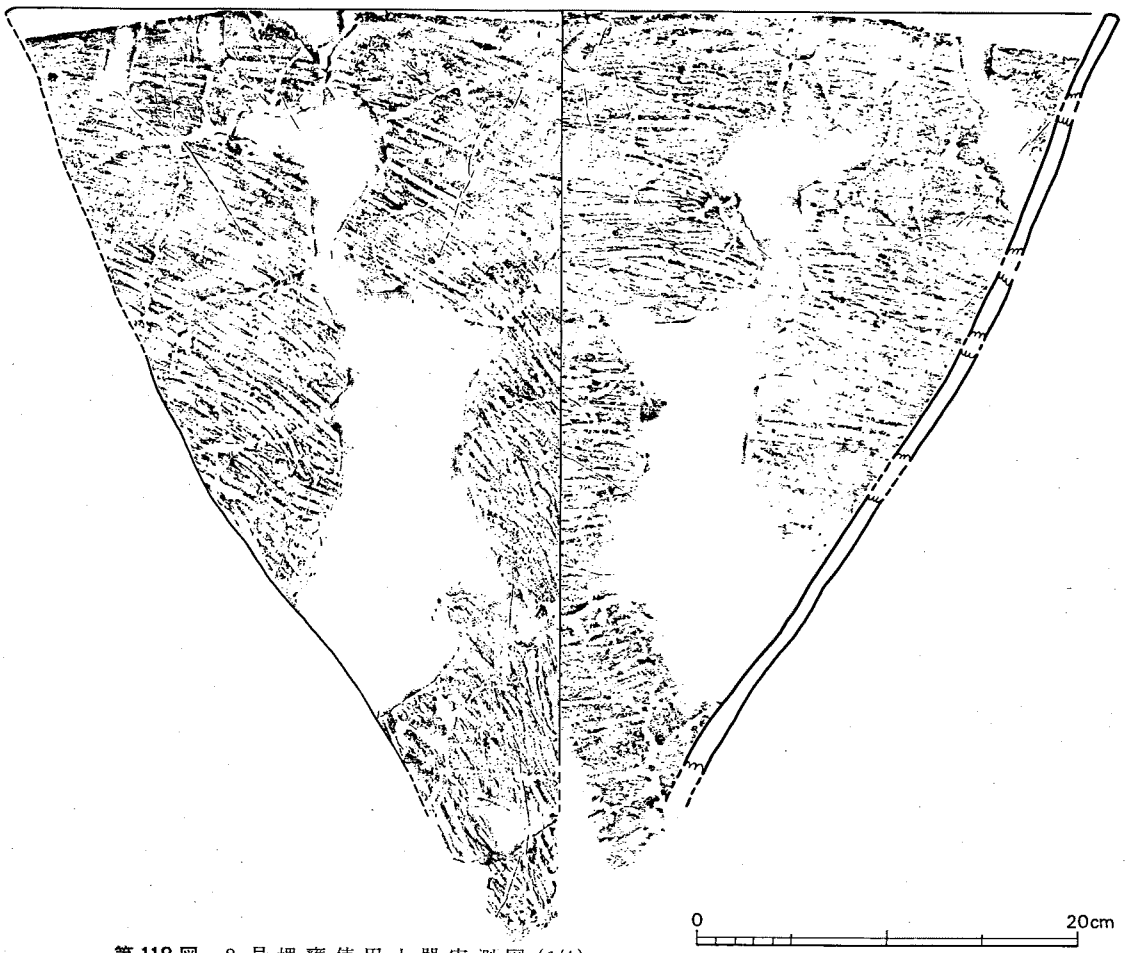
標高33.55m位に口縁部上面があり，平面形で直径約70cm程度の不整円形プランの掘り込みが検出できたため掘り下げたところ，口縁部は西側のみしか残存していなかったが，深鉢形土器を直立させており，埋甕遺構とした。埋甕内堆積土に顕著な変化がみとめられなかったが，上位にやや大きめの礫が3・4個落ち込んだ状態で入っていた。深鉢形土器は底部を意識的に打ち欠いたもので，下面は標高33.17m位に相当する。上面で検出できていた土壙は埋甕の胴部付近では，ほとんど余裕がみられなくなり，円錐形状に掘り込まれた土壙ぎりぎりに深鉢形土器を埋置されたものと思われる。



第116図　2号埋甕実測図（1/20）

埋甕使用土器（図版53-3，第118図）　この土器も脆弱な部分が多く，幾分歪みを生じているが，口径58.5cm程度，現存器高40cmを有している。本来の

第117図　1号埋甕
使用土器実測図（1/4）



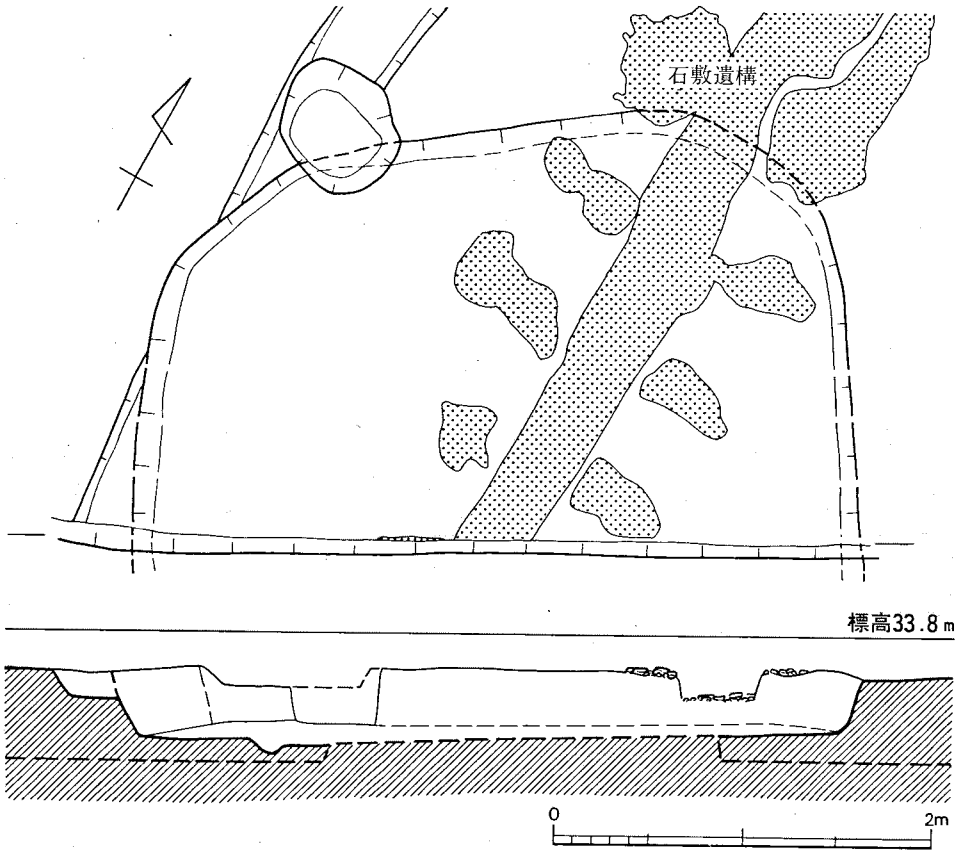
第118図　2号埋甕使用土器実測図（1/4）

器高は45cm前後であったと思われるが打欠かれた部分では15.5cm径となっており，口縁部から胴下位までやや直線的に窄まる。口唇部はナデ仕上げで丸味を帯び，口縁部はわずかに外反する。内外面共に口縁部から底部付近までヘタナリ系の条痕が施されており，外面は底部から口縁部に向けて斜行し，内面はほぼ横位に調整され，胴部上半で極わずかに外に膨らむ器形となっている。胎土に若干の砂粒を含むが良質で，淡黄褐色～暗黄褐色に焼成されている。

(2)　住居跡(第119図)

サキゾノⅠ－5地区東端のS329～S333・E54～E58区で検出できた住居跡で，南半部は調査区域外に及ぶ。

この区域では，ほぼ南北方向に延びる石敷遺構が検出され，特異な遺構であるために石敷面の調査のみを実施して保存することにしていたが，石敷遺構の周辺では縄文土器が比較的多く出土していたために，石敷遺構を避けて調査区南壁に沿って深層掘りによる縄文土器包合層の



第119図　縄文期住居跡実測図(1/40)

調査を実施した。この各トレンチの壁面での断面堆積状況観察の折に，周囲の明るい黄褐色粘土に比して，わずかに暗く茶褐色系の色調を帯びる部分のあることが観察でき境界が立ち上がることから，断面での色調の差を頼りに，石敷の空間等の部分で輪郭を検出するに至った。

この結果，東西幅 3.8mを有し，南北２m以上の隅丸方形プランになる竪穴住居跡で，壁高30cmを測る。既にトレンチ部分では床面よりも10～15cm掘り下げた後の検出であり，石敷部分をも除いた北西隅の床面のみ露呈することが出来たが，平坦であるものの色調の変化が微妙であり，それほど堅く固められた痕跡をみとめられなかった。またこの部分で柱穴は検出できず，トレンチの底にも柱穴の痕跡は検出できなかった。なお周壁北西隅に重複するピットは後世の掘り込みによるものである。

住居跡内の埋土は他の区域で縄文土器の含む堆積土と近似しており，この遺構からは縄文時代晩期前半の土器（次頁に含めた）が出土することから，この時期の遺構と考える。

3 遺 物 (1) 縄文土器

石橋II—11・12地区出土の縄文土器(図版54・55，第120～126図)

当該地区から出土した縄文土器は埋甕使用土器を除いて総重量62,650ｇで重量の8.51%を精製土器が占めている。小破片が多く破片相互の接合や復原の不可能な資料ばかりであるが，ここでは比較的大きな破片，器形の特徴がある破片 148点を対象として特徴を分類することにする。なお第120図１の精製土器片は石橋II－３地区採集土器であるが，この項に含めた。

第１類(１～39)

精製磨研の深鉢形で，球形ないしは角張り気味の胴部をもち窄まった肩部から大きく外反して口縁部が広がる。口縁端部は内側を肥厚させたり内側の上方に拡張させて屈曲して内傾する。口縁部の形状では波状口縁・平縁の両者があると思われるが破片資料では平縁の個体か平縁でない個体かの区別はし難い。波状口縁の例では直立気味に伸びる口縁部のみならず内傾する口縁部もより大きく広がる波頂部上面にＶ字形等の押点が付される。文様帯は，肩部と口縁端部に集約されており，基本的に平行沈線文等で区画された磨消縄文が施されるが，刺突文や，x字文様もみられる。稀に砂礫を含むこともあるが，細砂粒と金雲母を主とする精良な胎土で，堅緻に焼成され，淡褐色ないしは淡茶褐色系の色調を呈す例が多い。

第１類土器の破片は，それぞれの特徴から更に細分することができる。

a (２・５・31) 口縁端部は丸味を帯びて内傾し，端部肥厚というよりはむしろキャリパー形口縁に近い形状に伸び上る。波頂部押点は指先で押えたような平坦面で広い。口縁部文様帯の平行沈線は波頂部直下でも平行し，沈線間は縄文Ｒ$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$が磨消されている。５では平行沈線がそのままめぐるが，２では波頂部直下で途切れている。器面風化のため口縁部文様帯の状況が

不明だが器形の似るものとして31がある。

b （1・3・4・24・26～30） 口縁端部の屈曲は，明瞭な稜を有すが，上方に伸び上る形状になる。波頂部押点は小さめになる。平行沈線間の縄文R $\begin{Bmatrix} L \\ L \end{Bmatrix}$ は磨消されるが，1では磨消縄文になっていない。24は，器面の風化が進んでおり，磨消縄文手法の有無を確認できないが，26～30では縄文がみられず，磨研ないしは，丁寧なナデ手法のみで調整され縄文の消失が注目される。時期的に下る可能性もあり一応24も含めて**b′**として区別する必要があろう。

c （6・23） 基本的にはbに似るが，口縁端部の稜がより明瞭になる傾向がある。口縁部文様帯では，平行沈線が，沈頂部で間隔を広げ，1条は口唇部に沿い，頸部側の1条は口縁部屈折に沿って波頂部直下に三角形状の空間をつくる。縄文R $\begin{Bmatrix} L \\ L \end{Bmatrix}$ はこの空間を含めて沈線間を磨消している。6で観察できる肩部文様帯では，沈線は4条まで確認でき沈線間の区画3列のうち下2列に縄文R $\begin{Bmatrix} L \\ L \end{Bmatrix}$ が，上位の列に一部縄文R $\begin{Bmatrix} L \\ L \end{Bmatrix}$ がみられる他，乱れた短沈線を入れ羽状文状の文様となっており，磨消縄文手法がみられない。23は丁寧なナデ手法で平行沈線がみられることから**c′**として区別する。

d （7～10・22・25） 口縁端部は肥厚し，端部屈折の稜が外面で誇張される。波状部押点は7でみる限りV字形で深めになる。口縁部文様帯では磨消縄文帯がc同様波頂直下で三角状の空間をつくる。22・25は器面風化のため縄文の有無を断定し難いが，**d′**として区別する。

e （11～18） 肩部文様帯に平行沈線文を描き，縄文R $\begin{Bmatrix} L \\ L \end{Bmatrix}$ を施文するもので，磨消縄文手法をとるものがみられる。また縄文に代る連続刺突文・x字状文等が併用される。11～13は縄文のみの施文で，13の破片では磨消手法はみられない。14～18には縄文の他に連続刺突文等が付される例で，16は疑似縄文的効果とみることができる。17はx字状文である。

f （19～21） 肩部文様帯に平行沈線文を描いて連続刺突で疑似縄文的効果をあげたものである。

小破片であるためe類資料の刺突文施文例との明確な区別はし難い。むしろ，肩部から胴部への移行が丸味をもつか，角張って稜をつくるかの区別をするべきかも知れない。前者の例(e)として13・18，後者の例(f)として17・19がある。

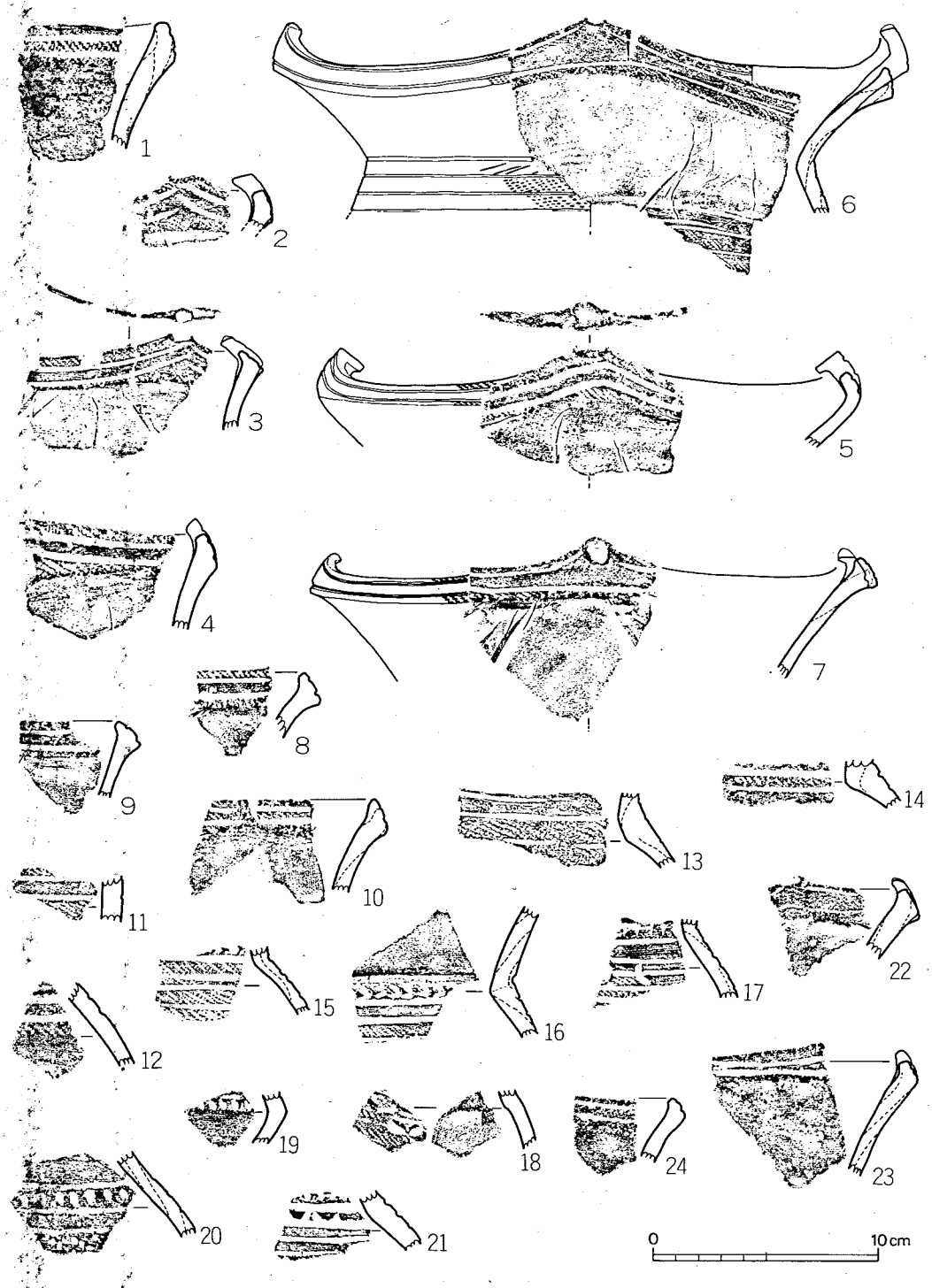
g （32・33） 肩部の文様帯に，磨消縄文，疑似縄文等を有さず，平行沈線文のみが施文される例である。32では4条の沈線，33では3条の沈線が確認でき，やや丸味を帯びるが胴屈曲部に稜を有す。

h （34） 胴部屈曲の稜線をはさんで上下に平行沈線がみられる。

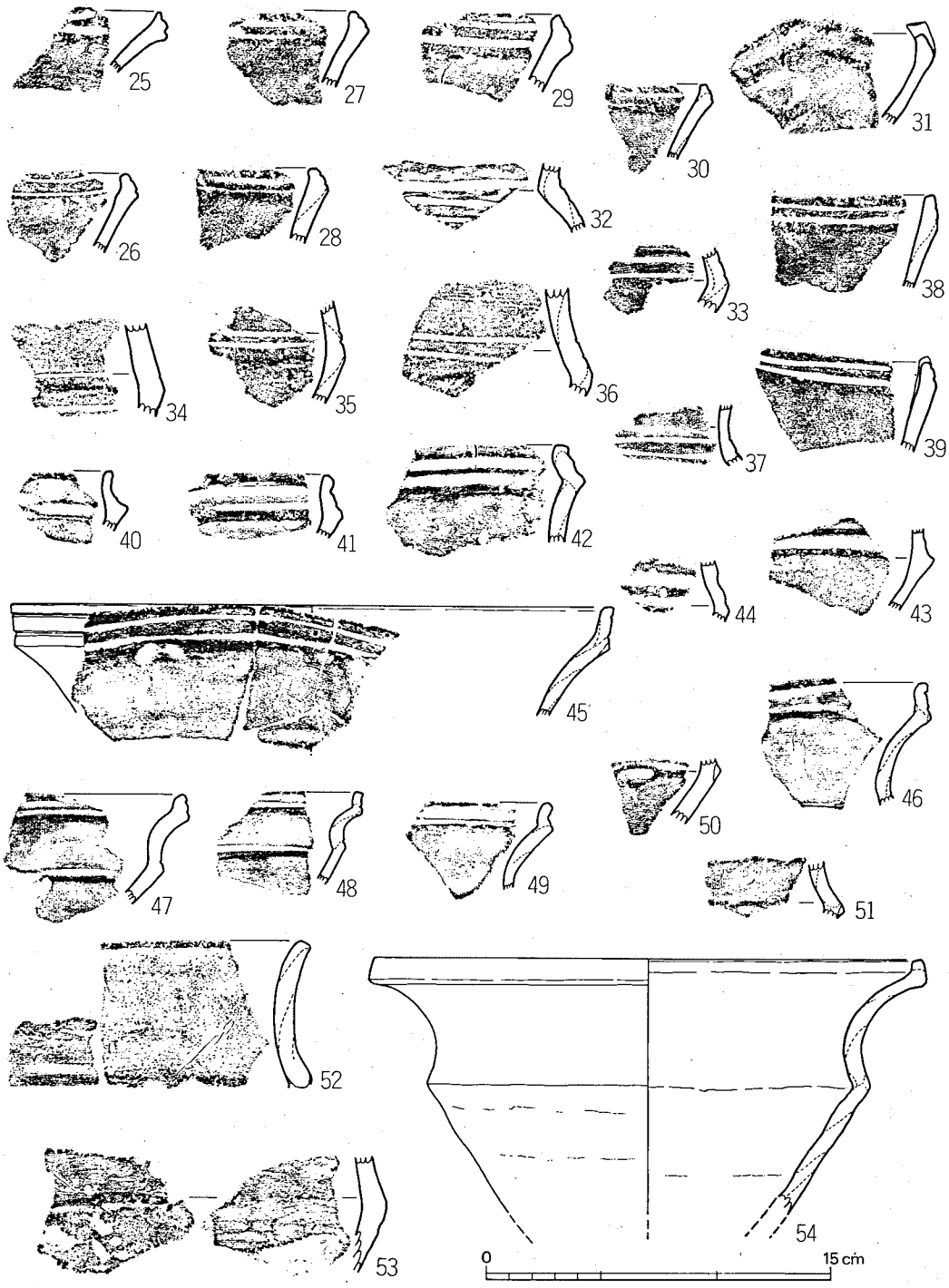
i （35～37） 胴部の屈折は明瞭で，肩部が内湾する形状となり，沈線2条のみの平行沈線文様が描かれる。

第1′類（38・39）

類といえる程の資料の数を得ていないが第1類のbの口縁部の形状に近い。口縁部の内面が



第120図　石橋II－3・11・12出土縄文土器①拓影（1/3）



第 121 図　石橋II－11・12出土縄文土器②拓影（1/3）

ほとんど曲がらないが，外面に広めの口縁部文様帯を作り極めて鈍角な稜をなして屈折する。精製磨研土器で淡褐色～暗褐色の色調を呈すが，文様帯には2条の沈線による平行沈線文が施文されている。第1類 b′・c′・d′類とはこの点で共通点をもつ。

第2類(40～44・61)

口縁端部が内傾気味に屈折して立ち上り，頸部は内湾する。口縁部文様帯には大略2条の平行する凹線がめぐらされ，口唇端部は外反気味になる。胴部は頸部からそのまま湾曲する肩部を介してふくらみ，稜をなして屈折する。肩部には2条あるいは2条以上の平行する凹線が施文される。胎土には細砂，金雲母を含む精良な生地を用い，磨研ないしは丁寧なナデ調整で仕上げられている。61は胴部からそのまま口縁部に屈折する浅鉢形土器で，口縁部に2条の凹線がみられることからこの類に含められる。

第3類(45～50)

内湾する頸部から屈折して口縁部が立ち上る器形の鉢形土器・浅鉢形土器を中心としたグループで，口縁部文様帯に2条の沈線，肩部に1条の沈線が施される。なお，口縁部や胴部界線部分に横長楕円形の押点が付される。精製磨研土器で暗褐色～黒褐色の色調を呈す良好な焼成のものが多い。45・46は鉢形土器で46は波状口縁になる。47～49は浅鉢形土器であるが，49の沈線は凹線に近い要素をもっており，47の沈線は46と同様に下側から斜めに切り込んだ段状となる。

第4類(51～54)

精良な胎土を用いているが，磨研やナデ調整がやや雑になっており，凹線や沈線を有さない鉢形土器である。52は内湾する頸部からそのまま口縁部となっているが直径28cm程度の大きさになろう。54は内湾する頸部から口縁部が屈折して立ち上るが口縁部上面に低いタガをつけた形状となる。51は小破片で胴部界線上に横長楕円形の押点が付されている。いずれの土器も胴部の屈折は明瞭である。

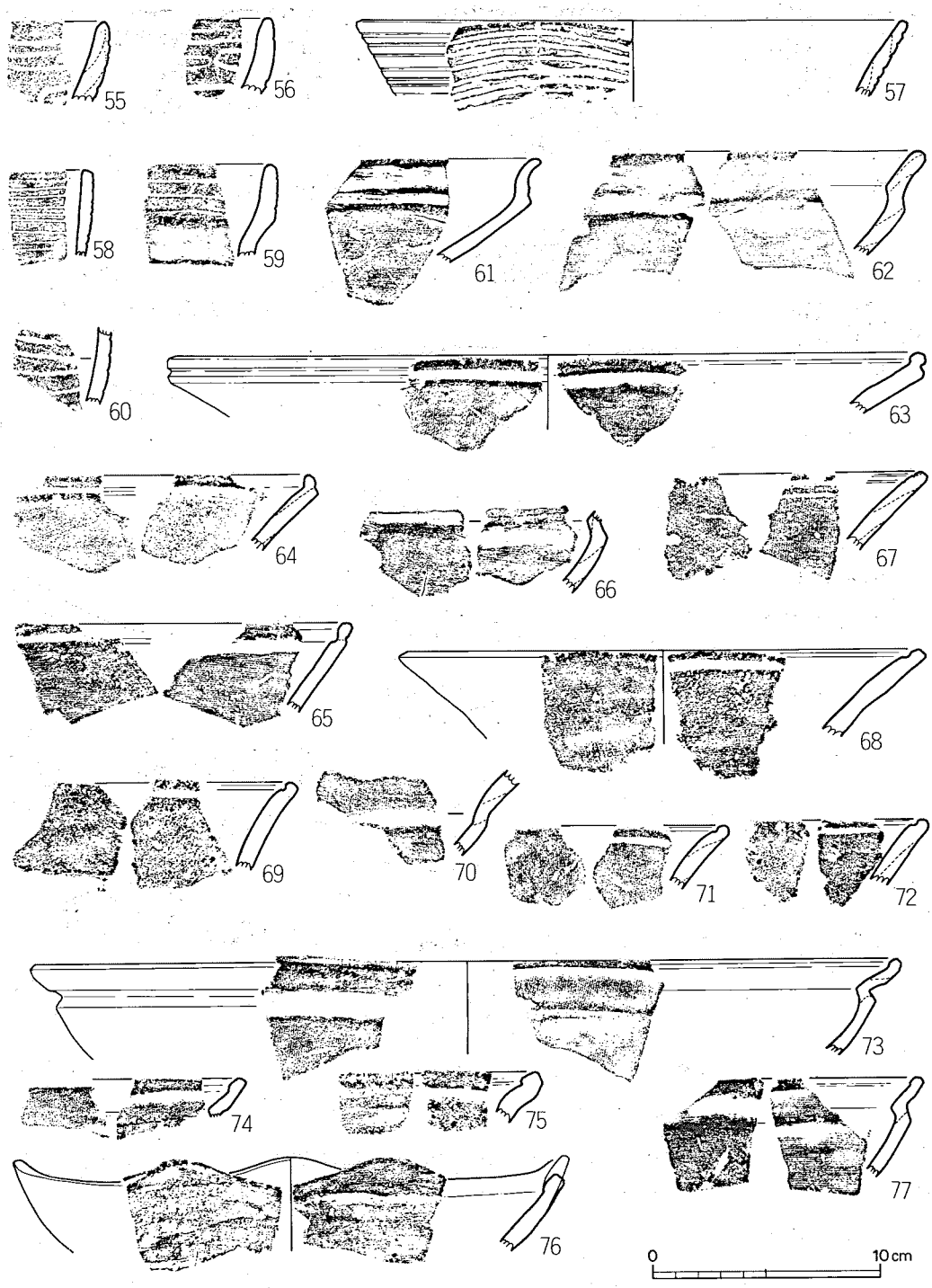
第5類(55～60・62～87)

晩期に属すると思える精製土器を一括した。

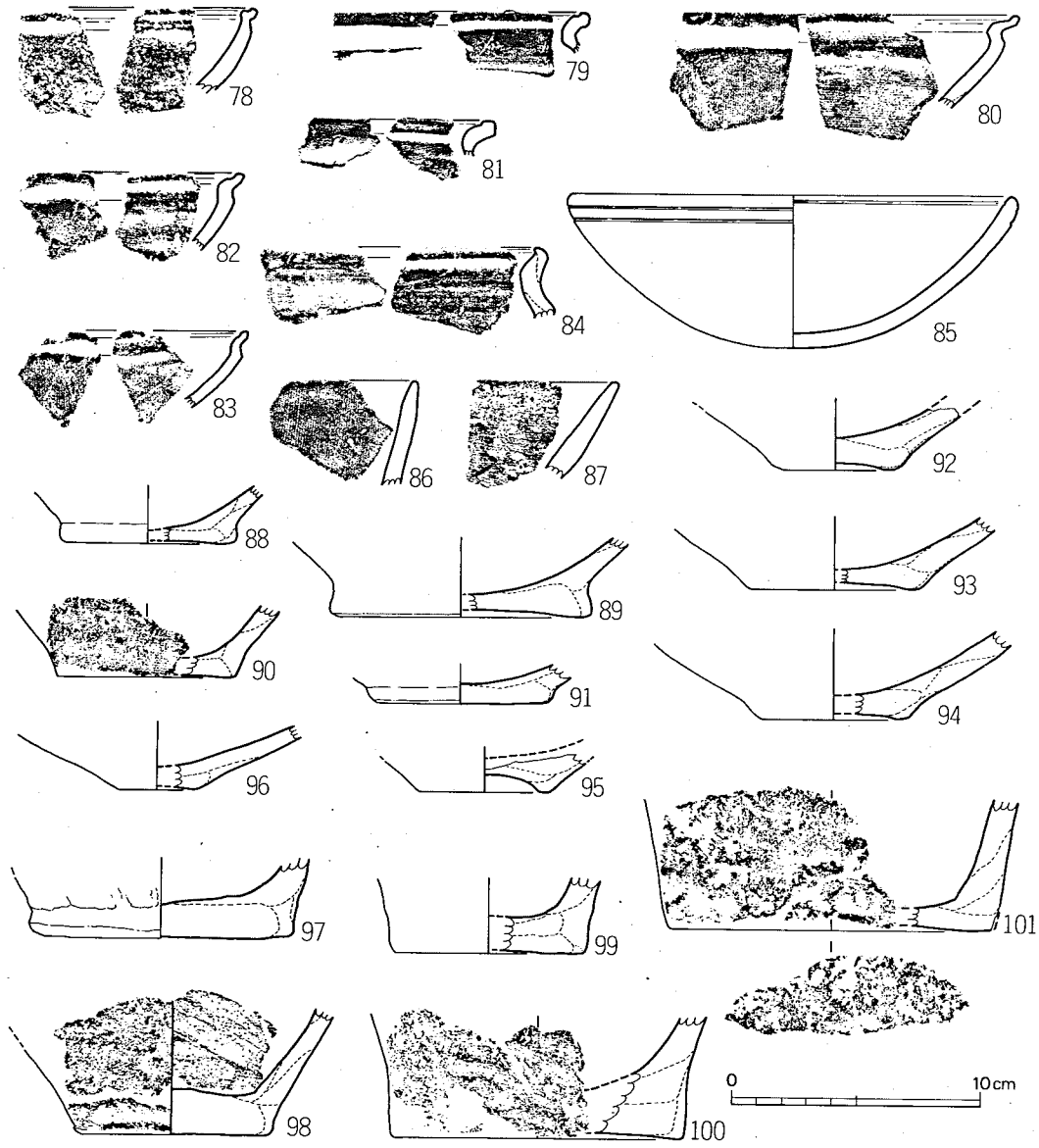
a (55～60) 深鉢形ないしは鉢形土器であろうが，口縁部外面に3条以上の沈線文をめぐらす。精製磨研された下地をもつが，55・59等は風化が進んでいる。55・56は，平行沈線群の間に⊐字状に反転する文様がみられる。他の土器より時期的に古い可能性がある。57・58は7条以上の平行沈線が口縁下に並び薄い器壁である。59はやや厚い器壁で口縁部から頸部が内湾する形状となる。

b (62) 精製磨研の浅鉢形土器で，厚めの器壁を有し内湾する頸部からそのまま口縁部となり，内面の口唇部寄りに稜線を生じる。

c (63～65) 胴部より頸部を経てくの字に屈折して広がる口縁部で，口縁端部上に低いタガ



第 122 図　石橋Ⅱ－11・12出土縄文土器③拓影（1/3）



第 123 図　石橋II－11・12出土縄文土器④拓影 (1/3)

状の拡張を得て口唇部となる。63・64は口縁端部が上方に屈折して付き外面に沈線１条をめぐらせている。65は退化して口縁端部が屈折せず，内外面共に沈線が１条めぐる。胴部から口縁部に至る屈曲は65のように短いが明瞭なものである。いずれも金雲母を若干含むが精良な胎土を用いている磨研土器である。

d　(66～72)　頸部が屈曲し口縁部が大きく外反する精製磨研の浅鉢形土器で，口唇部内面に沈線をめぐらせるが，口縁端部は屈折しない。沈線１条のみが普通だがまれに２条めぐるもの

があり67は２条の例である。胴部からの屈曲は70のように短く緩やかである。

e　(73～77)　精製磨研の浅鉢形土器で胴部から口縁部に至る屈曲は短いが明瞭で口縁端部の内面に低平なタガが付く。口唇部は面取りされて角をもつものが多い。口縁部の伸びはそれほど長くないが，76は波状口縁で長めの口縁部が付く。73も波状口縁になる可能性がある。波状口縁になる例は平縁の例と基本的に区別すべきだが，破片資料では区別し難いため包括した。

f　(78～83)　口縁部は極て短く，明瞭に屈曲する。口唇部内面に沈線が１条めぐらされるが，あたかも口縁部外面と上面に沈線をめぐらせたような形状となる。胎土には細砂粒・金雲母粒・角閃石粒を含むが精良で，丁寧に磨研調整される。焼成良好で暗褐色ないし黒褐色の色調を呈すものが多い。

g　(84)　内湾する頸部はやや長めとなるが口縁端部がわずかに内傾する形状になっている。細砂粒・金雲母を含む精良な胎土で良好な焼成で黒褐色を呈す。

h　(85～87)　椀形土器。85は器高6.1cm・口径18cmに復原できる資料で，胎土に砂礫・金雲母・若干の角閃石を含むが，内外面共に丁寧な磨研仕上げされ暗灰色に焼成されている。口縁部外面に２条・内面に１条の沈線がめぐらされる。86・87は口縁部内外面共沈線が施されることなく，磨研ないしは丁寧なナデ仕上げのままの椀形土器破片である。

第６類(102～119)

粗製土器で内外面共無文の土器。口縁部の形状によって幾つかに細分できる。これらの土器は，おおむね胎土に細砂，金雲母を含み，有機質の混和材を混入させていたのか気泡を生じているものが多い。

a　(102～107)　外反する口縁を有すが，頸部は緩やかでそれほど内湾せずに胴部へ移る。口唇部は面取りされて平坦となる。稀に口唇端部に疑似縄文等の文様を施文した例があるが口唇端部平坦の類に含める。102～104では指頭でナデた痕跡が明瞭である。

c　(108)　口縁から直接胴部に移行し頸部を形成しない器形で，口唇端部が面をなすもの。

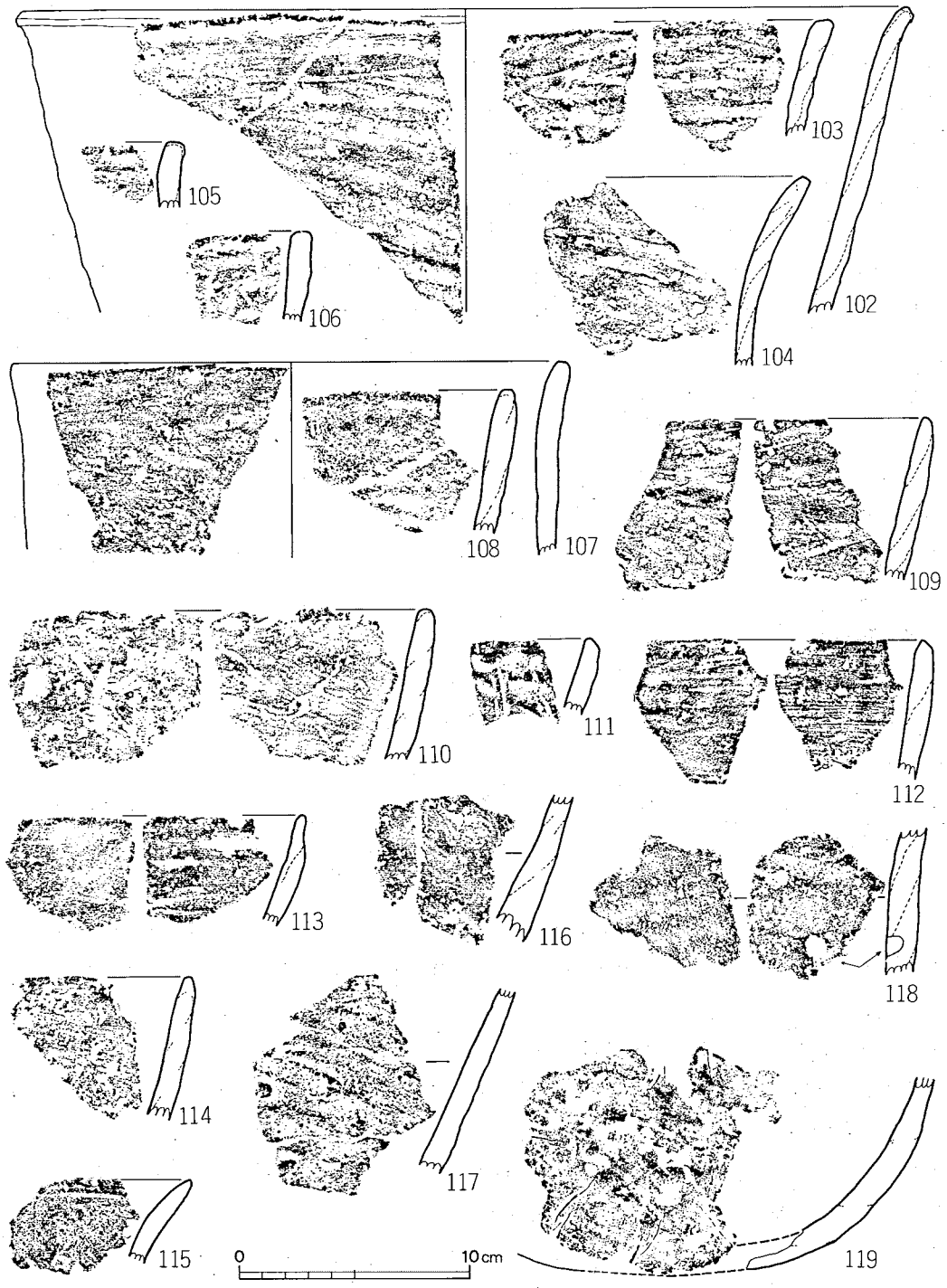
d　(109・110)　口縁から直接胴部に移行し頸部を形成しない器形で口唇部が丸味をもっておさまるもの。

e　(111・112)　口縁部が内傾気味になるもので，口唇端部が面をなすもの。両者とも口唇上面ではなく外側に向く面となっている。112の器面ではアナダラ条痕のあとナデ仕上げしているものの不充分なナデ仕上げのために条痕が浮び上った状態である。

f　(113・114)　eと同様に内傾気味の口縁部を有すが口唇端部が丸くおさまるもの。

h　(115)　a類に近い形状で端部が丸味をもつ例かも知れないが，頸部の内湾度がより高い器形と思われる。口唇端部は丸くおさまるが，外面に１条の浅い沈線がめぐらされている。

116～119は胴部破片のため，器形を判断し難いが，118はa類に近い形状で胎土にドングリ類が混入されていた為とみられる圧痕が観察できる。また119は無文の椀形土器であろう。器壁は



第 124 図　石橋 II－11・12出土縄文土器⑤拓影 (1/3)

厚く，器面は凹凸が多いナデ調整で仕上げられている。

第7類(120～135)

粗製土器で，外面に条痕文を施すものの，内面をナデ調整し無文とする土器。第6類同様口縁部の形状によって区別するが，破片のため断定し難いものがある。なお外面の条痕は大半がアナダラ条痕で134・135の2点のみ原体が異る。

a (120～121・125) 外反する口縁を有し口唇部が平坦になる。120では口唇部にアナダラ属貝殻の放射肋圧痕の疑似縄文が付される。

b (127・128) 口縁部は外反するが口唇端部は丸味をもっておさまるもの。127の内面は乱れたアナダラ条痕を施したあとナデているが条痕がやや残っている。

c (122～124) 直線的に広がったままの口縁部を有し，口唇端部が平坦になる。123は口唇部にアナダラ属の放射肋圧痕の疑似縄文が付され外面の条痕は横位のあと縦位に重ねている。

d (126・129～131) 直線的に広がったままの口縁部を有し口唇端部が丸くおさまるもの。129の内面はナデられるが一部に条痕状のなごりがみられる。また131の内面は幅1.4cm単位の板状原体によるナデで仕上げられている。

f (132・133) 頸部が大きく内湾して胴部が大きく広がる器形になると思われるもので，口唇端部が丸味をもつもの。133は口縁部を欠失するが，この類に近い肩部破片である。

その他 (134・135) 胴部破片口縁部の形状は不明だが，134は板状原体とも思える細線の条痕が，135はヘタナリ条痕が施されている。

第8類(136～142)

粗製土器で，内外面共に条痕文が施されている土器。口縁部の形状によって区別できる。

a (136～138) 口縁部は外反し，頸部から胴部にかけてゆるやかな曲線で移る器形で，口唇端部が平坦に仕上げられるもの。全てアナダラ条痕で施文されている。

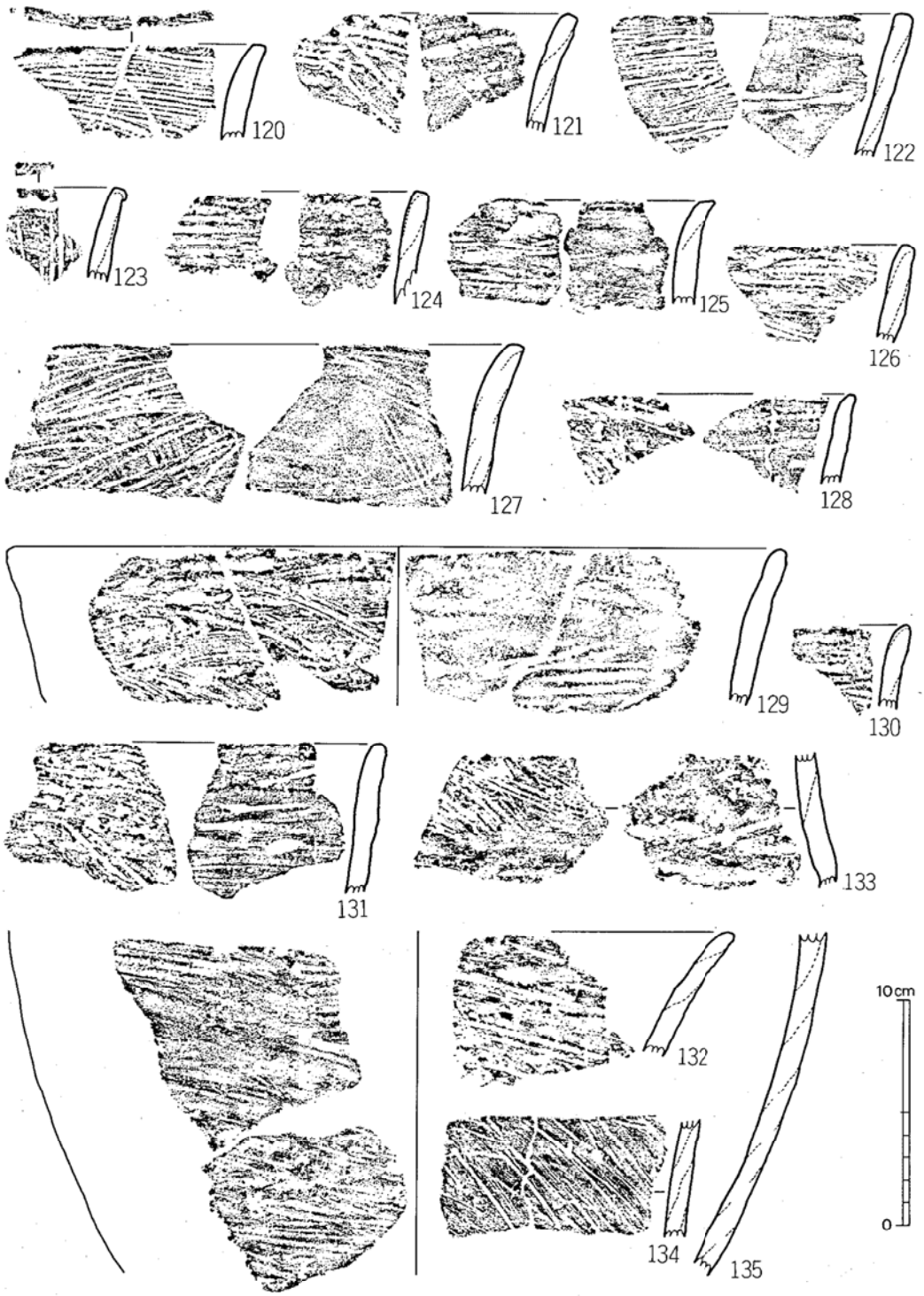
b (140～142) 口縁部は外反するが，口唇端部が丸味をもっておさまるもの。140の内面・141の外面には板状原体とも思える条痕がみられるが，他はアナダラ条痕で施文されている。

c (139) 直線的な口縁部を有し口唇端部が平坦になる。外面の条痕はアナダラ条痕だが乱れた条痕で，内面は板状原体と思える条痕である。

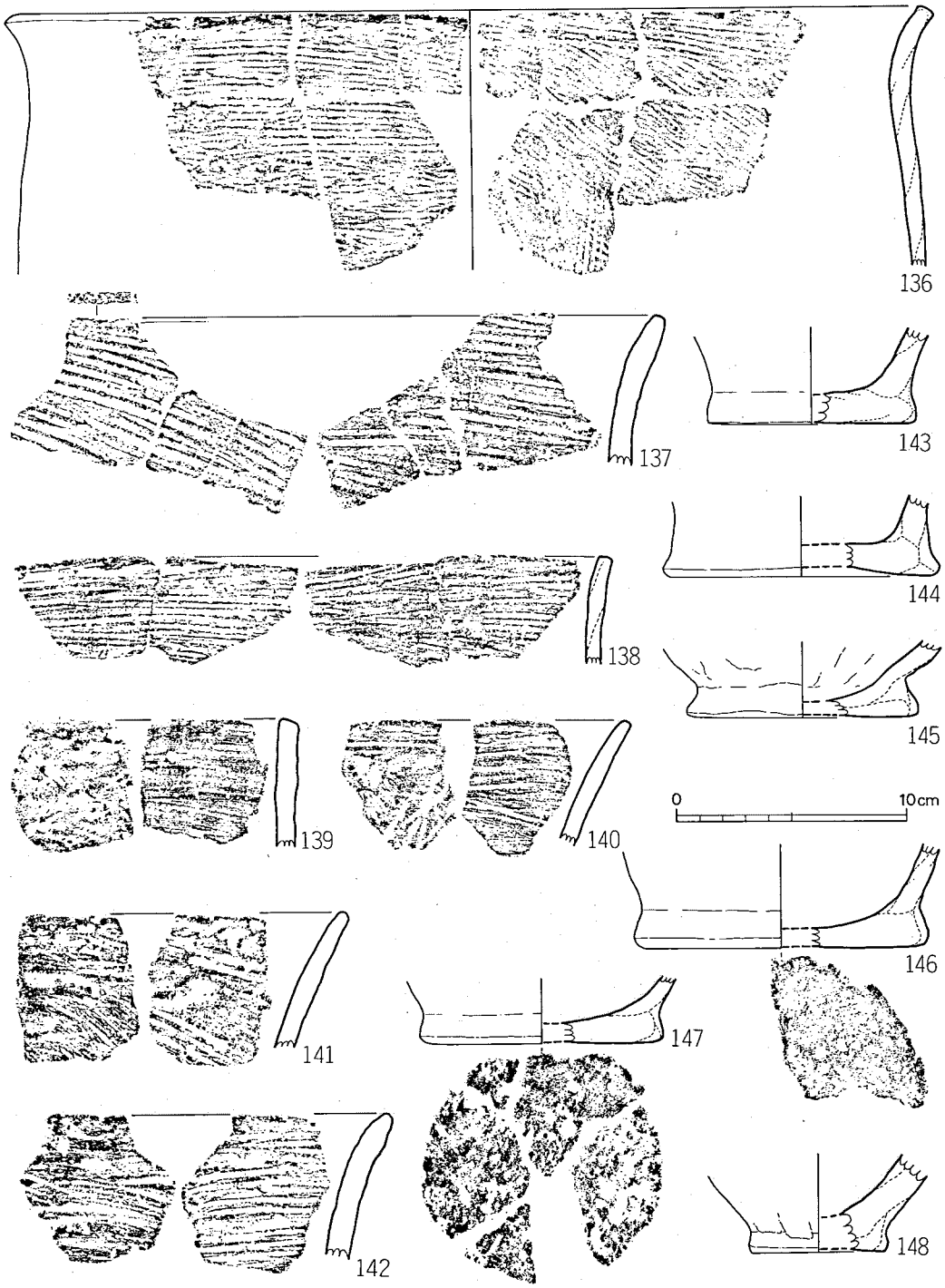
底　部(88～100・143～148)

底部破片のうち，88～96は精製土器で他は粗製土器である。底部だけで全体の器形を窺うことはできないが，精製土器のうち88～91は深鉢形土器ないしは鉢形土器，92～94は鉢形土器ないしは浅鉢形土器，95～96は浅鉢形土器の可能性が高い。また粗製土器はおおむね深鉢形土器を考えている。

88・89は底面が拡張されて窄ってきた胴部がくびれるタイプである。粗製土器では143～148がこのタイプに属す。接合では，円盤状底板の端よりやや内側に胴部を乗せて接合部の外側を



第 125 図　石橋Ⅱ－11・12出土縄文土器⑥拓影 (1/3)



第 126 図　石橋 II－11・12出土縄文土器⑦拓影 (1/3)

更に補強する際に底面が重視されている。やや上げ底になるものと平底がある。90・91・97～101は平らな底面からそのまま胴部へ広がるタイプのもの。円盤状底板の端，あるいは外側に胴部を接合させている。95・96は底径が小さく上げ底になる。

これらの底部破片は，口縁部に比して，胎土に含まれる砂粒の割合が多くなり，精製土器では磨研がやや雑になっている。

サキゾノⅠ－1地区出土の縄文土器（第127～130図）

当該地区では，埋甕使用土器を除いて，総重量11,985ｇの縄文土器片が出土した。小破片が多く，個体数を求め難い面もあるが，重量での精製土器の割合は6.63%である。このうち調査区北端の暗渠内で弥生土器等に混入していた3,460gと，170ｇの出土地点不明分を除いた，8,355ｇが，弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡，遺物包含層中に混って出土した資料で，内625ｇ7.48%を精製土器片が占める。

この項では，暗渠内出土の資料を含めて比較的大きな破片，器形の特徴がある破片の62点を図示した。尚分類の基準は石橋Ⅱ－11・12地区出土資料での分類をそのまま援用する。

精製土器（149～164）

149は縄文Ｒ $\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$ を用いた磨消縄文と x 字状文がみられるもので，１類ｅに相当する。150・153は，それぞれ１類ｂ′・１類ａ′に分類できよう。

151・152・161は第２類に含めうる。但し，151の口縁部文様帯は２類の形状に似るが，平行沈線に変化している点は３類に近い特徴である。

154～156は，内湾する頸部を有す鉢形土器の肩部破片で，１条の沈線を有すこと，沈線が下側から斜めに切り込んだ段状のものであること等から第３類に分類できる。157は第４類に近い形状の肩部破片で，158は胴部界線に横長楕円形押点がみられる。

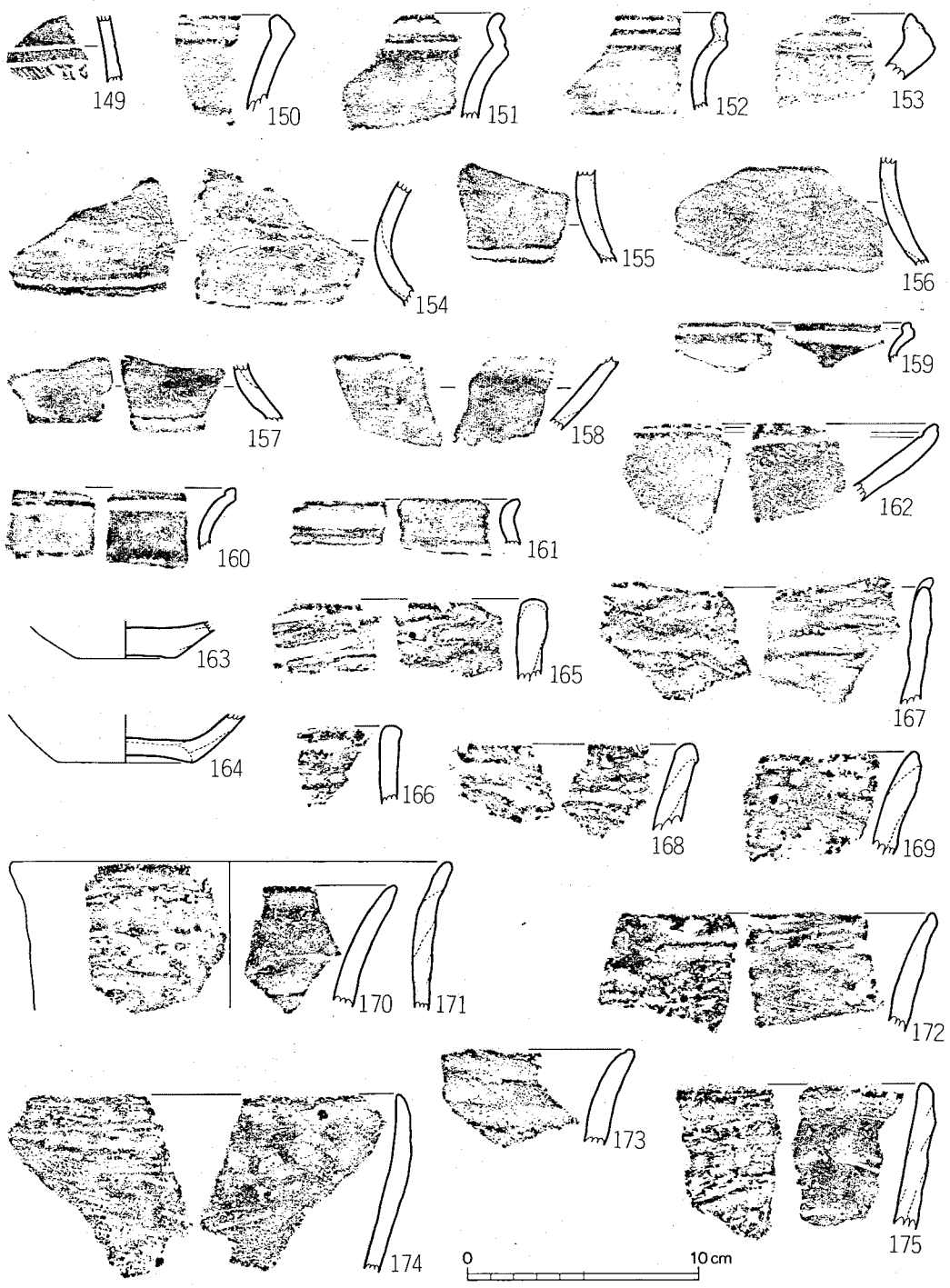
159・160・162は，第５類に含まれるもので，159・160の浅鉢形土器口縁部破片では口唇部が屈折し外面に１条の沈線がみられる。５類ｃでも古式のタイプである。162は，内外面共に口唇直下に沈線を１条めぐらせる椀形土器で５類ｈに分類している。

163・164は上げ底になる底部破片で，163は浅鉢形土器，164は鉢形土器であろう。

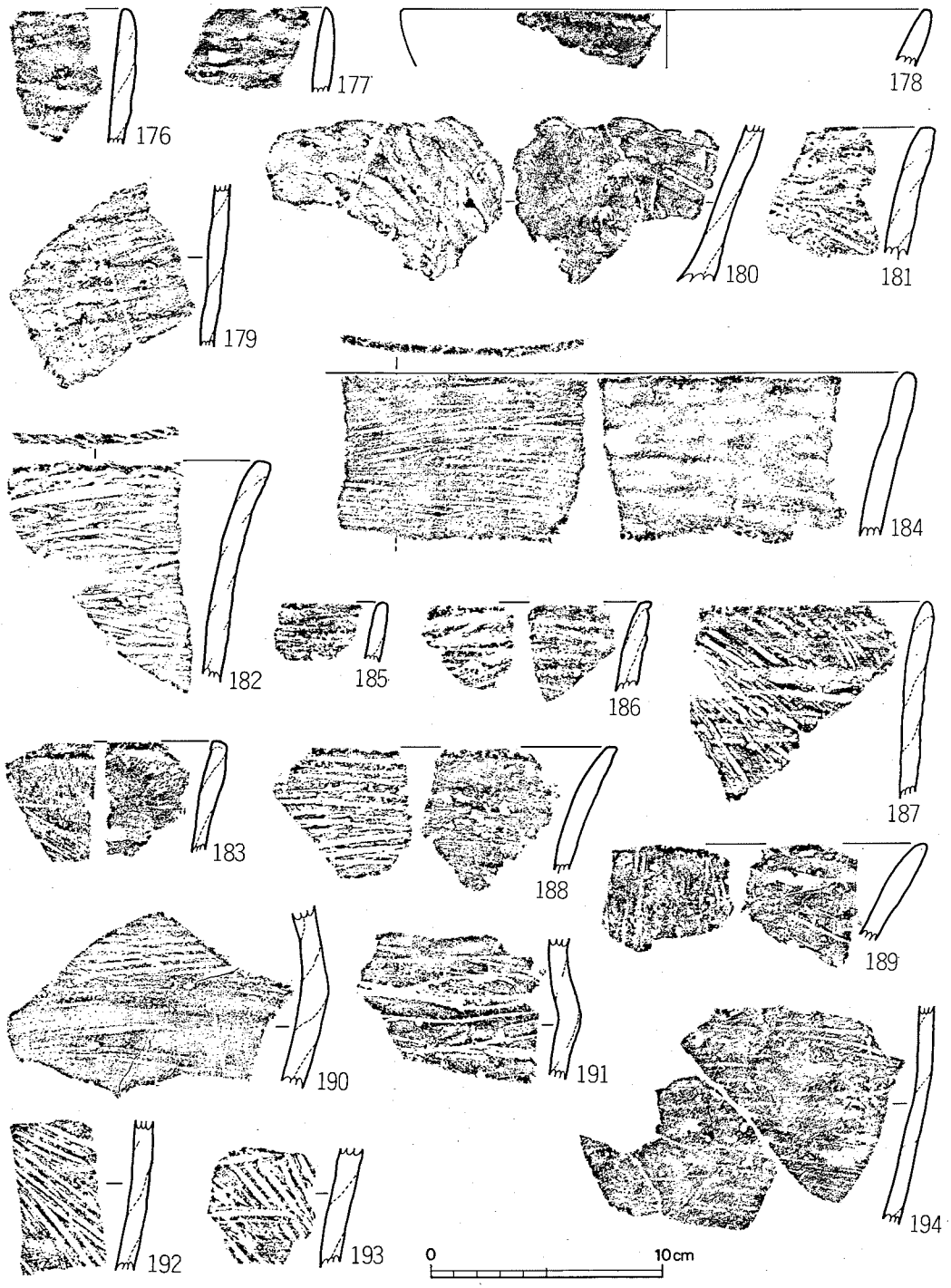
粗製土器（165～210）

165～180は第６類の内外面とも無文のもの。165・166はｃ類，168はｄ類に近く169～173・175～178はｂ類に含めうる。167はｂ類に近いが波状口縁で波頂部はつまみ出したような形状になっている。174は内傾気味の口縁でｆ類に分類できる。179・180は胴部破片であるが，外面は172の内外面や172・175の外面と共に指でカキナデたような凹凸がみられる。また180の内面は板状原体によるナデ調整で仕上げられている。

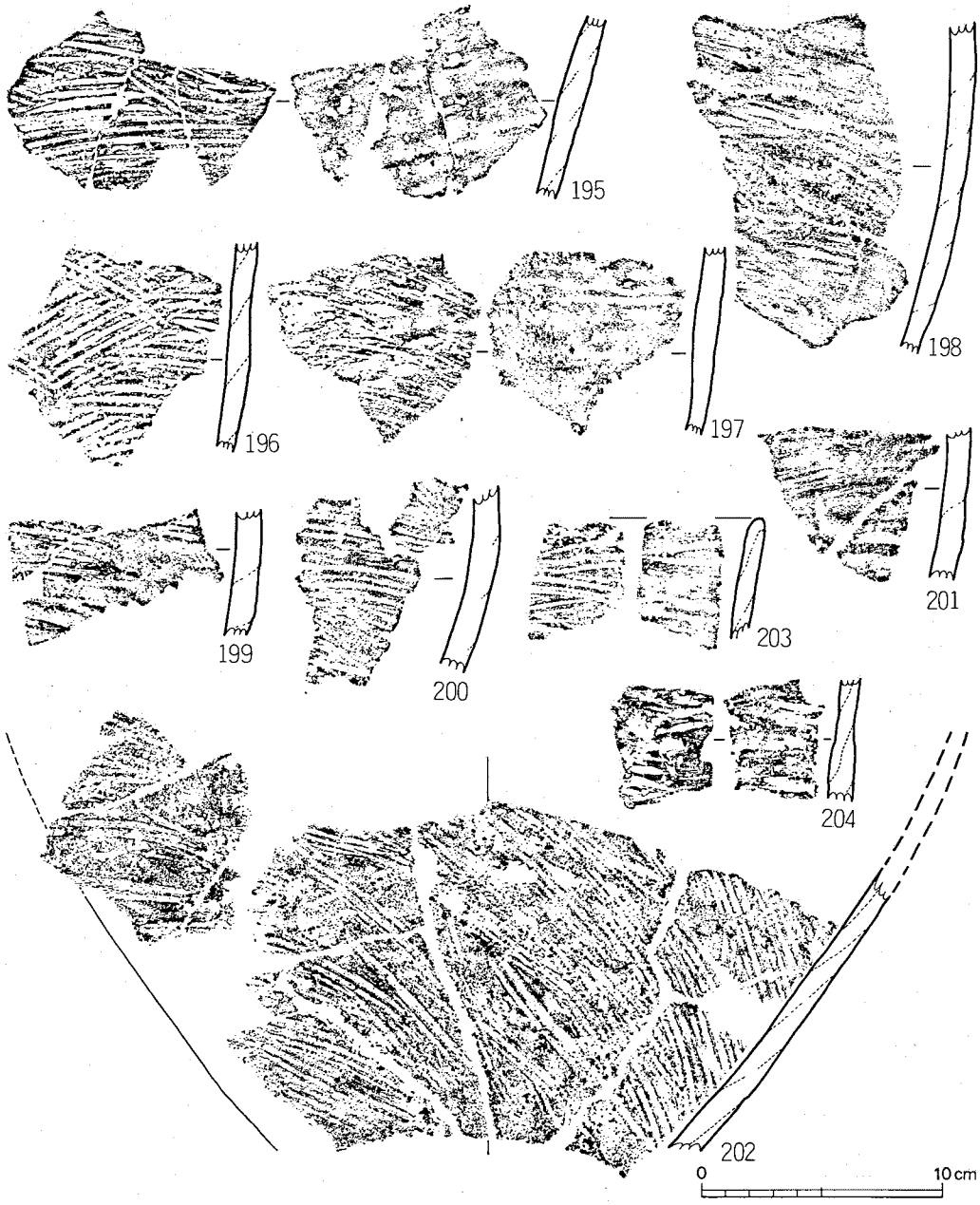
181～202は，第７類の外面に条痕文のみられる土器である。181～183はａ類で182の口唇部にはアナダラ属貝殻放射肋圧痕の疑似縄文が付される。184は口唇部に斜行する浅い刻み目がみら



第 127 図　サキゾノⅠ－１出土縄文土器①拓影 (1/3)



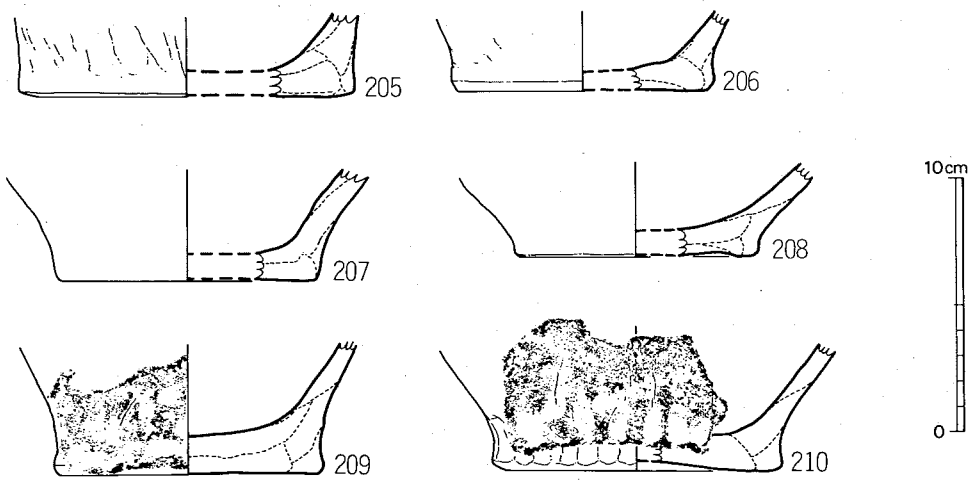
第 128 図　サキゾノⅠ－１出土縄文土器②拓影（1/3）



第129図　サキゾノⅠ－1出土縄文土器③拓影（1/3）

れc類。185～189は端部が丸味をもっておさまる形状の口縁部破片でアナダラ条痕が多用されている。190・191はh類に含めうる胴部破片で，191の外面は条痕というより乱れた沈線文的な感じを受ける。192～197の胴部破片はアナダラ条痕，198～202はヘナタリ条痕を施している。

203・204は，内外面共に条痕の第8類。203の口縁部破片はd類に含めうるものでアナダラ条



第130図　サキゾノⅠ－1縄文土器④拓影(1/3)

痕が施文される。204は内外面共に巻貝系条痕の胴部破片。

205～210は鉢形ないしは深鉢形土器の底部破片。205～208は底面から胴部へそのまま移行するタイプ，209・210は底面が広がるタイプで外面に指頭圧痕がみられる。

粗製土器では胎土中に砂粒・金雲母を含み稀に角閃石を含むものがある。また器壁には気泡が多く観察できるものがあり，有機質の混和材の使用が考えられるが，概して，第6類の土器や第7類のアナダラ条痕施文土器に多めで，第7類のヘタナリ条痕施文土器では少ない。

サキゾノⅠ—4・5地区出土の縄文土器(図版55・56－1，第131～134図)

当該地区では，総重量28,190gの縄文土器片が出土している。このうち，4,340gは縄文時代住居跡出土資料で，Ⅰ—4地区包含層出土分11,965g，Ⅰ—5地区包含層出土分11,585g，地点不明分300gが内訳である。

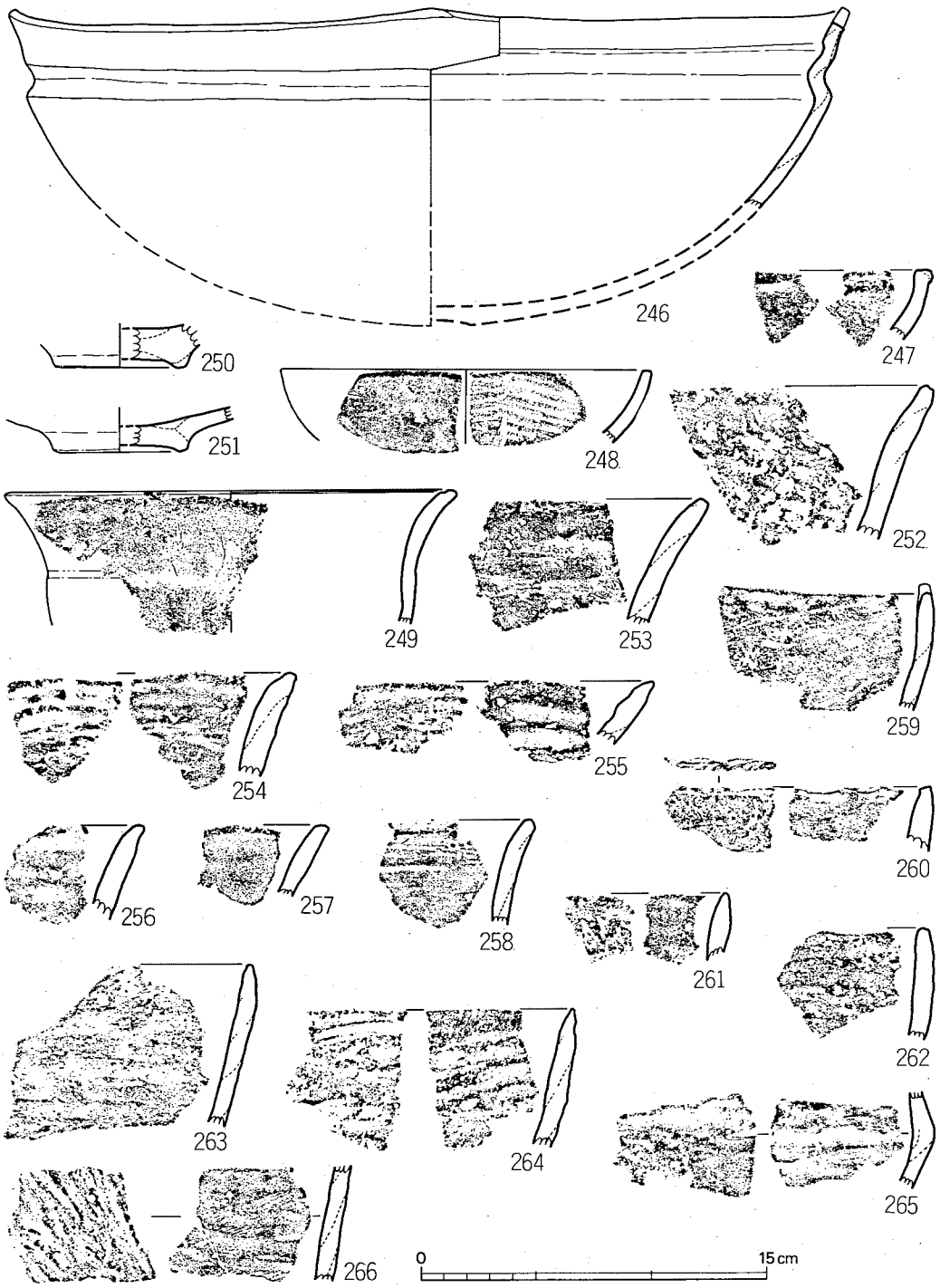
ほとんど小さな破片のため，80点のみ図示したが，内211・214・217～220・225・226・228・230・232・234・237・246・254・261～263・265～267・269・271・279・281・288 の26点は縄文時代住居跡出土資料である。

精製土器の占める割合は，縄文時代住居跡分21.89%，Ⅰ—4地区包含層分8.32%，Ⅰ—5地区包含層分10.75%で全体の平均では11.46%になる。

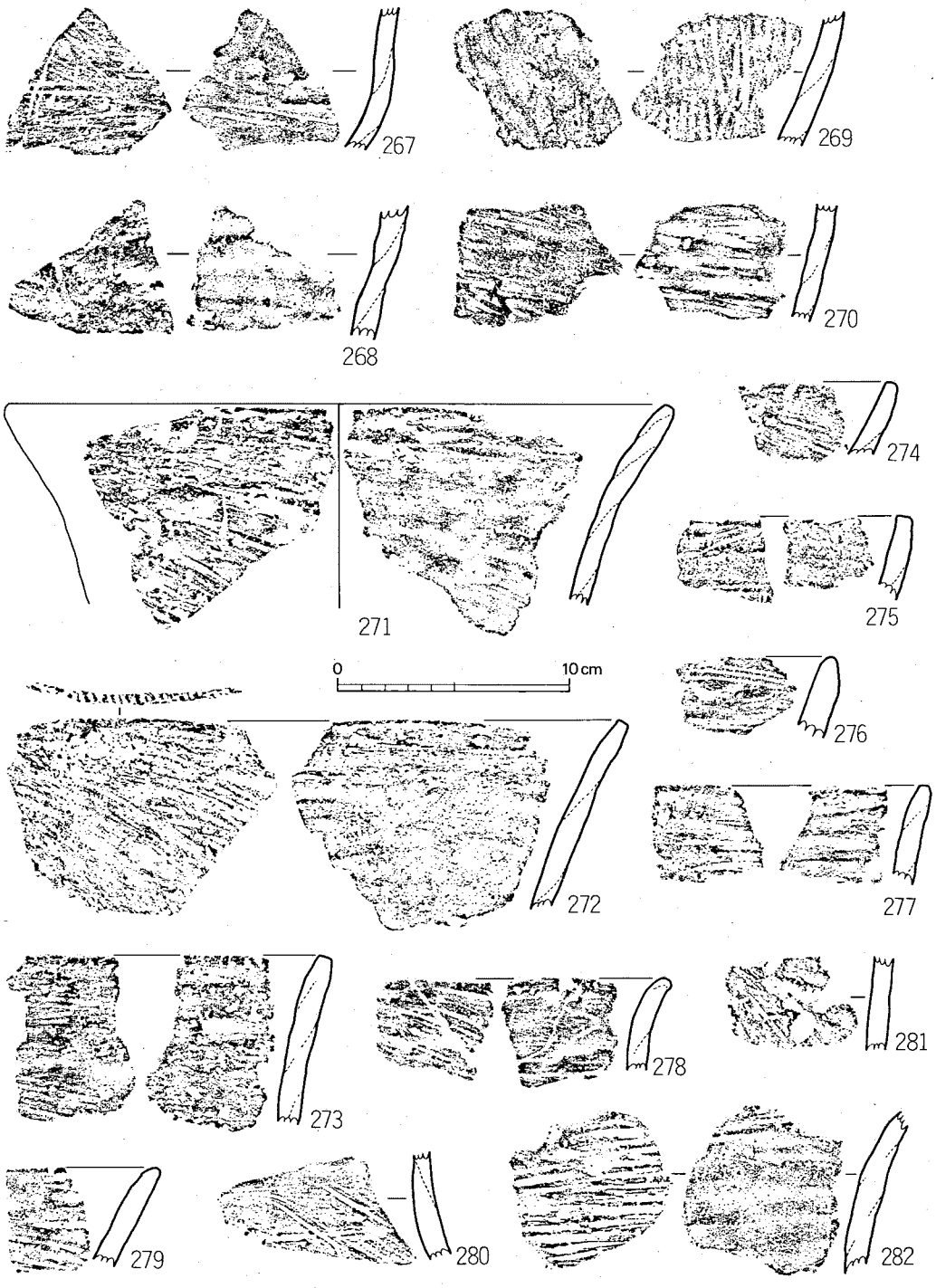
精製土器(211～251)

211～225は第1類・第1′類に分類できる。211は口縁端部が稜をもって屈曲し上方に伸び縄文R$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$を用いた磨消縄文がみられる。口縁部の中程での器壁中接合面に植物葉片の圧痕がみられた。212はd類に近い要素を有している。肩部文様帯では214～217に縄文R$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$がみられ，216・217は連続刺突文を伴い，216では平行沈線がx状に反転する。219は縄文がみられずD字形になる半截竹管文状の連続刺突文が付く。218は斜行する連続刺突文がみられる稜を有す口縁

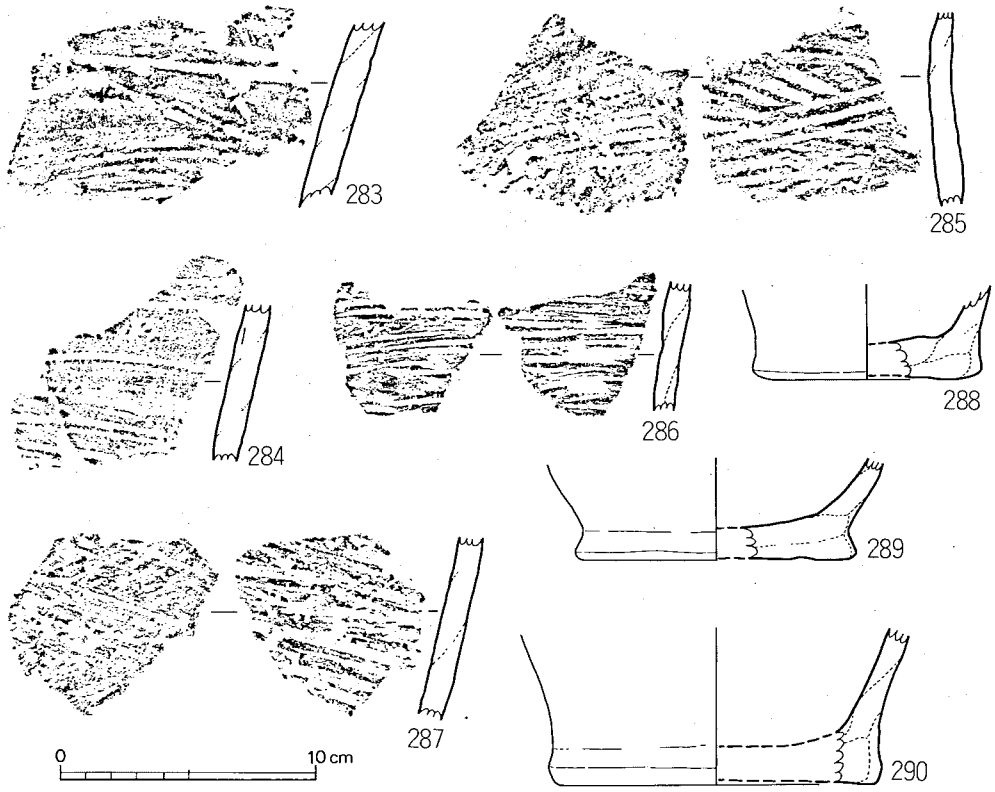
第 131 図　サキゾノⅠ－4・5 出土縄文土器①拓影（1/3）



第 132 図　サキゾノⅠ－4・5 出土縄文土器②拓影（1/3）



第133図　サキゾノⅠ－4・5出土縄文土器③拓影)(1/3)



第 134 図　サキゾノⅠ－4・5出土縄文土器④拓影 (1/3)

端部。220は,短沈線状文・押点を有すが，文様帯が薄く反り返る形状になるもので第２類に近い要素をもつ。221は，１類ｃであろうか，風化が進んでいる。222は口縁端部が肥厚して明瞭な稜を作り太めの平行沈線をめぐらせている。また223は１類ｂ′，224は１′類に含めうる。

226～227は口縁端部が内傾気味に屈折し，文様帯に浅く平行する凹線がみられる。第２類。

228～230は第３類に分類できる肩部破片だが，228は平行沈線文で古い要素，230の小円形押点は新しい要素が感じられる。

231は注口土器注口部破片で楕円形断面を有す黒色磨研土器。232は器面風化のため細かな調整方法は不明だが，正面観縦長楕円形の瘤状突起が付く。

233～249は，第５類に分類できる。233～235はａ類。245はｂ類,237はｃ類に細分できるが,237は内傾気味の口径がそれほど大きくならない口縁部破片で注口土器等の器形であろうか。238～240はｄ類で，238・240の口縁部外面下位に沈線がみられる。236・246はｅ類に含めうるが,246は最大口径37.5cmに復原でき，短い頸部から立ち上った口縁部が更に外反気味に伸び上り，波状口縁になる。245はｆ類とｇ類の中間的な形状を呈し247・248は椀形土器。249は，245同様ｆ類とｇ類の中間的要素を有しているが，外反する口縁部で胴部に向ってゆるやかにふく

らみ口唇部上面に沈線がめぐらされており，頸部に極て浅い凹線状の段がめぐる。ｉ類として区別しておきたい。

250・251は底部破片。明瞭な底部を形成しており上げ底となっているが，251では胴部へ大きく広がる。

粗製土器(252～290)

252～270は，第６類の内外面無文の土器。252・253はａ類・254・258はｂ類で255～257はｂ類かｄ類の区別のつけ難いもの，259・260はｅ類，261～264はｆ類に近く，265はg類若しくはｈ類であろう。266～270は，胴部破片であるが，266の内面には斜行する板状原体によるナデ？のあと指でヨコ方向にナデられている状況が窺える。また手法として指先によるカキナデのもの。板状原体のナデ（267等）がみられる。

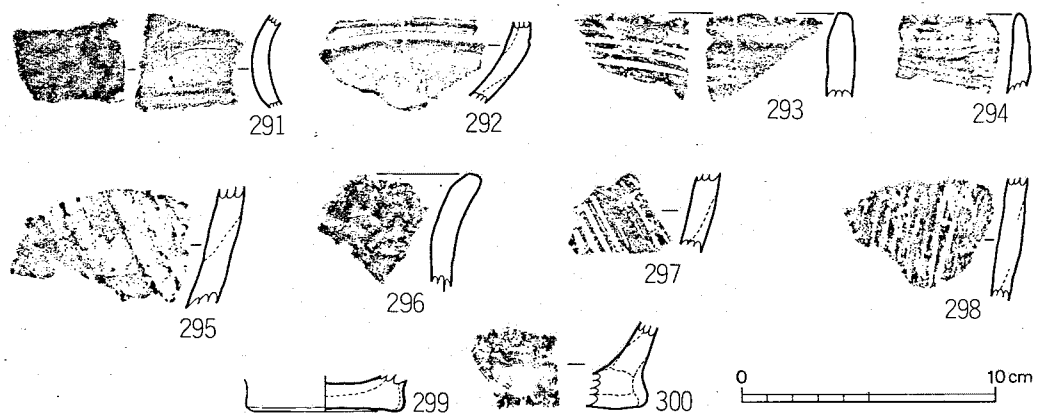
271～284は，外面に条痕が施され内面が無文の第７類。271～273はａ類，274・275・277はｃ類に含めうるが，272・275では口唇部にもアナダラ条痕が付されて疑似縄文としている。276は，ｄ類，278・279はｂ類，280はｇ類ないしはｈ類であろうか。281～284は胴部破片で，284の器壁内には植物葉（木葉）片の圧痕がみられる。

285～287は，内外面共条痕の第８類で胴部破片だが，全てアナダラ条痕が施されている。

288～290は，底部破片で，288は底面からそのまま胴部に移るタイプ，289・290は途中でくびれるタイプに含めうる。

サキゾノⅠ－６～８・15地区出土の縄文土器（第135図）

サキゾノⅠ－６～８地区からは総重量810ｇの縄文土器片が出土し，内6.17％を精製土器が占める。また，サキゾノⅠ－15地区のトレンチからは粗製土器片のみ10余片出土したのみで，この地域では少量となっている。図示した資料では，291～295がⅠ－６～８地区，296～300がⅠ－15地区出土である。



第135図　サキゾノⅠ－６～８・15出土縄文土器拓影（1/3）

291は精製磨研の鉢形土器破片だが沈線がみられないことからして第5類であろう。292は外面に2条？の沈線が施される精製磨研の椀形土器であろう。293・294は第7類の口縁部破片で，293はアナダラ条痕が施されて口唇部が平坦にされる。294は巻貝等の条痕が施され端部が丸くなる。295は第6類の胴部破片で指によるカキナデ痕がみられる。296は器面が風化するが，外反する口縁部で端部は丸くおさまる。297～298は外面にアナダラ条痕が施される胴部破片。299・300は底部破片である。

(2) 石器・土製品（図版56－2～58，第136～146図，表7・8）

総計236点出土し，打製石斧34・石皿8・すり石14・打製石鏃91・切目石錘1・サイドブレイド6・石錐6・削器類17・磨製石斧7・敲石3・研磨痕のある石器3・円盤状の石器3・石刃状剝片13・つまみ形石器17・石核10・土製品3が内訳である。このうち146点を図示し計測値は表に示した。なお図示しえなかった石器のうち打製石鏃については全て一覧表に示した。

石橋地区出土の石器・土製品（図版56－2，第136～141図）

打製石斧（1～13） いずれも玄武岩製。1～6は短冊形の打製石斧で，3・5のみ完形。5は短冊形とはいえ長楕円形的な平面形を呈しており，体部の厚みは薄い。1～3・6は体部の幅が約6cmに対し厚さ2cm程度とやや厚めな形状である。4の刃部付近では薄めの形状になっているものの頭部側では厚みが幅の½を占める。

7は，胴部両側縁に抉りが入っており分銅形に近い形を呈し，厚みがある。素材は縦剝ぎによって得ている。

8～12は，基本的には短冊形だが，刃部幅が頭部幅の約1.5倍を有しており，撥形に近い形状となるもの。8・11は厚みがあり，9・12は薄めの体部になっている。横剝ぎによって素材を得ているが，8では打面調整で打瘤部の厚みを減じる方法がとられていない。尚11は石橋II—3地区採集資料。

13は，幅の狭い頭部から幅広の刃部に向って湾曲して広がるが肩を張り出した形状に作られているが，使用の痕跡は顕著でない。

3・9・11には刃部に条線状の磨耗痕がよく観察できるが，3・9は長軸方向に平行する方向のもののみ。11では，長軸方向とやや斜行する方向のものがあり頭部にも磨耗痕がみられる。

石　皿（18～20） 3点とも花崗岩を用いている。18・19は破片だが上面のみ使用による磨耗がみられ，わずかに凹み加減となっている。20は，6号石棺墓の棺材に転用されていたもので重量10.55kgの完形品，扁平な素材で，図示した面の中央部が使用されて磨耗し凹むが周辺部はほとんど磨耗していない。反対側の面では素材自体全体に凹んだ形状になっているが，起伏があり中央部で使用によるやや磨耗する部分がみられる程度。

表7　石橋・サキゾノ出土石器計測表

〔単位cm・g（　）は現存値〕

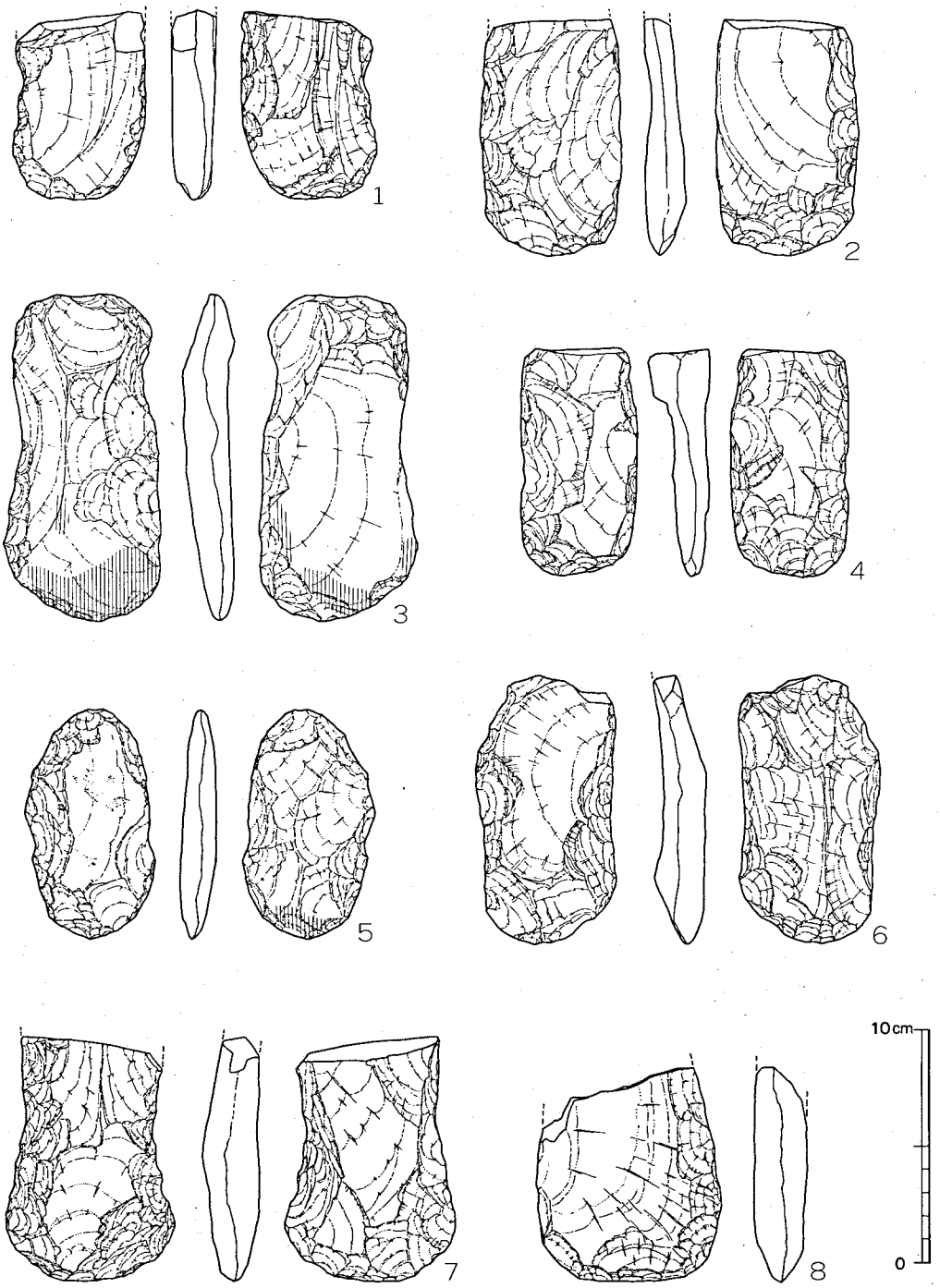
挿図No.	No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	種類
1	三ⅠBSb 69	石橋 II—11 S329 E62	4	玄武岩	(8.0)	5.7	1.9	(122)	打製石斧
2	三ⅠBSb 43	石橋 II—12 S333 E74	4	玄武岩	(10.1)	6.0	1.7	(147)	〃
3	三ⅠBSb 41	石橋 II—12 S333 E76	3	玄武岩	13.9	6.6	2.2	254	〃
4	三ⅠBSb 39	石橋 II—11 S321 E64	石敷内(東より)	玄武岩	9.7	5.0	2.6	142	〃
5	三ⅠBSb 44	石橋 II—12 S331 E78	4	玄武岩	9.8	5.5	1.6	106	〃
6	三ⅠBSb 42	石橋 II—12 S331 E80	3 上	玄武岩	(11.5)	6.0	2.2	(182)	〃
7	三ⅠBSb 38	石橋 II—11	8号石棺墓壙内	玄武岩	(10.4)	7.1	2.4	(233)	〃
8	三ⅠBSb 46	石橋 II—12 S329 E76	4	玄武岩	(9.2)	7.8	2.3	(232)	〃
9	三ⅠBSb 85	石橋 II—	表採	玄武岩	(10.9)	7.8	2.0	(214)	〃
10	三ⅠBSb 35	石橋 II—11 S329 E66	3	玄武岩	10.3	6.7	1.7	130	〃
11	三ⅠBSb 60	石橋 II—3	表採	玄武岩	(15.5)	7.5	2.4	(321)	〃
12	三ⅠBSb 33	石橋 II—11	表採	玄武岩	11.65	6.3	1.7	133	〃
13	三ⅠBSd 25	石橋 II—12 S333 E72	4	玄武岩	9.7	8.4	1.8	133	〃
14	三ⅠBSe 25	石橋 II—11	7号石棺墓壙内	玄武岩	12.0	10.1	6.4	1,250.5	すり石
15	三ⅠBSe 42	石橋 II—11 S333 E66		玢岩	(7.5)	(7.1)	(5.8)	(178)	〃
16	三ⅠBSe 12	石橋 II—12 S329 E74	2	花崗岩質	(6.0)	(5.4)	(6.0)	(286)	〃
17	三ⅠBSe 43	石橋 II—12 S331 E78	石敷内	玢岩	(5.2)	(4.3)	(4.65)	(132)	〃
18	三ⅠBSf 1	石橋 II—11 S325 E60		黒雲母花崗岩	(8.8)	(7.8)	(6.1)	(594)	石皿
19	三ⅠBSf 2	石橋 II—12 S333 E74	4	花崗岩	(17.5)	(15.0)	8.0	(3,189)	〃
20	三ⅠBSf 5	石橋 II—11	6号石棺棺材	花崗岩	41.8	30.0	6.0	10,550	〃
46	三ⅠBSm 13	石橋 II—11 S333 E66	溝上	黒曜石	2.75	2.5	0.4	2.7	サイドブレイド
47	三ⅠBSm 14	石橋 II—12 S333 E76	4	黒曜石	1.5	1.7	0.3	1.0	〃
48	三ⅠBSm 15	石橋 II—12 S331 E78	4	黒曜石	(1.9)	2.15	0.4	(1.8)	〃
49	三ⅠBSm 7	石橋 II—11 S329 E64	3 下	黒曜石	2.1	2.6	0.65	3.2	〃
50	三ⅠBSi 6	石橋 II—12 S331 E76	1住上層	黒曜石	(1.7)	2.25	0.45	(1.5)	石錐
51	三ⅠBSm 12	石橋 II—12 S331 E74	4	黒曜石	3.5	1.3	0.44	1.8	削器
52	三ⅠBSd 37	石橋 II—12 S331 E72	4	黒曜石	3.8	1.6	0.45	2.95	〃
53	三ⅠBSd 31	石橋 II—11 S325 E66	3	黒曜石	(2.9)	2.2	0.74	(4.7)	〃
54	三ⅠBSd 28	石橋 II—11 S327 E66	3	安山岩	(3.05)	(3.35)	0.9	(8.4)	石匙？
55	三ⅠBSh 2	石橋 II—12 S333 E72	4	白雲母片岩	23.3	6.3	4.3	1,049	敲石
56	三ⅠBSh 3	石橋 II—12 S331 E80	4	白雲母片岩	11.5	11.2	3.4	612	〃
57	三ⅠBSh 5	石橋 II—11 S329 E68	3	白雲母片岩	13.1	5.5	1.7	231	〃
58	三ⅠBSb 48	石橋 I—2	土器群	蛇紋岩	(6.6)	(5.5)	(2.8)	(74.55)	磨製石斧
59	三ⅠBSb 81	石橋 II—12	3	玄武岩質	(7.7)	(5.0)	(2.4)	(121)	〃
60	三ⅠBMa 9	石橋 II—11 S335 E70	4	白雲母片岩	(7.4)	6.9	1.4	(121)	研磨痕のある石器
61	三ⅠBMa 10	石橋 II—11 S331 E70	3 上	白雲母片岩	5.75	5.5	1.6	74.6	〃
62	三ⅠBSe 19	石橋 I—2	5号甕棺下甕上面	泥岩質	(11.5)	7.8	5.5	(802)	〃
63	三ⅠBSz 8	石橋 II—11 S327 E64	3 下	角閃片岩質	9.45	6.2	1.0	81.3	？
64	三ⅠBSd 24	石橋 II—12 S333 E74	4	安山岩	7.85	9.5	1.6	(86)	石匙
65	三ⅠBSd 29	石橋 II—12 S331 E72	3 上	安山岩	(5.7)	2.15	0.46	(7.5)	削器
66	三ⅠBSm 4	石橋 II—11 S329 E66	溝上	黒曜石	(4.85)	1.5	0.58	(4.05)	石刃状剝片
67	三ⅠBSm 11	石橋 I—2	土器群S—2	黒曜石	(4.9)	1.7	0.5	(2.5)	〃
68	三ⅠBSp 9	石橋 II— 1 S333 E66	溝下	安山岩	3.4	2.7	0.3	4.1	つまみ形石器
69	三ⅠBSp 11	石橋 II—12 S333 E74	4	黒曜石	2.5	2.7	0.55	(3.5)	〃
70	三ⅠBSp 6	石橋 II—11	8号石棺墓壙内	黒曜石	2.9	2.6	0.45	3.9	〃
71	三ⅠBSp 8	石橋 II—12 S335 E78	4	黒曜石	1.6	2.3	0.39	1.24	〃
72	三ⅠBSp 3	石橋 II—11 S329 E66	3	黒曜石	3.0	(2.0)	0.44	(2.8)	〃
73	三ⅠBSp 2	石橋 II—11 S329 E62	3	黒曜石	2.95	1.8	0.42	2.5	〃
74	三ⅠBSp 1	石橋 II—11 S327 E64	3 下	黒曜石	(1.65)	1.6	0.38	(0.7)	つまみ形石器
75	三ⅠBSl 9	石橋 II—11 S327 E62	3 下	黒曜石	1.6	2.8	1.8	9.2	石核
76	三ⅠBSl 11	石橋 II—12 S331 E74	4	黒曜石	2.0	1.95	1.9	9.2	〃
77	三ⅠBOa 9	石橋 II—11	5号石棺墓壙内	白雲母片岩	8.6	3.2	0.6	27.6	切目石錘
79	三SZSb 31	サキゾノ I—5 S333 E56	4	玄武岩	12.6	5.9	2.35	224	打製石斧
80	三SZSb 32	サキゾノ I—5	5号住	玄武岩	14.9	6.65	2.6	333	〃
81	三SZSb 78	サキゾノ I—5 S333 E54	3	玄武岩	(9.6)	7.9	1.75	(142)	〃
82	三SZSb 75	サキゾノ I—5 S329 E58	3 下	玄武岩	(9.2)	6.5	2.2	(166)	〃
83	三SZSb 51	サキゾノ I—5 S333 E58.60	4	角閃片岩	15.9	6.1	2.0	273	〃
84	三SZSb 57	サキゾノ I—1	表採	玄武岩	14.3	5.9	2.6	(244)	〃
85	三SZSb 77	サキゾノ I—5 S329 E52	3	玄武岩	15.3	8.1	2.3	310	〃
86	三SZSb 59	サキゾノ I—1	暗キョ内	花崗岩質	13.5	8.0	2.6	335	〃
87	三SZSb 58	サキゾノ I—1	暗キョ内	玄武岩	(10.0)	8.7	2.6	(276)	〃
88	三SZSb 49	サキゾノ I—5 S333 E58.60	4	玄武岩	(5.5)	(5.2)	1.2	(46.2)	〃
89	三SZSb 50	サキゾノ I—5 S333 E58.60	4	玄武岩	(6.0)	7.2	1.5	(64)	〃
90	三SZSe 10	サキゾノ I—5 S333 E58.60	4	角閃玢岩	(5.7)	6.7	3.0	(126)	すり石
91	三SZSe 38	サキゾノ I—5 S329 E58.60	3	花崗岩質	7.4	6.2	3.3	227	〃
92	三SZSe 30	サキゾノ I—5 S333 E58.60	4	砂岩	(4.5)	(2.25)	2.9	(31.8)	〃
93	三SZSe 9	サキゾノ I—4 S332 E20	3 上	玄武岩	(5.5)	(5.5)	4.1	(133)	〃
94	三SZSd 36	サキゾノ I—1 S272 E2	3	安山岩	(5.8)	6.0	1.5	(48.9)	削器
95	三SZSd 40	サキゾノ I—4·5	3 上	安山岩	9.4	5.4	2.5	105	〃
96	三SZSd 27	サキゾノ I—6 S331 W26	3 上	安山岩	(5.2)	5.5	1.4	(25)	〃
97	三SZSb 30	サキゾノ I—4 S333 E18	4	蛇紋岩	(7.7)	3.45	1.9	(77.1)	磨製石斧
98	三SZMa 8	サキゾノ I—4 S331 E32	9号住周溝部	白雲母片岩	9.6	9.0	1.55	219	円盤状石器
99	三SZSe 21	サキゾノ I—5	4	角閃片岩	10.75	7.8	2.2	307	〃
100	三SZSf 6	サキゾノ I—1	暗キョ内	花崗岩質	(10.3)	(14.2)	8.8	(1,754)	石皿
101	三SZSf 7	サキゾノ I—6～8	表土直下	白雲母片岩	(15.8)	(25.2)	7.5	(4,060)	〃
102	三SZSf 3	サキゾノ I—8 S331 W2	2 下	花崗岩質	(14.5)	(14.1)	7.6	(1,832)	〃
103	三SZSe 28	サキゾノ I—1	暗キョ内	花崗岩	(7.5)	(7.7)	6.1	(456)	すり石
104	三SZSe 27	サキゾノ I—1	暗キョ内	花崗岩	12.5	8.6	4.4	746	〃
105	三SZSe 40	サキゾノ I—1 S272 E14	3	花崗岩	13.6	9.3	4.9	928	〃
106	三SZSe 35	サキゾノ I—5 S329 E58	3 下	玄武岩	(6.8)	10.5	5.0	(585)	〃
107	三SZSe 39	サキゾノ I—10	表採	玄武岩質	13.2	8.2	6.2	1,108	〃
128	三SZSm 9	サキゾノ I—4 S331 E34	3 上	黒曜石	2.8	1.8	0.52	(3.1)	サイドブレイド
129	三SZSm 21	サキゾノ I—5 S333 E46	住内	黒曜石	(3.0)	2.0	0.5	(2.15)	〃
130	三SZSa 115	サキゾノ I—15 S350 E24	ピット内	黒曜石	(1.25)	1.6	0.28	(0.65)	〃
131	三SZSd 30	サキゾノ I—5 S333 E56	4	黒曜石	3.0	(1.5)	0.6	(2.6)	〃
132	三SZSi 5	サキゾノ I—4 S331 E22	3 上	黒曜石	(1.6)	1.5	0.37	(0.75)	石錐
133	三SZSi 7	サキゾノ I—4 S329 E32	3 下	黒曜石	(1.8)	2.6	0.43	(1.6)	〃
134	三SZSi 8	サキゾノ I—5 S333 E38	3	黒曜石	(1.7)	1.4	0.34	(0.9)	〃
135	三SZSa 87	サキゾノ I—1	表採	黒曜石	(3.1)	(1.6)	0.45	(2.15)	石匙
136	三SZSm 19	サキゾノ I—4 S331 E24	2 下	黒曜石	6.2	2.4	1.1	14.7	削器
137	三SZSd 38	サキゾノ I—1 S272 E14	3 下	黒曜石	(2.4)	1.15	0.43	(1.35)	〃
138	三SZSd 39	サキゾノ I—5 S326 E0	3 上	安山石	(4.1)	3.45	0.52	(9.7)	〃
139	三SZSp 17	サキゾノ I—1 S272 E4	pit	黒曜石	2.25	(1.9)	0.48	(3)	つまみ形石器
140	三SZSp 5	サキゾノ I—7 S326 W28	4	黒曜石	3.6	(2.8)	0.65	(6.7)	〃
141	三SZSp 13	サキゾノ I—5 S333 E52	3	黒曜石	1.9	(2.0)		(1.45)	〃
142	三SZSp 4	サキゾノ I—8	表土	黒曜石	(1.2)	1.3	0.33	(0.6)	〃
143	三SZSp 15	サキゾノ I—5 S333 E44	4号住	黒曜石	(2.05)	2.0	0.44	(1.7)	〃
144	三SZSl 14	サキゾノ I—4 S331 E24	2 下	黒曜石	1.9	2.75	2.	13.05	石核

表8　石橋・サキゾノ出土石鏃一覧表

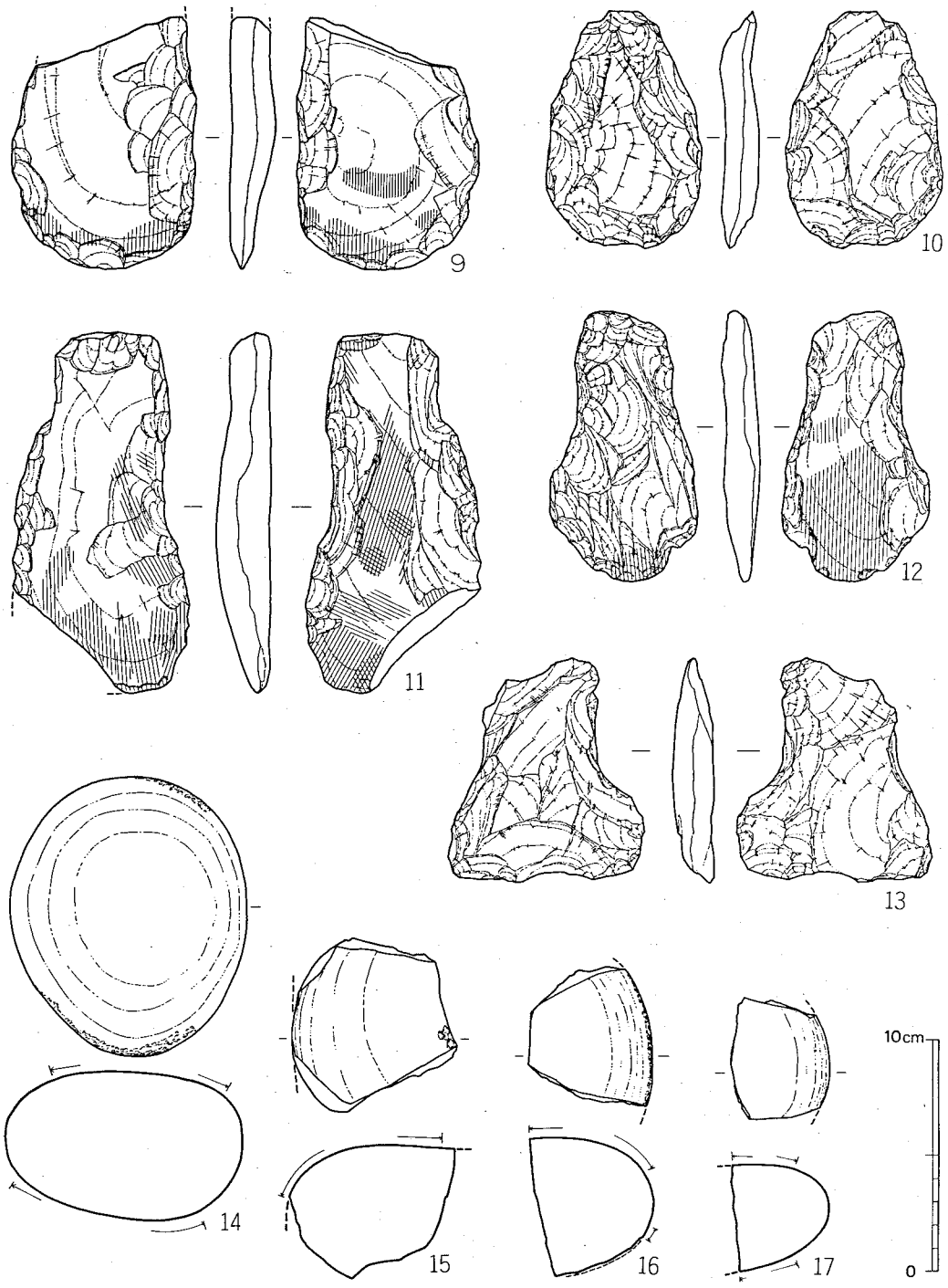
〔単位mm・g（　）は現存値〕

No.	地区	層	材質	長	有効長	幅	厚	重	形態	挿図No.
三IBSa 39	II－11 S327 E64	3	黒曜石	(12.1)	(8.2)	13.8	2.5	(0.45)	先欠 C1a	
40	〃 S333 E64	3　上	〃	18.1	13.2	13.8	2.9	0.6	完 C2b	39
41	〃 S329 E64	中央ピット内	〃	(15.2)	(9.0)	15.6	2.6	(0.6)	先欠 C1a	
42	〃 S327 E62	3	安山石	(36.4)	(29.3)	(17.6)	5.7	(2.8)	片欠 C1a	31
43	〃 S327 E62	3　下	黒曜石	(22)	18.2	15.3	3.0	(0.75)	脚欠 C1a	32
44	〃 S329 E62	3下面	〃	(15.1)	(11.6)	15.0	3.2	(0.65)	先・脚欠 C1a	
45	〃 S331 E66	北東土壙	〃	(23.3)	(18.6)	(18.6)	3.1	(1.4)	〃 C2b	
46	〃 S331 E66	3	〃	(25.1)	(17.3)	(17.5)	3.4	(1.1)	先・側面欠 C1a	
47	〃 S331 E66	3	〃	—	—	—	—	(0.8)	片のみ C ?	
48	〃 S329 E66	4	〃	29.8	29.4	19.8	3.9	2.2	完 B1b	26
49	〃 S329 E66	小溝内	〃	(25.6)	(25.6)	(18.4)	5.6	(2.05)	基欠 ?1b	
50	〃 S329 E66	溝上層	〃	(24.2)	(23.8)	19.6	3.5	(1.8)	先欠 B1b	25
51	〃 S327 E66	溝下層	安山石	(25.9)	(25.6)	20.9	3.7	(2.1)	〃 B1b	
52	〃 S327 E66	溝下層	〃	(30.0)	(20.6)	16.6	2.9	(1.3)	〃 C1a	30
53	〃 S323 E68	布留土器溜	黒曜石	25.3	18.8	21.4	5.0	1.8	完 C2b	40
54	〃 S325 E68	3　上	安山石	(21.2)	—	(31.0)	6.9	(4.3)	先欠 B1b	
55	〃 S335 E68	3　上	黒曜石	25.2	25.2	21.1	5.4	2.7	完 B1b	
56	〃 S335 E68	3　上	〃	25.7	19.0	(16.2)	4.4	(1.0)	片欠 C1a	33
57	〃 S327 E70	2	〃	21.3	13.1	16.8	3.4	0.9	完 C1a	
58	〃 S335 E74	4	〃	(18.7)	17.4	(16.1)	3.7	(0.85)	脚欠 C1b	41
59	〃	5号石棺墓壙内	〃	(19.7)	18.4	18.4	3.1	0.75	完 B1a	21
60	〃	6号　〃	〃	(20.5)	15.7	12.6	3.2	0.6	〃 C2a	38
61	〃	6号　〃	〃	19.5	19.5	14.3	3.5	0.8	完 B1a	22
62	〃	6号　〃	安山石	22.9	18.7	16.2	3.3	1.0	脚端欠 C 3	45
63	〃	8号　〃	黒曜石	21.2	17.0	14.7	5.0	1.05	ほぼ完 C1b	37
64 II－12	S333 E70	3　上	〃	(14.8)	(14.8)	(11.6)	(3.3)	(0.5)	先のみ ?1a	
65	〃 S333 E74	4　下	〃	(12.5)	(14.3)	(16.2)	4.3	1.0	脚欠 C1a	34
66	〃 S335 E74	3　上	安山石	28.0	24.0	(12.8)	4.8	(1.15)	½欠 C'1a	28
67	〃 S331 E76	4	黒曜石	(19.1)	(14.7)	12.9	3.7	0.8	脚欠 C1b	
68	〃 S333 E76	4	〃	(17.7)	(13.2)	(13.8)	1.9	(0.4)	先・脚欠 C 3	
69	〃 S331 E78	3　上	〃	24.9	22.1	16.6	2.3	0.9	完 C'1b	29
70	〃 S333 E78	4	〃	(21.2)	(18.3)	(14.2)	3.6	(1.0)	脚欠 C1a	
71	〃 S333 E78	4	〃	(20.5)	(13.2)	20.8	3.7	(1.2)	先欠 C1a	35
72	〃 S335 E78	3	〃	30.1	30.1	20.0	4.6	2.7	完 B1b	27
73	〃 S335 E78	4	〃	(21.0)	18.7	15.8	3.9	(1.1)	脚部欠 C2b	
74	〃 2号石棺西側	3　上	〃	(23.3)	(13.5)	(23.0)	4.3	(1.6)	先・脚欠 C2b	
75	〃 S331 E80	3	〃	27.2	27.0	18.5	3.7	1.8	完 B1a	23
76	〃 S331 E80	3	〃	(27.1)	(19.2)	(16.4)	2.9	(1.05)	脚欠 C1b	36
77	〃 S329 E82	3	〃	17.6	12.6	(12.9)	2.7	(0.55)	〃 C1a	
81 II－11	S327 E64	3下面	〃	(12.9)	(10.5)	(10.7)	(1.3)	(0.2)	先・片欠 C 3	
88 II－11・12		表　採	〃	(17.2)	(17.2)	(17.0)	2.7	(0.55)	胴のみ ?1b	
91 II－12	S335 E74	4	〃	(20.0)	(14.7)	(21.0)	3.6	(0.95)	先欠 C 3	42
92 II－11	S329 E68	3　上	〃	23.2	23.2	16.3	4.0	1.4	完 B1b	24
93 II－12	S329 E80	3	〃	(23.0)	(23.0)	15.8	4.0	(1.2)	先欠 B1b	

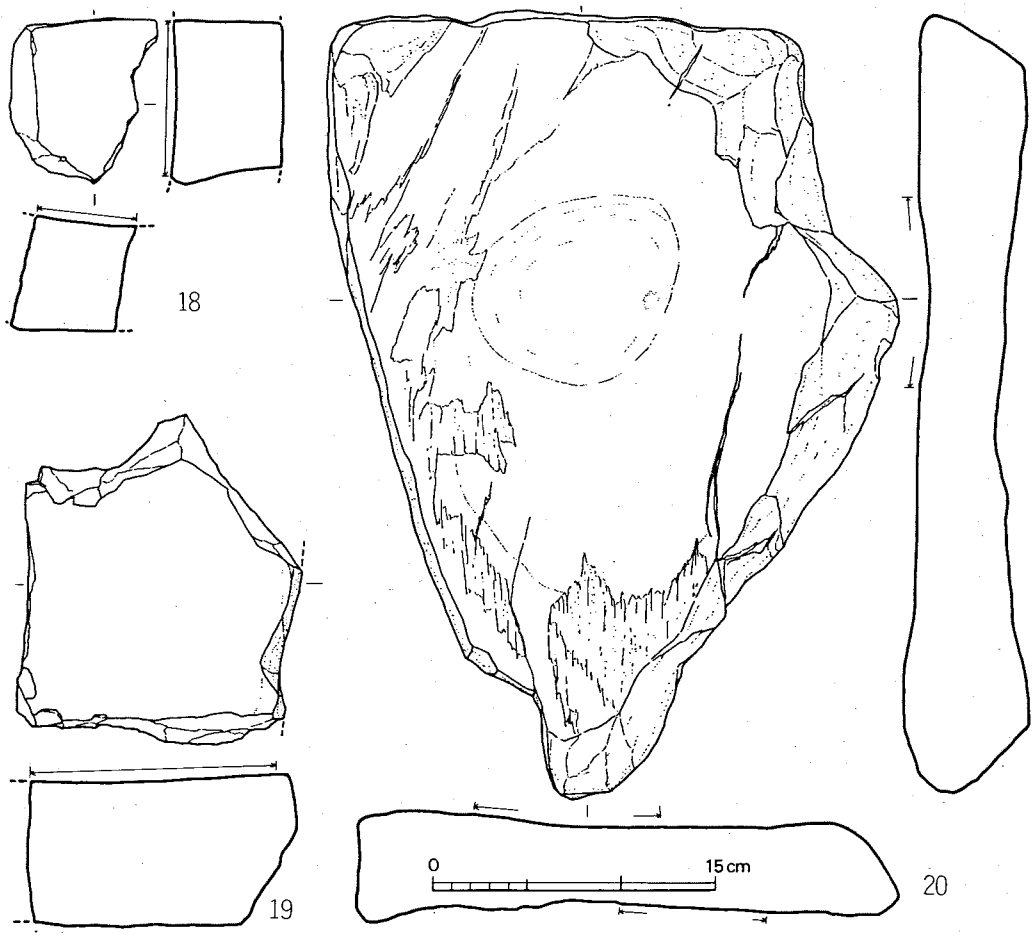
No.	地区	層	材質	長	有効長	幅	厚	重	形態	挿図No.
三IBSa 94	II－12 S331 E74	4	黒曜石	28.2	19.4	(20.5)	5.4	(1.8)	片脚欠 C 3	43
95	〃 S331 E70	石棺掘り方	〃	(23.0)	19.6	(15.8)	3.5	(1.1)	脚欠 ?1b	
96	II－11 S331 E70	4	〃	(24.5)	22.1	12.0	3.4	(0.8)	一部欠 C 3	44
97	〃 S335 E68	溝　内	〃	20.0	14.6	(16.5)	2.6	(0.7)	片脚欠 C1b	
98	II－12 S329 E70	凹　み	〃	(19.5)	(19.5)	(15.1)	(4.5)	(0.9)	先端のみ ?	
99	〃 S331 E78	3　上	〃	(28.9)	(20.4)	(20.0)	4.1	(1.8)	先・片脚欠 C 3	
100	II－11 S327 E70	2	〃	(20.1)	(16.3)	(12.7)	4.6	(0.9)	先端・脚欠 C1a	
101	II－12 S335 E78	4	〃	(13.2)	(9.6)	(14.1)	3.2	(0.6)	胴部のみ C 3	
102	II－11 S331 E64	4	〃	(8.9)	(5.8)	(16.8)	2.9	(0.5)	〃 C1a	
三SZSa 22	I－6・7 S324 W28	4	〃	24.2	23.0	16.8	3.9	1.4	完 B1b	109
23	〃 S324 W26	4	〃	27.7	23.6	21.6	4.4	1.85	〃 C'1b	114
24	I－8 S331 E2	2	〃	(16.0)	(13.2)	11.9	3.0	(0.6)	先端欠 C'1a	113
25	〃 S333 E8	3　上	〃	(27.9)	(16.9)	(17.7)	3.0	(1.05)	先端・片脚欠 C 3	126
26	I－4・5	3　上	〃	17.5	12.2	(16.1)	2.9	(0.6)	片脚欠	
27	I－4 S331 E22	3　上	〃	—	—	—	—	0.7	片脚のみ C ?	118
28	〃 S331 E28	3　下	〃	(24.9)	18.0	(17.8)	4.1	(1.0)	脚部欠 C1a	
29	〃 S333 E28	3	〃	(30.8)	(30.8)	18.0	4.0	(2.35)	ほぼ完 B1b	110
30	〃 S333 E32	3	〃	(19.0)	13.7	(13.1)	2.9	(0.6)	脚部欠 C2b	131
31	I－4・5 S331 E38	3	安山石	(21.2)	19.3	17.0	3.3	(0.95)	一部欠 C'2a	117
32	I－4	6号住東土壙	黒曜石	(31.4)	(25.8)	(19.4)	4.5	(2.3)	先端・脚部欠 C2b	122
33	〃	7号住フク土	〃	(24.8)	(16.4)	(18.3)	4.3	(1.6)	〃 C1a	
34	I－5	1号住フク土	〃	(21.7)	(18.8)	16.4	3.1	(1.3)	先端欠 C 3	125
35	〃 S330 E46	3　上	〃	43.5	43.5	25.8	7.0	4.9	完 B1a	108
36	〃	2号住　床面	〃	14.8	14.7	16.4	4.0	0.85	〃 B1b	
37	〃 石敷西側	4	〃	(17.7)	(12.0)	18.2	3.5	(1.1)	先端欠 C1a	
38	〃 S331 E60	3	〃	(26.6)	(21.7)	21.7	5.5	2.2	ほぼ完 C'1b	
79	〃 S333 E56	4	〃	(23.5)	(18.6)	20.6	3.0	(1.4)	先端欠 C'1b	116
80	〃 S333 E56	4	〃	(17.3)	15.9	(12.6)	(4.1)	(0.8)	脚部欠 C1b	
82	〃 石敷西側	4	〃	22.9	21.0	19.2	4.8	2.0	完 C'1b	
83 I－1	S270～272 E10	3	〃	(12.6)	(12.6)	13.3	2.0	(0.3)	先端のみ ?1b	127
84	〃 S276 E12	住　フク土	〃	21.7	21.7	17.9	4.6	1.5	完 B1b	112
85	〃 S274 E6	3	〃	17.9	12.5	15.2	2.7	0.6	〃 C2a	121
86	〃 S278 E0	3	〃	17.0	15.8	11.6	2.8	0.5	〃 C'1b	115
103	〃 S272 E12	3	〃	26.1	18.1	(21.0)	4.5	(1.7)	片脚欠 C2b	124
104	〃	表　採	〃	—	—	—	4.0	(0.9)	片	
105 I－7		1号住南西部	〃	(18.8)	(13.2)	(16.6)	3.9	(1.1)	先・脚欠 C2b	123
106 I－4	S333 E32	Pit　2	〃	(28.1)	(28.1)	16.8	4.7	(2.3)	先端欠 B1a	
107	〃 S331 E34	3	〃	22.5	17.8	(18.0)	5.4	(2.1)	片脚欠 C1b	
108 I－4・5	S331 E30	2	〃	(28.9)	(28.3)	18.5	5.6	(2.7)	先端欠 B2b	
109 I－4	S333 E30	7号住　床面	〃	(20.5)	(20.5)	15.1	3.7	(1.0)	〃 B2b	
110 I－5		4号住　床面	〃	(29.8)	(20.8)	(23.0)	4.9	(2.8)	先端・片脚欠 C1a	
111	〃 S331 E40	1号住	〃	26.6	22.1	(14.4)	2.8	(0.8)	片脚欠 C1b	119
112	〃 S329 E52	3	〃	14.1	7.3	16.5	3.2	0.5	ほぼ完 C1b	120
113	〃 S331 E50	2号住北東張出Pit	〃	(17.5)	(17.0)	(12.4)	3.9	(0.8)	胴部のみ ?1b	
114 I－4・5		表　採	〃	(23.4)	19.4	14.1	3.5	(1.0)	一部欠 C1a	
116 I－1	S274 E12	3　下	〃	18.9	16.4	12.1	3.5	0.6	完 C'1b	
117 〃	S272 E4	3　下	〃	(15.0)	(11.9)	(16.4)	2.2	(0.6)	先端・脚欠 C1b	



第136図　石橋II－11・12出土石器実測図①（1/3）



第 137 図　石橋II－11・12出土石器実測図②（1/3）

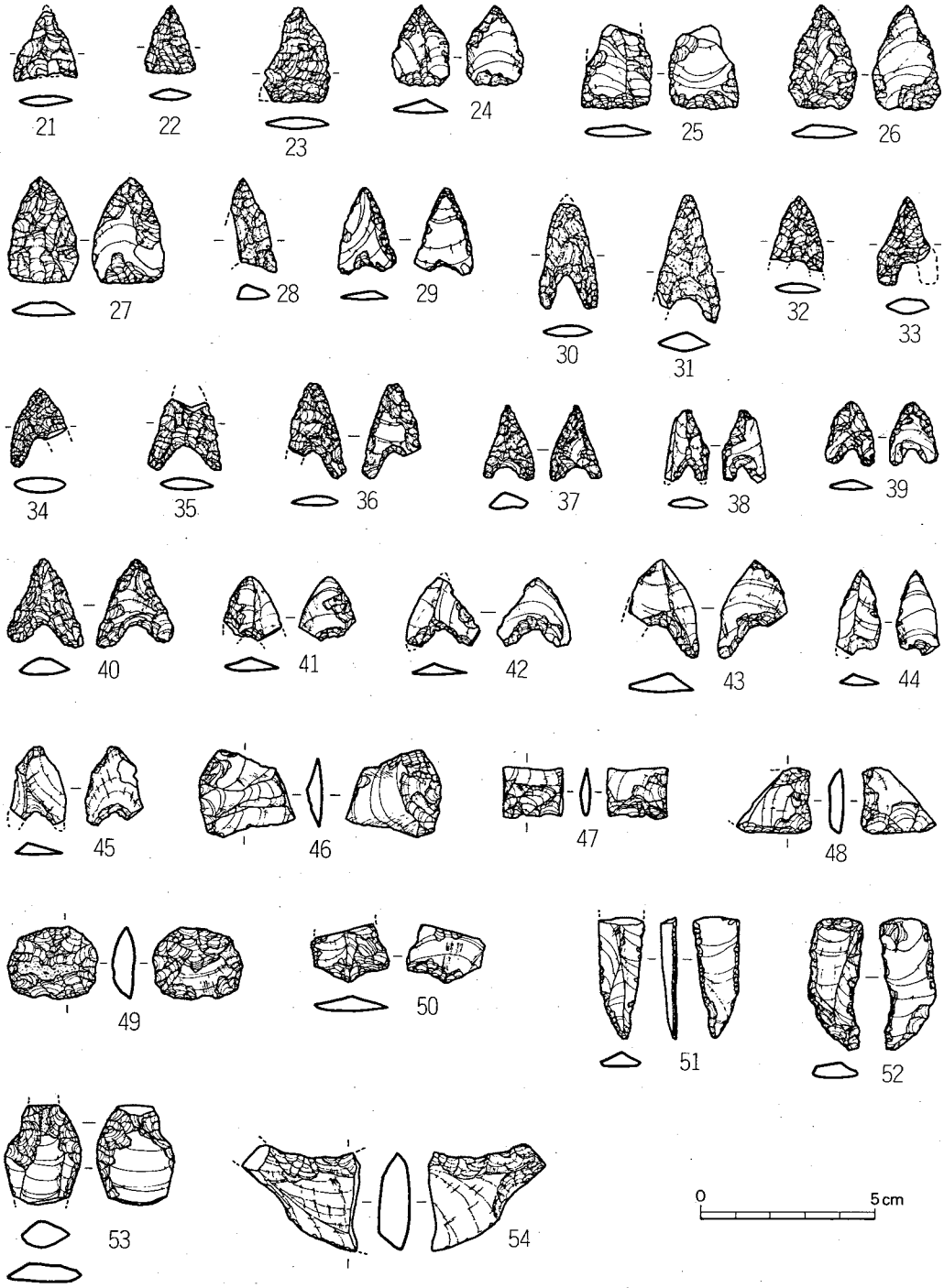


第138図　石橋II－11・12出土石器実測図③（1/4）

すり石(14～17)　14は玄武岩製の完形品で上下両面共使用によって磨耗し,周縁部に若干敲打痕が残る。15は玢岩製の破片の上面が顕著に磨耗するが，中央部にあたる位置に敲打痕がみられる。16は花崗岩質の石材を使用しており側縁に敲打痕が残る。17も側縁に敲打痕の残る破片で，玢岩を用いている。

打製石鏃(21～45)　53点出土しており，計測値は一覧表に示す。6点が安山岩製である他は全て漆黒色の色調を呈し透明度が深い黒曜石製。平基式（B類)・わたぐりの浅い凹基式(C'類)・わたぐりの深い凹基式（C類）があり，凸基式（A類）はない。これらの資料のうち25点を図示しているが，製作方法によって幾つかに細分することができる。

21～27はB類。21～23は不定形剝片を素材とし全面に調整剝離が及ぶもの（B1a類)。24は不定形剝片を素材とし調整剝離されるが主要剝離面を残す（B1b類)。25は石刃状剝片を素材とし打面側を鏃の先端にして調整されるもの(B2a類)。26・27は石刃状剝片を素材とし打面側を鏃



第 139 図　石橋II－11・12出土石器実測図④（1/2）

の基部にして調整されるもの（B2b類）。

28・29はC′類で，28は1a類，29は1b類に細分できる。

30～45はC類。30～35は1a類，36・37は1b類，38は2a類，39～41は2b類に細分できる。42～45は石刃状剝片の先端部をそのまま先端部としたもので，調整剝離は基部に集中し，先端部や両側縁にほとんど加工がみられない，いわゆる狭義の剝片鏃（C3類）だが，45は安山岩製である。

なお当該地区出土資料中には，鋸歯鏃や研磨痕を有す打製石鏃はみられない。

切目石錘(77)　石材は扁平な白雲母片岩で，長さ8.6cm，有効長8.1cm，幅3.3cm，厚さ0.5cm，重さ27.6gを測る。長軸の両端に切目が施されている。

サイドブレイド(46～49)　黒曜石の不定形剝片・石刃状剝片を素材としており，剝片の打瘤部に調整剝離を加えて，打瘤の厚みを減じている。

石　錐(50)　黒曜石剝片の打面を整形調整して剝片の打瘤部の厚みを利用した刃部になる。

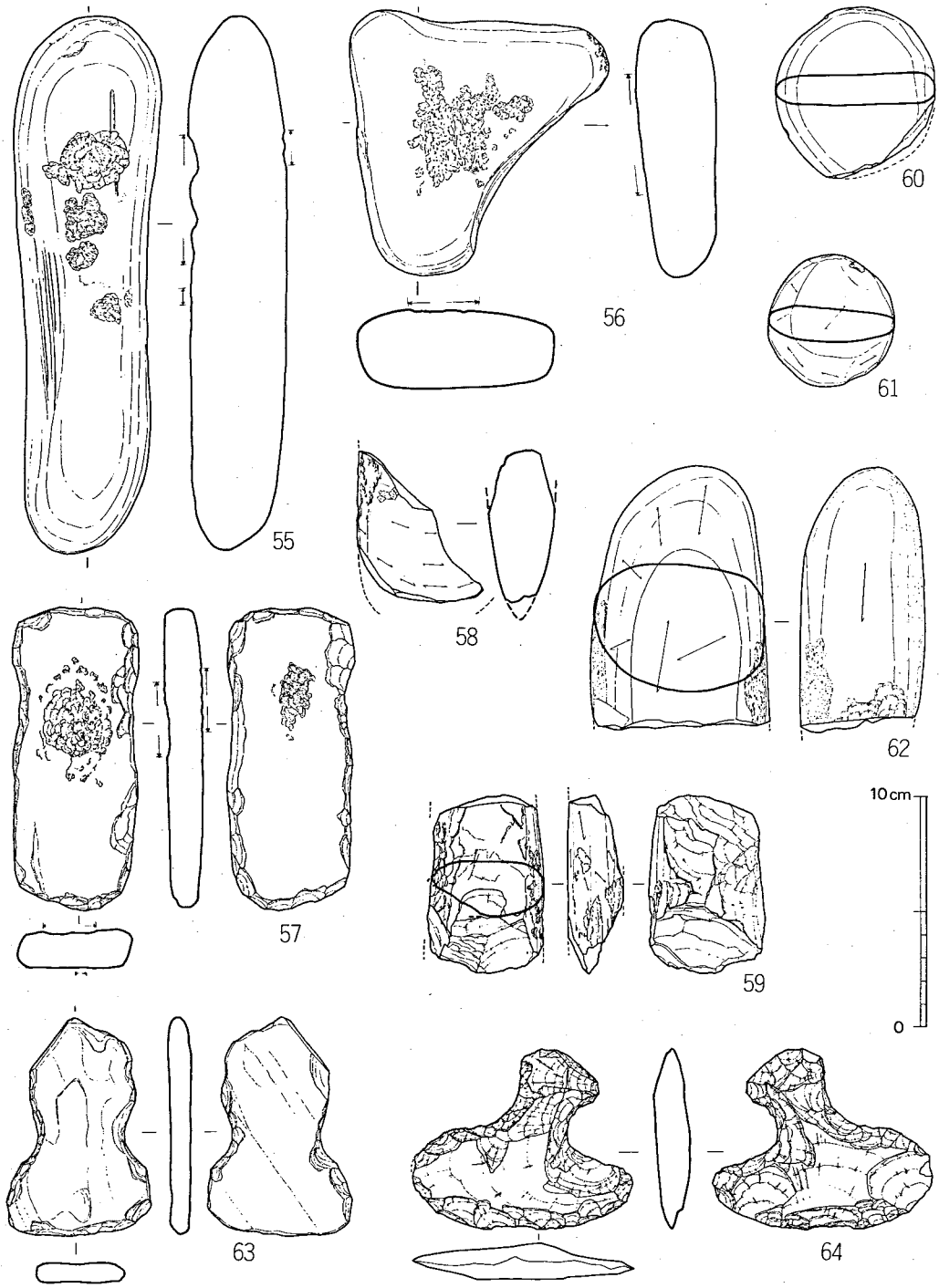
削器・掻器類(51～54，64・65)　51～53は黒曜石石刃状剝片を素材として剝片の両側縁に調整を加えて刃部にしている。54・64・65は安山岩製。54は石匙のつまみ部の破片であろうか。64は完形の石匙で，65は石刃状剝片を用いた削器。

磨製石斧(58・59)　58は蛇紋岩製の磨製石斧刃部破片だが刃部端は欠失する。よく研磨され，刃部に沿った方向の研磨痕が観察できる。59は玄武岩質の磨製石斧胴部破片で扁平な長楕円形の断面を有す。重量はそれぞれ74.5g・121gを測る。

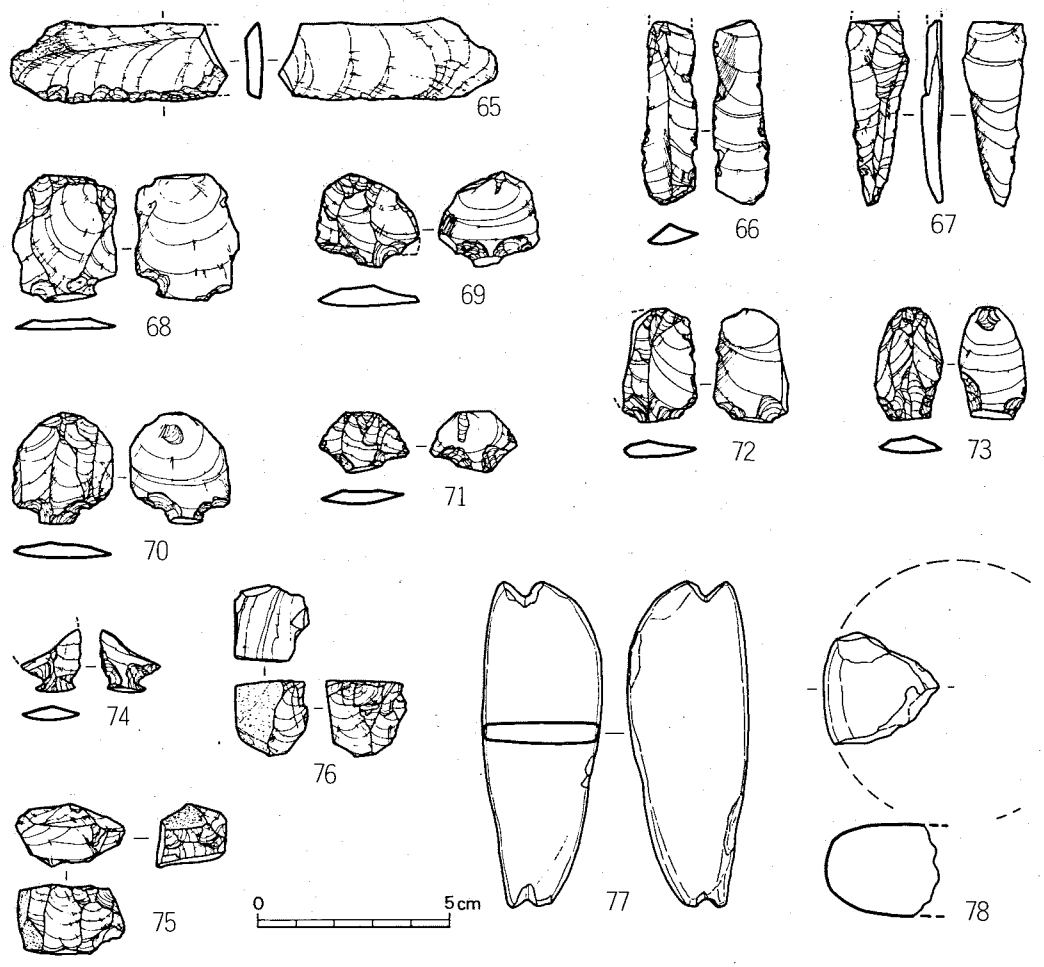
敲　石(55～57)　いずれも軟質な石材を用いている。55は白雲母片岩の断面楕円形になる棒状で，握り易い形状を呈している。側面は磨耗しており，図の左側肩部に数条の乱れた刻線がみられる。やや扁平な部分を敲打面にしている。56は緑灰色系の色調を呈す白雲母片岩で，平面三角形の扁平な素材は掌に納まり易い。図示する面のみ敲打痕がみられ，他の面は幾分か磨耗している。57も白雲母片岩を用いており，周縁を調整して細長く平らな板状になし，端部よりの平坦面を敲打に使用する面としている。

この敲石が掌中に納まったり，手に握られて使用されたと仮定すると，対象物の敲打される面はそれほど広くないもので且つその部分が突出した状態かそれに類するものでなければ効果がないと思われる。軟質な材を用いていることは掌に与える衝撃を和げる為と解せられ，対象物は堅固なものである可能性が高い。

研磨痕のある石器(60～62)　60・61は白雲母片岩製で，周縁を打欠調整したあと研磨によって円盤状に仕上げられており，それぞれ121g・74.6gを測る。なお図示していない資料中にも打欠調整の段階のものがある。62は，泥岩質の石材で，半欠資料だが，棒状を呈しており研磨されているが，図示する面の反対側は剝落が進んでおり研磨の状況は不明。すり石の一種とも考えられる。重量802gを測る。



第140図 石橋出土石器実測図⑤ (1/3)



第141図　石橋出土石器実測図⑥（1/2）

石刃状剝片(66)　黒曜石の縦長な剝片で，基部を欠失しているが，現在長48.2㎜，幅14.6㎜，厚さ5.8㎜，重量4ｇを測る。主要剝離面と背面での剝離方向は同一方向である。なお67は石橋Ⅰ—2地区出土資料。

つまみ形石器(68～74)　黒曜石石刃状剝片の両側縁に抉りを入れて最も幅狭になる部分で折断したもので，折断の際に力の加わった方向では，68・69は，主要剝離面側から背面側へ，他は主要剝離面側に向っている。

石　核(75・76)　両者共黒曜石の剝片を剝ぎ取った残核だが，2～3㎝の大きさのもので76に残された剝離面では剝離方向が一定しているが75では乱れている。重量は両者共に9.2ｇ。

その他の石器(63)　花崗閃緑岩に近い状態の角閃片岩製で，板状の素材の両側縁に抉りが設けられている。また下端面は敲打した痕跡がある。抉入部は若干磨耗している。重量81.3ｇ。

土器品　78は土製紡錘車の破片であろうか。残存する周縁から直径７cm前後の円盤形になるものと推定できる。胎土に砂礫・長石・金雲母粒を含み気泡も生じているが，暗黄褐色に焼成されている。厚さ2.5cmで重量は17.1ｇ。

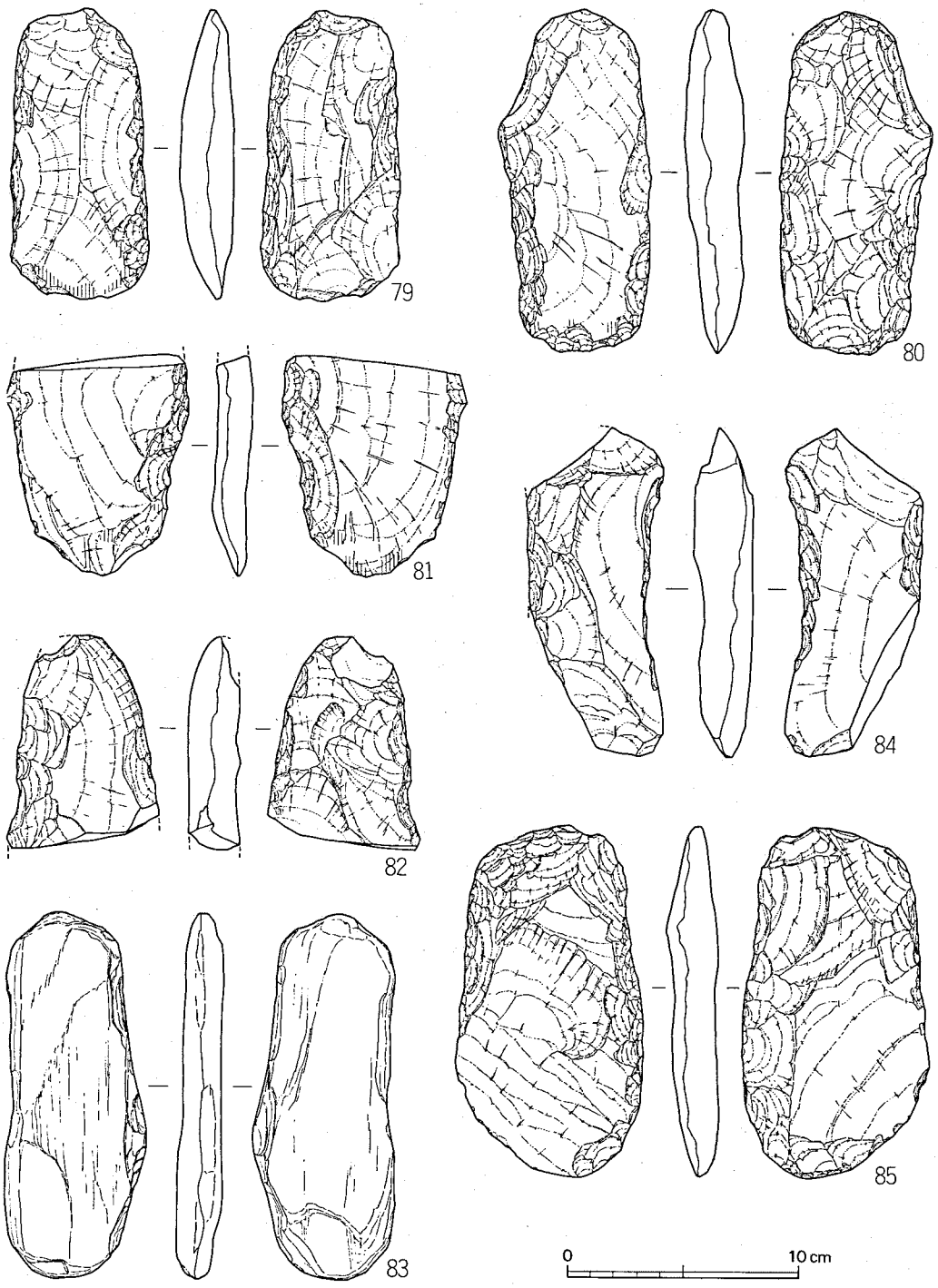
サキゾノ地区出土の石器，土製品(図版57・58，第142～146図)

打製石斧(79～89)　79，80は短冊形で厚みのあるもの，81～83は短冊形だが厚みがそれほどないもの，84は短冊形に含めうるが胴部両側縁に抉りが入りやや分銅形に近い形を呈するもの85～87は幅広な短冊形で刃部幅が広めになるため撥形に近い形を呈している。83は角閃片岩質の石材，86は花崗岩質の石材を用いている他は玄武岩を素材としており，85・87以外横剝ぎの手法がみられるものの素材はやや厚めになっている。なお79～81・89の刃部には主軸方向の磨耗痕がみられる。79・83・88・89は縄文住居跡内出土資料。

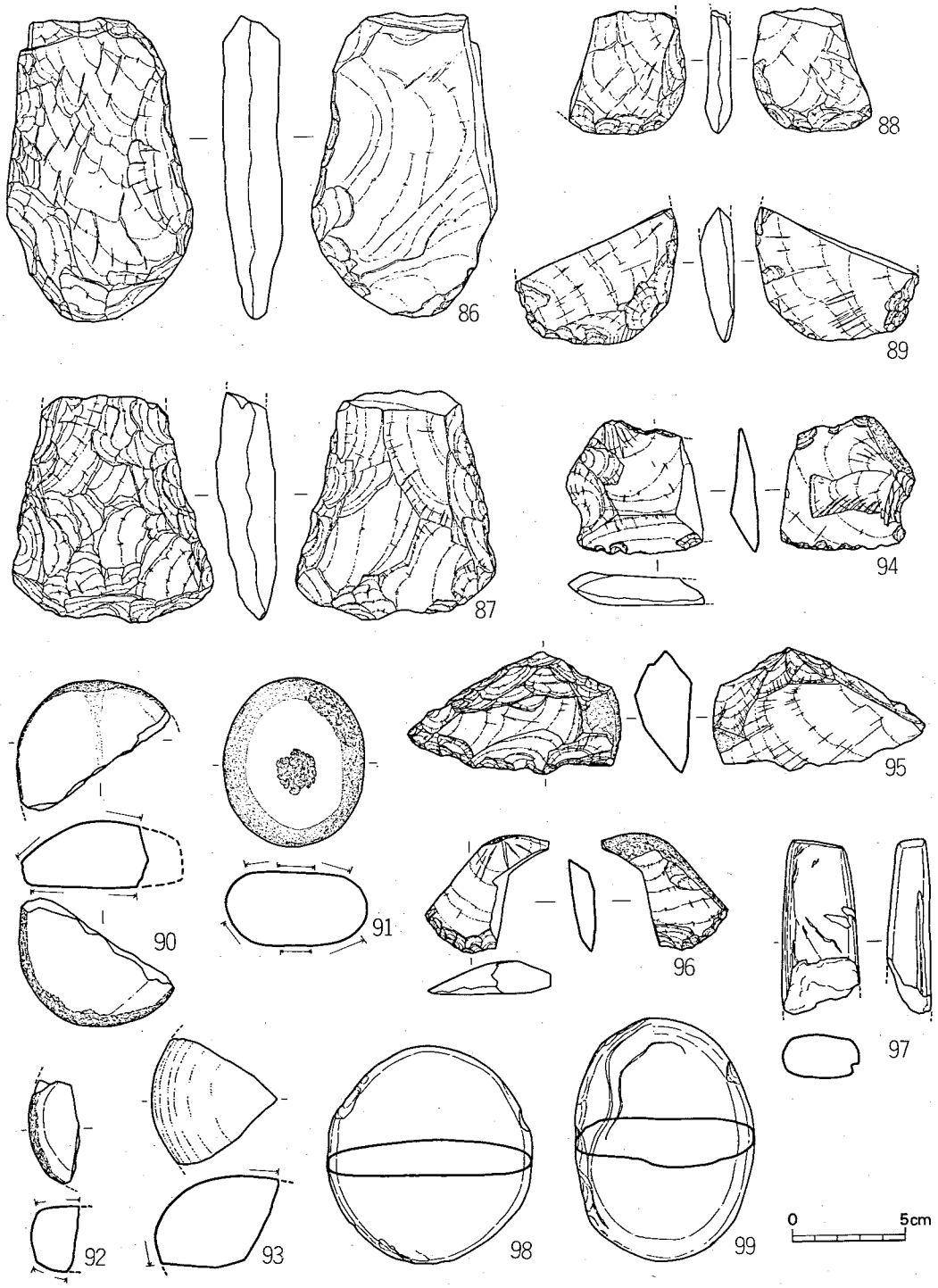
石　皿(100～102)　いずれも使用面とみられる中央部が凹む形状で，100・102は花崗岩質の石材を101は白雲母片岩を用いている。Ⅰ－１地区出土の100は裏面もやや磨耗する破片で重量1,754ｇ。101は裏面が反り皿状になっているが約¼程度残存する破片で重量4,060ｇ，102は側面，裏面共に凹凸が残る破片で1,832ｇを測る。101・102はⅠ－６～８地区出土。

すり石(90～93・103～107)　90～93・106はⅠ－４・５地区出土で，90・92は縄文時代住居跡から出土している。90は角閃玢岩，91は花崗岩質，92は砂岩，93・106は玄武岩製。103～105はⅠ－１地区出土資料で全て花崗岩製。107はⅠ－10地区表採資料で紫色を呈す玄武岩質の石材を用いている。90～92・104の周縁や105・106の周縁の一部には敲打調整が残っているがいずれもやや扁平な円礫で，91・104～106では扁平な面の中央部に敲打によるアバタ状の凹みがみられる。扁平な面はよく磨耗しており，この種の石器は敲く機能とする機能を兼ね備えていると言えよう。107は，長楕円形の円礫で長軸の両端が磨耗によって平坦面となっており，体部中央部は指をかけ易い状態に敲打調整で凹まされて既に磨耗が進んでいる。他のすり石が礫の扁平で広い面になる部分を使用面とするのに比し，これは長軸両端の狭い部分を使用面としており，使用面に打点のある剝離面がみられることを勘案すれば，すり石というよりはむしろ石杵といった表現が妥当な石器である。

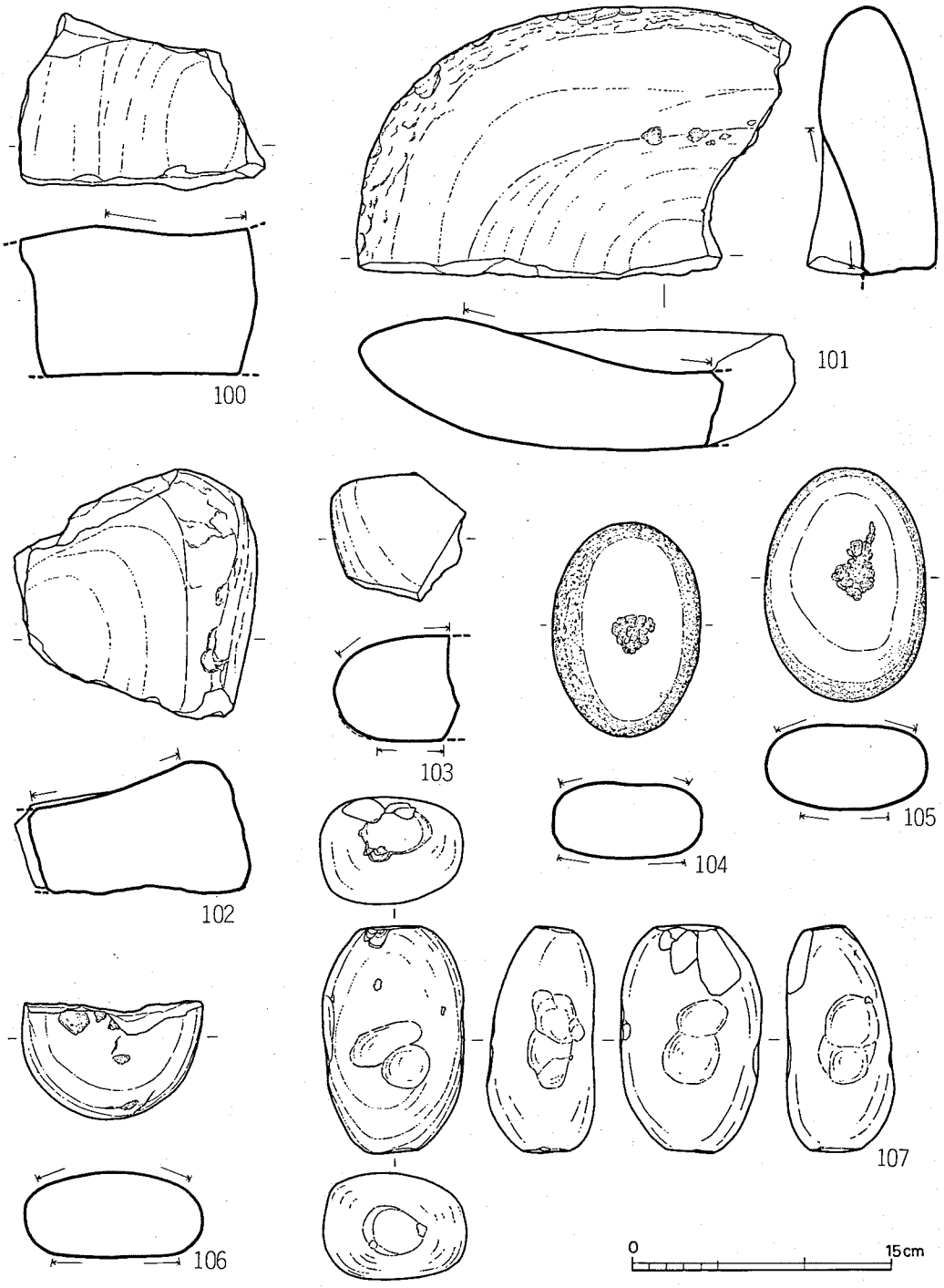
打製石鏃(108～127)　サキゾノⅠ－１・Ⅰ－４・５，Ⅰ－６～８地区からは38点の打製石鏃が出土している。石橋Ⅱ－11・12地区よりは量的に少ないが，石橋地区と併せて三雲遺跡出土打製石鏃の大半を占めている。石橋地区同様に分類すると，108はB1a類，109～112はB1b類，113はC′1a類，114～116はC′1b類，117はC′2a類，118はC1a類，119・120はC1b類，121はC2a類，122～124はC2b類，125・126はＣ３類に区別できる。しかし一様に分類した平基式のＢ類では例えば108や110のように長めの二等辺三角形になるものと，111のように正三角形に近い形のものとは区別すべきかと思われる。石材は117の安山岩製１点を除いて全て黒曜石製である。なおいわゆる鋸歯鏃や研磨痕のある石鏃は出土していない。



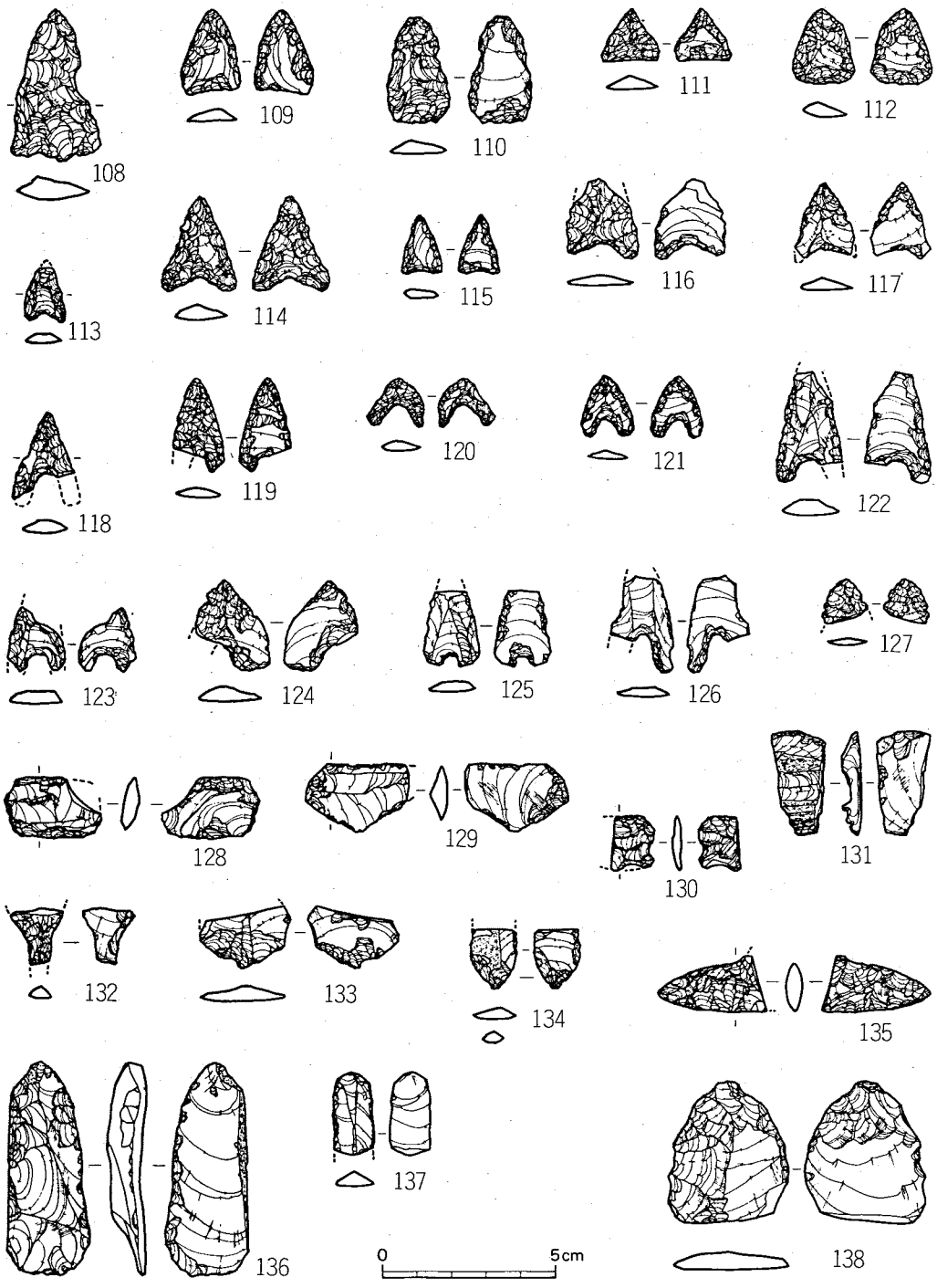
第 142 図　サキゾノ出土石器実測図①（1/3）



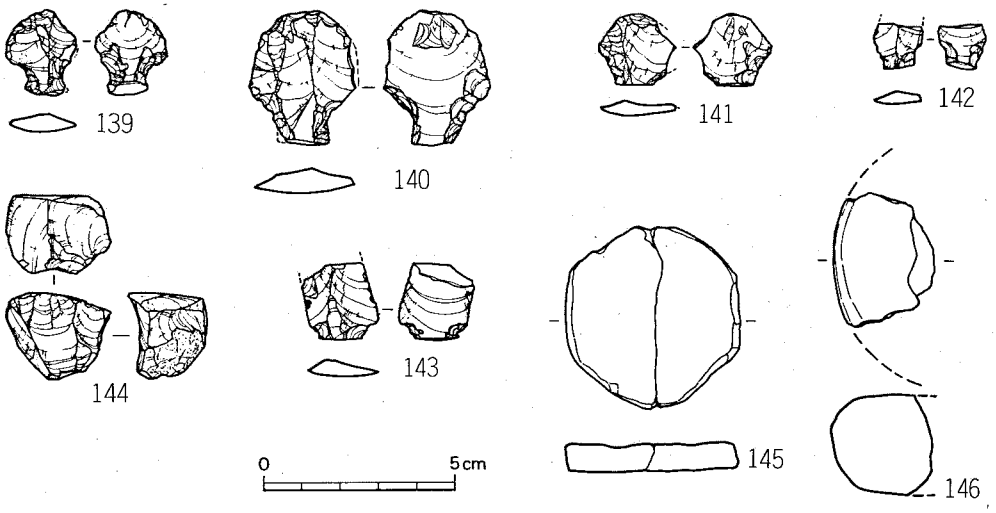
第 143 図　サキゾノ出土石器実測図②（1/3）



第 144 図　サキゾノ出土石器実測図③（1/4）



第 145 図　サキゾノ出土石器実測図④（1/2）



第146図　サキゾノ出土石器実測図⑤（1/2）

サイドブレイド(128～131)　黒曜石石刃状剝片の打瘤部を調整加工によって削り落しており，129では斜行する擦痕がみられる。

石　錐(132～134)　いずれも黒曜石製で破片資料，133・134は石刃状剝片の打瘤部を調整して刃部としており厚みを保っているが先端は鈍角になる。132は先端を欠失するが刃部が細長く伸びる種類のものである。

削器・掻器類(94～96，135～138)　94～96・138は安山岩製。このうち94・95・138は縦長の剝片を素材とし，側縁を刃部としているが，138は打瘤部に整形調整剝離を加えて厚みを減じている。96は横長剝片を素材として縁辺部を刃部としているが，剝片の打点がそのまま残っている。135～137は黒曜石製で，135は石匙片であろうか，136・137は石刃状剝片を用いて側縁部に刃部を形成している。

磨製石斧(97)　Ⅰ－4地区の第4層出土資料で蛇紋岩製の磨製石斧頭部破片で，長さ7.7cm幅3.4cm，厚さ1.4cmと細身で断面は隅丸長方形状となる，いわゆる小形磨製石斧の範疇に含めうる。重量77.2g。

円盤状の石器(98，99)　2点とも結晶片岩の板状の素材を用いている。98は白雲母片岩製で直径9～9.6cm，厚さ1.6cm，重量219g，周縁は処々に打欠痕が残るが磨耗する。99は角閃片岩製で長径10.8cm，短径7.9cmの楕円形を呈し厚さ2.2cm，周縁は敲打調整されているが磨耗している。重量307gを測る縄文時代住居跡出土資料。

つまみ形石器(139～143)　サキゾノ地区からは7点出土し5点図示している。黒曜石石刃状剝片の両側縁から抉りが入れられて折断されたもので，いずれも剝片の基部側。抉り部折断の際に加わった力の方向は，140が主要剝離面からである以外全て主要剝離面側に向っている。

石　核(144)　黒曜石の小さな石核で２～３cm角程度のものだが４面は自然面を残している。重量は13.05ｇを測る。

土製品　145はⅠ－４地区の第４層出土資料で，直径4.7～4.8cm，厚さ８mmの土製円板。胎土に砂粒，・角閃石・金雲母を含み良好な焼成で赤褐色を呈す土器片の周縁を打ち欠き整形したもの。重量19.6gを測る。器面はナデ調整の無文だが縄文後期の土器に似る。146はⅠ－1地区出土資料。厚さ2.6cm程度の扁平な形状になる破片で周縁の円弧からみて7cm前後の直径を有す円盤形になるものと思われる。細砂・長石・石英，金雲母等を胎土に含み細かな気泡があり，器面はナデ仕上げ。焼成は並で暗黄褐色ないしは暗灰色の色調を呈し，22.1ｇを測る。土製紡錘車片であろうか。

4　小　結

縄文時代遺構は弥生時代以降の削平を受けている確率が高いとはいえ，２基の埋甕遺構は口縁部を辛うじて残しており，埋甕使用土器の形状を知り得ることができた。また縄文晩期住居跡の検出は糸島地方で初現である。且つまた黄褐色系粘土層中からも検出される縄文土器・石器類は三雲遺跡群の中で目下のところ最もまとまった出土といえる。約48,000m²の石橋，サキゾノ地区のうち，東端部は遺構・遺物の出現する確率が低いとしても，残る部分のうち調査実施部分はほんの僅かな部分である。しかしながら当該地区内で殊に集中すると想定しうる区域は，石橋Ⅱの南西半分・サキゾノⅠの東半部であろう。周辺地区では仲田Ⅰ－14・16地区・加賀石Ⅰ－21～23地区に後・晩期の存在が確認できている他に顕著な例はない。

埋甕使用土器は粗製土器で，この種土器自体での時期決定を明確にし難いが，１号埋甕使用土器は直口縁状の器形で外面をカキナデ調整されており内面を幾分丁寧なナデ仕上げされることから，後期後半頃に属すとみられる。２号埋甕使用土器は口縁部に向って大きく広がる器形で内外面共ヘタナリ条痕が施されている等からみて，後期中葉北久根山式期～西平式期あたりに考えうるが，包合層出土土器が後述するように西平式以降であることからして西平式期の可能性が高いと考えている。

住居跡は，検出できたにもかかわらず石敷遺構下に重複しており，時間的に余裕のなかったことなどの制約があったために，全体の形状を明らかになしえなかったのは残念であった。しかし晩期前半期の土器を含み，埋土が細砂を若干含む黄褐色系の粘土であることは注意を要するであろう。

当該地区出土土器の分類では，第１類ａ～ｆを後期西平式土器の範疇に含めうる。細かくみれば，ａは丸味をもった山形口縁であるのに比してｃでは屈曲の稜が明瞭になり，平行沈線文様にａ・ｂとの差をみることができる。ｄに至っては屈曲の稜は外面に誇張されており，波頂部押点がＶ字形に深くなることに形態的な変化を考えうる。胴部破片では(e)の丸味を帯びた胴

部と(f)の稜をもって屈折するそれとの間は区別されるべきであろう。また口縁部・胴部文様帯に付される文様で，縄文や貝殻疑似縄文を用いた磨消縄文手法から，短沈線文にとって変ったり，省略したりする縄文消失化のような要素は，西平式の中にティピカルなものと三万田式に近いものとの差をみとめうるものであろう。

第2類に含めた平行凹線を有すものは三万田式～御領式期に考えているが，第1類g～i，第1'類は後期末の御領式～晩期初頭大石式期的な要素を含んでいる。また第3類，第4類は，糸島郡二丈町吉井広田遺跡出土土器(註1)にかなり類例をみるが，一応前者を御領式，後者は大石式に近いとみている。

第5類では，aの3条以上の沈線を有する鉢形土器は大石式あたりにあるが，コ字状に反転する文様例等は岩田式，滋賀里式といった本州島の土器の文様に近い要素があるようにも思える。cはタガ状口縁部が短くなり，内面が沈線に変化しているが，このような例は晩期大石式期でも新しい要素とみるべきであろうし，fの内面沈線例に近い。またdの真直ぐに広がった口縁部が屈折せずに内面に沈線を巡せている例もタガが沈線にとって替ったものと解しておきたい。なおeの口縁部内面が幅広く肥厚している例はd，fよりも古い形態でcに近いと考えている。第6類～第8類は，所謂粗製土器で，これらの中での先後関係は精製土器との共伴関係で整理していく必要があろう。先年調査した吉井広田遺跡出土土器での傾向をあてはめれば第8類は第7類より早く消失する手法ということになる。いずれにしても粗製土器は精製土器の幅である後期西平式期～晩期前半期の間におさまるものといえよう。

一方石器類では，打製石斧・石皿・すり石，打製石鏃・切目石錘等の生産活動に関わる用具がある。打製石斧は，玄武岩製が圧倒的に多く，形態では短冊形の体部が細めで肉厚な例が比較的優っている。石皿・すり石は，花崗岩・結晶片岩・玄武岩・玢岩等を用いているが，石皿のうちサキゾノ地区出土例は中凹みの形状となっており，石橋地区出土例では石棺材に転用される扁平大型なものもみられる。なおすり石は，別に分類した敲石と用途の上で趣を異にするが，敲く機能を兼ね備えており，また石杵と称すべき形状のものもある。

打製石鏃では，研磨面を有す石鏃等は出土しておらず，目下のところ三雲遺跡群では研磨された石鏃を出土している加賀石Ⅰ—21～23地区(註2)・柿木地区(註3)の時期までこの種の石鏃の出現を待たねばならない。

切目石錘は1点のみの出土であるが，東日本的な遺物の一つである。しかし打欠石錘等を含めても石錘が目下のところ三雲遺跡群全体に出土が少ない点は注目される。　　(小池)

註1　小池史哲「広田遺跡0区の調査」(『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会　1980)

註2　柳田康雄他「加賀石地区の調査」(『三雲遺跡』Ⅰ　福岡県文化財調査報告書　58，1980)

註3　本書第3章第3節に前述。

第５節　石橋地区の調査

１　はじめに

石橋地区の調査は，端山古墳の北側の東西道路が延長されて、サキゾノＩ－６・７・８・４・５を経由し，石橋II－11・12に達するもので，道路幅５ｍのトレンチ調査となった。実際に耕作土剥ぎを行ったところ，１・２号の石棺が露出する結果となった。この１・２号石棺を調査するために整地したところ，さらに石棺や甕棺墓が出土し，縄文土器片も含まれていた。この石橋II－11・12地区は，三雲遺跡群の東沿辺地区で，サキゾノ地区より１段低いこともあって遺跡範囲を線引したその線上にあたっていた。このため道路幅以外に，石棺群確認のため北側に拡張区を設定したところ，８号までの石棺墓とその祭祀遺構を確認した。これ以上拡張しても調査できないところから，土地改良区と協議の結果，設計変更をして石棺群を保存することとなった。確認調査で発見した石棺群とその付属遺構や検出されたその他の遺構は，そのまま調査することとし，それ以下にある弥生や縄文の遺構には手を付けないことにした。

石橋Ｉ－２地区は，圃場整備の表土剥ぎで発見された甕棺群である。当初の発掘計画にもなく，削平地区にも当っていなかったので，表土剥ぎは業者にまかせてあった。ところが，不用意に表土剥ぎを行ったために，甕棺群の上部を削平し，甕棺群が露出する結果になった。したがって，この地区の調査は，この露出した甕棺群と土器群の処理を行うことであったが，甕棺墓も小範囲に６基となり，他地区の調査が優先していたために調査を中断することが多かった。

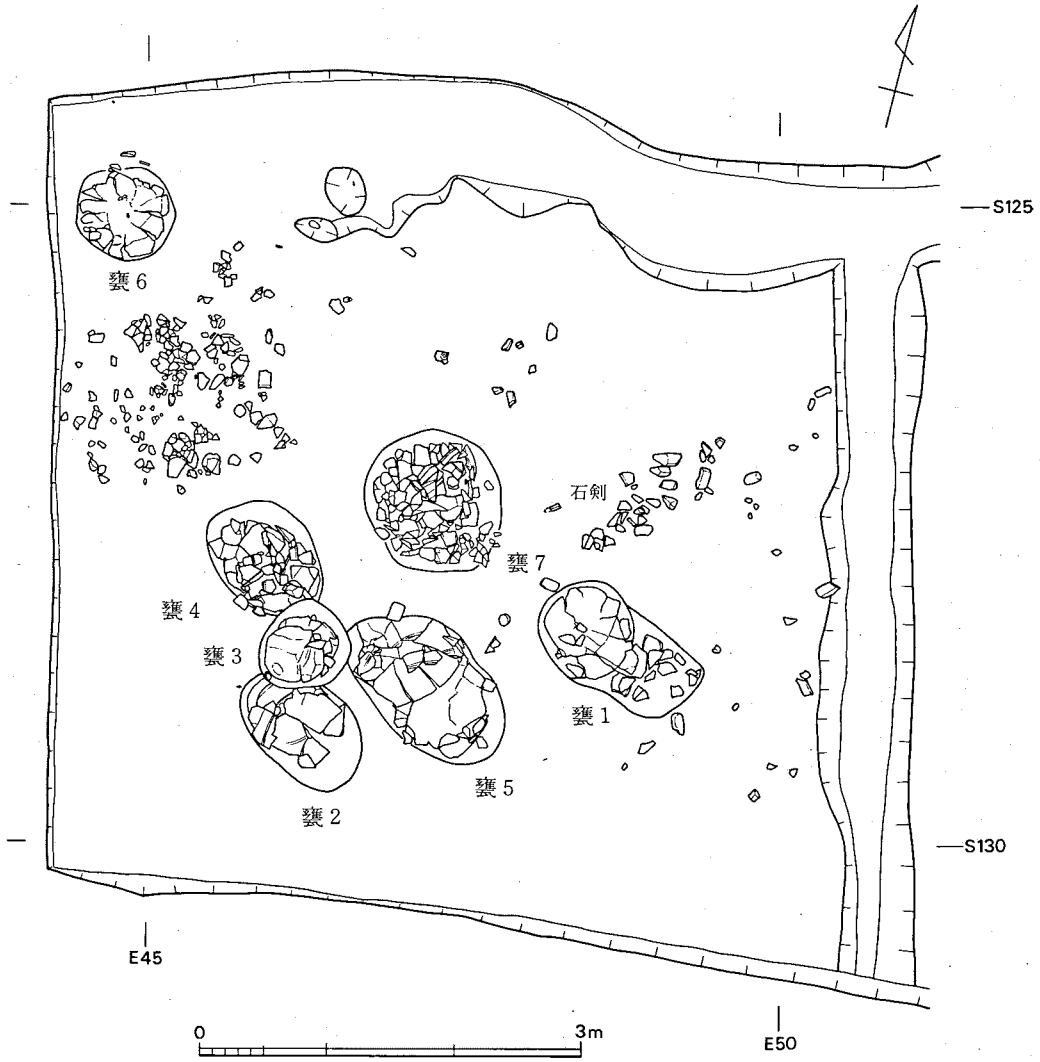
（柳田）

２　弥生時代の遺構と遺物

石橋Ｉ－２からは，甕棺墓が７基確認され，磨製石剣の副葬されている例があった。なお，調査区の西側寄りで出土した多くの土器片の中には，弥生時代前期～古墳時代前期の破片と共に，大略接合できる甕棺の破片も出土しており，既に破壊された甕棺墓のものと考えられる。

(1)　石橋Ｉ－２の甕棺墓

検出された７基の甕棺墓の遺存状態は悪く，７号甕棺墓の下甕打欠部と上甕頸部の組み合せ部で検出された磨製石剣の鋒と接合する身は，墓壙外で20cm離れて出土するなど，削平が著し



第147図　石橋Ⅰ－2遺構配置図（1/60）

い。甕棺墓の出土状態と各甕棺の製作技法を前に説明し，その時期的特徴はまとめて後述する。

1号甕棺墓（図版60－1，第148図）

上甕は大きく削平をうけているが，床面に2個の石を両側から敷き込んで安定を保たせており，これによって口頸部から肩上位までは原位置にあった。これに他の破片を接合後の実測図の肩部は直立気味なものではなく，直線的に内傾するものであるが，断面図に示された埋置角度からも直立気味なものとはならない。

上　甕　器内面は，口縁部はヨコナデを施す。口縁部に粘土帯を付した後で頸部までヨコナデを施す。肩部は上位にタタキのアタリ痕を残し，中位は横方向，下位は斜方向のナデを施す。

器外面は，口唇部の上下にヘラ様のものでシャープな刻み目を施し，口頸部はヨコナデ。沈線の上位から下は縦方向のヘラ様のナデを施す。復原状態は，図示の⅛ほどで，反転図である。

下　甕　器内面は，最大径よりやや下までを丁寧に指押えし，以下胴部は丁寧なナデと思われるが磨滅が著しい。底部はナデが丁寧である。器外面は，磨滅が著しいがヘラ研磨は施していない。底部は厚手で，丁寧なナデで若干上げ底気味である。なお，沈線は浅いが丁寧に仕上げている。復原状態は，図示の⅓ほどで，反転図である。(図版64－１，第151図)。

２号甕棺墓(図版60－２，第148図)

３号甕棺墓から墓壙の一部を切られている。上甕は遺存せず，下甕の胴下位以下は原位置では出土しなかった。

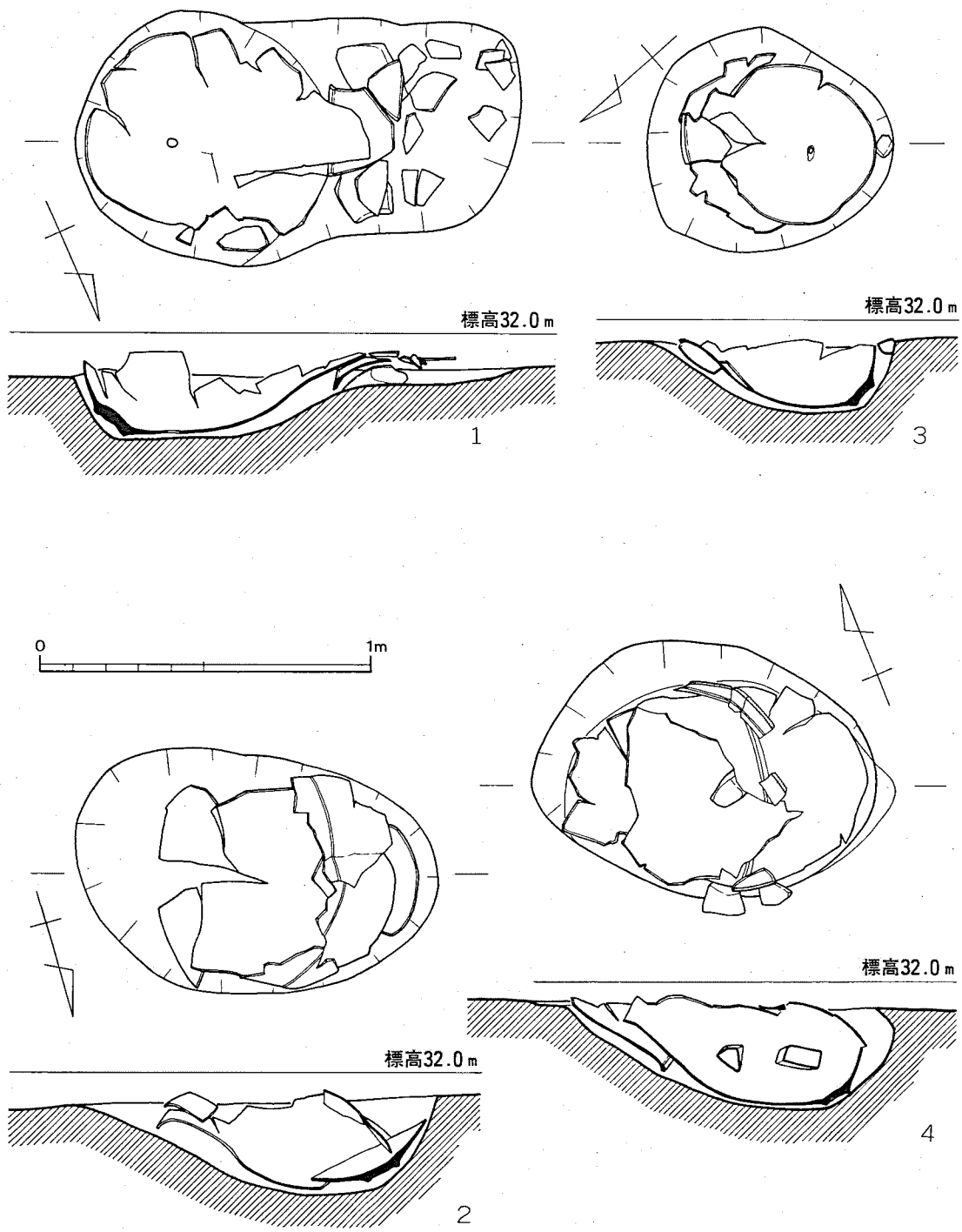
下　甕　器内面は，口縁部をヨコナデし，口頸部は指先で横方向にナデる。以下胴部下位までタタキのアタリ痕を残すが，頸部のその凹凸は特に著しいために，一部ヘラ様のもので調整している。胴部のそれは浅く，頸肩部では器外面よりも明瞭な稜を有す。底部は指先で強くナデるのみである。器外面は，口縁部はヨコナデで，屈折部から沈線部までは斜方向のヘラ様のナデを施す。この沈線の下から胴部下半までは全面にタタキ仕上げのままで，その著しい頸部下位を横断面図で示した。頸部上位の沈線は，このタタキ前に施したものがこれによってつぶれたためにヘラ様のものでナデ消した後で，再度２条を施しているが，一部に前のものが残っている。頸肩部の沈線も，タタキで以前のものが波線上に大略残ったままの状態で，同様に施したものであるが雑なもので一部に段差を生じている。底部との屈折部は，底部の安定を修正して，新たに粘土を一周して付した結果，若干上げ底気味になるが，その接合面は雑である。復原状態は，良好である。(図版64－２，第150図)。

３号甕棺墓(図版61－１，第148図)

２号・４号・５号甕棺墓のいずれの墓壙をも切っていた。上甕部の掘り方は削平されていたが，下甕は口縁部の一部が残っており，打ち欠かれていないことが確認できた。

上　甕　器内面は，丁寧なナデを施す。器外面は，一部に斜方向のハケ目を残すが，ヘラ研磨を施す。復原状態は，図示の⅛ほどである。

下　甕　器内面は，口縁部上面に粘土帯を一周させ，ヨコナデを施す。口頸部の屈折部は指先で押えて，縦方向にナデる。頸部はヘラ様のもので丁寧にナデる。頸肩部の屈折は，それぞれを指で押えて縦方向にナデるために，若干の稜を呈す。胴中部までは押えのままであるが，穿孔部ではナデ，下位のみ強いヘラ様のナデを施す。底部は指押えのままである。なお，頸肩部の胎土接合面は明瞭に残っている。器外面は，口縁部から沈線部まではヨコナデである。以下胴部の穿孔部までは横方向の分割ヘラ研磨を施す。底部近くからこの穿孔部までは縦方向のヘラ様のナデを施し，下位にそのアタリ痕を認める。口唇端部の刻み目は上方のみで，浅い。復原状態は，図示の½ほどで，反転図である（図版64－３，第150図)。



第148図 石 橋Ⅰ－2 甕棺墓実測図①（1/20）

4号甕棺墓(図版 61－2，第148図)

3号甕棺墓に切られている。上甕は，口縁部近くまでが直線的に立ち上がる器形を呈すためか，他の甕棺に比べてより深くまで下甕に覆せていた。

上　甕　器内面は，口縁部のみヨコナデを施し，頸部は雑に縦方向にナデたままである。胴部はヘラ様のもので斜方向にナデる。器外面は，口縁部のみヨコナデし，口頸部以下は斜方向のヘラ様のナデを施す。復原状態は，図示の½ほどである。

下　甕　器内面は，口頸部をヨコナデ・頸部を横方向のナデを丁寧に施し，胴部はナデている。器外面は，頸部上位の沈線下までをヨコナデし，以下はナデを施すがヘラ研磨は認められない。沈線はいずれもシャープである。復原状態は，良好である。(図版65－1，第150図)

5号甕棺墓(図版62－1，第149図)

3号甕棺墓に切られている。上甕の胴部では，40×20×10cm大の大きい石を床面を掘って敷き込んで安定を保たせている。

上　甕　器内面は，口縁部はヨコナデが丁寧で，頸部以下はナデを施す。胴最大径部位が大きく凹む。器外面は，口縁部はヨコナデを認めるが，頸部以下は磨滅して不明である。沈線・刻み目共に浅い。復原状態は，図示の½で反転図である。

下　甕　器内面は，頸部はナデが雑で指押え痕を残し，胴部は横方向に丁寧にナデる。底部は指で押えてナデている。器外面は磨滅が著しいが，口頸部の沈線付近はヨコナデ・胴部のそれは横方向のヘラ様のナデを施している。ヘラによる研磨は現状では認められない。復原状態は良好である。(図版65－2，第151図)。

6号甕棺墓(図版62－2，第149図)

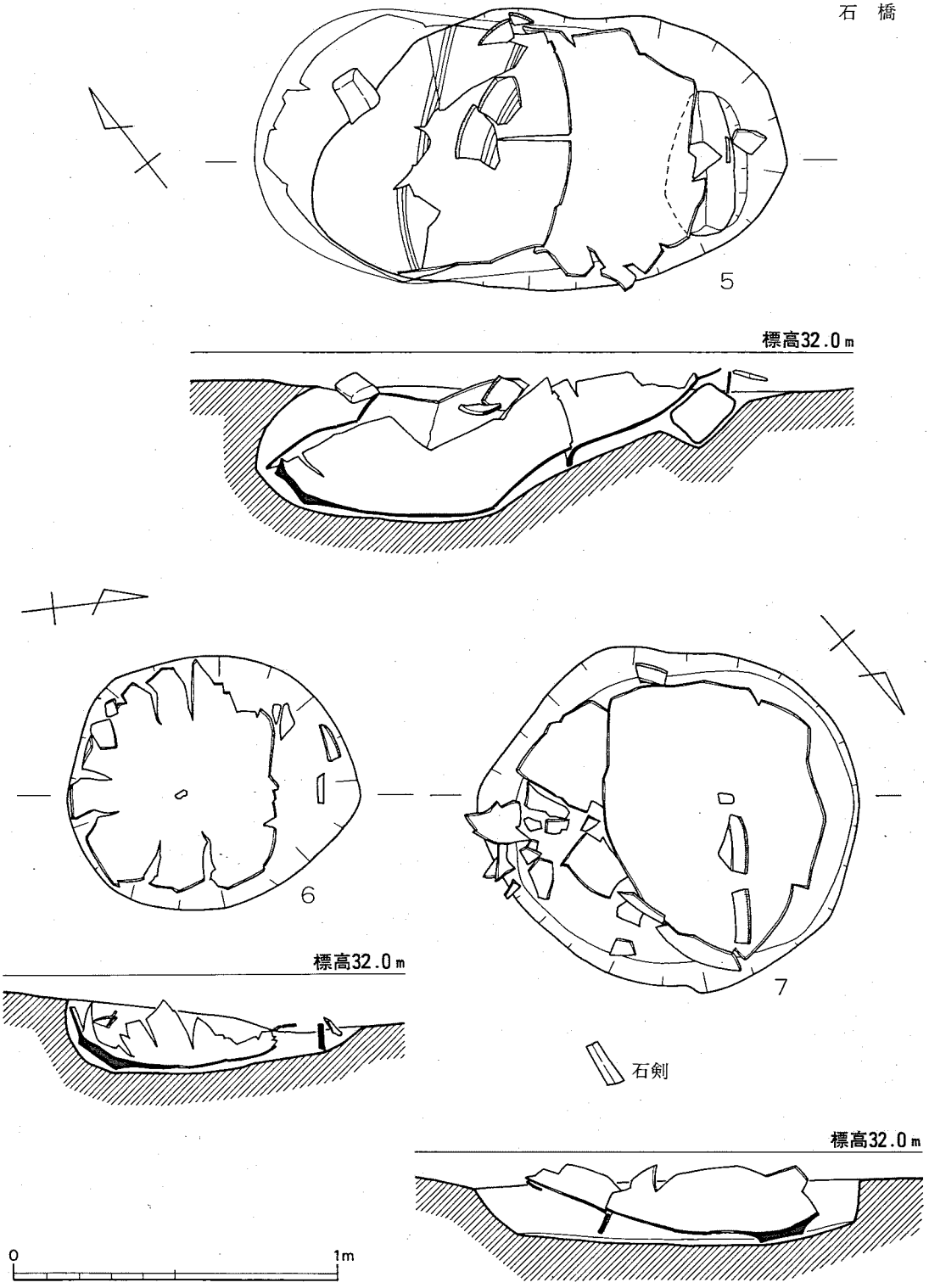
検出された7基の甕棺墓中で，特に削平が著しく，墓壙も不明瞭である。墓壙の北寄りで口縁部と底部の破片が出土したが，6号のものであるかどうかは不明である。

下　甕　器内面は，磨滅にて不明。器外面は，胴部に横～斜方向の密なハケ目を一部に残し，全体に横方向にヘラ研磨を施している。しかし，これは雑に行っているだけで，胴下半部は横方向の浅いタタキ痕が残り，下位では右斜上方向の深いタタキのままである。なお，このタタキは丸棒状のものである。復原状態は，図示の½弱で反転図である(図版64－4，第150図)。

7号甕棺墓(図版63－1，第149図)

他の甕棺の墓壙とやや異なった床面プランで，下甕の一部だけを横穴に挿入したものか。なお上甕は口縁部内面に粘土帯を付し，口唇部に刻み目を施すが未整理である。

下　甕　器内面は，頸部は横方向のヘラ様のナデを雑に施す。頸肩部は胎土接合の段を一周して残す。胴中部はナデる。下半部はヘラ様のナデ痕を多く残す。器外面は，斜～縦方向のヘラ様のナデを最下位まで施す。沈線下では，器外面にまで胎土接合面を残し，その下方ではヘ



第149図　石橋Ⅰ－2 甕棺墓実測図②（1/20）

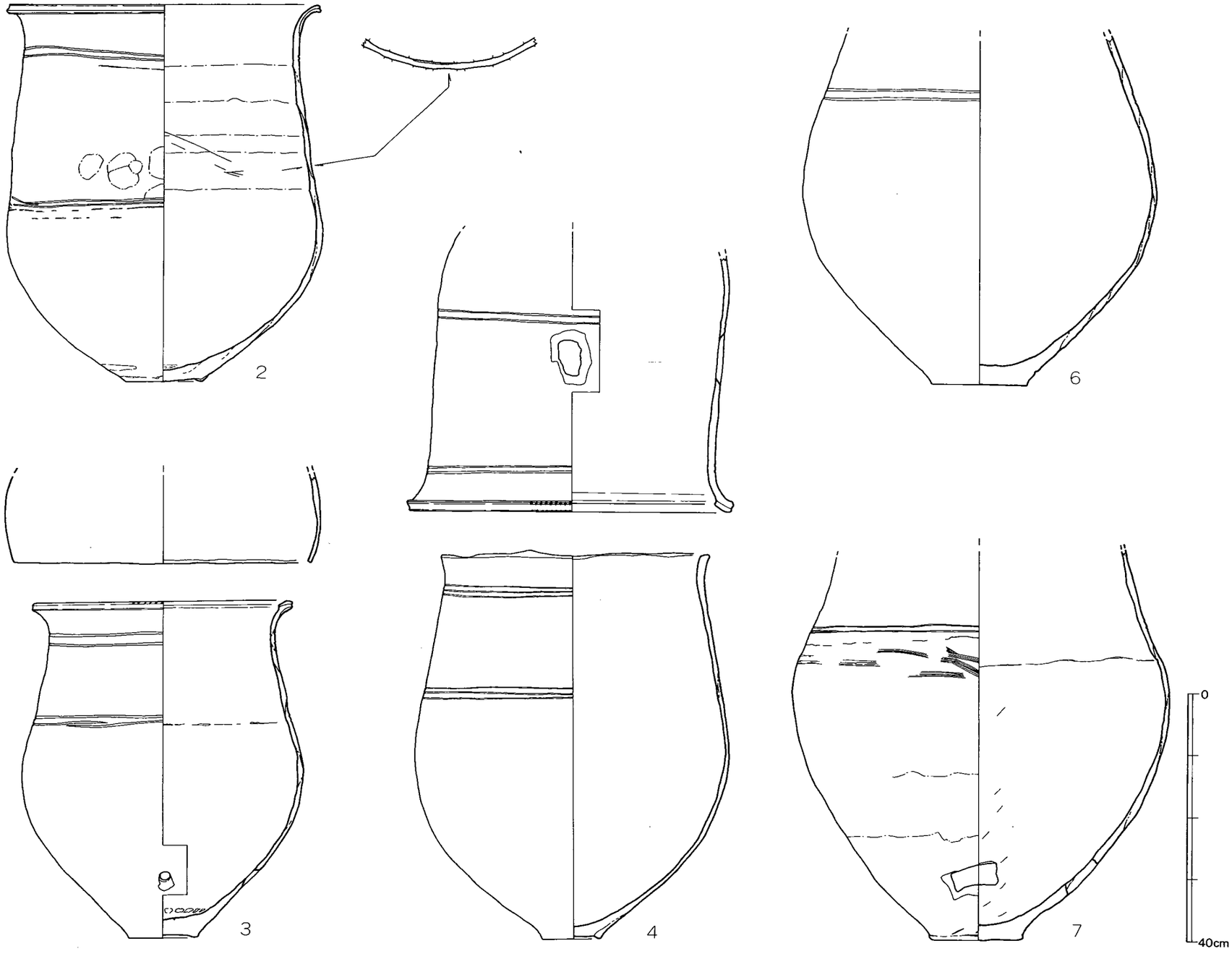
表9 石橋Ⅰ－2 出土甕棺墓一覧表

甕棺番号	方向〔傾斜〕	組合せ方	上甕〔打欠部〕 / 下甕〔打欠部〕	口径〔打欠径〕	最小内径〔打欠径〕	胴部最大径	底径	器高〔現存高〕	穿孔部の高さと位置	胎土	焼成	色調〔黒斑部位〕
K1	S66°E〔約42°〕	覆口	壺	68	59			〔48.0〕		大きめの砂粒を少し含む	良	内面褐色・外面暗褐色
			壺〔口頸部〕		〔54.6〕	60.0	12.5	〔71.9〕	0 胴下部	砂粒を多く含む	普通	内外面共に茶褐色〔胴部に対峙して2ヶ所〕
K2	S74°E〔約25°～40°〕											
			壺	50.5	42.0	51.0	12.3	61.0	無	大きめの砂粒を含む	良	内外面共に茶褐色〔肩部～胴部に対峙して2ヶ所〕
K3	N42°E〔約40°〕	覆口	壺〔胴部〕		〔46.8〕	51.0		〔14.1〕		砂粒をやや多く含む	良	内外面共に茶褐色
			壺	41.8	34.6	45.4	11.0	54.4	0 胴下半部	砂粒を多く含む	良	内外面共に褐色〔胴中部と胴下部に2ヶ所〕
K4	N22.5°E〔約43°〕	覆口	壺	52.0	34.6	47.5		〔40.0〕		砂粒を多く含む		内外面共に褐色～淡褐色〔頸部沈線下〕
			壺〔口縁部〕	〔39.7〕	38.9	50.8	9.9	〔62.5〕	無	大きめの砂粒を多く含む	良	内外面共に褐色〔口縁～底部と対峙して胴沈線下〕
K5	S52°E〔約31.5°〕	覆口	壺	65.8	54.5	68.4		〔58.3〕		小さめの砂粒を多く含む	普通	内外面共に褐色〔肩沈線下と対峙して肩沈線上〕
			壺〔口縁部〕	〔56.5〕	〔55.5〕	76.1		〔78.1〕	無	小さめの砂粒を多く含む	普通	内外面共に褐色～淡褐色〔胴上半と対峙して肩沈線部〕
K6	N65°W											
			壺〔口頸部〕		〔45.5〕	76.1		〔78.7〕	無	小さめの砂粒を多く含む	不良	内面淡褐色・外面茶褐色〔沈線下と底部〕
K7	N50°W〔約25°〕	覆口	壺									
			壺〔頸部〕		〔45.6〕	60.9	14.7	〔63.0〕	0 胴下部	小さめの砂粒を含む	普通	内外面共に暗褐色〔沈線部から胴中部〕

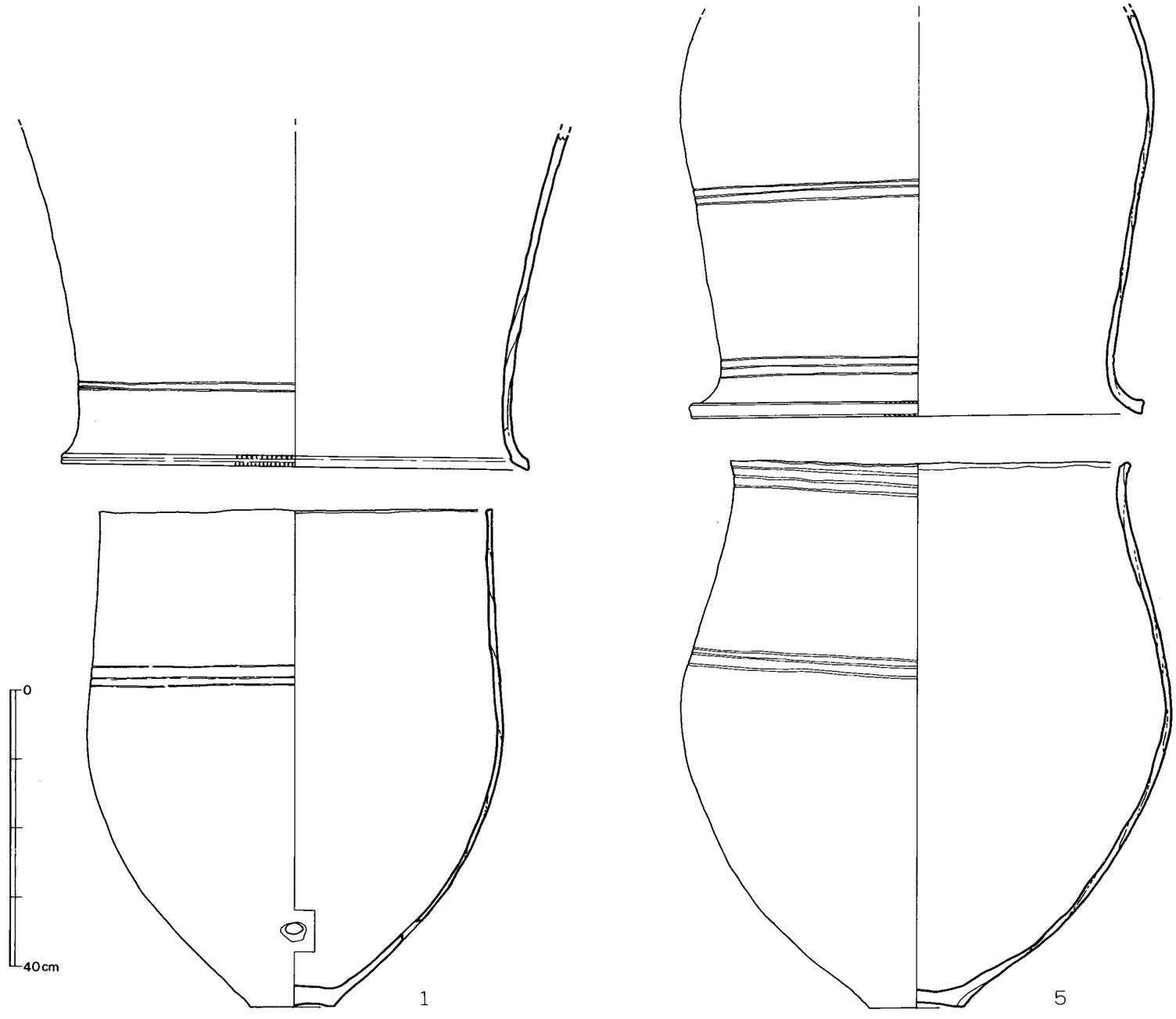
註 穿孔部の高さとは，埋置棺体の最下位からの測定値（単位cm）

石橋Ⅱ－8 出土甕棺一覧表

甕棺番号	方向〔傾斜〕	組合せ方	上甕〔打欠部〕 / 下甕〔打欠部〕	口径〔打欠径〕	最小内径〔打欠径〕	胴部最大径	底径	器高〔現存高〕	穿孔部の高さと位置	胎土	焼成	色調〔黒斑部位〕
K1	S3°E〔約28°〕	呑口	甕〔口縁部〕		〔21.0〕	27.0		〔23.8〕		小さめの砂粒を少し含む	良	内外面共に，胴上半部茶褐色。胴下半部暗茶褐色。
			壺	41.0	23.8	52.2		63.1	7.0 底部	小さめの砂粒を含む	やや不良	内面暗黒色 外面茶～暗褐色



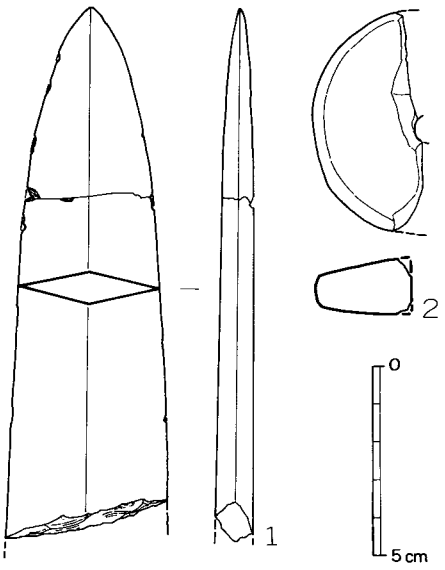
第150図 石橋Ⅰ－2 甕棺実測図①（1/8）



第151図 石橋Ⅰ－2 甕棺実測図②(1/8)

ラ様のナデ後に雑に密なハケ目を施している。なお，胴下半部2ヶ所に波線状に図示したものは，ヘラ様のナデによって認められる微細な稜である。沈線の断面はシャープで，ヘラ研磨は認めない。復原状態は，図示の⅔ほどである（図版63－3，第149図）。（馬田）

磨製石剣（図版63-2，第152図１）　７号甕棺棺内からの出土品で身の中途で折損し，現存長14.2cmをはかる。身の中央に明瞭な鎬が通り，断面は菱形を呈する。丁寧に研磨され刃部は鋭利である。折損部で幅4.3cm，厚さ9.8mmをはかる。石材は頁岩質のものである。（児玉）



第152図　磨製石剣・紡錘車実測図（1/2）

以上の甕棺墓の中で，切り合いによって２号・４号・５号のいずれよりも３号甕棺墓が新しいことが確認されている。しかし，この新しい甕棺の口縁部の特徴に，内側に粘土帯を付すものとそうでないものの二者があり，肩頸部の屈折の有無にも二者が認められる。以下，これらの特徴を中心に補足してみる。

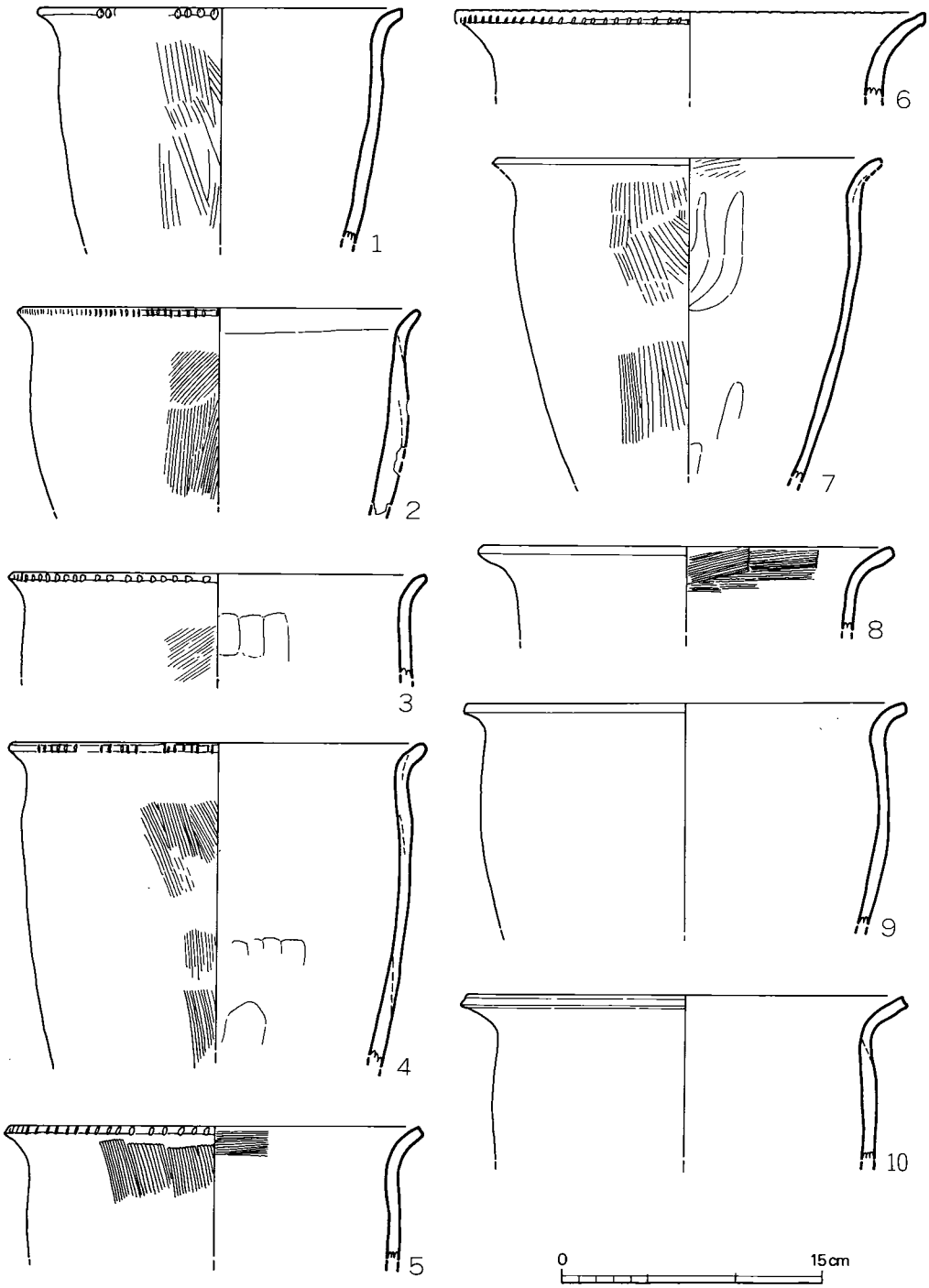
７号下甕は，胴部最大径が上位にあり，頸肩部は器内外面共に明瞭な屈折を残し，頸部は直線的に内傾するなど，板付II式の古い要素を強く残している。調整は，器内外面共にヘラ様のナデである。

２号下甕は，胴部最大径は上位にあるが，頸肩部は器高の中位まで下がり，口頸部はゆるく外反し，口唇部にわずかだが厚みが認められるなど，板付II式のやや新しい要素が生じている。調整は，器内外面共にタタキ仕上げのままで，一部ヘラ様のナデを施している。

４号甕棺は，上甕の口縁部に粘土帯を付しているが，その上面は内傾し，薄手である。頸部は，上甕では既に直立気味となっているが，下甕は未だ内傾する。しかし，胴部との屈折は明確ではない。５号甕棺は，上甕は２号下甕の器形に類似する。４号と５号の両甕棺は，共にヘラ研磨を施さず，ヘラ様のものでナデている。この両者は，２号甕棺と時期差は認められないが，壺形土器での器形の大形化を試行する時期として把握できよう。１号甕棺も同様である。

３号甕棺は，切り合い関係では，前出の２号・４号・５号甕棺よりも新しい。また，２号下甕と同大の器形であるが，口縁部内面にやや発達した粘土帯の張り付けが認められ，ヘラ様のナデと共にヘラ研磨を施している。このように，板付II式の新しい要素が強いが，未だに板付式の器形を残している。（馬田）

(2)　Ⅰ－２のその他の遺物



第153図 石 橋Ⅰ－2 出 土 土 器 実 測 図① (1/4)

土　器（第152～154図）

甕棺墓の西側で検出した土器群で，完形のものはなくみな小片である。弥生時代前期末頃の土器が主体を占め，間断的に古墳時代までの土器を含んでいる。この遺構のある部分は削平を受けているので，時期の異なったものがまじって一部に混在した状態で土器が出土している。

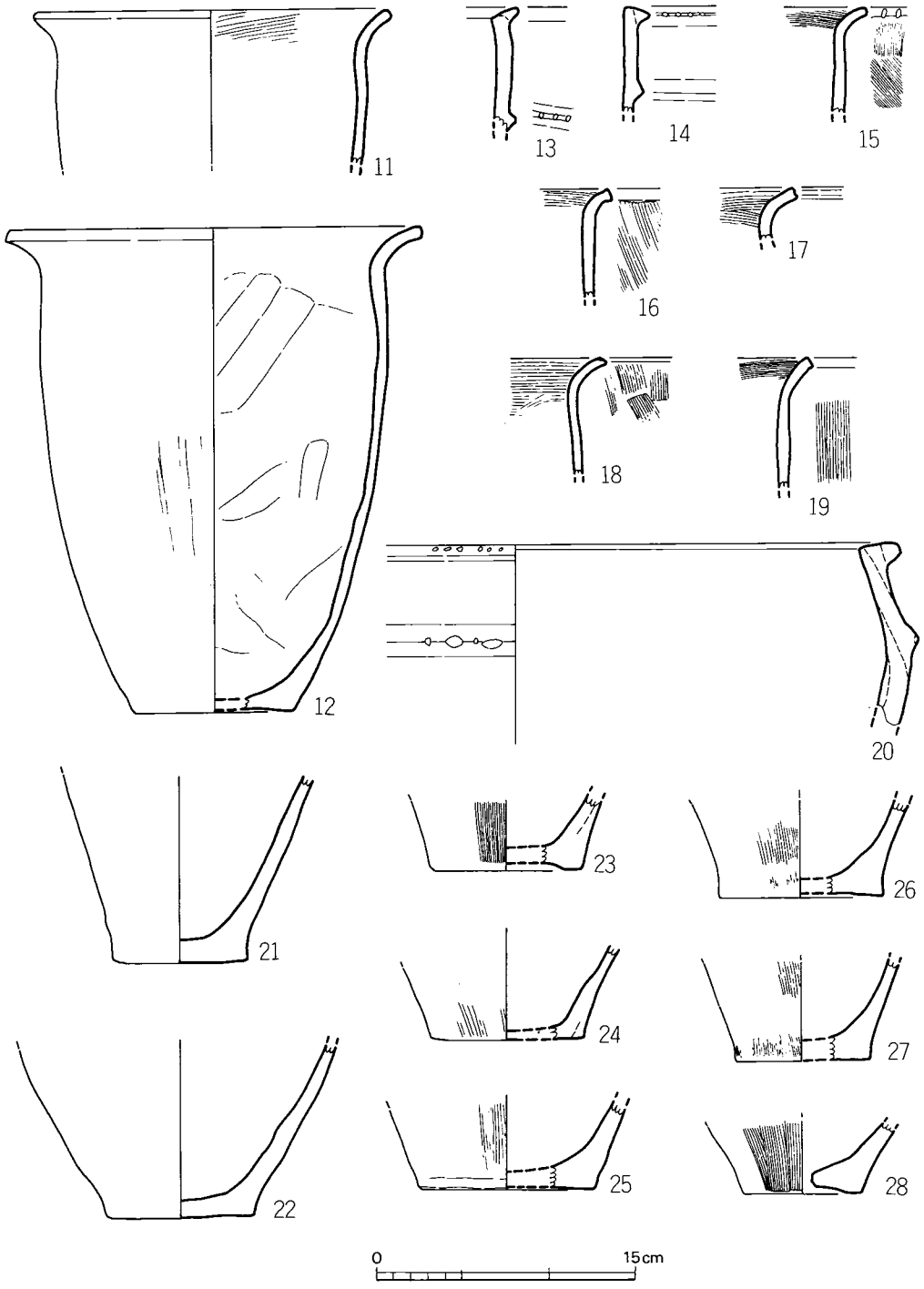
1～6は口縁端部外面に刻み目を有する甕形土器の破片資料である。復原口径24cm前後のものが多いが，1は21cm，6は27cm程度をはかる。口縁部は外反し，体部は張らずにほぼ直線的に底部に続くようである。口縁端部断面は丸くおさめるもの，矩形を呈するものとがある。口縁部内外面はヨコナデ調整を施し，体部外面はハケ目調整を，内面はナデ調整を行い指圧痕の残る例がある。ただし，5は口縁部内面を水平のハケ目調整を行い，6は体部外面にハケ目の痕跡を見ることはできない。7～19は口縁端部に刻み目を施さない甕形土器の破片資料である。13・14は口縁部は外反せずに直立し，口縁部，体部上半に1条の凸帯をめぐらしている。復原口径は7・11が直径21cm前後であるが24cm前後のものが多い。器高は12が28.2cmをはかる。器面が荒れて剝落しているものがあるが，体部外面はハケ目やナデ調整が行われている。内面はナデ調整で指圧痕の残る例がある。口縁部内外面はヨコナデ，あるいは横位のハケ目調整を行っている。口縁端部断面は矩形を呈するものが多い。21～27は甕形土器底部である。23が上げ底状を呈するが他は平底か，それに近い形態である。21・22は外面の剝落が著しく調整は不明だが，他は縦方向のハケ目調整を行っている。内面はナデ調整である。

以上の甕形土器は総じて砂粒を多く含み，焼成は良好で硬く焼き上がったものが多い。色調は暗褐色，茶褐色を呈するものが多いが，中には橙色や灰褐色のものが存在する。

20は復原口縁内径40cmをはかる大形の土器で深鉢状の形態を有すものと思われる。口縁端部外面に粘土紐をはり付けて一巡し，刻み目を施している。この凸帯下に刻み目を有する断面三角形の凸帯を巡らすがこれは土器の成形時に粘土帯を積み上げていく過程で形作られたもので，はり付けたものではない。この土器の断面には粘土の合わせ目が多く観察される。口縁上端部の水平面および外面はヨコナデ，内面はナデて仕上げている。胎土は雲母片や赤褐色粒子を含み，焼成良好で淡黄褐色である。

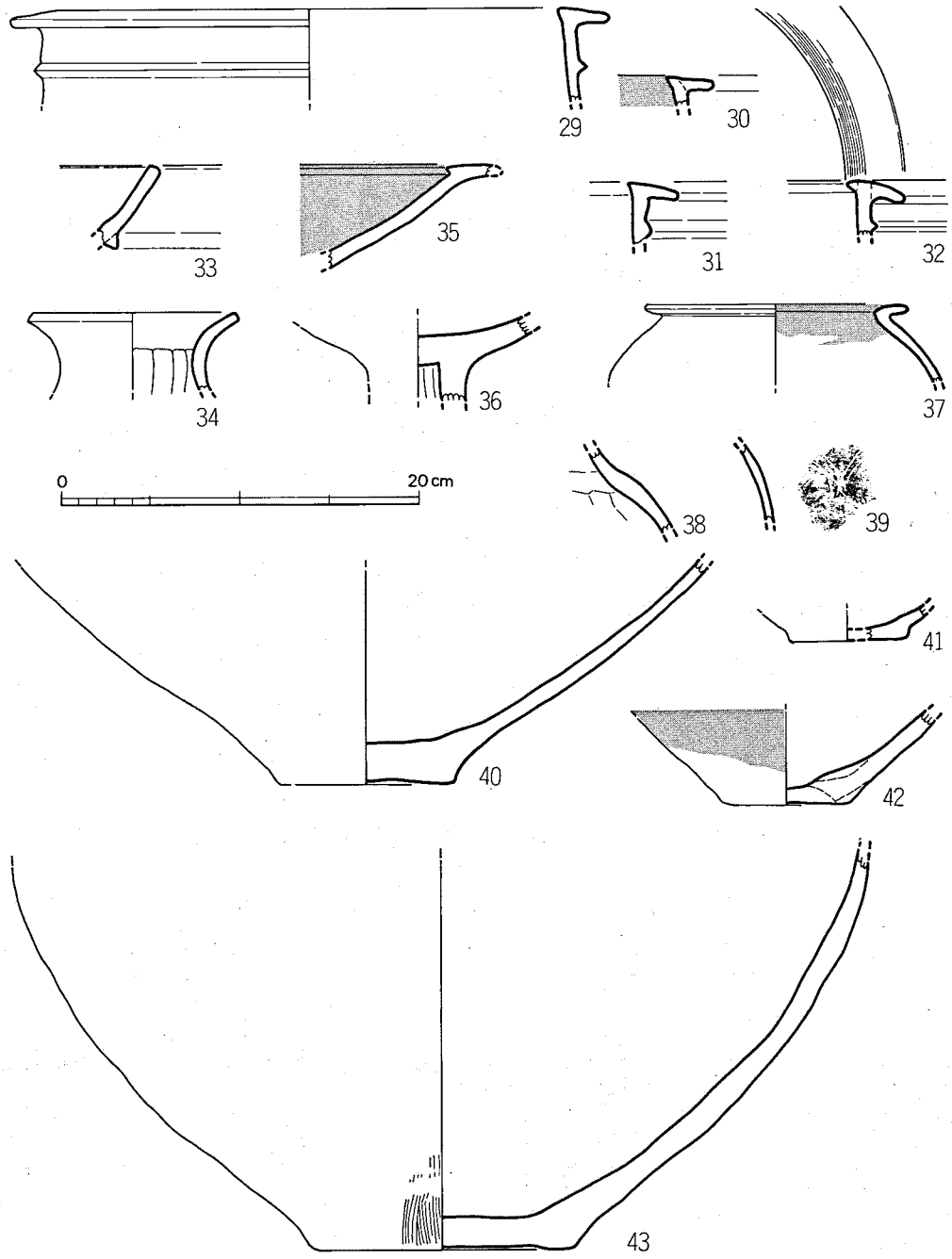
28は甑の破片資料である。復原底部径7cm程で若干の上げ底を程する。外面は縦方向のハケ目調整を行い，内面は指圧痕が残っている。砂粒を多く含み，焼成良好で外面は暗褐色，内面は茶～橙色を呈する。

29～30は逆L字状口縁を呈する甕形土器の破片資料である。口縁下位に一条の三角凸帯を巡らす。29は復原口縁内径28cm程をはかるが他はあまりに小片のため，径は出ない。30は内面に赤色顔料を塗布している。32は口縁上面に須恵器のカキ目のように櫛による施文が見られる。これらは総じて1～27（20を除く）の甕に比べて砂粒の含有量は比較的少なく，焼成はやや軟質なものも見られ，橙色～褐色を呈する。

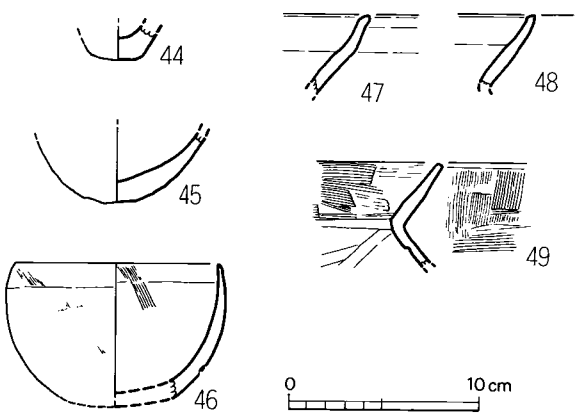


第154図　石橋Ⅰ－2出土土器実測図②（1/4）

33はくの字口縁の甕で頸部に垂下気味の三角凸帯をめぐらす。小片のため径は不明である。口縁は内彎気味で端部断面は角のとれた矩形を呈す。砂粒をかなり多く含み，焼成良好でくす



第155図　石橋Ⅰ－2出土土器実測図③（1/4）



第156図　石橋Ⅰ－2出土土器実測図③（1/4）

んだ灰褐色を呈する。

35･36は別個体の高杯破片である。35は口縁端部を欠く。現存部の内外面とも丹塗り磨研されている。砂粒を含み焼成良好である。36は丹は観察されない。脚柱部に絞り目がみられる。口縁部は35のように鋤先状を呈すると思われる。

34・37～43は壺形土器である。34は小形の壺の破片で復原口径11cm強をはかる。あるいは器台の可能性を残す。内面の頸部以下に指圧痕が観察される。外面は器壁が荒れており調整は不明である。砂粒を多量に含み，焼成は普通で暗褐色を呈する。37は無頸壺で外面と口縁部および内面の頸部下まで丹塗り磨研されている。蓋がつくか否かは判らない。復原口径14.8cmをはかる。砂粒を多く含み，焼成良好で赤褐色を呈する。38・39は小形の壺肩部付近の破片である。39はヘラ描きの文様が施されている。雲母，石英粒をわずかに含み，焼成は普通で茶褐色を呈する。41・42は小形の壺の底部で後者の外面は底部付近を除いて丹塗り磨研されている。40・43は大形品で，前者は内外面ともナデ調整，後者は底部付近は縦方向のハケ目調整，その上位はミガキが施されているようだが器面が荒れていて不明な部分がある。壺底部は4個体とも割と砂粒を多く含み，焼成は良好である。

44は底部片で全体の器形は判断できないが，深い鉢状を呈すると推測する。底径2.5cm程で凸レンズ状の底部を有する。風化が進んで調整は不明である。小砂粒を多く含み，焼成良好で淡茶褐色を呈す。

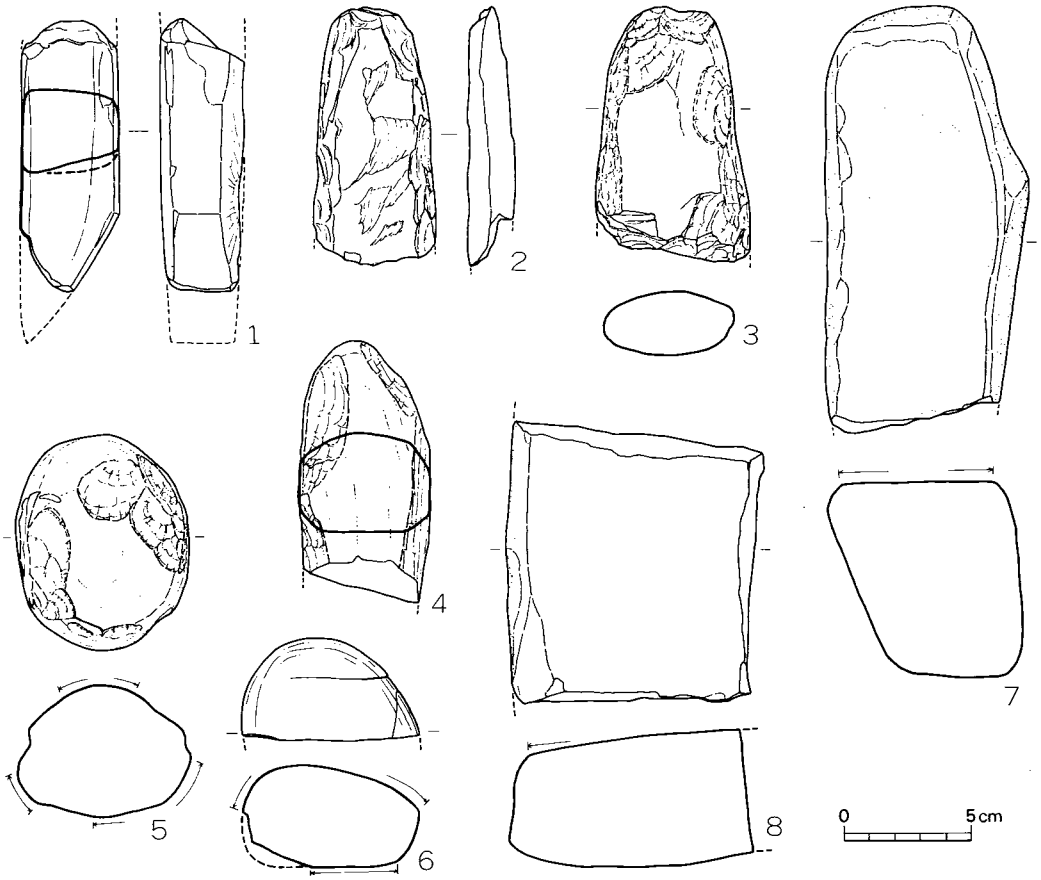
45・46は鉢形の土器である。丸底で46は斜方向のハケ目が部分的に残る。砂粒を割と多く含み焼成良好で淡茶褐色を呈する。

47～49は甕形土器口縁部片で布留式併行期のものである。49は口縁部内外面ともにハケ目による調整を施している。総じて胎土は砂粒を含んで荒っぽく，焼成はあまくてやや軟質に焼き上がっており，47・48は淡茶褐色～淡茶色，49はくすんだ褐色を呈する。

土製紡錘車（第152図）

過半を欠失するが径は6cm程度と思われる。縁部は面取りされたように丸味を持ち，中央の孔は径7mm程度である。断面は中央部の孔寄りで厚さ1cmを越え，縁部で薄くなる。胎土に白色砂粒を多く含み，焼成良好で淡茶～明茶色を呈する。（児玉）

石　器（第157図）



第157図　石橋Ⅰ－2・4・12出土石器実測図（1/2）

石橋Ⅰ－2地区から磨製石斧3点（2～4）・すり石2点（5～6）・砥石1点（7）・石刃状剝片1点（第141図67）・Ⅰ－4地区から柱状片刃石斧1点（1），Ⅰ－12地区から砥石1点（8）が出土した。

柱状片刃石斧（1）　灰白色の頁岩製で刃部・基部共欠損する。現存値では，重量244g・長さ10.7cmで，幅3cm・厚さ 3.9cmを有す。刃部は欠損後も使用されており端部が磨耗する。基部側の端部にはわずかに生きた面が内に入り，抉入部の内彎部下端に相当するのかも知れない。

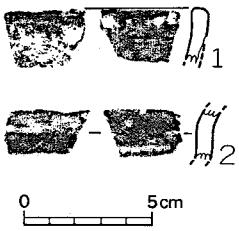
磨製石斧（2～4）　2・3は体部が楕円形断面の磨製石斧で，全面が研磨されるのではなく，整形時の打欠痕が側面等に残る。2は角閃片岩製で刃部を欠失するが現存長10.2cm・幅4.7cm・重量131gを有す。3も刃部を欠失しているが，玄武岩製で現存長10cm・幅6.1cm・重量275ｇ。

4は体部断面が隅丸方形的になる玄武岩製の石斧頭部破片で，幅5.1cm・厚さ3.9cm・現存長10.2cm・重量365ｇを有す。

すり石（5・6）　5は玄武岩製で敲打調整して掌中に納まり易い法量にして使用したもので，

打裂痕が残るもののかなり磨滅している。完形品で重量468g。6は，砂岩質ホーンフェルスに似た硬質の砂岩製の破片で重量148gを有す。全面磨滅するが平坦になる面の磨滅は顕著である。火熱を受けた痕跡があり，側面の剝落はこれに起因するものであろう。

砥　石（7・8）　7は細粒黒雲母花崗岩の方柱状自然礫を利用したもので図示する上面のみ砥面とされるが使用頻度は低かったようで磨耗はさほど顕著でない。一方の端部を欠失しており重量1,650ｇを有す大きさ。8は，花崗岩質アプライトの扁平な石材を用いているが1,135ｇを測る破片で，上面は幾分磨耗するが下面はほとんど磨耗しない。作業台的な用途の可能性がある。



第158図　Ⅰ－2出土縄文土器拓影（1/3）

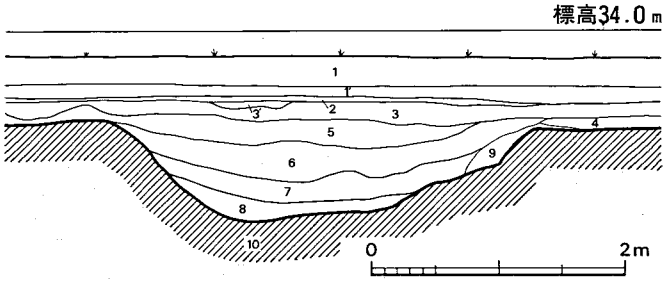
石刃状剝片（第141図67）　基部を欠失するが黒曜石の縦長な剝片で，現存長48.8㎜・最大幅16.5cm・厚さ5.2㎜・重量2.5ｇを測る。稜を有す面での剝離方向は上下両方からが確認できる。

縄文土器（第158図）

石橋Ⅰ－2地区からは縄文土器片2片のみ発見した。1は6号甕棺墓壙内から出土した口縁部破片で，胎土に砂粒を含み，内面磨研，外面ナデ仕上げされるが外面は剝落している。椀形土器と思える。2は5号甕棺墓墓壙付近出土の精製浅鉢形土器のくびれ部破片。細砂・金雲母を含む精良な胎土で内外面共に磨研されるが風化が進んでいる。2点共に細片のために細かな時期決定はし難いが，縄文時代晩期中頃以降であろうか。　（小池）

(3)　Ⅱ－12の大溝

石橋Ⅱ－11・12は，東西両群に分けられる古墳時代の石棺群が発見されたが，その両群の間に空間があって土師器片が散布していた。この空間地帯には土師器に伴う遺構がなく，石棺群が並ぶ南北方向と平行してくぼんでいるらしかった。石棺群が保存されることになったために石棺のレベル以下に掘り進まなかったが，この空間地帯のみ，調査区南壁の土層断面図作成の

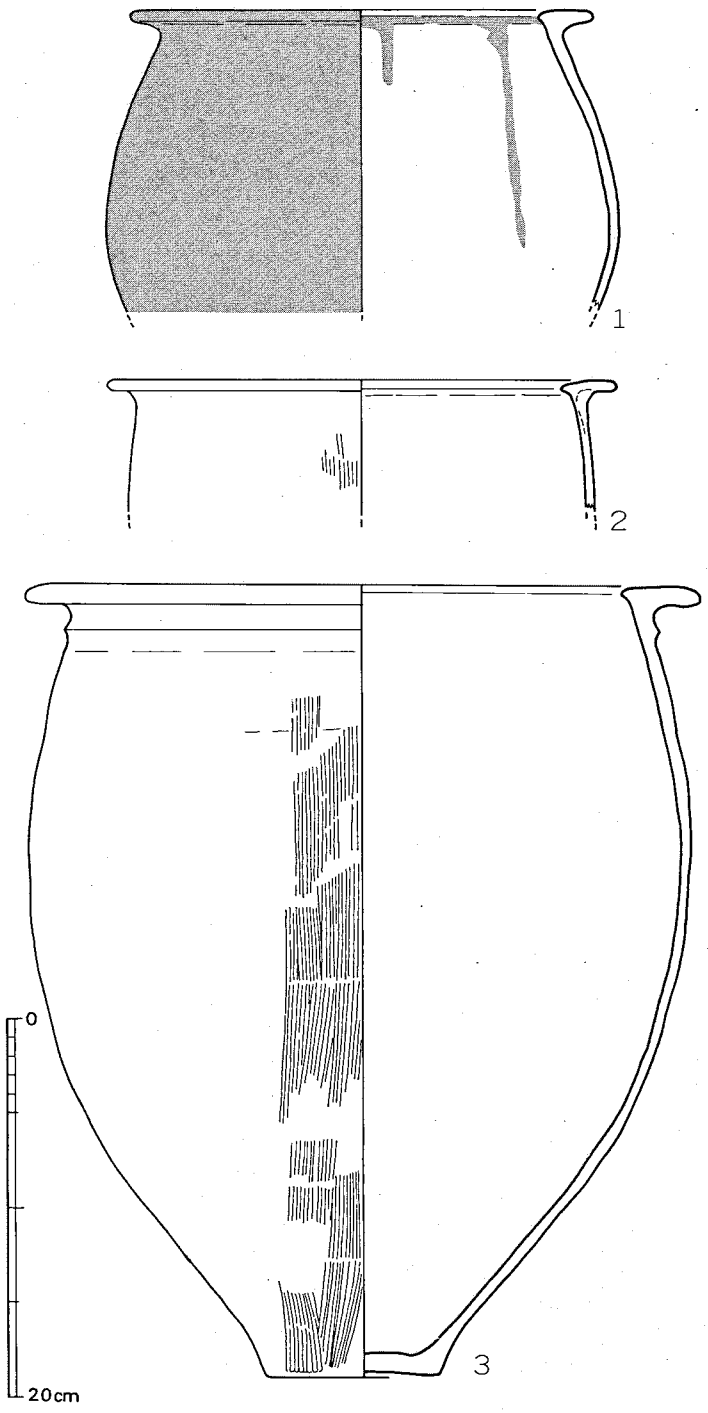


1. 耕　作　土
1'. 耕　作　土（粘質が強い）
2. 床　　土
3. 暗茶褐色土
3'. 暗茶褐色土（黄褐色を帯びる）
4. 褐　色　土
5. 暗茶褐色土（やや灰色を帯びる）
6. 茶褐色土（暗茶色の粘土粒を含む）
7. 褐　色　土（暗茶色の粘土粒を少量含む）
8. 灰褐色土（粘性が強い）
9. 黄褐色土
10. 砂　　層

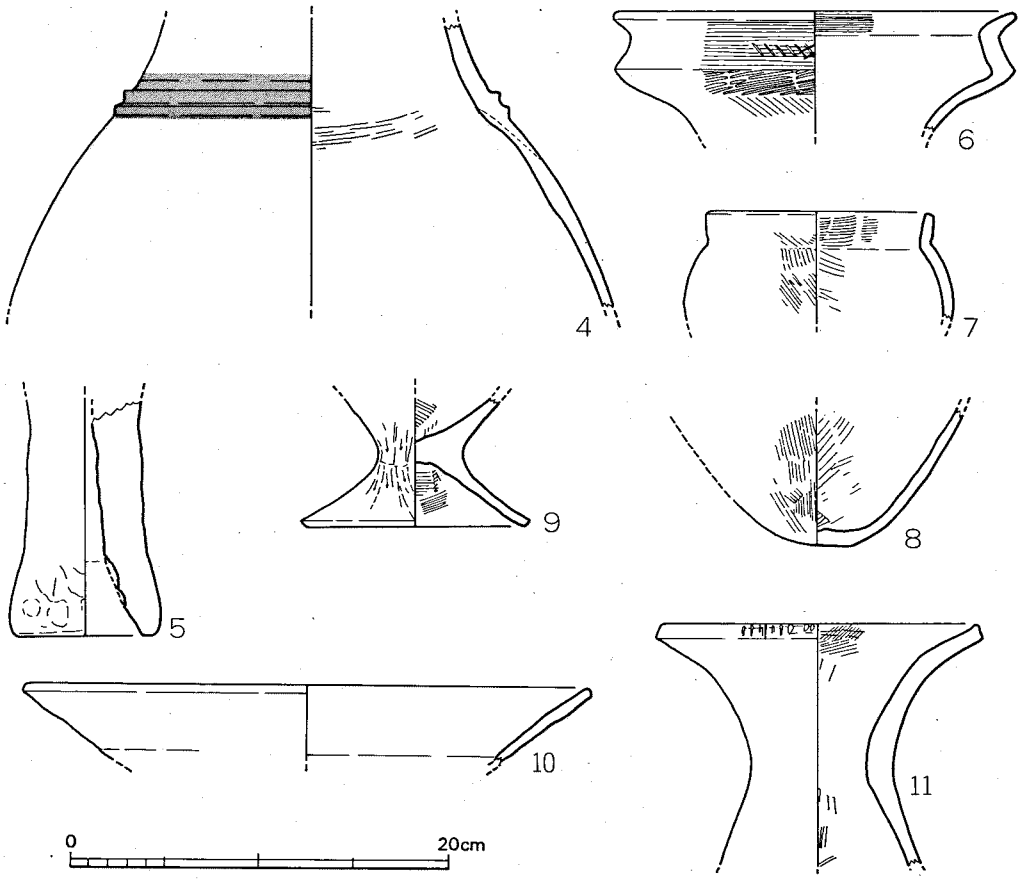
第159図　Ⅱ－12大溝断面土層図（1/60）

ために試掘した。試掘した結果，石棺群に平行する幅3.5m，深さ80cmの大溝が発見された。大溝は，断面形は逆台形を呈し，埋土は上から第4層まで分けることができた。第1層には古式土師器が含まれるので，両石棺群が営れた時期までわずかにくぼんでいたようだ。

第2層には，第160図のような弥生中期中頃の土器が含まれるが，それ以下の層では時期の判明する土器片は出土しなかった。縄文土器片はどの層にも含まれている。第2層に中期中頃より新しい遺物が含まれないことから，大溝はこの時期以前のものであろう。この大溝は，石棺群と同一方向のほぼ南北に伸びているが，これを南側に直線で延ばすと，イフ－3・7で発見されている石棺群と大溝につながる。イフの大溝も最上層に古式土師器があり，石棺群も同時期である。この石橋の石棺群と大溝は，イフと同群・同一溝といってよ



第160図　大溝下層土器実測図（1/4）



第161図　大溝上層土器実測図(1/4)

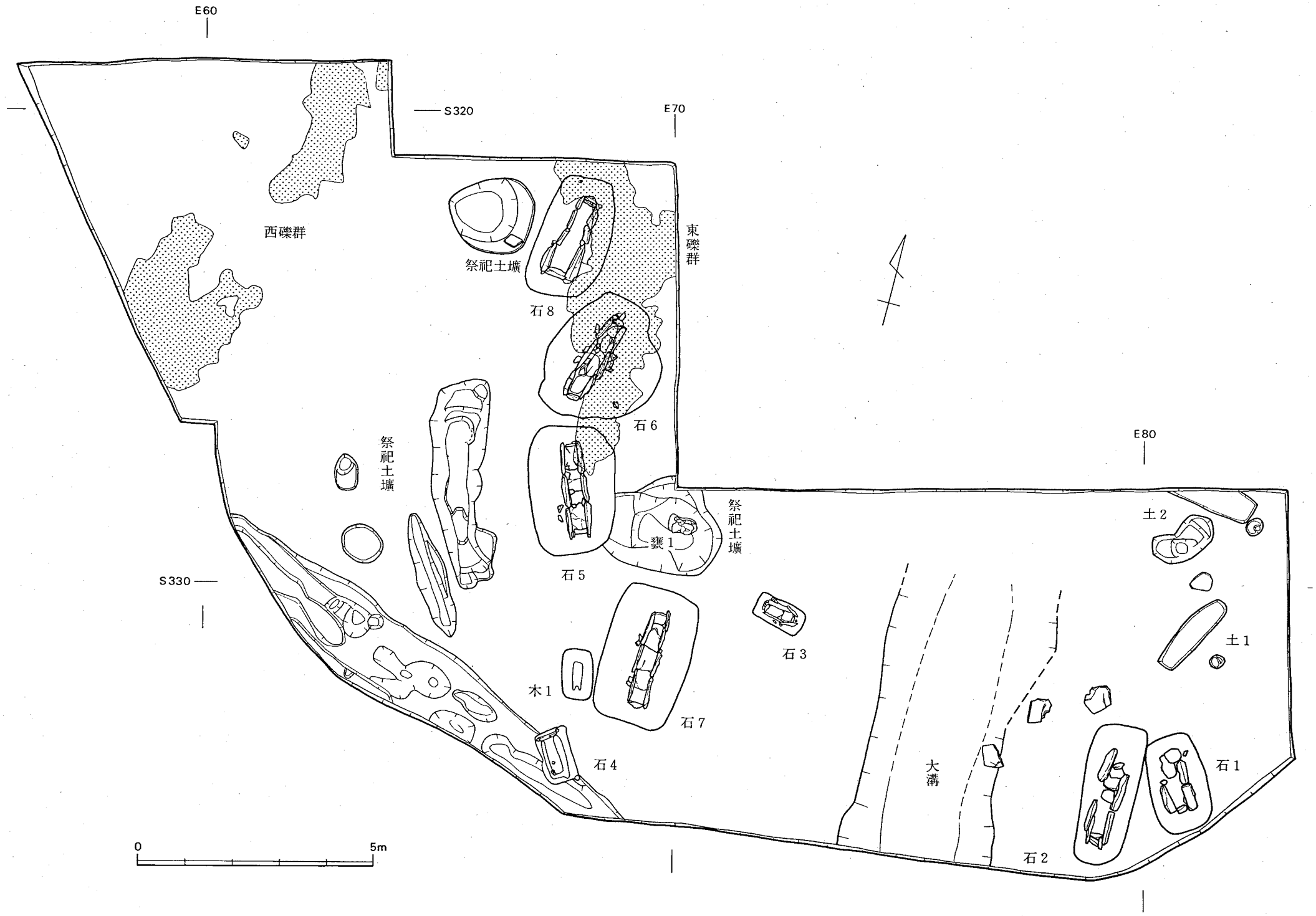
いだろう。

大溝下層土器(図版76－1・3，第160図)　1は，第1層(第159図5)から出土した丹塗磨研甕形土器。口径24cmの大きさで，口縁の張出しは短かくて胴が張る。口縁部から胴部外面は，ヨコ研磨されている。

2・3は，第2層(第159図6)から出土した甕。3は口縁下に低い凸帯があり，器高42cm，口径35.6cmの大きさである。これらの土器は，中期中頃のものである。

大溝上層土器(図版76－4，第161図)　4は，後期前半の丹塗壺の破片であるが，丹はほとんど剝落している。5は中期に属する支脚で，表面に指圧痕が著しい。

6～11は，弥生終末に属する土器片である。6は袋状口縁が変化した口縁，7は直口壺，9は台部，8は甕の底部，10は高杯の杯部，11は器台の破片である。それぞれに終末期の特徴をもった土器片である。



第162図 石橋II－11・12遺構配置図(1/100)

3　古墳時代の遺構と遺物

(1)　石橋II－11・12の石棺墓・甕棺墓・土壙墓

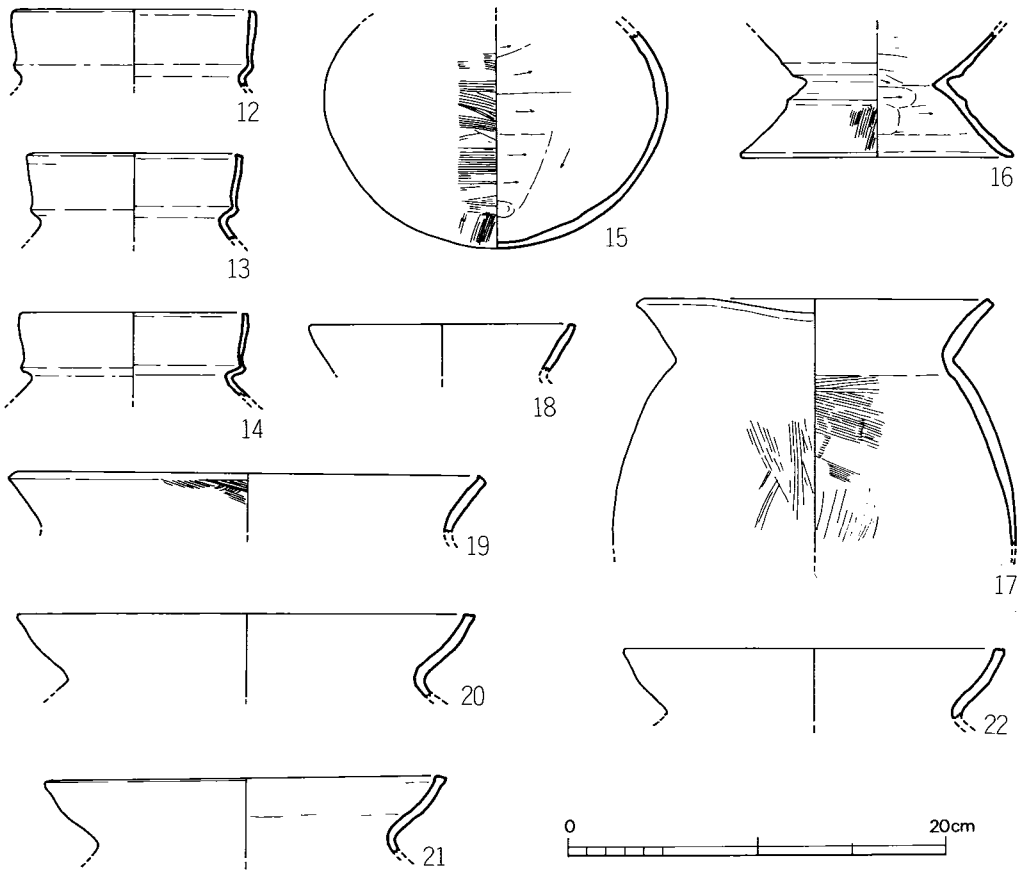
石橋II－11・12地区は，三雲遺跡群の東側輪郭線上にあたるため，当初は遺跡の希薄な地域と予想していたが，道路敷の表土剝ぎに立合ったところ，いきなり２基の箱式石棺が発見された。圃場整備計画では，この地区に遺跡がなければ削平する計画になっていたために，道路敷以外に北側にトレンチを伸すことになったが，この結果箱式石棺墓８基・木棺墓１基・甕棺墓１基・土壙墓２基が発見され，これに伴うと思われる祭祀土壙も検出された。これらの墳墓群は，大きく東西の２群に分かれる。東側の一群は，石棺墓２基・土壙墓２基からなり，西側の一群が石棺墓６基・木棺墓１基・甕棺墓１基からなる。西群の数が多いのは，石棺墓が並ぶ方向に拡張したからであって，東群も南北方向に拡張すれば数が増加するであろう。ただ，東群には素掘りの土壙墓が２基含まれているところが違うが，西群にも木棺状のものが２基含まれているので双方に大差はないと思われる。この東西の両墳墓群は，ほぼ磁北にそって伸びており，石橋II－８で発見された小児甕棺墓もこの延長線上にある。両群の間の空間地帯には，古墳時代初期の土師器が散布していたが，両群墓地を検出した段階では土師器に伴う遺構は検出されず，この空間がわずかにくぼんでいて，これに土師器が混入していたものと思われる。最後にこの空間を掘下げたところ幅 3.5ｍの大溝が検出されたのである。大溝は，弥生中期中頃以前のものであるが，古墳時代の初期にはまだくぼみとして残っていて，これが墓道として利用され両側が墓地となっていったのであろう。

西側の墓地群の上層とその西側には，ほぼ墓地群と同一方向に小礫群が伸びていた。この礫群には弥生土器はもちろん含まれているが，石棺上層の礫群には少量であるが古式土師器から須恵器まで含まれているので，石棺群に伴うものとはかぎらないようだ。石棺群より西側の礫群は，サキゾノＩ－５東端の礫敷の延長上にあるが，礫のありかたに違いがあり，サキゾノＩ－５のように人為的でない。西側の礫群には古墳時代のものは含まれていない。

西側の石棺群は，石棺群に伴うと思われる溝状や円形の土壙があり，土壙内には古式土師器があり，土壙底では赤色顔料も検出される。これらの土壙は，石棺墓に伴う祭祀遺構と思われる。

調査区の南西側には浅い溝があり，最上層に弥生後期後半の土器が１片含まれていたが，下層からは縄文土器しか出土せず，埋土も弥生期のものと違っている。

この地区では，石棺群が保存されることになったため，石棺墓壙が確認できる第３層と第４層まで掘下げたが，石棺墓より古い弥生期の遺構は大溝の一部分を試掘しただけである。しか



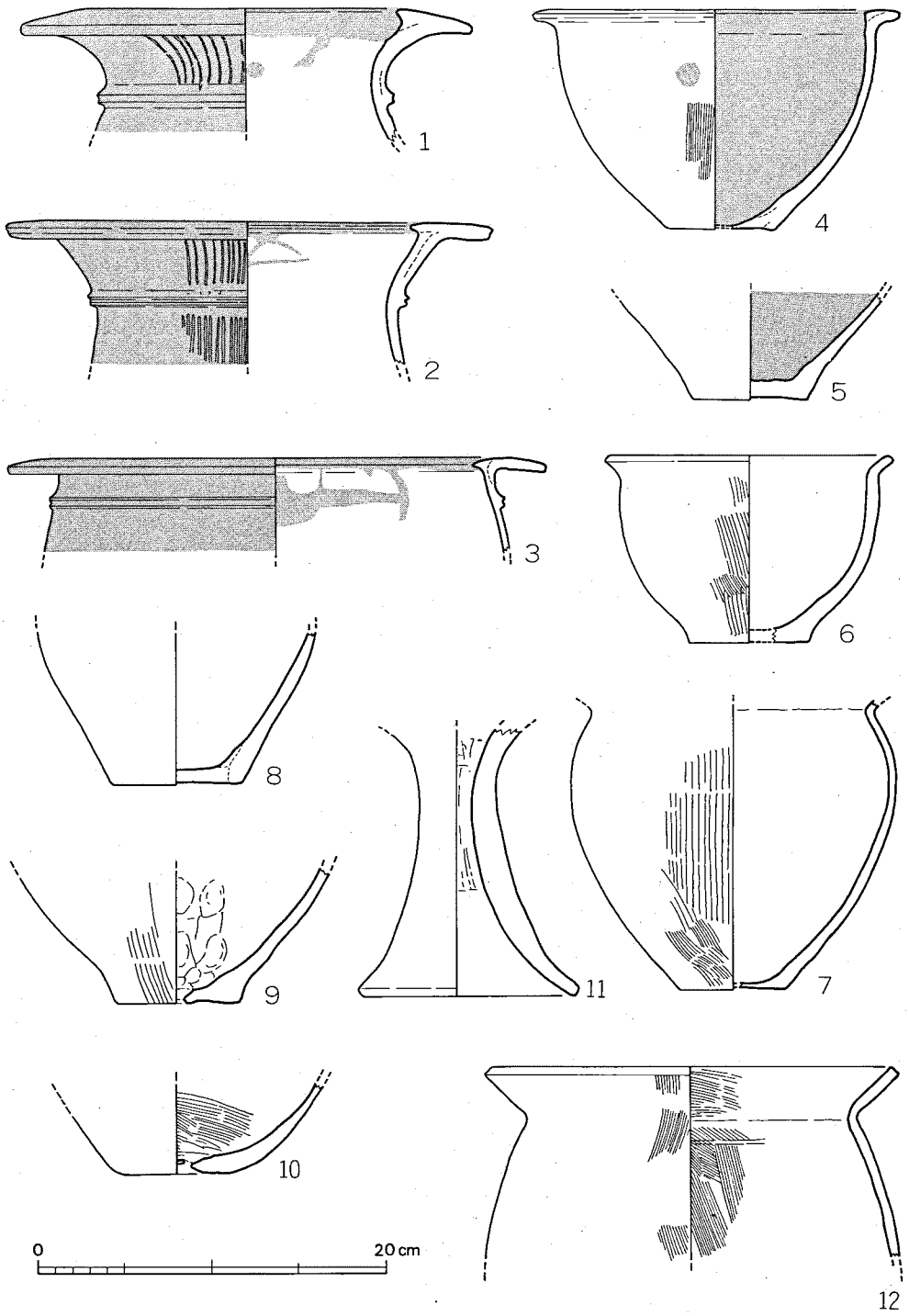
第163図　大溝最上層土器実測図（1/4）

し，第3層では床土直下に須恵器が含まれたり，大溝最上層のように土師器が含まれたりしている。第3層でも東側石棺群のように，蓋石が除去された石棺群が発見されたりするが，5・6・8号石棺墓のように，第4層に近くならないと墓壙の検出がむずかしいものもある。第3層には，弥生中期中頃から終末期の土器片が含まれ，石棺群はこれを切って掘込まれている。

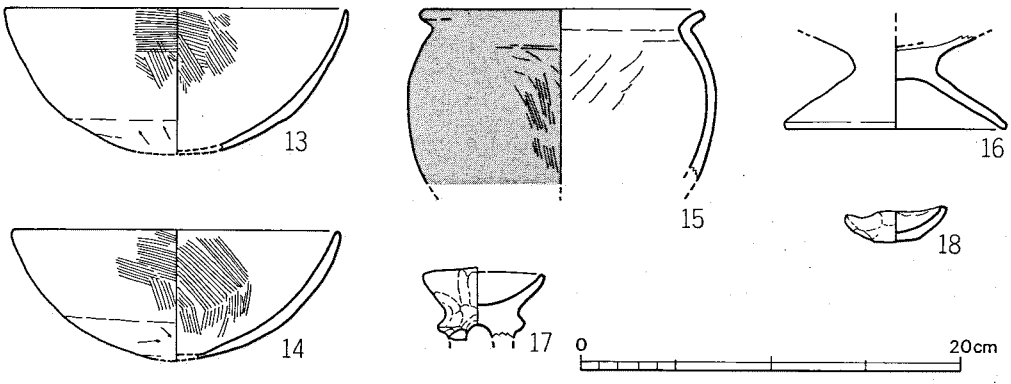
大溝最上層の土器（図版76－16，第163図）　12～14は，特徴的な二重口縁壺。直立した口縁部先端が内側にわずかに突出する。15は，球形の胴をしているところから長頸の壺となろう。内面ヘラケズリ，外面は細いハケ目調整の後部分的にナデられている。

16は鼓形器台で，内面は上下共ヘラケズリされて上下が不明である。現裾径14.6cmの大きさで，外面の上下にわずかな凸帯状段が残っている。

17～22は甕形土器で，17・19は口縁が内彎していないところから古式のもので，17は内面が中位以下にヘラケズリがあり，上部はハケ目調整である。18・20～22の口縁部は，石棺群祭祀土壙出土甕と同一型式で，布留期の古式に属する。



第164図　包含層土器実測図①（1/4）



第165　包含層土器実測図②(1/4)

包含層の土器(図版76，第164・165図)　1～5は，第3層から出土した丹塗磨研土器で，出土地点は1・3が5号石棺祭祀土壙を中心とした地区，4・5が3号石棺墓北側地区である。4の鉢は，口縁に粘土貼付を行って平坦にしているが，口縁があまり発達していないところから中期中頃であり，1～3は口縁部が発達して暗文を施すなど中期後半のものである。

6・7は，西側礫群に伴うもので後期前半，8・9も同時期で5号石棺付近出土である。

10は，調査区南西側の浅い溝状遺構最上層出土の甑であるが，底部の孔に特色がある。底部の孔は，土器製作時に径2cm弱の略円孔を作り，次に粘土紐をこの円孔の中心に渡すように貼付けて孔を2分している。後期後半のものである。

11は西側礫群の出土で，終末から古墳初頭の器台である。

12は，第4層出土であるが，出土地点が7号石棺墓北側の5号石棺墓より古い祭祀土壙上層にあたるため，この祭祀土壙内に含まれる可能性がある。この破片は，口縁部と胴部の特徴から終末期のもので，土壙内出土底部と同型式のものである。

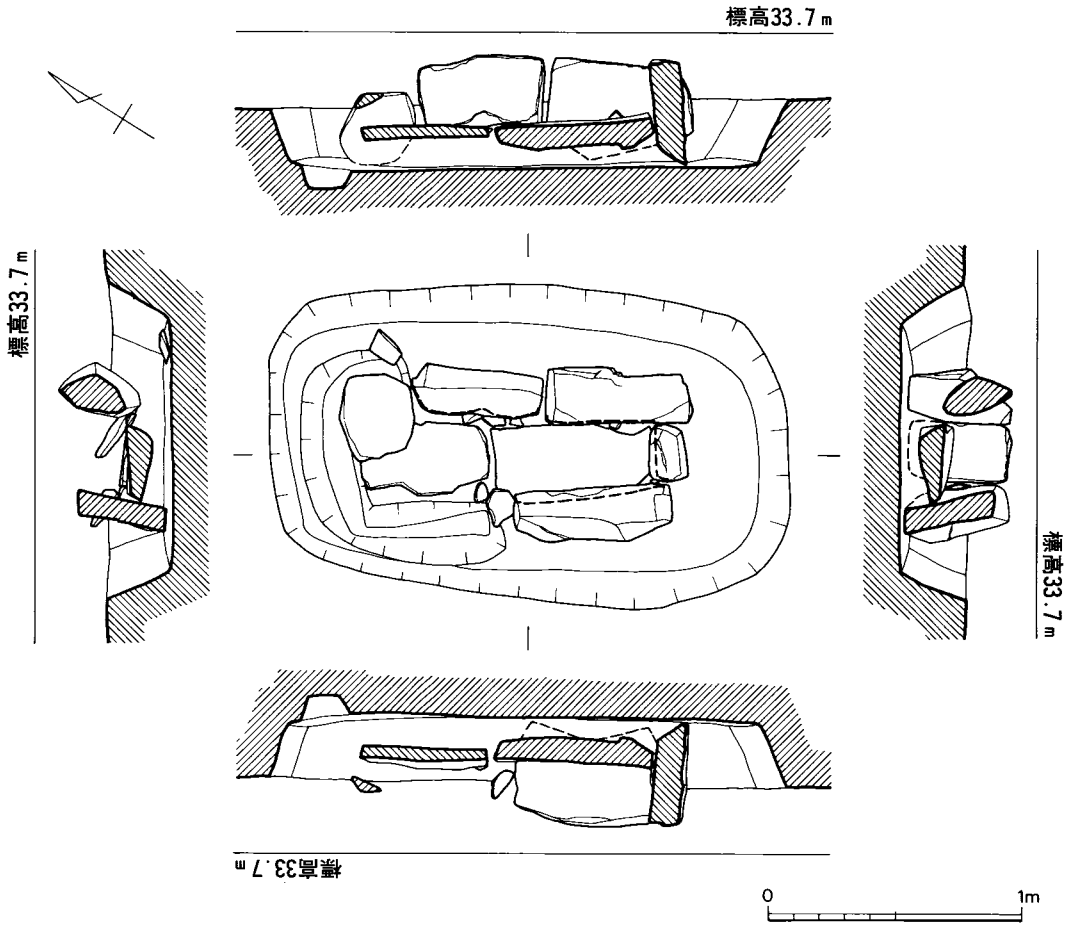
13・14は，西側礫群の北西側第3層から出土したもので，底部付近をヘラケズリしているところから終末期に属する。15も同一地点で出土したが，外面に粗いハケ目の上に丹を塗布し，内面はヘラケズリの後にナデている。終末期から古墳初頭のものであろう。

16は，1号甕棺墓の横で出土したが，このような終末期を含む第3層に甕棺墓が掘込まれている。

17は，7号石棺墓の東側第3層から出土した器形不明の土器。これは天地も不明であるが，図のようにすると蓋形土器の抓みであろうか。図面下の貫通した孔，あるいは二股の部分があるのが気になる。

18は，13～15と同一地点出土の手捏土器で，全体に指圧痕がある。　(柳田)

1号石棺墓(図版66－2，第166図)



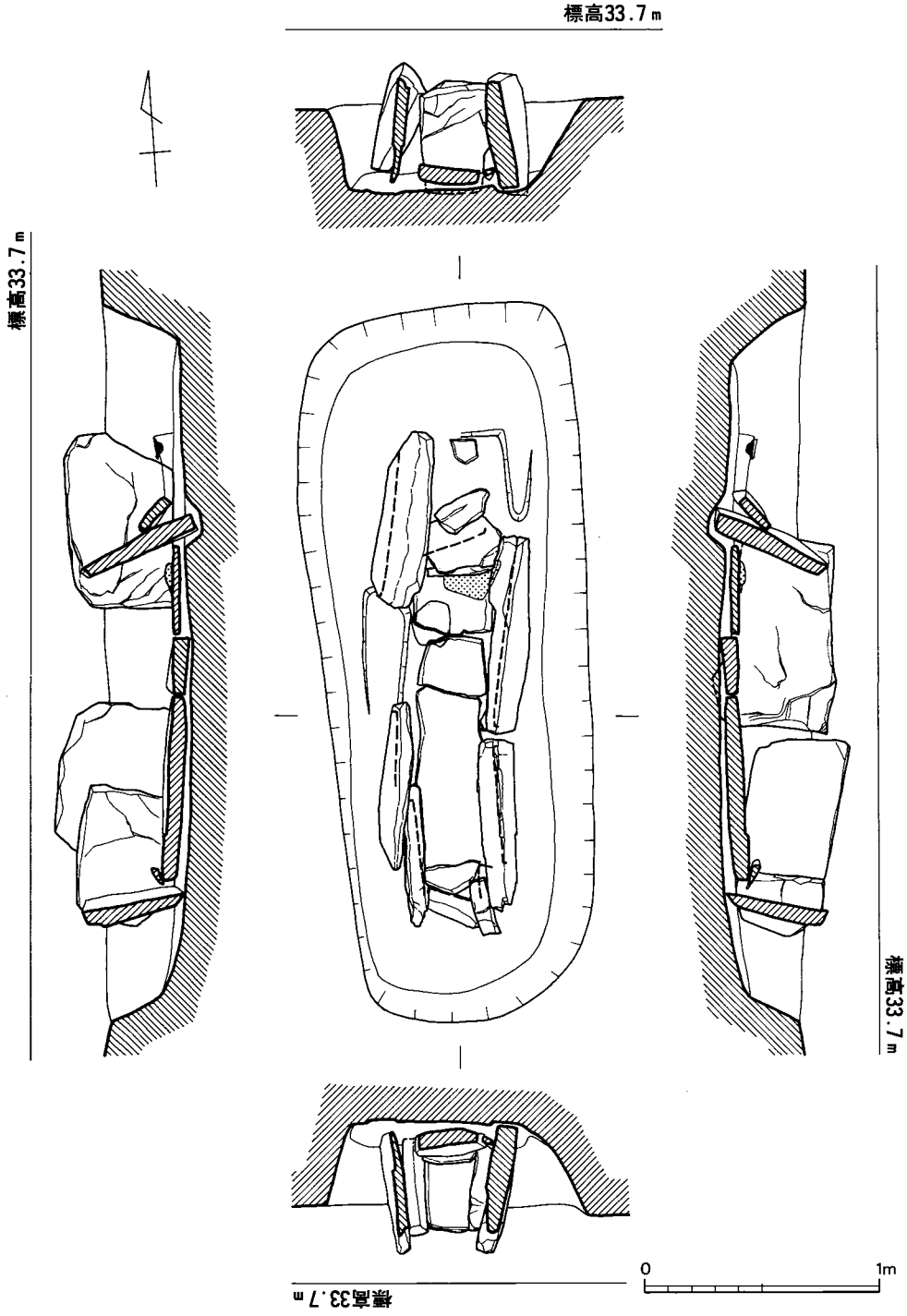
第166図　1号石棺墓実測図(1/30)

1号石棺は2号石棺とともに調査区の東端にて検出され，他の石棺群とは少し離れた場所に位置している。

石棺は長さ2.05m，幅1.25m，深さ0.25mの隅丸長方形を呈する墓壙に埋置された箱式石棺墓である。墓壙の底面はほぼ平坦で，石材のための掘り方はなく，墓壙の北辺に寄せて構築されている。石棺の蓋石全部と，北小口及び西側壁の石材の一部は既に抜き取られている。

石棺の内法は，主軸長で1.15～1.2m前後とみられ，幅は南小口側で26cm，中央部で34cmを測り，南小口側へと狭くなっていて北小口側が頭位になるものと思われる。主軸方向はN32°Wである。側壁より25cmほどの深さにて板状の石材を2枚敷き詰めて棺床としているが，北側へと傾斜している。

石棺に使用された石材は，南小口壁のものを除いて全て花崗岩である。粘土による目張りや丹の塗布などは認められなかった。墓壙内より土器小片や黒曜石片が少量出土している。



第167図　2号石棺墓実測図(1/30)

2号石棺墓(図版66－3，第167図)

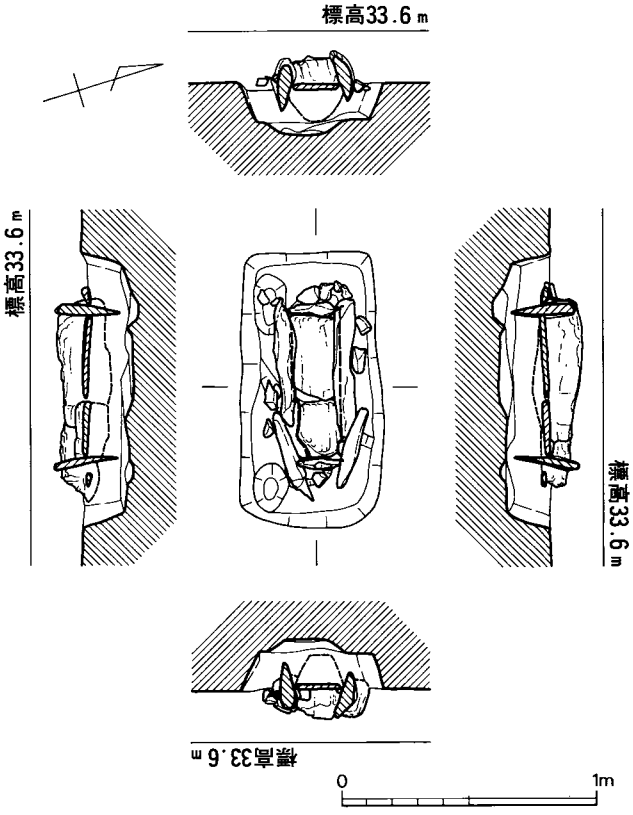
2号石棺は1号石棺の西側に隣接して構築されている。石棺は，長さ3.08m，幅1.11m，深さ0.3mほどの隅丸長方形の墓壙内に埋置された箱式石棺墓である。墓壙底面はほぼ平坦であるが，石材を据えるために更にわずか掘りくぼめている。

石棺の内法は両小口の石材が動いているため不明確であるが長さは1.52mを測り，幅は南小口側で25cm，中央部で34cm，北小口側で35cmと北側へと広くなる。棺床面として側壁上部より40cmの深さの所に扁平な割石を3枚敷き詰めて棺床としている。棺床面では北小口側で枕を意識したものと思われる厚さ3cmほどの粘土帯が中央部に張り付けられ，西側壁寄りには丹の塗布が認められた。北頭位と思われ，主軸方向はN4°Eをとる。

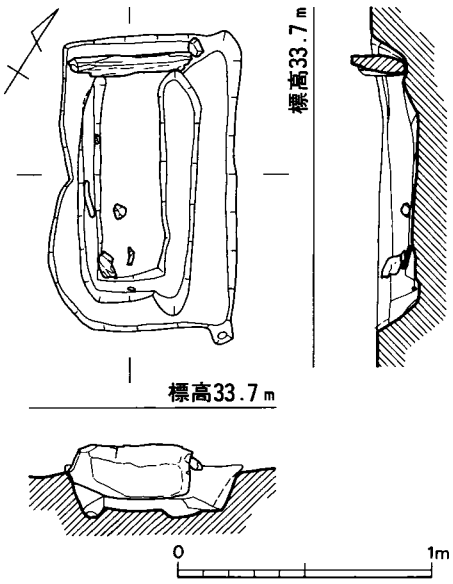
石棺の蓋石は既に持ち去られているが，その他の石材は片岩系のものが使われている。両側壁は各々4枚の石材が据えられたものと思われるが，西側壁は北小口壁より外へ40cmほどはみ出しており，また，北小口より外の東壁側と北壁側に石の抜き跡が見られる。ここにも石が据えられていたとすると北小口より外にも更に一室が設けられていたことになり，副室をもつ箱式石棺と考えることが出来よう。この副室と考えられる場所の床面より弥生時代後期末頃のものと考えられる高杯の杯部片が出土している。これと似たような構造の石棺は『三雲遺跡』Ⅰ報告の加賀石Ⅰ－5石棺墓にみられる。(新原)

3号石棺墓(図版67－1，第168図)

7号石棺の東に位置する小児用石棺墓である。主軸をN73°Wにとり，1.09×0.56mの長方形プランの墓壙を掘り，中に極めて脆い片岩質の石材を，側壁は横長に2枚，両小口は縦位に用いる。両長側壁は，孰れも小口を挟む格好となり，東側では側石が継ぎ足されて添えられている。内法長さ55cm，幅20(西)～17(中央)cmを測り，底面には側壁と同石材の板石2枚が敷かれる。壁内面には赤色顔料の痕跡が認められ，底面の土にも赤色顔料が混ざっていた。蓋石は既に削除されて残らない。棺裏込



第168図　3号石棺墓実測図(1/30)



第169図　4号石棺墓実測図（1/30）

めとして3～10cm大の砂岩の河原石が用いられる。土器小片，黒曜石片が裏込め土中より出土したが当石棺に直接には関係ない。頭位は以上の各点より西にとると考えられる。遺骨，副葬品等は認められない。（中間）

4号石棺墓（図版67－2，第169図）

4号石棺墓は，西側石棺群の最南端で発見された小児用箱式石棺。調査区の南西側に，北西から南東に延びる溝があるが，4号石棺はこれより新しい。溝は，最上層に弥生中期と後期後半の土器片を少量含んでいるので，4号石棺墓もこれより新しい。石棺墓は，耕作によってほとんど削平され北側小口の一部の石材を残しているだけである。主軸方向N32°30′Wに向けて埋葬され，石材が残っている北側小口が両側板より突出するので北側枕となろう。両側板と南側小口は，浅い溝だけが残っているが，この溝に石棺のように石材を立てるのか，板材を立てるのかが問題となる。他の7基の石棺を見るとすべて両側板の間に小口材が挟まれているので，同様な石棺と考えない方がよい。すなはち，この溝は石材が抜かれたのではなく，木板を組合せた木棺の変形とした方がよいであろう。溝内とその横にある小石は，板材と溝とを固定させたものであろう。北側小口の石材の下のみ溝がない。密封や固定のために粘土は使用していない。墓壙の大きさは，長さ1.17cm，幅73cmで，棺内法が長さ81cm，幅28cmの小児用である。（柳田）

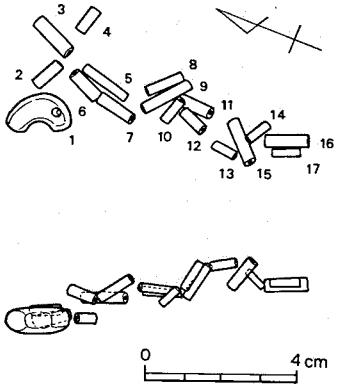
5号石棺墓（図版69・70，第170・171図）

この石棺墓は石棺墓群のほぼ中央部から検出した大型のものである。石棺は長さ2.7m，幅1.8m，深さ約60cmの隅丸長方形の墓壙内に構築されている。棺材を据えるにあたって基部を壙底から12～18cm程度の深さに掘りさげ，小礫を含む砂質土を薄く敷いた後，堅く叩きしめられている。石材は南小口の花崗岩以外は片岩が使われ，両側壁には3枚の板石，両木口には1枚の板石を据えている。側壁と小口の組み合せは，側壁が小口を挟む形態をとっている。棺外下部の石材の継目は粘土を用いて目張りすると同時に板石が外側へ倒れないように配慮されている。棺内の底は10cmほど灰色砂質土で埋められ，その上に5枚の薄い板石を敷き水平を保っている。蓋石は5枚の厚い板石を用い，隙間は灰青色の粘質土で目張りされている。棺の内法は，長さ1.77m，幅は南側で36cm，北側で28cm，中央で34cmを測り，床面から側壁上端部までの高さは，南側で30cm，北側で21cmを測る。主軸方向はN19°Eを示す。人骨はすでに朽ち認められなかったが，南側床面で4ヶ所にわずかではあるが歯の痕跡が認められた。このことから北側に比

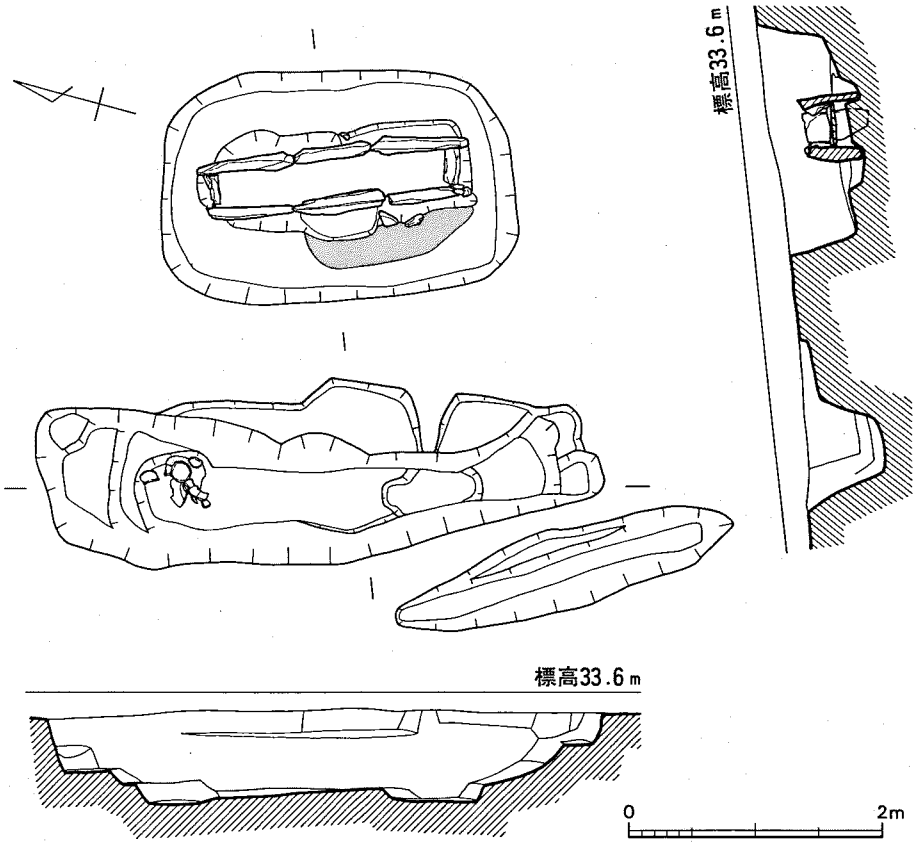
第170図　5号石棺墓実測図(1/30)

べて幅の広い南側が頭位と考えられる。赤色顔料の塗布も南側小口部，床石２枚で最も顕著に認められ，他は赤い部分がわずかに認められる程度である。赤色顔料は棺外の墓壙底でも確認できた。西側でもっとも多く，他の部分ではわずかに斑点状に認められる程度である。小口石，側石を組み合せる段階での付着と考えられる。

出土遺物は，棺内頭位部床面から勾玉１・管玉16・ガラス小玉７が出土した。また棺外東側埋土中から小玉１・西側埋土上層から鉄鏃・鉄斧が出土している。勾玉・管玉は棺の主軸よりやや西側に長さ８cm，幅４cm程度の範囲内にまとまっており，出土状態から判断して北側端の勾玉を中心に連なっていたものと推測される。ガラス小玉は勾玉から16cm程離れた北側で棺の主軸の左右にちらばった状態で検出された。またこの中央部から歯の痕跡



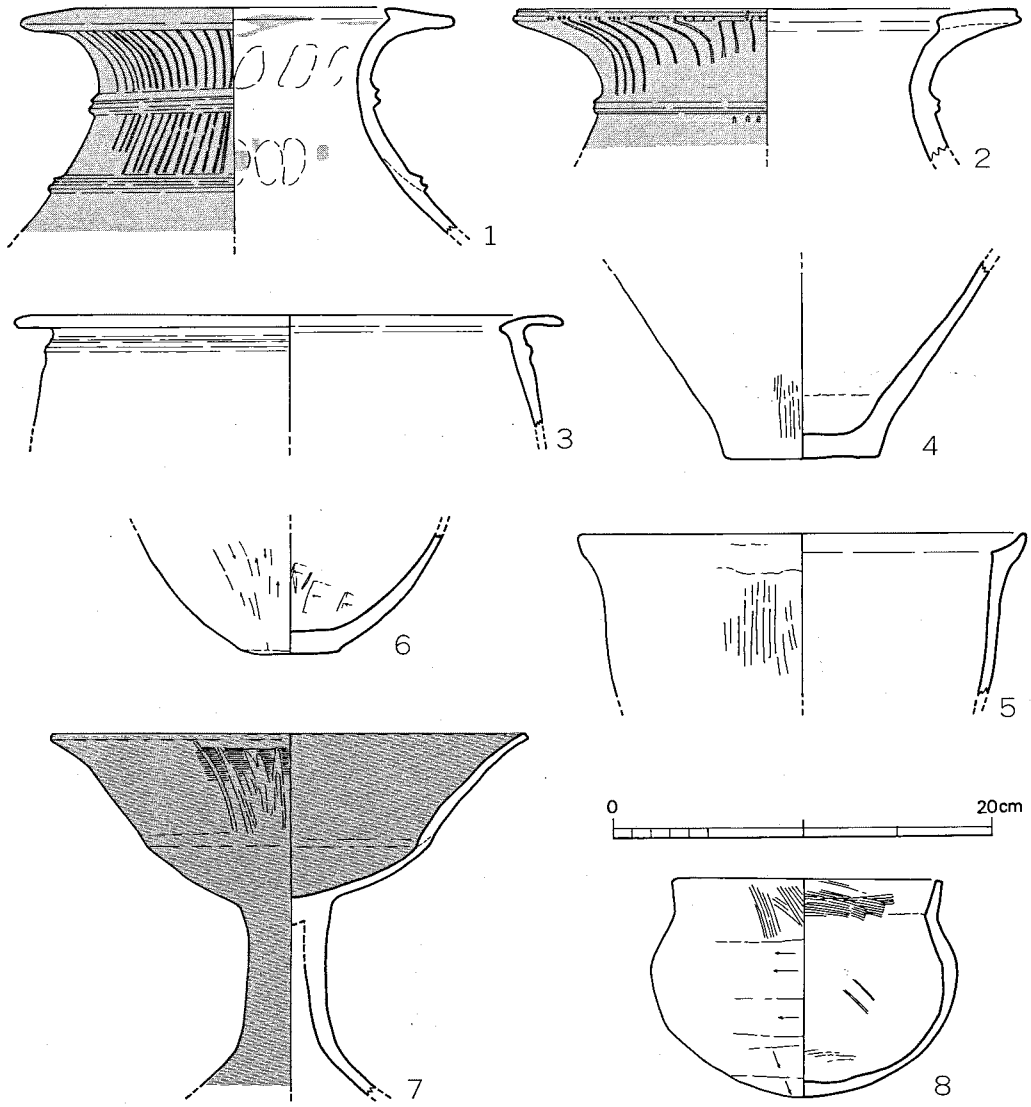
第171図　玉類出土状態実測図（1/2）



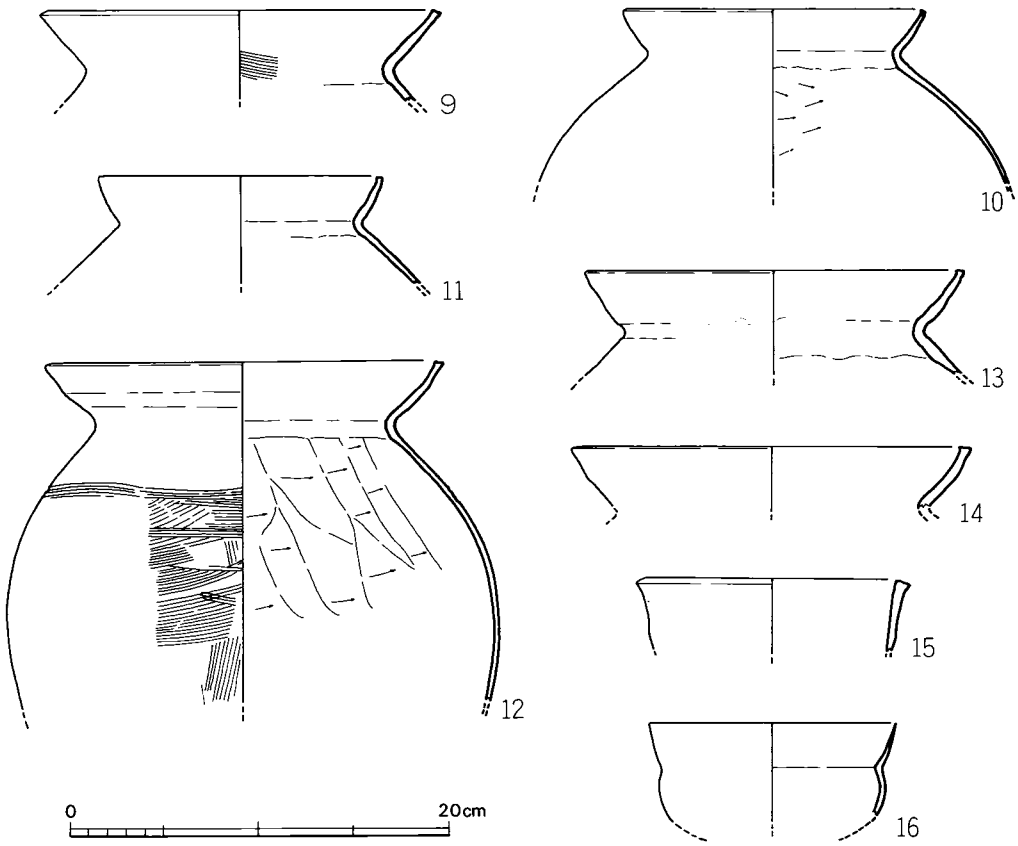
第172図　５号石棺墓と祭祀土壙実測図（1/60）

が認められたことから，ガラス玉の位置は被葬者の首の部分にあたると推測される。しかし出土の状況・玉の数から判断すれば首飾として使用されたものとは考えにくい。　　（池辺）

5号祭祀土壙（図版69，第172図）　5号石棺墓の西側には，長さ4.5m，最大幅1.2m，深さ0.7 mの溝状土壙があり，底面と埋土中に土師器の一括資料が発見された。土壙内の埋土中には，上層に弥生中期から土師器まで含まれ，底面には高杯と壺があった。土壙底面の高杯と壺は，破損して一部の破片が失われているがほぼ復原できるものである。この高杯と壺の周辺の底面には，赤色顔料が散布しているが，壺の中にあったものではないようだ。これらの出土



第173図　5号祭祀土壙土器実測図①（1/4）



第174図　5号祭祀土壙土器実測図②(1/4)

状況から，祭祀が行われて高杯と壺の一部破損したものを持込んだものと思われる。この土壙は，最も近い5号石棺墓を囲むような三日月状を呈していることから，5号石棺に関係ある祭祀土壙と考える。下層で砂岩の砥石も出土。

この土壙の南西側にも，長さ2.8m，最大幅65cm，深さ25cmの溝状土壙があり，同様に土師器が出土している。この壙はどの石棺に付属するものか不明。

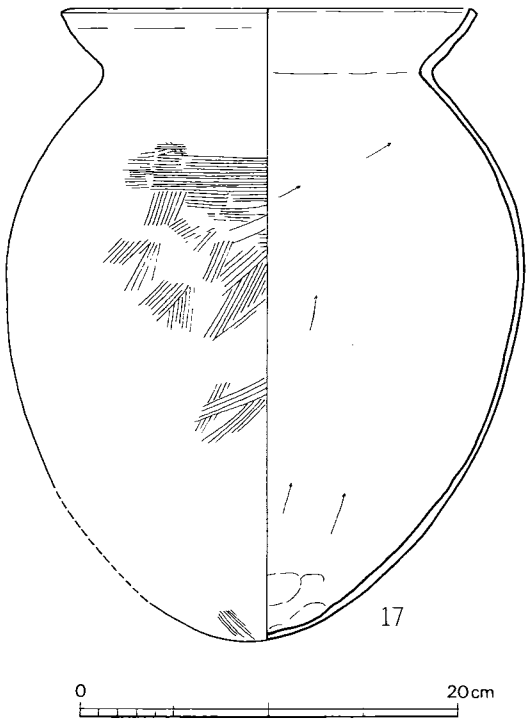
土　器(図版77，第173・174図)　1～4は，中期後半の土器で，1・2は丹塗磨研で暗文を施す壺，3・4は甕である。5は後期初頭の甕，6は胴部下半にケズリ状ナデを施す後期後半の甕底部である。

7・8は，土壙底面から赤色顔料にまみれて出土した高杯と壺である。7は，口径25.2cm，杯部深さ 8.5cmの大きさで，脚部の裾を欠損している。杯部の立上りが長く，外面にヨコハケの後暗文状のタテ磨きを行っている。高杯の内外面には，部分的に赤色顔料が付着しているが，器面が荒れているので不明な点が多いが，もう一方の壺には付着していないので，意図的に塗布したものであるらしい。脚には円孔がない。

8は，器高11.6cm，口径14.4cmの大きさで，直立に近い口縁部と胴部外面の大半をヘラケズリしているのが特徴である。胎土には，石英・雲母・角閃石を多く含むが，赤褐色の良好な焼成に仕上っている。

9～16は，土壙の中層から上層で出土し，9～14は甕，15・16は坩であろう。9・10は，11～14に比較して口縁部先端の内側が摘み上げてあるので古い様相を呈するが大差ないものであろう。12は，肩部に2～3条の蛇行する沈線がめぐり，それより下の胴部にはハケ目調整されている。ハケ目は，胴最大部以上がヨコを主体とし，下半がタテになっている。

16は，丸底坩で広口のものである。口縁は内彎して先細りとなっている。



第175図　溝状土壙土器実測図（1/4）

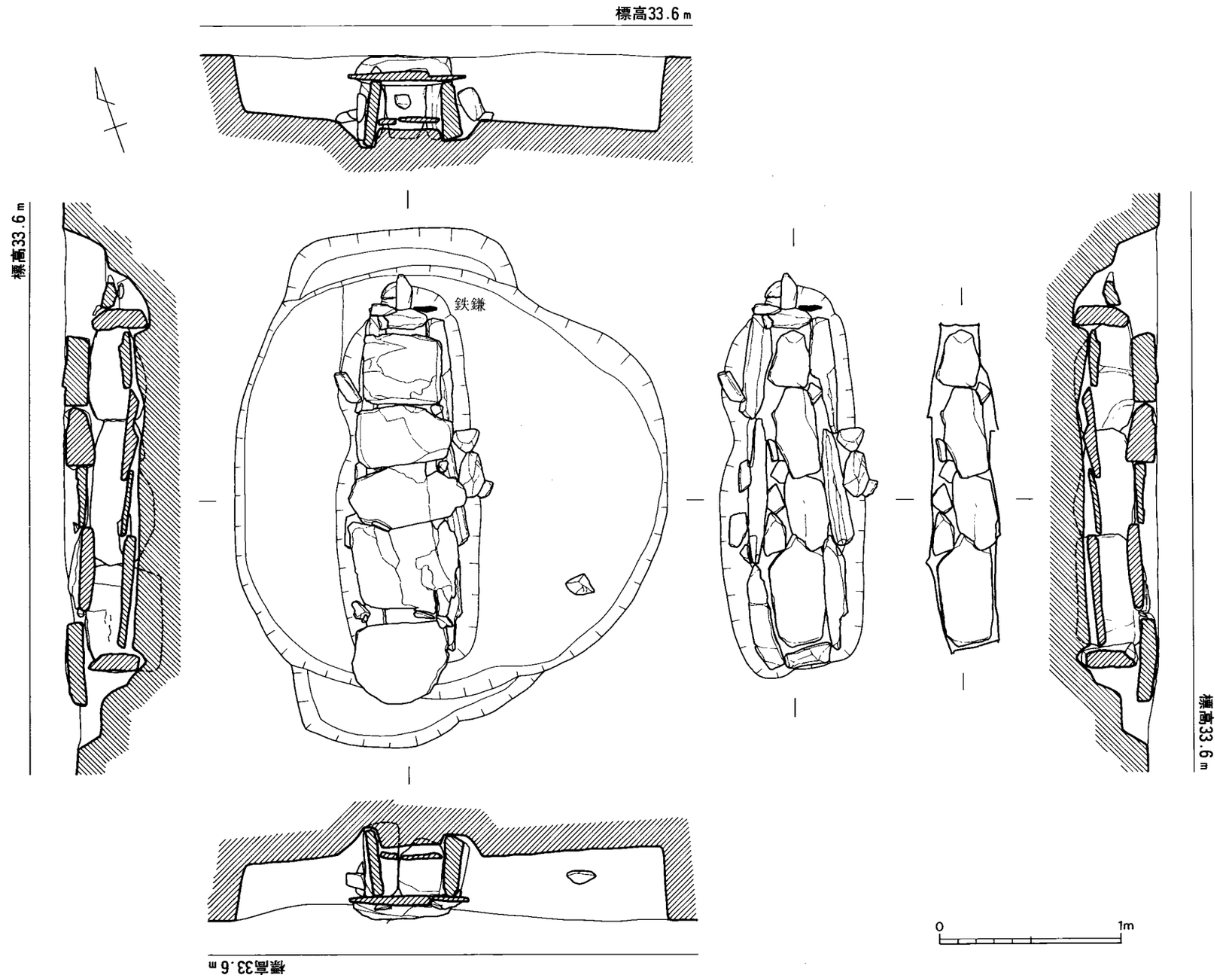
17は，5号石棺祭祀土壙の南西側にある溝状土壙から出土したもので，9・10と同型のものである。肩部がヨコハケ，それ以上と口縁内外面がハケ状のヨコナデ，胴最大部以下は斜方向のハケ目調整され，底部に近い胴部はハケ目をさらにナデて消している。

以上7～17は，その特徴から布留古式に属するものである。したがって，5号石棺もこの時期のものとなる。

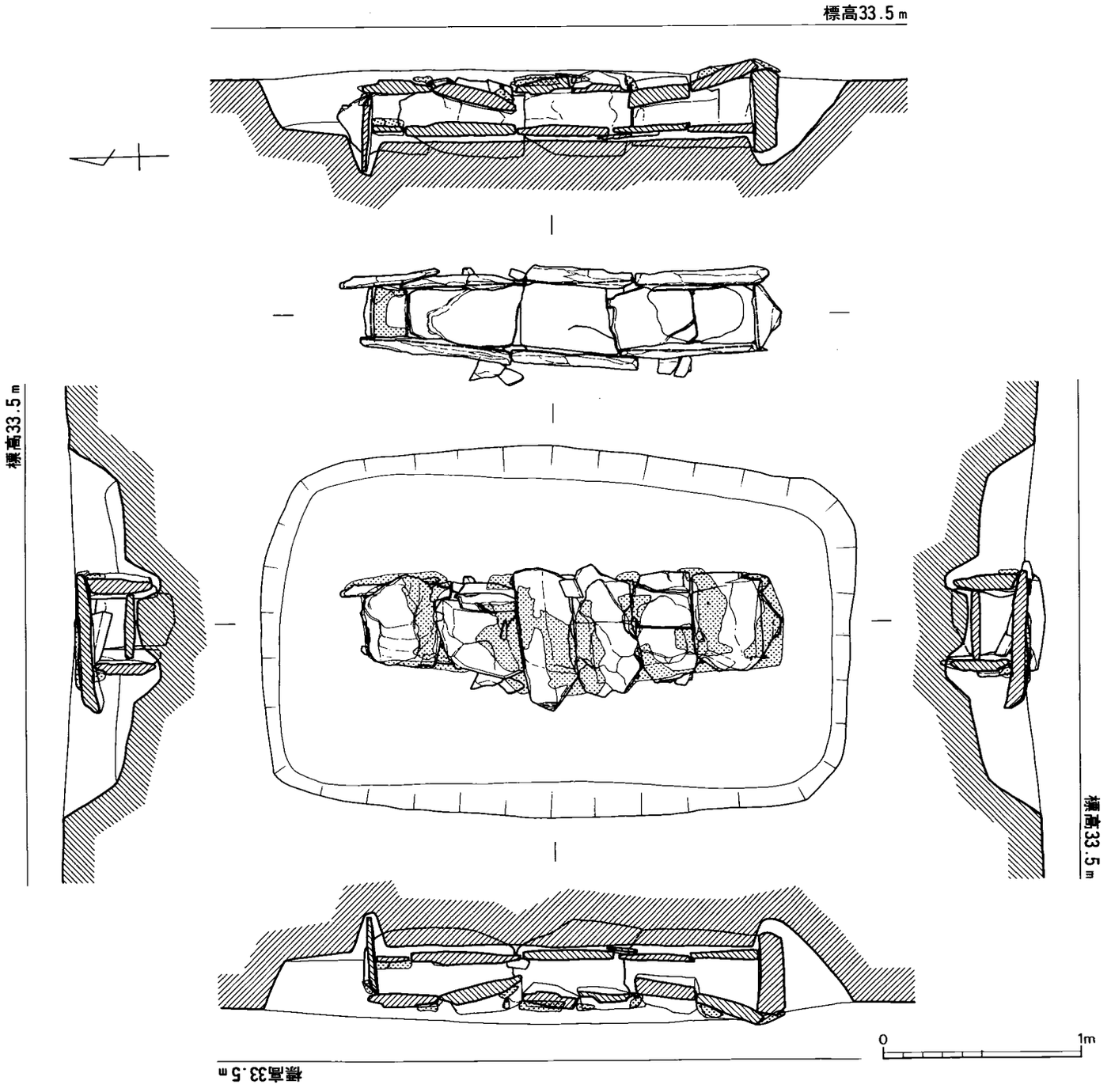
6号石棺墓（図版71－1・2，第176図）

6号石棺墓は，西側墓地群にあり5号石棺墓の北側に位置する。墓壙は，主軸長2.4m，幅2.4mの大きさの円形を呈し，最も深い東側で41cmある。墓壙内の少し西側に，主軸をS19°Wに向けた箱式石棺が構築され，東側の広くとられた墓壙底面には赤色顔料が散布する。

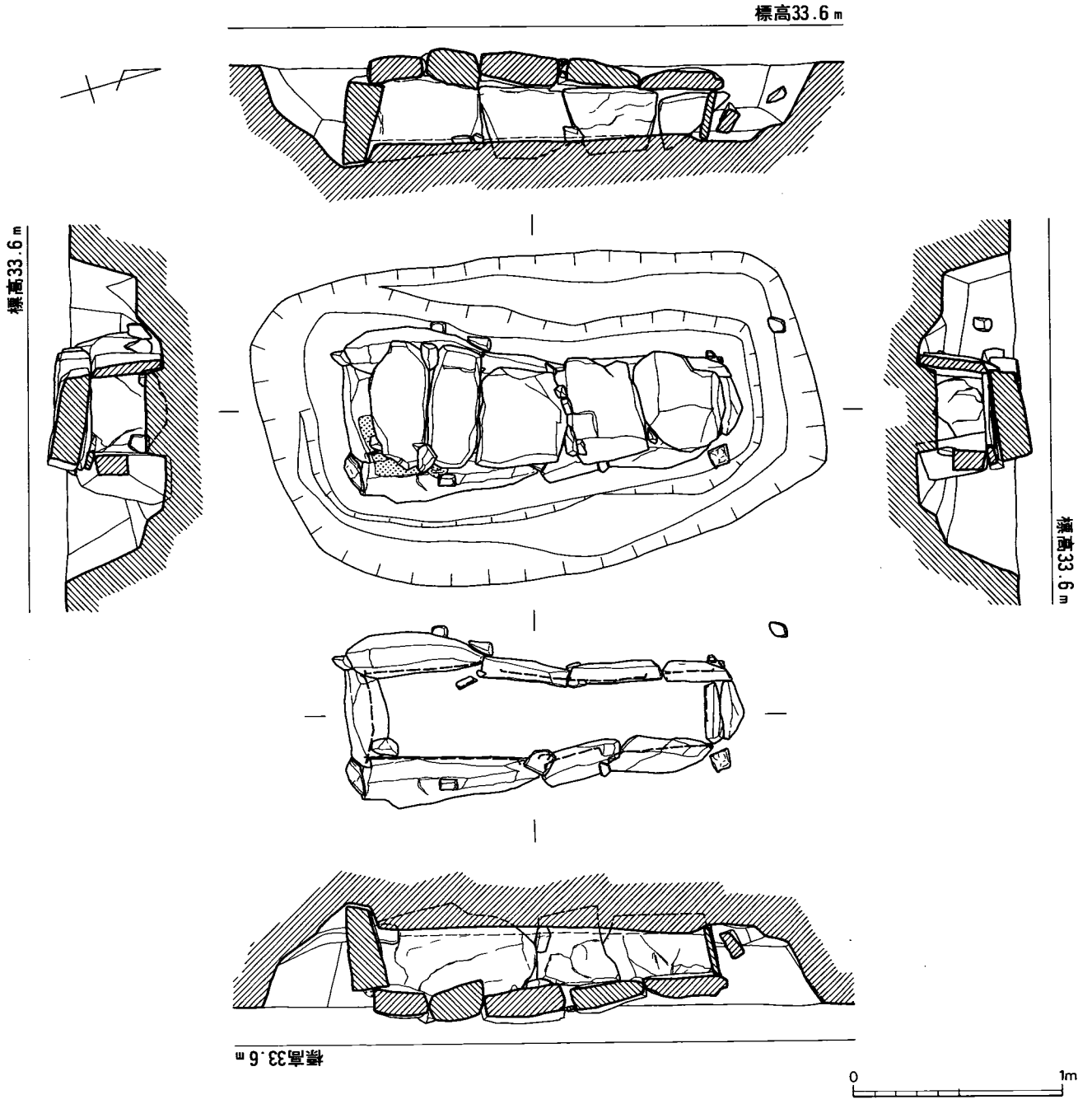
石棺は，小口に各1枚，両側壁に各3枚，蓋石に5枚の石材が使用されている。棺内には床石があり，大きな板石が4枚とその間を小ぶりの石で埋めている。石材には花崗岩が多いが，蓋石の南側3枚，両側壁中央の各1枚，床石の南端の1枚が結晶片岩が使用されている。石棺の周囲にも小ぶりの石があり，棺材のおさえに利用されている。石棺の内法は，主軸長1.77m，南側幅28cm，中央幅35cm，北側幅21cmの大きさあり，中央と南側が広いので，南側枕といえる。床石も南側が大きく，幅を合わしたものが使用されている。棺内法の深さは平均20cmで，レベル的には南端の枕側がわずかに高くなっている。石材間の密封には，わずかに粘土が使用されて



第176図 6 号 石 棺 墓 実 測 図(1/30)



第177図　7 号 石 棺 墓 実 測 図 (1/30)



第178図　8 号 石 棺 墓 実 測 図 (1/30)

いるが，蓋石上にはほとんど見られなかった。

棺外には，墓壙底面に赤色顔料が散布する外に，足元の北小口に接して鉄鎌１本が副葬されていた。（柳田）

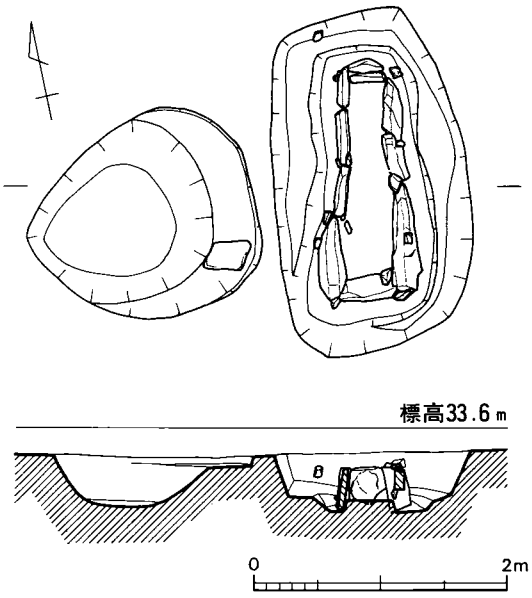
７号石棺墓（図版72，第177図）

長さ約３ｍ，幅1.9ｍ程の隅丸長方形の墓壙内にゆったりと構築された石棺墓で主軸をほぼ南北におく。墓壙検出面で南側の蓋石が若干露出する程度で棺自体は墓壙内に納まる。蓋は６枚の板石で行われ，蓋石の間隙は粘土で目張りをしている。石棺は内法で主軸長1.94ｍ，幅は南側で0.31ｍ，北で0.28ｍ，床石から天井石までの高さは南で0.27ｍ，北で0.18ｍである。両短壁は長側壁に挟み込まれるように構築されている。５枚の床石上には北側短壁に接してコの字形に厚さ４～５cmの粘土が置かれ，南側の床石２枚にわたって朱が見られた。粘土は枕と思われる構造ではなく，頭位は朱の見られる南側だと思われる。棺材はきわめて脆い雲母片岩である。（児玉）

８号石棺墓（図版73・74－１，第178図）

不整形方形プランの墓壙に組み立てられた石棺で主軸をＳ14°Ｗにおく。使用石材に統一性はない。蓋石上面レベルは南側が高く，北側が低くなるように架構され，墓壙を検出した時点で５枚の蓋石のうち南側３枚が露出していた。また南東側長側壁と南西側短側壁の隅角部は粘土で石組みのすき間をふさぐ努力がなされていた。石棺は内法で主軸長1.58ｍ，幅は南側で0.4ｍ，北側で0.35ｍを測る。周壁は墓壙底を一段掘り下げて石材を設置しており，使用石材は南寄の壁体ほど大き目で厚手のものを使っている。周壁の石材の合わせ目は小石を使ってパッキングの役目を負わせている。床面に枕の設置は見られなかったが，先述の諸点より頭位は南側だと考えられる。棺外より用途不明の鉄器が出土している。

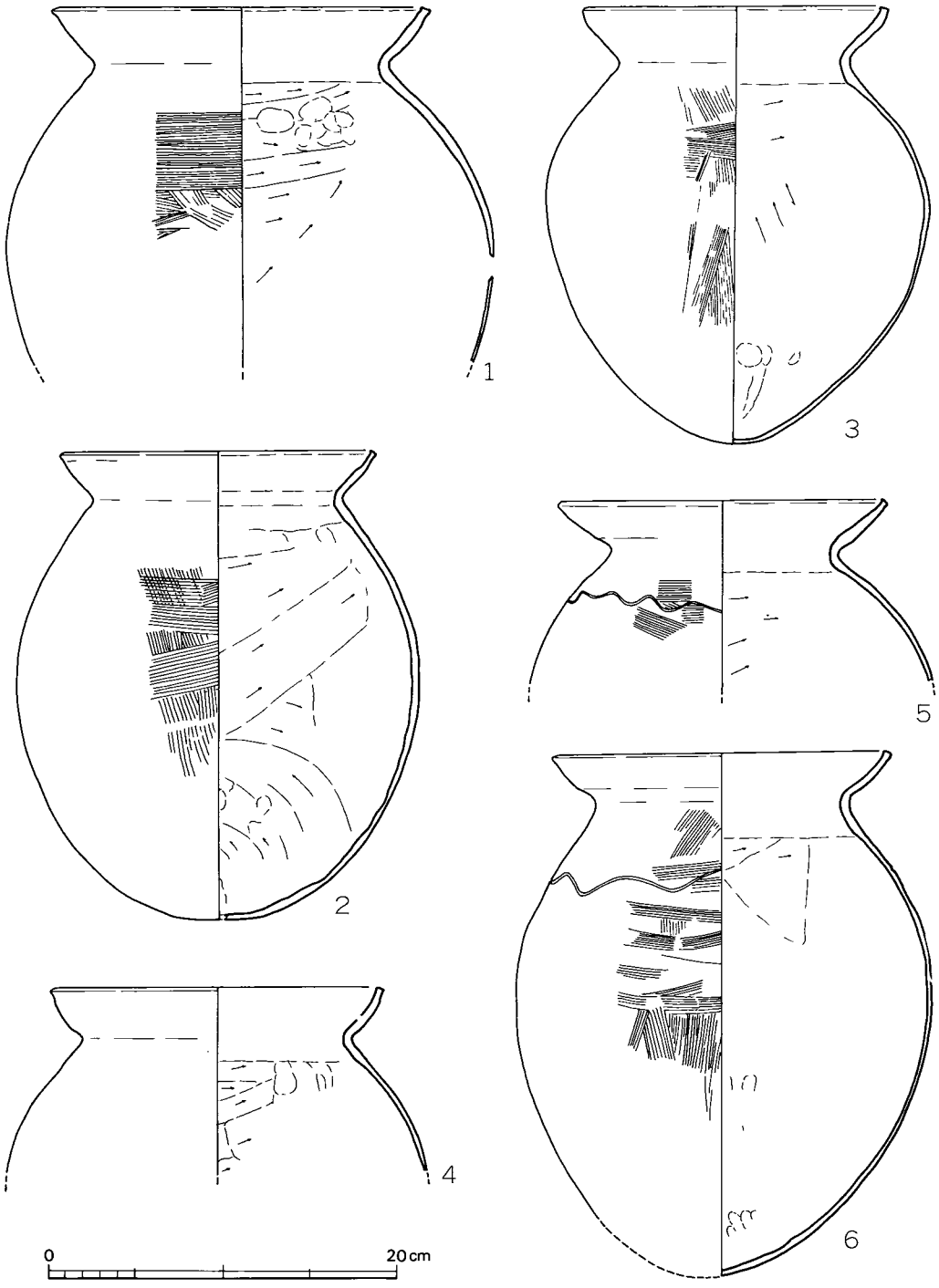
この石棺にほぼ接して西側に不整円形の土壙を検出した。土壙内には布留併行期の土器が多量に検出され，８号石棺墓との至近性，遺構検出面の同時性から，本石棺に関係性の深い祭祀遺構だと思われる。（児玉）



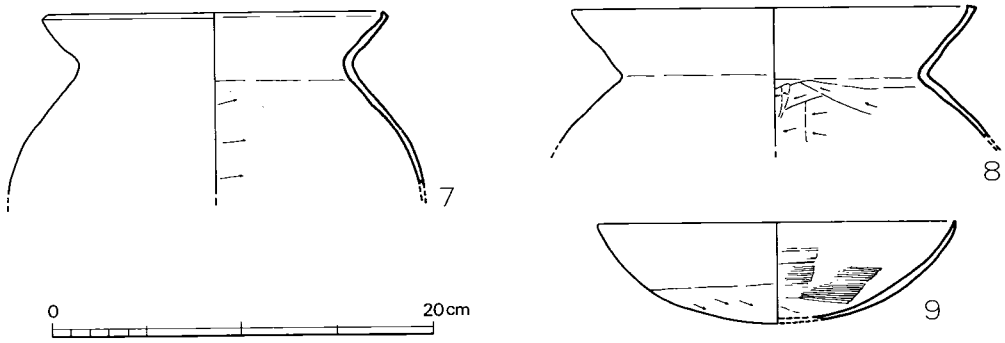
第179図　８号石棺墓と祭祀土壙実測図（1/60）

８号祭祀土壙（図版74－１，第179図）

８号石棺墓の西側には，石棺墓壙に隣接して不整円形の土器溜土壙がある。土壙は，



第180図 8号祭祀土壙土器実測図① (1/4)



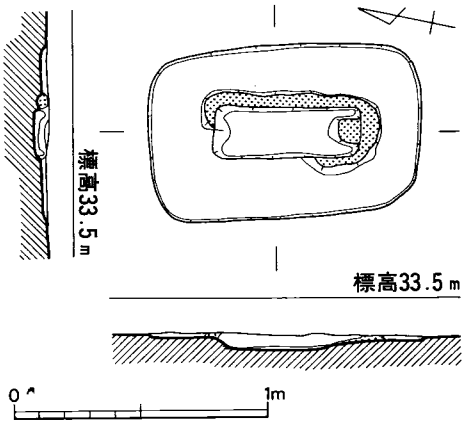
第181図　8号祭祀土壙土器実測図②（1/4）

東西径1.84m，南北径1.65m，深さ40cmの大きさで，断面形は摺鉢状を呈する。土壙内には，底面から浮いた状態で土師器甕が8個体分以上出土した。出土した甕は原形をとどめているものが多く，人為的に埋められたようで，土器型式もまったく同一型式である。用途不明鉄片も出土した。

土　器（図版78，第180・181図）　1～8は，同一型式の甕で布留式に属する。口縁部は同様に先端の内側を摘み上げており，胴部は3のように肩が張るもの，6のように長胴ぎみのもの，1のように球形のものがある。口縁部と同様に1～8に共通しているのは，肩部がいわゆる「なで肩」をしていることである。「なで肩」とは，胴部中位以下の曲線に比べて，肩部に直線的な部分があることをいうが，これは庄内式にはなく，典型的な布留式土器にもない，部分的な特徴である。肩部には，5・6のようにヘラ描波状文があるものもあるが，他のものはヨコにハケ目調整をして，胴中位のタテのハケ目や斜のハケ目と使い分けている。胴3分の1以下はこのハケ目をナデて消している。

器形としては，3のように肩が張るものは胴が短かくて庄内式のおもかげが残り，2・6のような長胴になるものもある。

9は，外面下半にヘラケズリがあり，弥生終末期のものと同様である。



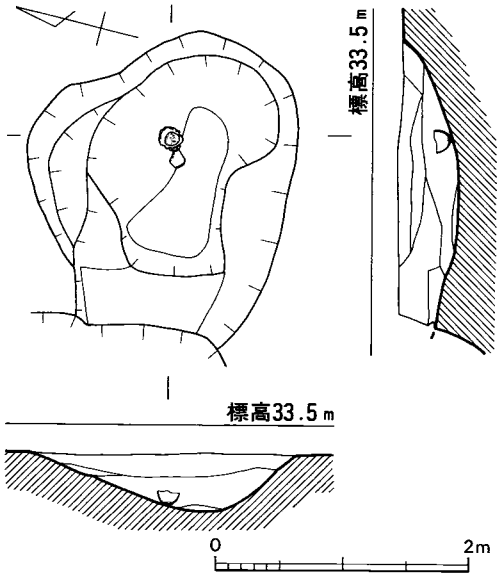
第182図　1号木棺墓実測図（1/30）

これらの土器は，土壙の性格上一括資料といえるもので，口縁部にその差がないことからも5号石棺祭祀土壙と違って一時に埋没したものである。時期は，畿内地方の布留式の古段階のものである。したがって，8号石棺墓もこの時期のものである。（柳田）

1号木棺墓（図版67－3，第182図）

石　橋

調査区の北側で7号石棺墓の東側に位置する木棺墓である。上部の大部分が削平され，かろうじて墓壙及び粘土帯から木棺墓である事が判明した。主軸をS11°Eにとり，長さ107cm，幅68cmの隅丸長方形の墓壙内中央部に棺を埋置する。木棺は長さ58cm，幅21cmと極めて小さい。小児用の床はほぼ平坦であるが，南側に一段高くなった箇所があり，粘土を敷いた枕であろう。棺の南・東から北側にかけての粘土帯は幅5cmで厚さ2cmほどである。棺床面には側板及び小口板の掘り込みはみられず，木棺の組合せ法は不明な点が多いが，残された棺の形状から両側板のみを立てて，周囲に裏込めの粘土を施したものであろう。（木下）



第183図　E71－S330 祭祀土壙実測図（1/60）

土壙墓

土壙墓は，西側墓地群の木棺墓以外に，東側墓地群に2基が確認されている。これらは1・2号石棺墓の北側にあるが，石棺墓以上に削平されているため浅いものとなっている。

1号土壙墓（第162図）

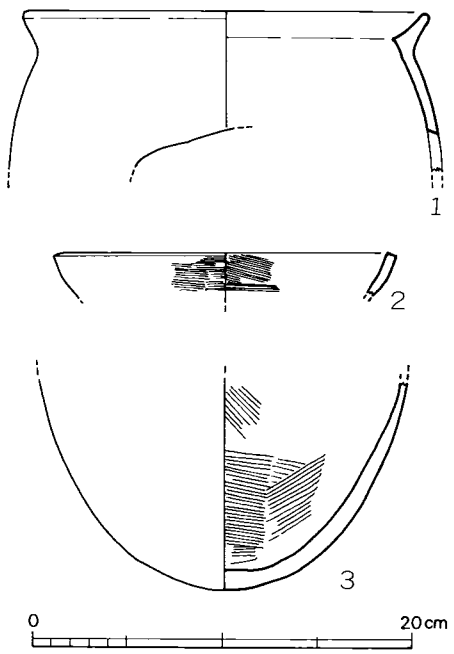
2基の土壙墓中で南側に位置するもので，どちらが頭部になるか不明。土壙墓はN28°Eに主軸をとり，長さ1.84m，中央幅50cm，南側幅37cm，深さ11cmの大きさで成人用。南側床面が北側より4cm高いので南枕の可能性がある。

2号土壙墓（第162図）

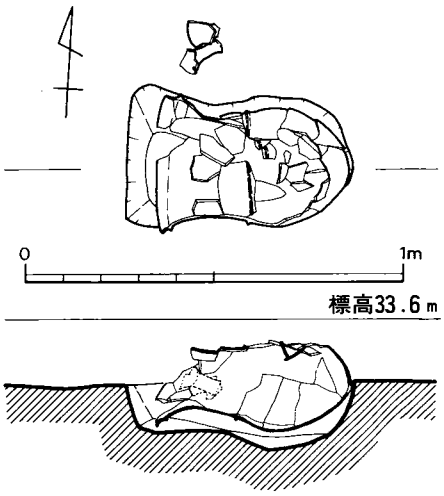
この土壙墓は，発掘区の北端に検出されたもので，西側半分が未掘である。土壙内から粘板岩砥石片が出土しているから弥生後期後半以後。土壙墓は，主軸をS85°Eに向け，長さ1.8m以上，中央幅63cm以上，東側幅48cm，深さ7cmの大きさで，成人埋葬が可能であるが，削平されたにしても浅すぎる感がある。

祭祀土壙（図版75－1，第183図）

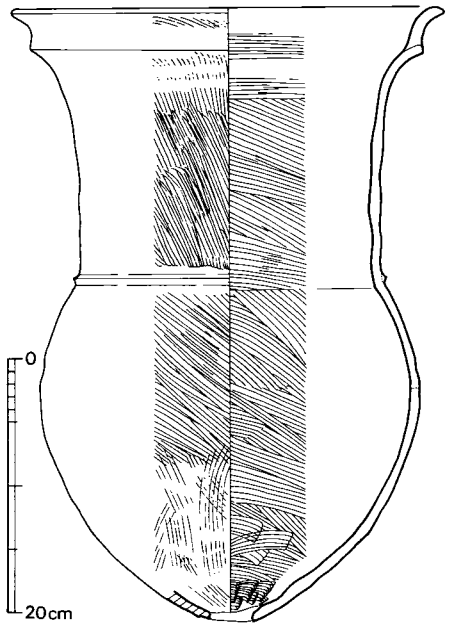
この土壙はE71－S330にあり，北東部を発掘していないのでどの石棺墓に付属するか不明である



第184図　祭祀土壙土器実測図（1/4）



第185図　1号甕棺墓実測図（1/20）



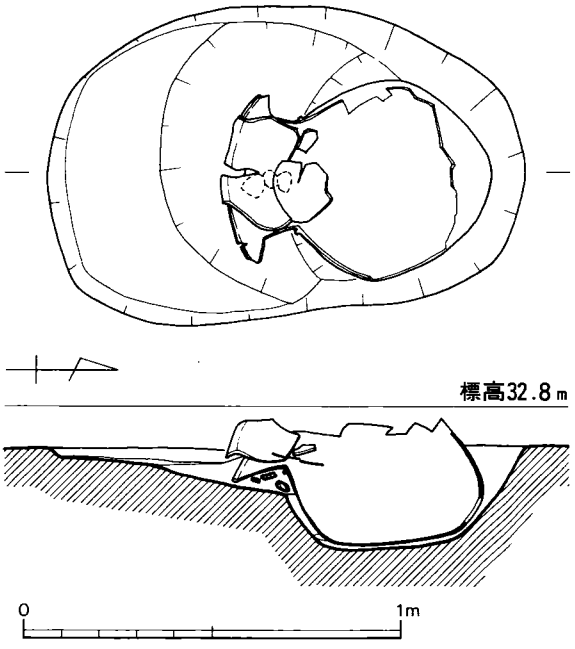
第186図　1号甕棺実測図（1/6）

が，現状では南側に7号石棺墓が最も近い。この土壙は，上部に甕棺が埋葬され，同時に5号石棺の墓壙に切られているので両者より古いことがわかる。土壙の大きさは，東西現存径2.5m，南北径2.03m，深さ44cmで，不整形である。土壙内には遺物が少なく，土壙検出前の甕棺のレベルでは，中期・後期・終末期の土器が多かった。土壙内で出土した土器片は，第184図に示す3片だけである。しかし，甕の底部破片の中には赤色顔料が少量検出された。やはりこの土壙も祭祀遺構と思われる。

土　器（図版78，第184図）

1は，透窓付きの甕形土器で，口縁の立上りから弥生中期末のものである。口径21.6cmの小型甕で，胴部に隅丸長張方形の透窓が焼成前に開けられている。この祭祀遺構とは直接関係ない土器片である。

2は口縁部の細片であるが，立上りが内彎する特徴をもつので取上げた。

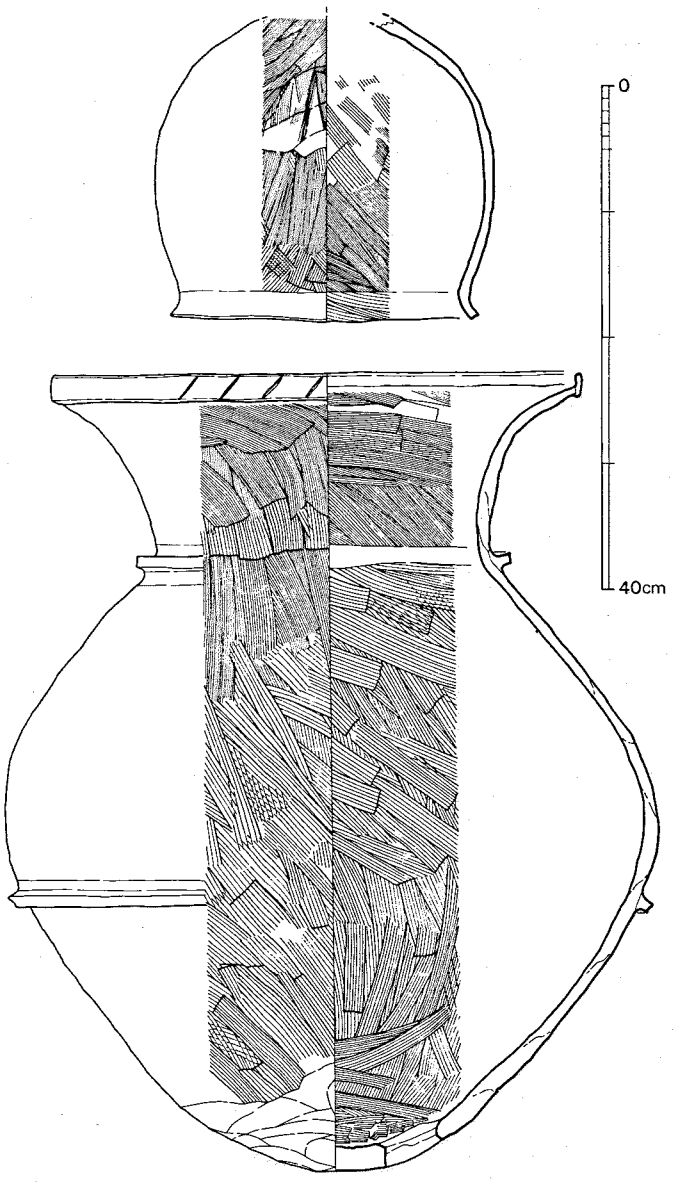


第187図　II－8甕棺墓実測図（1/20）

口縁先端のみヨコナデで，内外面はヨコにハケ目調整されている。

3は丸底甕の底部と胴部下半であり，これに赤色顔料が入れられていた。内面はハケ目の後ナデられ，外面はタテ方向の粗ハケ状痕をナデ消している。

この祭祀土壙は，2・3の土器片から弥生終末から5号石棺より古い古墳初頭のものといえる。　　（柳田）



第188図　II－8 甕棺実測図（1/6）

甕棺墓

1号甕棺墓（図版75－2・79－1，第185・186図）

7号石棺墓の北東に営なまれ，同石棺墓に伴なう祭祀遺構と考えられる土壙を切って埋置される。主軸をS87°Eにとり，中型の長頸の壺を用いた単棺である。傾斜角8°で，上半は若干削平され，木蓋等の痕跡は認められない。北に接して，高杯脚部と鉢類の脚片が検出され，供献品の可能性も考えられる。

使用棺は，長めの胴に長頸を付け，短かく外反する複合口縁につくり，尖り気味の丸底は焼成後穿孔する。口径34.2cm，器高48.6cm，やや上位となる胴最大幅は30cmを測る。口縁周縁，三角凸帯周辺の横ナデ部分を除き，他は，全面に極めて粗い櫛様工具によるハケ目を施す。胴部外面下半は，極く雑な調整にとどまる。底部内面では工具を押し乍ら回転させる。胎土に粗石英粒多く含み，焼成良好で内面淡茶～淡褐色，外面茶褐色

を呈する。胴上半相対する位置に2ヶ所黒変部がみられる。

長頸・長胴化している点などから，在地的要素を強く残し乍らも，既に，布留式期の範囲に収まる類の土器であろうと考える。（中間）

石橋II－8甕棺墓（図版75－3・79－2，第187・188図）

集石遺構とした，径0.65×0.70mの浅い土壙の西側に接して出土した。上甕は底部を欠失し，反転するなど原位置を示さなかったが，径の小さい鉢状の甕の口縁部を打ち欠いて径の大きい上甕内に挿入したものと考えられる。墓壙は，上甕の床面で若干の段をなして傾斜している。

上　甕　器内面は，口縁部を粗な・胴上半部は密なハケ目調整のままである。下半部は粗なハケ目後に下位のみナデを施す。器外面は，口縁部は縦方向のハケ目後にヨコナデを施す。胴上半部は斜方向の粗なハケ目後に，縦方向の密なハケ目で調整する。下半部は，シャープなヘラ削り後に不定方向のハケ目を施こすが，削りの面はそのまま認められる。復原状態は，図示の⅓ほどで反転図である。

下　甕　器内面は，頸部に密な，胴部は粗なハケ目を丁寧に施す。底部は粗なハケ目を雑に深く施している。口縁部と頸肩部のみはヨコナデである。器外面は，全体をハケ目調整後に，底部のみヘラ削りを施している。なお，胴部の突帯は，焼成時に既にその一部を失なっていたことが，剥離部の色調で認められる。復原状態は，図示の½強である。

この甕棺は上下共に内外面にわたってハケ目が認められ，また胴部下半や底部の外面にヘラ削りを施しているなどの共通点が指摘できる。また，タタキ痕は認められず，ハケ目は丁寧に施されている。下甕では，斜方向の浅い刻み目を入れた口唇端部は薄手で立ち上がり，丸味のある底部となっている。これらの特徴は，ハケ目を多用する弥生期の流れを残しつつも，既に古墳時代前期に属するものと言えよう。（馬田）

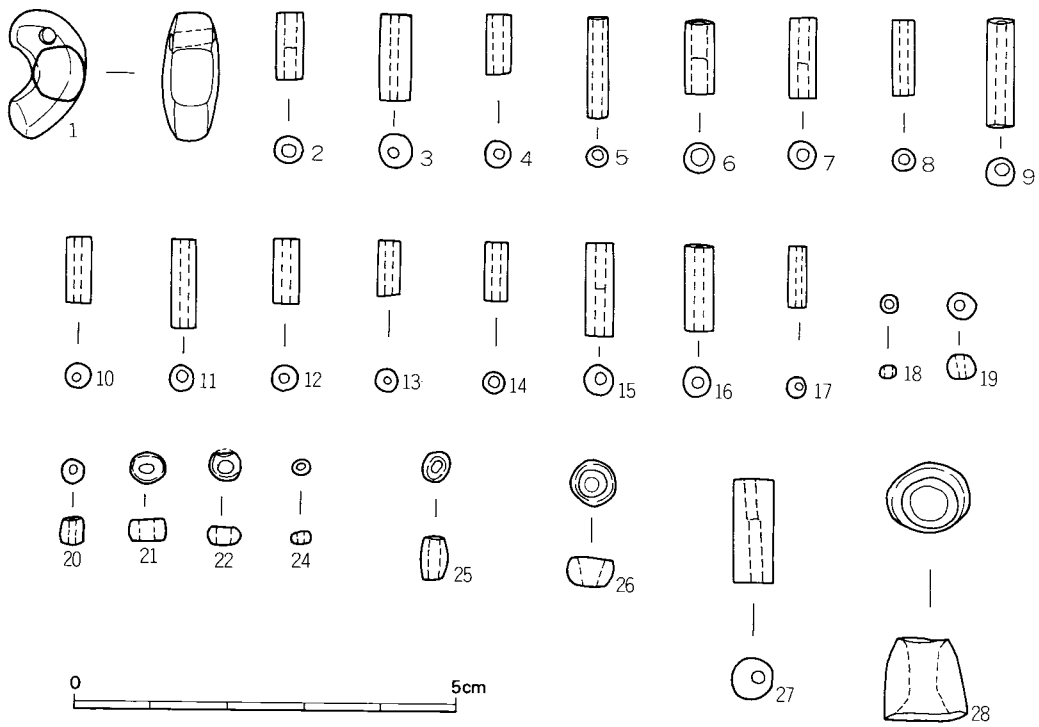
(2)　II－11・12　玉類・鉄器・石器

玉　類（図版79－3，第189図，表10・11）

1～25は5号石棺墓出土，26は7号石棺墓出土，27は8号石棺墓出土，28は5号石棺祭祀土壙西側第3層からの出土である。

勾　玉（1）　C字形をなし背部に丸味をもち，幅は尾部にかけてややすぼまる特徴をもつ硬玉製勾玉である。全長は10.69mm，最大厚7.3mm，最大幅6.7mmを測る。孔は両側穿孔で最大孔径2.85mmを測る。色調は白い部分もあるが，あざやかな淡緑色を呈する。

管　玉（2～17）　総数16個が勾玉とともに出土した碧玉製管玉で，計測値は表10のとおりである。長さ14.09mm（9）から7.45mm(13)，径は4.15mm（3）から2.45mm(17)までの大きさがある。孔は両側穿孔のもの5個（2・6・7・9・15），片側穿孔のもの11個である。色調は濃緑色の



第189図 玉類実測図（実大）

表10 5号石棺出土管玉計測表

（単位mm）

No.	長	径	孔径 最大	孔径 最小	穿孔	色	No.	長	径	孔径 最大	孔径 最小	穿孔	色
2	8.95	3.50	1.95	1.55	両	濃緑	10	7.85	3.15	1.05	0.85	片	淡緑
3	11.6	4.15	1.40	1.30	片	淡緑	11	11.65	3.30	1.45	1.35	片	濃緑
4	8.00	3.20	1.55	1.40	片	〃	12	8.55	3.25	1.30	1.10	片	淡緑
5	13.5	2.90	1.50	1.40	片	〃	13	7.45	3.00	1.30	0.75	片	〃
6	9.60	4.00	2.15	2.10	両	〃	14	7.90	3.00	1.30	—	片	〃
7	10.70	3.65	1.85	1.80	両	濃緑	15	12.65	3.85	1.75	1.60	両	濃緑
8	10.15	2.95	1.05	—	片	淡緑	16	11.30	3.85	1.75	1.15	片	〃
9	14.05	3.65	1.65	—	両	濃緑	17	8.05	2.45	0.95	—	片	淡緑

もの6個，淡緑色のもの10個である。

ガラス小玉（18～22・24） 7個出土したが18・22は一部欠損し，23はもろく取上の際小片化

表11　5号石棺出土小玉計測表

（単位mm）

No.	径	厚	孔径	分類	色	No.	径	厚	孔径	分類	色
18	2.40	1.65	1.0	D	スカイブルー	22	4.4	2.55	1.9	C	ブルーグリーン
19	3.95	3.0	1.3	C	〃	23	—	—	—	—	
20	3.15	3.4	1.15	B	〃	24	2.3	2.0	1.9	D	
21	4.4	3.15	1.7	C	〃						

したため計測・実測はできなかった。色調は22がブルーグリーン，他はスカイブルーである。形態は，径に比して厚みのある特徴を有すもの（19・20），径が4.4mm，厚さ2.55～3.15mmと薄手のもの（21・22），径が2.2～2.4，厚さ1.65～2.0mm前後の小さなもの（18・24）の3つに分類できる。全体の計測値は表11のとおりである。

硬玉製小玉(25)　墓壙の東側埋土中から検出した硬玉製の小玉である。胴部に最大径をもち，径に比して厚みのある特徴を有する。最大径3.85mm，厚さ5.55mmを測る。孔は両側穿孔で孔径1.7mm前後を測る。色調は全体に淡緑色で端部がやや白っぽい。

硬玉製小玉(26)　7号石棺墓墓壙西側隅から出土した小玉で，淡緑色を呈し，全体に白い斑点がみられる。径6.0mm，厚さ3.9mmを測る。穿孔は片側から行なわれ，孔径は最大で3.65mm，最小で1.85mmを測る。

管　玉(27)　8号石棺墓墓壙上層から出土した濃緑色璧玉製管玉である。全長13.65mm，径は5.40mmを測る。孔は両側からの穿孔で，孔径は1.8mmを測る。

玉(28)　調査区西側の第3層から出土した濃緑色の滑石系の石材を使用した大ぶりの玉である。形態は截頭円錐を側面から押しつぶした様な形で平面形は楕円を呈する。長さ10.8mm，径は，上部で長軸7.4mm，短軸7.0mm，下部で長軸11.1mm，短軸8.85mmを測る。孔は両側穿孔され，最大孔径8.15mm，最小孔径6.5mmを測る。縄文期の所産である可能性を有する。　（池辺）

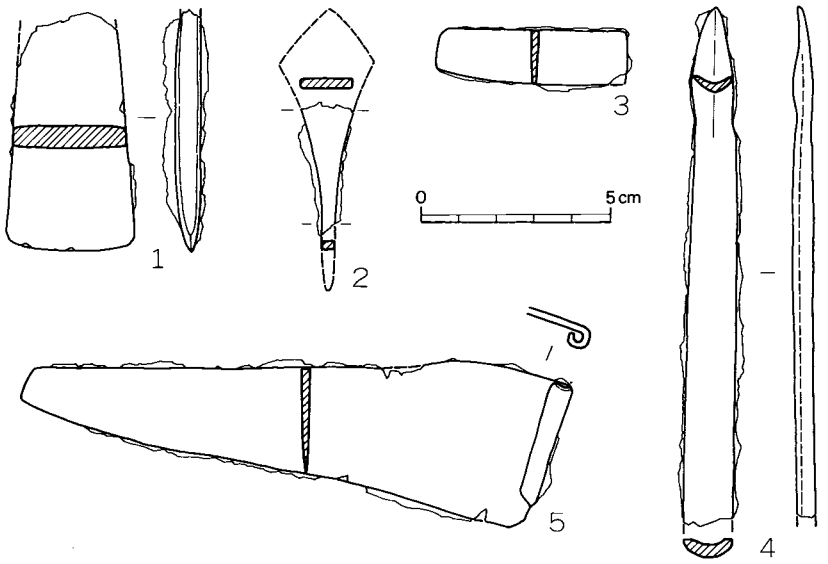
鉄　器(図版80－1，第190図)

農工具として短冊形鉄斧1・鎌1・鉇1・攻撃用武器として鉄鏃1，他に不明鉄器1が出土している。

短冊形鉄斧(1)　5号石棺墓壙内から出土した鍛造品で刃部幅3.4cm，現存長6.2cm，厚さ0.6cm前後をはかる。刃部平面形はゆるい弧線を描き，断面は左右対称の蛤刃状を呈する。

鉄　鏃(2)　5号石棺墓壙内からの出土品で茎と身の過半を欠失する。刃は山形部分の二辺につくり出されたものであろう。平面形は『三雲遺跡』Ⅰに報告された加賀石出土例に近いと推定される。復原長は7.5cmである。

鉄　鎌(5)　6号石棺の棺外副葬品である。直刃鎌で刃部長13.3cm，身幅は中央部で2.7cm，木柄着装部付近で4.1cmを測る。鉄板の1短辺を折り曲げ，柄は刃に対して直角に直装される。



第190図　鉄器実測図（1/2）

鉄　鉇（4）　大溝から出土した。茎尻を欠失し，刃部先端から3cmの所でいったんくびれ，断面が浅い蒲鉾形を呈する鉇である。現存長13.7cm，最大幅1.4cm，くびれ部幅1cmをはかり，厚さは0.3cm強でやや厚い。木質の銹着は見られない。布留式の古段階に併行する時期のものと考えられる。

刀子状不明鉄器（3）　8号祭祀土壙内で検出した略完形の鉄器である。長さ5.1cm，幅1.5cmをはかる。厚さは，図の断面上側で0.3cm弱，同じく下側で0.1cm強で長側辺の一辺が薄くつくられているが明瞭な刃は観察されない。あるいは刃部が磨滅している可能性もある。削ることが主目的の工具類であろうと思われる。

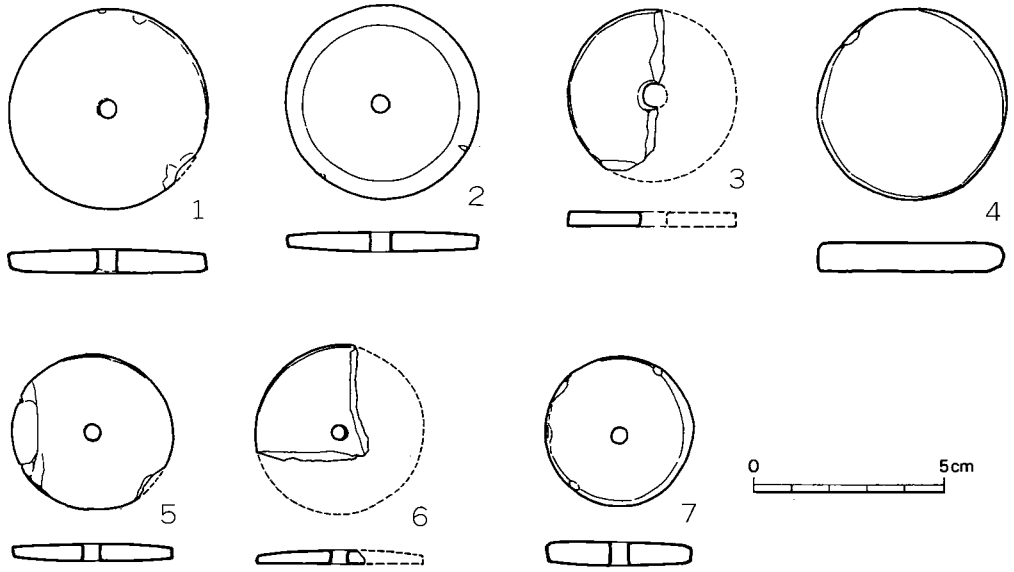
石　器

紡錘車（図版80－2，第191図，表12）　石橋II－11・12地区で，紡錘車は7個発見されたが，直接遺構に伴うものが少ない。1は，大溝上層出土であるから，布留式土器以前といえるが，

表12　石橋II－11・12　紡錘車一覧表

（単位mm，g）

No.	遺　構	時　期	材　質	直径	厚	孔径	重	備　考
1	大溝上層	古墳初以前	白雲母片岩	53	6.5	4.6	32.8	一部欠損
2	5号石棺祭祀溝	〃	〃	51.2	5.4	4.6	25.4	沈線円
3	〃	〃	〃	46＋	4.2	6	8.1＋	半欠
4	6号石棺墓壙	〃	〃	50	8.6	－	43.3	未製品
5	E64・S325 3層	弥生終末	〃	42.3	5.1	3.6	16.1＋	一部欠損
6	E64・S331 3層	〃	〃	(44)	4.1	3.3	5.9＋	半欠
7	E68・S325 3層	古墳初以前	〃	39	6.7	4.5	20.6	完形品

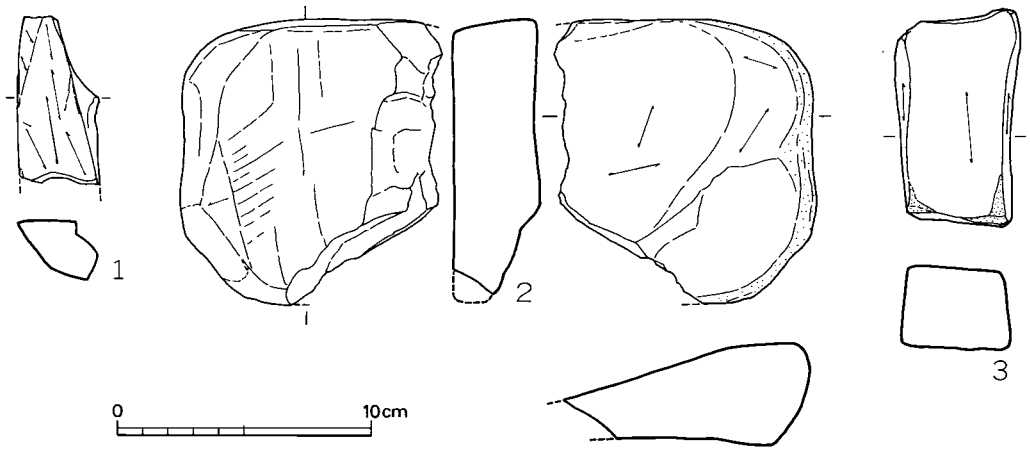


第191図　紡錘車実測図（1/2）

弥生終末のものであるかもしれない。このことは，5号石棺墓祭祀土壙・6号石棺墓壙内出土の2～4についても同じで，石棺埋葬の祭祀か副葬品として使用されれば，石棺墓と同時期の布留式の時期となるが，その可能性は少なく，弥生終末というところに落着くだろう。とにかく石橋II－11・12地区は，石棺墓より古い遺構は縄文の埋甕と弥生中期の大溝の一部を調査しただけであるから，現時点で発見された弥生期以前の遺物は混入品と考えたらよいだろう。

出土した紡錘車は，表12に示すとおりである。

砥　石（図版80－3，第192図）　1は2号土壙墓内から出土した粘板岩製破片。図表面の1

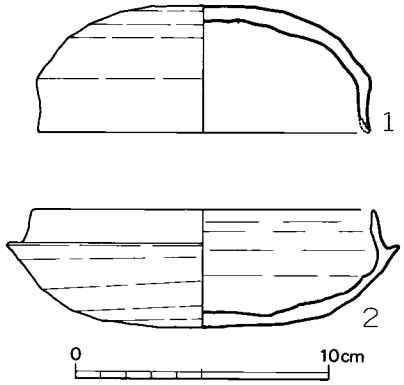


第192図　砥石実測図（1/3）

面のみが使用され，他は破損しているが表面は磨滅している。弥生後期のものの混入だろう。

2は，5号石棺祭祀土壙の下層から出土した砂岩製破片。祭祀に関係あるものとはかぎらない。砥石は両面が使用され片側面破損している。

3は西側礫群から発見された砂岩製荒砥。4面を使用した棒状砥石であるが一方が破損。



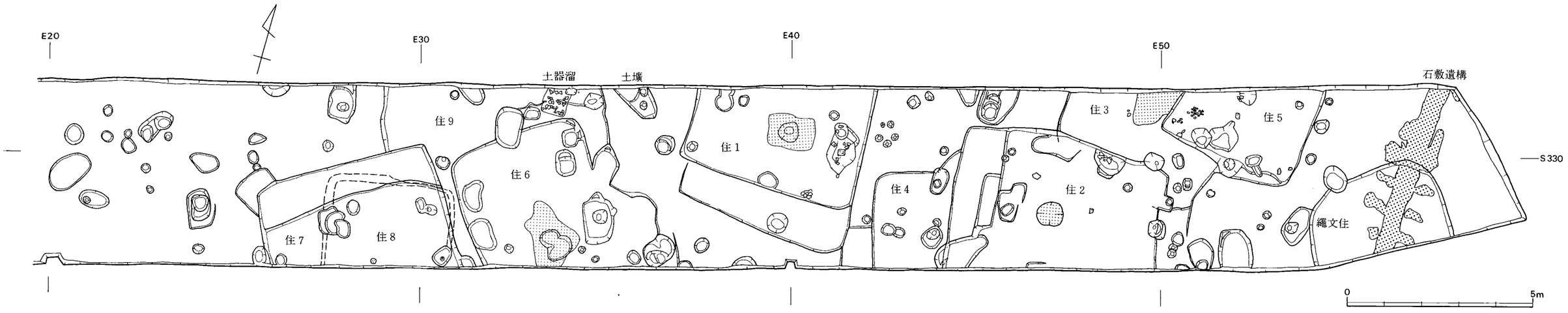
須恵器(第193図)　須恵器は，E68－S227の表土直下で発見されたこの2点のみである。2は，破片が第3層に食込んで小範囲に集中していたので，削平された遺構が存在した可能性もある。1は外部に不鮮明な段が付き，2は通例の蓋受けをもつ杯身である。2の器高4.6cm，口径13.5cmの大きさである。6世紀後半のものであろう。

4　小　結

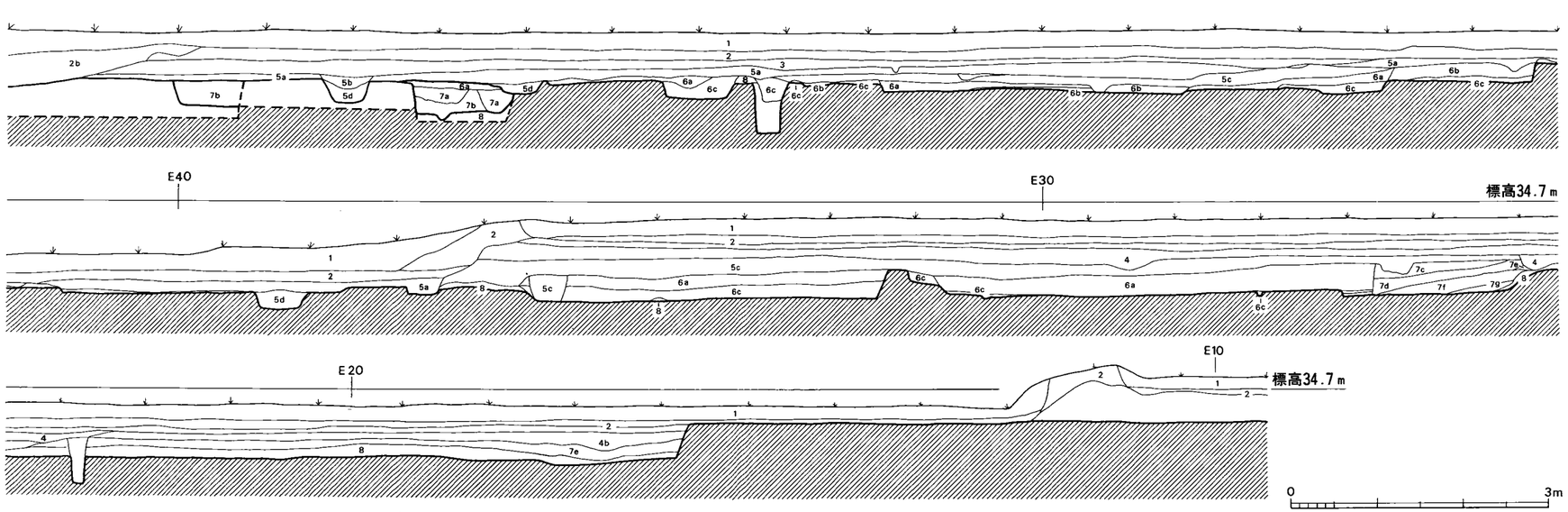
石橋Ⅰ－2の甕棺群は，小範囲に7基が集中し，周囲に同様な甕棺群があるにしろ，2～3m以上の間隔を置いて独立した一群といえる。このような小群集墓が1つの単位となって，先に述べたような加賀石Ⅰを中心とした集落と墓地群を構成している。しかも，いわゆる金海式甕棺の前段階の時期を主体とする点で重要な資料となった。柿木—11で金海式が中期初頭となり，青銅武器の副葬開始時期ともからんで，甕棺と日常生活用土器の共伴関係を密接に編年づける点で，石橋Ⅰ－2の下層生活遺構の調査も重要なものとなろう。

石橋Ⅱ—11・12地区の石棺を主体とする墓地群は，この種墓地群に時期的目安をあたえるものになった。石棺墓の時期決定には，副葬品がない場合には同墓地群にある甕棺墓によって時期を決定してきた。同墓地群に甕棺墓もない場合は，漠然と弥生後期とするか，弥生終末から古墳初頭とされてきた。甕棺墓が存在する場合も，終末期とされる西新式甕棺であることが多かった。西新式の大甕は番上Ⅱ－6の2号土器溜のように大甕ほど様式に停滞性が見られ，布留の時期までその伝統を受継いでいる。このような中にあって，石橋Ⅱ—11・12地区の墓地群は4世紀後半代といわれている布留期の一般墓地群が明らかになったことは意義がある。しかも，4世紀後半という時期には前方後円墳や方形周溝墓が存在しながら，先進地域においても弥生的墓地構成を継続している集団があり，古墳発生期の階層的墳墓関係の一端がうかがえる。

石橋Ⅱ—11・12の石棺群は，北はⅡ－8から南はイフ－3まで，南北の長さ約200m以上に及ぶ墓地構成をとり，その墓地群の位置が，時期的に同じ端山・築山・茶臼塚古墳という前方後円墳群に隣接して存在することも，墓地構成上見逃がすことのできない一面である。（柳田）



第194図 サキゾノⅠ－4・5遺構配置図(1/100)



第195図 サキゾノⅠ－4・5土層図(1/60)

第6節　サキゾノ地区の調査

1　はじめに

サキゾノ地区の調査は，昭和52年度の新設道路設置に伴うⅠ—1・4・5・6・7・8地区と昭和53年度の新設道路設置と圃場整備で削平されるⅠ—10・14・15地区を実施した。

今回報告するのは，石橋Ⅱ—11・12地区に隣接するⅠ—4・5地区分で，弥生時代～古墳時代の住居跡をはじめ，土器溜め・土壙・石敷遺構・多数の柱穴様ピット等の遺構を検出しえたが，Ⅰ—4西部は削平を受け礫の多い地山となっており遺構は皆無の状態であった。

なおサキゾノ地区の縄文時代遺構・遺物は第4節に前述したのでこの頃では除いている。

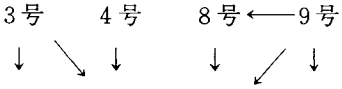
サキゾノⅠ—4・5の調査は，柳田康雄・小池史哲が担当し，川村博・小林義彦が参加した。

2　遺構と遺物

(1)　住居跡

サキゾノⅠ—4・5調査区では，9軒の住居跡が検出でき，弥生時代住居跡は1・3・5・9号住居跡，2・6・7号住居跡は古墳時代に属するが，4・8号住居跡については時期を決し難い。

各住居跡の切り合いは以下のとおりである。



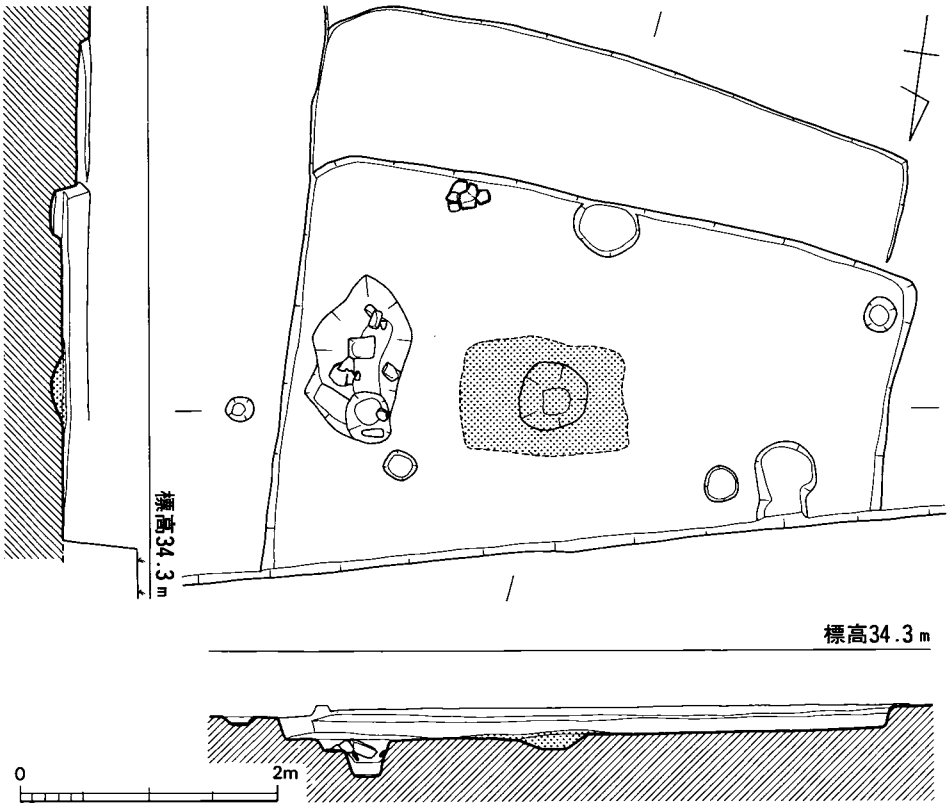
（古→新の関係を表わす）

なお住居跡内出土の石器類等は後にまとめて記述することにする。

1号住居跡（図版82—1，第196図）

Ⅰ—5西端部にあたるE37～42で検出できた長方形プランを呈す住居跡で，北側半分が調査区域外に及ぶ。確認できた長辺4.5m以上・短辺4.8mを測り，削平を受けた周壁は15cm程度の高さとなっている。短辺にあたる南壁に沿って床面より約10cm高いベット状遺構を伴っており，西側で0.9m，東側1.2mの幅を有すが，西壁はやや内側に入る。周溝は存在せず，床面は黄色粘土で堅緻，焼土・灰が中央部にみとめられる。

この焼土・灰は東寄りにやや厚く堆積し0.5～1cm大の焼土粒が北東寄りに多く観察できたが，



第196図 1号住居跡実測図(1/60)

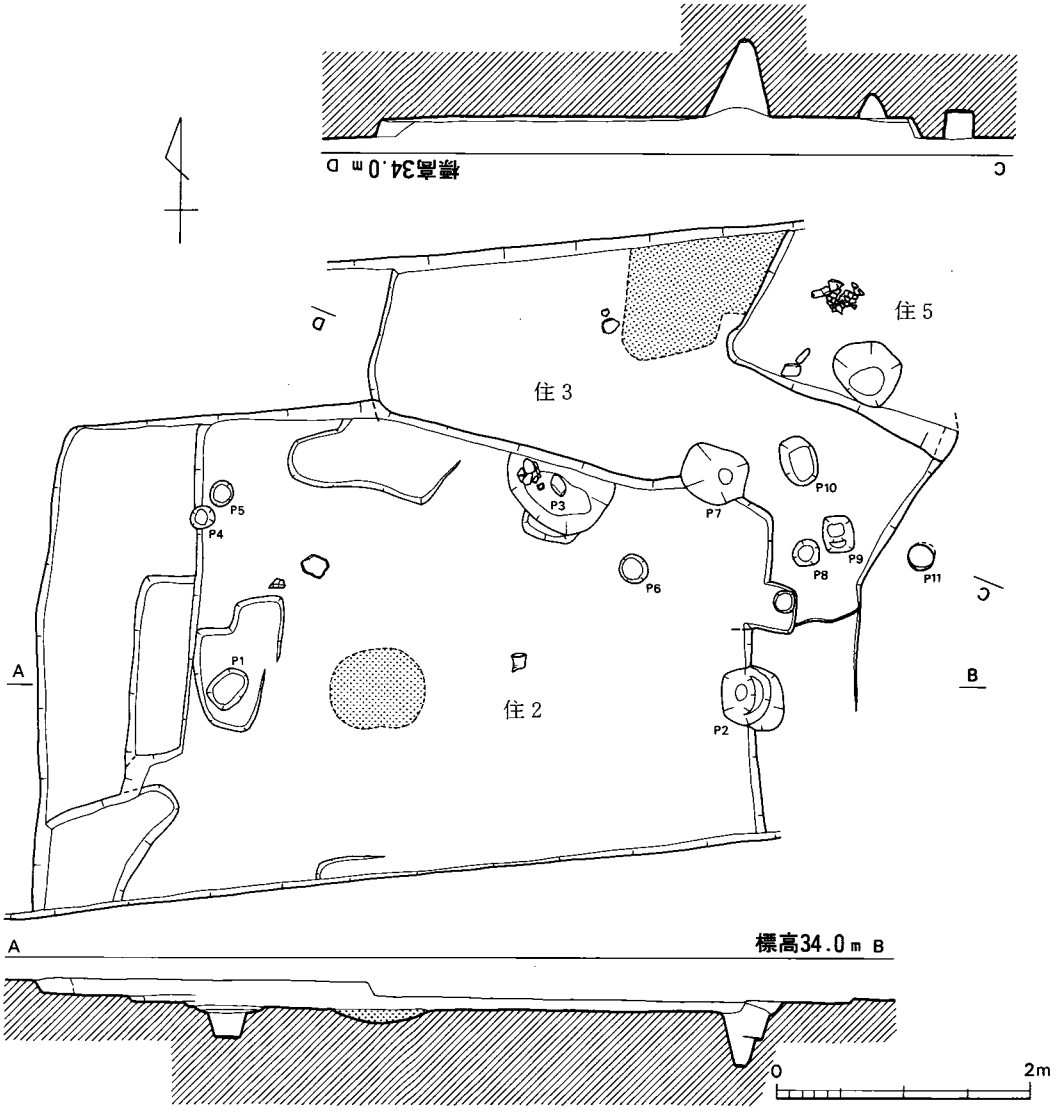
これらを除去すると，直径約50cm・深さ約10cmの炉穴状のピットとなり，灰等の厚みは最厚部で13cmを測る。

床面を掘り込んだ柱穴様ピットは6ヶ所検出できたが，東部の大きなピット以外は浅く主柱穴と考え難いものであるが，東部の大きなピットはやや大きな土器片や石塊を含み，北端で深さ約30cmになる。

1号住居跡からは，弥生後期土器・石器類・鉄器・ガラス小玉が出土した。

土　器(図版86，第198図)　1は平底の甕底部破片で，胎土に花崗岩質の砂粒と若干金雲母粒を含み，外面にハケ目を施し，内面をナデ仕上げしている。2は壺の底部破片で，底面は丸味を帯びるが平底で，内底面には指頭圧痕が処々にみられる。風化によって器肌に花崗岩質砂粒・金雲母粒等が浮び上り，外面の一部にハケ目の痕跡を残す程度である。3も2と同様の底面を有すが，やや長胴になる甕で外面にハケ目，内面をナデ仕上げし，底外面もナデられる。胎土には花崗岩質の砂粒・金雲母・褐色粒等を含む。

4は，高杯杯部破片で，口縁は短く立ち上り端部で外方に折れまがる形状をなし，屈曲部の外面やや上位に極浅い沈線様の凹みが1条みられる。花崗岩質砂粒・金雲母粒等を含む胎土で，



第197図　2・3号住居跡実測図(1/60)

器面が風化しており細かな調整方法まで観察できない。5は器高に比して3倍以上の口径を有す椀形土器で，砂粒・金雲母・赤色粒等を含む胎土で，内外面共に横方向を中心としたハケ目を施し，外面上半部はナデ仕上げされる。6は器高と口径の比が1：2程度の椀形土器で5と同様な胎土で内外面共にナデ仕上げされている。7は胴部が細長い形状になるとみられるが，底部寄りの破片で全体の器形は不明。花崗岩質の砂粒・金雲母等を含み，ナデ仕上げされるが内底面付近は指頭圧痕が残る。

2号住居跡(図版82—2，第197図)

サキゾノ

Ⅰ－５のＥ44～50に検出できた不整方形プランの住居跡で，南部は調査区域外に及ぶ。西側で４号住居跡を切り，また北東側で３号住居跡を切っているため，特に北東側でのプラン確認が難行した。あるいは北壁が更に外側に出るのかも知れない。但しこの場合，北東隅に検出できたコーナーラインはベット状遺構の内側にあたる段と解釈すべきであり，東壁では0.8ｍ外側にみられる段が相当することになる。しかし調査時に確証を得られなかったので，ここでは一応内側の段を周壁として扱った。

規模は，長辺5.6ｍ，短辺3.8ｍ以上，周壁高の最高値22cmを測り，西側に幅 1.1ｍ程度のベット状遺構を伴うが，ベット状遺構は南東寄りで低い段となり，南は落ち込む。中央部の床面は黄色粘土で堅緻だが周壁付近はやや軟質である。床面を掘り込んだ柱穴様ピットのうち，Ｐ１の深さ約25cm・Ｐ２約45cmの２穴は深く主柱穴と考え易い。Ｐ３～Ｐ６は約10～15cmの深を有しているがＰ３は土壙状になり，土器片，石等を含む。また北東部周壁にかかる深いピットＰ７から床面出土土器と同時期とみられる土師器片が出土し，Ｐ６付近の床面より約10cm上位出土の須恵器杯蓋片がP10出土の須恵器片と接合する（第208図１）。

Ｐ２が東壁と重なるように位置すること。Ｐ７に同時期の土師器片，鉄器が含まれることからして，周壁を更に外側に考える方が妥当なのかも知れない。

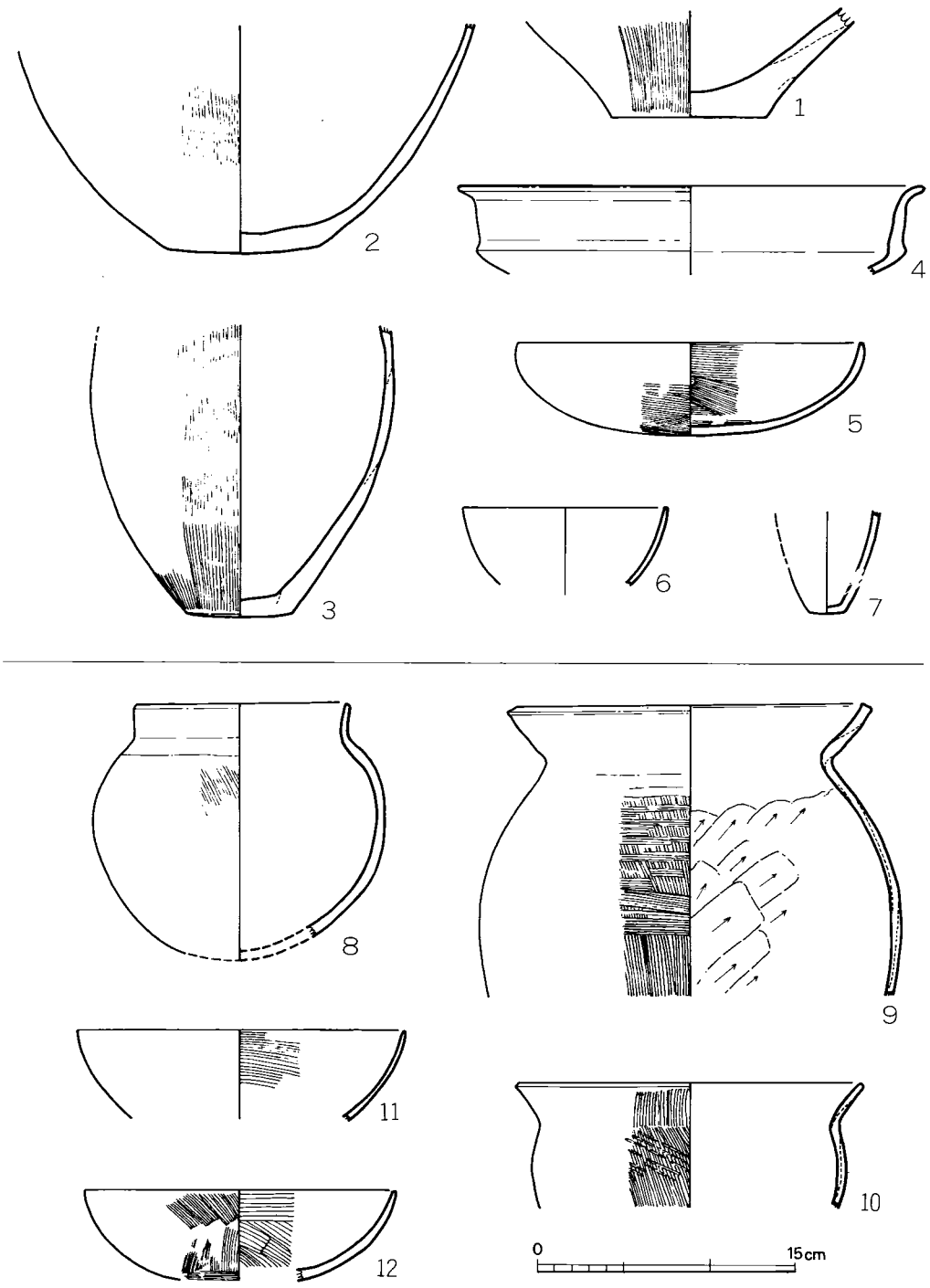
なお住居跡中央部床面にみられる焼土・灰は60～70cm径の浅い凹みに堆積し，最厚部で約10cmを測る。

土　器(図版86，第198図)　８は直口壺で，短く直立する口縁端部は丸味のある角を有し，内面はナデ仕上げ，外面は胴部にハケ目が施され，肩部から口縁部はヨコナデ仕上げされている。細かめの砂粒と赤色粒が胎土に含まれ，乳白系の色調を帯びた淡褐色に焼成される。

９は口縁端部が内湾し，口唇部内側が突出気味になり，胴部内面がヘラケズリされる布留式甕で，外面の胴部に縦位のハケ目を施したのち，胴部最大径付近で横方向のハケ目，更に肩部にも横方向のハケ目を入れているがナデに近い形状となっており，下地の縦位のハケは消されている。なお頸部以上の内外面はヨコナデ仕上げである。胎土に砂粒・金雲母粒・角閃石・赤色粒等を含み，淡明褐色ないし暗黄褐色の色調に焼成されているが，外面の肩部以下に煤が付着する。

10は鉢形土器で，外反する口縁部外面にハケ目が施され口唇端部はわずかに丸味をもっているが平坦にナデられる。胴部外面にはタタキ痕が残りタタキのあとハケ目調整されているが，内面は器面風化のため調整方向不明。胎土に砂粒・金雲母を含む。

11・12は，椀形土器で，器高と口径の比では前者が１：３以下になると思われるが後者は１：３以上である。口唇端部はいずれも丸味をもっておさまる。前者の調整は器面風化のため内面の上半に横位ハケ目が残るのみで，後者では外面に縦位，斜行のハケ目と内面に斜行ハケ目を施したあとやや粗いハケ目を口縁内面に横方向に施している。



第198図　1・2号住居跡出土土器実測図(1/4)

なお住居跡中央部の床面から完形の支脚が出土したが紛失した。体部中空の沓形形で裾に向って薄目の器壁が広がり，裾径は器高と近似値であったように記憶している。

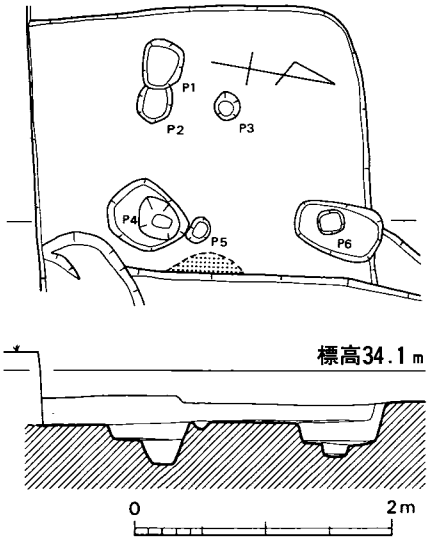
3号住居跡(図版83－2，第197図)

2号住居跡に南部を，5号住居跡に東部を切られる住居跡で，北部は調査区域外に及ぶ。全体の形状は不明だが方形あるいは長方形プランを呈し，東西方向での長さ 4.3m，南北方向3m以上を測る。周壁は西壁と東壁の一部が残り壁高約15cmを有し周溝はない。床面は黄色粘土で南寄りではそれほど堅緻ではないが，北寄りでは焼土混じりの炭化物がやや広範囲にみられる。住居跡内の柱穴様ピットの内，P7は2号住居跡に伴うものであり，P8・P9は埋土上面で既に検出でき，P10から須恵器片が出土するように後出のものであり，いずれのピットもこの住居跡に伴わないと考える。住居跡内からは若干の土器片等が出土したにとどまる。

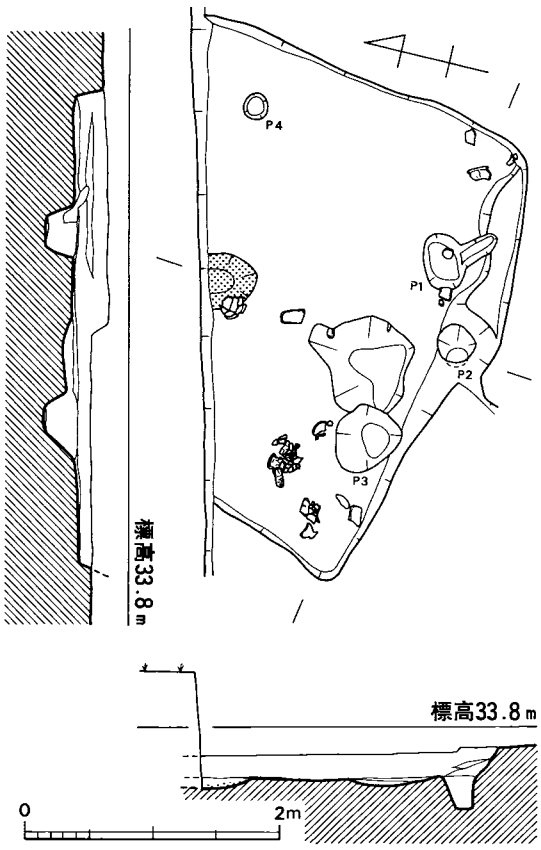
土　器(第201図)　13は手捏の椀形土器で，器高と口径の比が1：2で，口唇端部は丸味をもっておさまる。胎土に細砂・砂粒・金雲母・赤色粒等を含みナデで整形しているが，外面の下半では指圧痕の面でケズリに近い形状を呈している。

4号住居跡(図版83－1，第199図)

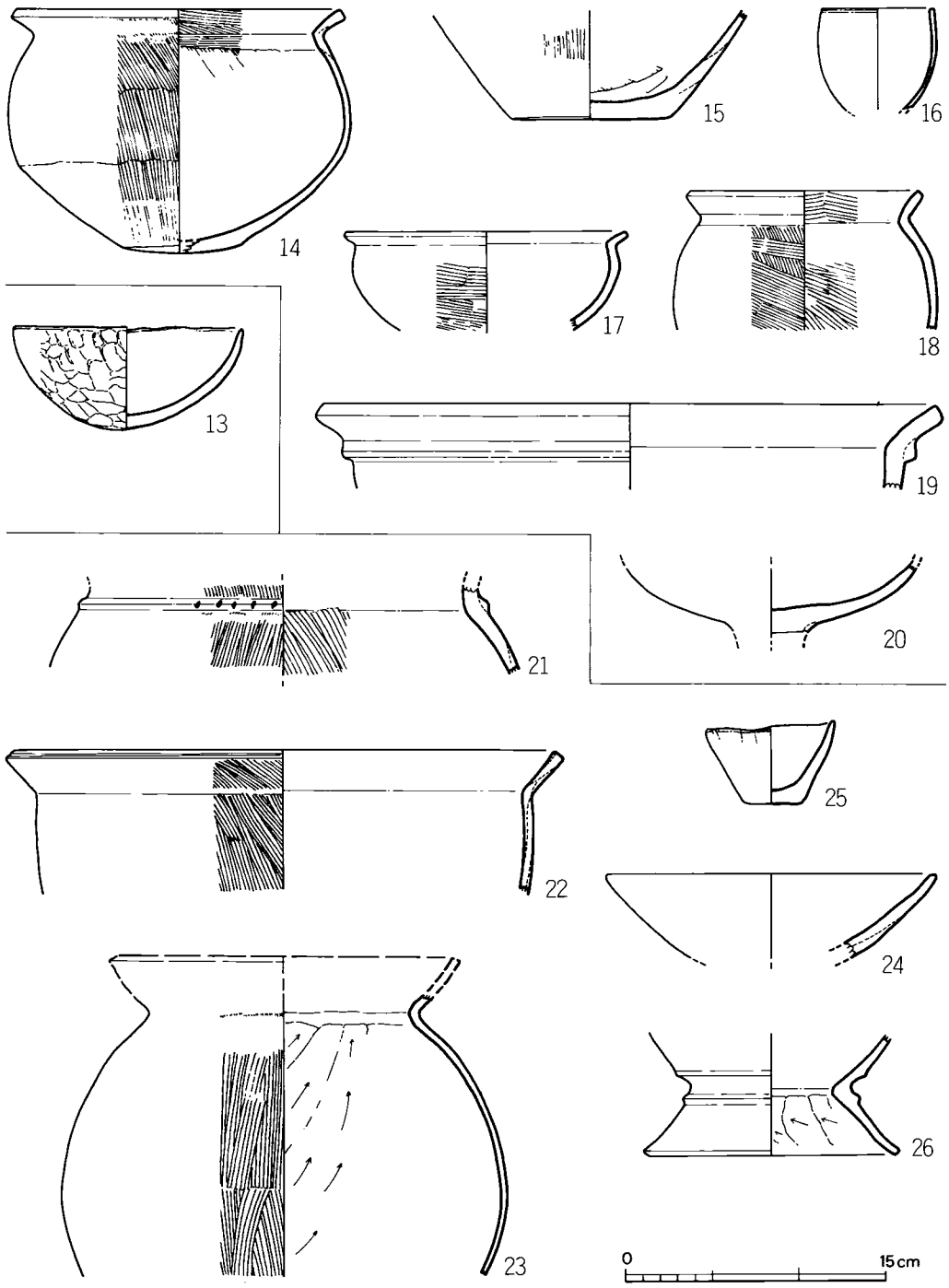
1号住居跡の東側に位置し，2号住居跡によって切られる住居跡で，南側が調査区域外に及ぶため，住居跡の北西部のみ検出した。コーナーがほぼ直角に曲ることから方形ないしは長方形プランの住居跡と考え



第199図　4号住居跡実測図(1/60)



第200図　5号住居跡実測図(1/60)



第201図　3・5・6号住居跡出土土器実測図(1/4)

られる。東西長2.2m・南北長2.6m以上,周壁高約20cmを測る。周溝はなく床面は堅緻で，２号住居跡によって大半を失ってはいるが焼土がみられる。住居跡内の柱穴様ピットのうち,Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５は埋土上部から掘り込まれたもので，Ｐ４・Ｐ６が床面で検出できたピットである。但し主柱穴としては，Ｐ４の場合，接近して焼土があることから疑問が残る。住居跡内からは弥生後期と思われる土器小破片が出土したのみで，器形の明確にしえる資料はない。

５号住居跡(図版84－１，第200図)

３号住居跡の東側に重複する住居跡で，３号住居跡より後出する。北部は調査区域外に及ぶが，方形ないし長方形プランを呈し，東西3.6m南北2.7m以上周壁高25cmを測る。周溝は存在せず。黄色粘土の床面は堅緻で，中央部に焼土灰の堆積がみられる。床面に掘り込まれた柱穴様ピットのうち，Ｐ４は埋土上部から掘り込みが検出できており後出するが，Ｐ１～Ｐ３は床面で検出でき深くしっかりしていることから主柱穴と考え易い。Ｐ１とＰ３は南壁に沿って均整のとれた配置と深さを有し，対応するとみるべきであろう。一方Ｐ２は，やや崩落によって乱れたと思われる南壁斜面にくい込むように掘り込まれる。住居跡内からは弥生後期土器・石器類・鉄器等が出土しＰ１内から弥生中期～後期前半の土器底部破片が出土した。

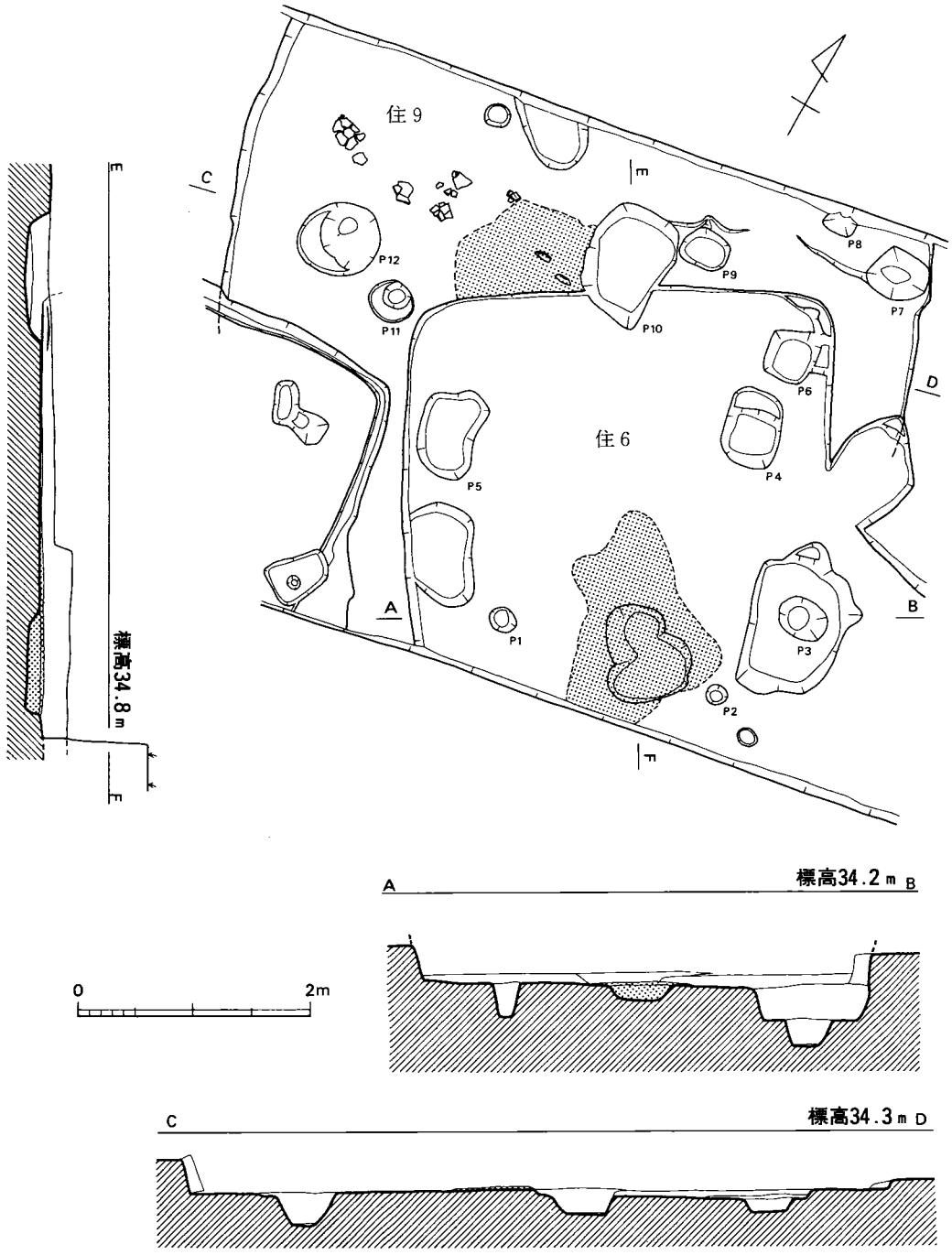
土　器(図版86，第201図)　14は器高14.1cm，口径18.6cmの鉢形土器で，外反する口縁端部が肥厚して，口唇部上面はヨコナデ仕上げでやや丸味をもった平坦面となっている。底部は丸味を帯びた平底で外面ナデ。胴部は大略３段に分れるハケ目調整が施されるが，胴下半では縦位のハケ目調整がヘラケズリと同様の状態になり，胴部最大径部分との間に僅かな稜が作り出される。内面は頸部のやや下位まで，ハケ目原体によるケズリのあとナデ調整し，頸部から口縁部はハケ目調整される。胎土には砂粒・石英・金雲母・赤色粒等が含まれ，良好な焼成で淡褐色の色調を呈す。

15は，平底の甕底部破片で内面に板木口を用いたナデ調整痕がみられる。胎土には花崗岩質砂粒・金雲母等を含み焼成はやや良好である。16は,赤色粒を若干含むが精良な胎土を用いて，丁寧なナデ調整のみられる器壁の薄く仕上げられた土器で，器高5.8cm以上，口径6.4cmを有し胴部からゆるやかに口縁が内傾する。17は，口縁部が外反し椀状の胴部を有す鉢形土器で，脚台が付く可能性もある。器面風化のため胴部外面に横位のハケ目痕跡のみみとめられる。

18は，甕で頸部を強めにヨコナデして凹ませている。内外面共にハケ目が施されるが，口縁部外面と肩部内面はヨコナデ・ナデで仕上げられている。砂粒・金雲母・赤色粒等を含む胎土で良好な焼成，淡褐色の色調を呈す。19は大型甕の口縁部破片で頸部外面に凸帯が１条めぐる。

20は，17の鉢形土器と似た体部になる破片であろうか，法量的には17よりも上まわり，脚台との接合部で欠損している。内外面共にナデ仕上げられ,良好な焼成で淡黄褐色の色調を呈す。

14の鉢形土器の胴下半部ケズリ手法は，長胴の甕形土器胴下半部ナデ消しの手法と共に底部のすぼまる形状へと変化させる手法と考えるが，底部が丸味を帯びた平底であることから後期



第202図 6・9号住居跡実測図(1/60)

後半よりも下る時期が考えられる。なお15の土器は，柱穴様ピットＰ１出土で，中期～後期前半頃の土器と考えられる。

６号住居跡(図版84－２，第202図)

Ｉ－４東端部のＥ30～Ｅ36に検出できた住居跡で，南部は調査区域外に及ぶが長方形の平面プランを呈す。主軸方向は，北北西－南南東で，長辺4.4ｍ以上，短辺3.6～3.8ｍ，周壁高30cmを測る。周溝は存在せず，北部の周壁は当初輪郭をつかみ難かったが重複する９号住居跡の焼土を切り込んでいて，９号住居跡がこの住居跡よりも先行する遺構であることが確実である。床面は極めて堅緻で，中央部に焼土，炭化物を広くみとめる。また北西隅にも若干焼土がみられるが，色調は淡く，９号住居跡焼土の影響を受けたものかも知れない。住居跡内の柱穴様ピットではＰ１～Ｐ６が深さを保っているが，Ｐ４～Ｐ６の部分は床面の色調と似た色調でありながら軟質であり古いピットかと思われ，位置からしてＰ４・Ｐ５は９号住居跡の柱穴である可能性が高い。この住居跡に伴う柱穴としてＰ１・Ｐ３が位置から考え易いが，Ｐ１の掘り方に比してＰ３が土壙状の掘り方となる点に大きな差があり両者を対応する主柱穴と考えるには疑問が残る。この住居跡からは土師器・石製紡錘車等が出土した。

土　器(図版86，第201図)　21は甕形土器の頸部破片で，内外共にハケ目調整されているが頸部外面に三角凸帯を貼り付けて，ハケ目原体の板木口を押圧させた刻み目を施している。胎土には細砂・金雲母・赤色粒等を含む。22の甕は，外反する口縁部端がわずかに内彎し，口唇端部が凹み気味に面取りされる。外面はハケ目調整，内面はナデで仕上げられ，胎土には花崗岩質砂粒・金雲母を含むが，良好な焼成である。

23は，口縁部上半を欠失するが，頸部がヨコナデによって大きくくびれ，胴部内面は頸部直下までヘラケズりされ，ややナデ肩の器形になることから，布留式の甕に含めうる。胴部外面は縦位のハケ目調整で頸部下はハケ目を消すヨコナデで仕上げられている。胎土に花崗岩質砂粒・金雲母，赤色粒と若干の角閃石を含み，良好な焼成で淡褐色の色調を呈す。

24は，器壁の厚い椀形土器で，直線的に広がる体部の器高と口径との比が１：３程度となる。胎土に長石・金雲母が含まれ，ナデ仕上げされる。

25は，手捏の土器で細砂，やや多めの金雲母を胎土に含み良好な焼成である。

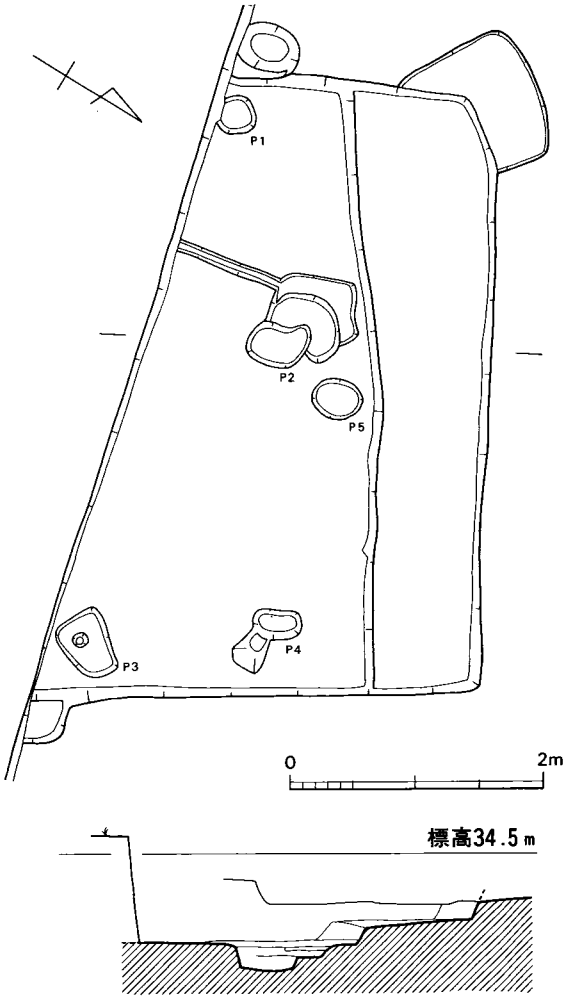
26は，住居跡床面より浮いた位置から出土した鼓形器台で，上端部を欠失するが，脚部はやや裾広がりで，くびれ部には三角凸帯が作り出される形状になっている。外面は全てナデ仕上げされるが脚部内面はヘラケズり，受部内面はナデ仕上である。胎土に花崗岩質砂粒・金雲母・角閃石を含み，明黄褐色に焼成されている。

27の高杯にやや時期的に遡る要素を有すが，23・26の土器から布留式期の住居跡であろう。

７号住居跡(図版85－１，第203図)

６号住居跡の西側に並ぶように接して位置する方形ないしは長方形プランを呈す住居跡で，

南部は調査区域外に及ぶ。北東部隅は9号住居跡と重複し，貼り床を施していたと思われるが調査時に確認することができなかった。推定ラインでは，東壁の長さ3.6m，北壁の長さ4.7m，壁高約30cmを有し，北壁に沿って0.8～1m幅のベット状遺構が床面より約15cm高く施設される。黄色粘土の堅緻な床面を掘り込んだ柱穴様ピットでは，P1が浅く，P4・P5は上面の一部に黄色粘土の堆積がみられたことから重複する8号住居跡に伴うものとみられる。P2・P3は，床面下に検出できたこの8号住居跡の周溝を切っていることからして，7号住居跡に伴うものと判断できる。なおP2・P3共に約20cmの深さを有している。また床面に焼土等が検出されず，南側の調査区域外にあるものと思われるが，住居跡のほぼ中央に炉跡があると仮定すれば，ベット状遺構の配置と併せて，南北に長い長方形プランの住居跡になるものと想定できる。この住居跡からは土師器等が出土している。

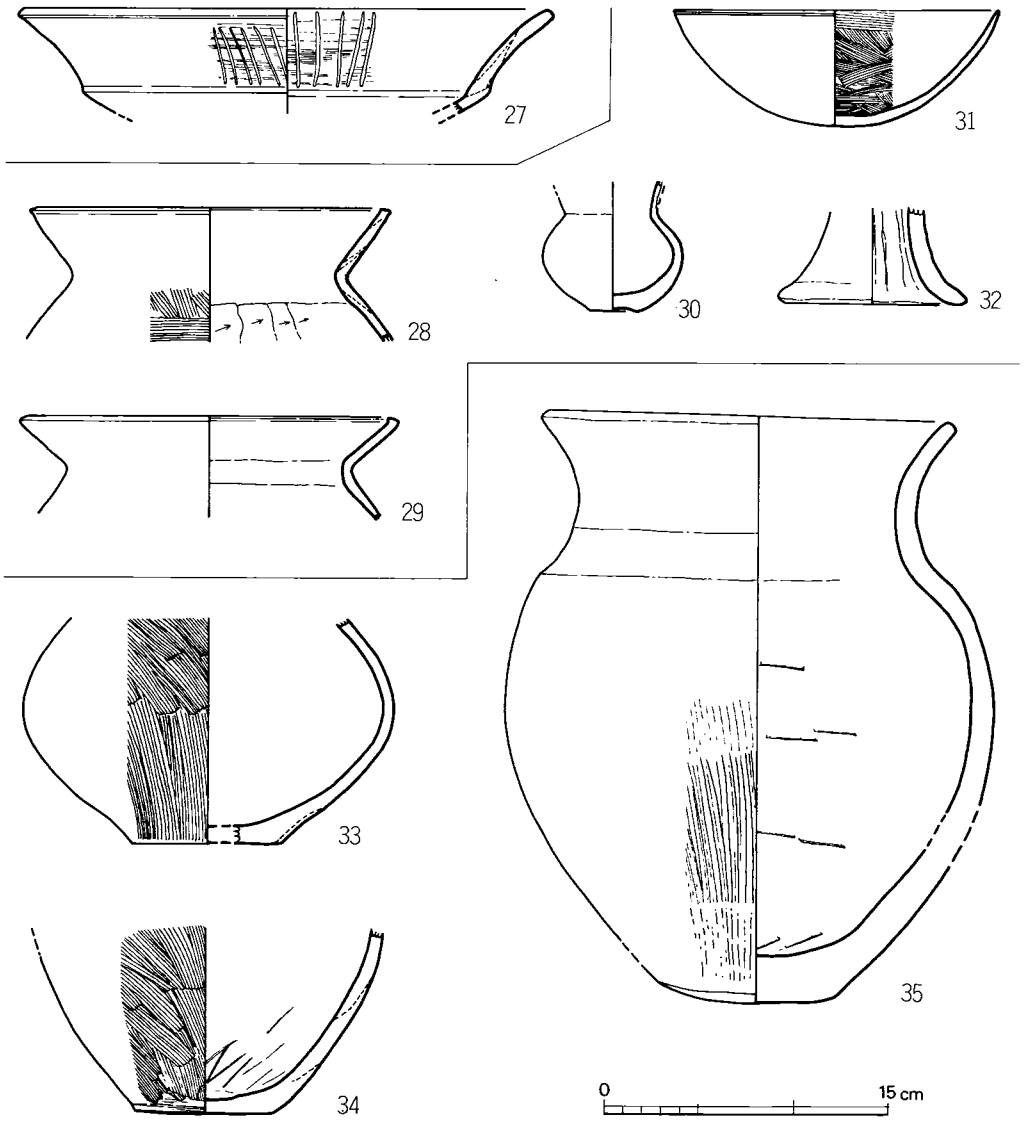


第203図　7号住居跡実測図（1/60）

土　器（図版86，第204図）　28・29は，甕形土器口縁部破片で，外反する口縁端部が内彎して立ち上がり，口唇部上面を平坦にナデて内側が突出気味の形状となり，胴部内面がヘラケズリされる所謂布留式甕である。29では器面風化のために調整方法が不明だが28の口縁部内外面共にナデ調整で胴部外面は縦位のあと横位のハケ目が施されている。両者共花崗岩質砂粒・金雲母・赤色粒を胎土に含み，明黄褐色の色調ないしは明褐色に焼成される。

30は，小型壺で，口縁部は欠失する。ナデ調整で仕上げられているが，やや扁球形の胴部に外反する口縁部が付き，底部は大きめに指頭で凹められたあと中途半端にナデられる。長石・金雲母を含み良好な焼成で淡褐色の色調を呈す。

31は，器高6.2cm・口径17.2cmの椀形土器で，外面は風化のため調整方法不明だが口縁部に1



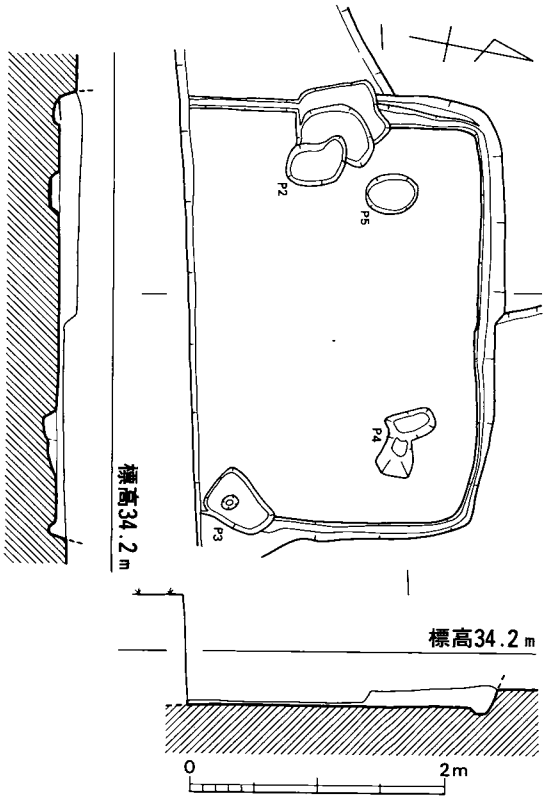
第204図　6・7・9号住居跡出土土器実測図（1/4）

条の沈線がみとめられる。内面は細かなハケ目調整が全面に及ぶ。花崗岩質砂粒・金雲母・赤色粒を胎土に含み乳白色を帯びた淡明褐色の色調に焼成される。

32は支脚裾部破片であろう。それほど厚い器壁を有さず絞り込みで窄めたあとナデで仕上げられるがやや雑な調整である。

28・29の甕からして布留式期の住居跡とできよう。

8号住居跡（図版85－2，第205図）



第205図　8号住居跡実測図（1/60）

7号住居跡の床面下に検出できた住居跡で，北西部が7号住居跡ベット状遺構下にあたるため，約20cmの壁高を残しているものの，大半は周溝の存在を確認できる程度である。南部は調査区域外に及ぶが，方形若しくは長方形プランになり，東西長3.5m・南北長2.4m以上・周溝幅10～15cm・周溝の深さ6～10cmを測る。7号住居跡の床面とは数cmの比高しかなく，周溝の存在がなければ区別の付かない状態であるが，床面にみられる柱穴様ピットのうちP2・P3は周溝を切り込むため7号住居跡の柱穴とみるべきであり，P4・P5が8号住居跡に伴う柱穴であろう。なお露出した床面に焼土はみられなかった。

この住居跡からは，若干の土器片の出土がみられたものの，器形の明確な破片，時期の決定しうる破片は出土しなかった。

9号住居跡（図版84－2，第202図）

Ⅰ－4東端部に位置し，重複する6～8号住居跡の全てから切られる住居跡で，北側は調査区域外に及び南側ではわずかな周壁が残る程度で，東壁・西壁の描く弧と南壁の位置から直径約6mの円形プランないしは，隅丸方形に近いプランの住居跡であったと想定できる。周壁は約30cmの高さを有すが周溝は存在しない。床面は極めて堅緻で，6号住居跡北壁に切られる位置に焼土・炭化物が広く検出される。上面での灰の厚みは大略1cmであったが，これを除去すると中央部に焼土のまとまりがみられ，1～2cm厚さの焼土下に薄い灰層とやや北寄りにまとまりをもつ焼土が1～3cmの厚さで検出できた。更に，この焼土の面に接して南側に薄い黄色粘土の堆積があり，この下に1cm前後の厚みの灰層があり下位に2～3cmの厚さを有す焼土が検出できた。これらの堆積状況では，水平堆積ではなく，最も厚い部分でも7cmであるが，炉が少しずつ移動するものと解釈できる。柱穴様ピットでは，P4・P5・P8・P12が主柱穴と考え易く，この配置からは円形プランが想定できる。

住居跡内からは弥生土器，石器類等が出土した。

土　器（図版87－1，第204図）33はやや扁球形の胴部の長頸壺で底部は平底。外面をハケ目調

整，内面ナデ調整で仕上げている。花崗岩質砂礫，金雲母を含み，焼成良好で淡めの暗黄褐色の色調を呈す。

34は，わずかに丸味を帯びる平底の甕底部破片で，胴部外面はハケ目調整，内面はナデ調整されるが，下部に板木口端圧痕のあることから板による調整の併用が考えうる。砂粒・金雲母を含み，暗褐色に焼成される。

35は，広口壺で長胴の胴部に丸味をもった平底の底部が付く。外面の上半部は器面風化するが下半にはハケ目がみとめられ，口縁部内面はナデ調整，胴部内面はハケ目調整のあとナデ消されたのか，約3cm幅の板木口端圧痕が処々に残る。口縁端部は丸味をもつがわずかに面をなす。花崗岩質砂礫・金雲母・若干の角閃石を含み，厚めの器壁を有すが，やや良好な焼成で淡赤褐色ないし褐色の色調を呈す。

33は，34・35に比して底部が端整な平底であり，古式の様相を持つ。34・35では丸味を帯びた形状になっており，後期後半の時期が与えられるが，住居跡の平面形からして33の土器の時期が妥当で，他は混入とすべきであろう。

(2)　土器溜(図版87－2)

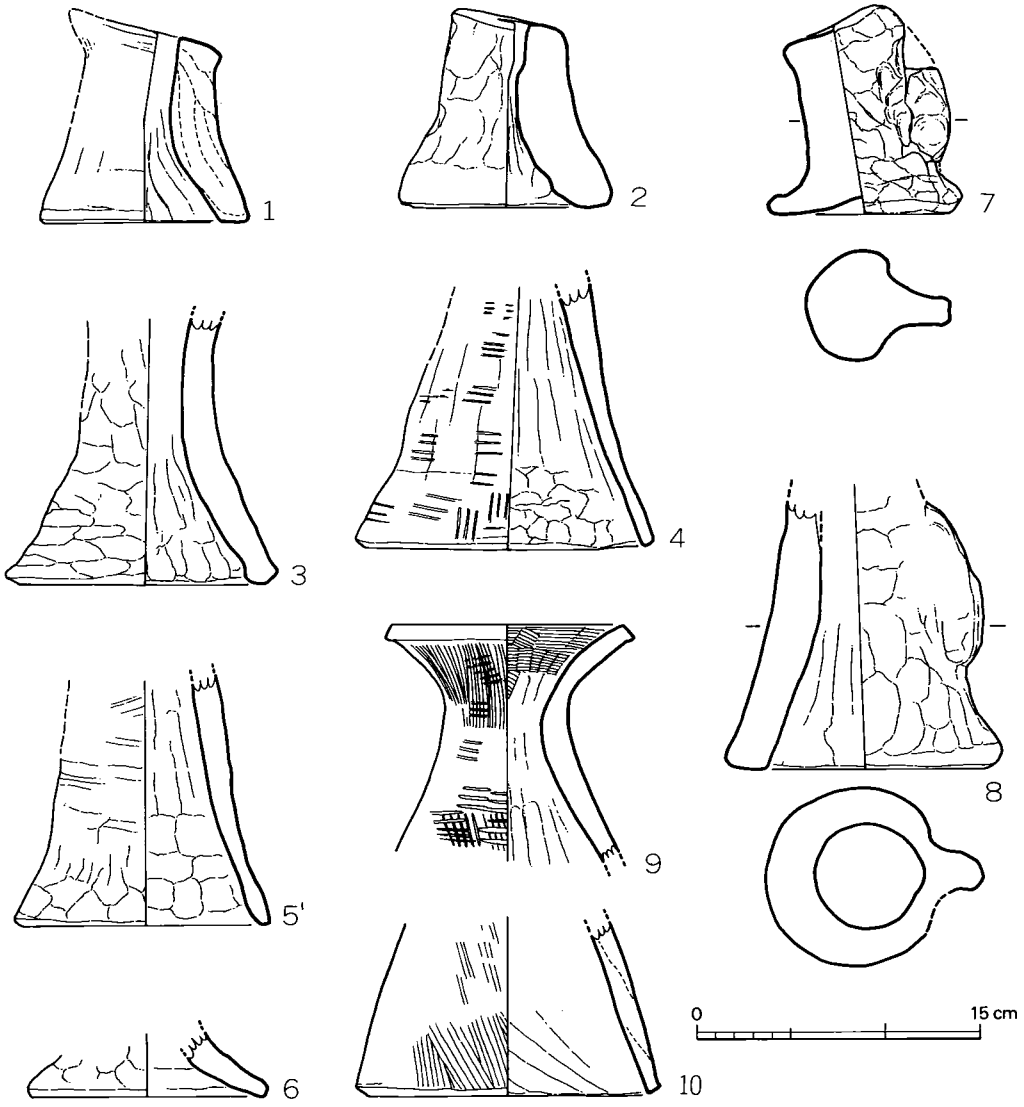
Ⅰ－4地区東端部のS329・E34の第3層下部で検出されたが，調査区域内ぎりぎりに位置し，9号住居跡埋土の上面，6号住居跡北東隅の外側にあたる。8個体分の支脚，2個体分の器台の破片が東西0.7m・南北0.7m以上にまとまって検出できたが，いずれも倒れた状態で脚裾部の破片のみの個体もみられた。器種の異る土器が調査区域外に集積されているのかも知れないが，調査分に支脚・器台以外の器種のみられないことが注目されよう。土壙等の掘り込みは検出できなかった。

土　器(図版88，第206図)　1は沓形状を呈す支脚で，器壁は2～2.5cmを有し，直径2cmの円孔が穿たれる。脚裾は踏ん張り気味で，調整は外面ナデ，内面指ナデ，砂礫・金雲母を胎土に含む。

2は1に似た造りであるが，上面端部の嘴状突起がなく，俯瞰すると円形になる点が異なる。中央の円孔は上下両方から別々に穿たれるのかズレを生じており，直径は上下端で約1.8cm，中程で約1cm・器壁は大略3cmを有す。外面は指圧痕の残るナデ，内面は絞り痕と指ナデ痕がみられる。細礫・金雲母を胎土に含む。

3は，1・2に比して細長い形になるが上部を欠失する。器壁は1.5～2cmと薄めで中空の状態になる。内外面共に指圧痕の残るナデで，脚裾は広がり気味で踏ん張り方は弱めとなる。砂礫・金雲母を胎土に含み若干気泡がみられる。

4・5は，いずれも上部を欠失しているが，器壁は0.7～1.5cm程度と薄く脚裾部に向って直



第206図 土器溜出土土器実測図(1/4)

線的に広がり，中空の割合が大きくなっている。調整方法では，外面をタタキのあとナデ調整しておりタタキの痕跡が残り，内面の指圧痕の割合が多くなる。

6は，脚裾のみの破片のため上部の形状は全く不明だが裾広がりな形状で，ナデ調整される器壁は1～1.5cm程度。

7の裾は反り返るように広がるが，最高1cm程度上げ底になるだけの中実タイプ。上面観は円形を呈すが，体部は約10°傾き，体部外側を強くつまみ出して背鰭状の把手を作り出している。

胎土に花崗岩質砂礫・金雲母・角閃石を含み，指圧痕の残るナデで仕上げている。暗黄褐色ないしは淡褐色の色調を呈すが，上面中央から把手の上半部にかけては黒変している。

8は，把手を作り出しているが，器壁1.5～2.5cmで体部が中空になる。脚裾はわずかに踏ん張る形状で指圧痕の残るナデ調整・胎土には砂礫・金雲母を含むがやや気泡がみられる。

9・10は器台で，9は外面の受部をタタキとハケ目調整，脚部をタタキのあとナデ仕上げし，内面は受部ハケ目調整，脚部指ナデ仕上する。10は脚裾部破片で，外面ハケ目及びナデ仕上げ，内面はナデ仕上げされるが裾寄りはハケ原体の板でナデられたような痕跡を残している。両者共胎土に砂粒・金雲母を含み，暗黄褐色系の色調を呈す。

これらの土器では，時期を明確にしえるものではないが，支脚に幾つかの種類があり時期的に幅のある可能性も高い。中実で細い円孔の穿たれる例は弥生時代中期以降にみられること。近くに接する6号住居跡の時期が古墳時代布留期であることからして，弥生時代後期から古墳時代前期までの時期幅の内に考えておきたい。

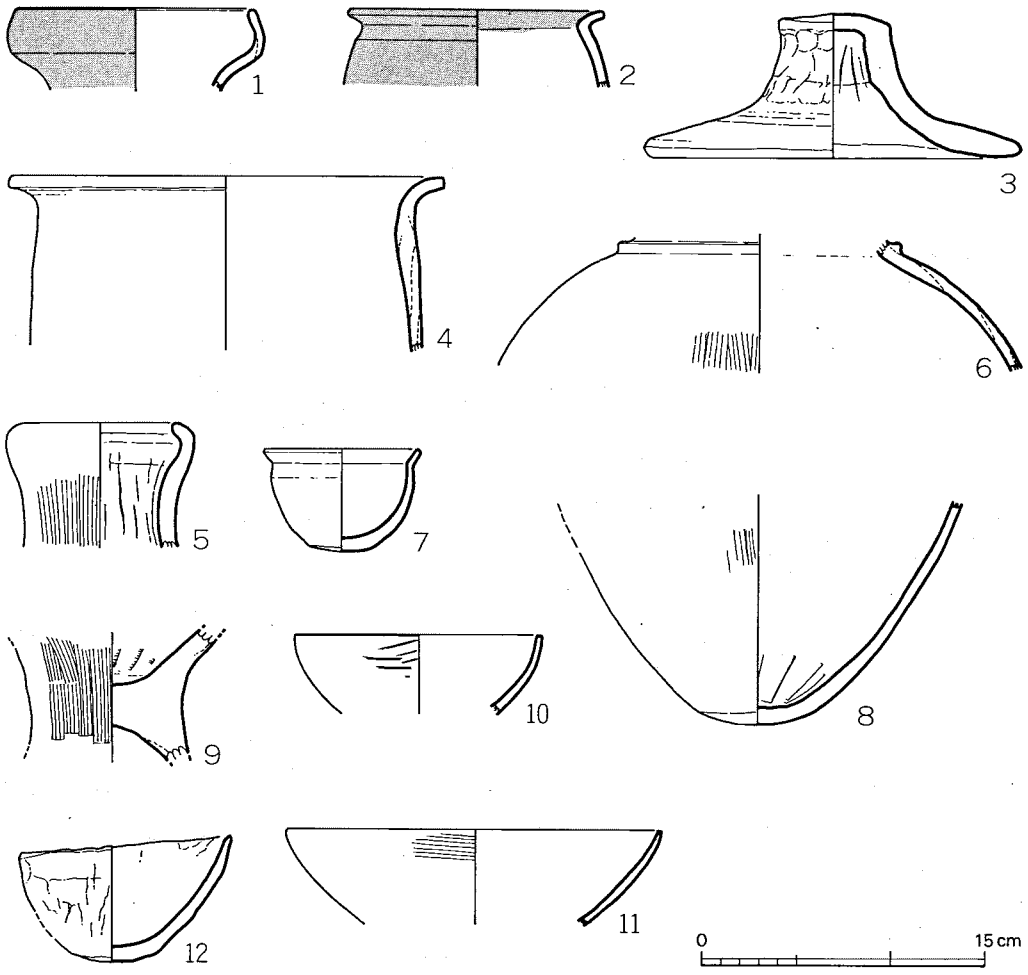
(3) 土　壙

Ⅰ－4とⅠ－5境のS329, E36に検出されたが，調査区域外にも及ぶため全体の規模は不明。調査区域内では長辺1.15mを有しており，南東部短辺0.4mに比して北西側では0.7m程度の幅まで広がる。主軸方位がN45°W前後をとる，中膨みの長方形プランになるものと思われるが，削平を受け深さは7～10cm程度と浅い，底面には柱穴様ピットの切り込みもあって乱れた状態になっているが，床面より僅かに浮いた位置からガラス小玉1点が出土した。その他土器片数点が出土したが時期を明確にしえる資料は含まれていない。

(4) 包含層出土の土器(図版88，第207図)

1・2は，Ⅰ－4地区S328, E23の位置にあるピットから出土した丹塗り土器片。1は細頸壺の袋状口縁で外面と口唇部上面のみ塗布される。胎土に若干の砂粒・金雲母・赤色粒を含む。2は口縁部が短く外反する短頸壺で，外面と口縁部内面に赤色顔料が塗布されている。胎土に砂粒・金雲母・赤色粒を含む。いずれも弥生時代中期中葉頃に属す土器であろう。

3～6は，Ⅰ－5地区東端畦畔下の攪乱部分から出土した資料。3は粗製の甕蓋で，器厚は1～1.5cmと厚め。外面は指圧痕の残るナデ，内面は絞り込み痕を残しナデ仕上げしている。胎土に花崗岩質砂礫・金雲母・赤色粒を含む。4はいわゆる如意状口縁より屈曲が大きめに短かく外彎する口縁の甕形土器で，器面風化のため細かな調整方法の観察はできないがナデ仕上げであろう。花崗岩質砂礫・金雲母・赤色粒を含み淡めの褐色に良く焼成される。5は細頸壺の



第207図　Ⅰ－4・5包含層出土土器実測図(1/4)

袋状になる口縁部破片だが端部の内彎は浅めである。外面はハケ目調整及びナデ調整，内面は絞り込みのあとナデ仕上げしている。6は壺形土器の肩部破片で胴部外面にハケ目がみられ，内面はナデ仕上げされている，わずかな礫・金雲母・角閃石を含み暗褐色に焼成される。3・4は弥生時代前期的な形状を残す土器であるが，5・6は中期後半以降の土器であろう。

7はS333, E38区南西隅に検出されたピット出土の鉢形土器。器高5.5cm・口径8.3cmと小形で丸味をもった平底を有し，口縁部は外反して端部は丸くおさまる。胎土に砂粒・石英・金雲母と若干の角閃石を含みナデ仕上げされている。時期は後期後半ないしは終末期であろう。

8はS329, E36区第3層上部出土の丸底底部破片で，長胴形の甕であろう。外面は胴部にハケ目の痕跡を残しているものの胴下部をナデ消しており，内面はナデ仕上げとみられるが，

サキゾノ

内底面にハケ原体の板木口圧痕が残る。胎土に砂礫・金雲母・赤色粒を含み，灰色を帯びた黄褐色の色調に焼成されるが，外面は火熱を受けて赤褐色に変色している。時期は弥生終末期～古墳時代初頭を考えたい。

9はⅠ－5区石敷遺構の中央部落ち込みの埋土から出土した。台付甕の底部破片で脚裾部を欠く。内底面はナデられる。胎土に砂礫・金雲母・赤色粒を含む。底部の形状からみて弥生時代終末期頃に属すと考えられる。

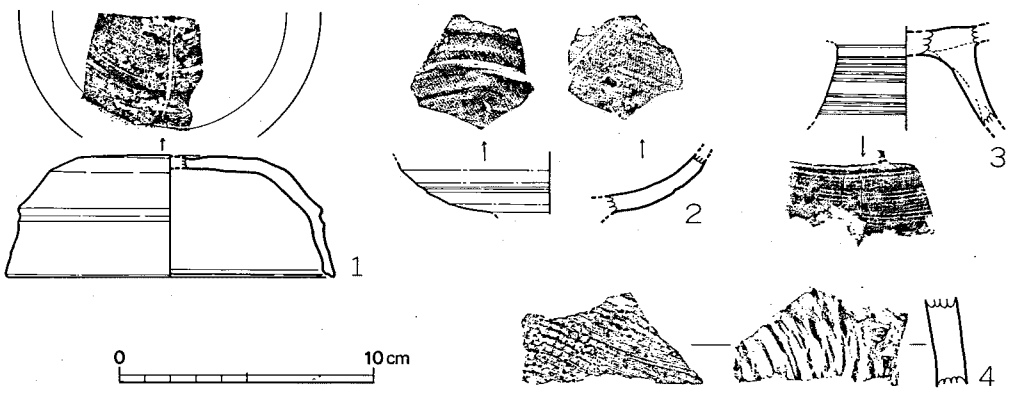
10・11は椀形土器で，器高と口径の比は前者が1：2以上，後者が1：3程度で，前者は外面にタタキの痕跡が残り口唇端部はナデ調整され角をもつ，Ⅰ－4地区第3層上部出土。後者は器面が風化するが外面にハケ目が残り口唇端部は丸味をもっておさまるⅠ－5地区石敷遺構の西側に接した位置の第3層下部に出土。いずれも胎土に細砂・金雲母・赤色粒を含む。

12は手捏の椀形土器でS330, E54位置の柱穴様ピット内出土。不整円錐形状でナデ仕上げられるが胎土に細砂・金雲母を含み，良好な焼成で茶褐色系の色調を呈す。

椀形土器自体では時期を決し難いが，この地区では弥生時代後期後半～古墳時代前半の住居跡があることからこの時期の間に包括されよう。

須恵器(図版89，第208図)　Ⅰ－4地区の第2層から3点と，Ⅰ－5地区から1点の計4点出土した。

1は，杯蓋で，2号住居跡埋土上層出土の破片と，住居跡外柱穴様ピット内出土の破片が接合する。肩部にやや鋭い稜を有し,天井部は回転ヘラケズリ調整される。肩部から口縁部に向ってわずかに広がるが，内彎気味の端部内面に凹線が1条巡る。天井部外面に単直線のヘラ記号が付される。胎土に花崗岩質の砂粒を若干含むが良好な焼成で外面に灰褐色及び青味がかった黒色，内面紫がかった淡灰褐色を呈す。形態的にはⅠ型式に似るが，肩部の稜は低く，稜の下が沈線状になるためⅡの時期の古い段階に相当すると考える。



第208図　Ⅰ－4・5包含層出土須恵器実測図(1/3)

2・3は，高杯であろう。2は杯底部付近の破片で下端部がわずかに柱状部へ移行する形状となっている。外面下部はヘラケズリされているが磨きに近く，上部はヨコナデ，内面ではナデ地に暗文状のヘラ磨き痕をみとめる。若干長石を含み淡い灰色に焼成される。S331，E34区第2層出土。3は柱状部破片で外面にカキ目調整，内面ナデ調整で仕上げられる。精良な胎土で紫がかった灰白色に焼成される。S331，E28区第2層出土。4は，甕胴部破片で外面格子目タタキ，内面青海波タタキがみられる。砂粒を若干含み，暗灰色に焼成される。S331，E26区第2層出土。2～4は，Ⅳ段階の時期であろう。

(5) 石器・鉄器

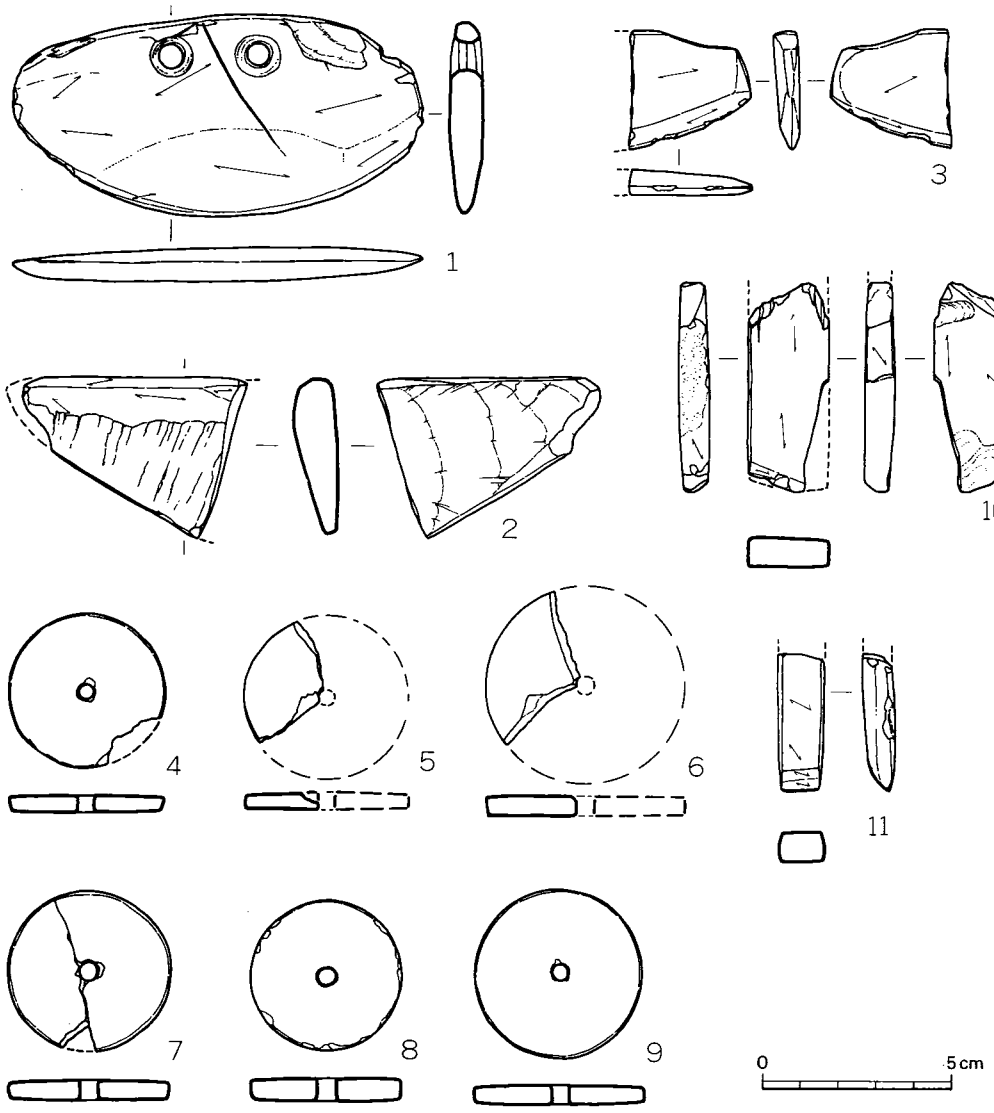
石　器(図版89，第209図)

石庖丁(1～3)　1は1号住居跡の南西隅出土の完形品。砂岩質ホーンフェルスを用い，長さ10.7cm・最大幅5.3cm・厚さ0.9cm・重量61.3gで2孔を有す。背は丸味をもって両側縁に接し舟底形に弧を描く刃部へと続く肉厚な体部を有すが表裏両面共に研磨によって片刃に近い刃部を作っている。孔内面は左廻りに削られている。2は，2号住居跡から出土した破片である。

玄武岩の縦長剝片を素材として研磨されているが，体部中央及び側縁は欠失する。破片では約30度の広がりをもって刃部も直線的に広がる。但し疑問点として，体部の厚みが1.1cmあり，刃部に向って片刃状に窄まるものの刃部研磨の状態は，なまくらになることがあげられる。重量33.4gを測る。3は，5号住居跡から出土した破片で，砂岩質ホーンフェルス製。側縁部のみの破片であるが全面に研磨が及び，背面端部が細く反る。背面での厚さ0.7cmで刃部側に薄くなり刃部は片刃。重量8.8gを測る。

紡錘車(4～9)　4・5は1号住居跡内出土。4は一部欠損するが，直径40.5～40.7mm・厚さ4.5mm・孔径4.0mm・重量12.7gを測る。5の破片では復原直径43mm・厚さ4.6mm・重量4.7g。6は，5号住居跡西壁で出土した¼程度の破片。復原直径52mm・厚さ5.2mm・重量7.8gを測る。7は，6号住居跡北西隅に約0.5mの距離をおいて出土し，接合した資料であるが，大きな破片の淡黄灰色系色調に比して，小さな破片は火熱を受けて褐色系の色調を帯びている。9号住居跡の熱土に近い位置からの出土であることを考えれば直ちに6号住居跡の土器に伴うとは判定し難い資料である。直径42.3～42.6mm・厚さ5.1mm・孔径4.6mm。若干欠失部分があり重量の現存値17gを測る。8・9は，6号住居跡床面下のピットから出土した完形品で，前者は直径39.2～39.4mm・厚さ6.0mm・孔径4.5mm・重量18.5g，後者は直径44.0mm・厚さ5.2mm・孔径4.1mm・重量20.4gを測る。

これらの石製紡錘車はいずれも白雲母片岩を用いて，表・裏・側縁共研磨されて，滑らかな面をなしている。

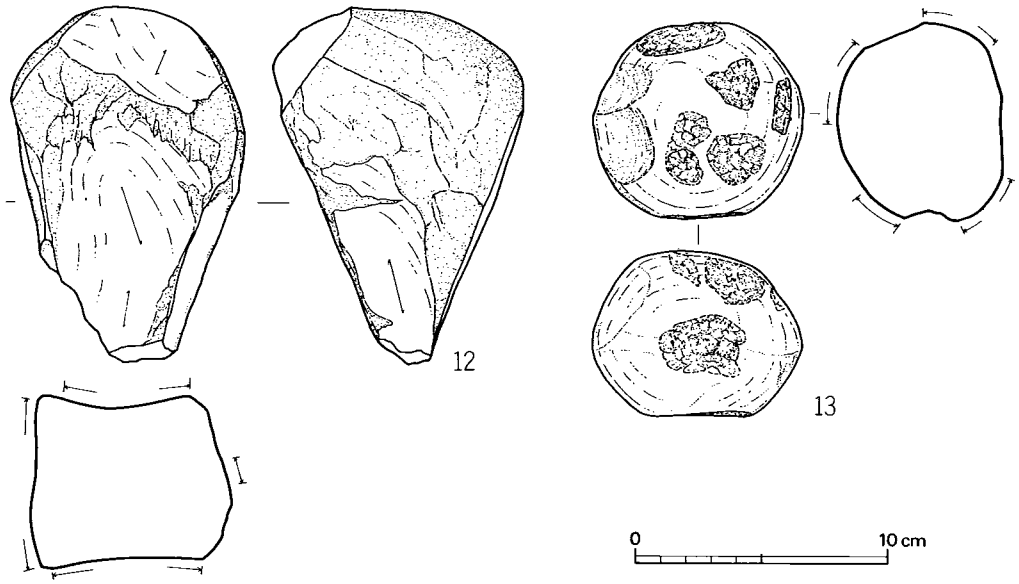


第209図　Ⅰ－4・5 出土石器類実測図(1/2)

扁平片刃石斧(10)　6号住居跡内のピットＰ3の下面から出土した。頁岩製で，刃部の一部と基部を欠失するが，現存長5.5cm・幅2.1cm・厚さ0.8cm・重量17.7gを測る。刃部は片刃になるが先端が研ぎ直されて極めてなまくらな状態になっている。

撃形石斧(11)　9号住居跡床面直上出土の刃部破片で頁岩製。現存長3.6cm・幅1.2cm・厚さ0.8cmで重量7.3ｇを測る。よく研磨され刃部は片刃とはいえ鋭い。

砥　石(12)　Ⅰ－4地区表採資料の，砂岩製中砥で一端を欠失するが5面を砥面として使用している。重量は1,185ｇを測る。



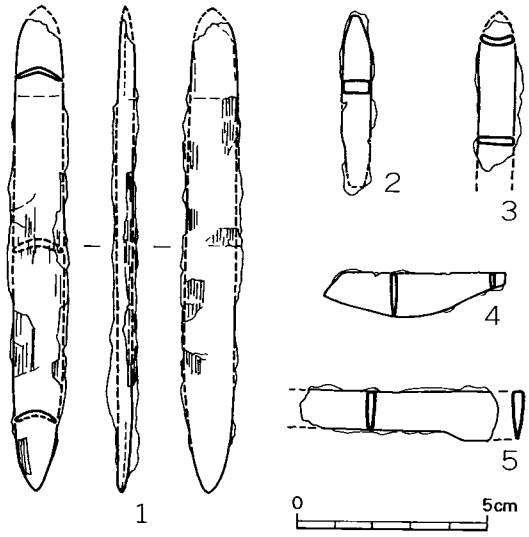
第210図　Ⅰ－4・5出土石器類実測図①（1/2）

敲　石(13)　Ⅰ－4地区S333, E20の第3層下面出土の完形品。角閃片岩質の円礫を素材としており，掌中に握り易く握った際に外側になる部分を主に敲打した形状になる。敲打による凹みの顕著な部分は3ヶ所で，その他は浅い敲打痕と磨耗痕が観察できる。但し縄文時代の敲石・磨石にみられるような顕著な磨耗痕ではなく，石皿とセットで使用する用途とは異った使用を考えるべきであろう。

なお，図版89の下段右端に示す円礫は，Ⅰ－4地区の第3層上部より出土している。長卵形の円礫で長さ17.1cm・最大幅10cm・厚さ9cmの重量2,208gを測る。径の大きめの端部で多めになるが上半分に酸化鉄とみられる赤色顔料が付着している。（小池）

鉄　器(図版90－1)

鉄　鏃(第211図1・3)　1は，弥生後期後半の1号住居跡から出土したもので，部分的に木質が残っている。本例は，切先を一部欠損しているが復原可能で，復原全長12.8cm，刃部最大幅1.3cmのもの



第211図　Ⅰ－5出土鉄器実測図（1/2）

である。鉇は，全体にゆるやかに彎曲しているが，刃部付近ではわずかに鎬をもつ。切先から2.4cmのところから木柄が着装されるため，刃部としての有効範囲がせまいものとなっている。

3は，同じく後期後半頃と思われる5号住居跡から発見されたが，先端の彎曲部に刃がなく，他の部分は扁平なものとなっている。一方は欠損していると思われるが，古い欠損である。

刀　子(第211図4・5)　4・5は，1の鉄鉇と同じ後期後半の1号住居跡から出土している。4は，刀子としては小型のもので，実用性を疑われるが，一方細工用具としては有効なものかもしれない。全長4.9cm，刃部最大幅1.2cmの大きさである。

5は，発掘時に欠損して全形を知ることができないが，現存長5.3cmで茎と身の一部を残している。身幅1.3cm，茎幅1cmである。

不明鉄器(第211図2)　古墳時代布留期に属する2号住居跡から出土した不明鉄器。全長4.5cm，幅0.8cm，厚さ0.35cmの大きさである。　(柳田)

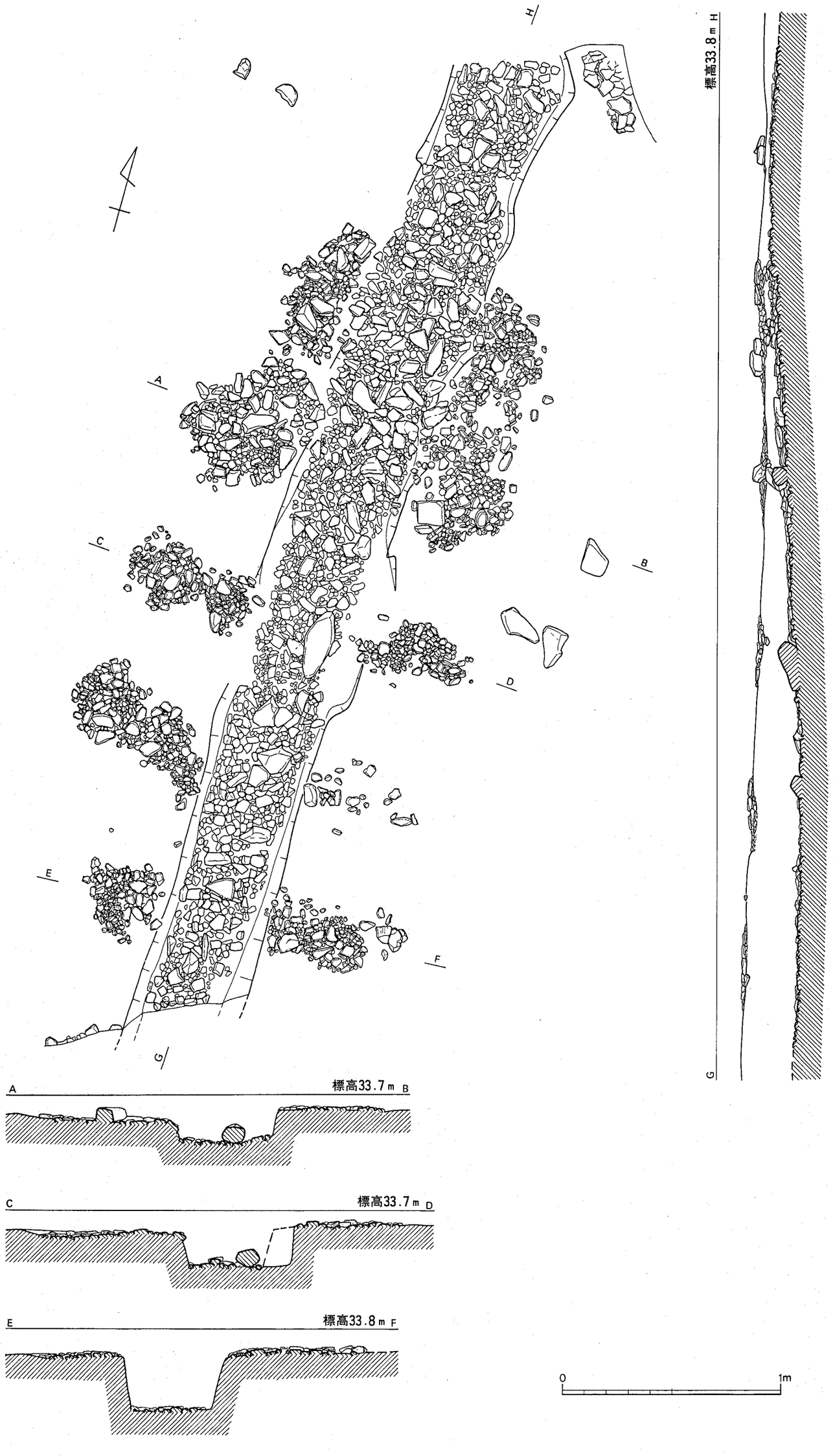
(6)　石敷遺構(図版90－2・3，第212図)

サキゾノⅠ－5地区東端部に検出された。第3層を除去した面，南部で標高33.7m・北部で33.6mを測る面に，拳大の礫が20～40cm径に集石した状態が検出でき，このような集石が30～50cm幅の間隔をおいてほぼ一直線になり，また，集石列は更に50～60cmの間隔をおいて並列して検出できた。各集石では上部に拳大の礫が配され，下部には玉砂利状の小石が填った状態になっており，各集石が並列する集石と対応する位置にあること主軸方向がほぼ真北の方向に向くこと(図版90－2)等から，上部に細長い建物といった構築物を施設する際の柱根石ではないかと態定できた。このため，柱穴規模を確かめる必要と集石列間の土壌が帯状にやや黒っぽい色調であることも注意する必要があったので，小規模な試掘トレンチを設けて掘り下げることにした。この結果集石列間にも下位に同様の集石が確認でき，拡張したところ全面に広がり，将に石敷といった状態を呈していた(図版90－3)。

すなわちほぼ真北を向く溝状の底面全面に石敷し，溝の両肩部に飛び石状の集石が対峙する形状の遺構で，溝底面は南側の標高33.45m・北側33.57mを測り，自然地形の傾斜に相応する集石列に対し，石敷は逆方向の傾斜を有すことになっている。但し，この石敷遺構は調査区域外にも及ぶもので，調査区域内で長さ4.8mを測り，集石列は5単位と南西側に1つの集石の北辺が検出できることから6単位分以上になる可能性が高いといえる。

北方での延長については，石橋Ⅱ－11地区の調査でわずかに東に振れた幅広の石敷を検出しているが，当該石敷遺構の形状とは様相を異にしている。当該遺構が北部で溝が浅くなり集石の単位が乱れ気味になると解し，一方石橋Ⅱ－11地区のそれが削平を受けて乱れたものと考えれば一連の遺構とみることができるが，未調査区域での形状を知り得ない時点では用途につい

第212図　サキゾノI－5石敷遺構実測図（1/20）



ても断定し難い。所属時期についても溝内埋土に弥生後期土器片，集石に弥生後期土器片を混入している以外に遺物の出土がみられないことからこの土器の時期を遡ることのない時期で溝内下部の埋土が古墳時代前期の須恵器片を含むピット堆積土に近い色調である点を付記できる程度である。

なお，石敷溝の西側約２ｍに幅50cm・深さ15～20cmの平行する素掘りの溝があり，石敷遺構に伴う可能性を有している。遺物に時期を明確にしうるものがなく堆積土は石敷溝堆積土に似る。

３　小　結

サキゾノⅠ－４・５地区の遺構では，９号住居跡が円形プランの住居跡であることから弥生時代中期後半頃の構築と推定できるが，住居跡内出土遺物では後期中葉以降の資料が多めである。９号住居跡内焼土の移動と関わりがあるのかもしれないが時期差が大きいことからみて後期中葉頃まで使用されたとは考え難い。

後期後半の住居跡としては１号住居跡があり，５号住居跡もほぼ同様の時期とみられる。しかし５号住居跡出土土器の胴下半にケズリ手法がみられ１号住居跡よりも後出する時期を考えたい。同様の土器は番上II－６地区４号住居跡出土土器にもみられ，番上II－６地区１号住居跡出土土器（『三雲遺跡』Ⅰに報告）よりも先行するものと考えている。

一方，古墳時代の住居跡では，２号・６号・７号の３軒に布留式土器が出土している。３軒の内での前後関係については切り合い関係がないので判断しえないが，６・７号住居跡の掘り方が近接しており時期差があるものと推定しうる。

なお４号住居跡及び８号住居跡は，時期を明確にし難いが，前者は布留期以前，後者は９号住居跡廃絶後布留期迄の間におさまる。また土器溜め遺構は６号住居跡の北西隅の外側に位置しており，弥生後期～布留期の間であろう。

石敷遺構は極て特徴的な形状を呈しており，構築の背景・使用形態等には興味深いものがある。狭い調査区域のため，その一部分のみしか検出しえなく，また類似遺構にも接見していない現況では，それらの問題に対する充分な検討をなしえない。敢て言及すれば，遺構の主軸が真北方向であり，サキゾノ地区内に残る区割りに真北方向とそれに直交する例がみられることに関係の可能性を考えうる。すなわちサキゾノⅠ－２・３・６・７・11～14の境界がそれで，６・７と11～13の境界の延長は番上・仲田地区と八反田・塚廻り地区の境界に沿う。またサキゾノ地区と塚廻り地区の境界は真北方向になる。サキゾノⅠ地区の東南部やII・III地区の水田区画は条里に影響された形状で，サキゾノⅠ－１・４・５も真北区割りと異っているが，Ⅰ－５の石敷遺構の存在はⅠ－５も真北区割りに包括される時期があったと考えうるものである。真北区割りは端山古墳の周溝を避ける形になることからみて既に端山古墳が築造されていたと

みるべきであろう。しかしサキゾノ地区と仲田・石橋地区を分ける境界の成因等不明確の要素は強く，石敷遺構の検討と共に将来に期さねばならない。

『筑前国続風土記拾遺』等の怡土郡三雲村の条には「築山」・「茶臼塚」・「端山」の記述がみられる。位置関係と規模からすると現在称している端山古墳が茶臼塚で，更にその北に端山が存在した可能性がある。塚廻り地区南部に茶臼塚が存在した可能性も目下のところ否定しえないが，端山の位置はサキゾノ地区に求めることも可能である。Ⅰ－4・5調査区ではその痕跡を求めえなかったが，三雲遺跡全体をみても出土量の少ない須恵器や，赤色顔料の付いた円礫の存在も注意しなければならない。

三雲遺跡群全体にわたる圃場整備の基本計画を方1町の条里区画に合せることに変更し，また塚廻り地区北辺・東辺の道路を旧状のままとすることで，大規模な区画変更には至っていないが，サキゾノ地区では新設道路によって区画に変更が生じることとなった。サキゾノⅠ－5地区の調査では，前述した如く石敷遺構・旧水田区画等に真北方向区画を考えることができる。石敷遺構構築の背景や真北方向区画の成因等を理解するためにも，塚廻り地区北辺・東辺道路の旧状維持や新設道路下に保存されている石敷遺構の部分のみならず，周辺のむやみな環境破壊を避けたい。

サキゾノ地区では，今回報告したⅠ－4・5地区以外にⅠ－1・Ⅰ－6～8地区等を調査しており，庄内式完形甕を含む土器を多量に出土した住居跡をはじめとし多数の遺構・遺物が検出されている。これらについては紙数の都合で収録できなかったが，次回の報告に収録の予定である。（小池）

図　　版

I

3 仲田I—6トレンチ(西から)
2 仲田I—6トレンチ(東から)
I 郡の後・鬼木・深町・仲田・加賀石・石橋地区

図版 2

1

2

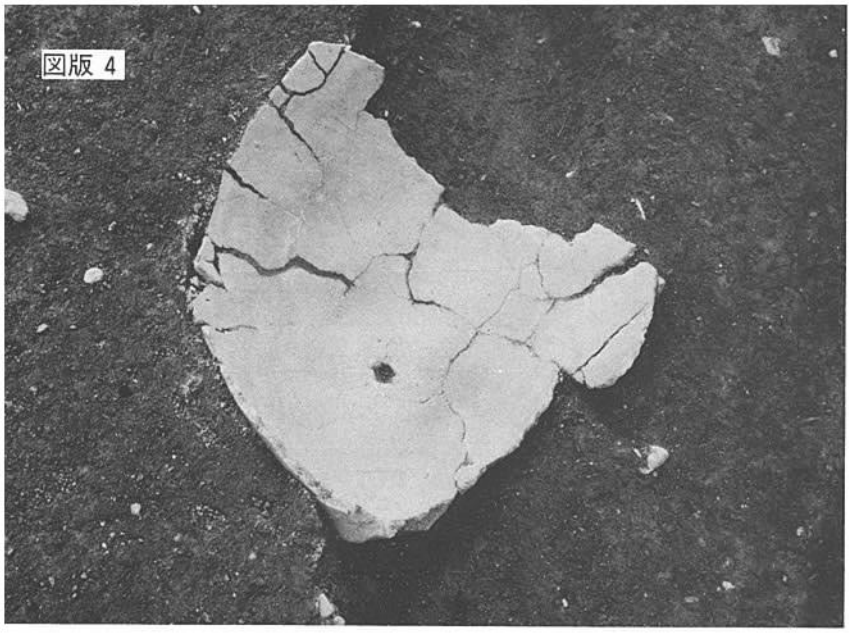
1　仲田Ⅰ－14発掘区全景(南から)　　2　6～10号甕棺墓(東から)

1

2

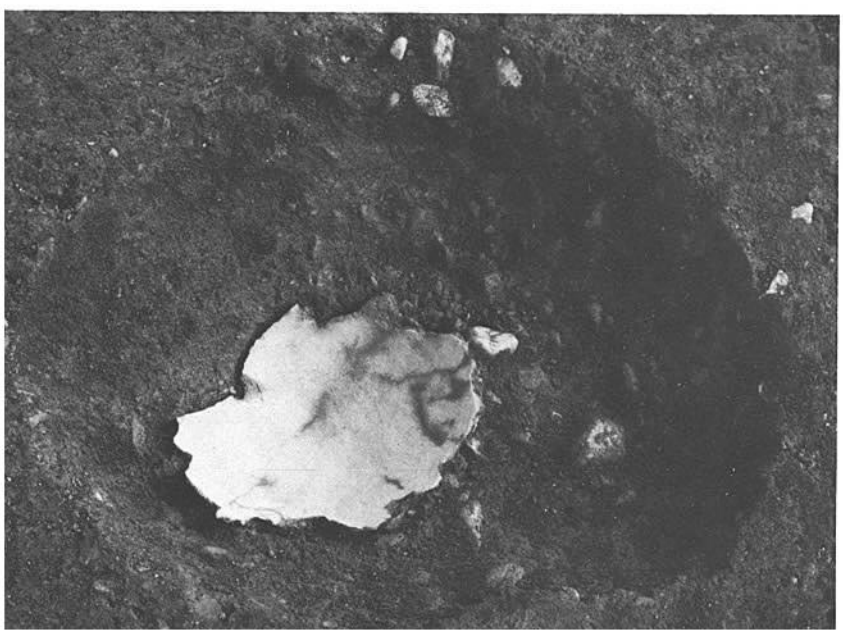
1　仲田Ⅰ－14発掘区南部(南から)　　2　2～5号甕棺墓と2・3号土壙墓(東から)

図版 4



1

2

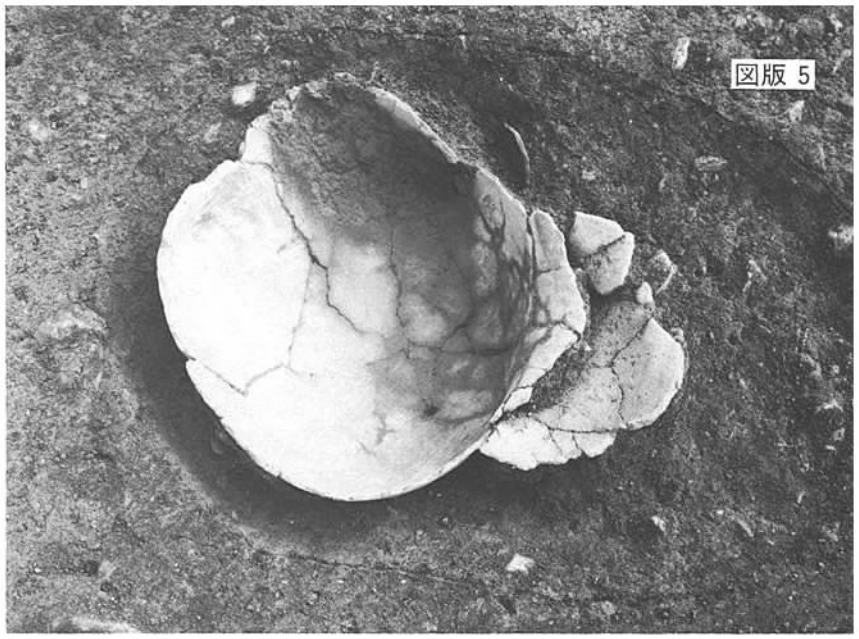


3

1　1号甕棺墓

2　2号甕棺墓

3　3号甕棺墓



1

2

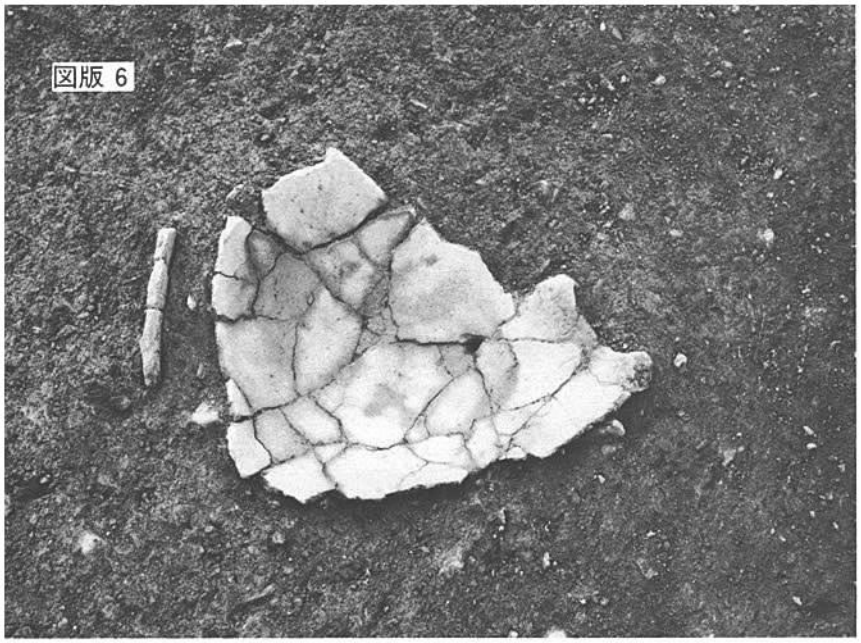
3

1　4号甕棺墓

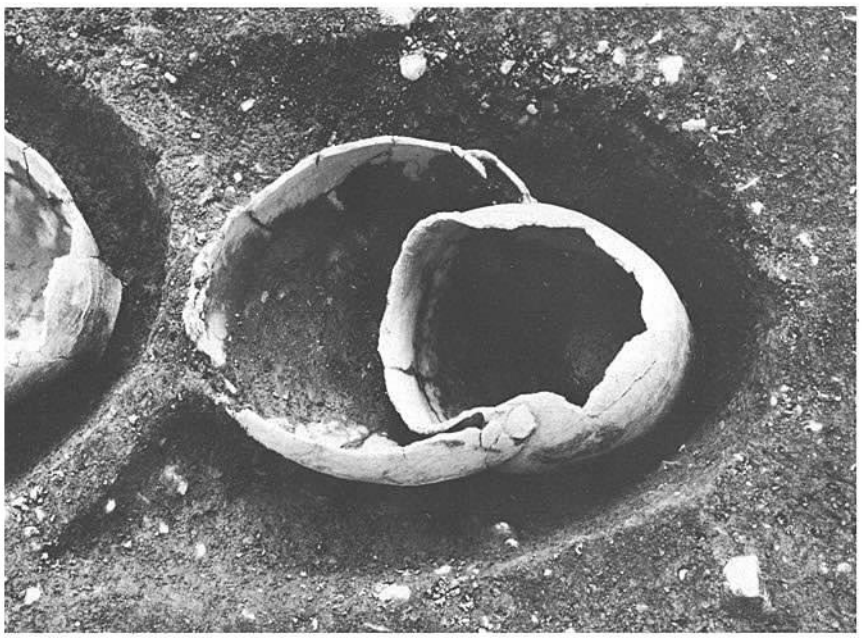
2　5号甕棺墓

3　6号甕棺墓

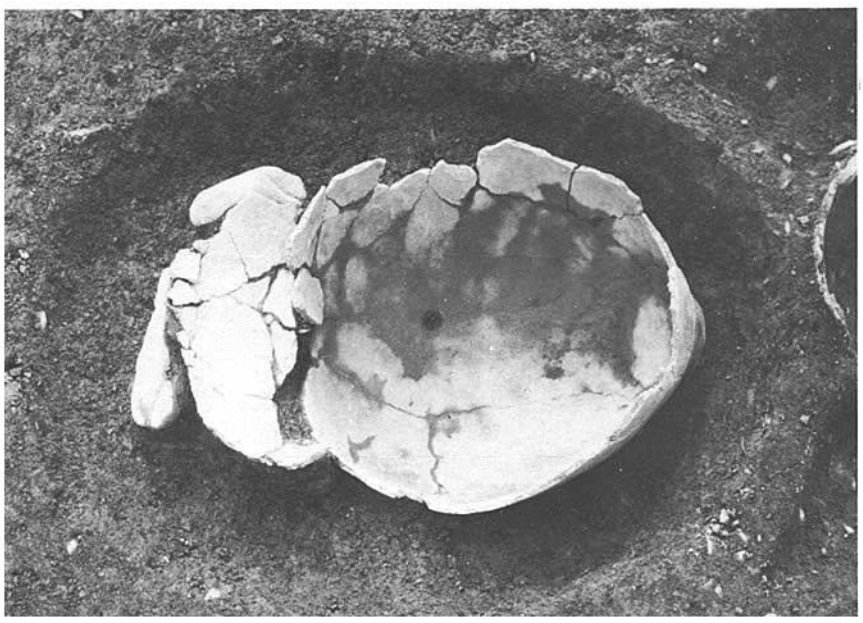
図版 6



1



2



3

1　7号甕棺墓

2　8号甕棺墓

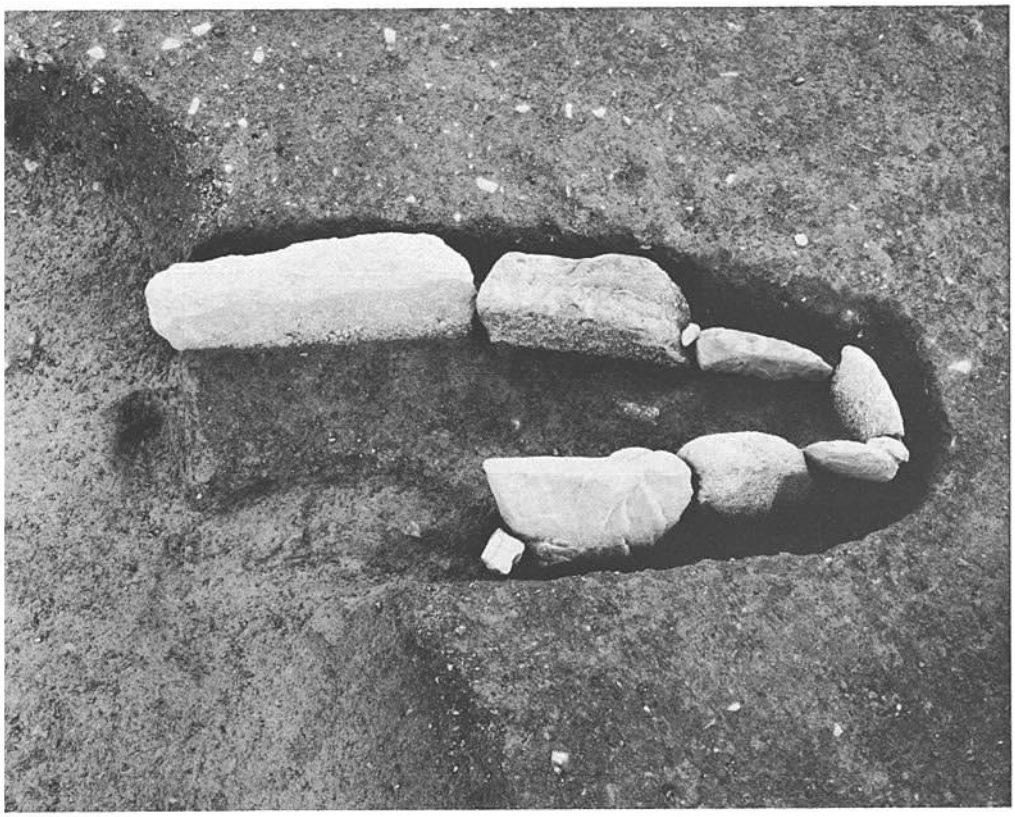
3　9号甕棺墓

1

2

1・2　10号甕棺墓

1



2

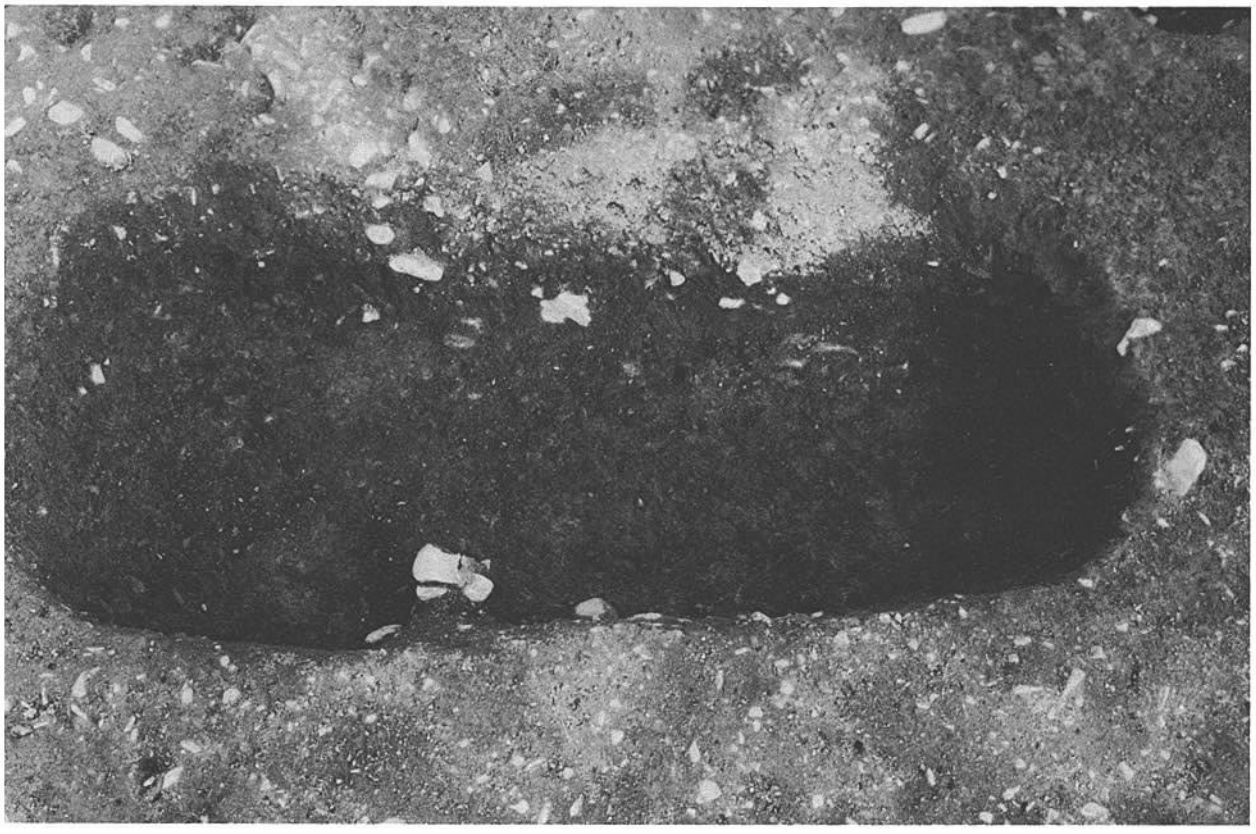
1　仲田Ⅰ－14 発掘区全景(北から)　　2　石棺墓

1

2

1　仲田1－14　6・7・10号甕棺と1号土壙　　2　1号土壙

1

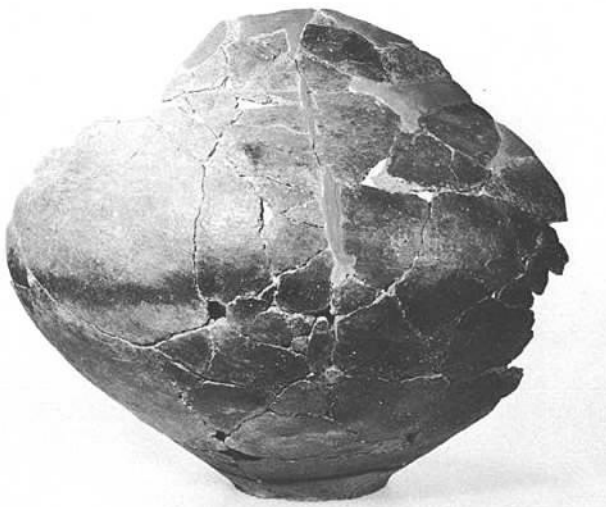


2

1　2号土壙墓　　2　3号土壙墓

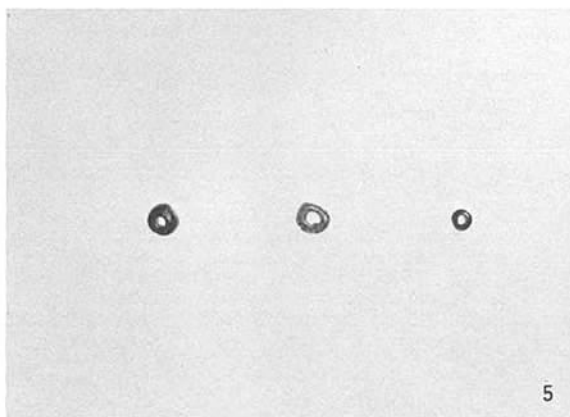
1

2



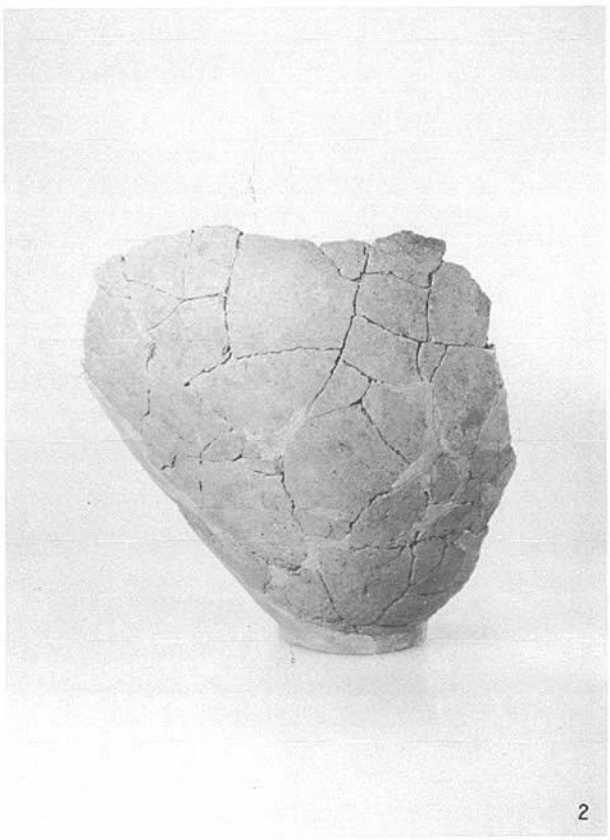
3

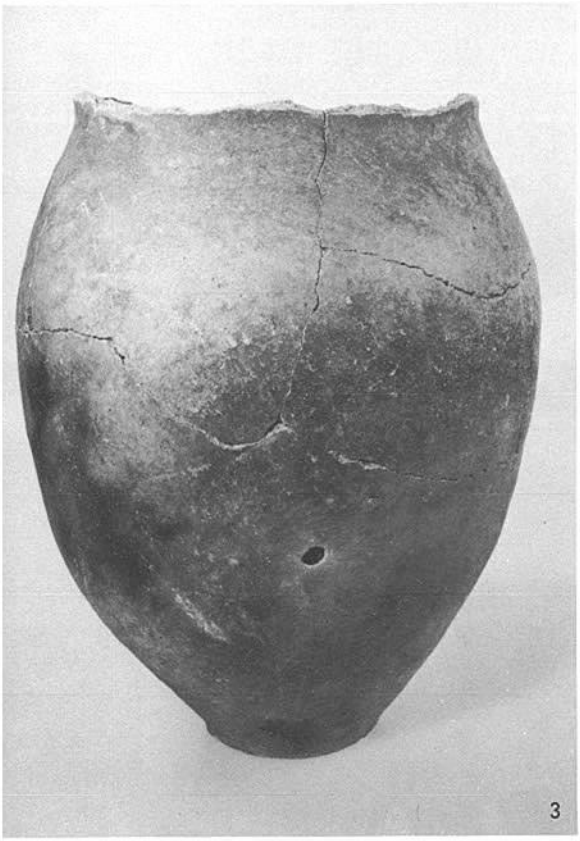
4



5

1　1号甕棺　　2　2号甕棺　　3　4号甕棺　　4　3号土壙出土壺破片　　5　ガラス小玉





1　6号甕棺　　2　7号甕棺　　3　8号甕棺　　4　9号甕棺

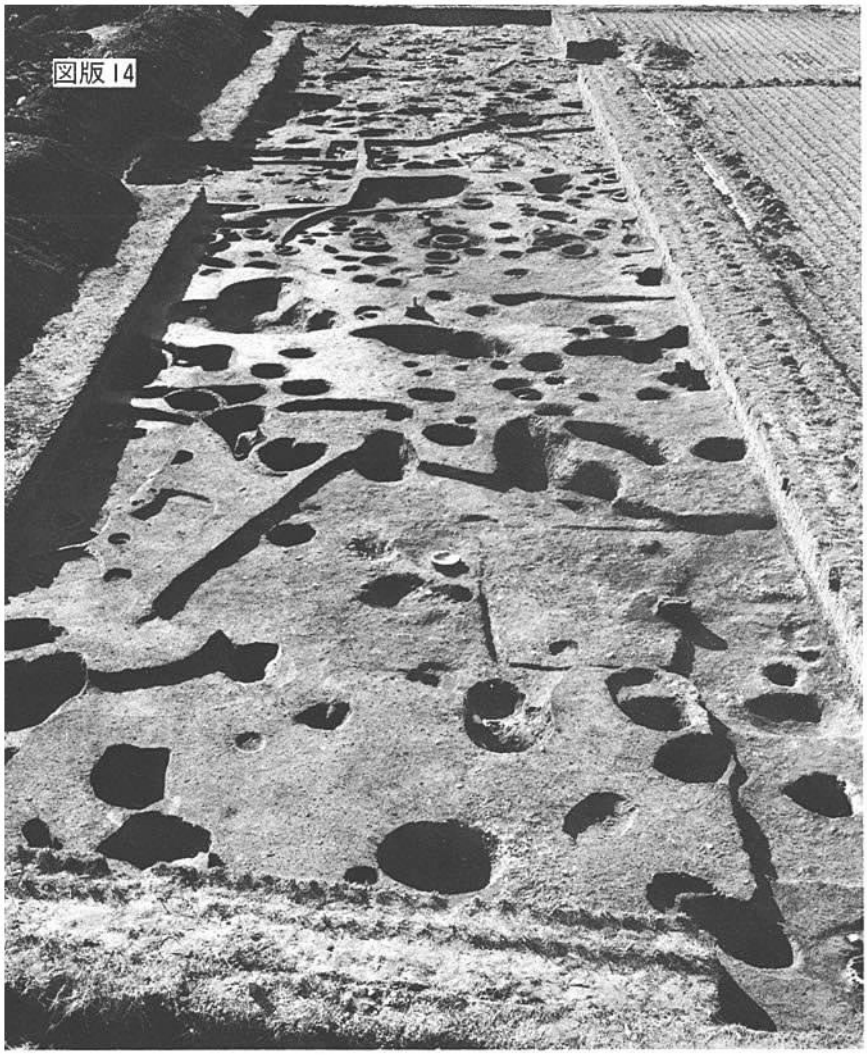
1

2

1　5号甕棺

2　10号甕棺

図版14

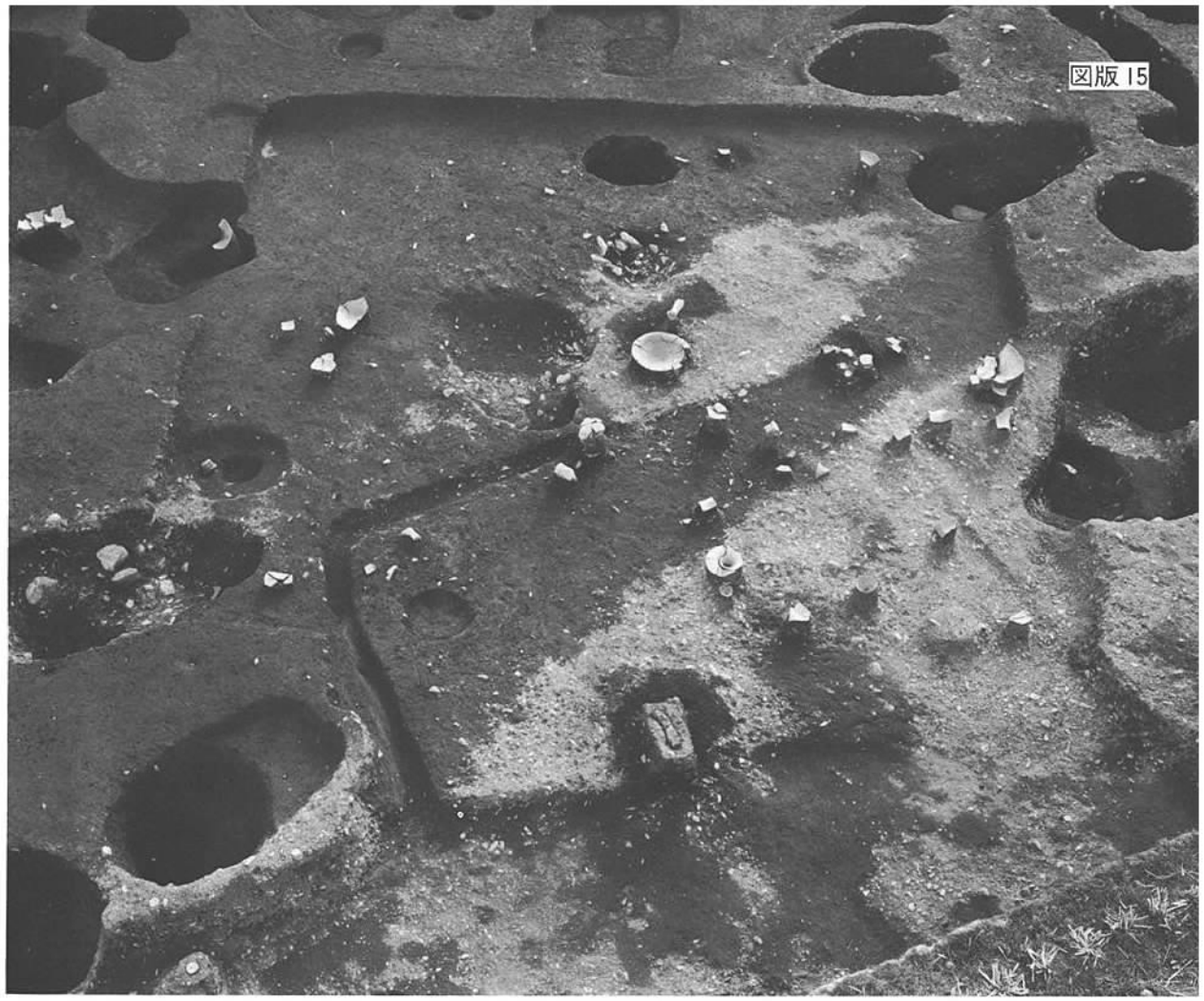


1　仲田Ⅰ－16 調査区全景
（東から）

2　仲田Ⅰ－16 調査区西半
（西から）

1

2

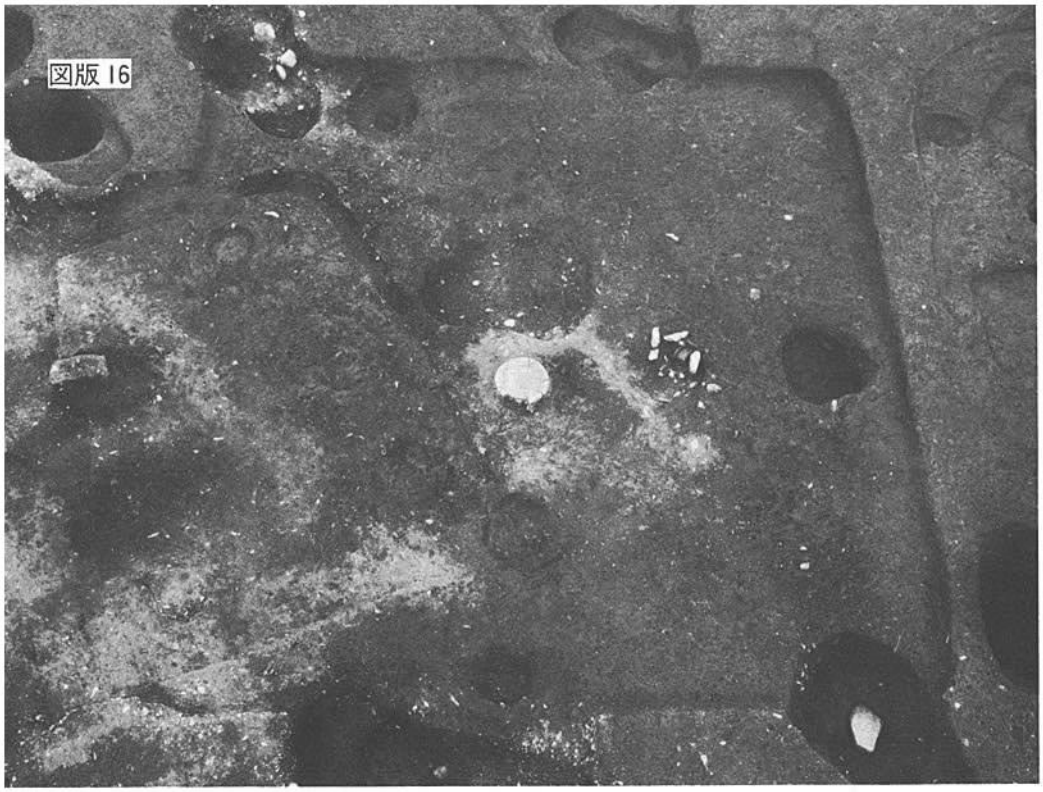


1

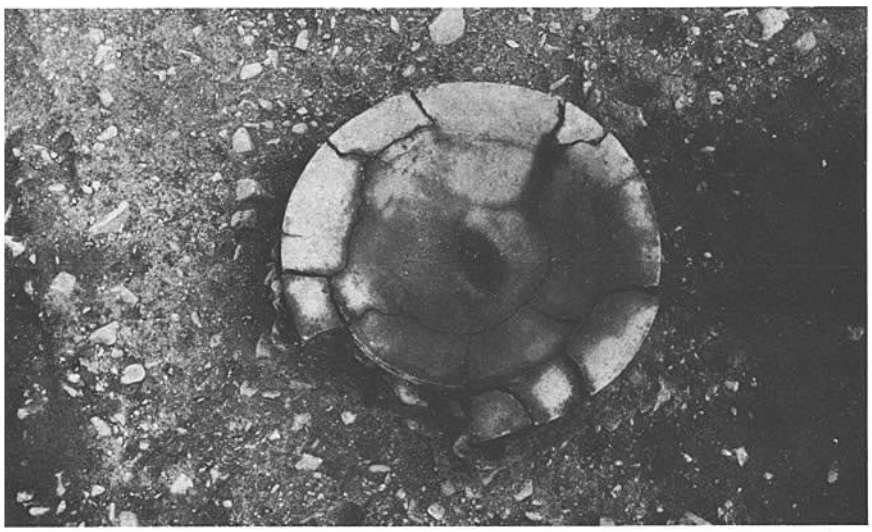
2

1　仲田Ⅰ－16　1・3号住居跡　　2　1～6号住居跡と石棺墓

図版 16



1

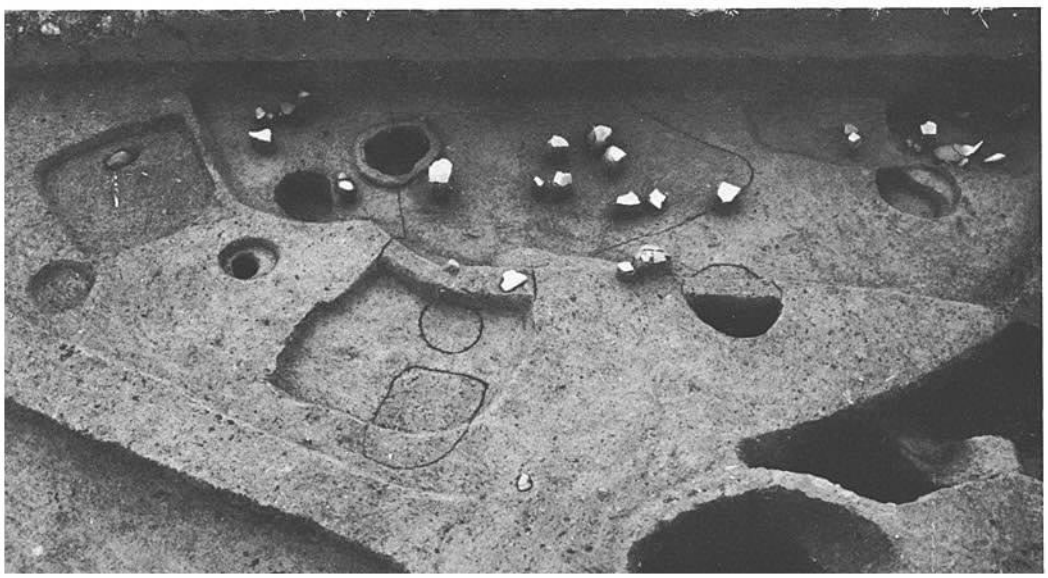


2

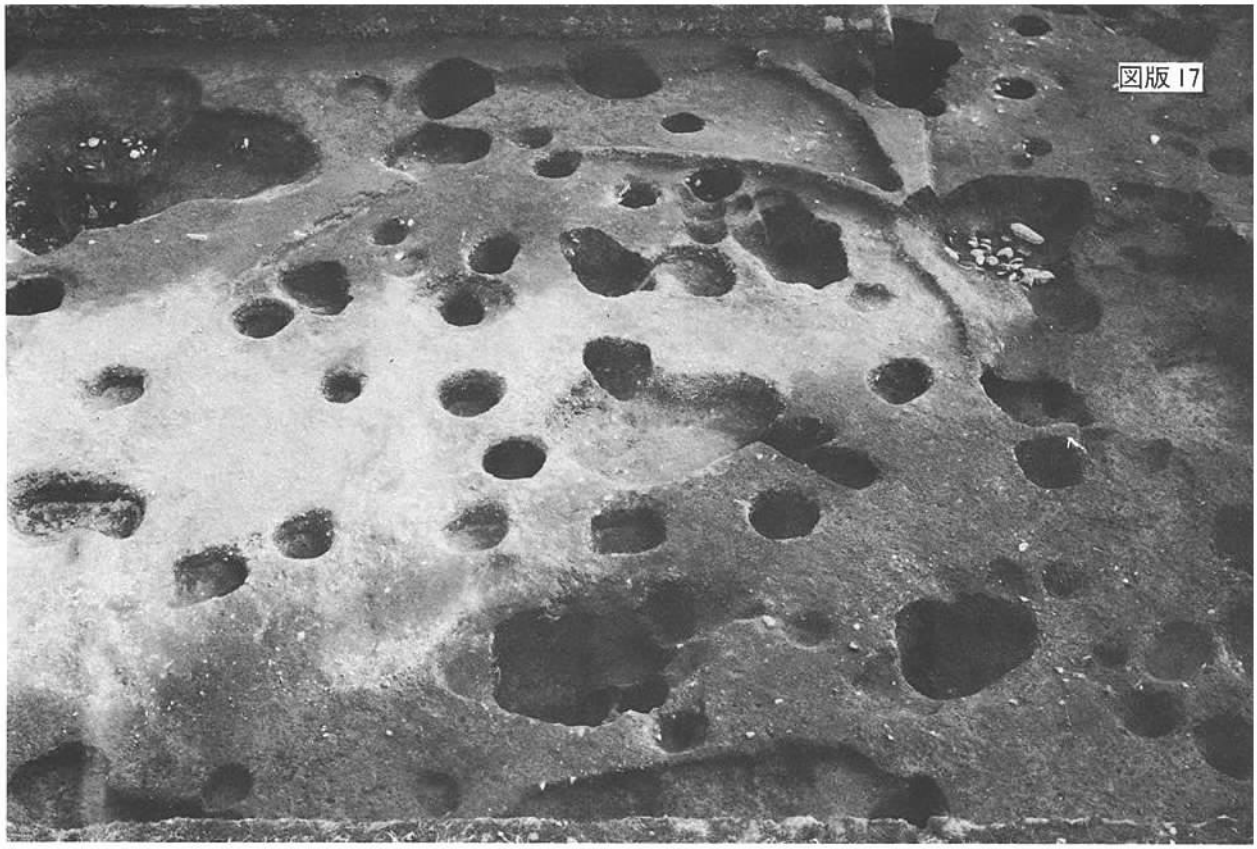
1　仲田Ⅰ－16　1・3号住居跡

2　1号住居跡中央　高杯

3　5・6号住居跡



3

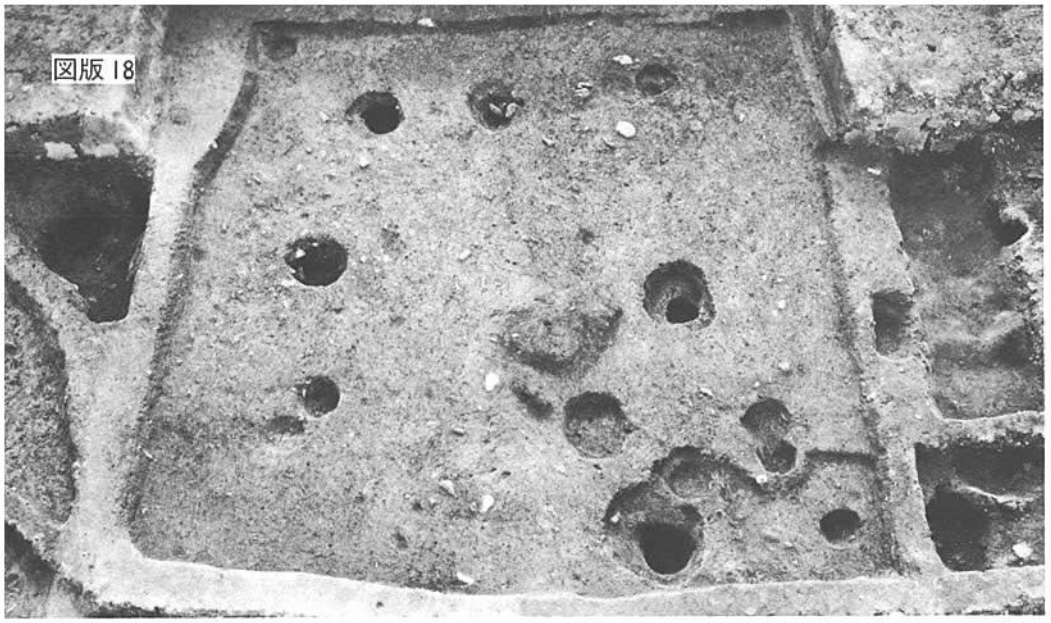


1

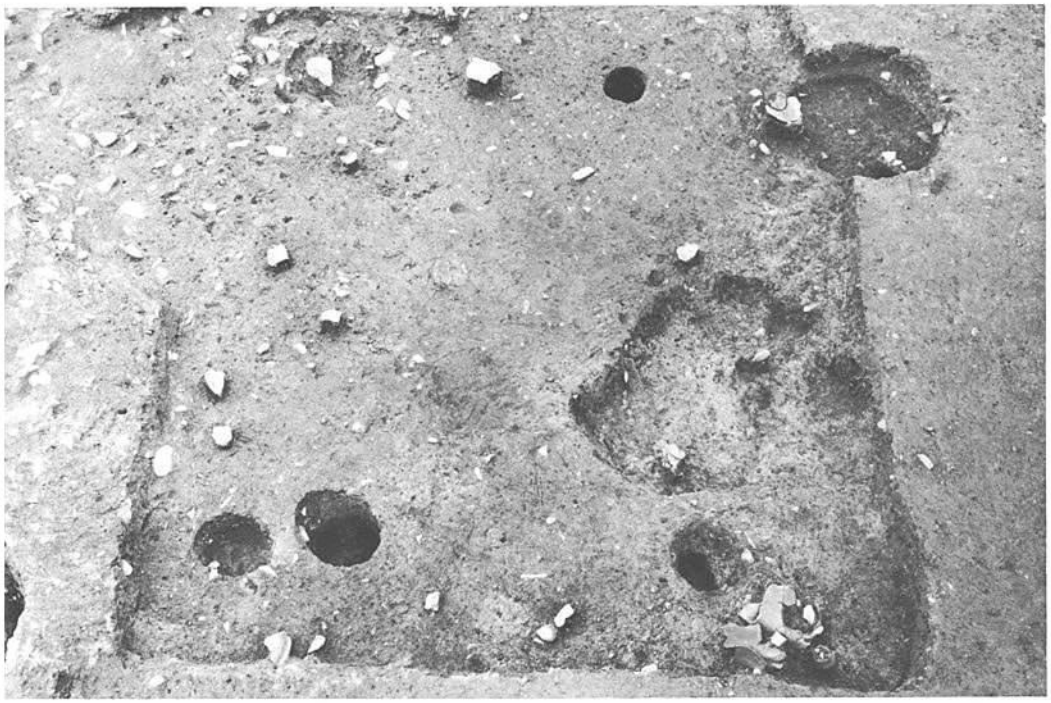
2

1　仲田Ⅰ－16　7～9号住居跡　　2　10・11・16号住居跡付近(第4層)

図版18



1



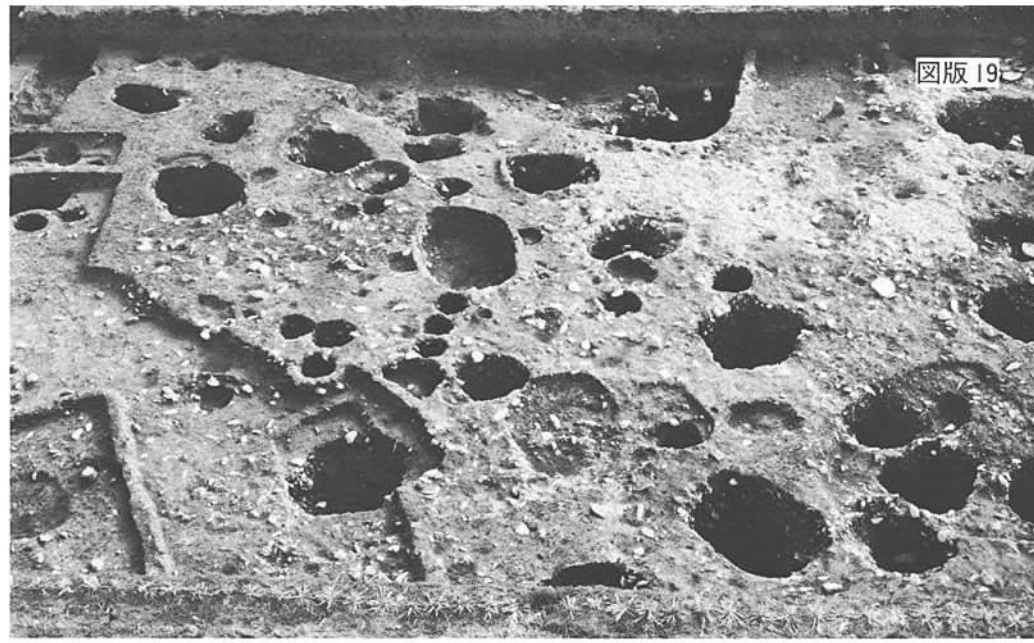
2

3

1　仲田Ⅰ－16
　　10号住居跡

2　11号住居跡

3　12号住居跡



1

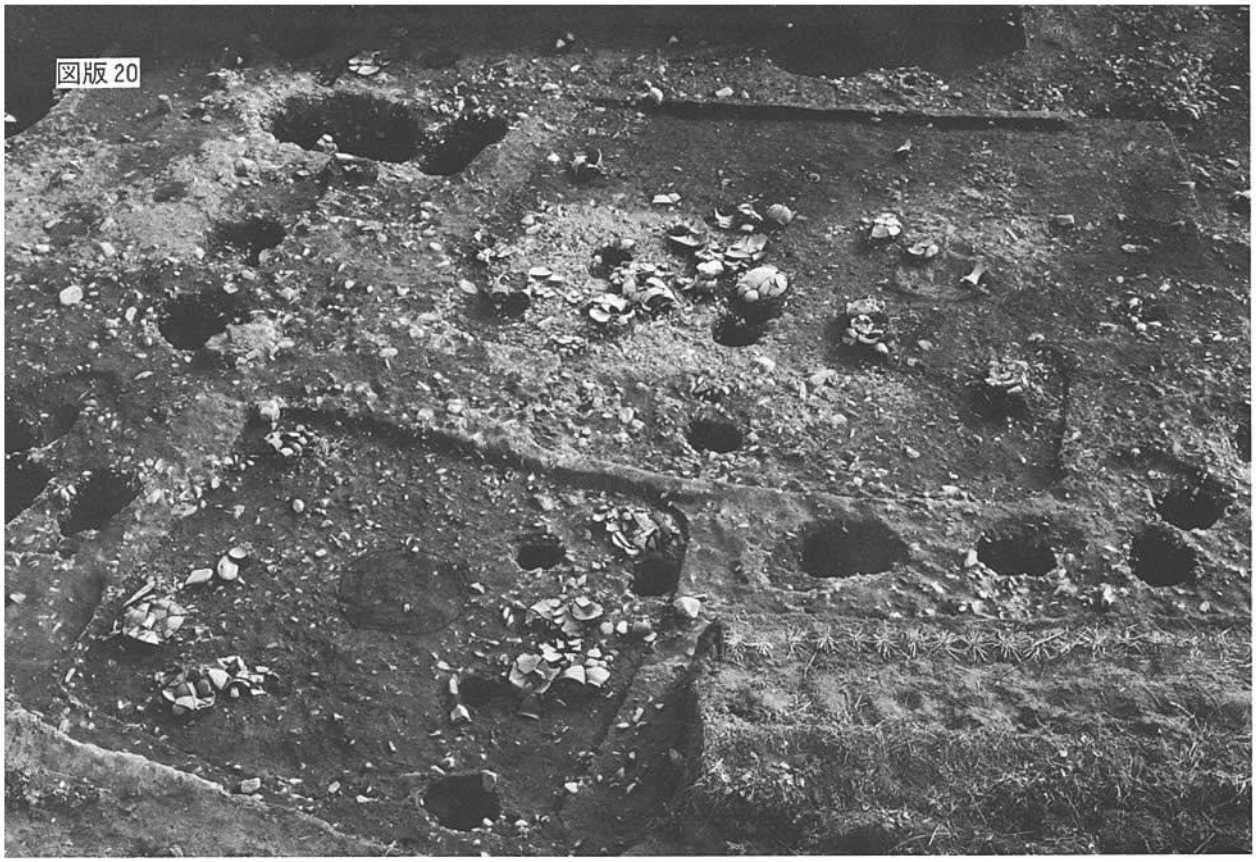
2

仲田Ⅰ－16
13・14号住居付近

14号住居跡

13号住居跡付近の
第4層

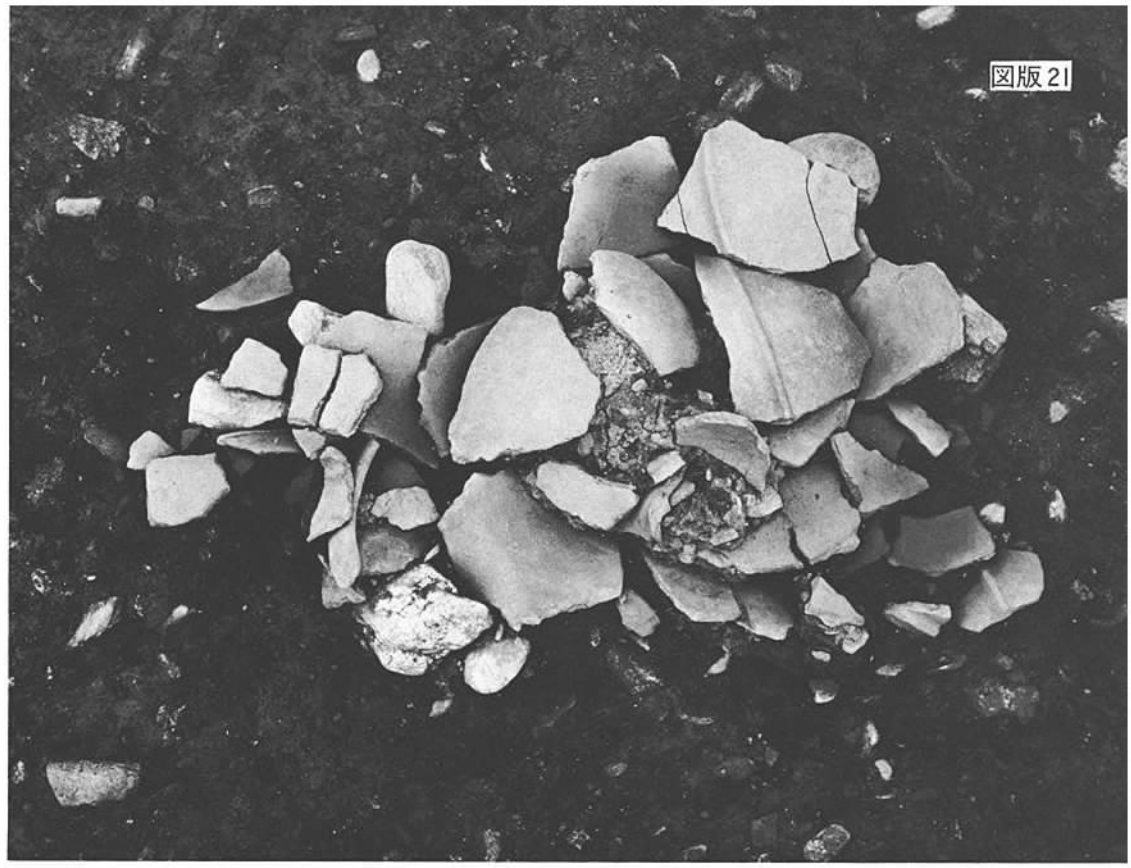
3



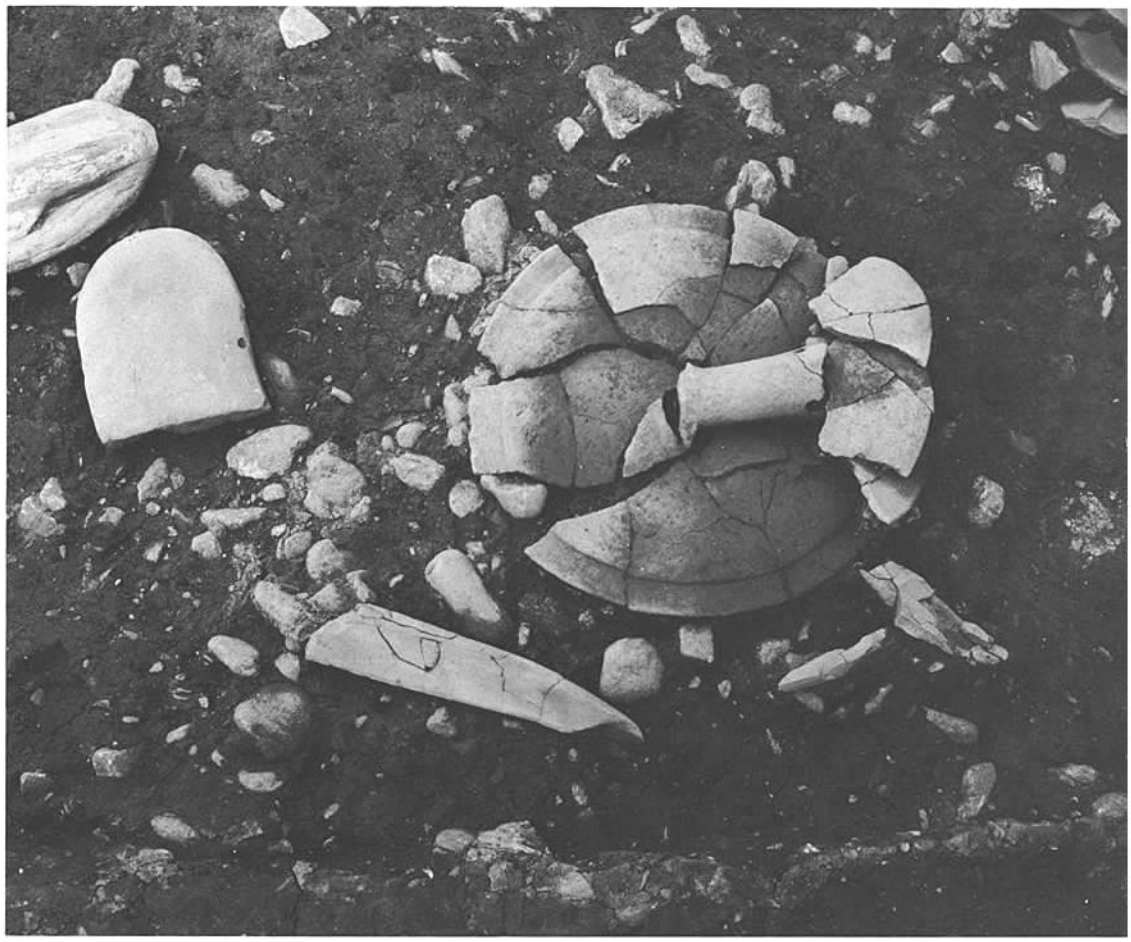
1

2

1　仲田Ⅰ－16　17・18号住居跡　　2　17号住居跡

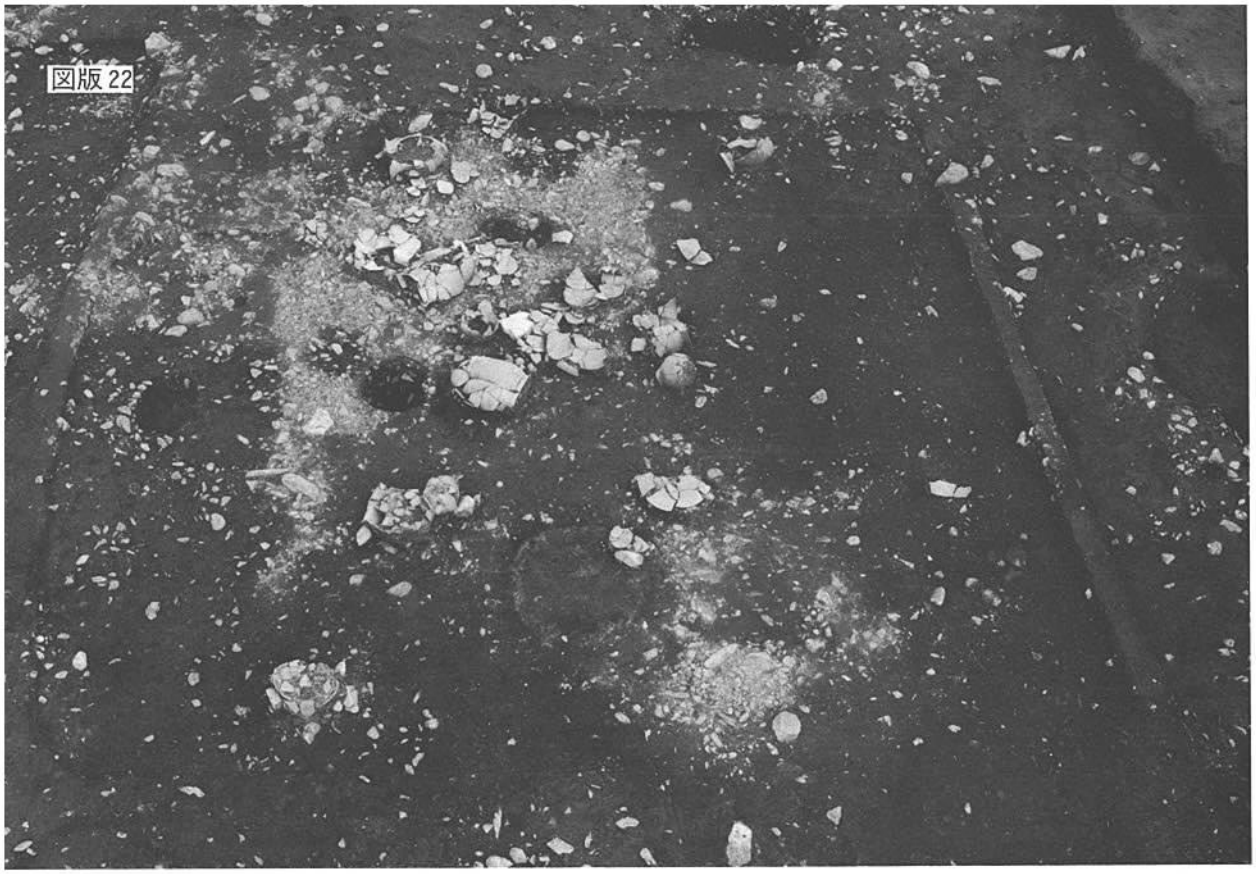


1

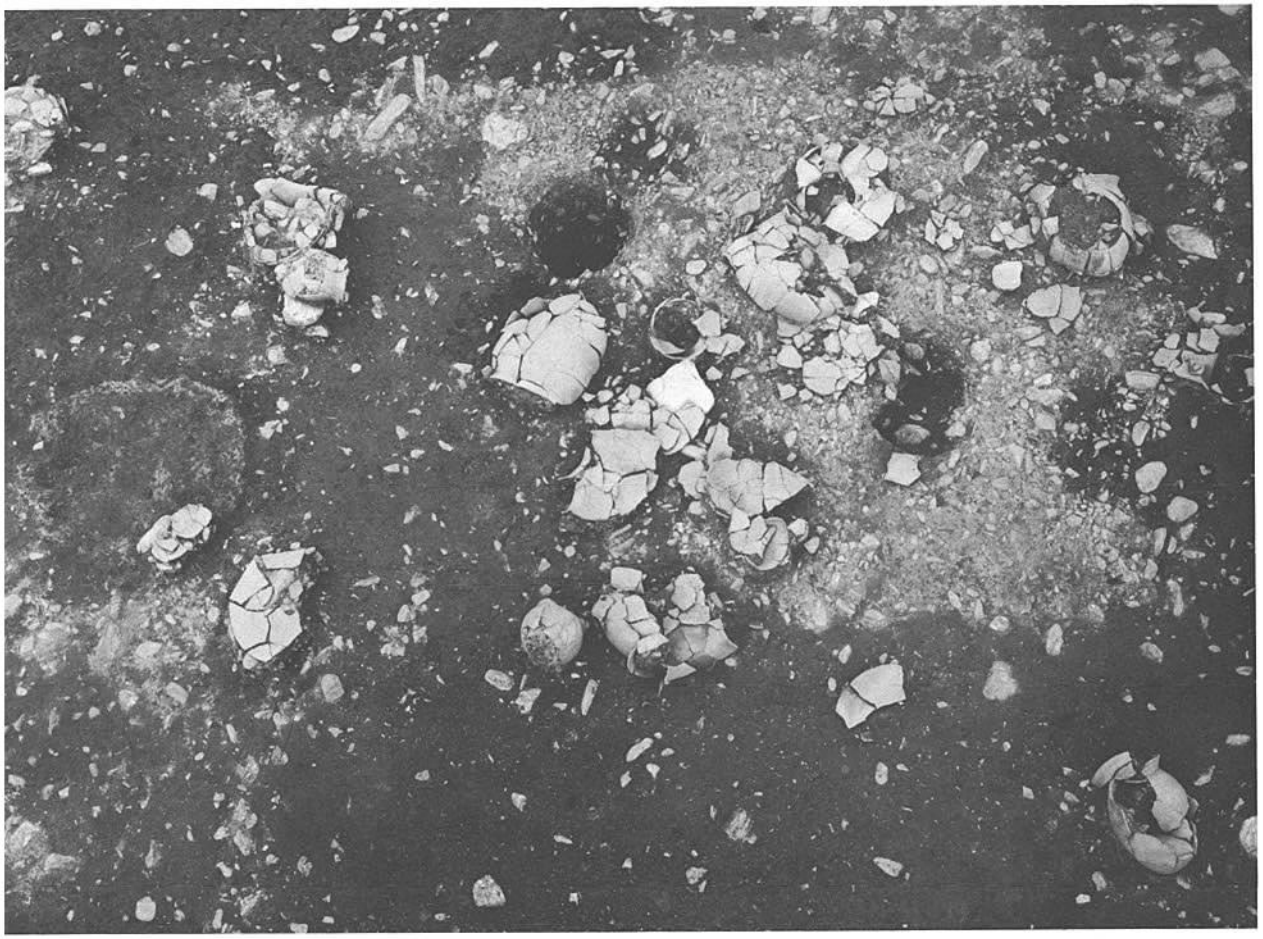


2

1　仲田Ⅰ－16　17号住居跡内壺と管玉　　2　17号住居跡内高杯と砥石



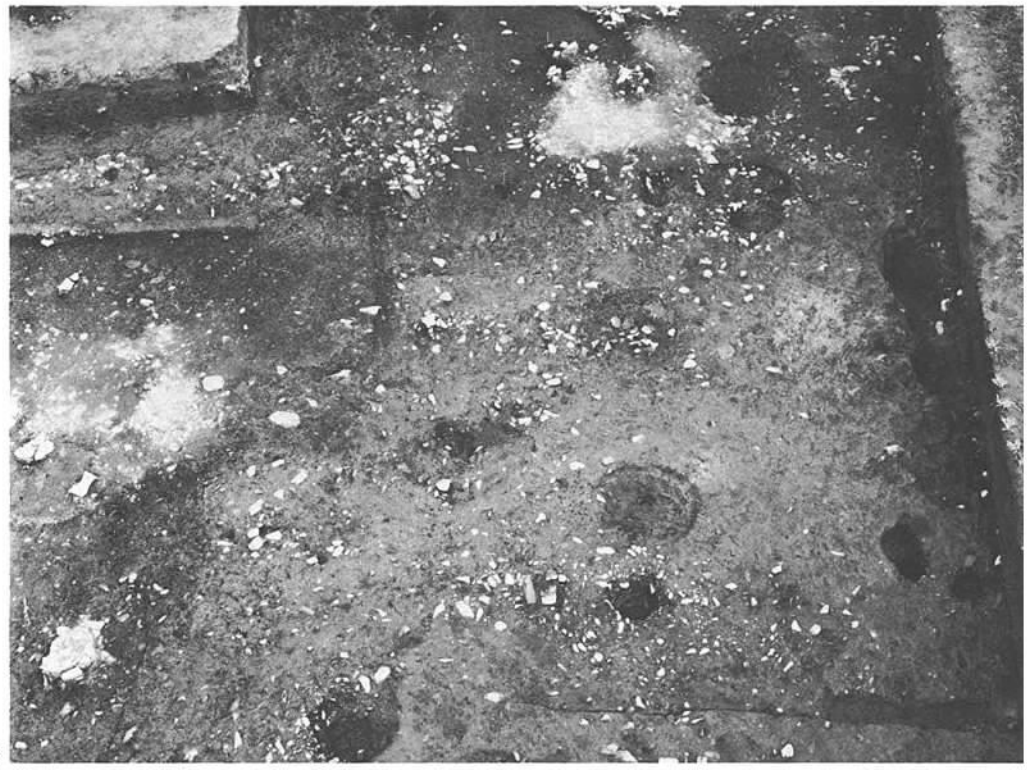
1



2

1　仲田Ⅰ－16　18号住居跡　　2　18号住居跡内土器

1



2

1　仲田Ⅰ－16
　　17～21号住居跡

2　20号住居跡

3　21号住居跡

3

図版24

1

2

1　仲田Ⅰ－16
　3号不整形土壙(第3層)

2　器　台

3　3号不整形土壙付近

3

1

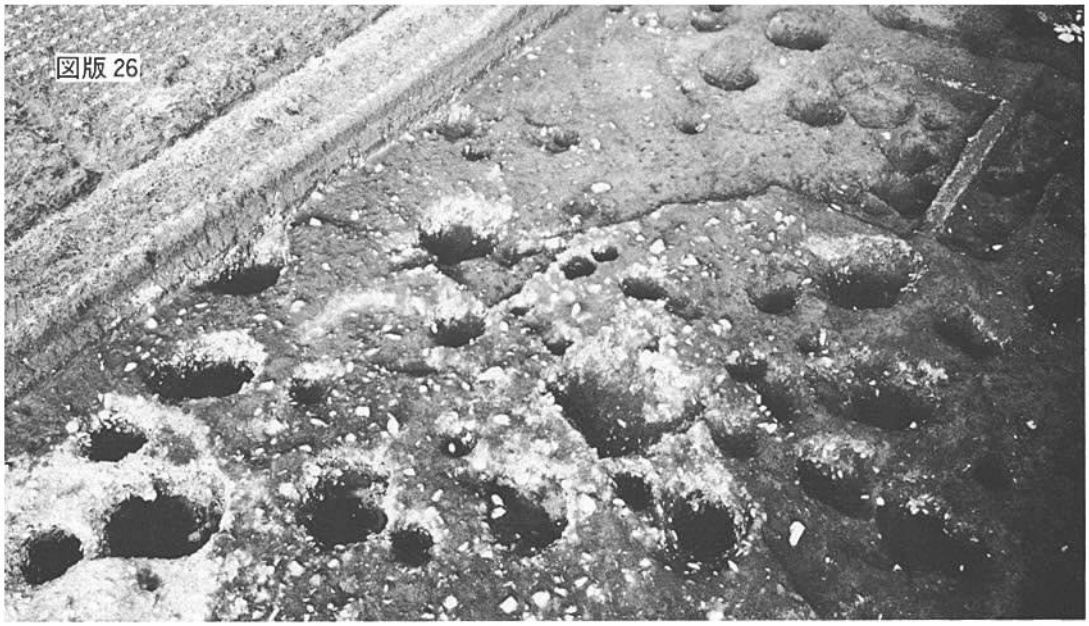
2

3

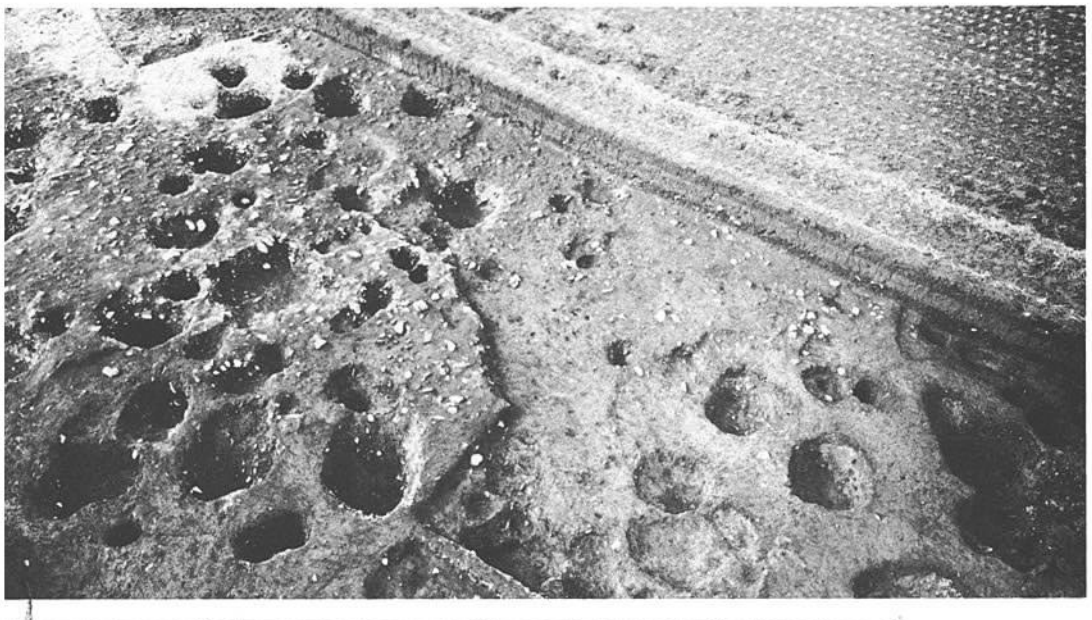
1　仲田Ⅰ－16
　1号不整形土壙

2　2号不整形土壙

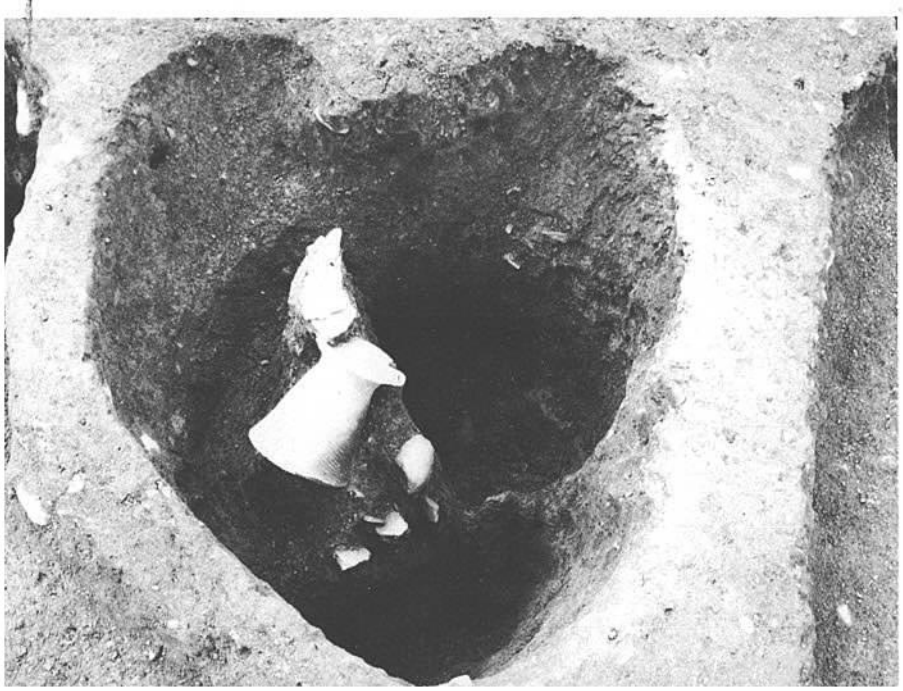
3　石棺墓



1



2



3

1　仲田Ⅰ－16
　　掘立柱遺構(南西から)

2　掘立柱遺構(南東から)

3　P23の鉄鎌と器台

4

6

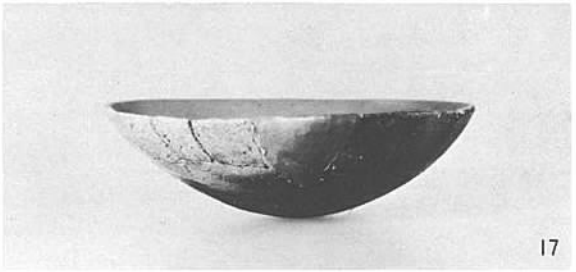
5

7

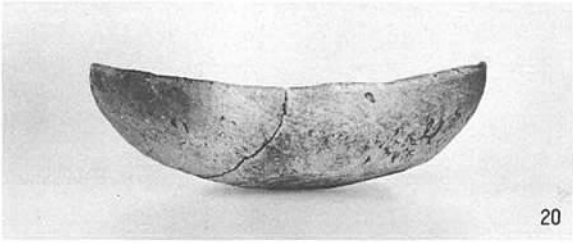
13

11

16



17



20

31

28

仲田Ⅰ－16　1・3・5・6・9・10号住居跡出土土器

32

35

37

39

49

51

50

56

58

仲田Ⅰ－16～10　13号住居跡出土土器

61

62

64

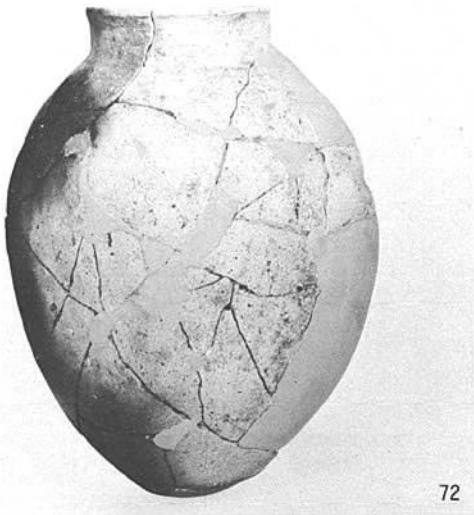
63

65

68

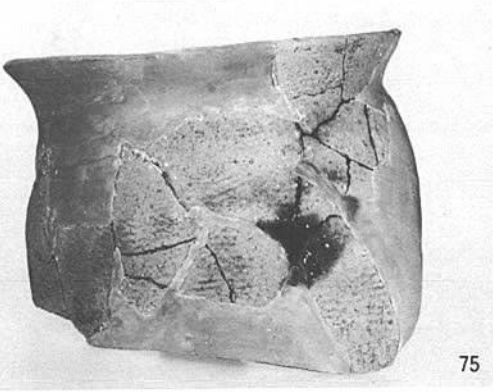
仲田Ⅰ－16　17号住居跡出土土器

71



72

73



75

76

77

仲田Ⅰ－16　18号住居跡出土土器

78

79

80

81

86

87

仲田Ⅰ－16　18号住居跡出土土器

82

88

89

90

91

95

97

104

109

仲田Ⅰ－16　18・21号住居跡出土土器

2

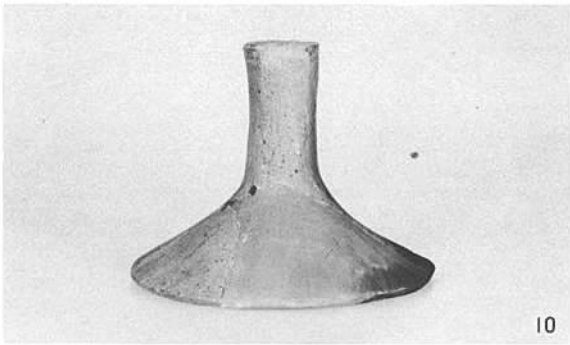
5

6

4

9

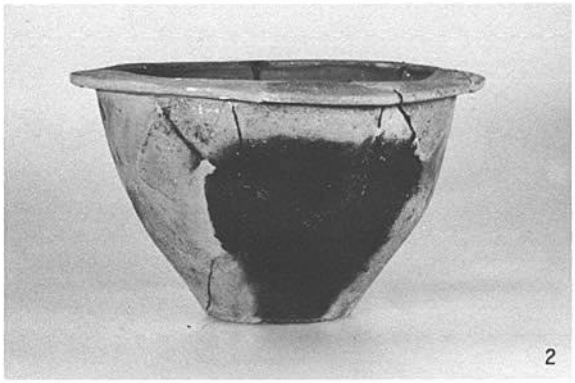
1

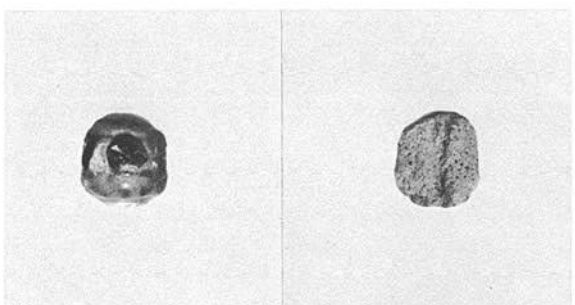

10

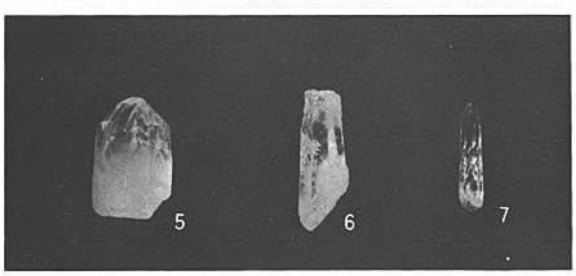
16

17

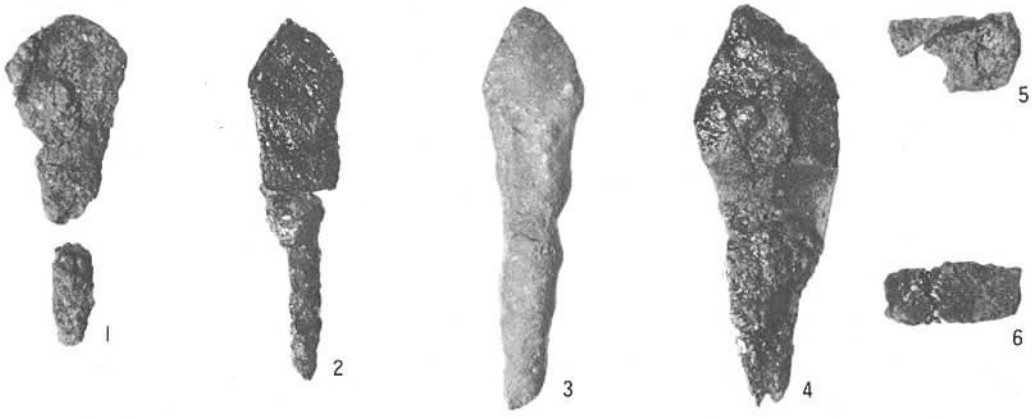
仲田Ⅰ－16　1～3号不整形土壙出土土器





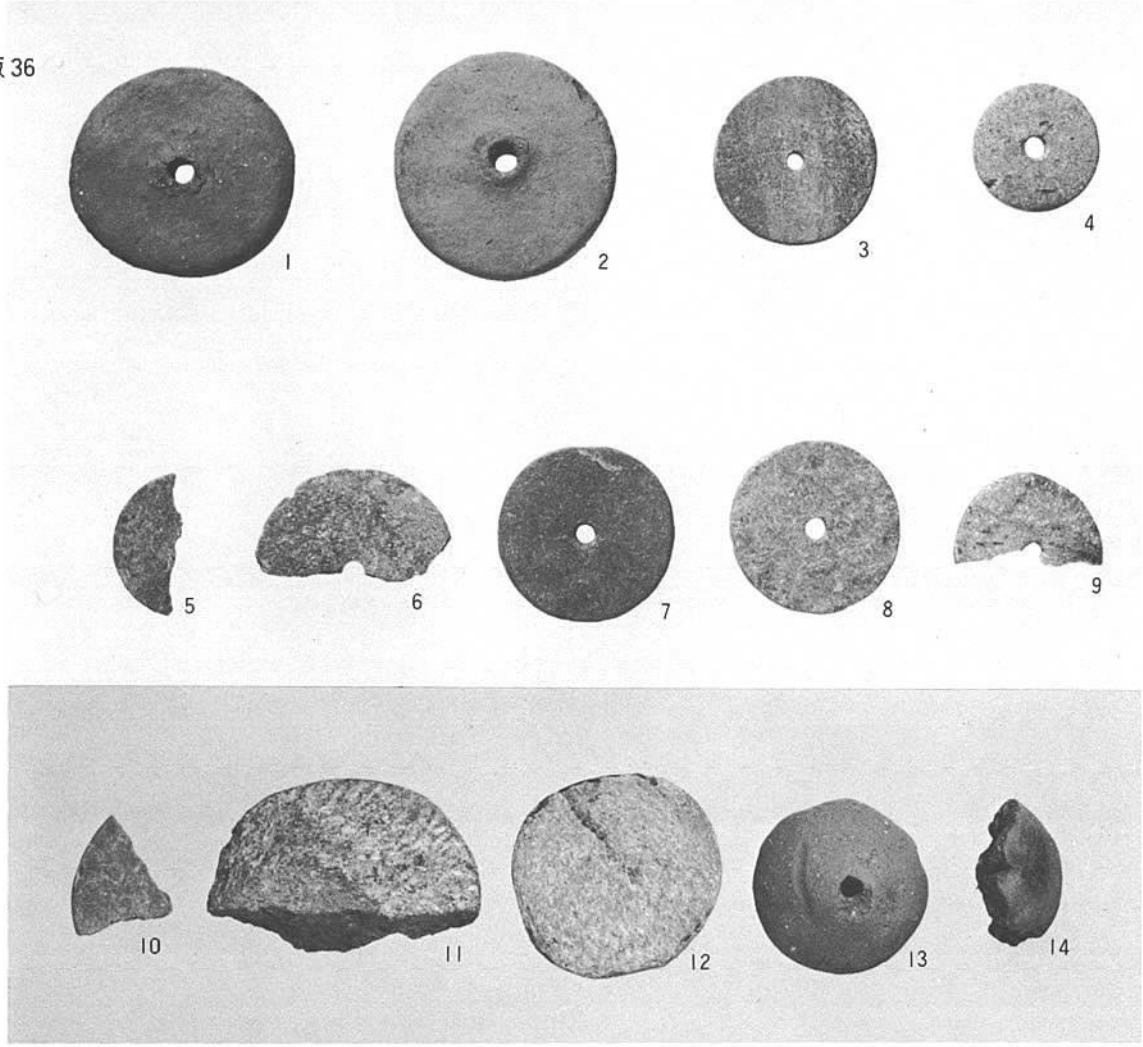


仲田Ⅰ－16　ピット出土土器と玉類辰砂

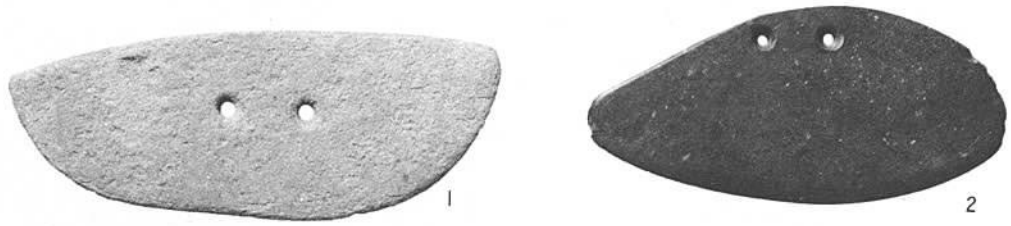


仲田Ⅰ－16　鉄　器

図版 36



1

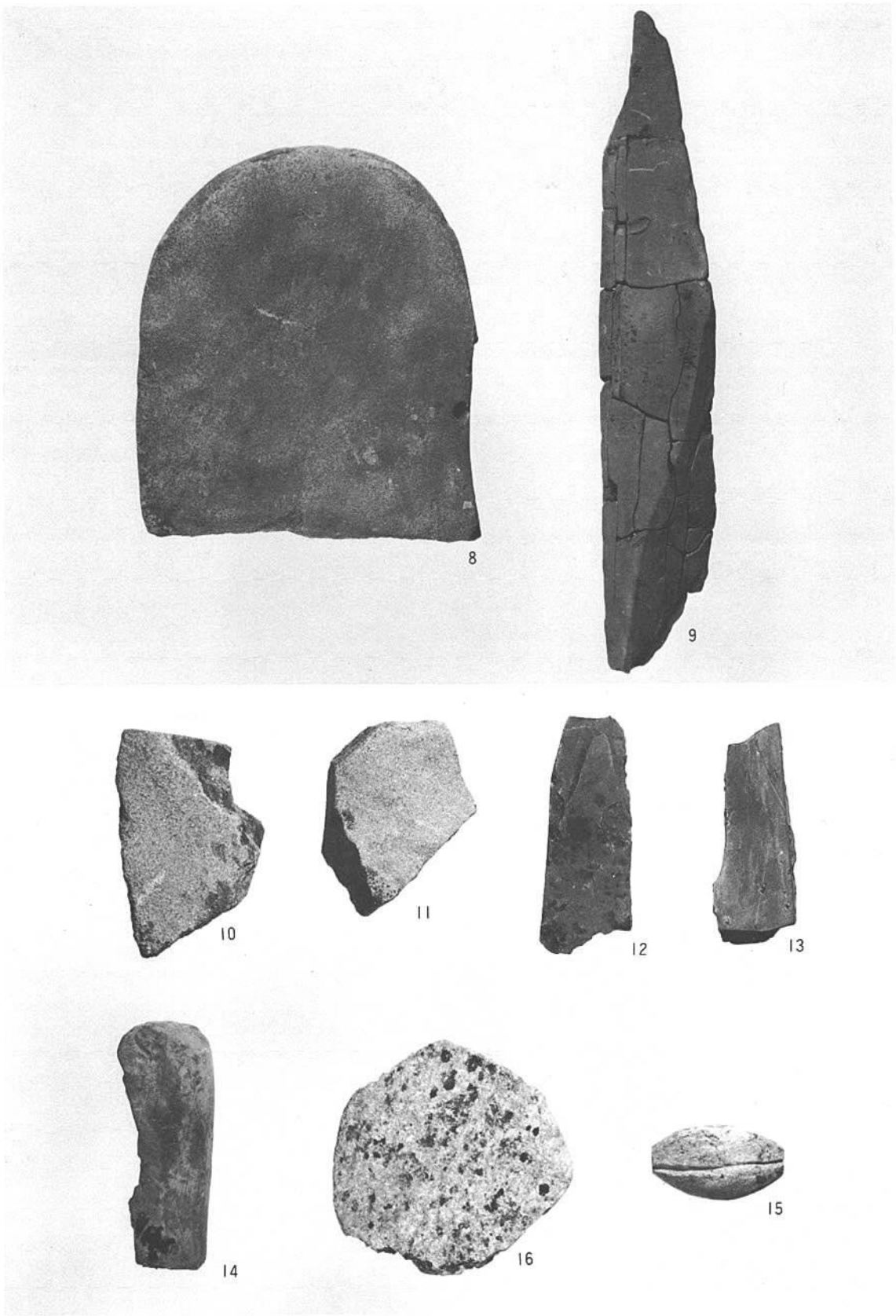


2

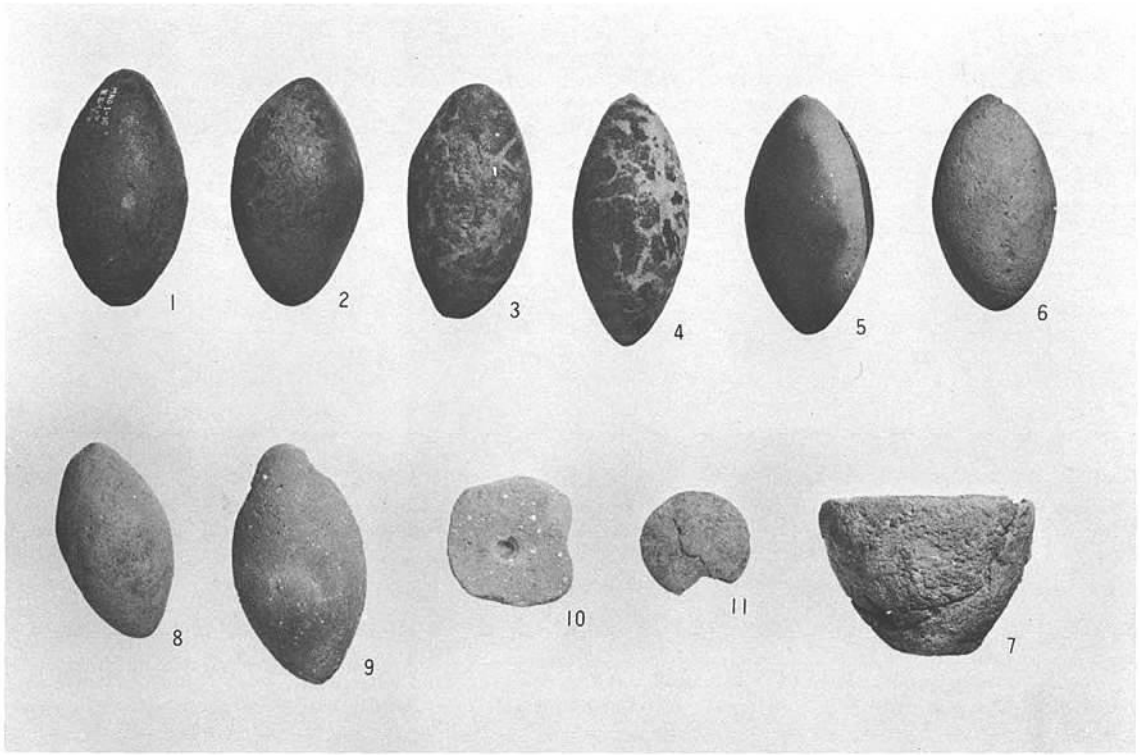
1　仲田Ⅰ－16　紡錘車　　2　石　器

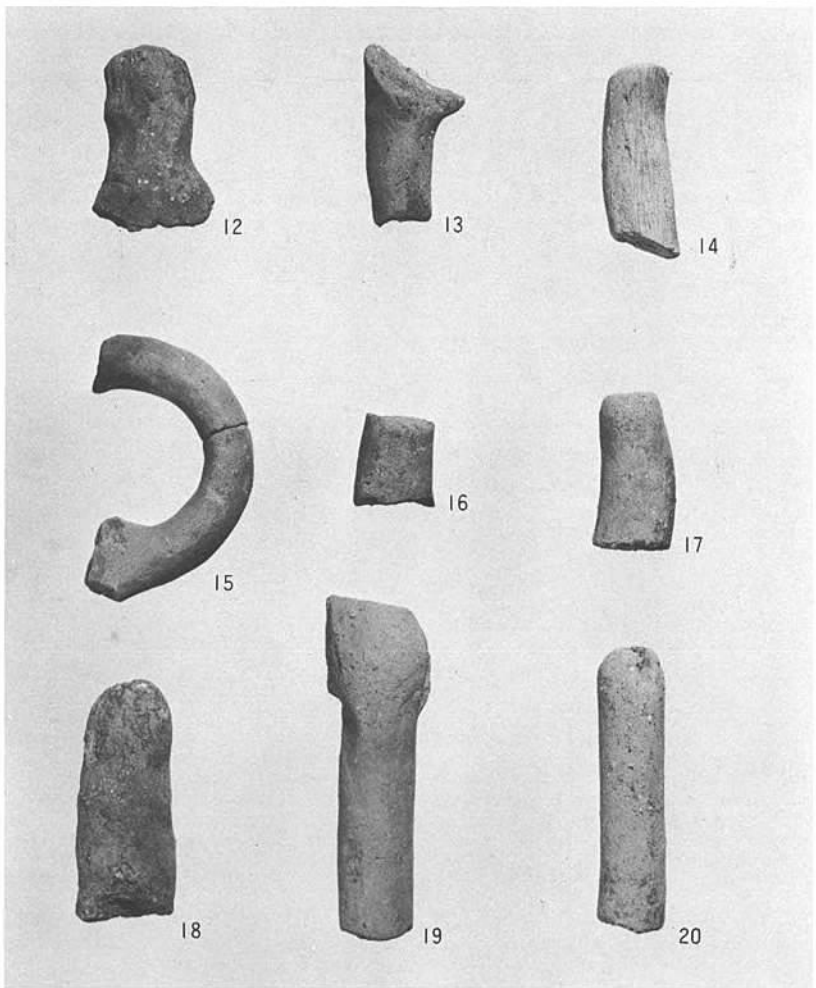
1 2

1・2　仲田16　石器・砥石



伸田Ⅰ－16　石　器





仲田 I －16 土製品

図版 40

1

2

3

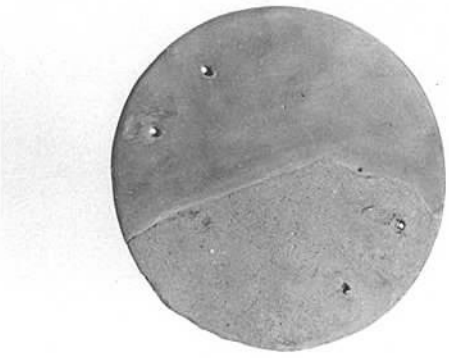
1　鬼木II－13
　　調査区全景

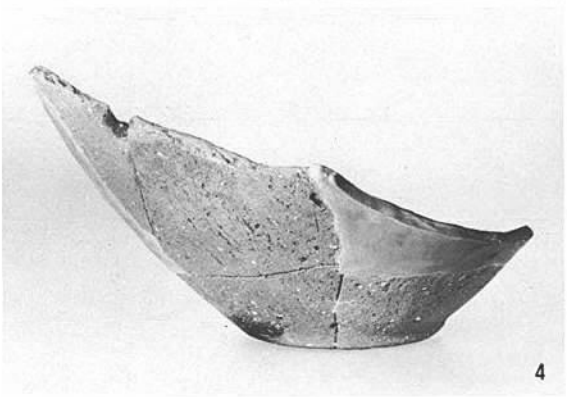
2　調査区近景

3　流　木

1

5


6


4

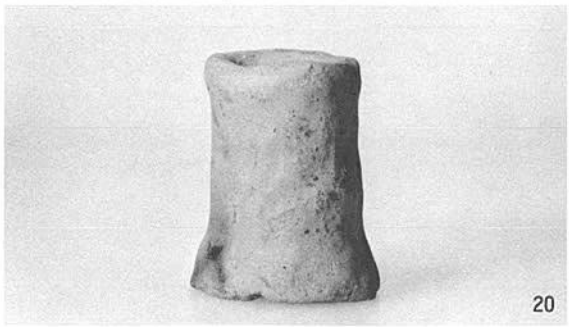
7

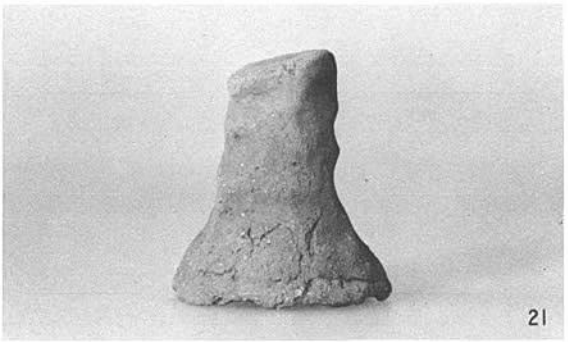
8

深町－15　出土土器

9

14


20


21

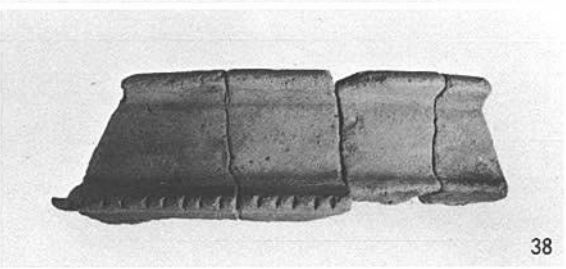
22

28

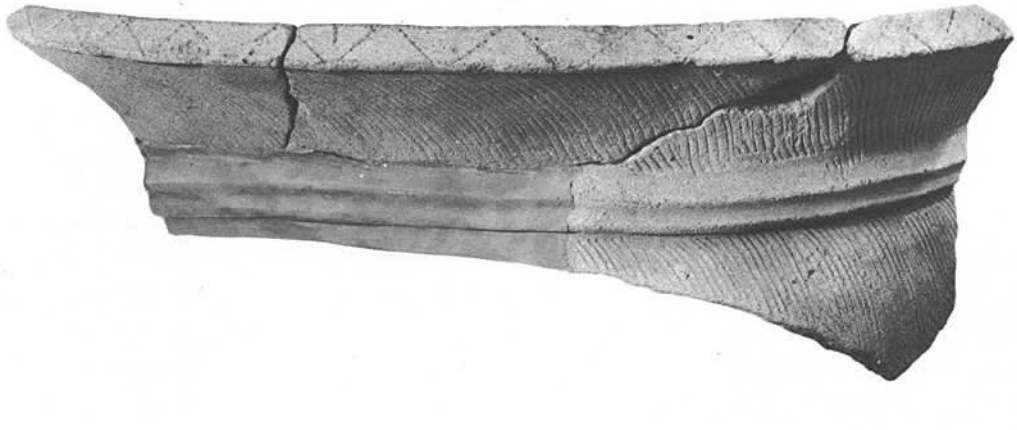
29

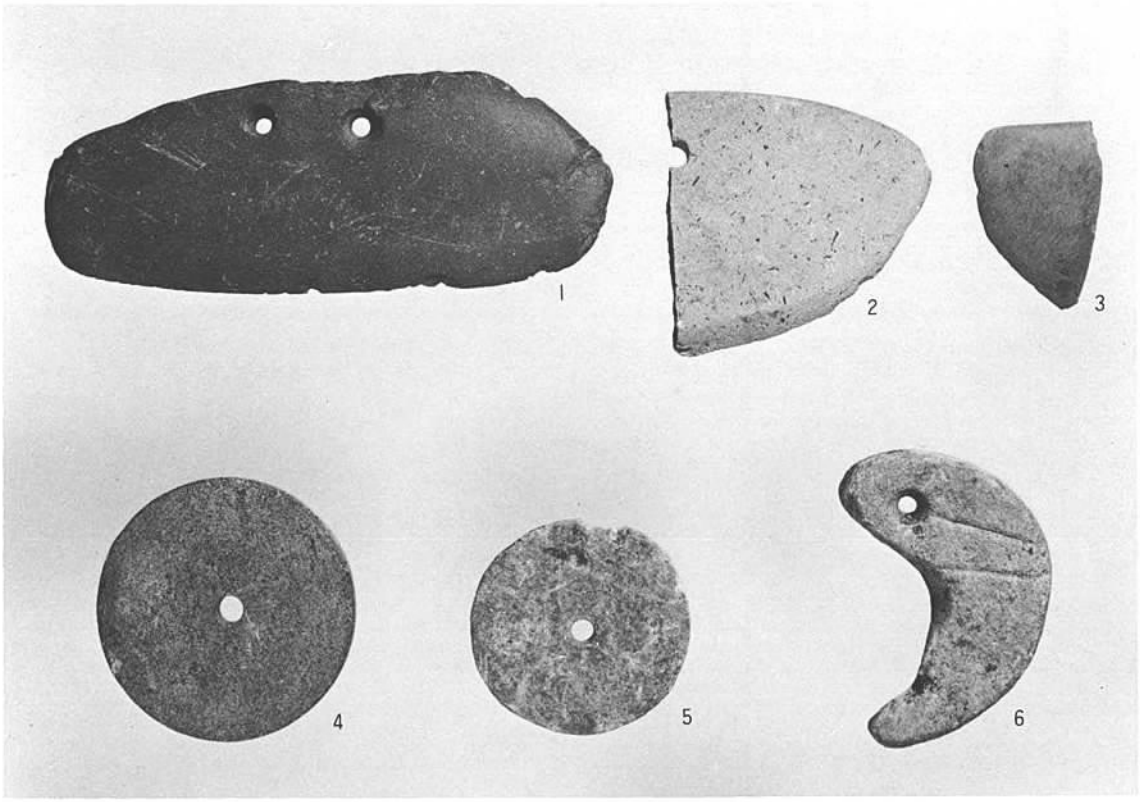
32

34


38

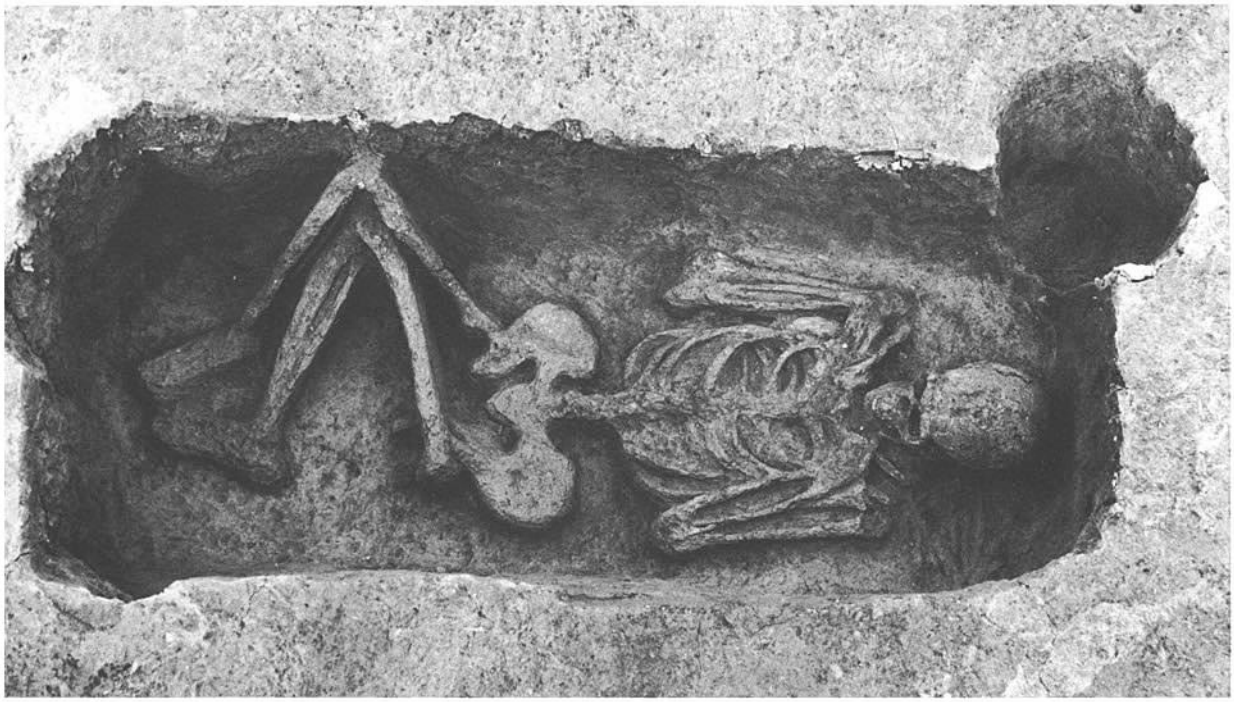
深町－15　出土土器





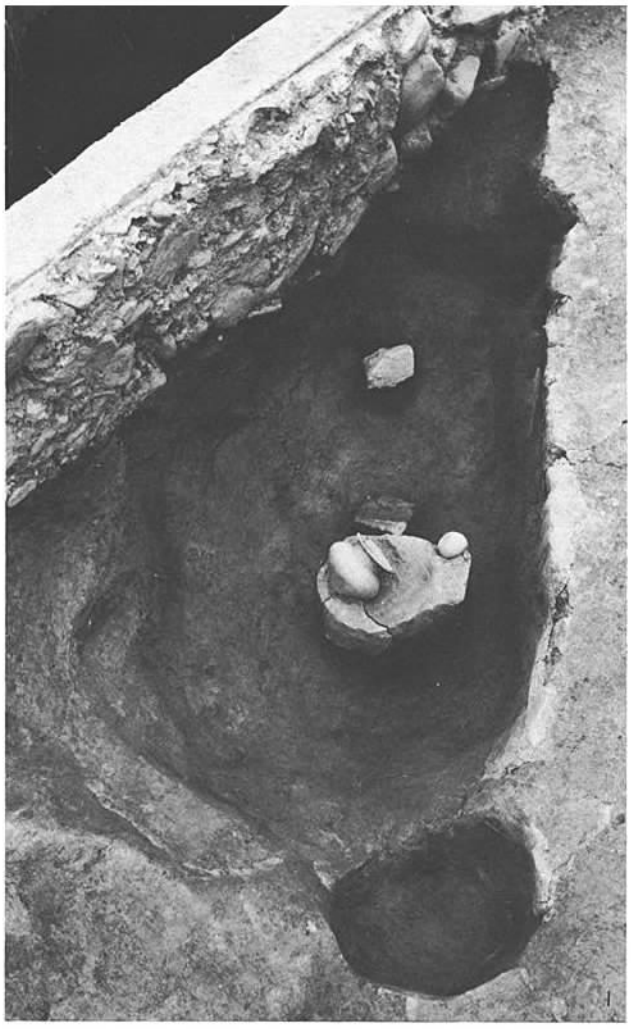
深町－15　土器・鏡片・石器

1



2

1　柿木－11　調査区北半　　2　1号土壙墓



1　2号土壙墓　　2・3　3号土壙墓

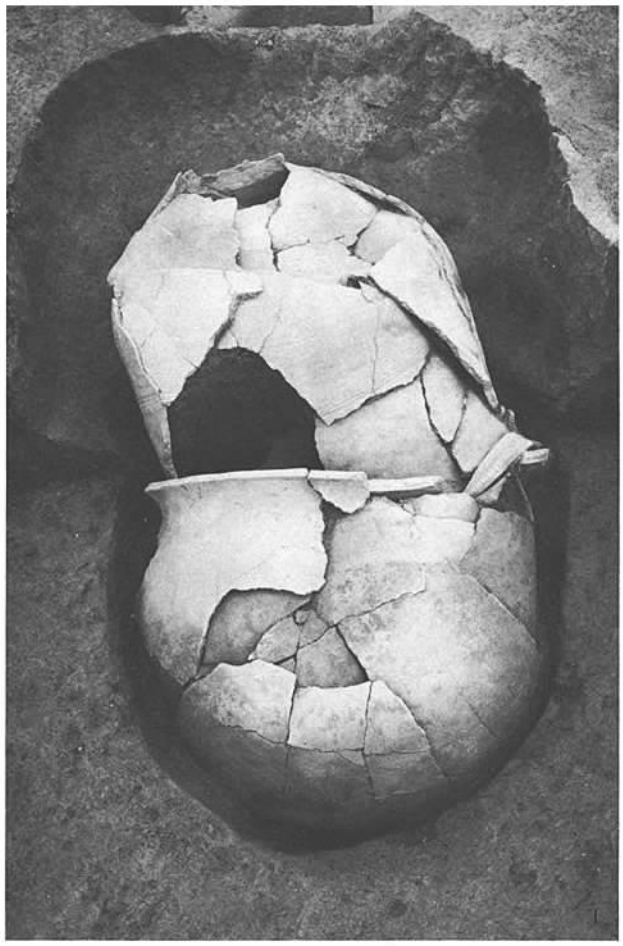
図版46

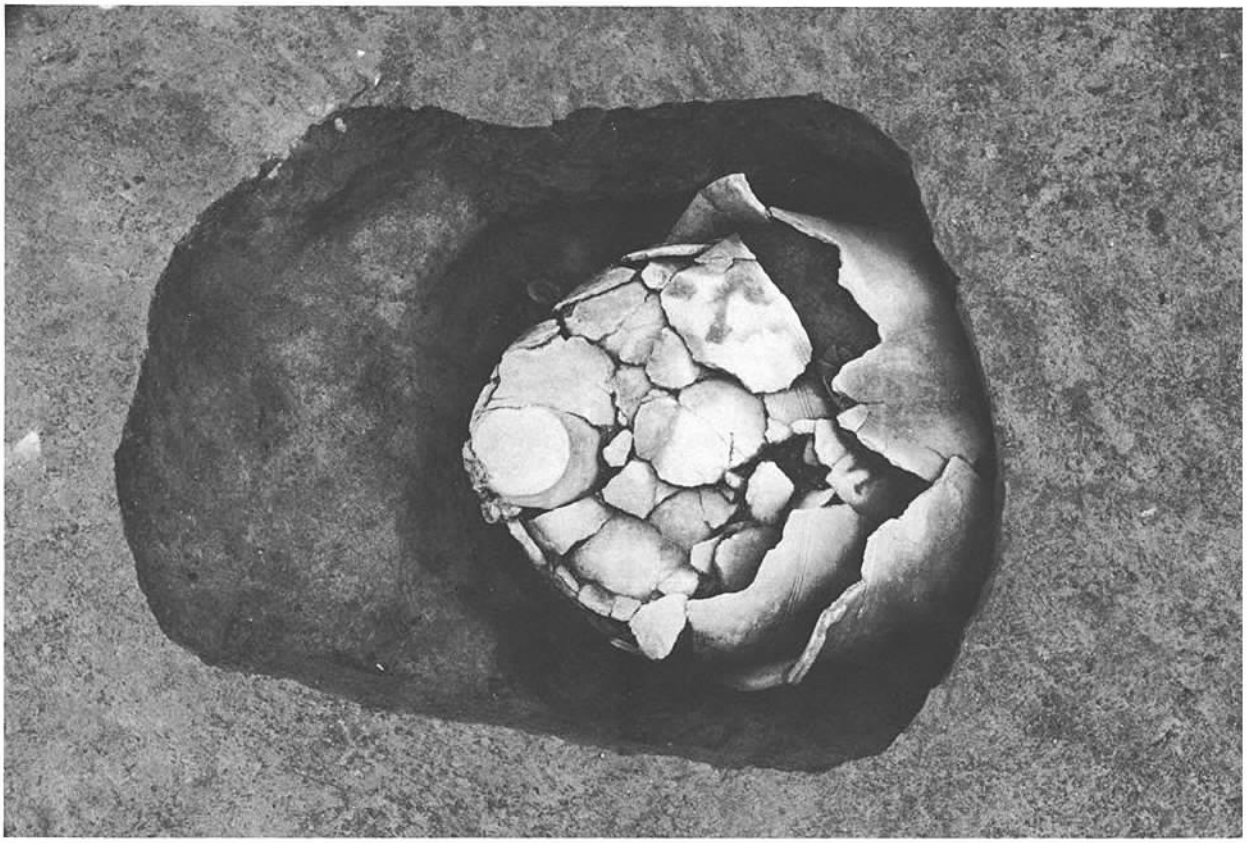
1

2

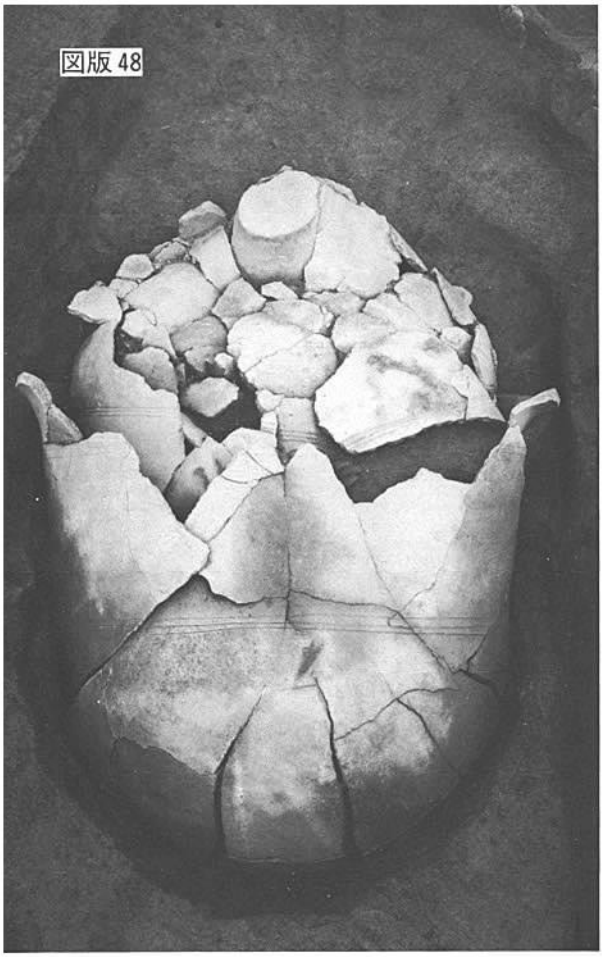
1　1号甕棺墓

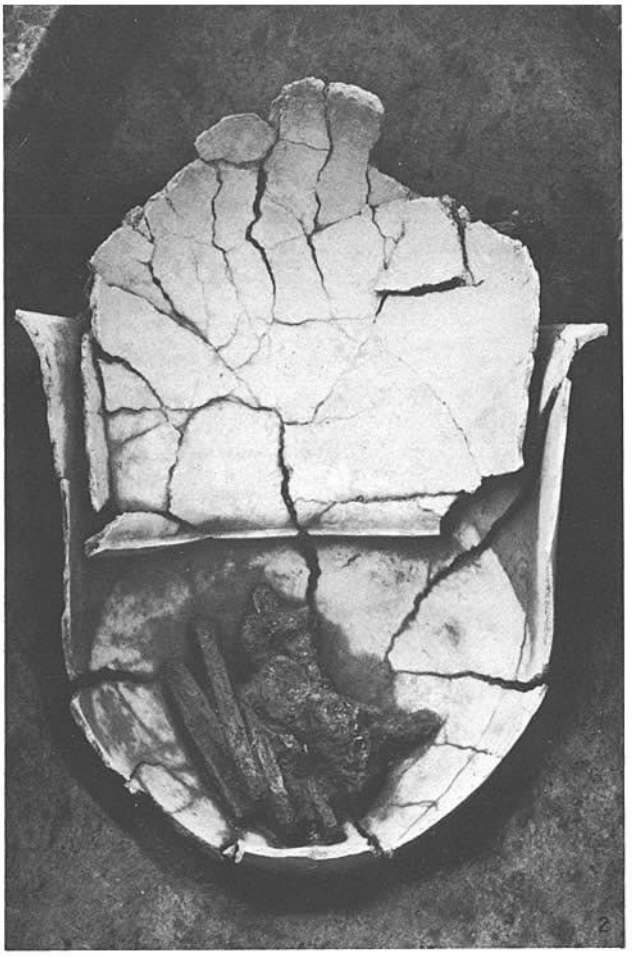
2　1号甕棺墓



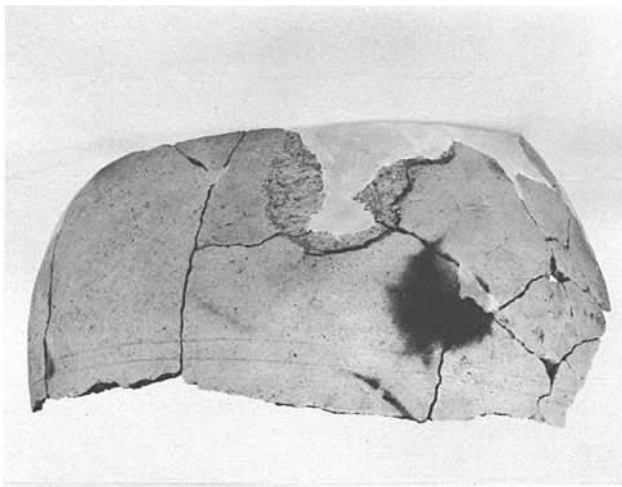


1・2　2号甕棺墓　　3　3号甕棺墓





1・2　3号甕棺墓　　3　4号甕棺墓

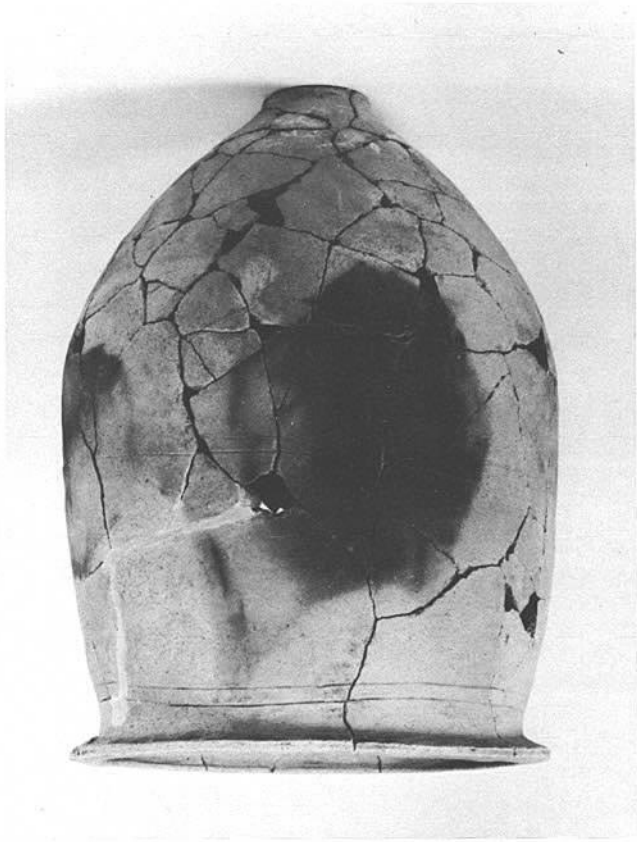


1

2

1　1号甕棺

2　2号甕棺



1　3号甕棺

2　4号甕棺

3

1

2

3

4

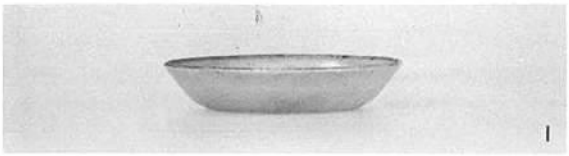
9

5

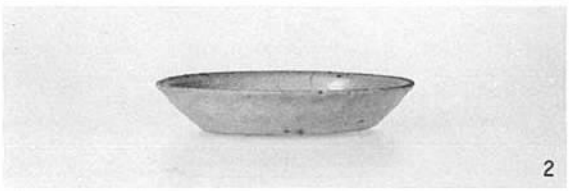
7

8

10



1



2

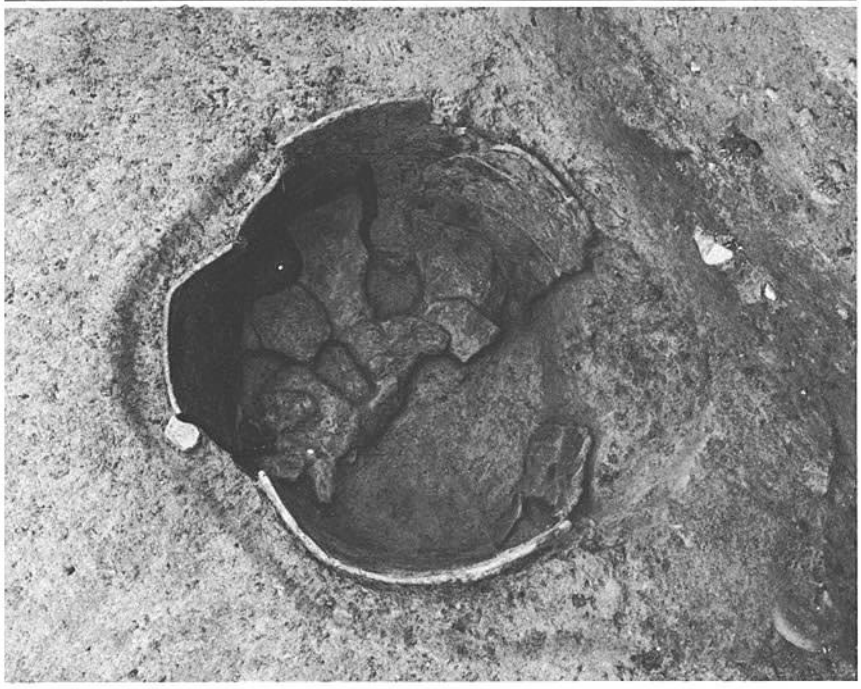
3

4

土器・管玉・石器・陶磁器

図版52

1



2

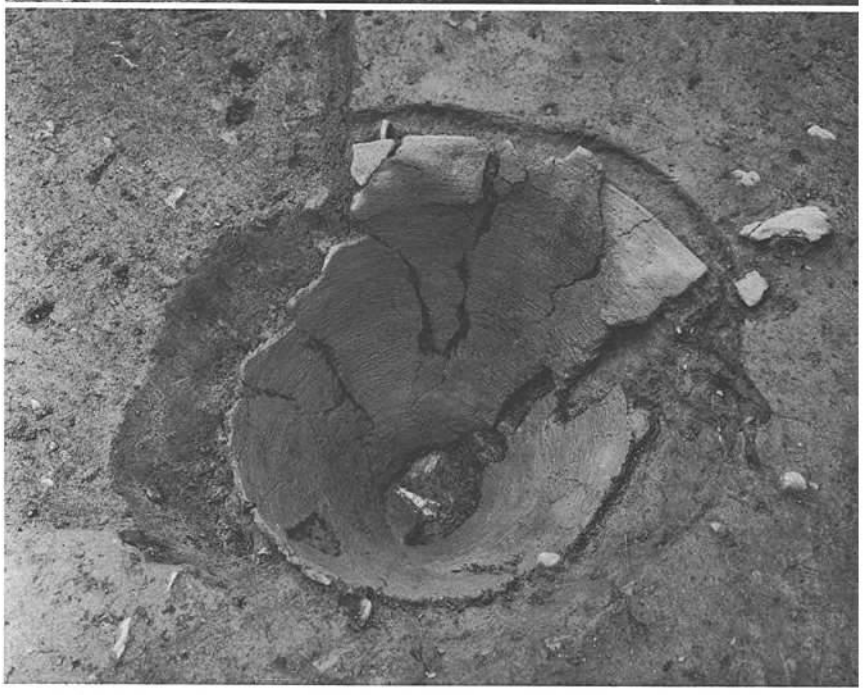
3

1　石橋II－12
　縄文時代遺物出土状況

2　1号埋甕

3　1号埋甕使用土器

1



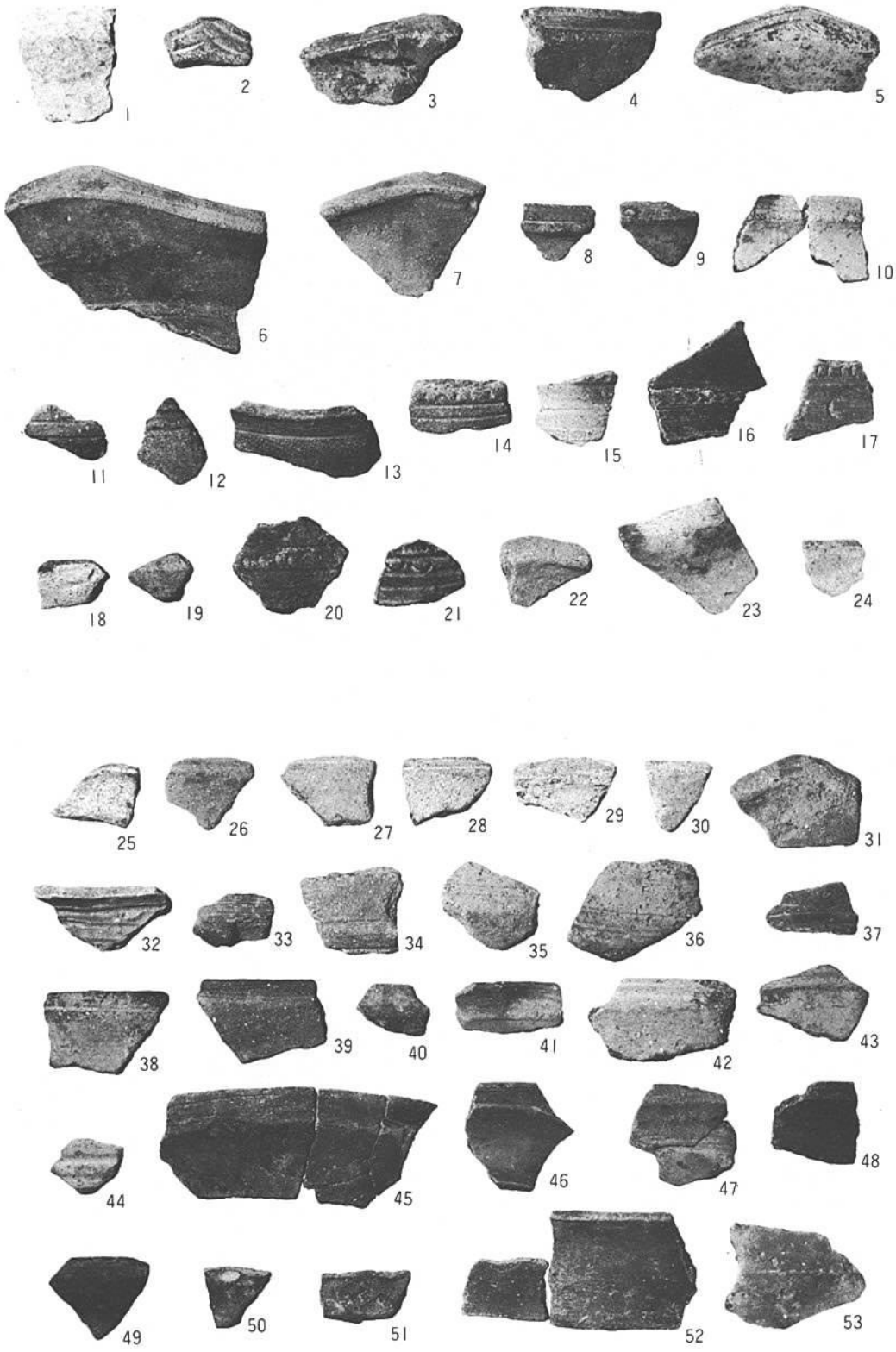
2

3

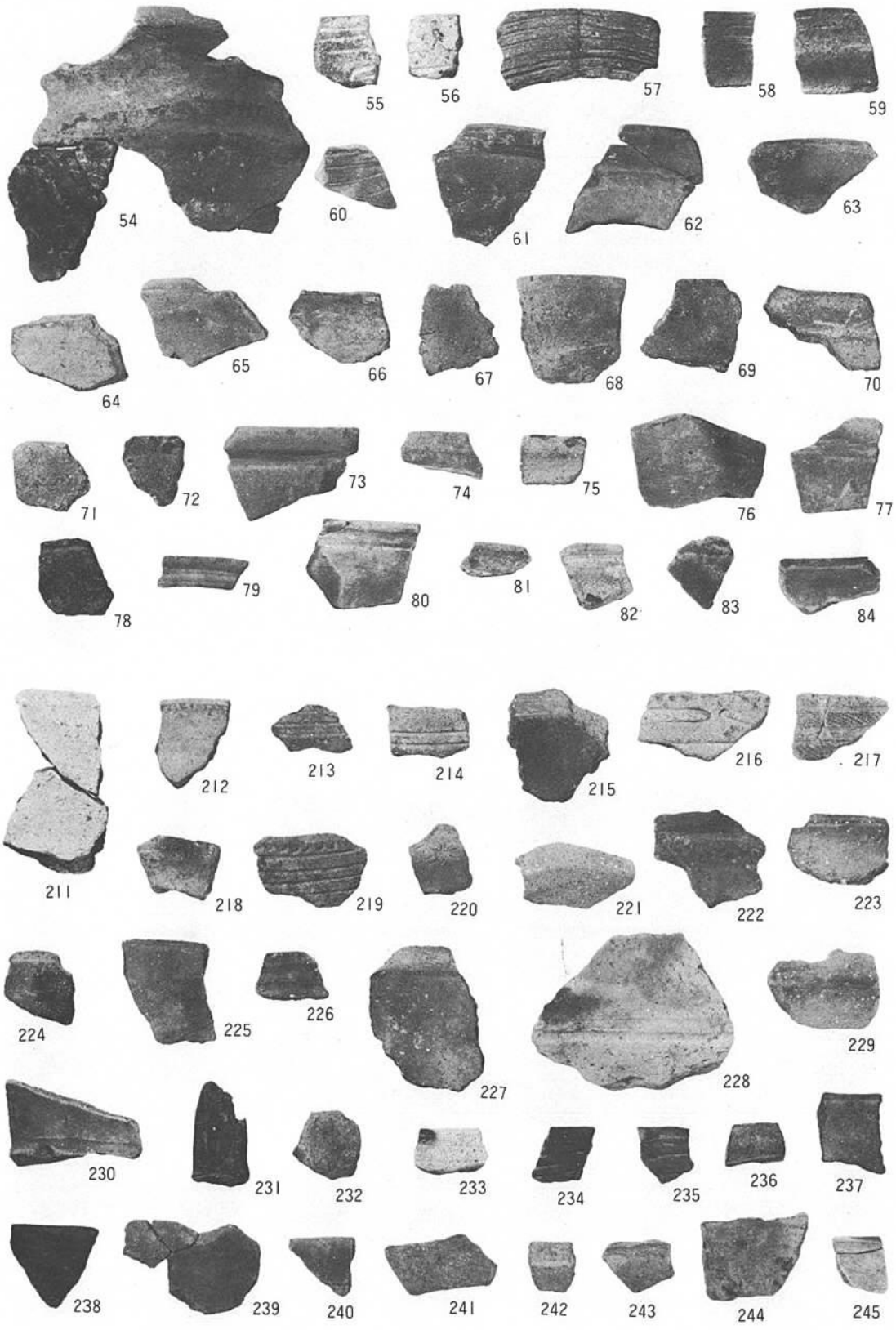
1　2号埋甕

2　2号埋甕(内部除去後)

3　2号埋甕使用土器



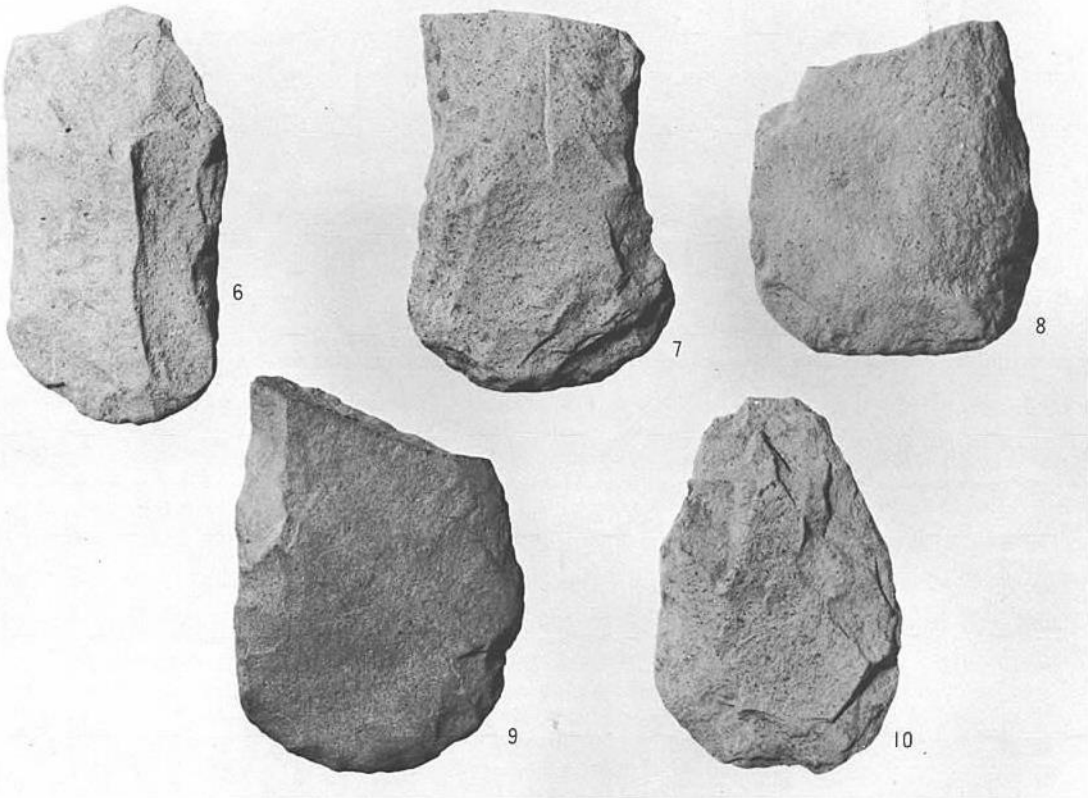
石橋出土縄文土器(⅓)



石橋・サキゾノ出土繩文土器(⅓)

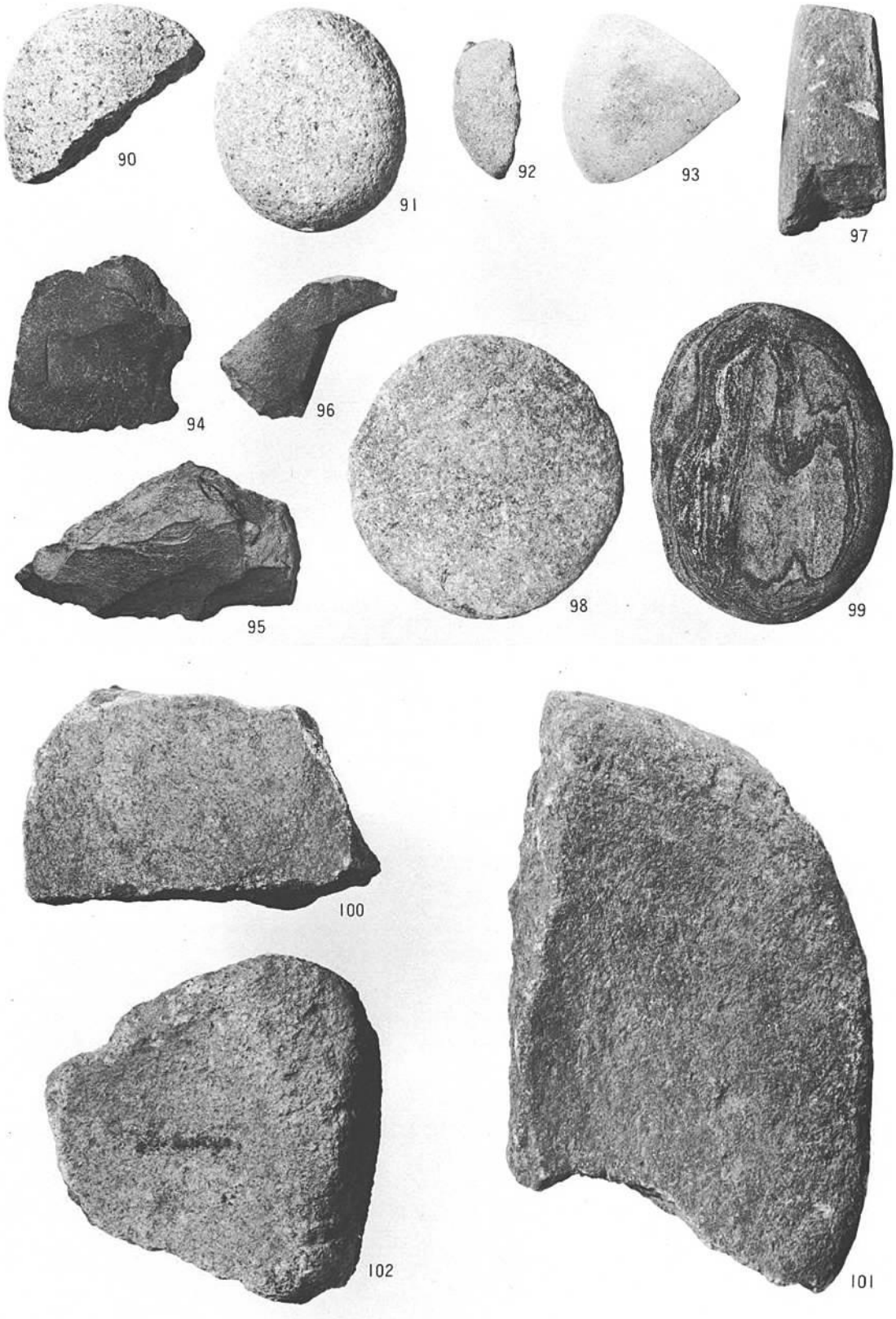
246

1

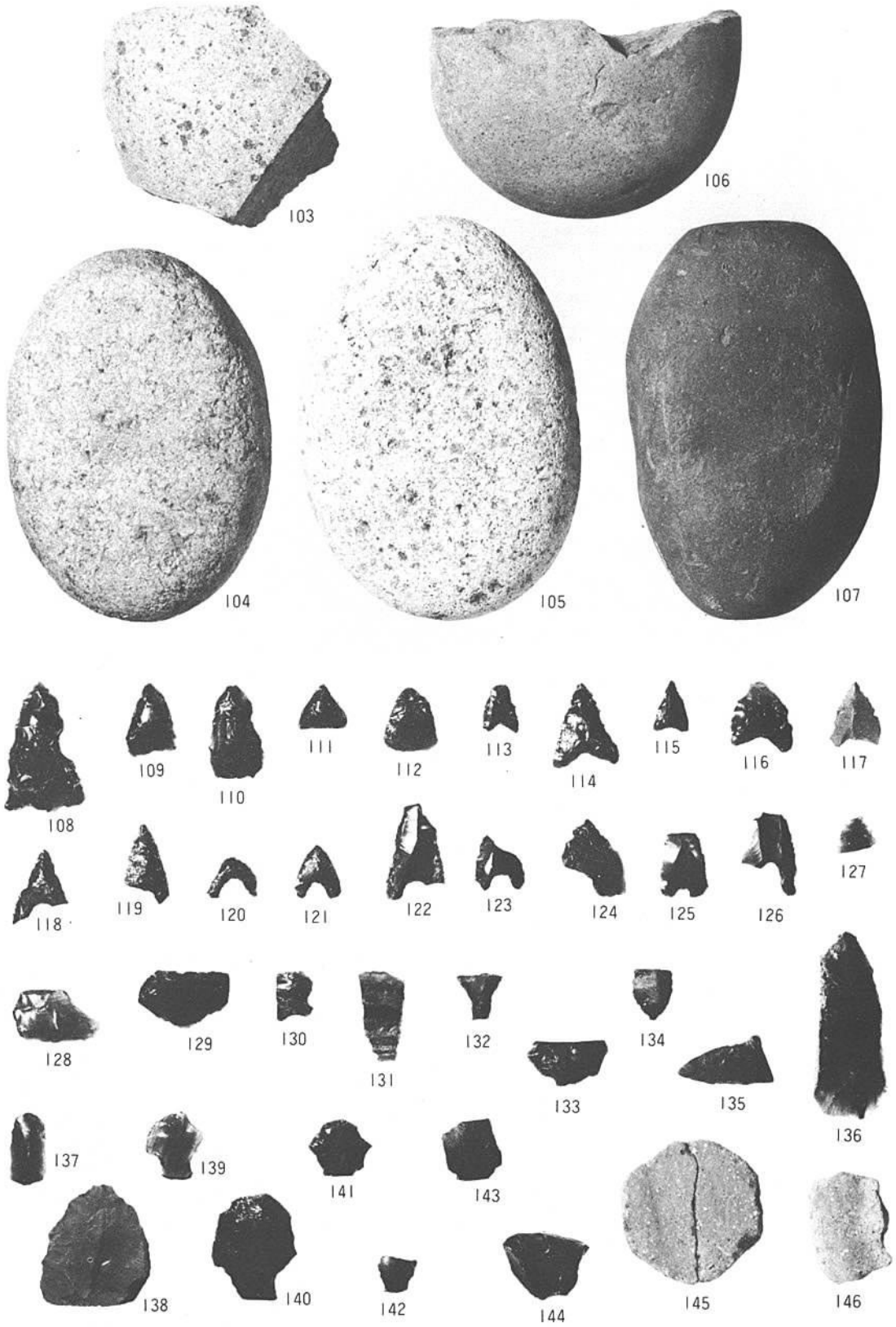


2

1　サキゾノ出土縄文土器(⅓)　　2　石橋出土石器(½)

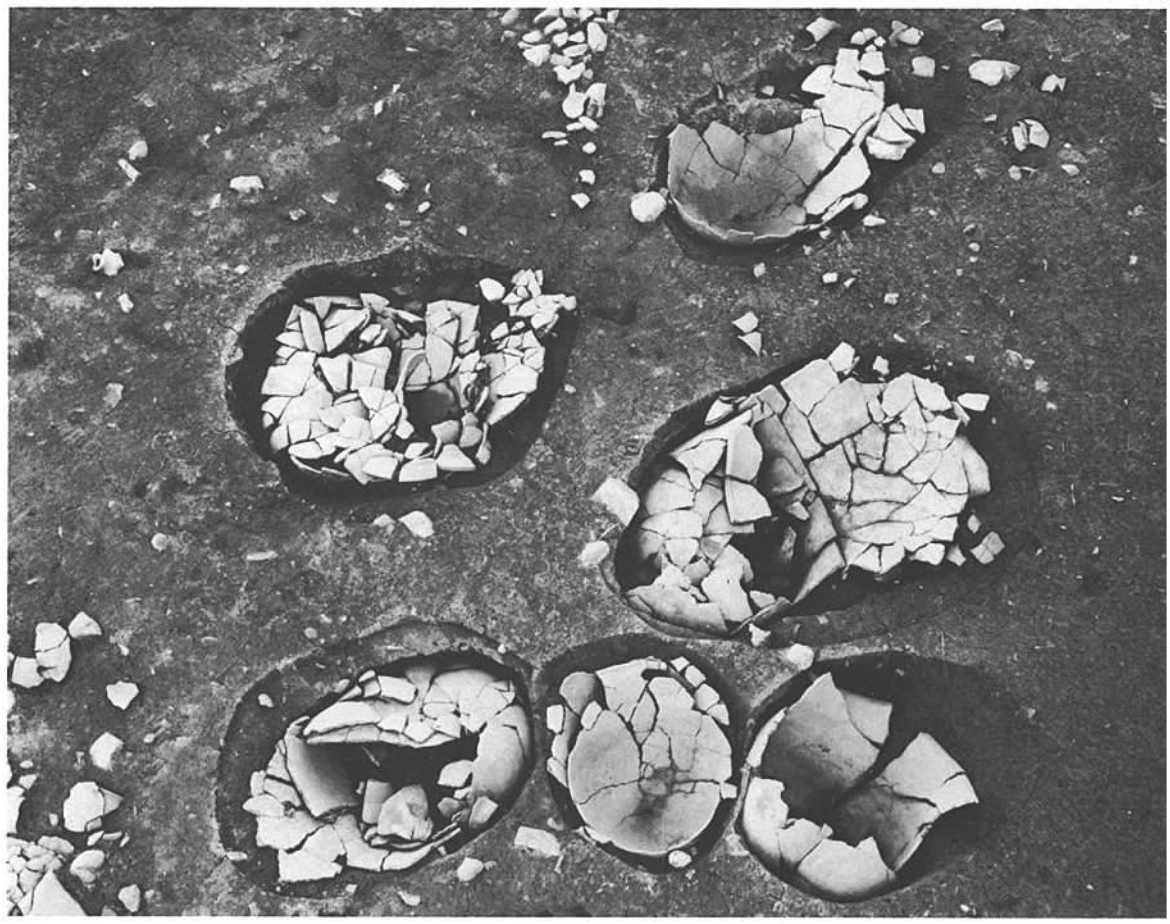


サキゾノ出土石器 ①（½）（石皿は⅖）


103
106
104
105
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
139
141
143
138
140
142
144
145
146

サキゾノ出土石器 ②（½）

1



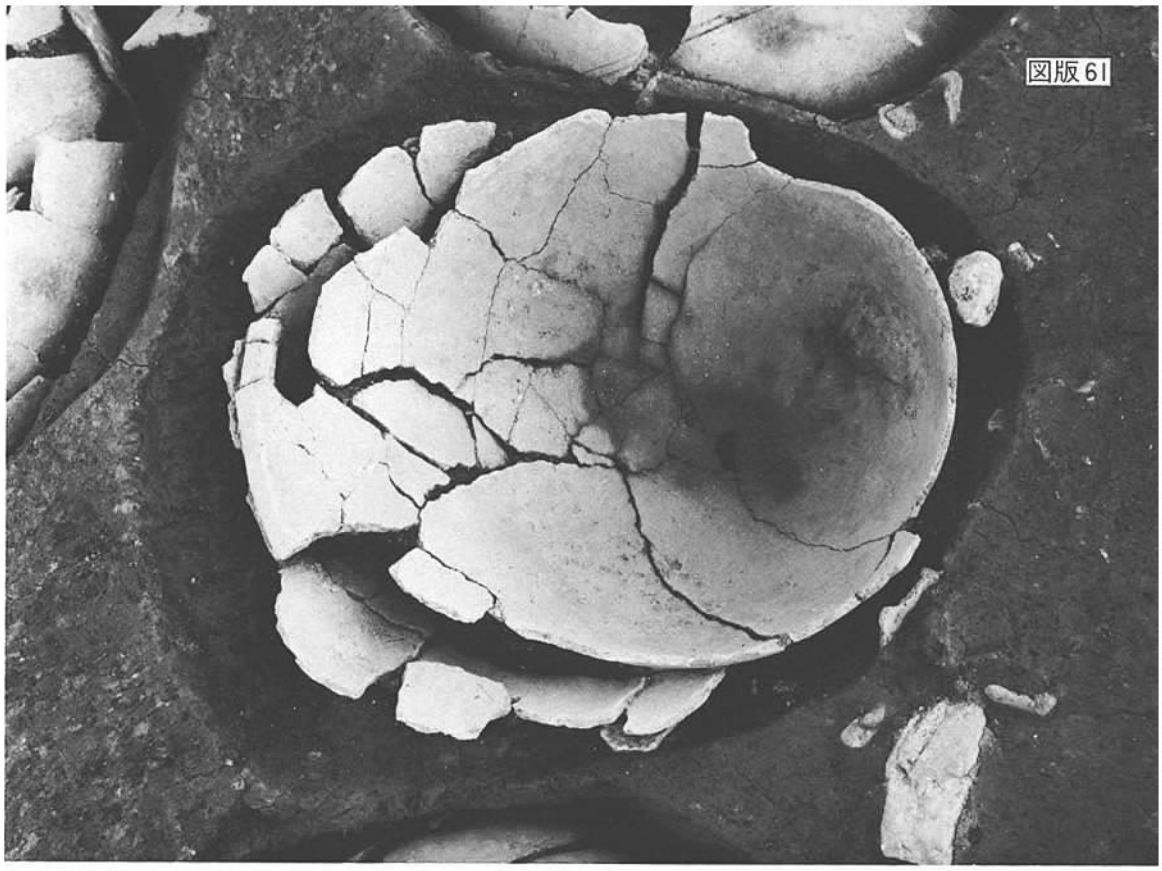
2

1　石橋Ⅰ－2 調査区全景(南から)　　2　1～5・7号甕棺墓(北から)

1

2

1　1号甕棺墓　　2　2号甕棺墓

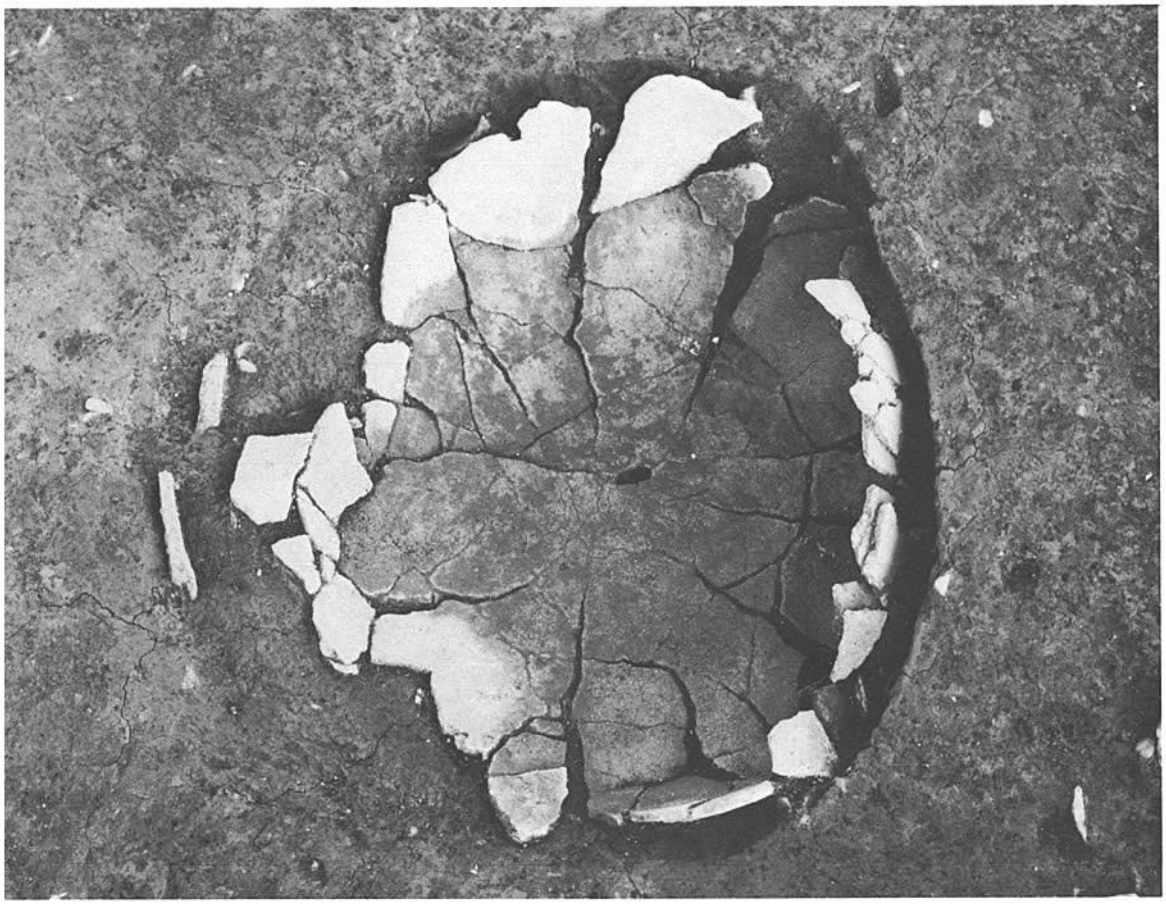


1

2

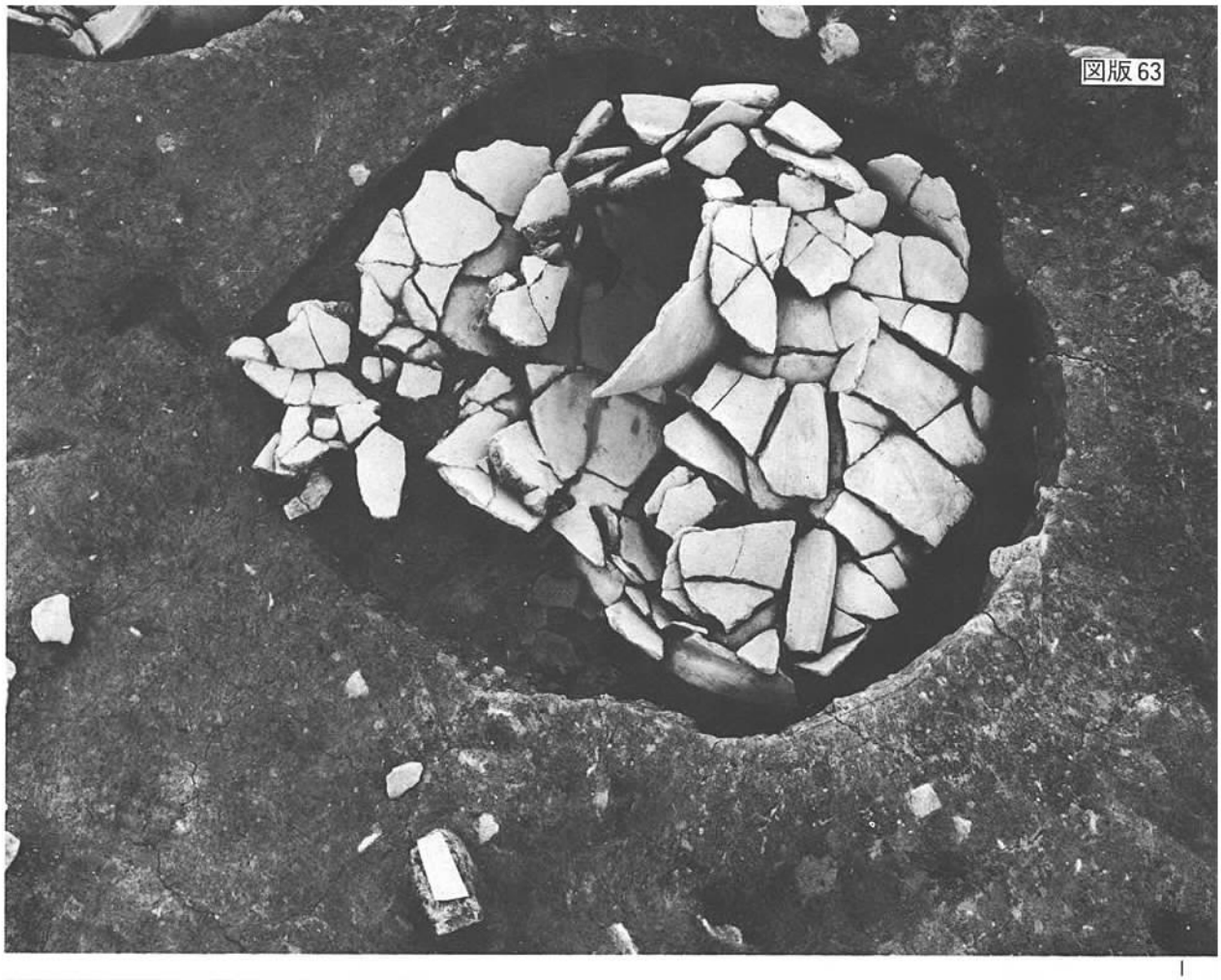
1　3号甕棺墓　　2　4号甕棺墓

1



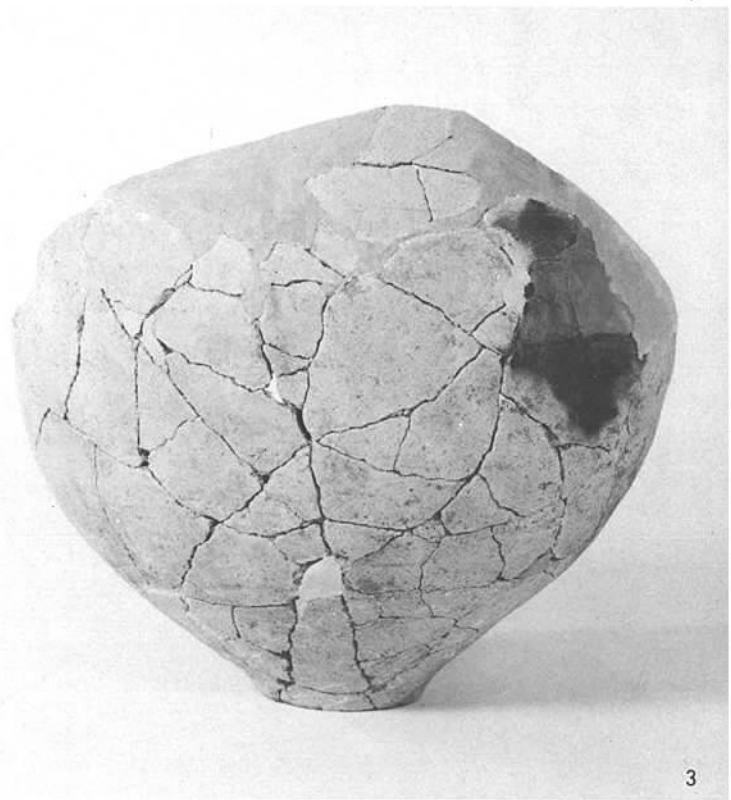
2

1　5号甕棺墓　　2　6号甕棺墓



1

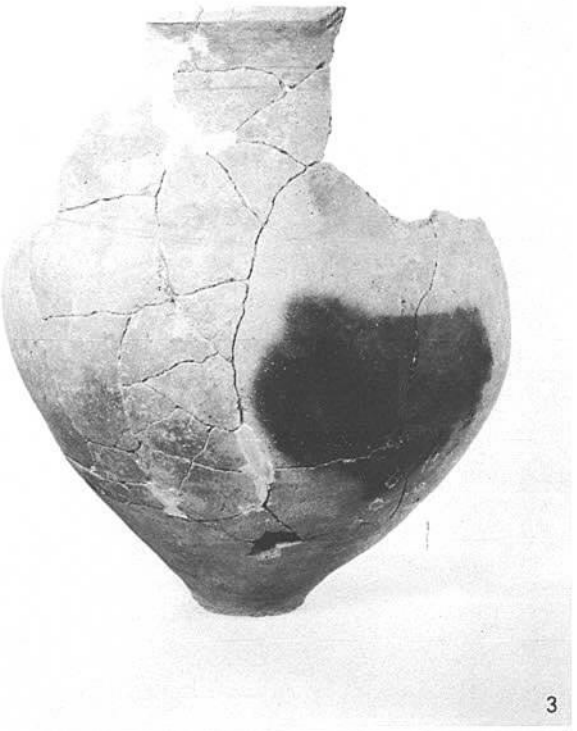
2



3

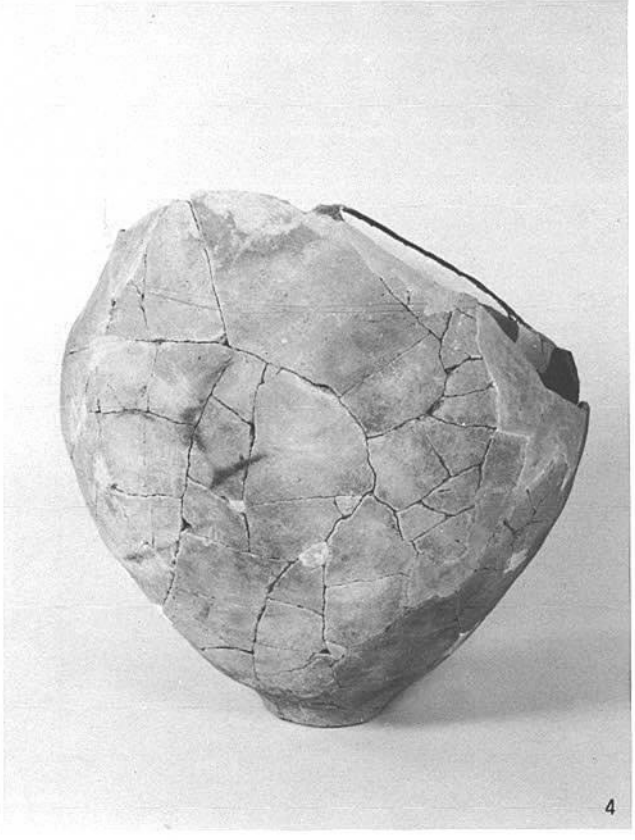
1　7号甕棺墓　　2　7号甕棺墓出土石剣　　3　7号甕棺

1



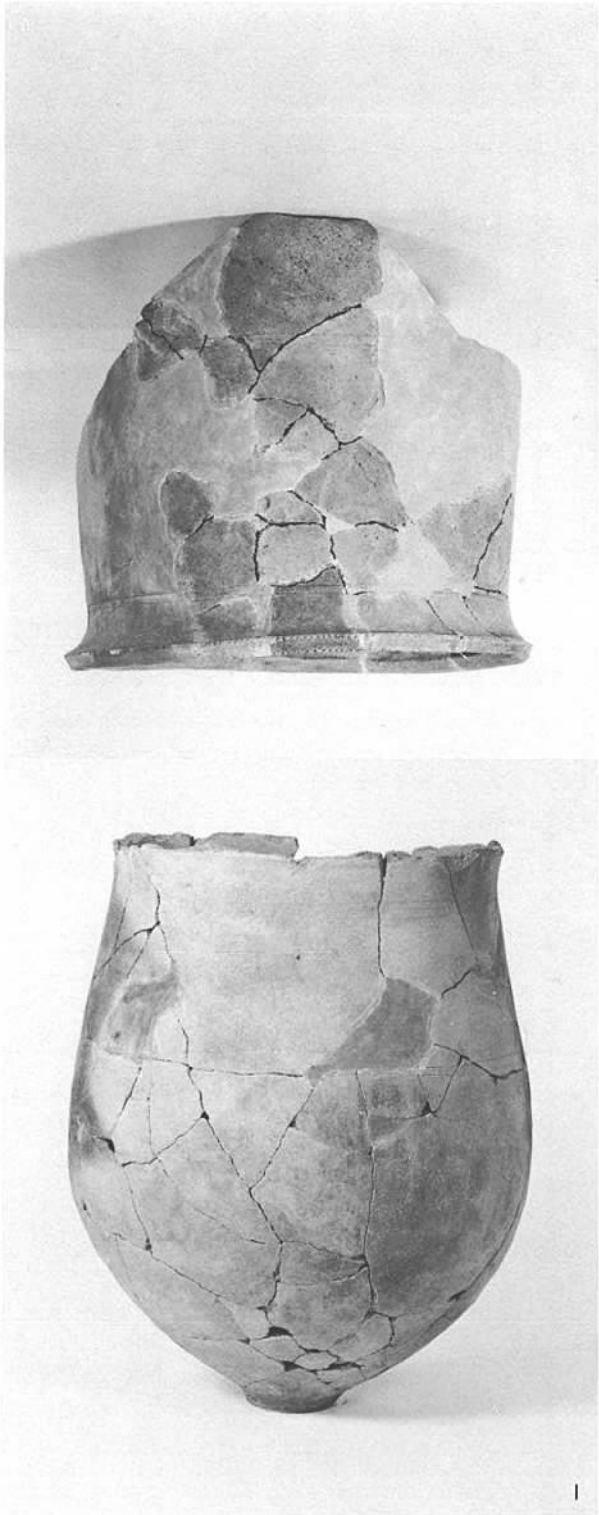
3

2

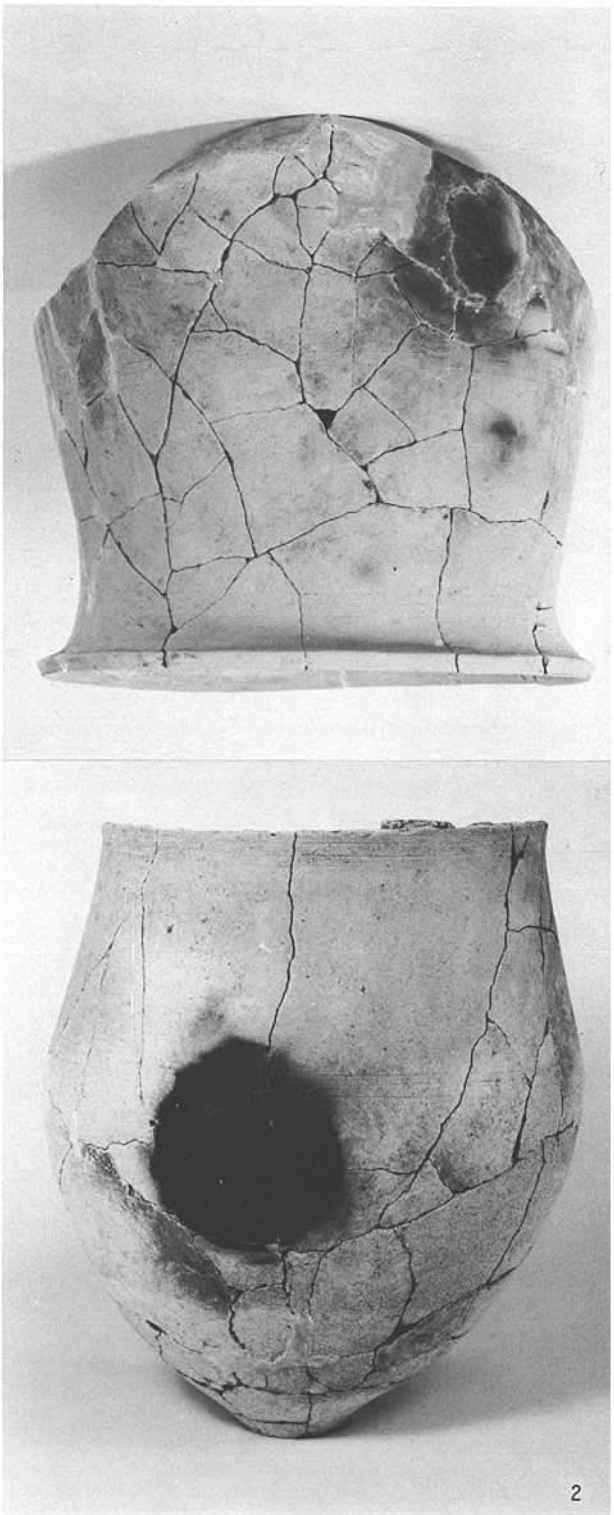


4

1　1号甕棺下甕　　2　2号甕棺下甕　　3　3号甕棺下甕　　4　6号甕棺下甕



1

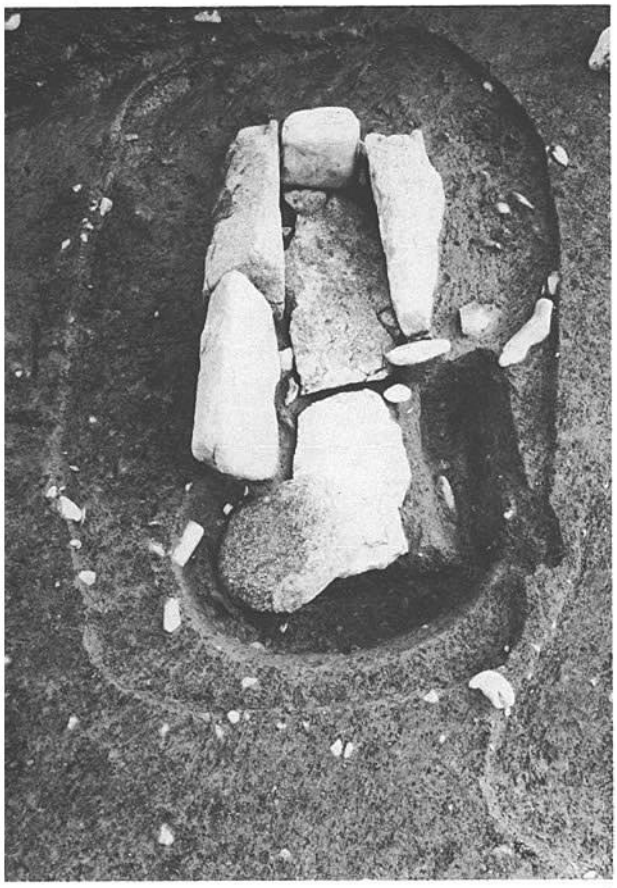


2

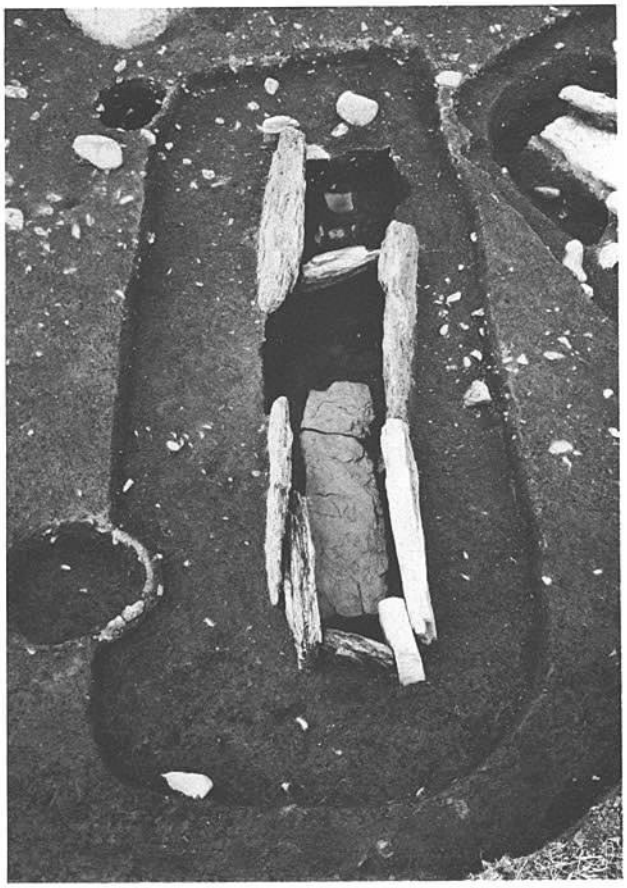
1　4号甕棺

2　5号甕棺

1

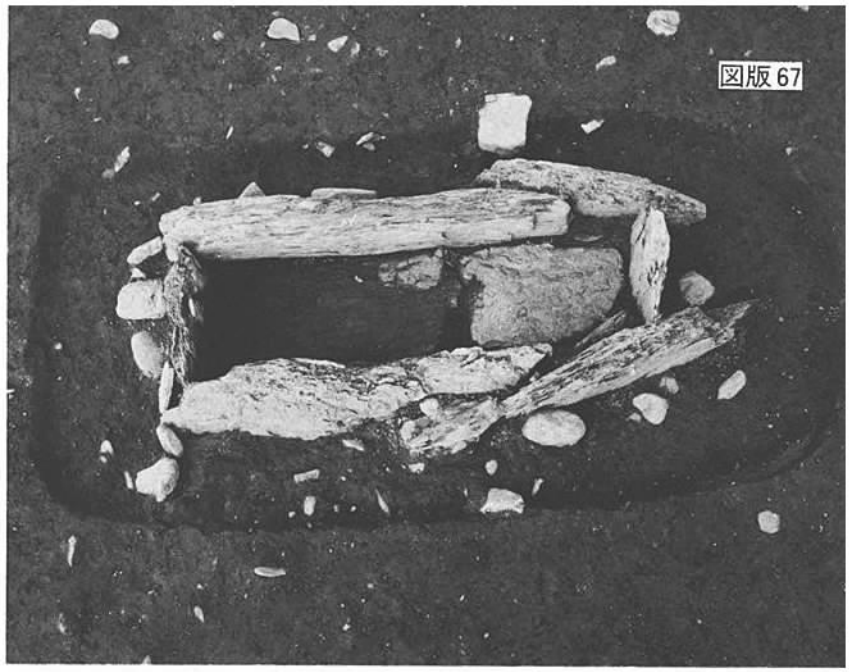


2

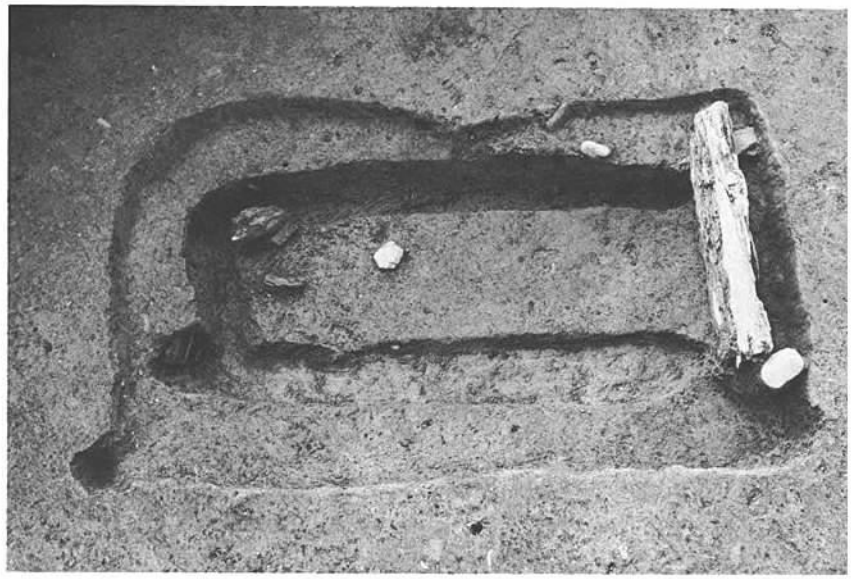


3

1　石橋II－11・12　大溝断面　　2　1号石棺墓　　3　2号石棺墓



1



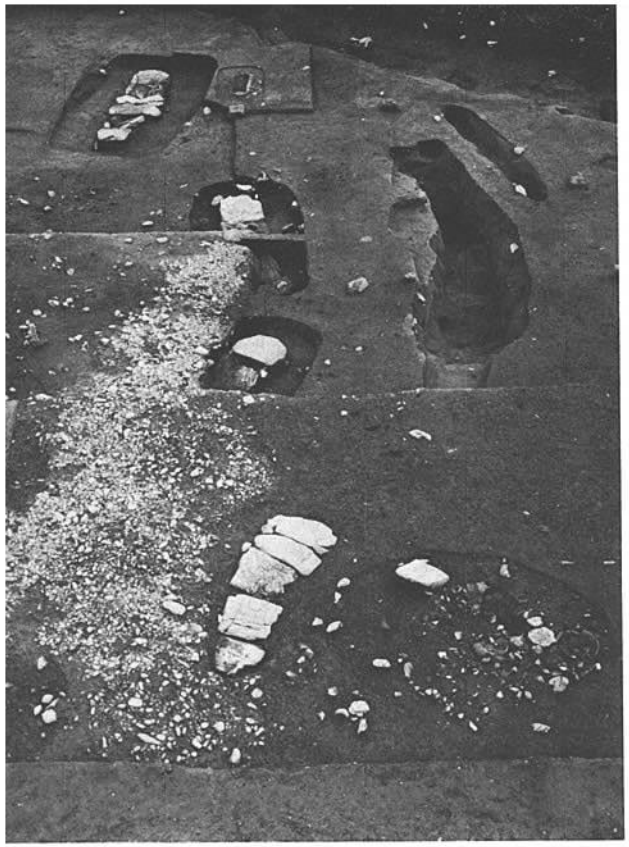
2

3

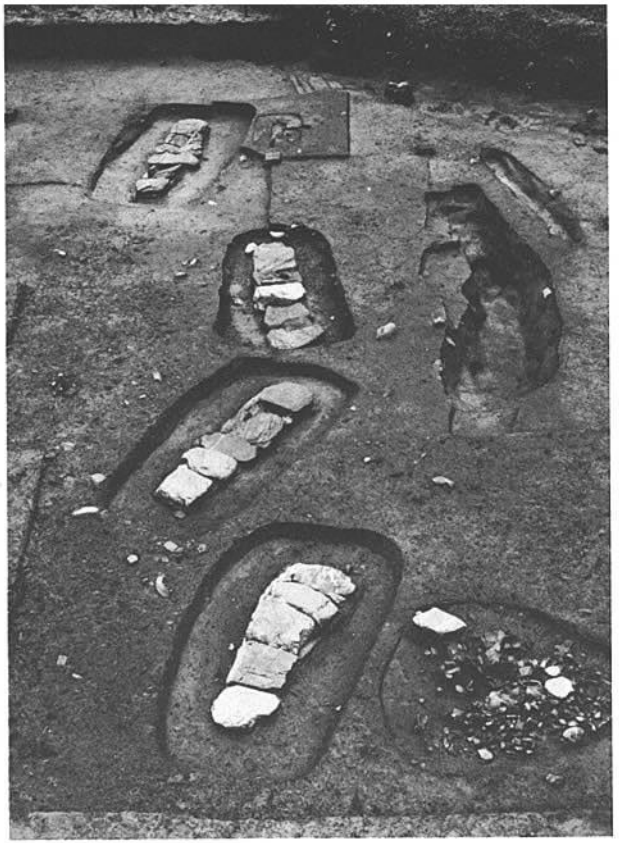
1　3号石棺墓

2　4号石棺墓

3　1号木棺墓



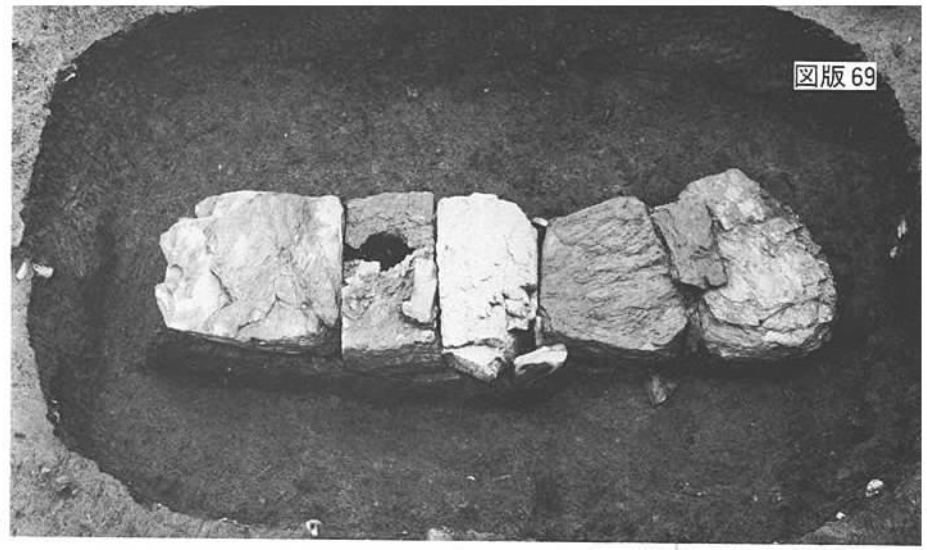
1



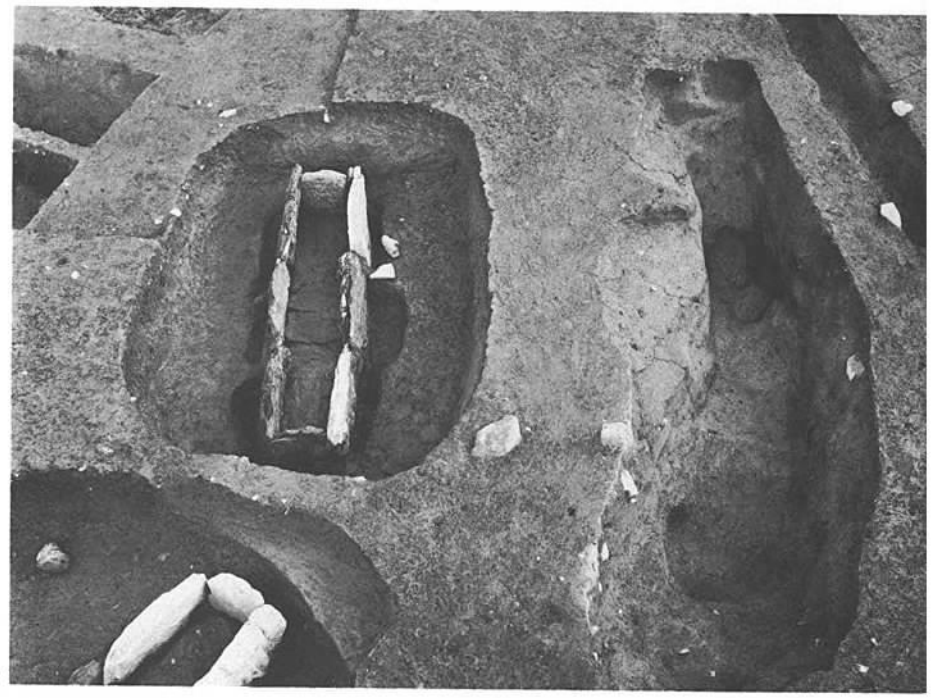
2

3

1　石橋II－11・12 石棺群と東側礫群　　2　5～8号石棺群と祭祀土壙　　3　西側礫群



1



2

1　5号石棺墓

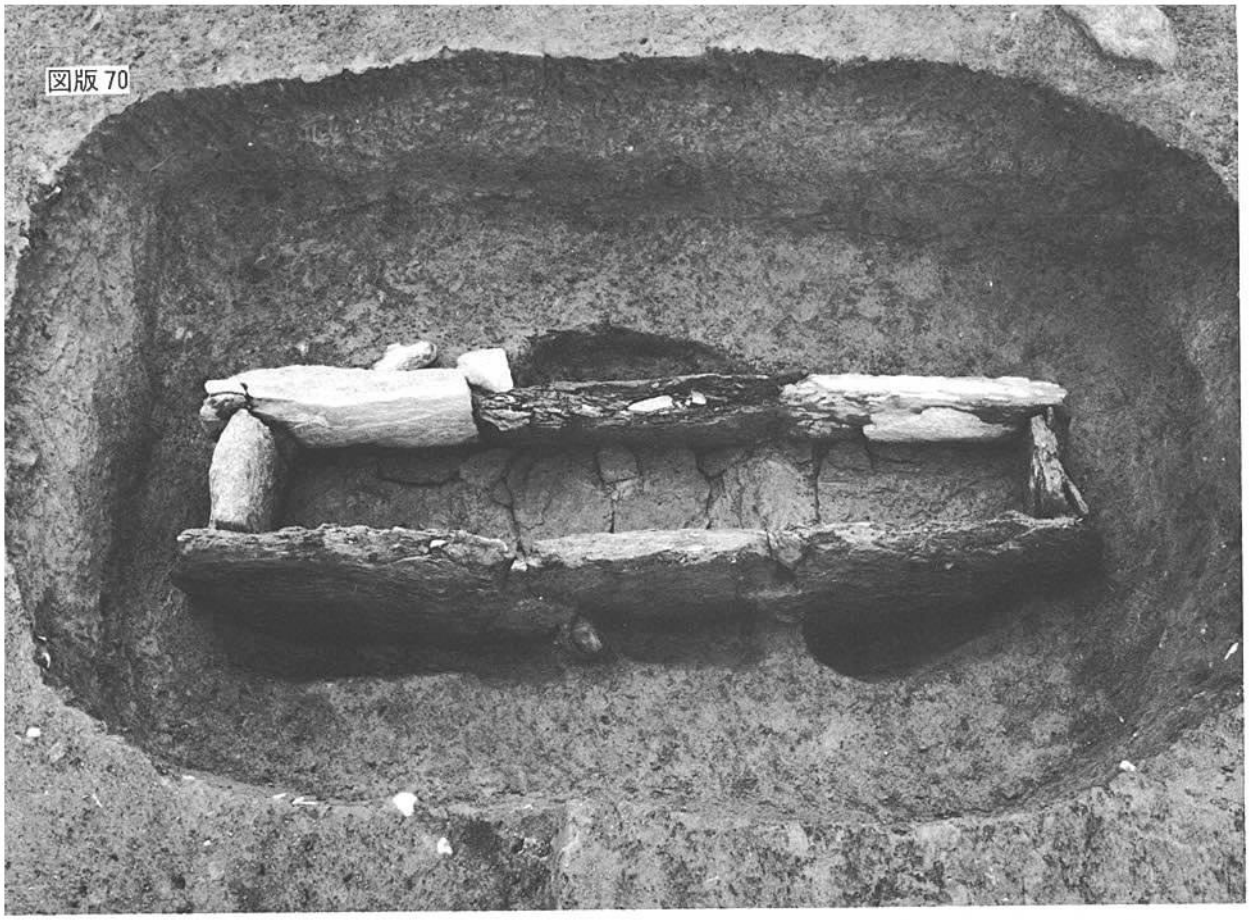
2　5号石棺墓と祭祀土壙

3　祭祀土壙内土器

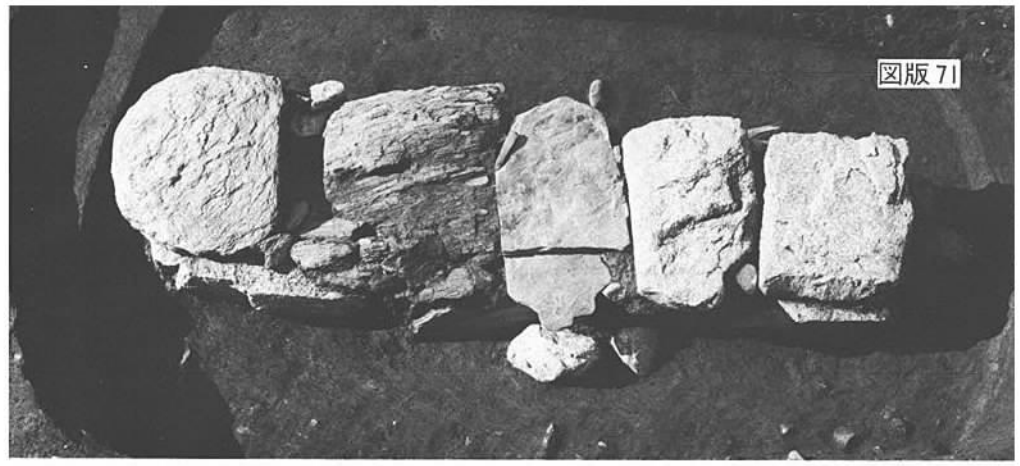
4　5号祭祀土壙

3

4

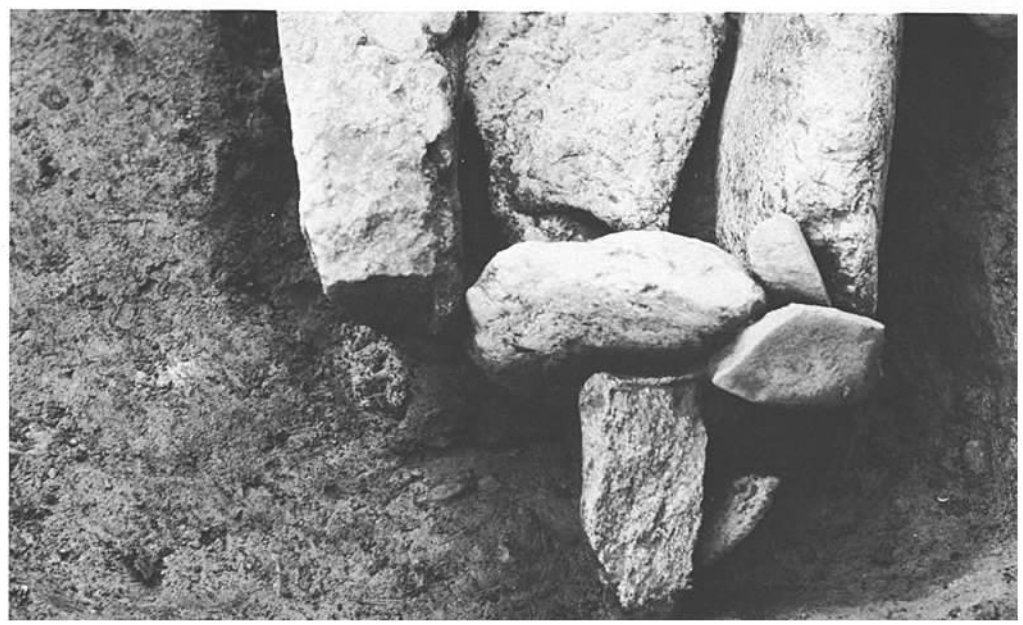


1　5号石棺墓　　2　5号石棺墓頭部　　3　5号石棺内玉類出土状態



1

2

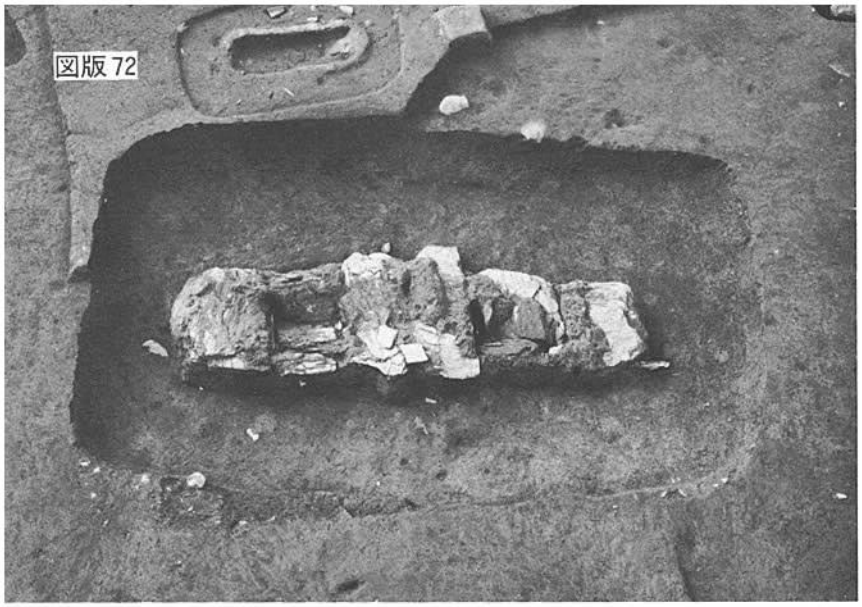


3

1　6号石棺墓

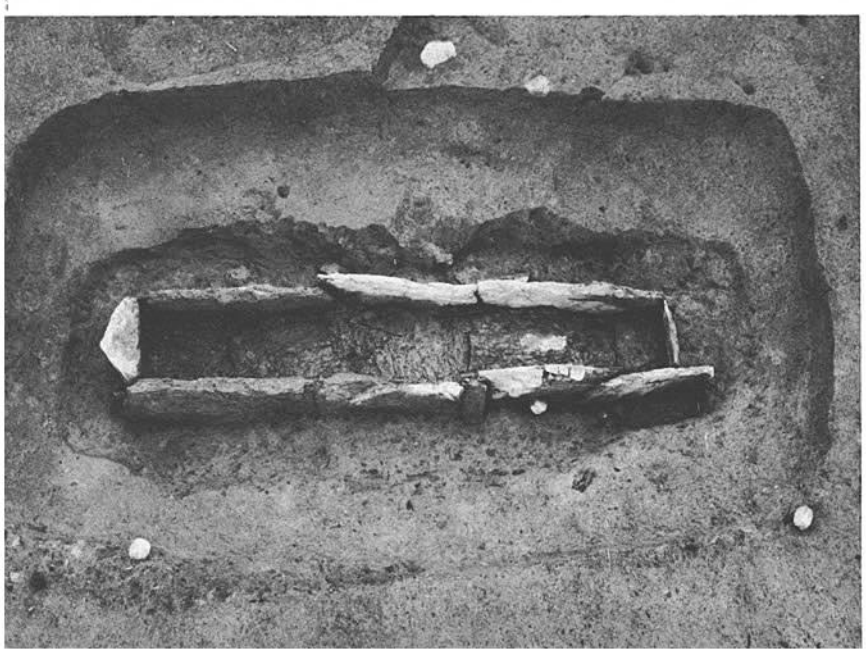
2　6号石棺墓

3　6号石棺墓鉄鎌出土状態



1

2

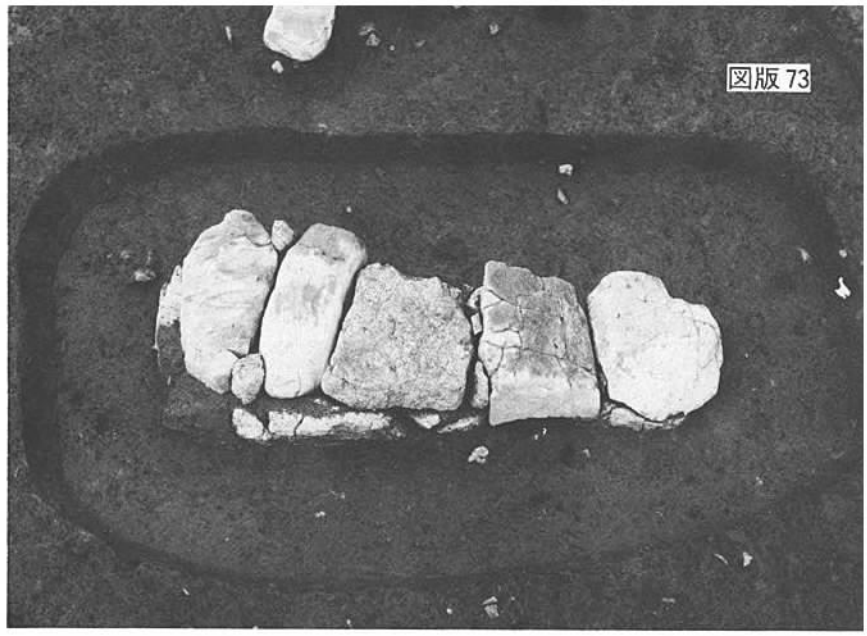


3

1　7号石棺墓と木棺墓

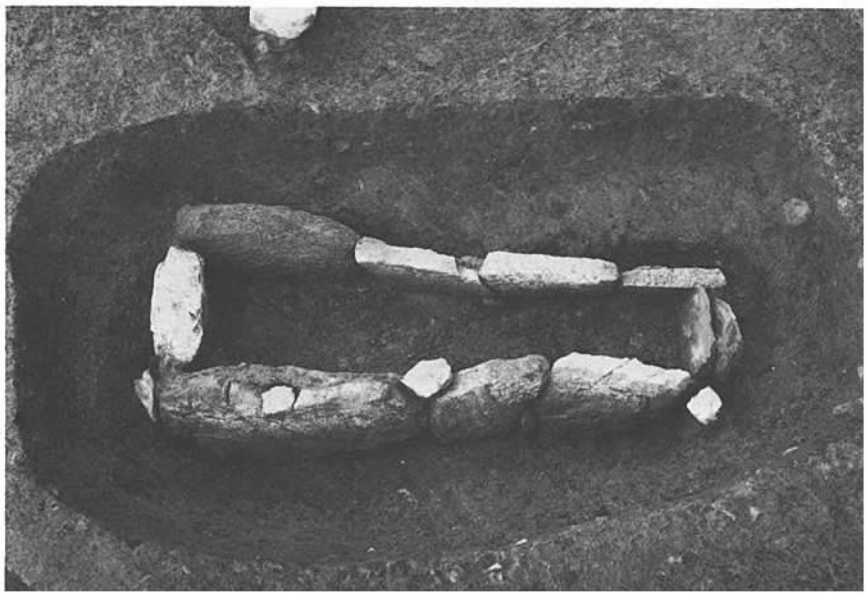
2　7号石棺墓

3　7号石棺墓



1

2

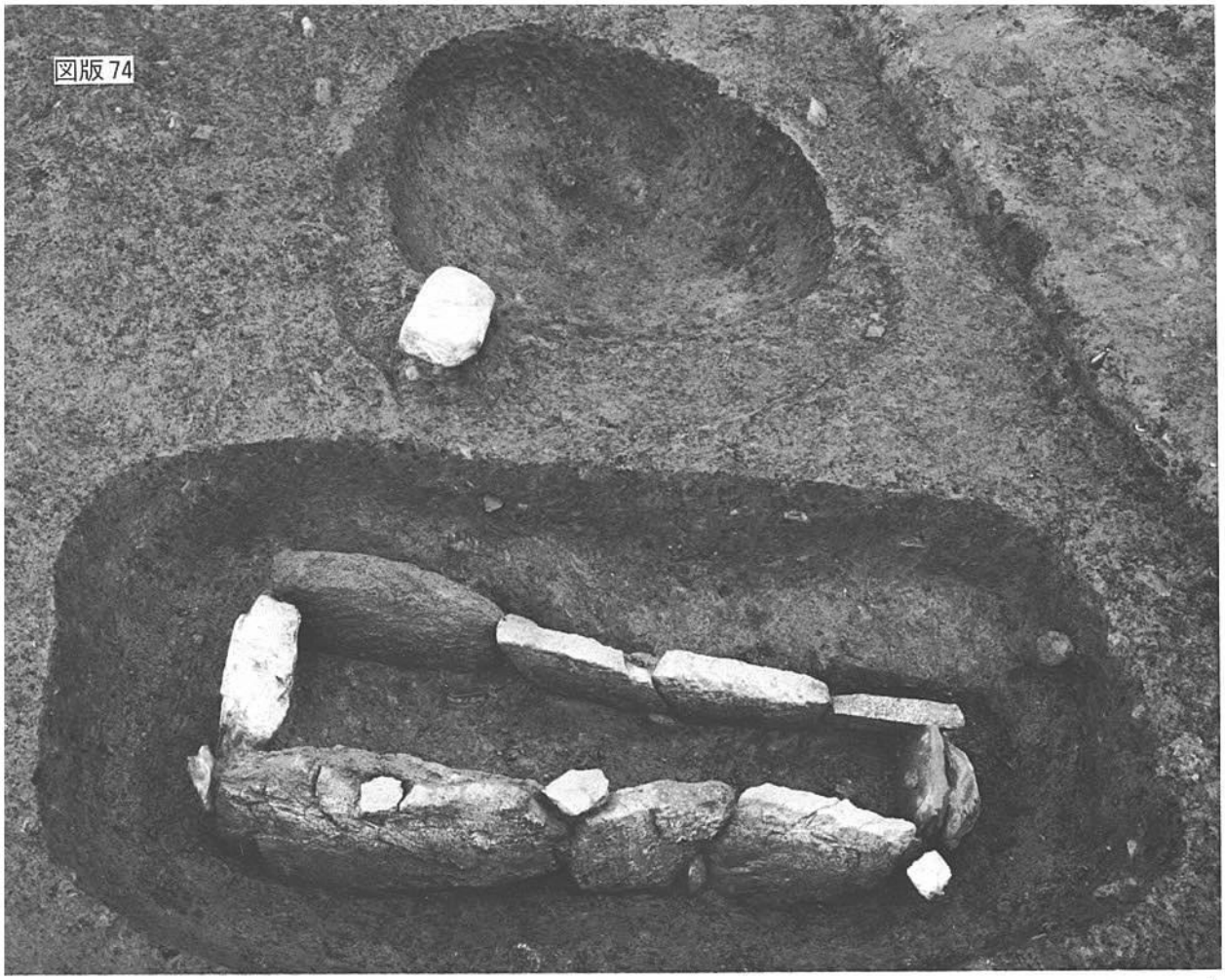


3

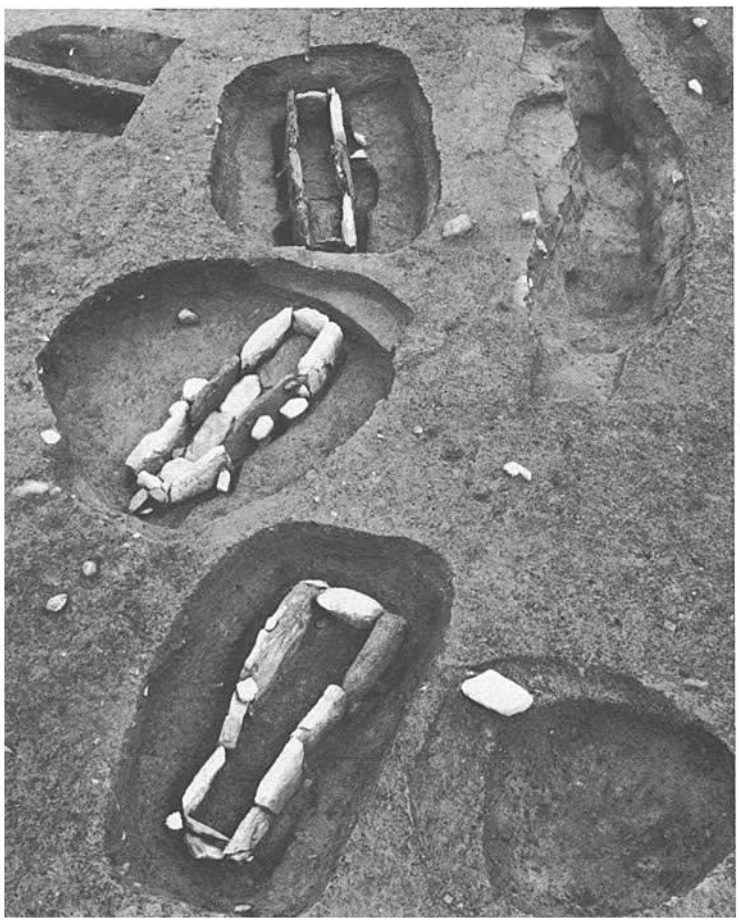
1　8号石棺墓

2　8号祭祀土壙土器
出土状態

3　8号石棺墓



1

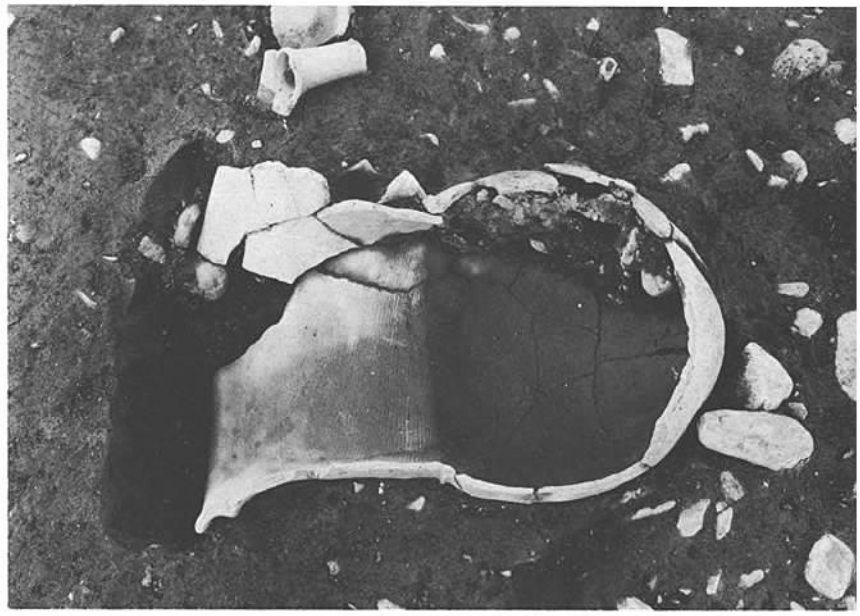


2

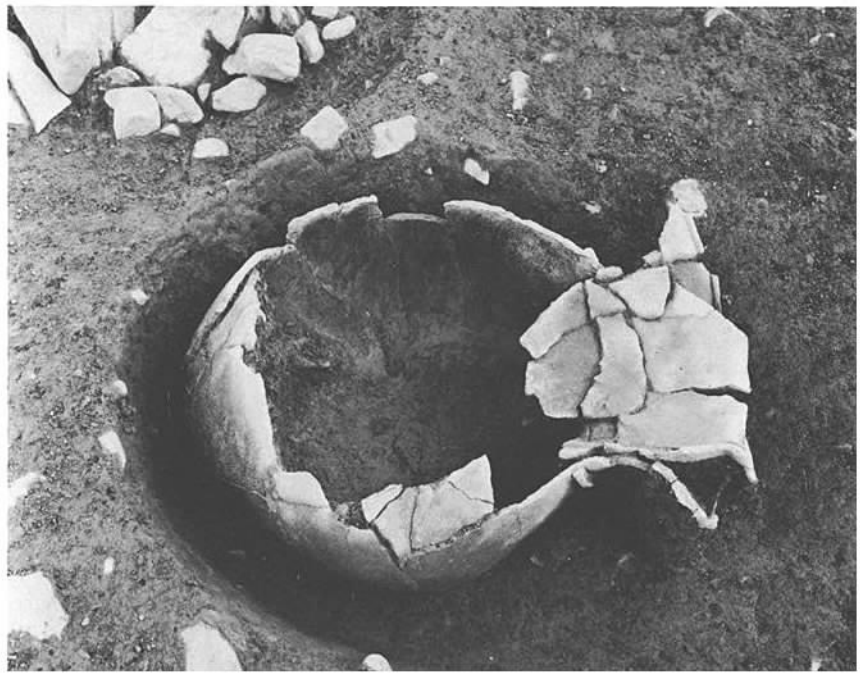
1　8号石棺墓と祭祀土壙

2　5・6・8号石棺墓と
祭祀土壙

1



2

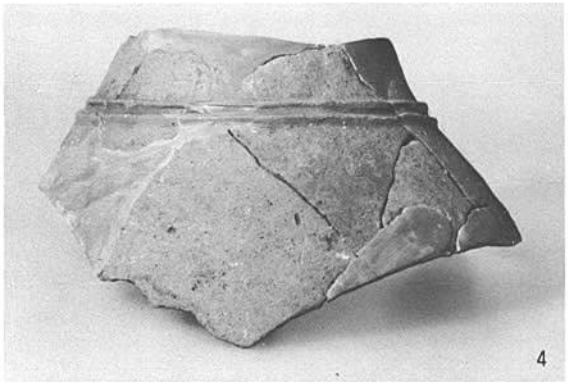


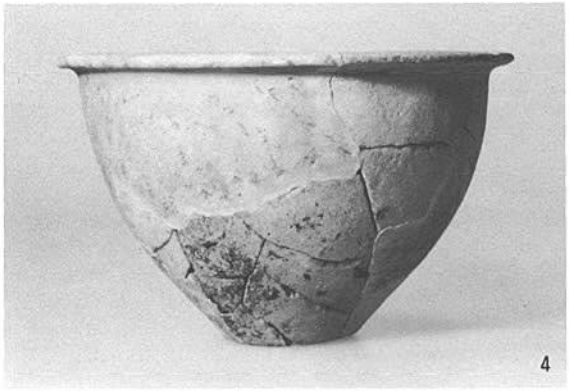
3

1　E 71 － S 330　祭祀土壙

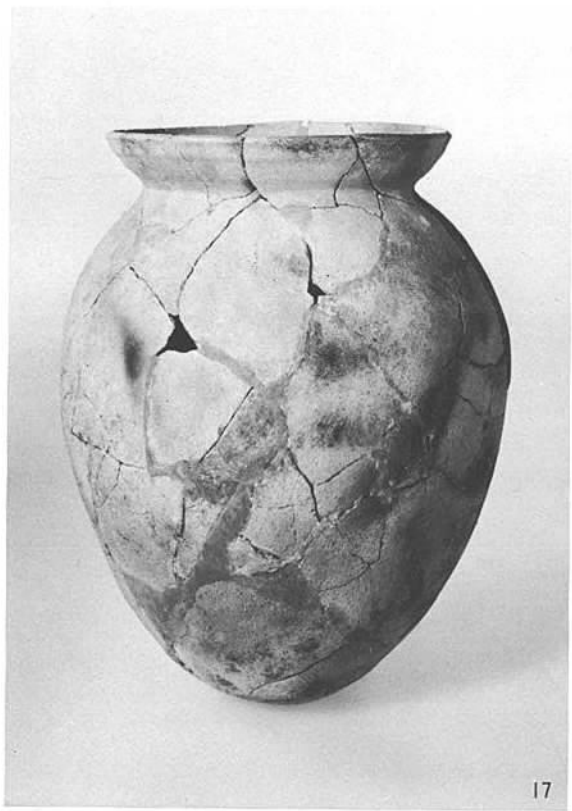
2　1 号甕棺墓

3　石橋 II － 8　甕棺墓





1　石橋II－11・12 大溝出土土器(1～16)　　2　包含層出土土器(4～14)



5 号祭祀・溝状・8 号祭祀土壙出土土器

2

3

5

6

9

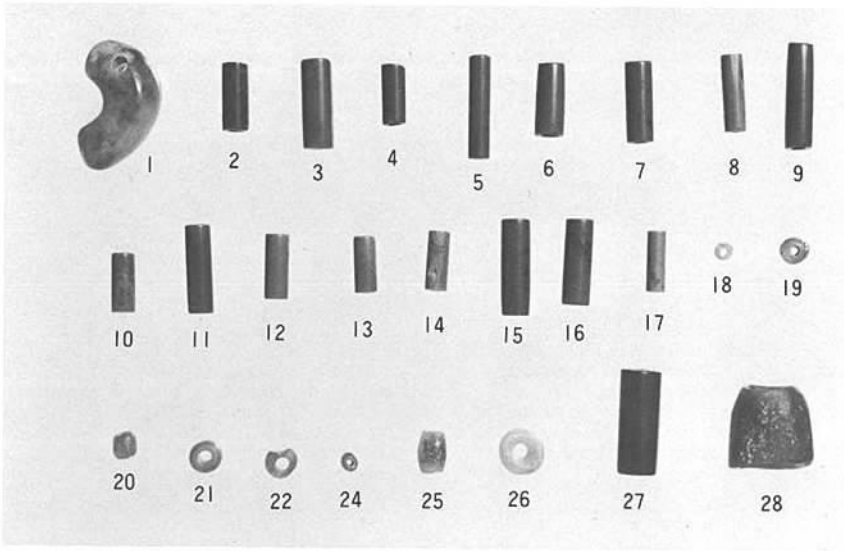
1

3

8 号祭祀・E 71－S 330祭祀土壙出土土器

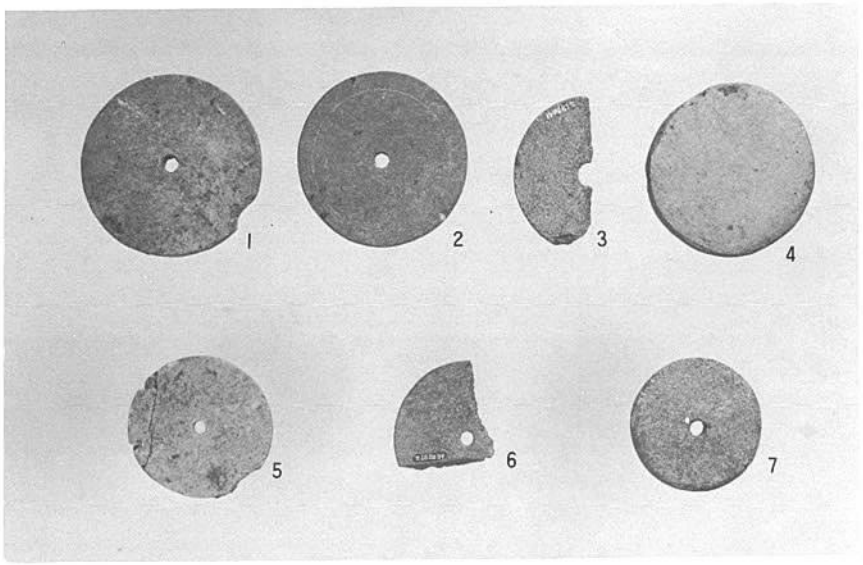
1

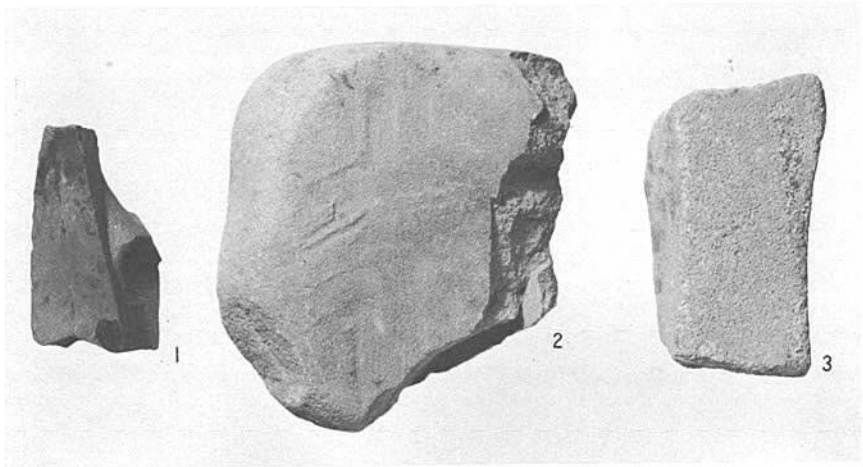
2



3

1　1号甕棺　　2　石橋II－8甕棺　　3　石橋II－11・12出土玉類（実大）





石橋II－11・12 鉄器・紡錘車・砥石

1　サキゾノⅠ－4・5 全景①(東から)

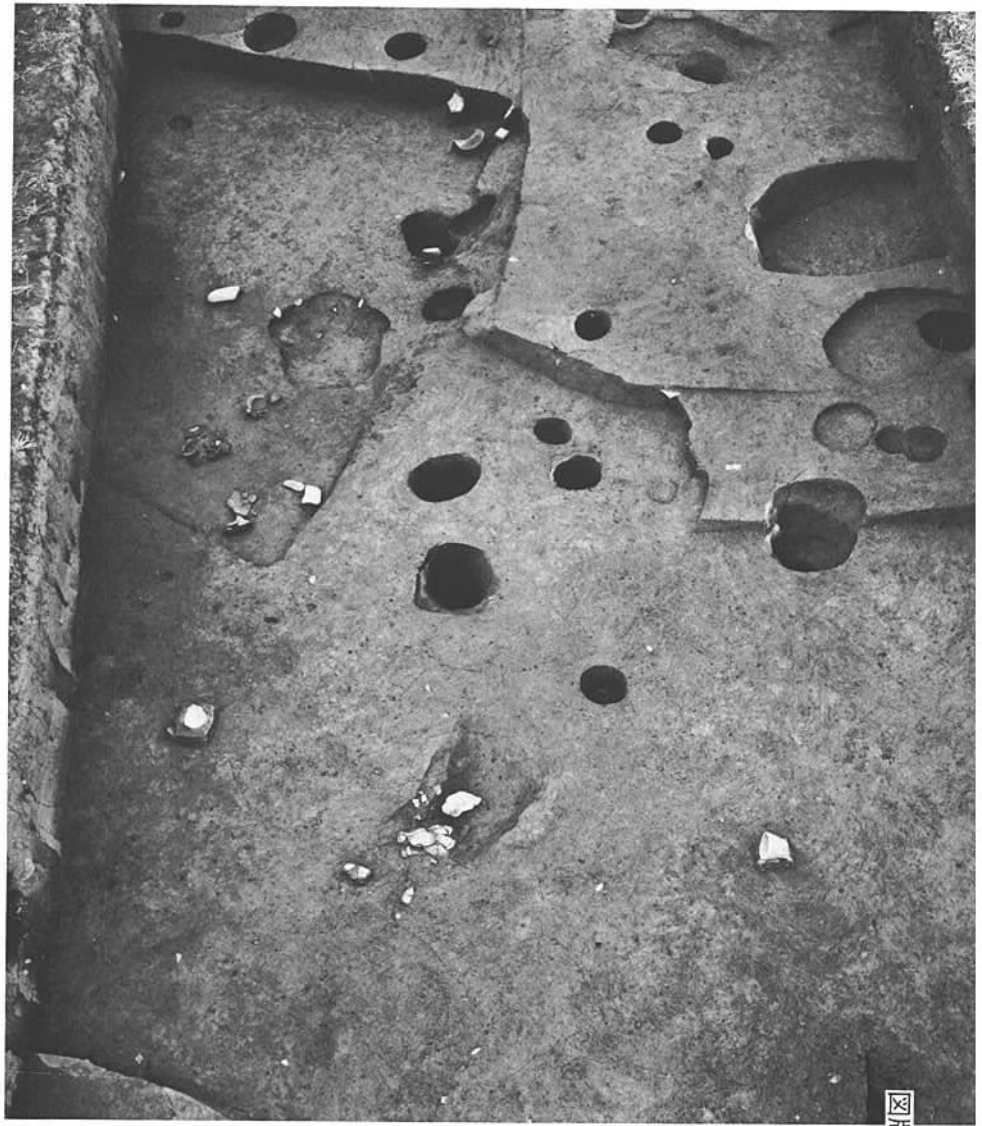
2　サキゾノⅠ－4・5 全景②(西から)

1

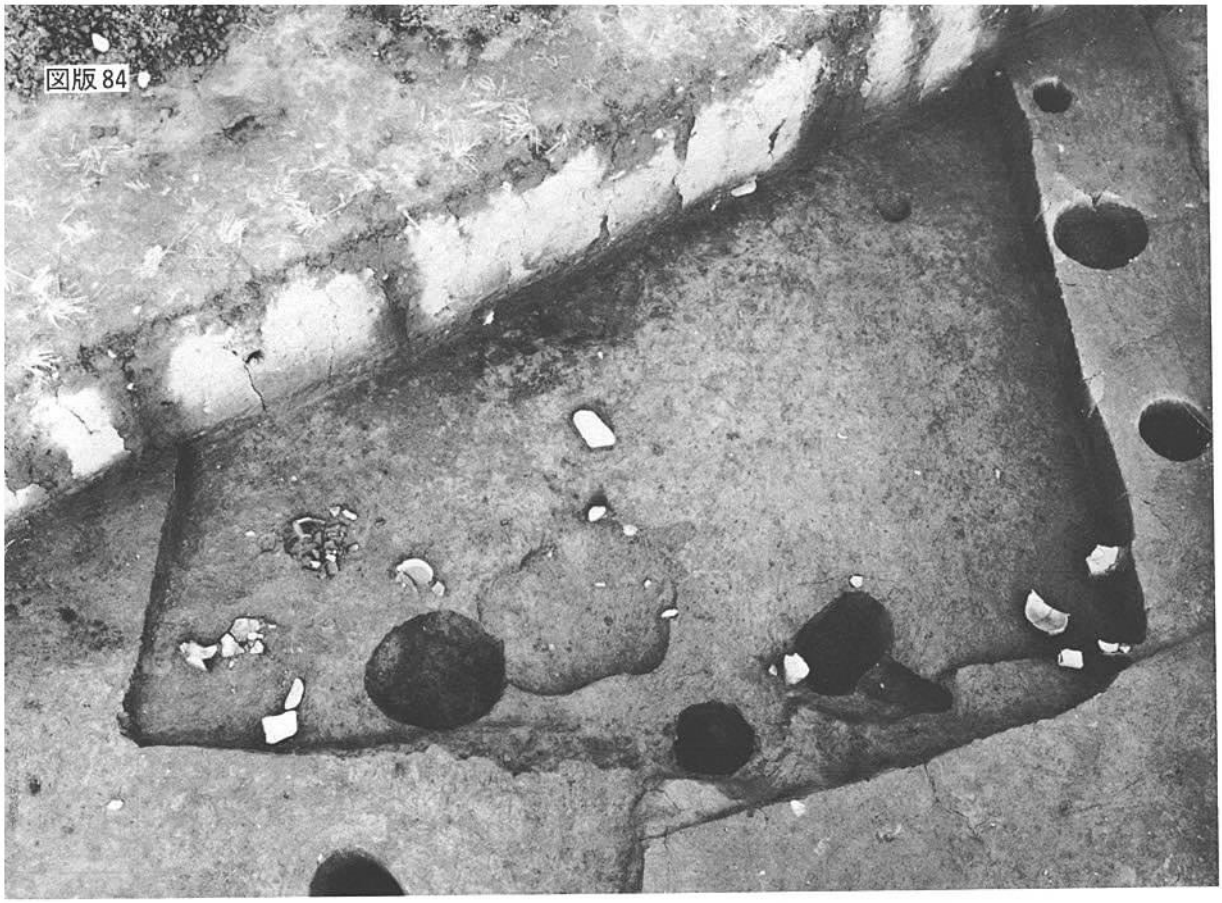
2

1　1号住居跡(東から)　2　2号住居跡(北から)

1　4号住居跡(西から)



2　3号住居跡(西から)



1

2

1　5号住居跡(南から)　2　6・9号住居跡(西から)

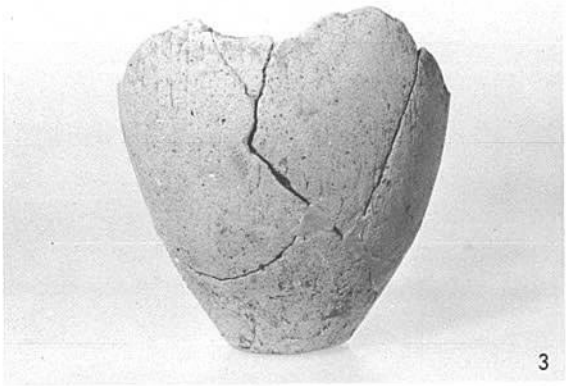
1

2

1　7号住居跡(西から)　　2　8号住居跡(北から)

2

5


3

8

7

13

14

23

16

25

26

31

1～7号住居跡出土土器

30

33

34

35

1

2

1　9号住居跡出土土器　　2　土器溜

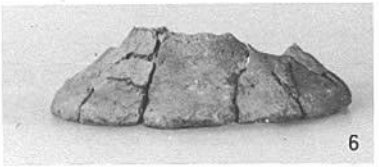
1

2

3

4

5


6

10

7

8

9

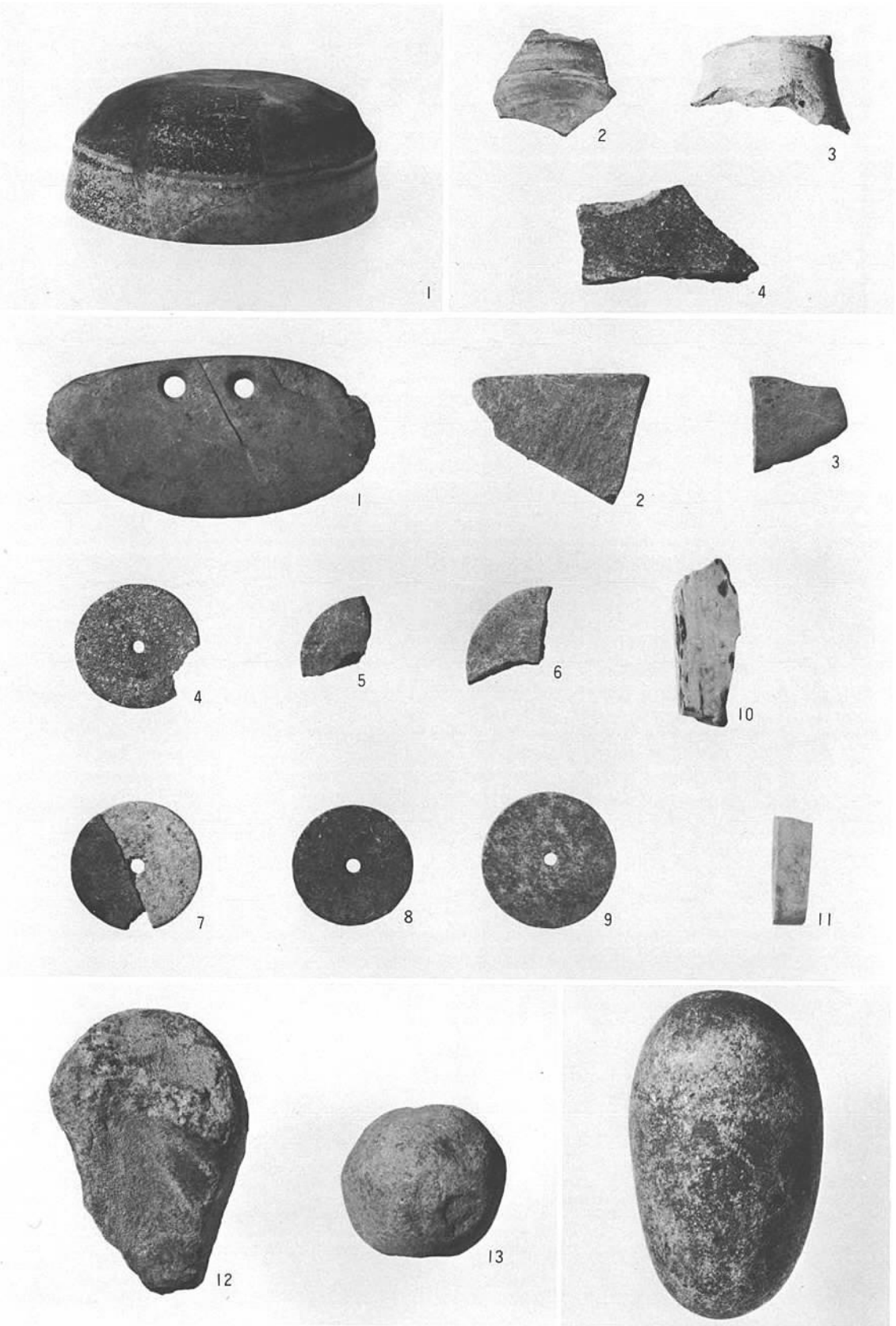
1

12

3

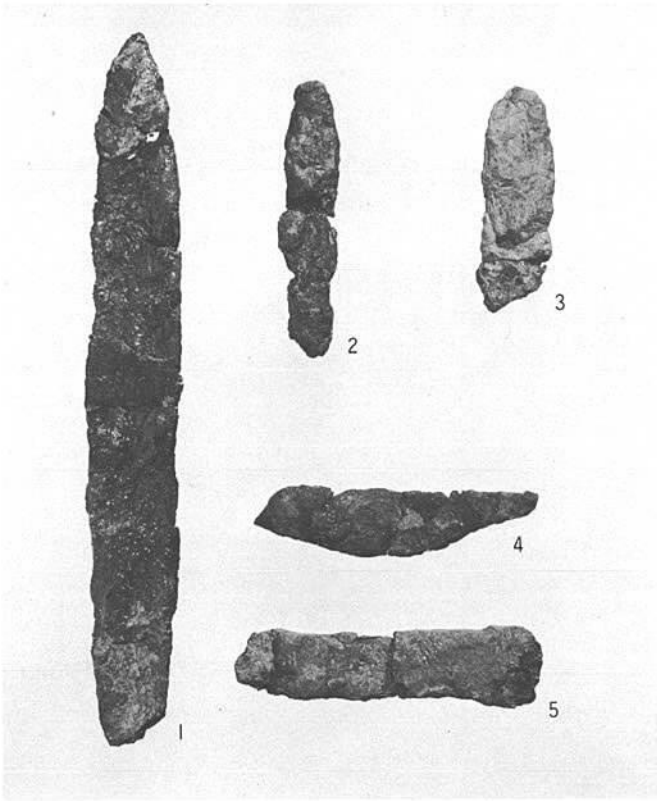
7

土器溜出土土器・包含層出土土器



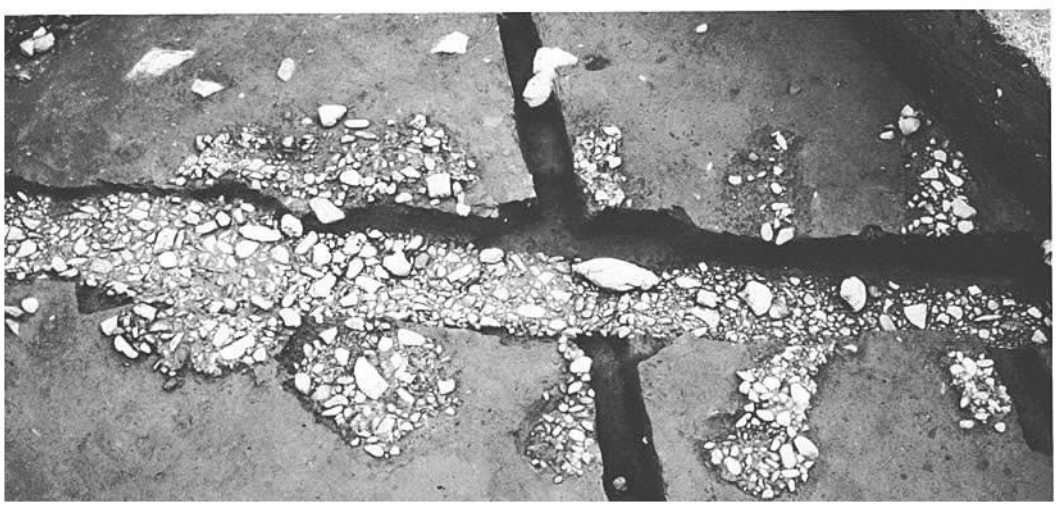
I－4・5出土須恵器・石器（上・中段は½，下段は⅓）

図版 90



1　Ⅰ－5 出土鉄器

2　石敷遺構上部
（西から）



3　石敷遺構下部
（西から）

福岡県文化財調査報告書

第６０集

昭和56年３月31日

発　行　　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲６―29

印　刷　　川　島　弘　文　社
福岡市東区箱崎ふ頭６丁目4-4